

魔法少年リボルバーズバル

飛鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

管理局に所属する一人の少年、スバル・ナカジマ。

彼には一つの夢があった。

母のような魔導師になりたい。

その思いを胸に彼は今日も拳を振るう。

スバルが男だったらということを考えて指が動いてしまいました(笑)。

注意!

この小説はキャラ改変を含みます。

このキャラはこんなじゃねえ! って人は戻るを押してください。

目次

第一話	1
第二話	9
第三話	14
第四話	19
第五話	24
第六話	30
番外編 とある訓練校の教官の苦労話	36
第七話	40
第八話	44
第九話	52
第十話	62
第十一話	71
第十二話	79
第十三話	90
第十四話	95
第十五話	100
第十六話	107
第十七話	117
第十八話	129
第十九話	136
第二十話	142
第二十一話	149
第二十二話	155
第二十三話	162

第二十四話

ルート分岐

ティアナルート 第一話

ティアナルート 第二話

ティアナルート 第三話

ティアナルート 第四話

ティアナルート 第五話

ティアナルート 第六話

ティアナルート 第七話

ティアナルート 第八話

ティアナルート 第九話

ティアナルート 第十話

ティアナルート 第十一話

ティアナルート 第十二話

ティアナルート 第十三話

番外編 その二

ティアナルート 第十四話

ティアナルート 第十五話

ティアナルート 第十六話

ティアナルート 第十七話

ティアナルート 第十八話

ティアナルート 第十九話

ティアナルート 第二十話

ティアナルート 第二十一話

ティアナルート 第二十二話

ティアナルート	第二十三話	372
ティアナルート	第二十四話	379
ティアナルート	第二十五話	386
ティアナルート	第二十六話	391
ティアナルート	第二十七話	399
ティアナルート	第二十八話	408
ティアナルート	第二十九話	418
ティアナルート	第三十話	429
ティアナルート	第三十一話	437
ティアナルート	第三十二話	449
ティアナルート	第三十三話	461
ティアナルート	第三十四話	472
ティアナルート	第三十五話	484
ティアナルート	第三十六話	494
ティアナルート	第三十七話	506
ティアナルート	第三十八話	513
ティアナルート	第三十九話	521
ティアナルート	第四十話	529
ティアナルート	エピソード	544
ティアナルート	番外編 その一	553
ティアナルート	番外編 その二	559
ティアナルート	番外編 その三	568
ノーヴェルートの	第一話	577
ノーヴェルートの	第二話	584
ノーヴェルートの	第三話	595

ノーヴェルット	第四話	601
ノーヴェルット	第五話	612
ノーヴェルット	第六話	619
ノーヴェルット	第七話	626
ノーヴェルット	第八話	634
ノーヴェルット	第九話	640
ノーヴェルット	第十話	647
ノーヴェルット	第十一話	654
ノーヴェルット	第十二話	661
ノーヴェルット	第十三話	671
ノーヴェルット	第十四話	678
ノーヴェルット	第十五話	686
ノーヴェルット	第十六話	697
ノーヴェルット	第十七話	708
ノーヴェルット	エピローグ	718

第一話

新暦75年、4月。

ミッドチルダ臨海第8空港近隣。

そこには破棄された市街地が今なお存在し、その一つのビルの屋上に二人の若者がいた。

一人はイヤホンを耳に着けたまま目の前の空間に向け拳を繰り出している。

そしてもう一人は、その後ろで拳銃型のデバイスを弄り時間をつぶしている。

二人ともやり方は違うが、これから行われることに向けモチベーションを着実に高めていた。

「スバル、あんまり激しくやってると本番でそのオンボロローラー逝っちゃうわよ」

「……………ッ！」

「スーバールー」

「ふっ……………！」

「スバル・ナカジマくーん」

「ハッ!!」

「……………ッ!!」

スバルと呼ばれた青髪の少年は呼びかけてきたオレンジ髪の少女の言葉に反応せず、ただ拳を前に打つ。

まさに『打つべし！打つべし！』といった感じだ。

そんなスバルの様子を見たオレンジ髪の少女は手に持ったデバイスを彼の足もとに向け引き金を引いた。

引き金と連動するように放たれた橙色の魔力弾がスバルの足もとにあつたコンクリートの塊を打ち砕いた。

スバルは足元に撃ち込まれた魔力弾に驚いたように飛び退いた。

「何すんだよ、ティアナ!？」

あぶねえだろうが!!」

「こっちのセリフよ!!」

いつまでシャドーやってんのよ!!

もうすぐ時間だから声かけてやったってのに無視してシャドーやってた馬鹿にはいい薬よ」

「何するにしてもこれしないと気分が乗らないんだよ……」

「あら、なら私が相手してあげようか?」

「いえ、結構です……」

オレンジ髪の少女——ティアナ・ランスター——の言葉に反論したスバルだったが、彼の一言はティアナの構えた握りこぶし（青筋の見えるほどに握りしめられている）を見てすごすごと引き下がった。

余談だが、彼女の怒りの一撃はスバルが世界で二番目に嫌いなものだった。

大人しくイヤホンをデバイスの格納領域に収納したスバルを横目にティアナは右手にはめた時計型の情報端末を弄る。

すると、その端末から空中に小さなモニタが表示され、そこに現在の時間と、試験が開始されるまでのカウントダウンが表示された。

試験開始までの時間を知らせるカウントはあと数秒。

「時間ね」

ティアナの言葉とともにカウントダウンはゼロになり、同時にスバルのすぐそばの空間に銀髪の少女の映ったモニターが展開された。

それを確認した二人はすぐに横に並び姿勢を正す。

『おはようございます! さて、魔導師試験の受験者さん2名。揃っていますか?』

「はい!」

モニターに映った少女は二人の返事に満足そうにうなずくと手に持ったバインダーに目を移して言葉をつづけた。

『確認しますね。時空管理局陸士386部隊所属の、スバルⅡナカジマ二等陸士と』

「はい!」

『ティアナⅡランスター二等陸士』

「はいー」

『所有している魔導師ランクは陸戦Cランク。』

本日受験するのは、陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で、間違いな
いですね?』

「はいー」

「間違いありません」

少女の言葉に反応するように二人は互いを見て頷きそう答えた。

『はいー本日の試験官を努めますのは、私、リインフォースⅡツヴァイ空曹長
です。よろしくですよー』

「よろしくお願いしますー!」

確認を終えた二人は、リインフォースⅡから試験の説明を受けるた
めにモニターの隣に映し出された地図に視線を移す。

地図には彼らのいる廃棄都市区画が映し出されており、そこには
『START』と『GOAL』の二つの目印とその途中にある幾多もの
マーカー、今回の試験において破壊するべきターゲットが光を放って
いた。

『2人はここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲッ
トを破壊。』

あ! 勿論破壊しちや駄目なダミーターゲットもありますからね?』

「ダミー……」

「スバル、今面倒だなんて思ったでしょ」

スバルの小声を聞き取ったティアナの言葉に当のスバルは肩をビ
クツと動かし下手な口笛を吹きながら視線を逸らした。

いちいちやり方が地味に古い少年であった。

『えつと……2人は妨害攻撃に気をつけて試験会場を移動しつつ、す
べてのターゲットを破壊。』

制限時間内にゴールを目指してくださいです。

時間は制限時間内ならば、例え残りがどのくらいであろうと合格判
定には含まれません。ただし、ターゲットの排除が完全ではなかった
り、ダミーターゲットの破壊などが認められた場合は減点になってし

まいます。

もちろん、試験内で皆さんが危険行為を行った場合も減点対象になるですよ』

「はい。わかりました」

『それでは、以上で説明は終わりです。何か質問はありますか？』
首を傾げるラインフォースがそう尋ねると、ティアナは隣に立つ少年を横目に見る。

相方の視線に気づいたスバルはその視線に答えるように頷いた。

「ありません」

「右に同じく」

『それじゃあ、スタートまであと少し。ゴール地点で会いましょう、ですよ』

二人の返事を聞き届けたラインがそう告げるとモニターは閉じられ、代わりにカウントダウン代わりにライトが現れる。

「作戦は？」

「事前に打ち合わせたとおりに、あんたが先行して中のターゲットを破壊。

手早くね」

スタート前のストレッチ代わりに屈伸をしながらスバルは隣で腕を伸ばしていたティアナに尋ねる。

ティアナの返答に軽く笑みを浮かべ、すぐに顔を真剣なものにした。

ライトの数が3つから2つ、1つと減っていく。

「それじゃ、いっちょやりますか」

「レディ……」

タイミングを計りやすいようにティアナが声を出す。

その直後、ライトの光が消え、試験開始のブザーが鳴り響いた。

「ゴーツ！」

息の合った掛け声とともに二人は走り出した。

その目に闘志を燃やしながら。

「へえ、やるもんやなあ」

「うん、ナカジマ陸士のほうは中距離特化型魔導師として完成に近づいてる。」

相方のランスター陸士の方もナカジマ陸士の欠点を補う能力の方で高い資質を持つてる」

試験会場の上空、管理局所属のヘリの中で二人の女性が手元に持った資料と、試験の様子を映し出したモニターを見ながら意見の交わっていた。

二人の女性——八神はやて三佐とフェイト・T・ハラOWN執務官。

「いいコンビだね。」

武装隊としての経験はないみたいだけど、そこは実戦を経験していけば解決する問題だし」

「その前に、この試験をどう突破するのかを見せてもらおうか。」

「この先にあるのは……」

フェイトの言葉を楽しそうに聞きながらはやてはモニターの端にあるアイコンを操作しよう一つモニターを映し出した。

「この受験者の半数がリタイアする難関。」

大型の狙撃型オートスフィア。

これは今の二人にはちよつと厳しいやろうなあ」

「どうやって抜けるのか、知恵と勇気の見せ所だね」

「スバル！右にスフィア、3つ!!」

「おうさ!!」

高架に入ったスバルとティアナは周囲に浮かぶオートスフィアの集団に対してスバルの機動力で攪乱、その隙にティアナがスフィアを

撃墜、さらにそのカバーでスバルが彼女に狙いをつけたスフィアを叩き落とすとといったコンビネーションで切り抜けていった。

「よし、全部撃墜」

「次は？」

「この上、上がったらすぐに集中砲火を喰らうから、オプティックハイド使つてあんたが瞬殺。」

「いいわね？」

「了解！」

ティアナの確認に対してスバルは腕に装着したデバイス『リボルバーナツクル』から空薬莖を排出し代わりのカートリッジを挿入しながら答えた。

二人はこれまでにないほどに絶好調だった。

しかし……

順調に試験を進めていた二人だったが、たった一つ、されど致命的なアクシデントが彼らを襲った。

撃ち漏らしたスフィアからの攻撃を避けながら迎撃したティアナが足を挫き、これ以上の試験続行が難しくなったのだ。

だが、ティアナの放った魔力弾の一つが監視用サーチャーを破壊したおかげで即刻中止という措置は取られていないことは彼らにとつては幸運だったのだろうか。

「おいティアナ、大丈夫か!？」

「うっさいわね、これぐらい何とも……ッ!!」

挫いた左足を抱え込むティアナにスバルが駆けつけるとティアナは痛みを堪えて立ち上がるようにする。

しかし、左足から尋常じゃない痛みが彼女を襲い再び蹲ってしまった。

「……走るのは、無理そうね」

「ティアナ？」

「あたしが離れた位置から援護するわ。」

「あんた一人ならゴールできるでしょう」

「ティアナ、それって」

「足手まといがいるとあんたまで不合格になるでしょ！

あんたはこんなところで足踏みするつもりなの!？」

痛みを堪えながらティアナは立ち上がりスバルに背を向けてどなるように訴える。

そんなティアナの言葉に対しての返答は、デバイスを握りしめて振り下ろした拳だった。

要は、めちやくちや痛い拳骨だった。

「ッ、何すんのよ!？」

「何すんのもくそもねえ、とりあえず足診せろ」

頭を押さえながら涙目でスバルを睨むティアナ。

そんな彼女を無視しながらスバルはデバイスの格納領域からテープングテープを取り出す。

「どうするにも、まずはお前の足の応急処置だ。」

生憎、俺はケガ人が目の前にいてそれを置いていけるほど薄情でもないからな」

「でも、時間ももうだいぶ押ししてるし……」

「いいから、ほら」

スバルの全く動きもしない様子に諦めたティアナは素直に彼の指示に従い、靴を脱ぐ。

スバルはすぐに左足の患部を見極め、手早くテープングを施し彼女の左足首を固定した。

「なんか、手慣れてるわね」

「自分でさんざん練習したからな、前衛フロントは傷だらけになることがしょっちゅうだからな」

「そんなことよりも、時間！」

あんたまで不合格に……ふぎや！」

再び彼に自分を置いて行けというティアナに対してスバルはまた拳骨を落とした。

「お前を置いていけ？」

「冗談じゃない」

「だけど……!!」

「お前は俺にとつて必要なんだよ!!」

「お前も知ってるだろ？」

俺は射撃魔法がほとんど使えない。使えても、直射のリボルバーシユートと砲撃のデイバインバスターだけ。

そんな俺がこれから一人で何ができる？

何もできないんだよ。

だから、俺にはお前が必要なんだ。

お前には俺と違って射撃ができるし、幻影魔法だつて使える。

俺にはお前を置いていく理由がないんだ。

俺たちは二人で一つのコンビなんだから」

「……スバル、あんた」

スバルの一見したら告白にも聞こえるセリフを聞いたティアナは顔を少し紅く染めていた。

「お前と一緒にいたら楽しいしな。」

「お前からかうと面白いし」

「……ッ!!」

だが、次の発言で彼女の顔は別の意味で真っ赤に染まった。

「おい、待てファントムブレイザーはさすがに……ギャー!!」

乙女の純情を弄んだ罰としては妥当なところだとティアナは小さな声で呟いた。

第二話

「それで、そこまで言うなら何か手はあるんでしょうね」

「作戦ってほどじゃないがな。」

「ティアナ、お前って誘導弾一度に何発撃てる？」

「先ほどの砲撃に使った分のカートリッジを補充しながらティアナはスバルに尋ねる。」

「全身からブスブスと煙を上げているスバルはガシガシと頭を掻きながら立ち上がる。」

「誘導弾？」

「だいたい4〜5、頑張れば6くらいかしら」

「この先にあるのは大型の狙撃スフィアだったよな？」

「ええ、前に受けた先輩に聞いたから間違いないはず。」

「あんたも一緒に聞いていたでしょ？」

「スバルの質問に答えながらティアナは首を傾げる。」

「ああ、確認しなかったのはその二つ。」

「お前が誘導弾をどれだけ操れるか、この後の目標は何か。」

「これがわかればたぶん行ける」

「そう、ならあたしはどうすればいいの？」

「言っとくけど、走るところか回避運動すらままならないんだからね」

「ああ、お前は——」

「この時、ティアナの顔は今日一番の驚愕に染まった。」

「一方、サーチャーからの映像が途切れたことで二人の様子を知ることができなくなったのはやてとフェイトは高架から一筋の道が伸びたことで二人がまた動き出したことを知った。」

「お、出てくるみたいやな」

「うん、でもあれって確か……。」

「スバルの『ウイングロード』だよな、あの方向は……」

「もしかしなくても、大型スフィアに一直線やね」

二人がどうするのか全く考え付かない二人だった。

「いい、残り三分ちよい。

あんたがさつきとやらないとどつちにしろ不合格になる。

やるからには一撃で決めなさい」

「わかってる、二人で合格するぞ」

スバルは素晴らしいながら展開したウイングロードの端により、クラウチングスタートの構えをとる。

それと同時にティアナはデバイスに魔力を流し込み、スバルの周囲に6つの誘導弾を浮かばせる。

「いい、誘導弾は6発。

スフィアの弾を防げるのはその六回だけよ。

それまでにあのビルの最上階から一つ下の階に辿り着きなさい」

「了解だ……」

その言葉を最後にスバルは大きく息を吸い、一瞬止めそして吐き出した。

「レディ……ゴーツ!!」

そして、一つの弾丸が6つの供を連れ青空に駆け出した。

スバルが飛び出しビルに向かう。

ビルから魔力弾がスバルに向かって放たれる。

だが、それをティアナの誘導弾が撃ち落とす。

——誘導弾、残り五発。

スバルの右腕のリボルバーナックルに二発のカートリッジが装填され右腕に魔力が集中する。

二発目の魔力弾が誘導弾に弾かれる。

——残り四発。

右腕に集中した魔力が彼の拳に収束する。

三発目、四発目の魔力弾、これをティアナはすぐさま撃ちぬいた。

——残り二発。

割れた窓にスバルが飛び込む。

その隙を庇うように二発の誘導弾が先にオートスファイアに向かう。

——残り零発。

「オオオオッ!!」

スバルの握られた拳をスファイアの周囲に張られたバリアがその動きを妨げる。

「拳一つで、何かが変わるわけじゃないッ!

だけど、拳一つで救えるものがあるッ!!」

スバルは右手にさらに魔力を流し込む。

「どんなバリアでも……打ち貫くだけだッ!!」

刹那、バリアに一筋の輝が走る。

「オオオッ!!」

軽い音とともにバリアは粉々に飛散した。

「ジエツトマグナムッ!!」

——豪——と先ほどの音と違い、重い音ともにスバルの拳がスファイアに叩き付けられた。

そして、彼の右手に収束された魔力が一気に放たれ、その奔流がスファイアを蹂躪し破壊した。

こうして、Bランク試験最大の難関は突破されたのだった。

ゴールまで続く一本道。

そこをスバルたちは全力で駆け抜けていた。

「時間は?」

「あと30秒!!」

ただし、走るの一人だけ、スバルのみだった。

ティアナは彼の背中に背負われ、片手で彼の体に回していた。

「最後のターゲット!」

外すなよ!!」

「わかってるわよ!!」

スバルの掛け声とともにティアナは右手に持ったデバイスから魔

力弾を放ち、進路上にあった最後のターゲットを破壊する。

「しつかりつかまつてろよ？」

「ちゃんと停止できるスピードでね!!」

スバルはラストスパートをかけギアを一段階上げた。

「5、4、3、2、1……!!」

カウントがゼロとなる直前、ゴールを一つの風が駆け抜けた。

ゴールから大きく離れた位置で回り込むような動きでエネルギーを消費し、何とか止まったスバルとティアナは息を荒げながらタイムを確認する。

「二人とも、ギリギリセーフ!」

空から降りてきたリインが体を使ってセーフを表現していた。

残り時間0.35秒。

「セーフ?」

「て、ことは……?」

「はい、二人とも試験は合格ですよ。

あとは……」

「私たちが試験の内容を判断して、君たちがBランク魔導師に値するかを決定します」

その時、一人のバリアジャケットを纏い、手には魔導師の杖を持った女性が降りてきた。

「あ……」

「うん、ひとまず試験お疲れ様。

リイン、ティアナさんの足を治療してあげて」

「はいです!」

その女性の言葉に従い、リインはスバルたちのもとに飛んでいく。

「ナカジマ陸士、彼女をゆつくりとおろしてほしいです」

「は、はい。

いいな、ティアナ」

「ええ、お願い」

ティアナがスバルの背中から降りたのを確認したリインはすぐさま治療を開始した。

スバルはすぐに先ほどの女性の方を向いた。

「た、高町一尉……」

「うん、久しぶりかな？」

四年ぶりだね。

大きくなつたね、スバル」

「は、はい。

あ、ちよつと待つてください」

「うん？」

スバルは女性——高町なのは一等空尉に断りを入れると何やら指を折りながら何かを数えていた。

「えつと、四年前、つてことは俺は11歳、で、なのはさんは……14、5ぐらいで……ひい、ふう、みい……」

「す、スバル？」

「どうしたですかー？」

スバルの様子を見ていたティアナとリインはどうしたのかと声をかけるがスバルはその言葉が耳に入っていないようだった。

「高町一尉、いや、なのはさん。

一ついいですか？」

「うん？何かな？」

なのはは首を傾げる。

その動きにつられてツインテールの髪も揺れる。

「19歳でそのバリアジャケットはちよつとどうかと……」

瞬間、リインの顔は青ざめ、ティアナは呆れ顔。

そして、スバルの目の前には魔王が君臨した。

その後、試験が終了したはずの試験場で莫大な魔力の放出が確認され、遅れて桃色の魔力光で周囲が明るく照らし出された。

第三話

管理局ミッドチルダ地上本部

管理局の本部であるこの建物の中庭に二人の少年少女が寝転んで空を見上げていた。

「はあ……」

「まさか、新部隊のお誘いが来るとわなあ……」

少年少女——スバルとティアナは先ほどまで目の前に建つ建物の中にある一室での会話を思い出していた。

部隊長に戦闘部隊の隊長が二人。

ただのランクアップ試験だったはずなのだが、彼らの知らぬ間にとんでもないことが進められていた。

「あんたは、どうするの?」

「俺か?」

もちろん行くつもりだ。

古代遺物管理部、機動六課。

そこにいれば俺はもつと上を目指せるかもしれない。

それに……」

「なのはさんは、あんたの憧れの魔導師だからねえ」

ティアナは隣に寝ているスバルを呆れた表情で見る。

そんな彼女にスバルは苦笑しながら、「まあ、危険な火災現場で助けられたからな」と答える。

「だけど、あの年であのバリアジャケットは……」

「それ以上は言わない方がいいわよ。」

また砲撃喰らいたいならいいけど」

ティアナの忠告を耳にしたスバルはつい数時間前の自分の失言とそれに対する制裁を思い出し顔を青くしていた。

「ちよつと、大丈夫なの?」

「いや、あのピンクの魔力はいかんわ。」

ちよつとしたトラウマになる……」

スバルは思い出したくないのか、身体を震わせながら話題を切り替

えようとした。

「お前は どうするんだ？」

「あたしは、 どうしようかな……。」

古代遺物管理部って言ったら高位魔導師ランクや特殊能力持ちがわんさかいるエリート部隊でしょう。

そんなところであたしみたいな凡人がやっていけるのか……何よ、その顔は」

ティアナは話の途中で自分の方を呆れた表情で見るスバルを見て眉を顰める。

「お前、 まだ自分が凡人だって思ってたのかよ……。」

「だってそうじゃない……。」

あたしの魔力ランクは決して高くはない。

今も使えるのは射撃魔法といくつかの幻影魔法だけ。

そんなんでどうしろっていうのよ……。」

「……。」

スバルはその言葉を聞いてスツと立ち上がりティアナを見下ろす。

「何よ」

「帰るぞ」

「え、 帰るって……ちよっと!？」

スバルはティアナを力尽くで起き上がらせると手を引っ張り歩いて行った。

陸上警備隊第386部隊

「はあ？」

ランスターが凡人？

寝言は寝て言え」

「お前が凡人なら俺たちは何なんだよ？」

「どこにBランク試験での大型スフィアの弾を撃ち落とすやつがいるか」

「世の中の凡人に謝れ!!今すぐに!!」

「ほらな」

「何が、ほらな、よ!!」

「あんたはいったい何がしたかったの!？」

地上本部から彼らが自分の部隊の隊舎に戻ってまずやったのは、
「ティアナ・ランスターが自分のことを凡人だと言ってますが、どう思いますか？」という質問を片っ端から訪ねて回ったことだった。

そして、今はその隊舎の中庭で座り込み彼らは話し合っていた。

「だから、お前は自分が思ってる以上に優秀だってことだよ。」

「だから先輩たちはああ言ったんだ」

「だけど、あたしよりも優秀な人はずつと多いし……。」

「それに……」

スバルの言葉を聞いてもなお自分が凡人で優秀じゃないと考える
ティアナ。

そんな彼女にスバルは大きなため息を吐く。

「あのなあ、上を見たら優秀なやつが多いのは当たり前だろう？」

俺だってまだまだ上には上がいるってのは知ってる。

だけど、それがどうしたって話だ。

どう転んだって俺たちは俺たちだ。

俺たちは俺たちができることを精一杯やるだけだ。

そのためにはどうすればいいと思う？」

「……その上の人から技術を学ぶ、か……」

「そうだ、だからお前も一緒に来い。」

どうせ俺たちはまだ二人で一人前としか見られないんだ。

まとめて引き取ってもらえるならそれに越したことはないだろう？」

スバルの「二人で一人前」という言葉に対して無性にイラついた
ティアナはスバルが見きれないほどのスピードで彼の後ろに回り込
み両手の拳でコメカミを挟み込んだ。

「なんでどこに行ってもアンタといつまでたってもコンビ扱いされな
いといけないわけ!？」

「痛たた、ちよ、マジで痛い痛い!!」

通称コメカミクラツシャー（命名スバル）を喰らったスバルは「うきゆく」とうなりながら仰向けに倒れた。

「まあ、いいわ。」

うまくいけばあたしの目標である執務官への近道になるし。

あんたとコンビ扱いされるのは癪だけど。

今回は乗ってあげる。

決して、あんたに必要だからって言われたからじゃないから。

勘違いしないでよ!」

見事なツンデレぶりにスバルは賞賛の声をあげた。

「ツンデレ乙」

「ツ、うっさい!!」

だが、その返答はその美脚による顔面踏みつけたった。

「オレンジか、中々似合ってるじゃないか」

「〜ツ!!」

どうやらこの少年はパートナーの顔を赤くさせるのが得意なようだ。

顔を真っ赤にしたティアナはこれまた見事な蹴りでスバルの顎を蹴り飛ばし彼の意識を刈り取った。

だが、彼はその意識が途切れる間際に見たティアナの真っ赤にした顔をその脳に記録していたのだった。

「はい、わざわざご苦勞様です。」

いえ、それでは失礼します」

場所は変わって地上本部。

その一室ではやてとなのはがこれからのことを話し合っていた時に、はやての通信端末にとある部隊の隊長から通信が入ってきた。

「はやてちゃん、なんだったの?」

「さっきの二人のいる部隊の隊長さんからやった。」

なんでも、さっき異動願いを出してきたそうやで」

はやては嬉しそうに言うと、なのはもまた喜びを露わにした。

「そっか、よかった。」

あの二人、鍛えれば結構なものになると思うんだ」

「うん、これでスターズ分隊も問題なしやね。」

ライトニングの二人も今日ミッドチルダこっに着くはずやから」

「ようやく、機動六課が本格始動に向けられるね」

なのはの言葉にははやては「私たちの目標やったからなあ……。ここ
まで来るのに苦労したわ」と遠い目をしながら呟く。

ともかく、これから彼らの運命は大きく動いていくことが決まった
瞬間であった。

「ねえ、はやてちゃん。」

私のバリアジャケットってそんなにアレかな……?」

「なのはちゃん、気にしとったんか……」

第四話

月日は流れ、機動六課の稼働初日。

様々な部署から引き抜かれてた所謂エリート部隊は長い時間をかけようやく稼働に至ったのだった。

各部隊から将来性のある優秀な管理局員を引き抜いたため、部隊の平均年齢はほかの部隊に比べてかなり低いものとなっている。

そんな中、陸士訓練学校時代からコンビを組んでいるティアナとスバルは……。

『ヤバイヤバイ、マジ無理……!』

『ちよつと、このタイミングではそれこそ無理でしょ!!』

『無理だつて、あと何分続くかわからない部隊長挨拶の間我慢するのは無理!!』

念話で言い争いをしていた。

どちらも顔には出さないとところは流石と言いたいところだが、スバルの顔にはダラダラと冷や汗が浮かんでいた。

『……朝食った納豆がまずかったのか……?』

いや、納豆に入れた卵か……!?!』

『とにかく、我慢しなさい!!』

こんな初対面の人が大勢いる中で抜けてみなさい、あんたはともかく、コンビのあたしまで笑われるわ!!』

『いや、もうまずいんだけど……。』

もう出口にまであと数分つてところなんだけど!!』

「長い挨拶は嫌われるんで、話はここまでにしたいと思います。」

以上、機動六課課長兼部隊長、八神はやてでした!」

『ゴーツ!!』

『ちよ、スバル!?!』

部隊長挨拶が終わり拍手が鳴り響く中、一人の少年がその場から姿を消したのに気付いたのは隊長陣を含め極僅かの人だけだった。

「ふう〜、ギリギリだった……」

「あんたって……」

「なんでこんなのとコンビ組んだんだろ……」

稼働式が終わり、スバルがトイレに駆け込んだ後、彼らはフォワード部隊の集合場所であるロビーに向かっていた。

「それにしても、俺たちのチームメイトってのはどんなのなんだろうな。」

「年下ってのはあまり考えられないけど……」

「そうね……」

「こんな部隊だもの、少なくともあたしたちと同じくらいか、隊長たちの年代ぐらいでしょうね」

「あ、あの。」

「スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士でしょうか？」

「二人がそんな話をしていると、ロビーの方から駆け寄ってきた彼らよりも年下の二人組の少年少女が二人に声をかけてきた。」

「ああ、そうだが。」

「もしかして、君ら二人が俺たちのチームメイトってことか？」

「は、はい！」

「自分はエリオ・モンディアル三等陸士、10歳であります！」

「私はキャロ・ル・ルシエです。」

「ええと、私も10歳であります。」

「そ、それでこっちが白竜のフリードです」

赤髪の少年、エリオが元気に自己紹介をすると、その隣にいる少女、キャロと幼竜のフリードが同じように挨拶をする。

「まあ、フリードはキャロの紹介の後に一声鳴いたぐらいだが。」

「まさか本当にあたしたちよりも年下の子がチームメイトって……」

「まあいいわ。」

「あたしはティアナ・ランスター。歳は16よ」

「俺はスバル。スバル・ナカジマだ。」

「歳はティアナの一下で15だ。」

しっかし竜と来たか。

話には聞いたことがあるが、本物を見るのは初めてだ。触ってもいいか？」

キラキラと輝く瞳のスバルはキャロに尋ねる。

というか、尋ねる最中でも手をワキワキとしてフリードにジリジリと近づいていた。

「えっと……、いいよね、フリード？」

苦笑しながら聞くキャロにフリードは肯定の意を示す鳴き声を一声上げる。

「おお……まさかここに来て本物の竜に触れるとは……！」

キャロがその意を伝える前にすでにスバルはフリードの頭を恐る恐る触っていた。

その様子を見たティアナはため息を吐き一言。

「竜なんて爬虫類の仲間みたいなものでしょ？」

「どこがいいのか……」

その一言にスバルとフリードはピシッ！と固まってしまった。

すぐに立ち直ったスバルは竜の素晴らしさをティアナに一から十まで伝えようとするが、訓練開始の時間が迫っていることをエリオに言われて渋々と引き下がった。

後日、彼女はスバルとフリードに竜の素晴らしさを丸一日使って教えられるのだが、今はそのことを知るものはいなかった。

場所は移り男子更衣室。

そこではスバルとエリオが陸士の制服から訓練用の服に着替えているところだった。

「あの、スバルさんはティアナさんとは長いんですか？」

「ん？ああ、そうだな。」

訓練校からコンビ組んで、前の部隊にも一緒に行って、今も同じ

チームだからな。

結構長いな、3年くらいか？

「だけど、これからはお前とキャロ、それにフリードも一緒のチームだ。」

「同じ前衛フロントとしてよろしくな」

「スバルはそういうとエリオの頭に手を乗せグリグリと撫でまわした。」

「いきなり撫でられ驚くエリオにスバルは笑いながら言葉をつづける。」

「わわッ!？」

「ハハッ!なんか困ったことがあったら相談しろよ？」

「同じルームメイトでもあるんだからな」

「はいっ!!」

「いや、これマジでシミュレーターなのか？」

「触れるなんて驚きを通り越してもう何も言えないな」

「訓練スペースに着いたスバルたち四人は技術職員のシャリオ・フィニーノ曰く『機動六課自慢の訓練スペース』を見て感心していた。」

「もはやシミュレーターの域を超えてるだろとスバルは呆れも交えたため息を吐く。」

『よしっと、みんな聞こえる?』

「「「はい!」」」

「未だに周りを見回していた四人に対して彼らの背後のビルの上にいるのはから通信が入る。」

『それじゃ、さっそくターゲットを出していくよ。』

「まずは軽く8体から！」

なのはがシャーリーに指示を出すと、四人の前方に8つの魔法陣が現れ、そこから今回のターゲットが出てくる。

『私達の主な仕事は、搜索指定ロストログアの保守管理。』

その目的の為に、これから戦うことになる相手が……これ』

魔法陣から出てきたターゲット——ガジェットドローンと呼ばれる機械兵器のホログラムが8つ。

ホログラムといえども、周りの建物同様触れることのできるとんでもないものだ。

『自立行動型の魔道機械。これは、近付くと攻撃してくるタイプね』

「俺やエリオは必然的に攻撃されるわけだ」

「気を付けないといけませんね……」

スバルの言葉に同調するようにエリオが気を引き締める。

『まあ、今回はお試し版だから実際のものとはちよつと違うけど、意外と攻撃は鋭いから気を付けて。』

一人で相手にするのは少し厳しいかもしれないからね』

「あんな気の抜けるようなデザインで手強いなんて……」

『まあ、百聞は一見に如かずっていうからね。』

「この魔道機械の手強さは、自分達で確かめてみて』

「『了解！』」

なのはの言葉を聞いた四人はそれぞれのデバイスを構え真剣な表情になる。

『それじゃ、第1回模擬戦訓練。』

ミッション目的、逃走するターゲットの捕獲、又は破壊。

制限時間は15分。

『ミッションスタート!!』

第五話

『ティアナ、援護頼む!』

「わかってるわよ!」

訓練が開始されてからスバルたちはガジェットの動きに翻弄されていた。

デザイン上そんなに動きは素早くないだろうと思っていた前衛の二人は、その先入観のせいで完全に振り切られ分散し、後衛の援護を受けることができていない状態だった。

『エリオ、回り込め!』

ティアナがそっちに追い立てる!』

『はいっ!』

伊達に2年近くコンビを組んでいないスバルはティアナの狙いを理解し、エリオを先に行かせ、自分はガジェットを追い立てる役に徹していた。

「キヤロ、威力強化お願い」

「はい、ケリユケイオン」

《Boost up. Burret Power》

キヤロの補助魔法がティアナに掛けられ、ティアナの魔力弾の威力が上がった。

「スバル、援護行くわよ!」

『どんと来い!!』

「シュートツ!!」

『マグナム、シュート!!』

牽制目的のスバルのリボルバーシュートと本命のティアナのシュートバレットはガジェットに向かって飛翔する。

ガジェットとの間には遮蔽物はなく、威力強化を施したティアナの魔力弾は目標を貫く……かと思われた。

「なっ!?!」

『掻き消えた……?』

「バリアか!?!」

「違います、たぶんフィールド系！」

二人の魔力弾はガジェットに直撃する距離まで迫った途端、何かに阻まれて空気に溶け込むように消滅した。

「防御じゃなくて、魔力を消滅させてる……?」

『そう。ガジェットドローンには、ちよつと厄介な性質があるの。』

攻撃魔力をかき消す、アンチマジリングフィールド。

通称AMF、普通の射撃は通じないよ?』

『だったら……ッ!!』

なのはからの補足説明を聞いたスバルはローラーの出力を上げ同時にウイングロードを発動する。

「スバル！馬鹿、危ない!!」

『AMFを全開にされると……』

ガジェットが一際強く光ると、スバルが発動したウイングロードが途中で途切れ、スバルは空中に投げ出される。

『スバルさん!』

『なんとお!』

投げ出されたスバルは空中で体勢を立て直すと近くのビルに魔力弾を放つ。

魔力弾の直撃を受けたビルから人の頭ほどの大きさのコンクリート片がスバルの方に飛んでくる。

『そらよッ!!』

スバルはそれを蹴り飛ばしガジェットにぶつけ体勢を崩す。

その隙に着地したスバルはローラーと最短進路で体勢を崩したガジェットに接近し右腕でその丸いボディを貫いた。

『む、無茶苦茶だよ……』

『これはちよつと想像できないやり方だった……』

『なのはさん、あいつのやり方に一々驚いてたらキリがありませんから』

驚いた声をあげるなのはに対してティアナは諦めの意を込めた意見を念話で飛ばしておく。

「さっきのを見ると、物理攻撃は防げないみたいね……。

エリオ、キャロ、あいつらの足止めできる？」

『やってみます！』

「わかりました！」

フリード、ブラストフレア！」

ティアナの提案にエリオとキャロはすぐさま行動に移した。

エリオは彼に与えられた槍型のデバイス『ストラダー』を使い、ガジェットの進路上にある橋を切り裂き、進路を塞ぐ。

その隙にフリードの口から炎が吐きだされ、エリオの切り落とした橋の残骸に足止めを喰らったガジェットに直撃し破壊される。

残りの7体のうちその攻撃に巻き込まれなかった2体は進路を変えし逃走を続ける。

だが、その2体を追いかける人影があった。

「こちとら射撃型、無効化されたからって諦めるわけには……」

その人影——ティアナは手に持ったデバイスを構えるとカートリッジを二発一気にロードする。

「いかないのよッ!!」

(フィールドの抜けるだけあればいい、それだけなら、今のあたしにだって……!)

ティアナは銃口に生じさせた魔力弾にさらに薄い魔力によるコーティングを行う。

「外殻……形成……!」

ヴァリアブルシュートッ!!」

そして、外殻が閉じた瞬間、ティアナは引き金を引いた。

放たれた弾丸はガジェットのフィールドをもものともせずその本体を突き抜ける。

「ヤバッ!」

コントロールが!!」

だが、残るもう一機に向かうはずの弾丸はティアナのコントロールを離れターゲットには向かわずまっすぐに突き抜けて行ってしまった。

「クッ！」

『か〜ら〜の〜ッ!!』

だが、その先にいたのは彼女の頼れる(?)相棒だった。彼は弾丸を先回りしており、丁度彼はガジェットスバルの直線状に立っていた。

そして、彼の右足にはプロテクションが展開されていた。

「スバル!」

『もう一撃イッ!!』

そして、彼の近くをティアナの多重弾殻弾を右足で蹴り飛ばした。

「え……」

「あいつはまた……」

蹴り飛ばされた弾丸は一直線にガジェットへと向かいそのど真ん中を突き抜けた。

『よしッ!』

『すごいです!!』

スバルさん、よくあんなことができますね!!』

キヤロが信じられないものを見た、という表情を浮かべ、ティアナは大きなため息を吐いた。

もう彼女の幸運はなくなってるのかもしれない。

そんな彼女たちのことは知らずに、スバルはガッツポーズをとつてるし、エリオはそんなスバルに向けて尊敬の眼差しを浮かべていた。やはりなんだかんだ言ってもエリオも男の子なのだ、スバルのやる事が格好良く見えるのは当然だろう。

『コラッ、スバル!!』

あんなことしたら危ないでしょ!!

エリオも!

あんなことはしたらダメだからね!!

あなたが訓練で怪我したら私がフェイトちゃんに怒られるんだから!!』

まあ、すぐになのはからお叱りをいただき、二人ともペコペコ誤っていたが。

「それで、新人達の方はどうだった？」

「まだ全員よちよち歩きのひよつこだ。」

「あたしが指導するのはまだもう少し先だろうな」

稼働初日の夜。

機動六課の隊舎の屋上で話す二人は、機動六課の前線部隊『スターズ分隊』と『ライトニング分隊』の負隊長であるヴィータ三等空尉とシグナム二等空尉だ。

「しかもその中に一人とんでもないことしでかす問題児もいるときた。」

「まったく、はやての人選に間違いはないと思いたいけど……」

「だが、面白い奴なのだろう？」

「お前の言葉を借りれば」

「まあな、特にスバルとティアナはいいコンビだ。」

互いの欠点を補いあつてる。

資料だとティアナは自分のことを過小評価しやすいって書いてあつたけど、今はそんな風には見えねえ。

「まあ、大方相棒の方が何かやつたんだろうけど……」

「そうか。」

「ところで、その新人達は今どこに？」

ヴィータの言葉に静かに笑いながら返すシグナム。

シグナムの質問にヴィータは苦笑しながら答える。

「いきなり一日訓練^{オー}だったからな。」

今は隊舎のロビーでグロツキーだ。

あとでスバルとティアナは起こしてちびつこどもを部屋に運ばせないとな」

「ふっ……」

「あんだよ」

ヴィータの表情を見てシグナムはまた静かに微笑む。

その表情を見たヴィータはそんな彼女を訝しむ。

「いや、お前も教導には向ているのかもな。

なんだかんだ言って面倒見がいいからな」

「うっせー」

シグナムの言葉に対してヴィータは頬を紅めながらそっぽを向いた。

その仕草にもシグナムは笑みを浮かべるのだが、そっぽを向いていたヴィータはそのことには気付けなかった。

とにもかくにも、新部隊『機動六課』の稼働初日はこうして過ぎ去っていくのだった。

第六話

午前5:00

日もまだ顔を出さない時間に一つの目覚ましで鳴り響く。

だが、その目覚ましはベッドから伸びた手を叩き付けられ、ベルを鳴らすのを止められる。

しかし、その後いくつもの目覚ましを立て続けに、かつさまざまなおとところから鳴り響く。

机の上、テレビの上、はたまた寝ているもののベッドの下、足元など全方位からの目覚ましで時計の持ち主はいやでも目を覚ました。

「ふあ……」

「あ、おはようございます、スバルさん！」

「ん、おはよー……」

目覚まし時計の持ち主、スバル先に起きていたルームメイトのエリオに目覚ましを止めながら挨拶をする。

しかし、その動きはまいちキレがなくまた目覚ましを止める最中でもうつらうつらしていた。

「スバルさん、牛乳です」

「ん……」

その様子に苦笑しながらエリオは冷蔵庫から取り出した牛乳瓶（500mL）を手渡す。

スバルはそれを受け取り、眠りかぶりながらも器用に蓋を外すと牛乳を流し込む。

「ふう……、目覚めバッチリ」

「あ、あはは……」

牛乳を飲むだけで先ほどもまでのものすごく眠そうだった表情からキリツとした表情になるのを見て同室になって数日すぎてもなれないエリオは（なんでコーヒーじゃなくて牛乳であそこまで目が覚めるんだろう……）と考えていた。

仮に男子寮こいこにティアナがいたらこうエリオに告げるはずである。

「気にしたら負けよ。」

あいつはそういうものだって思わないところちがもたないから」と。

「はい、集合！」

午前の訓練、なのはの呼びかけにフオワード四名と一匹はすぐに彼女のそばに駆け寄る。

「うん、じゃあ本日の早朝訓練のラスト一本。

みんな、まだ頑張れる？」

「はいっ!!」

四人の返事に満足したなのはレイジングハートを起動する。

その際、バリアジャケットは以前のもではなくなっていた。

ミニスカートではなく、足をほぼ覆い隠すほどの長さのロングスカートに変更され、髪形もツインテールではなく、サイドポニーと呼ばれる髪形になっていた。

「あれ……、なのはさんのバリアジャケット……」

「変わってますね……」

「……」

「あ、うん。」

イメチェンだよ、イメチェン」

《……………》

彼女がバリアジャケットの変更を行った理由を知らないエリオとキヤロは首を傾げ、その原因であるスバルとそれを知るティアナは目をそらし、当の本人は苦笑交じりに答える。

その本当の理由を知っており、なおかつバリアジャケットの変更する際にマスターが悩んでいたのを知っているレイジングハートはただ黙って話を聞いていた。

「そんなことより！」

最後はシユートイベーション、行くよ！」

《Axel Shooter.》

なのはが愛機レイジングハートを構えると彼女の周りに20発の魔力弾が浮かび上がる。

「私の攻撃を5分間回避し続けるか、攻撃を私にクリーンヒットさせれば終了。」

「ただし、誰か一人でも被弾したら最初からね」

「「はいっ！」「」」

「それじゃ、頑張っっていこう！」

「このボロボロの状態で、なのはさんの攻撃を5分間、捌ききる自信ある？」

「無理」

「同じくです」

「じゃ、何とか一発入れよう！」

「「了解！」「」」

ティアナの言葉に他の三人は同時に答える。

「よし、行くぞエリオ!!」

「はい、スバルさん!!」

「うん、準備はオーケーだね。」

それじゃ、レディ……ゴーツ!!」

なのはが上にあげた右手を下げると5発の魔力弾が一斉に四人のもとに殺到する。

「全員、絶対に避けなさいよ!!」

三分で決めるわよ!!」

「「おうっ!!」「」」

四人は魔力弾が直撃する直前に四方に散開し姿を隠す。
隠したが……。

エリオ、キャロ、ティアナに向かった魔力弾の数——合計4発（すでにティアナとフリードが迎撃済）

スバルに向かった魔力弾の数——11発（内なのはの直接制御6

発)

「なんでえ!？」

これにはさすがのスバルも声をあげる。

「スバルにはお気に入りバリアジャケットをコケにされたからね……。」

訓練にかこつけて嫌がらせを……。」

(スバルは前線に出ることが多いからね。

ここでこういったことを経験していればのちに生きるよ?)

《マスター、本音と建前が逆になってます》

慌てて直撃を回避するスバルを見ながら暗い笑みを浮かべるのはをレイジングハートは呆れた声で言ってみたが、彼女にその言葉は入ってこなかったようだ。

結果のみを言うと、最後のシユートイベーションはクリアされた。

しかしこの訓練を終えた直後にスバルのローラーが完全にダメになってしまい、部品交換どころか、基礎から組みなおさなければならぬとの診断を下されてしまった。

さらに、テイアナのアンカーガンもかなり消耗してきており、訓練の最中にも何度か動作不良が起こっていた。

「うくん、皆訓練にも慣れてきたし……そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなあ?。」

「新……。」

「デバイス?。」

「うん。」

だいぶ基礎の訓練もこなせるようになってきたでしょ?

だから、そろそろ自分たちの適正にあった訓練をしていこうかなって」

なのはの言葉を聞いた四人は嬉しそうな表情を浮かべる。

「じゃあ、詳しい話は隊舎に戻ってからしようか」

機動六課隊舎ロビー

「はあ、二人とも遅いな……」

「女のシャワーなんてそんなものだよ。」

ティアナも姉貴も、基本長いから」

ソファアに座りながら呟いたエリオに向かってスバルは苦笑しながらスポーツドリンクの入ったペットボトルを渡す。

エリオは礼を言いながらそれを受け取り一口飲む。

「そういえば、スバルさんはティアナさんとはどうやって知り合ったんですか？」

「ん？」

俺とティアナの出会い？」

スバルは口からペットボトルを離すと、頭を掻きながら答える。

「そうだな……。」

エリオは訓練校にはいつてないんだろう？」

「あ、はい」

「訓練校では使うデバイスは支給されてたんだよ。」

ミッド式なら杖、近代ベルカなら剣か槍ってな。

だけど、俺は見ての通りのやり方で、ローラーブーツとリボルバーナックルがあったし、ティアナはミッド式だけどカートリッジシステムを使いたいから自作したデバイスを持ってきてたんだよ。

それで、訓練校では自前のデバイス持ちなんて目立ってな。

その時からだよ、あいつとコンビ組んだのは」

「それで3年コンビ組んできているわけですね」

「まあな」

その後、二人はティアナとキャロが戻ってくるまで好きなものや苦手なものといった当たり障りのない話をしながら時間をつぶしていった。

後日、女性用のシャワールームの方でも似たような話をしていたことを知った四人はお互いに笑い、さらにチームの絆が深まっていた。

番外編 とある訓練校の教官の苦労話

第4陸士訓練学校。

この建物の一室でとある一人の男がため息を吐きながら目の前の書類を処理していた。

彼はこの訓練学校でも一、二を争うほどの人気を誇り、そしてその人気を得るのも当たり前のように訓練の効率が良かった。

実際、彼の教えを受けた訓練生が卒業後、素晴らしい成果を修めたということとはざらにあった。

さて、そんな彼だが、今彼の担当する訓練生の中に、とびつきり優秀で、ずば抜けた問題児がいた。

その訓練生の名前は『スバル・ナカジマ』。

彼はその名前を目にするだけで、最近さらに酷くなった胃痛をキリキリと感じた。

さて、そのスバルだが、過去、彼がこの訓練校で起こしたことを書いていこうと思う。

あれは射撃訓練の時だった。

その時は近代ベルカ式とミッドチルダ式の区別なく行っていた。

「うむ、よし。」

ランスター、射撃に関してはお前の右に出るものはいないな。

これからも頑張れよ?」

「はい、ありがとうございます」

彼は自分の受け持つ生徒の中でも特に総合力でトップを走る女子生徒、ティアナ・ランスターに声をかけていた。

そんな彼の言葉にティアナはそんなこと当たり前だという表情で答えていた。

だが、そんな彼女の態度に彼は好感を抱いていた。

「よし、次!」

「はい!」

スバル・ナカジマ、行きます！」

彼の声に答えたのはこの時すでに彼の中で一際存在感を放っていたスバルだった。

「リボルバー……シュートッ!!」

ここで今回の訓練のおさらいをしておく。

今回の訓練は障害物に見立てた木を避けてターゲットを破壊する訓練である。

そして、スバルの放った魔力弾は障害物である木を見事に貫通してターゲットを破壊していた。

この後、スバルと彼のパートナーであるティアナが罰としてトイレ掃除を喰らったのは今でも語り継がれている。

また、格闘訓練の際には、こんなこともあった。

その時も先ほどの射撃訓練と同じようにベルカ、ミッド関係なしに行われた。

今回の訓練の趣旨は魔力の使えない場合の犯人確保という状況だった。

安全のため、犯人役には防御用のグローブを両手に嵌めさせている。

「スバル・ナカジマ、行きます!!」

「!!」

彼の目の前でスバルは思いっきり犯人役の教師陣を吹き飛ばした。

大の大人5人を、である。

ちなみに、この光景はすでに日常の中に溶け込んでおり、誰もが不思議には思っていないが、突っ込むものはいなかった。

すでにスバルはそのようなものとして周りに認知されていたのだが、今回の問題は彼ではなかった。

次の順番であったティアナが構えると、一人の男子訓練生がニヤついていた顔をしながら彼女の目の前に立った。

「ティアナ・ランスター、行きます」

彼の目の前でスバルの相棒であるティアナがそう告げ、彼に向けて渾身の拳を放った。

足腰からロスの少ない伝わり方で右腕に力を伝え、回転をかけた拳は、相手の防御を突き抜け、その鳩尾に突き刺さった。

その衝撃で男子生徒は一発K.O。

この場面を見ていた格闘に強い彼の同僚は彼女の拳を「見事なコークスクリューだ、あれは世界を狙える」と言っていた。

やはり、彼女もまたスバルの関係者ということだった。

さらに、こんなこともあった。

昼休み、彼は食堂へと向かっていた。

その日は彼は運悪く、朝食を食べ損ねていたので食堂のメニューの中でも一番の量を誇る特盛の他にも何か頼むかと考えていた。

「あ、教官！」

昼食ですか？」

そんな彼に話しかける者がいた。

スバルである。

すでに問題児のレッテルを張られていた彼であったが、その素行は別段悪いわけではなく、真面目な生徒でもあった。

それが空回りしているのはいただけなかったが。

「ああ、今日は朝食べ損ねてな。」

特盛の他に何か頼むつもりだ」

この時、彼にとって何が不幸だったのかというと、話しかけてきた相手がスバルだったことだ。

仮にこれがティアナだったら、「そうですね、ですが食べ過ぎには注意してくださいね」と言われる程度だっただろう。

だが、此処にいたのはスバルだった。

「そうですね……。」

なら、俺の頼むのと同じものにはませんか？

俺のは食堂のおばちゃんに頼んで特盛より少し多くしてもらって
るので」

「む、そうか？

なら頼む」

「了解です！

おぼちゃん、アホ盛り二つお願い!!」

「あいよー!」

スバルの言葉を聞いた彼は「アホ盛り……?」と疑問に思った程度だったが、それが出てくると顔を引きつらせた。

スバルが台車を借りて運んできたものは、とんでもない量の料理の山だった。

なるほど、これはアホ盛りだと感心したのもつかの間、彼の隣にはしゃもじを持った食堂のおぼちゃんが立っており、「お残しはゆるしまへんで」と彼に向かってドスの利いた声で話しかけていた。

彼女のいいつけを守らなかったものはこの訓練校の食堂を出禁になるのはすでに知られていることだった。

彼はそうならないように完食目指して料理を口に運ぶのだった。

ちなみに、完食しきつた彼はその日の夜、結婚5年目にして初めて妻の作った料理を一口も食べなかったそうだ。

「はあ、あいつらも今日で卒業か。

なんというか、あつという間の三か月だったな……」

感慨深い彼のつぶやきはだれにも聞かれることなく空に消えていった。

だが、彼は知らなかった。

この後、彼の中に一番強烈な存在感を刻み込んだものが何かをしでかすということ……。

第七話

機動六課メンテナンスルーム

ここに、フォワード新人四人とシャーリー、リインがそろっていた。その目的はフォワード四人、特にスバルとティアナに対して作成された新デバイスの受け渡し。

その真つ最中だった。

「みんなの使うことになるこの四機は、機動六課前線メンバー、メカニックススタッフの技術と経験のすべてを注ぎ込んで作られた文句なしの最高傑作ですよ。

スバルとティアナ、エリオにキャロのそれぞれの能力を十分に発揮できるように調整されているのです!」

そう話しながらリインは自分の周りに四機のデバイスを浮かべる。

「この子達は、まだ産まれたばかりですが、色んな人の思いや願いが込められてて、一杯時間をかけてようやく完成したです。

ただの道具と思わないで、大切に、でも性能の限界まで思いっきり全力で使ってあげて欲しいですよ」

「うん。きつと、この子達もそれを望んでるから」

リインの説明を受けた四人は予想以上に自分たちの機体に手間暇かけていることに驚きを隠しきれていなかった。

「ごめんごめん、お待たせ!」

すると、メンテナンスルームになのはが急いで入ってきた。

「ナイスタイミングです、なのはさん。

ちょうど機能説明をしようとしていたところですよ」

「そっか、四機ともすぐに使える状態なんだよね?」

「はいです!!」

その後、四人はシャーリーから新デバイスの説明を受けていた。

詳しいことは省いて、簡単に述べると、新デバイスの四機には出力

リミッターが掛けてあり、四人の操作技術の向上とともに解除していく旨を教えられた。

その話の最中、六課隊長陣に掛けられたリミッターのことに話が移っていった。

六課の隊長陣には新人達と同様にデバイスに掛けられたリミッターのみならず、彼女たち自身にもリミッターが掛けられている言うことを知らされたスバルとティアナは念話で互いに意見を交換していた。

(これだけの優秀な魔導師をリミッターかけてまで集める理由……。なんだと思う?)

(何か大きなことが起きるのを未然に防ぐためってのが一番だと思うが……。)

これってどうよ……)

スバルは少し考えた後、手を挙げながらなのはに尋ねる。

「ん？」

「何かな、スバル」

「いや、リミッターをかけてまでなのはさん達を集める理由が思い浮かばなくて……。」

ベルカ式のシグナム副隊長やヴィータ副隊長はまだリミッターをかけた状態でもあの人たちはかなりの腕なので問題ないでしょう。

「だけど、ミッド式のなのはさんやフェイト隊長、特に砲撃魔法主体のなのはさんにとってはリミッターはかなりの足かせになるのでは？」

「そんな状態の魔導師を多く集めるってことは……。」

「そうだね、今は詳しいことは言えないかな。」

この六課も遺失物管理部って名前だから、ロストログア関係ってことしか教えられない」

スバルの質問に対してなのはは申し訳なさそうに答える。

「とにかく、今は隊長陣のことは頭の片隅に置いておいて、自分たちのデバイスのことを考えておいて」

「この四機はみんなの訓練のデータを基に調整しているから、いきな

り使っても違和感はないと思うよ」

「午後の訓練にでもさっそく使ってみて微調整しようか」

「遠隔調整も可能ですしね」

シャーリーの言葉になのはは苦笑しながら「便利だよ、今は」と返した。

その返事を聞いたスバルは（その言葉は歳を感じた時に出る言葉みたいですね）と口に出そうとしたが、なのはの顔に浮かんだ笑みを見て背中に薄ら寒いものを感じ口を噤んだ。

その直後、隊舎全体に警報音が鳴り響いた。

「このアラートは?!」

「一級警戒態勢!!」

アラート音に反応したなのはは通信を指令室に繋ぎ、状況の確認を行う。

「グリフィス君!!」

『はい、教会本部から出動要請です!』

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君? こちらはやて』

『状況は?』

モニターに司令補佐のグリフィス・ロウラン陸尉映り、その隣にはやてとフェイトからも通信が届く。

『教会の調査団が追っていたレリックらしき物が見つかった。場所は、エイリの山岳丘陵地区。目標は、山岳リニアレールで移動中』

『移動中って……』

『まさか!』

「……なんでリニアレールなんかにロストログア乗せてるんだよ」

隊長たちの話を聞いたスバルは小声で、呆れるような声を出した。

『そのまさかや、内部に侵入したガジェットのせいで、リニアレールのコントロールが奪われてる。』

リニアレール車内のガジェットは、最低でも30体。

大型や飛行型の未確認のタイプが出てるかも知れへん』

(なあ、これってまずいんじゃない?)

状況を聞いたスバルはティアナに念話で話しかける。

(そうね、ガジェットにコントロールを奪われて止まらない。

つまり下手すると脱線。

これがただの貨物車両なら山岳部つてのもあつてそこまで重要視しなくてもよかつたんだけど……)

(荷物がロストロギア。

何が起こるかわからねえからな……。

ついでにこっちはぶつつけで慣らし運転なしの新型。

かなりきついな)

『いきなりハードは初出動や、なのはちゃん、フェイトちゃん、いける?』

『私は、いつでも』

『私も!』

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。』

『皆もええか?』

『「はい!」』

『よし。いいお返事や、シフトはA-3、グリフィス君は隊舎での指揮、リインは戦闘管制。』

『なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮』

『わかった』

『うん』

『ほんなら、機動六課フォワード部隊……出動!』

『「了解!」』

こうして、機動六課フォワード四名の長い一日は始まりを告げた。

第八話

「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習どおりで大丈夫だからね」

ヴァイスの操縦するヘリに乗ってなのはとリイン、新人四人は現場へと向かっていた。

「はい」

「了解です」

なのはの言葉にティアナとスバルはそう返す。

彼らはこれが初めての出勤というわけではないのだ。

緊張はしているが、それは程よい緊張というもので動きを阻害するほどのものではない。

「エリオとキャラ、フリードも、しっかりですよ！」

「は、はい！」

しかし、この実戦が初陣のエリオとキャラにとって、リインの言葉は逆効果となっていた。

特にキャラは目に見えるほどに顔が強張っていた。

「危ない時は、私やフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから。」

おっかなびつくりじゃなくて、思いつきりやってみよう！」

「はい！」

四人がなのはに返事をした後、スバルがちらつと横を見てみると、緊張しているキャラに心配するようにエリオが声をかけていた。

その様子を見たスバルは席を立つと、エリオとキャラの前に向かい、二人と目を合わせるように屈んだ。

「二人とも、緊張してるか？」

「ッ……はい。」

「少しだけ」

「は、はい……」

エリオとキャラはスバルの質問に詰まりながらも答える。

その返答を聞いたスバルは二人の頭に手を乗せクシャクシャと撫

でる。

「緊張するのは当たり前だ。

俺も緊張してるし、ティアナもだ。

だけどな、これだけは言わせてくれ」

スバルは頭をなでる手を止めると真剣な顔つきになる。

「二人はチームだ。

だからな、互いを守る、そのことだけは忘れないでくれよ？

何かを守る、その意志だけで人は強くなれるからな」

スバルは「それに」とつづける。

「エリオはその年でもう俺たちと同じ魔導師ランクをとれる勢いだし、キャロにはフリードがいる。

自分の力とこれまでの訓練をやってこれた自分の意思を信じればできないことはないさ。

自分のやれることを精一杯やれば結果はついてくるさ」

わかったな？とスバルが尋ねると二人は少し吹っ切れた表情で頷いた。

（ありがとうね、スバル）

スバルが席に戻ると目の前に立つのはから念話で礼を伝えられた。

（いいですよ、別に。

エリオとキャロは俺にとっては弟妹みたいなものですからね）

（それでもだよ）

なのはとスバルの念話で会話している様子を見ていたティアナはどことなく不機嫌な表情だったのだが、それを知るもの誰もいなかった。

『ガジェット反応、空から!?!』

『現地航空観測隊、反応を多数確認!』

ヘリが現場に近づいていったとき、通信でそのようなことが聞こえ

てきた。

「空から？　もしかして、航空型のガジェット!?」

「多分ね」

「どうします？　なのはさん」

「私がフェイト隊長と出て、2人で空を抑える。ヴァイス君、いい?」
「うっす。なのはさん、お願いします!」

なのはとヴァイスがそのように言葉を交わすと、ヘリの後部ハッチが開き青空と地上がその光景を覗かせた。

「じゃあ、ちよつと出てくるね。一応通信で現場の指揮はとるけど、現場の判断はティアナにお願いするね」

「はい」

「それじゃ、皆も頑張つてズバツとやつつけちやおう!」

「「はい!」」

「……はい!」

未だに緊張の残っていたキャロが少し遅れて返事をする。

なのははそんなキャロに近づき、顔を両手で優しく包み込んだ。

「……大丈夫。離れていても、通信で繋がってる。一人じゃないから、ピンチの時は助け合える。」

キャロの魔法は、皆を助けてあげられる、優しくて強い魔法なんだから」

「あ……」

「それに、さつきスバルも言ってたでしょ?」

自分の力を信じろって。

自分の力つてのは不思議でね、信じない者には全く力は貸さないんだけど、信じて使う者にはしっかりと応えてくれるから、ね?」

「はいっ!」

「うん、いい返事だね。」

それじゃ、行ってくるよ」

なのははそういつて後部ハッチから身を空中に躍らせた。

そして、その光景を見ていたスバルは目をキラキラさせていた。

(また何かやらかす気が……?)

その顔を見ていたティアナは一応彼の行動に気をかけておくことにした。

「任務は2つ、ガジェットを逃走させずに全機破壊すること。」

そして、レリックを安全に確保すること……、ティアナ聞いているですか?」

「ツ、はい。」

大丈夫です」

「そうですね、ならいいですけど。」

続けますです。」

ライトニング分隊とスターズ分隊は、それぞれ前後に分かれて中央を目指します。

レリックはここ、7両目の重要貨物室に置かれています」

ラインはそういつて空中に展開したモニターを動かす。

貨物室とあってその広さはほかのものよりもかなりの広さを誇っていた。

「スターズかライトニング、どちらか先に到達した方がレリックを確保するですよ」

「「はい!」「」」

ラインはそこで、「そして……」と言葉を切ると、その身を光に包まれながら一回転。

そこにいたのは騎士甲冑を着込んだラインだった。

「私も現場に降りて管制をしますよ」

「さて、新人ども。」

隊長さん達が空を抑えてくれてるお陰で、安全無事に降下ポイントに到着だ。

準備はいいか?」

「「はい!」「」」

「いつでも行けます!!」

「よし、ならスバル!!」

「一番槍もってけ!!」

「了解ッ!!」

その直後、スバルは後部ハッチから身を投げ出した。

「ヒヤッホォーッ!!」

どこことなく楽しんでるように見えるのは自分の見間違いかとティアナは思ったが……。

「スバルさん、楽しそうだね」

「そうだね……」

隣に立つエリオとキャロのそんな会話が聞こえてきた彼女は眉間を揉みながらため息を吐いた。

「ティアナ、あのバカのフォロー頼むぞ!!」

「あまりわかりたくありませんけど、了解です！」

スターズ4、ティアナ・ランスター行きます!!」

そして、彼女もまた相棒の後を追うべく勢いをつけて空中に飛び込んだ。

「行くぞ、マツハキヤリバー」

『任せてください』

「そこなくつつちな。」

セットアップ!!」

ヘリから飛び降りたスバルは少しの間の空中遊泳を楽しんだ後、新しい愛機を展開する。

一瞬でバリアジャケットとデバイス装着を終えたスバルは列車の天井部分に着地する。

少し遅れてティアナもバリアジャケットを展開し彼のすぐそばに降りてきた。

「あれ、このジャケットって……」

自分たちのバリアジャケットのデザインが変更されているのに気付いたスバルはその疑問を口にした。

彼の姿は、以前のものにプラスで白のロングコートに袖の部分には

青色の装飾が施されていた。

『みんなのバリアジャケットはそれぞれの分隊長さんのものを参考にしているですよ。』

癖はありますけど、高性能なのです』

『特に、スターズの二人のジャケットのロングコートはある程度の攻撃を弾く魔法をオートでかけてるから、いざというときはそれで防ぐといいよ！』

あまり過信されても困るけどね』

ラインとシャーリーからの通信を聞いた二人は来ているコートを感心しながら見つめる。

スバルのコートは袖があるタイプのものだが、ティアナのコートには袖のないノースリーブのものだ。

『限界を超えたら最後に防いだ攻撃を相殺するように爆発するようにしてあるから、吃驚しないよね？』

「いや、爆発って……」

シャーリーの口から聞こえた物騒な単語に流石のスバルも顔を青くする。

『本当に爆発するわけじゃないから、心配しないで！』

まあ、衝撃はあるかもしれないけど……』

「できれば衝撃も消してもらえればうれしかったんですけど……「スバル、下ッ!!」……ッ!」

ティアナの呼びかけに反応したスバルはすぐさまその場から後ろに飛び去る。

直後、スバルの立っていた屋根を内側からレーザーが撃ちぬいた。

「さて、無駄話はここまでってね。

行くぞ、マツハキヤリバー！」

『わかりました』

「こつちも行くわよ、クロスミラージュ」

『了解』

ティアナはクロスミラージュを構え、スバルはマツハキヤリバーの

出力を上げる。

彼らの戦いの幕が切つて落とされた。

「スターズ3、ガジェットI型群体を撃破、次の車両へと向つて下さい。」

スターズ4、車両内のガジェットを撃破。

スターズ3との合流をお願いします」

「ライトニングF、障害排除。」

引き続き、ガジェットの排除を」

「スターズ1、ライトニング1、ガジェットII型の撃墜、制空権の確保を完了。」

その場にとどまり監視をお願いします」

場所は移り、機動六課の作戦指令室ではオペレーターのルキノとシャーリー、予備のヘリパイロットのアルトがりニアールとその周辺における状況の整理と現場への大まかな指示を行っていた。

そんな中、はやては部屋の中央に置かれた司令席に座りモニターを凝視していた。

(りニアールに今のところ確認されているのはガジェットI型のみ。

だけど、I型は正直言つて彼らにとって油断しなければなんともなる。

相手もそれはわかつてるはずや……、恐らくは……)

「八神隊長、地上本部から直電です」

「地上本部……?」

「こんな時にいったい誰や……?」

司令補佐のグリフィスからの知らせを受けたはやては首を傾げながらも司令席のパネルを操作する。

モニターの一つに通信をしてきた者の顔が映った。

『すまないな、八神三佐。』

作戦中だということは知ってはいたが、君に伝えなければならぬことがあつてな』

はやてはそのモニターに映った人の顔を見て、驚愕した。

地上……いや、管理局の人間ならば彼女の名前を知らないものはない。

何しろ、彼女は……

「いえ、私が現場に出ているわけではないので。

それで、何かご用でしょうか、レジアス中将閣下」

管理局の生きた英雄の一人とされる女傑だからだ。

第九話

『そちらも忙しいだろうからな、要件を伝えよう』

機動六課の作戦指令室は今までにないほどの緊張に包まれていた。現場に状況を伝えるオペレーターの手と口は動いていたが、そうでもしないと管理局の女傑と最後の夜天の王の間に広がるプレッシャー的な何かに押しつぶされそうだったからだ。

『先ほど、リニアレールの周辺に配置していた特務一課のものから連絡があつてな、ガジエットの他にレリックを狙う者がいたそうだ』

「……ッ！」

ガジエットの他にもですか!？」

『ああ、恐らくガジエットを使っている者の下についている者だろうな。』

一課でもやり手の局員が捕縛しようとしたところ、何らかの能力で逃れられたらしい』

「……」

レジアスからの報告を聞いたはやてはその情報を頭の中で整理し、グリフィスに指示を出す。

「グリフィス君、ヴァイス陸曹に連絡をお願い。

ガジエットだけでなく他にも注意するようにと。

あのヘリは新型や、リーダーもここからのものよりも正確に出るやろうから」

「了解です」

グリフィスははやてに敬礼をしてすぐに空いている通信席に座りヴァイスへと連絡を送った。

「それよりも、レジアス中将。

私に連絡も無しに特務一課……いや、あなた直属の部隊を動かした理由が知りたいんですけど……?？」

『なに、簡単なことだ。』

ロストログアという人の手には余るものを訓練を受けたとはいえ、ひよっただけに任せる気はないということだ。

いざというときは一課が処理をする。

そのつもりで彼らを派遣した。

これで十分か?』

「それは、私たち機動六課のことを信用していないということですか……?」

『馬鹿なことを言うな。』

貴様らを信用していないというなら最初から六課の設立なんぞ承認しない。

私はミッドチルダの平和を守るためならなんだってする。

そのために六課の設立を後押ししたのだ』

「だったら……!」

『話は最後まで聞け。』

いいか、地上の平和は恒久的なものでなければならん。

そのために必要なのは私たちのような年増ではなく、お前たちのような若者だ。

だからもしもの時には一課が貴様ら六課の代わりに犠牲になると言っているのだ。

一課の人間は、良くも悪くも古いタイプの人間ばかりだからな。

もちろん、何もないことには越したことはないがな』

レジアスの考えを聞いたはやては己の浅慮を恥じた。

彼女の覚悟は、己を信用している部下を捨てるほどのものだったということを知っていながら、はやてはレジアスのことを疑ってしまったから。

『まあ、お前たちのような小娘にはまだまだ地上や世界を任せること気はないがな!』

「んな!」

誰が小娘ですか!?

もうすぐ20です!!」

『甘いな、お前らは私から見ればまだまだ小娘同然だ。』

どうせまだ生娘だろう?』

「ッ!」

レジアスの言葉にはやてをはじめとした女性局員は全員顔を真っ赤に染めた。

その様子を見たレジアスはしてやったりといった表情で笑う。

『ふっ、そういうところがあるからまだまだだというのだ。』

女を磨けよ、小娘。

そうしないと生き遅れ……、待てオーリス、その振り上げた人を殺せるような書類の束はなんd……』

『地上本部からの通信、途切れました……』

未だにだんまりのオペレーター陣の代わりにヴァイスへの通信を終えたグリフィスはがはやての方を向きながら告げる。

だが、彼は彼女の方を向かない方がよかった。

そこには一匹の化け狸がいた。

「うがぁー!!」

なんなんや、あのお婆さん!!

自分が男見つけて子供産んで勝ち組のつもりかー！ツツ!!」

「なあ、ティアナ。」

なんか六課からの通信が来ないんだけど……」

『知らないわよ、そのうちなんか来るでしょう。』

それより、そっちの状況は……?』

場所は移りリニアレールの車両の中。

そこでティアナと別れて車両を進んでいたスバルは一つ大きな影を目の前に相棒に念話を飛ばしていた。

「あー、うん。」

なんかデカいのがいる。

だから少し遅れる」

『了解、ならあたしがレリックを回収するわ。』

そのデカいのを抜いたらすぐに来なさいよ?』

ティアナからそう言われたスバルは指を鳴らしながら応える。

「わかった。」

「そうだティアナ……」

『何?』

「抜けなさいと言ったが、別に倒してしまってもかまわんのだろう?」

『それ、言ってみただけでしよ?』

「もちろん」

戦闘中だというのに、ティアナは大きなため息を吐きたくなくなってしまった。

「キヤロ、お願い!」

「うん、エリオ君!!」

一方、ライトニングの二人の方にも、スバルの行く手を阻んだ新型ガジェットが現れた。

キヤロはすぐさま強化の魔法をエリオに掛け、キヤロの魔法の加護を得たエリオはストラーダの先端に魔力変換資質を生かし電撃を纏わせ新型ガジェット——ガジェットⅢ型に切りかかった。

「クッ!」

「固いッ!!」

だが、その巨体に似合った厚い装甲によってその刃は受け止められてしまう。

そして、Ⅲ型の機体から発せられるAMFの出力が引き上げられる。

するとエリオ自身に掛けられた強化の魔法やストラーダの先端に纏った電撃を含んだ魔力が霧散してしまう。

「エリオ君!!」

「クッ、ストラーダ!!」

《Blitz Action》

不利を悟ったエリオはすぐさまⅢ型の触手の範囲から逃れ、キヤロ

の隣に降り立ち、彼女を抱きかかえるとすぐさま後ろへ飛び去る。

直後、その場所を真下からレーザーが撃ちぬき、車両の中からI型が三機飛び出してくる。

「キャロ、アレどうにかできる?」

「うん……、でも……」

エリオの質問に対してキャロは答えを持っていた。

だが、それは未だかつて成功したことのない魔法だった。

竜魂召喚、フリードの真の姿である白銀の竜の姿と力を開放する魔法である。

だが、彼女はこの魔法を使うことに対して未だ少しの恐怖を感じていた。

「大丈夫だよ、僕も、フリードも」

そんな彼女にガジェットを警戒しつつもエリオは優しく話しかける。

その言葉に答えるようにフリードもまた大きく鳴いた。

「だから、君は自分の力を信じて。

なのはさんも、スバルさんも言ってたでしょ?」

僕も君を信じる。

だから、君も」

「エリオ君……、うん、わかったよ。

行こう、フリード」

(そうだ、私は六課ごくに来て変わったんだ。

フェイトさんには優しさを、なのはさんには戦い方とその心得を。

そして、スバルさん、ティアナさん、エリオ君には、仲間の大切さを……)

エリオの言葉に頷き、キャロは胸の前に手を組み、祈りをささげるように目を閉じる。

彼女の脳裏には今まで自分に関わってきたすべての者が映った。

ルシエの皆、フェイト、なのは、六課のスタッフ、ティアナ、スバル、そしてエリオ。

(だから、私は守りたい。

みんなを……!」

「蒼穹^{そうきゆう}を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚!」

キャロの足もとに一際大きな魔法陣が展開され、その魔法陣から、白銀の飛龍が飛び出す。

「これが、フリードの本当の姿……」

「エリオ君、乗って!!」

「あ、うん!」

キャロにそういわれ、エリオはフリードの背に飛び乗る。

「フリード、ブラストレイ!」

キャロの呼びかけにフリードは口に炎を溜める。

「薙ぎ払えツ!!」

そして、焔が放たれた。

フリードから放たれた炎はI型を跡形もなく消し飛ばし、III型をよろめかせる。

「ストラーダ!!」

《Explosion》

III型の間を見逃さず、エリオはストラーダを構え、カートリッジを二発装填^{ロード}する。

《Speerangriff》

ストラーダの穂からブースターがせり出し、エリオは一気に加速する。

「クッ!」

だが、それでもIII型の装甲を貫くことはできなかった。

「まだまだあツ!!」

《Hinzufügen^{追加}》

エリオの声に合わせてストラーダにさらに一発のカートリッジが装填され、ブースターから噴き出る炎がさらに増す。

「貫けえツ!!」

エリオの声とともに、ストラーダがさらに加速する。

そして、その穂先がIII型の装甲を貫いた。

「やった……？」

Ⅲ型からスパークが走るのを確認したエリオはすぐに離れ、距離を置いたところで爆発しその機体を四散させた。

「ふうー」

脅威が去ったことを確信したエリオはストラダーを肩に担ぎ、空を飛んでいるフリードの方へと向かった。

「マツハキヤリバー、どうだ？」

《相棒の予想通りです。》

やはりAMFの状況下では魔力は四散してしまいましたが、消滅するわけではありません。

それに……》

一方、スバルの方はⅢ型の攻撃を躲しながら牽制の魔力弾を放ちながら愛機とある一つの可能性について話していた。

《AMFは魔力の飽和状態になると機能を低下させるようです》

「つまり、その状況なら魔法の使用が容易になるわけだ」

《そうです》

「ならやることは一つだろ！」

《Load cartridge》

リボルバーナックルに二発のカートリッジが送られる。

それと同時にスバルはⅢ型に向け砲撃を放った。

「デイベインバスター！」

《Divine Buster》

その砲撃はⅢ型に辿り着く前に霧散してしまう。

だが、スバルはさらにもう一つの魔法陣を展開していた。

「もう一丁ツ!!」

《Divine Buster》

そして、もう一筋の砲撃がⅢ型に向かい、さらに魔力を四散させら

れる。

その時、マツハキヤリバーが声をあげた。

《今です！》

「了解ッ！」

マツハキヤリバーの合図とともにスバルはⅢ型に向かい走り出していた。

彼はⅢ型に接近すると同時に右手に魔力を集中さ、さらにそれを螺旋状に形状を変更し、回転させる。

「フィールドを抜けるッ!!」

《Revolver drive》

先の砲撃ですでに周囲の魔力は飽和状態になっており、Ⅲ型の高出力のAMFでさえも無視できない状態だった。

結果、スバルの右手の魔力はほとんど散らされることなくⅢ型に到達。

そのコアを打ち砕いた。

「終わりだ」

スバルの右手から魔力が消えると同時に彼の背後でⅢ型が盛大に火花を散らし、最後に爆発を起こした。

「マツハキヤリバー、周囲にガジェットの反応は？」

《ありません》

「よし、ティアナ、こっちは終わった。

そっちはどうだ？」

愛機からの報告を受けたスバルは警戒を解き、相棒に向け念話を飛ばした。

『今レリックを封印したところよ。』

できればこっちに来てくれると助かるんだけど』

「了解だ、すぐに向かう」

スバルはちらりと先ほど破壊したⅢ型を見て、すぐにティアナのいる車両へと走って行った。

Ⅲ型のカメラが起動していることに気づかずに。

「ふむ、やはりこの案件は素晴らしい！」

とある場所にある建物の一室に一人の男がいた。

彼は目の前に映るいくつかのモニターを見てそう声をあげた。

「それに……」

彼の視線の先には、フェイトとエリオの二人が映っていた。

「この二人、F計画の遺産がまだ生きて動いているとは。」

この二人を手に入れられるチャンスがそのうち来ると考えるだけでわくわくするよ……。

しかし、セインには悪いことをしてしまったかな？

まさか特務一課という生きた万国ビックリ人間博物館みたいな連中が出張つてるとはね……」

男がそう呟いているとき、部屋に一人の女性が入ってくる。

「ドクター、刻印ナンバー9、護送体制に入りました。」

「追撃戦力を出しますか？」

「いや、やめておこう。」

……ああ、ウーノ、一つ聞いていいかな？」

ウーノと呼ばれた女性は男の言葉を待つ。

「なんででしょうか？」

「タイプゼロセカンドの少女はどこにいるのかな？」

この映像には彼女にそっくりな少年が映っているだけなのだが……？」

「……ドクター、タイプゼロセカンドの性別は女ではなく男です」

「……………」

ウーノの言葉にドクターと呼ばれた男はぴたりと動きを止める。

そして油の切れたロボットのようによ首を動かし背後を向き口を開いた。

「マジ……?」

「マジです、ドクター。」

てつきり彼のことを知ったうえでノーヴエを女性型にしたのかと思っていました、違ったのですか?」

「あ……」

その時彼は思い出した。

彼は大人である。

そして、大人である彼には研究以外にも趣味が一つあった。

それは酒を嗜むことである。

そして、その日は彼はスバルの遺伝子データをみる前にお気に入りワインを一杯飲んでいた。

たかが一杯、されどいっぱい。

大事な作業前に酒を飲んだ彼は一つだけだが決定的な失敗(?)を犯したのだった。

「……テヘペロ」

「……」

「……うん、なんかごめん」

ウーノにゴミを見る目で見られた彼は素直に謝った。

だが彼は「おかしい、確かこういえば大抵は許してもらえるか怒るか何らかのリアクションがあると書いてあったのに……」と呟いていた。

ドクター、またの名をジェイル・スカリエツティ。

稀代の天才科学者は一生に一度の大失敗を犯してしまっていたのだった。

第十話

第97管理外世界『地球』

この世界にある日本という島国の海鳴市という小さな町にある別荘の敷地に魔法陣が現れる。

「はい、到着です！」

その魔法陣が一際輝いた後現れたのは、なのは、スバル、ティアナのスターズ分隊。

フェイト、エリオ、キャロのライトニング分隊。

そしてリインフォースⅡだった。

「ここが、なのはさん達の故郷……」

「ミッドとほとんど変わらないでしょ？」

「空は青いし、太陽も一つだし……」

「山と水と自然の匂いもそっくりです」

周りの風景を眺めていたエリオとキャロの素直な感想を聞いたフェイトは微笑む。

「というか、スバル……」

「大丈夫なの？」

今の今まで静かにしていた彼の様子がおかしいことに気づいたティアナは少し離れたところで蹲っていたスバルに近づき尋ねる。

「だいじょう……ヴツ！」

ティアナの呼びかけに答えたスバルの顔は真っ青だった。

「あちやく、転移酔いですね」

「スバル、きついなら途中で休んでいてもいいんだよ？」

普段の彼からはあまりにもかけ離れた様子に流石のなのはも心配になって声をかける。

だがスバルはその提案を片手をあげること拒否した。

「ここには仕事で来たんですから、休んではいられませんよ。

それに、だいぶ良くなってきましたから……」

そういった彼の顔色はまだ少し青いが、先ほどまでのとてもひどい様子ではなかった。

「そう？」

「ダメなときは絶対言つてね？」

「わかりました。」

「それよりも、此処つてどこなんです？」

「なんか湖畔のコテージみたいですけど」

「スバルとティアナの間に答えたのはリインだった。」

「この世界に住んでいる方の所有する別荘なんです。」

「私たちの待機用の場所として、快く許可していただけたんですよ？」

「その時、別荘の中に一台の自動車が入ってきた。」

「自動車、こっちの世界にもあるんだ」

「自動車から出てきたのは、金髪のショートヘアでパンツスタイルの女性だった。」

「なのはっ！ フェイトっ！」

「アリサちゃん」

「アリサ」

「なによもく。ご無沙汰だったじゃない？」

「にやははっ。ごめんごめん」

「いろいろ忙しくって」

「アタシだって忙しいわよ？ 大学生なんだから」

「アリサさくんっ。こんにちわですっ！」

「リイン！ 久しぶりっ！」

「はっいですうっ」

「車から出てきた女性はなのは達の方に走ってくると親しげに話しかけていった。」

「フォワードの新人四名は除け者である。」

「そんな彼らのことを思い出したかのようにフェイトが彼女のことを紹介する。」

「紹介するね。私となのは、はやての友達で、幼なじみ」

「アリサ・バニングスです。よろしくね」

「二宜しくお願いしますっ！」

女性——アリスが挨拶をし、四人が返事をする。

その掛け合いだけで、スバルは彼女からある一つのことを嗅ぎ取った。

(この人、なんとなくティアナと似た雰囲気だ)

だが、彼の思考はそこで止められた。

彼の足をティアナの足が踏み抜いたからだ。

ご丁寧に踵で、である。

その後、別の場所からこの世界に来ていたはやてたち八神ファミリーが合流し、この世界に来た目的である『ロストログア探索』についての打合せを行い街中の探索となった。

「というか、ミッドのちよつと田舎の方と変わらないわね。

魔法がないだけで、人の着ている服とか、建物とかはほとんど似ているわね」

「俺はこの雰囲気は好きだな。

なんかのんびりして、時間がゆっくりしているというか」

「まあね、この間初任務終えてからゆっくりした時間が取れなかったからこんな空気に浸るのもいいかもね」

打ち合わせの後、彼らはスターズ、ライトニングで分かれて街中を歩きながら探索を行うことになった。

こちらにはなのは、ライン、スバル、ティアナの四人がメンバーとなっていた。

「お、なのはさん、あれって何ですか!？」

「ん？」

ああ。あれはね、たこ焼きっていうんだよ」

「たこ焼き……」

スバルが路上に開かれた店を見つけてなのはに尋ねると、なのはは懐かしいなあと思いつつ答えた。

タコを食べるといふ食文化がないミッドの住人であるスバルにとつてたこ焼きとは珍しいものだったようだ。

すでに目的が何だったのかを忘れかけていた。

「スバル、遊びに来たんじゃないんだから」

「ええ〜……」

「まあまあ、落ち着いて。」

せつかく地球に来たんだし、ミッドじゃ食べられないものを食べるってのもいいかもよ?」

「なのはさんまで……」

いつまでたつても動きそうにないスバルをティアナがひっぱり動かそうとしているときになのはが間に入って止める。

なのはの言い分を聞いたスバルは目を輝かせ、ティアナは諦めのため息を吐いた。

「ただし、一番小さいのを分けて食べることに。」

夕飯も食べないといけないし、一応任務中だからね」

「はい!」

なのはの言葉に、これまでにないほどにはつきりと返事をするスバル。

スバルはすぐに店の方に向かい、そして何かに気付いたのか、また三人のもとに戻ってきた。

「どうしたんですか?」

「お金、ありませんでした……」

「そーいやこつちに来る前に、両替してなかったわね」

「仕方ないなあ、私が買ってくるから、みんなはそこで待つてて」

スバルのしょんぼりした姿を見たなのははそういつて店の方に向かつていった。

少しして、たこ焼きを食べて顔を輝かせるスバルと、なんだかんだ言つて美味しそーうにたこ焼きを食べるティアナがいたそーうだ。

その後、今回の依頼元である聖王教会からの連絡で、今回の目標には危険はないということが知らされ、探索隊の皆はほつと胸をなでお

ろしていた。

「んく、この後フェイト隊長が迎えに来てくれるらしいけど手ぶらでってのもなんかなく」

なのははそう呟きながらポケットから携帯電話を取り出しどこかに電話を入れる。

「あ、お母さん？　なのはです」

「……………」

「にやはは、うん。お仕事で近くまで来てて。

……………そうなの、うん。ほんとにすぐ近く。

でね？現場のみんなに——」

(なのはさんの、お母さん……………?)

(そりや、存在はしてるだろうけど……………)

なのはの口から出たお母さんという言葉に過剰に反応する二人。

なのはも人間である以上、木の間から生まれるわけではないのだが、二人の頭にはどうしてもその単語と目の前で話をしている女性が繋げることができなかつた。

「さて、ちよつと寄り道」

「はいですくつ！」

「隊長、今の電話って……………？」

「私の実家だよ。うち、喫茶店なの」

「ええくっ!?!」

「喫茶翠屋。お洒落でおいしいお店ですよ」

ラインのその一言に彼の目が光った。

そう、スバルである。

「なのはさん、翠屋のおススメは？」

「んく、やっぱりシュークリームかなあ？」

あ、それと一緒に出てくるコーヒーマもおいしいよ」

「ほうほう……………」

スバルはその話を聞くと、マツハキヤリバーの中に入れてある貯金箱のうちの一つを取り出した。

中身を取り出すためには叩き割らないといけないタイプのものがある。

「スバル、それ何？」

「貯金箱、小さいときにおやじに渡されたのを入れている。」

主にこの世界の小銭とか」

「いや、なんでこの世界のつて、そういやゲンヤさんのご先祖つてこの世界の出身だつて言つてたわね」

「そういうこと。」

うまいシユークリームを食べるためならこの貯金箱を割つてでも……！」

「あ、あんたねえ……」

そんな二人の様子を見ていたなのはは一つ思った。

(こんな往来の中で15、6の男の子と女の子が貯金箱を持ちながら話すのつてかなりシユールだなあ)

彼女の思ったことは決して間違つていないだろう。

「お母さくん、ただいまーっ」

「なのは、おかえり〜」

(お母さん、若ッ!!)

(ホントね、年齢考えたらおかしいでしょ。

どう見ても姉妹にしか見えないわよ、アレ)

その後、目的地である喫茶店翠屋に辿り着いたなのはたちは中へと入っていく。

そんな彼女たちを出迎えたのはなのはをもう少し成長させればこうなるだろうという容姿の女性——なのはの母、桃子だった。

(ん?でも考えてみたらレジアス中將も似たようなものじゃね?)

(確かに、言われてみればそうよね。

あの人の年齢詐欺っぷりはすさまじいからね)

そんな彼女を見て最初は驚いた二人だったが、身近に似たような存在がいたことを思い出しすぐに落ち着きを取り戻した。

すると、いつの間にかなのはと桃子の他に男性と、眼鏡をかけた女性に近くに立っていた。

「あ、この子達は、私の生徒なの」

「そう。お茶でも飲んで、ゆっくりしていつてね？」

「……えと、あつ、スバルⅡナカジマです！」

「ティアナⅡランスターです」

「うん、俺はなのはの父で士郎です。」

「こつちが」

「姉の美由紀、よろしくね？」

「よろしくお願いしますー！」

「ところで二人とも、コーヒーとか紅茶とか、いけるくちかい？」

自己紹介が終わったところで士郎は二人にそう尋ねる。

「俺はコーヒーの方が……」

「あたしはどつちでも」

「なら、スバル君には俺がコーヒーを淹れるから、桃子は」

「ミルクティーね」

その後、出てきたコーヒーや紅茶を飲んでみると士郎がなのはの仕事ぶりを尋ねてきたので、スバルとティアナは彼女の人気っぷりと彼女の訓練の厳しさを話していた。

その話になのはが顔を紅くしたりしていたが、娘の話を聞いた士郎は満足してシヨーケースからあるものを取り出し二人に差し出した。

「これは……」

「翠屋名物のシュークリーム。」

話してくれたお礼だよ」

「おお……」

テーブルに置かれたシュークリームを見てスバルはその目を輝かせた。

いつぞやのフリードを見た時と同じような目だ。

「た、食べていいんですか？」

「ははは、食べ物なんだから食べたらダメなんて言わないよ。」

「これはお礼だからお金もとらないし」

「い、いただきます……！」

士郎からそう言われた二人は恐る恐るシュークリームを口に運ぶ。

そして、一口。

「う〜ま〜い〜ぞ〜!!」

瞬間、スバルの目からビームが出る幻覚をその場にいたものは見た。

「これは、すごくおいしいです」

ティアナも同じようにおいしそうに食べるが、すぐに何かを考えていた。

「ああ、でもこれカロリー高いんだろうな……。」

「太りそうで怖い……」

「いつも動いてんだから、カロリーなんて考えなくてもよくね？」

ティアナの切実な言葉を聞いたスバルは彼女に告げた。

その直後、ティアナの顔に青筋が浮かぶ。

「あんたは、なんでそうデリカシーのないことを!!」

「痛ッ！」

「脛蹴るなよ!？」

「うっさい!!」

「あがつ!？」

その様子を少し離れたところで見ていた士郎はすぐそばに座るなのはとラインに尋ねる。

「彼は鈍感なのかい？」

「それともわざと?」

「うくん、どっちかっていうと無頓着って感じかな?」

「いつもの二人ですう」

「あらあら、ティアナちゃんも苦労しそうね」

痛みに悶絶しているスバルと顔を紅くしつつもおいしそうに

シュークリームを食べるティアナを見て土郎と桃子は穏やかな笑みを浮かべていた。

第十一話

バニングス家所有の別荘でそれは起こっていた。

「肉いただきたい……アレ!？」

「ふっ、スバル、状況判断がなつてねえぞ。

フロント張るならこれくらいできねえとなつてえ!？」

「ハハハ！」

甘い、甘いですよ副隊長。

翠屋のシユークリームよりも甘いです!

焼肉大会はもう戦場です。

口を開く暇があるなら得物を動かさない!!」

「言いやがったな、スバル？」

わかった、ならば戦争だ!!」

「二人とも、少しは静かに……っ! 貴様っ!

私の焼いていた肉を全て取りおつて!」

「甘いんだよシグナム。」

さつきスバルが言っただろうが。

ここは戦場だつてな」

急遽行われることになったバーベキュー大会。

その一角に大食いのスバルとヴィータ、負けず嫌いのシグナムが集まったことで勃発した第一次焼肉戦争。

すでに彼らの胃袋の中かなりの量の肉が吸い込まれていった。

「なんというか、あの二人についていくあの子ってすごいわね……」

「なはは……」

スバルはいつもあんな感じだよ?

おかげで最近胃がキリキリと痛んでね……」

「ちよつとあんた、大丈夫なの?」

「心配しないで、少し薬の量が増えるだけだから」

「いや、それをどう心配するなつていうのよ……」

一方、その様子を少し離れたところで見ていたアリサとなのは。

昔からの知り合いで、その気性を知っている二人についていくスバルに対して呆れと感心の視線を送っていたアリサだった。

しかし、彼女の隣でジュースを飲んでいるなのは言うことを聞いて、なのはのミッドでの状態がどのようなものなのか非常に気になったアリサだった。

「いや、私はまだいいよ？」

スバルとずっとコンビ組んでるティアナの方が大変だから」

「ティアナって……ああ、あそこで鶏肉焼いてる子ね」

「うん。」

何しろ、あのスバルとコンビ組んで今年で4年目だからね。

たぶん胃の強さならこの六課一なんじゃないかな？」

「誰もそんな強さじゃないわよ。」

少し話してみようかしら」

アリサはそういうと手にジュースを持ちティアナの元へと歩いて行った。

「はあ……」

その時、ティアナはさらに乗った肉と野菜を一目見て、スバルたちの方に視線を向けた。

彼らのさらに乗った肉と野菜のアホ盛りを見てため息を吐いた。

「どこにあれだけ入るのかしら……？」

「まったくよね」

「あ、バニングスさん」

「アリサでいいわよ。」

隣、いい？」

「あ、どうぞ」

アリサは微笑みながらティアナの隣に腰を下ろした。

「ふう……」

ねえ、ちよつと聞きたいんだけど……」

「なんででしょうか……？」

ティアナが紙コップに入ったジュースを口に運ぶ直前、アリサが問いを投げかけた。

「あんた、スバルって子のこと好きでしょ？」

「ブウー……ッ!？」

剛速球のど真ん中の質問を投げかけられたティアナは恥も外聞も無しに口に含んだジュースを吐きだしてしまった。

「な、何を言ってるんですか!？」

あたしが、スバルのことを好き？

冗談もほどほどにしてくださいよ!

だいたい、なんであんな無茶苦茶で、大雑把で、女の子に対するデリカシーの欠片もない奴のことを……!？」

「アハハ、やっぱり。」

あんたって面白いわ」

ティアナが顔を真っ赤にして反論しているのを遮り、アリサは声をあげて笑った。

「どうしてそう考えたんですか……?」

あたしがスバルのことを好きだって……」

「だって、あんた自分の言ったことを思い返してみなさいよ。」

最初は確かに成り行きでコンビを組むことになったかもしれない。けど、今のあんたはさつき言った程度にはあいつのことは見ているってことですよ?」

アリサの言葉を聞いたティアナは先ほど口にした言葉を思い出し、また顔を紅く染めた。

その向こうでスバルは500mLのコーラのペットボトルをはやてに渡され「一気、一気!」と囃し立てられていた。

「それにね、その関係がいつまでも続くわけじゃない。」

現に、私たちは別々の道どころかまったく別の世界に分かれちゃってる。

今はいいかもしれないけど、いつかはどうかにかしいといけないわよ、自分の気持ちを」

「……アリサさんは、どうしてあたしにそんなことを……?」

アリサの言うことを聞いたティアナはその言葉を送った理由を尋ねる。

そして、その向こう側でははやてから渡されたコーラを一気飲みしていたスバルがコーラの噴水を作っていた。

「んー、昔の私にそっくりだから、かな？」

私もね、昔は自分の考えを素直に言えるような性格じゃなかったの。

どこか捻くれた言い方というか、素直には認めなかった。

まあ、今私にいい人はいないんだけどね。

そういうのってなんか嫌じゃない？」

「……」

「ま、悩みなさい。

悩むのも若者の特権よ」

「アリサさん、その言葉は年増に片足突っ込む前兆だっって言いますよ？」

「む、言うじゃない。

言つとくけど、これでも私はミス・キャンパスになるほどよ。

探そうと思えば探せるんだから！」

「じゃあ、またね」と言っただけでアリサはまた別のところに歩いて行った。

その後ろ姿をティアナはただ見つめるだけだった。

会場に大きく聞こえるスバルの咳き込む声と、はやての笑い声、ヴィータの怒鳴り声も今の彼女の耳には入らなかった。

その後、晩御飯の片づけを終えた機動六課＋αはひとまず集まっていた。

「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂済ませとこか」

はやてのその言葉に女性陣から歓声が上がった。

しかし、此処で一つの問題が起こった。

アリサがはやてに告げたことは、このコテージには風呂が無いということだった。

残りの選択肢は近くにある湖の水を浴びることだが、未だに夜は肌

寒いこの季節に水浴びは勘弁ということだった。

「そうすると……」

「やっぱり」

「あそこですかね？」

「あそこでしょう」

すると、バーベキュー大会にも参加していた自称お姉ちゃんズのエイミー・ハラオウン、フェイトの使い魔であるアルフ、なのはの姉の美由紀の三人になのはたちの親友である月村すずかと機動六課隊長陣とアリサが話し合い、一つの結論を出していた。

その様子を見ていたフォワード新人組は地理などはサツパリなので、蚊帳の外の状態だった。

「さて。機動六課一同。着替えを準備して、銭湯準備っ！これより、市内のスーパ―銭湯に向かいます」

「スーパ―……」

「セントウ……？」

聞いたことのない言葉に首を傾げるフォワード四人になのはが簡単に説明すると、ティアナとキャロが食いついた。

こと男性の少ないこの環境で、水浴びでも構わないと思っていたスバルとエリオは女性陣の言葉に口を出すことができなかった。

「は〜い。いらっしやいませ〜。海鳴スパラクーアへようこ——団体様ですかあ〜？」

「えつとお……大人12人、子供4人です」

「エリオと、キャロと……」

「わたしとアルフですっ」

「あの、ヴィータ副隊長は……」

「あたしは大人だ」

場所を移し、スーパ―銭湯のロビーで受付を済ませる機動六課＋αの大所帯。

時間が中途半端だったのか、その日銭湯には一人も他には客がいなかった。

「広いお風呂だつて。楽しみだね？エリオくんっ。」

「あ、うん。そうだね。」

「ティアナさん達と一緒に楽しんできて」

「……………えっ？エリオくんは？」

「えっ!？」

「ぼ、僕は、その、一応、男の子だし…………」

「うん……………あ、でもほらっ。あれ見て？」

「キャロが指差した先には、入浴施設の利用規定。」

「そして、そこに書かれている一つの文。」

※女湯への男児入浴は、11歳以下のお子様のみでお願いします。

「エリオは10歳。この利用規定によれば、女湯への入浴は可能である。」

その文章を見たエリオは目に見えるほどに狼狽した。

他の女性が嫌がるだろうとキャロを説得するが、その頼みの綱である大人たちが面白がつて許可したのでエリオは焦りながらも最終手段に出た。

「いや、あの!」

「僕がそっち行くとスバルさんが一人になっちゃいますし!!」

「うん？」

「別に俺は一人でもいいけど？」

「ほら、スバルもこういつてることだし」

「スバルさんが一人だと何するかわかりませんか？」

『……………』↑キャロを除く女性陣営

「いや、なんで…………？」

と勝手に静まり返った風呂場の入口にスバルの声が寂しく響いた。

結局、エリオはスバルとともに男湯に入ることとなった。

だが、その前にエリオはスバルからお仕置きとしてティアナ直伝のコメカミクラツチャーを喰らってしまいがつたりとしていた。

その後、スバルとエリオは服を脱ぎ、タオルを腰に巻き付けると、その時彼らの耳にドアが開く音と聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「は〜い。どうぞ」

「ありがとうございます」

「……は？」

あまりにも予想外すぎる声に二人して振り返る。

そこにはタオルで身を包んだキャロがいた。

「エリオ君！スバルさん！」

フリーズしていたスバルがその声を聴いて再起動したが、エリオは未だにパニックに陥っていた。

「キャ、キャキャキャキャロっ、キャロ!？」

「？」

「ふ、ふふっ、服、服っ！」

「うん。うん。女性用更衣室の方で脱いできたよ？エヘッ。だからほら、タオルを——」

「前を開こうとしない。

はしたないぞ」

慌てまくって使い物にならないエリオに代わって、いきなりタオルの前を開こうとしたキャロの手をスバルが止める。

流星に他の客がないとはいえ男湯でその行為をするのはどうか、フェイトさんの教育はどうなってるのかという疑問がスバルの頭をよぎった。

「あ、えへへ、ごめんなさい」

「それで？こっちは男湯だけど、どうして入ってこれた？」

「女の子も、11歳以下は男性用の方に入って良いみたいなんです。注意書きの方にも書いてありました」

「そう……か」

盲点だったとスバルは頭を抱えてしまう。

エリオが女湯めちうに行くのがOKなら逆もまた然り。

当たり前のことを考えていなかったスバルは一応フェイトに念話

で連絡を入れておく。

(フェイトさん、スバルですけど)

(ん？ どうしたの？)

(後でエリキャロの教育のことでお話がありますので、逃げないでくださいね)

(え……、スバル？)

なんか雰囲気……)

スバルはそれだけ伝えるとフェイトからの念話を切つてため息を吐く。

すでにキャロはエリオを引っ張り風呂の入口まで歩いて行つていた。

「スバルきーん！」

早くいきましよう！」

「あゝ、ハイハイ。

今行くよ」

女の子のバイタリテイ溢れる様子に感心しつつも10歳の子供二人でいつまでもおらせるわけにはいかないとスバルは今日二度目のため息を吐きながら風呂場へと向かっていった。

第十二話

「おお〜」

「結構デカいな」

風呂場に足を踏み入れたスバルたち三人は目の前に広がる景色に目を奪われていた。

普段は六課の隊舎にあるシャワールームか風呂桶が一つしかない風呂場を見慣れていた三人は銭湯というものに見入っていた。

「さて、風呂に入る前にやることがある」

「やること」

「ですか？」

スバルの言葉に二人は首を傾げる。

「それは……体をきれいにすることだ!!」

というわけで、しっかりと綺麗にしてから入るんだぞ。

それがこの国での公衆浴場での礼儀だそうだ」

「はい！」

その後、エリオの髪を洗い終えたスバルは身体を先に洗い終えたキヤロを座らせ彼女の髪を洗っていた。

「スバルさん、なんか髪洗うのうまいですね」

「まあな、小さいときに姉貴に無理やり風呂に入れられたときに洗わされたからな。」

自然にうまくなったんだろ」

シャンプーハットを付けたキヤロがスバルに尋ねる。

スバルは彼女の髪を傷つけないように、されど洗い残しがないようにしっかりと洗いながら答えた。

「スバルさんのお姉さんも、局員なんですよね？」

「ああ、俺の二つ上で今は陸曹だ。」

親父の108部隊にいるから、もしかすると会うこともあるかな」

先に髪を洗い終え、身体を洗っていたエリオが思い出したように口

にしたことに対して、スバルは軽く返事をする。

一通り洗い終わったスバルはキャロに目を閉じるように言うと、頭の上から温めのお湯をかけ、泡を洗い流した。

「よし、お前らは先に入っていいぞ。」

身体冷やして風邪ひかれたら俺がフエイトさんに怒られる」

「あの、スバルさん」

「私たちが背中洗ってもいいですか……？」

まさかのエリオとキャロからの提案にスバルは微笑みながら了承の意を示した。

「なら、頼むかな。」

冷えてきたらすぐに言えよ？」

「はい！」

スバルの言葉に元気よく返事した二人はさっそくタオルに石鹸をつけ、彼の背中をタオルで擦りはじめる。

その背中を見て、エリオがポツリと声を漏らした。

「スバルさんの背中、なんか大きいですね……」

「……そうか？」

「なんとなくですけど、なんか安心できるというか……」

「あ、私もそう思います……」。

年上のお兄さんや、お父さんがいればこんな風なのかな……って」
キャロのお父さん発言にスバルは苦笑する。

「そうは言うけどな、俺だってお前らより五年早く生まれたただけだつて。」

エリオだつてそのうちこうなるぞ」

スバルは背中から少し痛いくらいの感覚を感じながら言葉をつづける。

「そうだな、確かに俺も似たような経験はあるな。」

親父と一緒に風呂に入ったときとか特にな。

俺の親父つて魔力は持たないんだけど、なんかデカいんだよな……」

「あ、あの……スバルさん」

「ん、なんだ？」

キャロの恥ずかしがるような声にスバルが反応すると、キャロは顔を少し紅めながら口を開いた。

「一度だけ、お兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

「……ハハッ。」

いいぞ、ほら」

スバルの許可をもらったキャロは一度息を吸い、その言葉を口にした。

「お、お兄ちゃん……」

「……ッ！」

「スバルさん？」

「な、なんでもないぞ。」

なんでもない……」

キャロの恥ずかしがる声とともに発せられたお兄ちゃんという単語に、スバルは鼻の奥から情熱があふれ出すのを感じた。

すぐに鼻を手で押さえ、それが出てくるのを間一髪防いだ。

その様子を見ていたエリオは不思議に思い、尋ねたがスバルの返答に首を傾げながらその話題を終えた。

「キャロ、今度ティアナにも言っちゃれ。」

お姉ちゃんってな。」

たぶんあいつ顔真っ赤にするから」

「は、はい！」

「エリオ、お前もだ」

「ええ!？」

「というか、お前らフェイトさんのこと普段なんて呼んでるんだ？」

スバルの質問に二人は互いの顔を見て、すぐに答えた。

「フェイトさんです」

「お前ら、まずフェイトさんをお母さんって呼んでやれよ……」

後日、機動六課隊舎にて、鼻血を出して倒れている金髪隊長と顔を真っ赤にしているオレンジツンデレ少女つが見られたようだ。

「「ふい〜」」

風呂に入った途端、三人の顔はこれまでにないほどにしまりのないものになっていった。

何気に一日中街中を歩き回った三人。

普段訓練をしているとはいえ、歩きなれない別世界の町ということ
で身体にも疲労がたまっていた。

それが風呂に入ることですっきりと抜けていくのを感じていた三人
人だった。

「あの、スバルさんは転移に弱いんですか？」

「ん〜？」

ああ、あれね」

ゆったりと湯船に浸かっていたキャロがスバルに尋ねる。

この世界に来た時のスバルの青い顔色を思い出し、エリオもまた興味
深そうにその話に耳を傾けた。

「転移酔いする人ってなかなかいないですし、スバルさんの場合、酔い
というには少し酷かったですよね」

「まあな、ちよつとした原因があるんだよ」

「原因ですか……？」

スバルは少し遠い目をしながら口を開く。

「俺もさ、昔は転移装置使っても大丈夫だったんだよ。

けど、ある日を境に……な」

そこでスバルは一度お湯を手で掬い顔に掛ける。

まるで気を引き締めるかのように。

「お前らも知ってるだろ？」

新暦71年の臨海空港の火災のこと」

「あ、あれですか」

「はい、うっすらとですけど」

「俺さ、あの現場にいたんだよ」

スバルの言葉に二人は驚きを隠せなかった。

「それも火の勢いが一番活発なところだな。」

その時はなのはさんに助けられて間一髪だったんだ」

「それと転移酔いに何の関係が……？」

「その時、俺は姉貴と二人で管理局の祭りに行く予定だったんだ。」

「けどその時姉貴とはぐれて、迷子になって、転移装置に乗り込んだら、次の瞬間周りは火の海。」

それからしばらくは、転移装置を使った転移はできなかった。

転移装置見るだけで吐き気がしてな、そりやもう酷かったよ」

今は我慢できるほどまで回復したけどな、とスバルはそういつて話を打ち切った。

だが、エリオとキャロの纏う空気が少し暗くなってしまったのを感じたスバルはすぐに話を切り出す。

「よし、二人とも今度は別の風呂に行こうか」

※ここからは音声のみでお送りいたします。

「泡ぶろだと」

「空気を下から出してるんですかね？」

「入ってみればわかるさ」

「何か不思議な感じですね」

「電気風呂……？」

「面白そうだな」

「「あ” あくくく」」

「これ、六課に帰ってもできるな。」

エリオ、今度一緒に風呂入ったときやってくれないか？」

「僕は電池じゃありませんよ……」

「流水風呂……？」

「なんか……」

「流れてますね……」

「『流されるーッ!?!』」

途中おかしなところがあつたが、先ほどまでの暗い雰囲気はなくなっていた。

その後、一通り風呂を楽しんだ三人は先にキャロを上げらせ、少し遅れて男二人一緒に上がった。

そのころ、女湯ではティアナが尋問を受けていた。

「なあ、ティアナ、どうかしたん……?」

「い、いきなりなんですか、みなさん……?」

「さつきからティアナの様子がちよつと変だったからね」

「そうだね、だいたいアリサちゃんと話し終えたあたりからだっかな……?」

ティアナは魔法少女(?)組に囲まれ逃げ道を塞がれていた。

そして、話題に上がるのは彼女が今もつとも気にしていることだった。

「な、なんでもありませんよ……?」

「うそや、声がひっくり返つとるで?」

「何か悩みがあるなら聞こうか?」

今は上司としてじゃなくて、人生の先輩として聞けるから、ね?」
フェイトの言葉にティアナは顔を引きつらせる。

今の彼女たちというか、はやてとフェイトの目は飢えた獣のそれと同じだった。

何がと言わないが、彼女たちは欲していた。

そんな膠着状態の中、はやてが一つの爆弾を落とした。

「わかった、スバルのことやろ？」

「ッ!？」

はやての落とした爆弾は原爆レベルだった。

スバルという言葉聞いたティアナの顔は一気に赤くなった。

「あ、当たり？」

「スバルと何かあったの？」

二人からの言葉にいい詰まらせるティアナを見たのははさすがに放っておけなくなつたのか、話に割り込んだ。

「はい、二人ともそこまで。」

気になるのはわかるけど、これ以上はダメだよ？

聞きたいなら、ティアナが言いたくなつてから」

「ええ〜」

「文句言わない!」

(ほら、ティアナ、今のうちに)

(あ、ありがとうございます)

(いいよ、大事な教え子が困ってるんだもの。

だけど、本当に悩んでいるなら誰かに相談した方がいいからね?)

(はい、考えておきます)

なのはが作り出した隙を逃さずに、ティアナはその場を後にした。

「いいか、エリオ、キャロ」

「はい、スバルさん」

風呂から上がった三人は売店の自動販売機の前に立っていた。

その手にはコーヒー牛乳の入った牛乳ビンがあった。

「まずは蓋を開ける!」

「はい!」

備え付けられた蓋を取る棒を使いポンツと音を立てて外される。

「次、左手を腰に当てる!」

「はい!」

スバルの言うことに合わせて二人は腰に左手を当てる。

「そして一気にのどに流し込む！」

その言葉を合図に三人は同時に同じポーズでコーヒー牛乳を口に含み、一気に喉に流し込んだ。

「「プハア〜」」

「どうだ、これが風呂上りのコーヒー牛乳の飲み方だ」

「なんというか、不思議な感じですね。」

どこにでも売ってるものなのに、此処で飲むのは格別というか……」

「すごく、おいしかったです！」

「そうだろう、そうだろう。」

「これはこの国の銭湯での伝統だそうだ」

顔を輝かせているちびっこ二人組に得意げにスバルが話していると、背後から彼に声が掛けられた。

「あんたら、何してんの？」

スバルが振り返るとそこには髪を下ろしたティアナが呆れた表情で立っていた。

風呂上がりだから、彼女の顔は少し赤らんでいた。（理由はまた別なのだが、スバルが知ることはなかった）

「見てわからないのか？」

「見てわからないから聞いているの」

「銭湯での牛乳の飲み方の授業だ。」

ちなみに、コーヒー牛乳とイチゴ牛乳も可。

「お前もやるか？」

「やらないわよ」

ティアナはスバルが差し出した牛乳の入った瓶を受け取り、近くに置いてあったソファに座り牛乳を一息に飲み干した。

「あ、みんな〜！」

そんなとき、彼らに声をかけながら駆け寄ってくる人がいた。

機動六課医務室室長のシャマルだ。

「シャマル先生、どうしたんですか？」

「うん、町に設置したサーチャーに微弱な反応が出たの。」

はやてちゃんたちも今急いで準備してるから、みんなは先に反応のあった場所に向かってちょうだい」

シャマルの言葉を聞いた四人はすぐに真剣な表情をして、手に持ったピンを回収ボックスに置いた。

「ロストロギアの詳細は？」

「向こうに向かう途中に話すわ。」

ひとまず現場に向かって。

ポイントはクロスミラーズに送っておいたから」

「了解！」

その後、シャマルから知らされたポイントへ向かった四人だったが、彼らは目の前に広がる光景に口をあんぐりと開いたまま固まってしまった。

ポヨヨーン、ポヨヨーン。

「なあ、あれがロストロギア？」

「え、ええ。」

シャマル先生から送られたポイントは確かにここだけ……」

彼らのいる場所……銭湯からそう離れていない川の河川敷には彼らの目的であるロストロギアがあたりに散らばっていた。

「あれって……」

「スライム、ですよね……？」

その姿を見たエリオとキャロが思ったことを口にした。

そう、対象の姿は何とも言えない青色の粘着質な物体、有体に言えばスライムであった。

「あれ、どうすればいいの？」

「いや、とりあえず様子見だな。」

エリオ、頼む。

危険性はないらしいけど、一応気を付けろよ……」

「はい！」

エリオはストラダーを構え、スライム、もといロストロギアに切りかかった。

だが、その刃がスライムを切り裂くことはなかった。

「弾かれた!?!」

「物理攻撃は無効か。」

だとすると……」

「あたしの出番……ってことね。」

キャロ、ブーストお願い」

「はい！」

ティアナにキャロがブーストを掛ける間にティアナはスバルとエリオに指示を出す。

「スバルとエリオはこいつらをあまり広げさせないで。」

少しの間でいいわ」

「OK、任せろ！」

「わかりました！」

指示を聞いたスバルとエリオは広がり、群れを離れようとするスライムを誘導し、一か所に集める。

ティアナはそのスライムの群れをじつと観察していた。

そして。

「見つけた、クロスミラーージュ」

《Sealing Shoot》

「シュート！」

ティアナの狙いに捉えられたスライムは、撃ち出された弾丸に貫かれた。

弾丸に込められた封印魔法が直後に発動し、周囲にいた他のスライムも消えていき、最後には封印されたロストロギアの核のみがその場に残った。

「封印完了。」

シャマル先生、終わりました」

(はい、すぐに隊長たちがそちらに着くので、その場で待機しておい

てくださいーい)

「すごいな、なんで一発で仕留められたんだ？」

「ほかのスライムも核の反応出していたのに……」

「シャマルとの通信を終えた後、ティアナにスバルとエリオが疑問をぶつけてきた。

事前情報で、今回のロストログアは危機を感じたとき、分身体を作り出し本物は離脱するということを聞いていた二人は一発で核を持った本物を見抜いたことを疑問に思っていたのだ。

「簡単よ、ほかのと動きが違うのを見つけただけ。

偽物は周りからある一点を隠そうと派手に動き回って、その場所にいるのは周りの様子をせわしなく見回してたから」

「なるほど……」。

「やっぱりお前すごいな。」

「よくもまあそんなことを」

「——ッ、フン！」

当然よ、このぐらいできないと執務官になろうとしている身としてはおかしいわよ」

スバルの言葉を聞いたティアナは顔を紅くしそっぽを向きながらそう告げた。

その後、遅れて到着した隊長陣からほめられさらに顔を紅くしたツンデレ少女が一人いたそうだ。

第十三話

第97管理外世界『地球』への出張任務を終えた数日後、スバルは首都クラナガンのとある施設にいた。

その施設のロビーのソファに座っている彼に声をかけてくる人物がいた。

「すまないね、スバル君。」

「待たせてしまったかな？」

「いえ、俺も来てすぐでしたから」

スバルは自分に声をかけてきたキツネ目に眼鏡をかけた白髪の人にそう答える。

「うん、ならさっそく始めようじゃないか。」

「どこか気になるところがあつたようだけど……？」

「あ、そのことで少し詳しく話したいと思うんですけど、時間は大丈夫ですか？」

「うん、僕の時間は大丈夫。」

「やらないといけないことはさっき全部部下終に押し付けわてきたからね」

「なんか変な副音声が聞こえてきたんですけど……。」

「大丈夫なんですか、サカキ博士？」

サカキ博士、と呼ばれた男は笑みを浮かべながら大丈夫大丈夫と答え、その歩みを進めていった。

スバルは大きなため息を吐きながらここに来るまでのことを思い出していた。

「え、検査？」

出張任務から帰ってきた三日後、スバルはなののもとに来ていた。

「はい。」

どうも最近身体の調子がおかしくて……。

なんか違和感があるので、一応」

「そっか、なら許可します。

君の場合はその違和感がどうなるかわからないからね。

先生にしつかり見てきてもらうこと。

わかった?」

「はい、わかりました」

スバルの返事を聞いたのはは頷きながらももう一度スバルに尋ねる。

「本当に、身体のどこがおかしいわけじゃないんだよね……?」

「別にどこがおかしくなったわけじゃないですって。

それに何かあったらすぐに言いますよ」

なのははいつまでも心配そうな顔で彼を見ていた。

「どうも右腕と左足にかかる負担が大きくなってるね。

訓練メニューとか見せてもらえるかな?」

「マツハキヤリバー」

『all right』

サカキはマツハキヤリバーから端末に送られた情報を眺め、一つ大きく息を吐いた。

「ありがとう。」

うん、君の訓練官は優秀だね。

ちゃんと君の限界を理解して、決してそれを超えない訓練量を組んでる。

それに君の違和感はずん反射に身体が追い付いていないからね」

「反射に身体が……?」

「そう。」

前の所属の災害担当では決して行われない量の訓練メニュー。それが君の反射を鍛え上げたと言いがない。

つまり、君の成長に身体が追い付かなかっただけだね」
サカキはそう告げると眼鏡を指で押し上げスバルに問う。

「さて、どうする？」

このままでもいつかは身体も成長してその違和感はなくなるけど？」

「調整する方向でお願いします」

「即答だね。」

「だけど、了解したよ。」

「それじゃ、あとは任せてくれ」

「はい、よろしくお願いします」

場所は変わってとある辺境の研究施設。

そこにある一室に数人の男女が集まっていた。

「ドクター、今日はなんですか？」

「私、Ⅲ型改の調整で忙しいんですけどお？」

「まあまあ、落ち着き給え。」

今日は大事な話があって皆を集めたんだ」

部屋の中央に置かれた大きな机に座った男——ジェイル・スカリエツティは手を組み肘を机に乗せた。

所謂ゲンドウのポーズである。

「ドクター、なんですかそのポーズは。」

今はガジェットの量産と後期型の妹たちの調整に忙しいのですから手短にお願いします」

彼のすぐ隣に座るウーノから指摘され、スカリエツティは頷き話し始めた。

「先日、この研究所からあるものが紛失した」

「あるモノ?」

スカリエツティの言葉に三番——トーレが反応する。

「ああ、と言っても機密とは言えないものだがね。」

だが、それがないおかげで私の研究の進行度が下がってしまった」

「ドクターの研究の進行度ってそんなに高くもなかった気が……」

「クアットロ、それは言わない約束だ」

その言葉に四番、五番——クアットロとチンクは小さな声で言い合う。

「前置きが長すぎます。」

結論を」

「うん、私が楽しみにしてたスーパーカップ（バナラ味）がいつの間にかなくなっていた。」

それをだれが食べたのか、それをここで明らかにしたい。

食べた者は手を挙げなさい、お父さん怒らないから」

刹那、部屋の空気が死んだ。

直後、チンクは隣にいたトーレの腕をつかみ、トーレは自身の特殊能力『ライドインパルス』を使用し部屋から離脱。

クアットロも同じく固有武装『シルバークープ』を使い身を隠し、静かに部屋から離脱。

その様子を見て首を傾げたスカリエツティはいつの間にか後ろにいたウーノに尋ねる。

「なあ、ウーノ。」

なんでみんなこの部屋から出ていったのかな?」

その言葉の直後、彼の頭はウーノに驚掴みにされていた。

女性と言えど、戦闘機人、しかもここ最近の激務で疲労とイライラの募った彼女の力は200%の力を出していた。

その力で繰り返し出されるアイアンクローは彼の耳に自身の頭蓋が軋む音を届けた。

「あなたは、今が忙しい時期だということを理解しながらも、そんな理由で作業を中断させ私たちを呼んだのですか?」

「そんな理由とは何だ、そんな理由とは！」

「アイスなど、買えば済む話でしょう！」

なぜこう、よりもよって忙しいときに集めるのですか!?

私の胃を破壊したいのですか、ドクターは!?!」

「いや、あのウーノ？」

とにかく頭を離してくれないかな……?」

先ほどから頭から聞こえちゃいけない音ががが……」

「問答無用！」

その後、その部屋から何かが砕ける音と一人の男の悲鳴が轟いた。

「なんだろう、なんかとてつもない罪悪感と恐怖が同時に……」

先日のリニアレールに向かう際に特務一課の局員に損傷を受け、その修理のために部屋に集合していなかった

六番——セインは背筋を走った感覚に恐れを抱いていた。

「ま、いいか！」

さてと、今日のアイスは何かな。

ドクターは一週間おきにアイス変えるからな。

楽しみだなあ。」

そんなことを彼女が呟いていたことを聞いている者はここにはいなかった。

第十四話

「ほな改めて。ここまでの流れと、今日の任務のおさらいや。」

これまで謎やったガジェットドローンの制作者。及びレリックの収集者は現状ではこの男——違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者、ジエイル・スカリエツィの線を中心に捜査を進めてる」
はやての言葉とともにモニターに白衣を着た男が映し出される。

紫の髪に金色の瞳。

そして、この男の出している雰囲気はスバルは敏感に感じ取り、さらにその雰囲気と似たものを持っている男を思い出していた。

(あ、この男、サカキ博士と同類だ)

「こつちの捜査は私が中心になって進めるけど、一応みんなも覚えておいてね」

「はい！」

「で、今回の任務の会場はここ。」

ホテル・アグスタ

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。」

それが今日のお仕事ね」

今回、機動六課のフォワード部隊はオークション会場の護衛に駆り出されていた。

その理由は、開かれるオークションに出され取引されるものがロスログアだからだ。

そのロスログアに反応してガジェットが襲撃してくるかもしれないということで六課に白羽の矢が立ったのだった。

すでに各分隊の副隊長であるヴィータとシグナムが先行していた。

「私達は内部の警備に回るから、皆は副隊長達の指示に従ってね」

「はい！」

(しかし、今日は八神部隊長の守護騎士団全員集合か……)

(あんだ、確か結構詳しくかったわよね?)

(親父や姉貴に聞いた程度の話だけだな)

ホテルアグスタでヴィータから指示を受けたスバルとティアナはそれぞれの持ち場で周囲の警戒をしていた。

だが、さすがにそれだけで時間を潰すのは難しく、二人は念話で世間話をしていた。

その話の内容は、はやてのデバイスは魔導書型で『夜天の書』という名前で、ヴォルケンリッター守護騎士は彼女固有の特別戦力で、全員がそろえば無敵だということだけだった。

(まあ、隊長達の詳しい出自とか能力の詳細は特秘次項だから、俺も詳しくは知らないけどな)

(レアスキル持ちの人はみんなそうよね)

(?ティアナ、何か気になることあるのか?)

(……別に、何も無いわよ)

(そうか、じゃあまた後でな)

そうして彼からの念話がプツリと切れた後も彼女の胸の奥底には一つの疑問が残っていた。

(以前スバルが言ってたことだけど……)

普通では考えられないほどの戦力を保有している機動六課。

あの人がどんな裏技を使ったのか知らないけれど、隊長は全員オーバースランク、副隊長でもニアスランク。

他の隊員達だって、前線から管制官まで、全員未来のエリート達。それに比べて、以前よりは強くなったとはいえ、此処にいたらあた

し霞んじやうな……)

ティアナは大きいため息を吐いた。

「ため息吐くと幸せが逃げるっていうぞ?」

そこにヴァイスがお茶を持って現れた。

「ヴァイス陸曹、どうしてここに?」

「差し入れだ。」

お前らがいないとへりは俺とストームライダーだけだからな。

いつもの騒がしい連中がいないと静かで寂しいんだよ」

ヴァイスは素晴らしいながら手に持った紙コップをティアナに渡す。

ティアナはそれを礼を言いながら受け取る。

「ヴァイスさん、一つ聞いていいですか？」

「ん？なんだ？」

唐突にティアナがヴァイスに尋ねる。

「周りが優秀で、自分だけ少し劣るとき、ヴァイスさんならどうします？」

「なんだその質問」

ティアナの問いにヴァイスは呆れた表情で彼女を見る。

しかし彼女の真剣な顔つきを見てヴァイスは一つため息を吐き、渋々答える。

「たぶんスバルの野郎が言ってるかもしれないが、周りは周りだ。

俺は俺のできることを精一杯やればいい。

それで誰かを救えるんなら俺はそれで十分だ。

お前は違うのか？」

「自分のやれること……」

「あと、周りが優秀ってのはいいことじゃねえか。

自分のできないことを周りのやつらに任せちまえばいい。

結果が大事だからな、その理屈ならどんな手を使ってもやり遂げるってのが一番かもしれないが」

ヴァイスはそう告げると紙コップに入ったコーヒーを飲み干し、

「そろそろ六課に戻らねえとな、警備任務頑張れよ」と言っただけで彼女の元から去っていった。

「自分のできることでできないこと……」

周りを頼る……か」

ティアナはヴァイスに言われたことを口ずさみ、かつてスバルに言われたことを思い出していた。

そして、一度頬を思いつきり叩いた。

その顔は何か吹っ切れた表情を浮かべていた。

「なんだ、簡単なことだったんじゃない。」

スバルの言いたかったことってこのことだったのか」
自分の今やれることを精一杯やる。

スバルがかつて彼女に向かって言い放った言葉。

その真意をようやく理解した彼女はすぐにスバルに念話を繋げた。

(スバル、少しいい?)

(?なんだ?)

(あんた、前にさあたしに『自分が今やれることを』って言葉、覚えてる?)

(ああ、六課に来る前の話か。

当たり前だろ?)

お前に言っただけで自分が忘れてちや世話ないからな)

(うん、その言葉の意味、やっと理解できたわ。

ありがとう)

(……どういたしまして?)

なぜか疑問形の彼のセリフに吹き出してしまうティアナ。

そんな彼女にスバルは不満気に口を開いた(念話だが)。

(別に感謝されるつもりで言ったわけじゃないんだが……)

(あんたの言葉のおかげで、悩みの一つがなくなった。

そのお礼よ)

(そうかい)

その後、二人の間に穏やかな雰囲気は満たされていた。

だが、彼らのその空気を引き裂くように通信が入る。

『来ましたっ! ガジェットドローン陸戦I型、機影30、35……』

『陸戦III型、機影2、3、4!』

(スバル!)

(今そっちに向かっている!)

通信が入ったことによつて彼らの感覚が日常から戦闘のそれへと切り替わる。

直後、彼女の後方のテラスからスバルが飛び降りてくる。

『前線各員へ。状況は広域防戦です。ロングアーチ1の総合管制と合わせて、私、シヤマルが現場指揮を行ないます』

「スターズF、了解っ！」

『ライトニングF、了解！』

「シャマル先生、前線の様子を見たいんで映像回してもらえますか！」
『わかったわ、クロスミラーージュに回線をつなぐわね』

シャマルからの通信が切れると同時にクロスミラーージュから映像が映し出される。

映像の中ではすでに前線での副隊長の戦いっぷりが映し出されていた。

第十五話

ガジェットをヴィータのハンマーが叩き潰し、シグナムの剣が切り裂く。

モニターの中に映るそれは戦闘ではなく蹂躪だった。

「うお、副隊長たち、すげえな……」

「あれでリミッター付き？」

ベルカ式でリミッターはあまり足かせにならないと言ってもあれは……」

モニターに映る蹂躪劇を見てスバルとティアナは頬を引きつらせる。

『ケリユケイオンに反応っ！』

誰かが召喚魔法を使ってます！』

『クラールヴェイントにも反応。』

でも、この魔力反応は——』

『大きい、何コレ!?!』

モニターが切り替わり召喚魔法の魔力反応が映し出される。

そこに映った結果は、『推定Aランク』。

少なくともフォワード四人以上の魔導師があちら側にいるということになる。

『スターズF、ライトニングFと合流して、防衛ラインをお願い!』

「はいっ!」

スターズの二人はシャマルからの指示に従い、ライトニングの二人のいる正面玄関へと向かう。

「キャロ、召喚士は他になにかしてきてるか?」

「今のところは何も……でも、きつと何かしてくると思います」

「ならスバルとエリオがトップで、センターは私。」

キャロ、フルバックよろしくね」

「了解です」

「わかりました」

「背中は任せるぞ?」

「誰にモノ言ってるのよ。」

来るわよ!!」

その直後、目の前に魔法陣が展開される。

そこからガジェットが現れる。

Ⅲ型Ⅰ機とⅠ型が10機だ。

「あれって、召喚魔方阵!」

「召喚魔法って宅配使みたいに使えるんだ……」

「……優れた召喚士は、転送のエキスパートでもあるんです」

「スバル、今はそういったボケはいらないから」

スバルへの突っ込みもそこそこにしてティアナはクロスミラー
ジユを構える。

「召喚魔導師がいるってことは援軍があるかもしれない。」

そこは注意していくわよ!!」

「「おうッ!」」

「これでッ!!」

最後のⅠ型をヴィータのハンマーが打ち砕いた。

「こっちは終わったぞ?」

そっちはどうだ」

『新人達は何とかやってるわ。』

でもちよつと余裕がないみたい。

ヴィータちゃんはこっちに戻ってきてくれる?」

「おう、わかった」

シヤマルとの通信を切ったヴィータはハンマー……デバイスである
グラーフアイゼンを肩に担ぐ。

「というわけだ、あたしは新人達のところに行く。

さつきからガジェットの動きがよくなってやがるからな……。

あいつらだけじゃやばいかもしれない

「ここは任せたぞ?」

「ああ、任された、と言いたいところだが……」

「ここから離れたところから一つ、大きな魔力の動きを感じた。

ホテルとは別方向に向かっていているが……」

ヴィータの言葉にシグナムとザフィーラが答える。

その時、彼らの主から連絡が入った。

『そっちは追う必要はあらへんよ』

「主、どういうことですか？」

『実はこの任務の警備には六課の他にも特務一課の人が秘密裏についてったんやと。』

オークション前にレジアス中将から連絡があつて、一課の第一目標が現れる可能性があるからくつてな。

で、今一課の人から連絡があつて、今移動しとる方は一課に任せてほしいってな。

せやから、シグナムとザフィーラはそこで防衛線を張り続けとつてな』

「承知しました。

というわけだ、ヴィータ。

新人達は任せたぞ」

「言われなくても」

シグナムから促されてヴィータはホテルの方へと向かう。

「さて、我々はここで連中を通さないようにするだけだな」

「守りこそ俺の生きがいだ。

一機たりとも通さん」

「このッー！」

一方、ホテルアグスタ正面玄関前ではフォワード四人がティアナの指示によって、動きのよくなったガジェット相手に何とか戦っていた。

「エリオ、もう少し下がって！」

キャロ、スバルにブースト。

スバルはエリオとチェンジ！」

「応っ！」

「わかりました!!」

《Boost Up Acceleration》

ケリユケイオンから補助魔法をかけられたスバルはエリオと入れ替わり前に出る。

その隙を抜けようとしたガジェットをティアナが魔力弾で撃ちぬく。

「デイバインバスターッ！」

《Divine Buster》

スバルの放った砲撃がⅢ型を包み込む。

キャロのブーストによって威力を底上げされた砲撃はそのままⅢ型を爆散させた。

「ティアナさん！」

「ッ！」

戦況を見極めようとしていたティアナの耳にエリオの叫び声が聞こえてくる。

その声のした理由を確かめる前に彼女は自分の直感を信じてその場を飛び退いた。

その直後、彼女のいた場所にガジェットの攻撃が突き刺さった。

「クッ！」

「ストラーダ！」

《Speerschneiden》

体制の崩れたティアナに襲い掛かろうとしたガジェットをエリオが一瞬でその懐に入り込み切り裂いた。

「大丈夫ですか！」

「え、ええ。」

ありがとう、エリオ。

助かったわ」

(だけど、このままじゃ……!)

何とかして数を減らさないと……)

『防衛ライン、もう少し持ち堪えて!』

ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから!』

ティアナが状況の悪さを再認識し、その状況を打破するための作戦を考えているとき、シャマルから通信が入った。

「なら、副隊長が来るまでにある程度の数を減らします。

スバル!」

「了解ッ!」

《Wing Road》

その一言で彼女が何をしようとしているのかを察したスバルはすぐさまガジェットの攪乱に向かう。

「エリオとキヤロはフォローお願い!

あたしとスバルで数を減らす……!!」

「はいっ!」

「クロスミラージュ」

《Load》

クロスミラージュから空薬莢排出された。

そこにある男がいた。

かつて陸にその男ありと言われるほどの男。

彼にかなう者など探せば片手で事足りるほどの男。

その男の名は……

「ゼスト・グランガイツ、二等陸佐」

「……」

「なんだ手前は?!」

かつてのストライカー級魔導師、ゼストは無言で男を見定める。

そんな彼に付き従う小悪魔のような容姿をしたまるで人形のような

な少女、アギトは目の前に立ちふさがる男を睨みつけていた。

彼らは、同行人である『ルーテシア・アルビーノ』が召喚魔法を使った後、その場を捕捉されそうになったため、ルーテシアのみを別の場所へ向かわせ、自分たちは陽動のためにホテル、ルーテシアの双方とも別の方角へと向かっていった。

だが、彼らの目の前に一人の褐色の肌の男が現れたのだった。

「特務一課所属、レイニー・アイオス三等陸尉です」

「特務一課だあ？そんな連中が……って旦那？」

レイニーの言葉に反応し、野次を飛ばそうとしたアギトをゼストが片手で制した。

「特務一課、レジアスの直属が俺に何の用だ」

ゼストはデバイスを握る力を抜かず、レイニーに尋ねる。

「あなたをあの人の元へ連れていきます。」

「あなたと直接話がしたい、と」
「断る。」

「こちらでも聞きたいことがあるが、今はやらねばならないことがある」

「そうですねか……。」

「あなたとは戦いたくはなかったのですが……」

《Set up》

「来るか……。」

「アギトは下がっている」

ゼストは槍を握りしめながら彼女にそう告げた。

「旦那、なんでだよ!？」

（俺たちの目的はあくまでルーテシアの離脱だ。）

あいつの離脱が完了したら、俺たちを呼び出す手はずになってるのを忘れたのか？

「うっ、わかったよ……」

ゼストに諭されたアギトは大人しく彼の後ろに回る。

レイニーが自分のナイフ形のデバイス『ゼブラ』を構える。

それを認識したゼストは手に握った槍型デバイスをレイニーに向

ける。

「武力をもって拘束させていただきます……！」

「悪いが付き合ってもらおうぞ、特務一課……！」

地上本部所属特務一課随一の近接戦闘能力を持つレイニーと、かつてのストライカーがぶつかった。

第十六話

雲一つない青空のもとで、二つの光が交差する。

槍を振りかぶるゼストとそれをナイフで受け流すレイニー。

そのお返しにと、大降りになったゼストの懐に飛び込みナイフの持ち味である手数でゼストに迫る。

だが、その攻撃をゼストは一瞬で引き戻した槍ですべて捌いた。

「槍であの攻撃をツ!？」

「いい戦士だ。」

だが、まだまだだツ!」

「しまった!？」

そして均衡が崩れた。

ゼストの一撃を受け流し損ねたレイニーは大きく後ろへ吹き飛ばされる。

彼が体制を立て直す前にゼストは槍を振りかぶり叩き付けようとする。

「ツ!」

だが、その槍はどこからともなく放たれた魔力弾に弾かられる。

「旦那……ツ!？」

二人の戦闘を少し離れたところから見つめていたアギトは彼のもとに飛び出そうとしたが、そんな彼女にも一発の魔力弾が襲い掛かった。

「クツ……!」

索敵範囲に反応がねえ。

スナイパーか……!」

アギトは魔力弾の飛んできた方向を中心に魔力反応を確かめるが、彼女の索敵範囲内にはその反応はなく、舌打ちをするだけにとどまった。

「バロスか、助かった」

『しつかりしろよ、ここで逃すと中将から愚痴を聞かされちまうぞ』

『それはいやだな。』

仕方ない、援護頼む』

「任された。」

ナイフ使いのレイニーの腕、見せてやれ」

二人が戦っている場所から15km離れた場所で彼はライフル型のデバイスのスコープを覗きながら相棒の援護を行う。

彼の名前はバロス・フレイグ。

特務一課のエーススナイパーであり、一課の中では最年少の前線部隊員だ。

「さて、俺も愚痴を聞かされるのは勘弁だな。

あの人の愚痴は長いから嫌なんだ……。

今日は弟の誕生日なんだ、さっさと終わらせてもらおう」

彼はそう呟き、引き金を引いた。

「スナイパーは厄介だな。

少なくともかなりの距離からアギトを狙えるほどの腕なら……。

来い、アギト！」

「応よー！

ユニゾン・イン!!」

ゼストの呼びかけにアギトは快く答え、キーとなる言葉を叫ぶ。

刹那、アギトはゼストの中に吸い込まれる。

その直後、ゼストの焦げ茶の髪は金色に染め上がり、くすんだ銀色の鎧も鈍い輝きを放つ金に変わった。

「ユニゾンデバイスってマジかよ!？」

六課のやつ以外に現存してたのか!？」

『バーカ、こうなったらお前らに勝ちなんかねえんだよ!!』

やっちまえ、旦那!!」

「……」

自分たちの目的が時間稼ぎということ忘れていた様子のアギトの言葉にゼストは小さくため息をこぼす。

だが、その意識は常に相対する彼らに向けられていた。

現に、今も彼を狙って放たれた魔力弾を紙一重で躲していた。

「ちよ、バロス！」

「あたつてないぞ?！」

『無茶言うな、居場所のばれたスナイパーの弾丸がこっちに意識向けてるやつに当てられるわけないだろうが。』

「当ててほしいならお前がかき回せ!!」

「ああ、もうこの役立たず!!」

レイニーはバロスにヤケクソ気味に叫ぶとゼストへ向かい飛翔した。

「まったく、役立たずとはひどい奴だ。

なあ?」

バロスは自分の^{デバイス}得物に向かって話しかけるが返事はない。当たり前でもある。

彼のデバイスは演算処理に特化し、人工知能を搭載していないタイプ、所謂ストレージデバイスと呼ばれるものだからだ。

「まあ、このままじゃ帰ってからレイニーのやつに怒鳴られるな。

仕方ない、セカンドフォーム」

バロスの声に反応し、彼のデバイスの銃身が二つに割れる。

「^{マギリングコンバーター}魔力変換炉、起動。

魔力収束確認……」

バロスの言葉に合わせるように、別れた銃身の間には紫電が迸る。

彼の背後に置かれた巨大な装置が唸りを上げ、周囲の魔力をかき集める。

そして、銃身もとい、砲身に集められた魔力が送られ臨海寸前まで圧縮された。

「スナイプバスター、行け！」

《Fire》

バロスが引き金を引き、溜めこんだ魔力の奔流が解き放たれた。

「……ッ！」

ゼストと切り結んでいたレイニーにバロスから通信が入った。

『今砲撃撃ったからな、着弾まで3……2……』

「ちよ!?」

カウントダウンを聞いてすぐにレイニーはゼストの槍を足蹴にして彼から距離をとった。

「アギトッ！」

『おう!!』

距離をとったレイニーに迫ろうとしたゼストだったが、彼の長年の経験からくる勘が彼に危険を知らせる。

その感覚に従い、アギトに指示をだし、デバイスだからこそ迫りくる魔力の塊にいち早く気づいていたアギトが障壁を張る。

だが、その障壁に阻まれた砲撃はそのまま彼らを大きく吹き飛ばした。

『後は頼むぞ、こっちは魔力変換炉マギリングコンバーターの冷却待ちだ』

「了解！」

大きく体制を大きく崩したゼストにレイニーが接近する。

だが、それよりも早くゼストの足もとに紫色の魔法陣が浮かび上がった。

『旦那!』

「ああ、こちらの勝ちだ」

「なッ！」

くそ!!」

その魔法陣が何の魔法を行うためのものなのかに気づいたレイニーは飛行速度を上げたが、その手が届く前に彼らの姿はこの場から消え去った。

「……すまん、逃げられた」

『これで中将の愚痴を聞かされるのは確定だな……』

『はあ……』

雲一つない空のもと、二人の男のため息が風に流されていった。

「クロスミラーージュ」

《Load》

ティアナの声とともに、クロスミラーージュから三つの空葉莢が吐き出される。

「砲撃で一掃するわ。」

スバル！」

「了解だ、一丁かましてやれ！」

先行するスバルに一声かけ、ティアナはクロスミラーージュを両手に構える。

《Sight Open》

ティアナの眼前にオレンジ色の照準が現れる。

その中央に二つのカーソルが合わさったとき、彼女は引き金を引いた。

「ターゲットインサイト……！」

ファントムブレイザー、シユートツ!!」

《Phantom Blazer》

直後、二つの閃光がガジェットを飲み込んだ。

ティアナの捉えたガジェットはそのほとんどが砲撃に巻き込まれ、爆散し破片を撒き散らしていった。

「一機抜けた……！」

「任せてください。」

フリード、ブラストフレア！」

その砲撃を運よく抜けることのできたガジェットもフリードの火球に貫かれ四散する。

なれない砲撃魔法を使用した反動で、息を切らしている彼女の視界の中では残りのガジェットがスバルとエリオによって殲滅されている光景だった。

「なんだ、もうほとんど終わってるじゃないか」

「あ、ヴィータ副隊長……」

「おう、大丈夫か？」

その時、空から降りてきたヴィータがその光景を目にして、驚きの声をあげていた。

「ガジェットの粗方は片付いたと思いますけど……」

「おう、あとはあたしたちに任せとけ。」

なれない砲撃魔法であそこまでできたんだ、誇っていいぞ」

ティアナはヴィータの褒め言葉に顔を少しうつむきながら小さく

「はい」と返事をする。

空に浮いていたヴィータは、彼女の顔が嬉しそうに唇が上がっていたことには気づけなかった。

「よし、スバルとエリオはそのままガジェットをスクラップにし続ける！

抜けた奴は気にすんな」

ヴィータはグラーフアイゼンを肩に担ぎ言葉をつづけた。

「あたしが全部片っ端から潰しやる」

その顔を見たスバルは、後に“すごく頼りがいのある笑顔だった。

“と語ることになるが、此処にはそのことを知るものは一人もいなかった。

『すまないな、一課の者を配置したことを事後報告にしてみました』
「いえ、あの時はこちらもいろいろと立て込んでましたから」

オークションの終了後、はやては地上本部にいるレジアスと通信でやり取りをしていた。

『そういつてもらうと助かる。』

それで、そちらの被害はどうなのだ?』

「建物に被害はありません。」

副隊長とフォワードの四人が頑張ってくれたおかげで、正面玄関が少し散らかった程度です」

はやては「ですが……」とつづける。

「どうやら会場の中で密輸されていたロストロギアの一つが紛失したそうです。」

おそろく……」

『スカリエツティの手の者だろうな。』

そちらに関しては六課には責任はないだろう。

ロストロギアの密輸の関係者に連絡をこちらから入れておく』

「……」

『どうした、何か気になることがあるのか?』

レジアスの問いにははやては一度咳払いをして口を開く。

「一つ教えてもらえないでしょうか。」

特務一課の目的というものを。

こちらとしても、自分たちの仕事の場所に不確定要素を持ち込みたくないのです……」

『……そうだな、お前には教えてもいいかもしれないな。』

特務一課の設立目的はある人物の拘束だ』

「ある人物……?」

凶悪犯、ということですか?」

はやての質問にレジアスは首を横に振り否定する。

彼女は一度深いため息を吐き、答えた。

『いや、ある事件のことに対する重要参考人だ。』

名をゼスト・グランガイツ。

陸のストライカー級魔導師であり、私の夫だった者だ』

「……だった?」

レジアスの過去形の話し方に違和感を持ったはやては尋ねる。

「あの、どういうことですか?」

『ゼストはかつてある事件の際に作戦中^M行方不明^Iと認定^Aされた。』

だが、この数年、奴の目撃情報が何件か上がってきてな。
もしかすると、というわけだ』

「……」

『……恐らくは、お前が考えている通りだろう。』

この件には、あの男が絡んでいる可能性が高い』

「ジェイル・スカリエツィ……」

「うん、後片付け終了。」

みんな、お疲れ様」

「ちゃんと帰ったら体休めとけよ。」

明日酷いことになるからな。」

特にティアナ、お前は一度医務室行つとけよ」

戦闘が終わり、なのはとヴィータの監督のもと、ガジェットの残骸の処理などの戦闘跡の修復を行っていたフォワード四人に対して彼女たちは労いの言葉をかけた。

「ああ、そうだ。」

ティアナはこの後時間いいかな？」

「あ、はい」

「うん、じゃあみんなは先にへりに行つてて」

「おう、こっちは任せとけ。」

おら行くぞ」

ヴィータがスバルたちを連れて離れたのを確認したなのはティアナの方を向いた。

「さて、ティアナ。」

あなたに話があります」

「は、はい」

なのはの改めた雰囲気を感じて背筋を伸ばすティアナ。
「なんであの場で砲撃魔法を選択したのかな？」

砲撃は身体に負担のかかる魔法だってわかってるはず。

現に今も身体中が痛むでしょ？」

なのはの言葉の通り、ティアナはただ立っているだけだというのに、彼女の体中の筋肉は悲鳴を上げていた。

「あの時は、ああするのが最適だと考えました。」

クロスファイヤー

誘導弾を使ってガジェットをある程度の数まで減らすにははカートリッジは最低でも四発はロードしないといけません。

でも、今のあたしにはそこまで魔力の運用は不可能です。

三発でやったとしても、必ず打ち漏らしが多く出てしまう。

なら、誘導弾ではなく、狙いをつけて打つだけだと考え、カートリッジを三発使った砲撃を使用しました」

「でも、ガジェットを減らさなくても耐えるだけでよかつたんだよ？」

「ヴィータ副隊長があたしたちの場所に着いた時間を考えると、恐らくガジェットに突破されました。」

あたしは、あの時の判断が間違っているとは思いません」

ティアナの視線を真正面から受け止めたのはは、一度大きく息を吐いた。

「スバルもスバルだけど、ティアナも大概だね……。」

やっぱりコンビ組んでると、思考まで似通るのかな……？？」

「な、あいつと思考が似ているなんてありません!!」

「でも、二人とも見てると、『一撃必殺!』みたいな感じなんだけど?」「うっ!」

なのはの言葉を聞き、否定できないティアナは口ごもった。

「まあ、さっきの戦闘に関しては私からは以上です。」

「これからはあんな無茶はしないように」

「はい……。」

「ご心配おかけしました」

ティアナは少ししよんぼりした表情でなのはに頭を下げる。

そんな彼女の頭の上からある言葉が聞こえてきた。

「はあく、帰ったら訓練メニューの練り直しかなあ。」

砲撃を少しは経験できるようなメニュー作らないと……。」

今日は残業かな」

「……ッ！」

ティアナが顔を上げると、なのはの嬉しそうで、どこか悲しそうな相反する表情で彼女を見ていた。

「あ、ありがとうございます！」

あ、あの、お手伝いします！」

「ダメ、ティアナは明日は一日オールで休み。

無茶すると、取り返しのつかないことになるんだから」

なのはは「ペシッ！」とティアナの額にデコピンを喰らわせ、ヘリポートに向かい歩みを進めた。

指に魔力を纏わせたデコピンで地味痛いモノだったため、ティアナは涙目になり、額を押さえながらなのはの後を追っていった。

第十七話

ホテルアグスタでの任務の二日後。

スバルはクラナガンにある研究施設に来ていた。

恒例の定期検査のためである。

もともと機動六課では大規模な戦闘を行った後はフォワードメンバーを交代で休ませるようになっていた。

そして彼は、スバルの一日フルの休みだということをごどこからか聞きつけたサカキ博士に呼び出されたのだった。

「到着つと」

スバルは六課から乗ってきたバイクを研究所から少し離れたパークキングに止め、かけていたゴーグルを外した。

実はこのバイク、スバルが今までの給料で部品を買って自分で作り上げたもので、然るべき場所で許可をとったものだ。

ちゃんと許可をとっているの、公道を走ることも可能というわけである。

「この間来たと思ったんだけどな。」

まったく、難儀な身体だよ……」

バイクに鍵をかけたあと、スバルは研究所に向かい歩き出した。

「あ……」

「おや、来たようだね」

「久しぶりね、スバル君」

スバルが研究所に入り、目的の場所である検査室のすぐ近くで出会ったのはサカキ博士と、彼の姉であるギンガ・ナカジマの担当であるマリエル・アテンザだった。

「お久しぶりです、マリーさん」

「ホント、二人の検査の日が重なる日って少ないからねえ」

スバルのそばに駆け寄ってきたマリーは彼の身体を触り、一言。

「前に見たときよりも筋肉が増えたというか、密度がすごいことに

なってるね」

「ええ、まあ毎日鍛えられてますから……」

「ああ、なのはちゃん厳しいらしいからね」

スバルは身体中を触られる感触に少しむず痒さを感じながら口を開く。

「それよりも、どうして今日俺が休みだつてわかつたんですか？」

「うん、実は、六課の寮母さんいるでしょ？」

彼女にお願いしていたんだ。

本当は別の日でもよかつたんだけど、君たち二人の休日が重なつてたからね。

それに、君たちに合わせたい人もいるんだ

できればすぐに始めようと思うんだけど……？」

「ああ、そういうことですか……」

はあ……、わかりました。

それじゃ、着替えてきますね」

スバルがマリーと話をしていると、サカキが眼鏡を押し上げながら二人の話に割って入った。

スバルは彼の言葉に首を傾げながらも頷き、すぐそばにある普段から更衣室として使っている部屋のドアノブに手をかけた。

「あ、そういえば……」

そして、スバルがドアノブをひねり、ドアを開けようとしたとき、サカキは何かを思い出したかのように声をあげた。

「ん？」

「え……？」

「ギンガ君が中にいるから気をつけてねって言おうと思つたんだけどねえ……」

しかし、彼の言葉がスバルに届くと同時に、ドアを開けたスバルの目に入った光景は……

制服を脱ぎ、身に着けている黒い大人っぽい下着（ブラ）を外そうとしていた彼の姉、ギンガ・ナカジマの姿だった。

すでに手遅れを悟つたサカキは指で頬を掻きながら苦笑いし、マ

リーは赤くなつた顔を両手で覆っていたが、その指の間からしつかりとその顛末を己が脳に記録していた。

「スバル……」

「は、はい？」

「何かいうことは？」

一方、当の姉弟はというと……

にこやかな笑みで弟スバルに問いかける姉ギンガと、姉ギンガの目の笑っていない笑みを前にして冷や汗を滝のように流す弟スバルだった。

そして、スバルは覚悟を決め、心に浮かんだ言葉を口にした。

「黒い下着着ても姉貴には似合わな……グハツ!!」

その直後、彼は廊下の壁に叩き付けられていた。

その衝撃により、肺から空気が吐き出され呼吸困難になつたスバルをギンガは無言で更衣室に引きずり込んだ。

あまりにも非常識な光景を目にしたサカキ博士とマリーは呆然としながらその様子を見ていた。

「わ、悪かつた!!」

謝るから、その腕に体重かけるのをやめて!!

ただでさえかなりの重量あるのに……って肘はそつちに曲がらなぎやあああーーツ!!」

更衣室から聞こえてくるスバルの絶叫と何かが折れる音によつて正気に戻つたサカキは更衣室に近づき、ドアをノックする。

「なんででしょうか？」

「あゝ、あまりやりすぎないようにね？」

ドアを開き顔を覗かせたギンガを見てサカキは自分の頬が引きつるのを感じた。

何せギンガの顔には血がついており、その後ろにはモザイクが掛けられてもおかしくない状態のスバルがいたからだ。

「はい、わかっています」

「そ、そう？」

わかっているならいいんだけど」

ギンガが静かにドアを閉め、その中からさらに聞こえてくる悲鳴と

打撃音にサカキとマリーはついに現実から目をそらしたのだった。

「あー、ひどい目にあった……」

ギンガによるスバルへの折檻もとい、躰を終えた後、いつも通りに検査を行った二人はサカキとマリーに呼び出され、サカキ博士の研究室にあるソファに座っていた。

「自業自得よ、まったく。」

誰に似たのかしら」

(だいたいガキの頃一緒に風呂に入ってたくらいなんだから今更って感じもしないが……)

「何か言ったかしら?」

ギンガの言葉に対してスバルは心の中でそつと考えたのだが、それを感じ取ったのか、ギンガは左手を握りしめ笑顔で彼に尋ねた。

「いえ、なにも」

即答だった。

少しギスギスした空気の中、サカキが見知らぬ男性を一人連れて部屋に入ってきた。

サカキはソファに座り、隣に男性を座らせた。

パツと見20歳前後というくらいの年齢の青年といってもいいくらいの男だ。

「すまないね、待たせてしまったかな?」

「いえ、大丈夫です。」

それよりも、そちらの方は?」

ギンガはサカキの隣に座る男の顔を見ながら尋ねる。

「ああ、彼はね、僕の友人の助手をしている……」

「グランツ・フローリアンです。」

よろしく」

青年——グランツは右手を差し出し、二人と握手をする。

「それで、フローリアンさんは私たちに何か？」

「彼は今、ある世界の環境汚染を浄化するための研究をしているんだ」
「環境汚染？」

スバルの言葉にグランツは頷き口を開く。

「ああ、その世界は魔法と科学。」

その両方がある程度発達した世界だったんだ。

だけど、ちよつとしたことが原因で、その世界……というよりかその惑星が人の住むのには厳しい環境になってしまったんだ。

科学技術によって生み出された化学物質による汚染に、魔法の暴走によって先住生物が狂暴化したりしているんだ」

「科学と魔法の影響……」

「その光景を見て、僕はその状態から何とか回復させたいと思っただ。だ。」

それで、その方法が……人型自立機械」

グランツの言葉に反応する二人。

スバルは頭に浮かんだ一つの考えを彼に告げる。

「つまり、そのアンドロイドの製作のために、俺たちの稼働データがほしい。」

「というわけですか？」

「ああ、そういうことだよ。」

もちろん、君たちの同意を得られればの話だけどね」

グランツからその言葉を聞いたスバルは「どこから情報が漏れてるんだか……」と目の間を指で揉みながら呟く。

「それで、二人とも。」

「どうかな？」

「私は構いません。」

スバル、あなたはどのようなの？」

グランツにギンガは少し考えた後了承の意を示した。

彼女は隣に座る弟に尋ねる。

「俺も、データを渡すことに異論はありません。」

ただし、一つだけ条件があります」

「内容によるね。」

「なんだい？」

「グランツは静かに彼の言葉を待つ。」

「俺たちのデータを利用して作り出したアンドロイドたち。」

「彼ら……もしくは彼女たちを一人の人間として扱ってください。」

「俺たちは替えの効く道具じゃないので」

「そんなことか。」

「もちろん、そのつもりだ。」

「あの子たちは僕が生み出す、つまり僕の息子や娘のようなものだからね。」

「君の言う通り、彼らを道具扱いはしないということをお約束しよう」

「スバルは彼の言葉を聞き、彼の目を見つめた。」

「そして彼に向かって手を差し出す。」

「あなたなら大丈夫そうだ。」

「俺たちのデータ、役立ててください」

「ありがとう。」

「感謝するよ」

その後、グランツはすぐにその場を後にした。

「現在も件の惑星で環境の改善に向けた研究を続けている最中に時間の合間を縫って彼らに会いに来たらしい。「今度娘たちが生まれたら連絡するよ!」と言って去っていった。」

「スバル、本当によかったの?」

「グランツさんのこと?」

「サカキの研究室を後にしたギンガとスバルは研究所の食堂に来ていた。」

「あの人は信用できる、と思ったからな。」

姉貴はそうは思わなかったのか？」

「ううん、でもスバルが自分でそう思ってた答えを出したならいいよ。」

それに……」

「それについて……うわッ!？」

ギンガは隣に座るスバルを抱きかかえ彼の頭をなでまわす。

「スバルがちゃんと成長しているみたいで、お姉ちゃんはうれしいから」

「ちよ、こんな公衆の面前で……!」

「ふふ、照れてるスバルもまた可愛いわね」

ギンガの可愛い発言にスバルは顔を紅くしながら言い返す。

「可愛いって、俺と二つしか離れてないくせに」

「たった二つでも私の方が年上なんだから。」

年上のいうことは聞くものよ」

ギンガのその言葉を聞いたスバルは諦め、抵抗するのをやめた。

スバルは、彼女の言葉に対して昔から刃向うことができなかったのだった。

「さてと、私はもう行くね」

「あれ、飯は食わねえのか？」

「この後局の友達と買い物に行く予定なの。」

「というか、今度お父さんの誕生日だったこと、忘れてないでしょうね？」

「あれ？」

「もうそんな時期だっけ？」

「はあ……。」

スバル、自分の父親の誕生日くらい覚えておきなさいよ……」

スバルの様子を見てため息を吐くギンガ。

彼女は「それじゃ、またね」と言っただけで食堂を去っていった。

「さて、しばらく時間があるけど……。」

久しぶりに俺も町に行くかな」

ギンガの姿が見えなくなり、彼は目の前にある昼ご飯を平らげると研究所の出口に向かって歩いて行くのだった。

「とは言ったものの、何もすることなく一日が終わってしまいそうだ……」

研究所を出たスバルは午後はクラナガンの街中をひたすらぶらぶらと歩いているだけだった。

これにティアナが一緒だったならば、まだ話は違っていただろうが、生憎彼女は今日は仕事なのである。

「仕方ない、どこかゲーセンにでも寄って……おっと！」
「あっー！」

スバルが大きく伸びをしながらそのようなことを呟いていると、横道から勢いよく出てきた眼鏡をかけた赤髪の少女とぶつかってしまった。

だが、スバルは普段から鍛えていたためか、その少女が倒れる前に、その手を掴む。

「すまん、ちよつと不注意だったな。」

大丈夫か?」

「え、あ、ああ。」

こつちこそ飛び出したからな……ッ！」

その少女は謝りながらも、スバルの顔を見て少し表情を引きつらせていた。

「ん？」

俺の顔がどうかしたか?」

「あ、いや、そうじゃねえ。」

てか、いつまで握ってんだよ」

スバルは少女の言葉で自分がまだ彼女の手を握ったままだったことを思い出し、「悪い悪い」と謝りながら手を離れた。

「それじゃ、今度から気をつけろよ。」

俺だったからコケる前に掴めたんだ。

ほかの人ならまず尻餅ついてただろうな」

「うっ、ああ。」

気を付ける……。

あ……」

スバルは少女の言葉に反応した。

「なんだよ、その今思い出した、みたいな声は」

「あー、いや……。

駅に行きてえんだけど……、道がわからねえんだ……」

顔を少し紅くしながら呟く少女に対してスバルはため息を吐きながら応える。

「なら、駅まで送ってやる。」

これでも管理局員だからな、このあたりの地理は頭の中に入ってる」

「そ、そうか、なら頼む。」

待ち合わせてるやつがいるんだ」

なら急がねえとな、とスバルは言いながら歩き出した。

少女は置いて行かれないように彼の後を追った。

「それにしてもよ、きれいなもんだな」

「は？」

何がだよ」

しばらく二人で歩いていたスバルと少女だったが、スバルが彼女の髪を見ながらそう呟いた。

その呟きの意味を理解することができなかった少女は彼に尋ねる。

「いや、お前の髪の色さ。」

きれいな赤色だなんて思ってたな」

「そ、そうか？」

まあ、べつに嫌いな色じゃないけどさ……」

スバルが彼女を見ながらそう答えると、彼女は自分の髪の色を綺麗と言われたことに対して顔を少し紅くしながらそう呟いた。

「俺の同僚にも赤色の髪のがつがあるんだけどな、あいつのが夕日みたいな赤色だとしたら、お前のは燃え盛る炎の赤だな、うん」

「プツ、なんだよそれ。」

「お前って意外にポエミーなのか？」

「笑うなよ、俺も今のはないと後悔してんだ」

彼女が吹き出しながらスバルの発言に対してそう告げると、スバルは目をそらしながらそう答えた。

そうこうするうちに彼女の目的地である駅が見えてくる距離まで近づいていた。

「あそこだ。」

さすがにここからはわかるな？」

「ああ、さすがにわかる。」

あとは自分で行ける。

あゝ、その、なんだ……」

「ん？」

少女は少し恥ずかしそうにスバルから目をそらしながら言葉をつづけた。

「ぎ、サンキューな。」

おかげで助かった」

「ま、これも仕事だしな。」

管理局員としては道に迷った可愛らしい女の子をほっとくわけにもいかないからな」

「か、かわッ!？」

スバルの発言にボンツと音を立てるかのように少女は顔を真っ赤にする。

そんな彼女を見てスバルは笑ってあるものを彼女に渡す。

「ツと、なんだよこれ」

「俺の連絡先、何か困ったことがあれば連絡入れてくれれば何かできるかもしれないからな」

「おい、お前とあたしは初対面だろうが。」

そんな奴に連絡先教えるとか、馬鹿か？」

彼女の正論にスバルは頭を掻きながら答えた。

「なんとなく、かな。」

お前が気に入ったというか、なんというか。

まあ、連絡先つってもただの電話番号だけだな。

さてと、そろそろ俺も時間だ。

それじゃ、またいつかな！」

スバルはそれだけ言うと、彼女に背を向けて走り去っていった。

「いや、だから……。」

はあ……。」

少女は手に握られたメモ紙をポケットに突っ込み、かけていた眼鏡を外した。

その瞳は金の光を放っていた。

「あれがあたしと同じ遺伝子持ったタイプゼロ・セカンド……?」

信じらんねえ……。」

少女——戦闘機人No. 9 『ノーヴェ』は認識阻害の術式のかかった眼鏡を腰につけたポーチにしまおうと駅に向かう。

そのさなか、先ほどまで一緒にいたスバルのことを思い出していた。

「というか、馬鹿だろあいつ。」

初対面のやつに向かって髪の色がきれいだの可愛らしいだの……。」

スバルに言われたことを思い出した彼女は自分の顔が赤くなっていくのを感じ、首をブンブンと振り彼のことを頭から追い出そうとする。

「なんで、あいつのことを考えてんだ、あたしは！」

あいつは敵なんだ、ドクターの計画を邪魔する……。」

《何か困ったことがあれば連絡入れてくれば何かできるかもしれないからな》

ノーヴェはポケットにいれた手が、メモ紙に触れたことで彼の言葉をまた思い浮かべてしまった。

「困ったこと起こす側なんだよな、あいつにとつて……。」

って、またなんで!!」

ノーヴェは再び彼のことを思い出してしまい、頭を抱える。

結局、彼女の待ち人であり、相棒の少女がその場に現れるまで彼女はスバルのことを思い出さないように首を振ったり、頭を抱えたりし

続けていた。

この語、相棒にからかわれることになるのだが、それはまた別の話。

第十八話

ホテルアグスタでの警備任務から二週間、此処機動六課ではいつもの通りの日常が進められていた。

「スバル、準備はいいか!!」

「はいっ!」

訓練スペースに呼び出された林の中で、スバルは今回の教官役であるヴィータの声に合わせて防御魔法を展開する。

「おうらッ!!」

「グウ……うお?」

スバルは小柄な体格からは考えられない力で殴りつけられたアイゼンを障壁で受け止めるが、勢いを殺すことができず尻餅をついてしまう。

その様子を見たヴィータは、一つ大きな息を吐きアイゼンを肩に担ぐ。

「障壁自体の強さは十分及第点だ。

　　だけど受け方がまだまだだな」

「受け方……ですか?」

「おう。

　　主に防御には二種類ある。

　　一つは今お前がやったように真正面から攻撃を受け止める方法。

　　これは相手とパワーに差がある状態で、相手が真正面からやってきたときにカウンターを狙いやすいという特徴がある。

　　まあ、勢いを完全に受け止めきれなければ今のお前みたいに体勢を崩すことになるから、あまりやらない方がいい。

　　で、もう一つが……あく、実際にやった方がいいな。

　　スバル、一回あたしに打ち込んでみる」

　　ヴィータの指示に従い、スバルはヴィータに向けて拳を放った。

　　だが、その拳はヴィータの拳に対して斜めに張った障壁に防がれていた。

「もう一つのやり方が、受け流すことだ」

「受け流す……、力をつけてことですか？」

「ああ、そういうことだ。」

まあ、受け流すって言っても体制が崩れている状態で受ければ受け流すときに自分も一緒に吹き飛ばされるのは同じことだ。

まずはどんな攻撃を受けてもなるべく体制を崩さねえようにすることだな」

ヴィータはそういつて締めくくると、そろそろ時間か……と呟く。

「よし、午前の訓練はこれで終わりだ。」

一度戻るぞ」

「はい、ありがとうございました」

「はい、ラスト15」

「ッ！」

スバルがヴィータから指導を受けているとき、べつの場所でティアナもなのはから指導を受けていた。

彼女の周囲には15発のスフィアが浮き、そこから彼女に向けて何発も魔力弾が放たれていた。

今もまた、ティアナに向かって放たれた弾丸を横っ飛びに避ける。

「ティアナ、また動いたよ。」

私たちセンターガードは、撃たれる前にどうにかする。

それを一番に考えないと、チームの人も危険にさらすことになる」

「はいっ！」

なのはの忠告を聞きながらティアナは両手に持ったクロスミラージユのカートリッジを取り換えスフィアの迎撃をつづける。

そして、最後のスフィアが撃墜され、訓練は終了となった。

「うん、お疲れ様」

「お、お疲れ様でした……」

「アハハ……、まだこの訓練はちよつときつかったかな？」

息も絶え絶えなティアナの様子になのはは苦笑しながら尋ねる。

ホテルアグスタから帰ってきたのははティアナの訓練メニューを大幅に切り替えていた。

センターガードとしての動きと、執務官を目指している彼女の要望に応えた近接戦闘訓練。

その二つを両立させるための訓練はこれまで以上にきついモノとなっていた。

「だ、大丈夫です……」

「うん、ならここでティアナにお手本というか、将来的にここまでできてほしい目標みたいなのを見せておくね。

レイジングハート」

『A l l r i g h t 』

レイジングハートの合図とともに、浮かんでいるスフィアから魔力弾が発射される。

それを故意に迎撃せず、なのはは片手に呼び出した障壁で受け止めながら空いている方の手で魔力弾を操作しスフィアを撃墜する。

そして、ものの数分ですべてのスフィアを撃墜し終わると、ティアナの方を向く。

「これがセンターガードの理想形。

なるべく動かず、周りの状況を把握し、適切な選択肢を選ぶ。

ティアナの最終目標が執務官でも、今はスターズのセンターガード。

それに、執務官でも他人との共同任務もあるから自分のポジションは極めていくようにしないとね」

「は、はいー」

「うん、それじゃ、最後に一発いってみようか！」

なのはは微笑みながら左手に障壁を張る。

それを確認したティアナはクロスミラージユを構え、その銃口に魔力を集中する。

この訓練はアグスタでの任務の後から、訓練の最後に砲撃を行いティアナの身体に砲撃の反動を覚えこませるといふものだ。

標的は、障壁を張ったなのは。

彼女の障壁をカートリッジなしの砲撃で貫けるようにするのが今のティアナの目標でもあった。

そして、林に橙色の光が輝いた。

「はい、みんなお疲れ様」

「二「お疲れ様でした……」三」

訓練を一通り終えた彼らは集合場所に集まり最後の連絡事項を行っていた。

「それで、ヴィータ副隊長、フエイト隊長。

どうかな、さつき話してたことは？」

「ん、あたしはいいと思いますよ。」

スバルもだいたい基礎はついてきたし、つけさせた」

「うん、私もヴィータ副隊長に賛成かな。」

そろそろ次の段階に進むべきだと思う」

なのはが後ろに立っていた二人に尋ねると、二人はその質問に肯定の意を示した。

「うん、そうだね。」

じゃあ、みんなにちよつとしたお知らせがあります」

コホンと咳払いをしたなのはが言葉をつづける。

「みんなも初任務だったりニアレールでの戦闘から結構な数の訓練と戦闘をしてきました。」

特に、この間のアグスタでの戦闘はよく頑張りました」

なのはがフォワード、特にティアナに視線を向けて話す。

その視線の意味に気づいたティアナは苦笑する。

「そこで、みんなが自分たちがどれほどの実力をつけたのかというのを実感してもらうために、来週私たちとの模擬戦をしたいと思います」

「模擬戦……？」

「私たちと……」

「隊長たちで……ですか？」

「四対四でつて勝ち目なくね……？」

あれか、自分たちの力は私たちに比べればまだまだだつていう自信を押し折るイベントか？」

なのはの言葉に四人は小声で呟く。

特にスバルは捻くれた考え方をしていた。

まあ、今まで基礎の基礎しかやってこず、先ほどまでヴィータから吹き飛ばされまくっていたことによつてちよつとテンションがおかしな方向に向かつていたためだが。

「ああ、うん。」

言葉が足りなかったね。

正確にはスバルとティアナは私と。

エリオとキャロはフェイト隊長と模擬戦だよ。

ちなみにリミッターは一段階上げてあるから、全力で来ないとさつきスバルが言ったことになるからね」

なのはのその言葉を最後に、この日の訓練は終わりとなった。

「ふんふ〜ふん」

なのはから一週間後の模擬戦の話させられた翌日の夕方、スバルはこの時珍しく一人で行動していた。

エリオとキャロは今の時間はここ最近日課となったフェイトとの家族の時間を過ごしており、相棒のティアナは午後のデスクワーク以降会っていなかった。

「あれ……？」

視線の先にいた人物を目にしたスバルは疑問の声をあげた。

その人物は自分のデバイスに装着されているスコープを用い、何かを見ていた。

「何やってんですか、妹さんに言いつけますよ。」

ヴァイス
お兄さん、覗きしてたよ〜つて」

「ッ、馬鹿ッ！」

「しゃがめ!!」

その人物……ヴァイスは声をかけたスバルの頭を押さえて姿勢を低くする。

その様子を疑問に思ったスバルは未だに片手で自分の頭を押さえ覗きを続けているヴァイスに尋ねる。

「何を熱心に見てるんですか?」

「あれだよ、アレ」

「アレ……ティアナ?」

ヴァイスはスコープをスバルに渡しながらその方向を指さした。

スバルがスコープを覗いてその先を見ると、そこには訓練着を着たティアナがクロスミラーージュを持ち、周囲に漂うスフィアを撃ちぬいているところだった。

「あいつ……」

「かれこれ一時間はやってる。

一時間前にここ通った時にはすでにああやってた。

で、さつきここに戻ってきてみたら……」

「まだやってたと……」

「明らかにオーバーワークじゃねえか……」

「ああ、特に今日は午前の訓練半端なかったんだろ?」

「だから……スバル?」

ヴァイスの言葉を聞き届ける前にスバルはスコープ彼に戻し立ち上がった。

「わかってますよ、相方の無茶止めるのも俺の役目ですからね。

あとは任せてください」

「まあ、わかってんならいいけど……」

最近はいい感じだったんだがな、あいつ。

なんでまたオーバーワークなんて……」

「そこも含めて聞いときますよ。

それよりも、さつきアルトさんが探してましたよ?」

スバルがそう告げるとヴァイスは「ヤベッ! すっかり忘れてた!」

と叫んでわきに置いていた荷物を手に取った。

「それじゃ、あとはお前に任せるぞ?」

「うっす、任されました」

スバルがそう告げるとヴァイスは一度頷きへりを格納している区画に向かつて走り出した。

そんな彼に背を向けスバルは大きいため息を吐き、足を進めた。

第十九話

「おーい、ティアアナ」

ヴァイスと別れたスバルはすぐに林の中で訓練をしているティアナの元に向かい彼女に話しかけた。

そんな彼の呼び声に反応したティアナは視線だけ彼に向けながら訓練を続けていた。

「なに、見たとおり忙しいんだけど……ッ！」

「いや、何もくそもお前、ちよつとオーバーワーク気味じゃないか？」

「別に、これくらい、大したことないわよ……ッ！」

彼女はスバルの話を聞きながらもクロスミラーージュを操ることをやめない。

そんな彼女の様子にスバルは大きいため息を吐き、疑問に思っていたことを尋ねる。

「なあ、なんでそんなに自分を苛めるように訓練するんだ？」

「決まってるじゃない、六課で足手まといにならないようにするためよ」

ティアナは一度訓練を中断し汗をタオルでぬぐいとりながらスバルの問いに答える。

「足手まとい……っ？」

「ええ、だってそうでしょう？」

隊長陣は全員Sランク以上、副隊長でもニアS。

エリオはあの年でもうBランク魔導師資格を持つてる。

キャラも特別な竜召喚というスキル持ち。

あんたに至っては可能性の塊。

ほかにも前衛だけじゃなく後衛のバックアップ要員まで未来のエリート揃い。

「この中で凡人は私だけだもの……」

ティアナは俯きながらそう答えた。

そんな彼女にスバルは先ほどよりも大きなため息を吐く。

「話にならないな……」

まったく、お前、今どこにいるんだ？」

「はあ？」

あんたの目の前にいるじゃない……」

スバルの言葉に怪訝な表情を浮かべるティアナ。

そんな彼女を見てスバルは「ハッ」と鼻で笑った。

「幻影魔法じゃない方だよ、まったく。」

3年も一緒にやってきたんだ、見破れないわけないだろうが。

身体これはフェイクシルエツトだな？

というか、ここらへんにあるもの全部フェイク、で」

スバルが目の前にいるティアナに手を触れるとその手は彼女に触れることなく彼女の身体を通過する。

それを確かめたスバルはある方向に歩いて行った。

「あれだけの数を使いながら、自分の姿をオプティックハイドで隠すとなると……ここらへんか？」

スバルは林の中にある一本の木の前に立ち、徐に手を伸ばした。

そして……

——フユン——

「……ッ！」

「フユン……？」

彼は手のひらに伝わる感触に首を傾げた。

彼としては隠れているティアナの肩に触れたつもりだったのだが、どうやら違うところに触れていたらしい。

そう判断した彼はその手に納まる柔らかいものを特定するべく二度三度と手を動かした。

「あっ……ック……ちょッ！」

その感触を再確認した彼は記憶の中からそれと同じものを呼び出す。

(確か、お袋に抱かれてた時に……)

「ツいつまで触ってんのよ、この……」

それはいくつもの偶然が重なった結果だった。

オプティックハイドでティアナが姿を隠していること、彼の手に

ティアナのある部分が収まったこと。

そして、その感触を彼が記憶の中から引きずり出すことに夢中だったこと。

そのすべてが一致した故に……。

「バカスバルーーツ!!」

「グハツ!」

オプティックハイドをとき、顔を怒りとほかの感情で真っ赤に染め、片手で自分の胸を隠しながら放たれた渾身の右ストレートが彼の顎に直撃したことは偶然でしかなかった。

だが、その偶然にも彼の顎にぶち当たった拳から伝わった衝撃は彼の骨を通じ、そして、脳を揺らした。

所謂脳震盪を起こしたのである。

見事に直撃を喰らい、しかも脳を揺らされたスバルは仰向けにぶっ倒れたのだった。

気を失う直前に彼が目にしたのは顔を真っ赤にしながらも慌てて彼に駆け寄る相棒の姿だった。

「ん……う？」

その後、スバルが目を覚めたのは六課の隊舎のロビーだった。

「ここは……、ロビーか……う？」

その時、彼は後頭部に柔らかさを感じていた。

彼が視線を上にあげると、端末を片手にモニターを弄っている相棒の姿が映った。

「あ、起きたのね」

「……いや、なんでこの格好？」

スバルは自分たちの格好……俗にいう膝枕の状態にあるのかを尋ねる。

「なんでって、あんた覚えてないの？」

「確か……、お前の幻影見破って、何かに触れたのは覚えてるんだけど……」

「あんた、いきなり倒れちゃったのよ。」

「疲れでもたまってたんじゃないの?」

身体を起こしながらスバルは頭を掻き大きく伸びをする。

「いや、すっかり休んでるはずなんだが……。」

「というか、なんかめちやくちや顎が痛いんだが……。」

「前のめりに倒れたからね。」

木にぶつけたのよ」

「いや、でもなんか柔らかいモノに触れた気も……。」

スバルはそこまで口にして背後からの冷たいモノを感じ口を噤んだ。

「忘れなさい」

「え、いや……、でも……。」

「忘れなさい」

「はい」

逆らってはいけない。

そう告げる何かが今のティアナにはあったと後のスバルはほかの人にそう言っていたらしい。

「それで、お前なにしてたんだ?」

「何って、模擬戦に向けた訓練よ」

「訓練?」

「幻影魔法の?」

スバルの問いにティアナは首を縦に振った。

「ここ最近の訓練でわかったんだけど、今は射撃魔法の伸びしろが見当たらないのよ。」

何かきっかけがあればいいんだけど、模擬戦までには無理だと判断したから、あたしはあたしにしかできないことを伸ばそうと思ったの」

「それで幻影魔法ね……。」

で、俺が見破る前に幻影に言わせたあの言葉は何なんだ?」

ティアナは苦笑しながら口を開いた。

「あ、あれね。」

「なんというか、夢の中で見たあたしが言ってたのよ……。」

なんか思いつきり思いつめた様子だったんだけど。

あ、あとあんたがなぜか女だったわね」

「あ？」

俺が女、冗談はほどほどにしてくれよ……」

スバルは彼女の言葉に大きく肩を落としながらそう答えた。

「まったくよ、あんたと仕事だけじゃなくて部屋でも一緒なんてこっちの胃がいくつあっても足りないわよ」

「へいへい、わる〜ございましたね」

「……」

なんてことない他愛のない話。

だが、彼らにはそれが非常に心地よかった。

「プツ！」

一瞬の沈黙の後、二人は同時に吹き出し笑った。

一通り笑いとおした後、ティアナはスバルに尋ねる。

「それにね、幻影の練習であんな風にしたのは敵を欺くには味方からっていうくらいだからね。」

誰か騙されてた？」

「ああ、ヴァイスさんが見事に騙されてた。」

「というか、俺も近づかなきゃ気づかないぐらいのモノにはなってたぞ」

スバルの答えにティアナは「ならこの魔法はもう十分ね」と呟いた。

そんな彼女に向かってスバルは疑問をぶつける。

「それで、なんか作戦は浮かんだのか？」

「まあ、作戦って言うていいのかわからないけどね。」

あんたにも結構負担がかかるけど、それでもいいなら話すわよ？」

ティアナの試すような視線にスバルはニヤリと笑い答える。

「どんと来い。」

「できる範囲でやってやるさ」

「わかった、ならあんたは……」

その後、ティアナが話した作戦内容を聞いたスバルの顔は驚きに満ちていた。

奇しくも、作戦を聞いた側が驚きに表情を歪めるという関係は、二人が六課に入るきっかけとなったBランク試験の時とは逆のものだった。

第二十話

「よし、三人とも準備はいいな？」

六課の訓練スペース（廃棄都市バージョン）のとあるビルの上立つヴィータがそのビルから少し離れた場所にいるスターズの三人に尋ねる。

『こちらスターズ1、準備OKだよ』

『スターズ3、4もオーケーです』

ヴィータは通信機から聞こえてくる返事に頷き、右手を高く上げ……。

「それじゃ、模擬戦開始だ！」

振り下ろした。

ヴィータの合図とともにティアナとスバルは動き出した。

なのははその様子を油断せずに観察する。

（さて、二人は何を仕掛けてくるのかな……？）

「スバル!!」

「応っ！」

《Wing Road》

ティアナの呼びかけに答えるスバルは返事とともに十八番のウイングロードを展開する。

だが、それは一般的な使い方である道としてではなかった。

「えっ!？」

なのはは展開されたウイングロードの軌跡に驚愕の表情を浮かべるしかなかった。

彼女はウイングロードをスバルが自分を囲むように球状に展開するとは考えてもおらず、対応が一瞬遅れた。

「レイジングハート」

《Allright. Accel Shooter》

なのはは予想外の出来事に対応が遅れるも、落ち着きその囲みを魔力弾で破壊する。

もともとの運用方法ではなかったウイングロードは魔力弾によって取り払われ彼女の視界を取り戻した。

だが、その一瞬の対応の遅れにできた時間でスバルとティアナは彼女の視界から姿を消していた。

「これは、中々に厳しいことになりそうだね……。」

気を引き締めていくよ、レイジングハート」

《もちろんです。彼女たちの力をここでしっかりと見極めていきましょう》

愛機の言葉に頷きながらなのはは周囲の警戒レベルを一段階上げた。

『よし、なのはさんはこっちの姿を見失ったわね』

「第一段階終了といったところだな」

一瞬のスキについて姿を隠したスバルは、別の場所にいるティアナと念話で連絡を取り合っていた。

『ええ、とりあえず第一難関は突破。』

あたしはこのままなのはさんの索敵範囲のギリギリまで離れるわ。

あんたは……』

「隊長の注意をそらせばいいんだろう？」

「しっかりやってやるさ」

『任せたわよ。』

それじゃ、セカンドフェーズスタート第二段階開始！』

なのはがその音に気づいたのは、普段以上に周囲に気を張っていたからだだった。

それは何かを蹴り飛ばす音、それも小石などの小さいものを蹴り飛ばす微小な音だった。

だが、それに気づいたなのははそちらに振り返り、そして障壁を展開した。

「クツ、……まずいッ！」

《Barrier Burst》

障壁を張った左手にかかった衝撃がいつも以上に大きいことに気づき、また別の感覚に襲われたのははすぐに障壁を爆破し、その爆風に乗ってその場から離れた。

「今の感じ……」

《障壁を突破しかけてました。

おそらく何らかの方法で速度を増したのかと》

「だよ、あの魔法はたぶん……！」

なのはは言葉を言い終える前にその場からさらに飛び去る。

その直後、彼女のいた空間を一つの魔力弾が過ぎ去った。

「スバルだと思うんだけど、障害物の使い方がうまいね。

こつちからは捕捉できないように動いてる」

《すべてあなたの教えたとおりですね。

ヒット&アウェイ、一撃離脱をスバルとマツハキヤリバーが自分たちなりにアレンジした戦闘方法のようです》

「うれしいね、ちゃんと教わっただけじゃなくて自分なりに考えてぶつかってくるってのは」

スバルからの攻撃を避けながらも彼女は嬉しそうに笑っていた。

「おいおい、この状況で笑ってるよ、あの人」

《恐らく相棒の戦術を潰す作戦でも考え付いたのでは？》

そんななのはの表情を一目見たスバルは背筋に何か冷たいモノが走るのを感じた。

「物騒なこと言うなよ、マツハキヤリバー。

あの人だから本当にやりかねんだろうが」

《すみません。

次、左です》

マツハキヤリバーは謝りながらもスバルにルート of 検索結果を伝える。

スバルはその指示に従い道を進んでいった。

今回の模擬戦、ティアナの考え付いた作戦は主に四段階に分かれている。

まず、最初のスバルのウイングロードによるなのはの視界を遮りその場から姿を隠す。

そしてティアナはなのはがウイングロードを排除するまでのごく短い間にある仕掛けを施しすぐにその場から離れる。

第二段階はスバルによるなのはの索敵を行わせないこと。

廃棄都市区画という障害物の多いステージが使われることをあらかじめ調べていたティアナによってその走るルートを決め、なのはをその場にくぎ付けにすることがこの段階の肝であった。

「……」

次の攻撃ポイントに到着したスバルは右足に魔力を溜める。

使用した魔法は、直射弾とソニックムーブ。

「ハーケンインパルスッ!!」

《Shoot》

スバルが足を振りぬき、右足に溜めた魔力弾を放つ。

スバルの脚力による一次加速と、ソニックムーブによる二次加速によって通常の4倍に達した速度の魔力弾はなのはの障壁を貫通するほどの威力を持つようになった。

それをビルとビルの間、崩れた橋などの攻撃に最適なポイントからなのはにむかって放っていく。

スバルはそれではのを撃墜できるとは考えてはいなかった。

現に今ではこの魔法はすべて回避されている。

だが、今はなのはに攻撃を当てることが目的はないのでスバルはすぐにまたビルの陰に姿を消した。

『スバル!』

「ついたか?」

『ええ、作戦を第三段階に移行するわ。』

なのはさんを追い込んで!』

「了解!」

周辺の空気が変わったことをなのはは今までの経験から感じ取っていた。

そしてそれはデバイスであるレイジングハートも同様であった。

《マスター》

「うん、そろそろ仕掛けてくる

(けど、さつきからなんなの、この感じ……。既視感みたい……。)」

そして、小さく聞こえていたマツハキャリバーの駆動音が次第に大きくなり、彼女はついに教え子の姿を捕らえた。

そして彼の右手から魔力弾が放たれるのも彼女の目は捉えていた。

「リボルバーシュート!!」

《Revolver Shoot》

「レイジングハート!」

《Flash Move》

なのはは高速移動でその場から離れると同時に疑問を抱いた。

(さつきまでの魔力弾と速さが違う……。！)

なのはがそのことに気づいたのと同時にスバルの口からある言葉が紡がれた。

「別れる!!」

スバルの言葉とともに、なのははに迫っていた魔力弾が弾け、無数の微細な魔力の塊がなのはに襲い掛かった。

障壁を展開せずに回避に移行したなのはは広範囲にばら撒かれた魔力弾を防ぐために障壁を展開するが、多くの魔力弾を受け止めきれずにその衝撃で大きく後ろに飛ばされてしまう。

そして、それを確認したスバルが声をあげた。

「ティアナ!」

『了解、第四段階開始!!』

体制を崩したなのはがそれを目にしたのは単なる偶然だった。

スバルの魔力散弾によって吹き飛ばされたなのはの目の前にいき

なり魔力スファイアが姿を現したのだ。

「クッ！」

そのスファイアから連続で放たれる直射弾をなのは紙一重で躲すとそのスファイアを撃墜しようとするが、魔力弾を生成するが、その魔力弾を別方向から放たれた弾丸が撃ちぬいた。

「この射撃、ティアナ？」

「だけど、どこから……!!」

《マスター、後ろです》

なのははその射撃を放ったであろう少女を探そうとするが、愛機からの警告を聞き入れすぐにその場から離脱する。

直後にまた別の方向から彼女に向け魔力弾が放たれた。

「次、オペティックハイド解除、スナイプシューター、3番、4番起動」
そのころ、ティアナはなのはの様子を離れたところから設置したサーチャーから送られてくる映像で監視していた。

そして、第一段階で設置したスファイアに掛けていた幻影魔法『オペティックハイド』を解除し、彼女を狙撃していたのだった。

「スバル、少しコースが外れてる！」

修正頼むわ!!」

『了解!』

彼女が相棒に指示を出すと同時に映像の中のなのはに青色の砲撃が放たれ、彼女はそれを回避した。

だが、その回避方向はティアナが設置したスファイアの射程圏内だった。

「6番、7番起動！」

彼女がここまで幻影魔法の維持が可能なのは、彼女の幻影魔法に対する才能と、この一週間の努力の結果だった。

そして、なのはの教えたセンターガードとしての心得『戦況をよく観察する』ということをごなし、今はなのはをあるポイントまで誘導していたのだった。

「最後、15番!」

ティアナが最後のスフィアを展開したのはに向かって魔力弾を撃つ。

そして、彼女がティアナのいる位置から直線上の場所に出てきた。

「行くわよ、クロスミラーージュ」

《Load Cartridge》

彼女の両手に握られたクロスミラーージュに込められた四発のカートリッジから魔力が放出する。

その魔力反応に気づいたであろうのはが彼女の方を向くが、すでにティアナの準備は整っていた。

「今までの特訓の成果を……ここで……!」

ファントム、ブレイザーツ!!」

《Shoot》

そして、二つの橙色の閃光が空を切り裂いた。

第二十一話

「ん……う？」

機動六課隊舎のある部屋で彼女は目覚めた。

寝ていたベッドの上で身体を起こし周りを観察する。

「……医務室……？」

《起きられましたか、マスター》

ティアナが声を出すと、その傍らに置かれたクロスミラーズが彼女に呼びかけた。

「え、ええ……。」

「どうか、なんであたしここで寝てたの……？」

《そのことについては……。》

ああ、お待ちください。

たった今レイジングハートから通信が入りました。

ロビーに集合してくださいということですよ》

ティアナは愛機の言葉を怪訝に思いながらいつの間にか脱がされていた訓練着を着て医務室を後にした。

「ナニコレ」

医務室からロビーに向かったティアナの視界に映ったのは何ともおかしい光景だった。

「なのはちゃん、反省してるの!？」

「は、はい……!」

めったに怒りの感情を見せない医務官が分隊長を正座させて説教をしている姿。

「本当にすみませんでした!!」

『いや、こちらも想定外というかな。』

そちらにも悪気はなかったのだろうか?』

「それでもお騒がせしてしまったのです。」

すみませんでした!!」

モニターに映るレジアス中將に頭を必死に下げている部隊長。

そんな普通ならあり得ない光景を見てティアナは……

(きつと疲れてるのね)

一度目をつむり目の間をしつかりと揉んで瞼を開いた。

そこには先ほどとまったく変わらない光景が映った。

「ナニコレ」

彼女の言葉を責める者はだれ一人としていなかった。

「あ、目が覚めたんだな」

「ヴィータ副隊長……」

これ、どういうことなんですか?」

呆然としていた彼女に声をかけたのはヴィータだった。

そのすぐ後ろからフェイトをはじめとしたライトニング分隊の四人と相棒のスバルが歩いてきていた。

「あく、そのな……かくかくしかじかで、まるまるうまうまということだ」

ヴィータの説明を聞いたティアナは確認のために自分の口から同じことを繰り返す。

「つまり、あたしの砲撃を躲したなのはさんが反撃に砲撃を撃とうとしたところ、ちよつと本気になってしまってあたしはその砲撃を防ぐこともできず、気絶。」

スバルもその後叩きのめされた。

そこで、あまりにも魔力の量がりミッターかけられた状態ではないのでおかしいと気づいたフェイトさんが調べてみるとリミッターが外れていることが判明。

急いで八神部隊長に報告に向かうと、レジアス中將から連絡があつて八神部隊長はあのように謝りっぱなし。

で、シャマル先生は教え子を気絶させるほどの砲撃を撃つたのはさんをお説教と」

「そういうことだ」

「一ついいですか、副隊長」

「おう、なんだ？」

「なんでリミッターが解除されたんですか？」

「この部隊作るのにかけられたものなんですよね？」

「ティアナの問いにヴィータは頭を掻きながら口を開いた。

「あく、機動六課の隊長陣、副隊長にリミッターがついてるのは知ってるよな？」

そのリミッターなんだが、地上のものをあたしたちは掛けられたんだよ」

「地上の……？」

「つまり、機動六課は本局の部隊でありながら地上に隊舎を持つ異例な措置をとってる。

それもこの施設見てもわかる通り、新品のモノだ。

そうさせたのが本局のお偉いさんで、その代りといっちゃなんだがリミッターは地上本部の方で掛けることになったんだ。

まあ、そのことに地上に文句言った馬鹿もいるみたいだけどな。

そこにレジアス中將が皮肉たっぷり言い返したところこうなっただけだ。

で、今回のことなんだが……」

ヴィータは一度「ゴホン」と咳払いを言いづらそうにつづけた。

「地上のリミッターが外れやすくなってたんだと。

なんでもこれまたレジアス中將が指示出して『いぎというときに上からの命令を待っててリミッターを解除なんてしてたら手遅れになるだろう』ということらしい」

それがこんなことになるなんてな、とヴィータはため息を吐きながらロビーを見つめる。

「まあ、リミッター云々は置いておいてだ。

お前たちは高町に本気を出させたということだ。

胸を張っていいぞ」

「そうだな、あの作戦はかなり良かったと思うぞ。

なのはの好きにやらせないで終始躍らせっぱなしだったからな」

話が一段落着いたところでシグナムがティアナの肩に手を乗せながらそう言うのと、それに続いてヴィータも模擬戦の内容を思い出しながらそう彼女に告げた。

「あ、ありがとうございます」

シグナムとヴィータは礼を言うティアナに背を向け、ロビーに向かっていった。

「なあティアナ。

なのはさんの砲撃受けてどんな感じだった？」

その後、スバルがティアナの元に寄ってきて彼女に尋ねる。

スバルに言われて模擬戦で、自分が気絶する直前の記憶を思い出そうとすると、なぜか身体が震えだしてティアナは両手で肩を抱いて蹲ってしまった。

「お、おい！

大丈夫か!？」

「だ、大丈夫……。」

チョットすれば収まるから……。」

「無理しちゃダメだよ、ティアナ」

震えているティアナの肩に手を置いて声をかけたのはフェイトだった。

フェイトはティアナの背に手を回すと子供を落ち着かせるように背中をリズムよく優しくたたいて声をかけた。

「怖かったよね、視界いっぱい広がる桃色の光って」

「は、はい……」

フェイトの言葉に頷くティアナ。

そんな彼女の耳にフェイトはある言葉を告げた。

「でも大丈夫。

ティアナよりも小さいときにあれよりもすごいのがやられたから」
その直後、ティアナの身体の震えは止まっていた。

結局、レジアスからお咎め無しとなった六課。

仕方がないので、なのはのリミッターは後日地上本部で、今回のものよりも強めのリミッターを掛けることとなった。

そうポンポンとリミッター解除されてたら地上本部も大変だということだろう

ちなみに今回のことではには責任はないということをしてレジアス自身が証明しており、はやてがほつと安堵していたことはだれも知らない。

その後、シャマルからの説教の後、はやてからやんわりと注意を受けたなのはフォワード陣で集まり、今後のことを話していた。

「今日はさっきの騒動の影響で、ライトニングの模擬戦はもう無理だから、ライトニングFとフェイト隊長の模擬戦は明日行うことにします。」

何か質問は？」

「質問というか、なのはが本気出さなければやれたんだけどね……」

フェイトからの指摘なのはは冷や汗を流しながら目をそらした。

「そ、それはほら！」

私に本気を出させたスバルとティアナが悪いつてことで」

「教え子がしっかりと結果を出したのに対して責任を擦り付けるとは、さすがなのはだな」

「うう……反省してます……」

「それで、今日はどうするんだ？」

模擬戦は出来ねえかもしれないけど、時間はまだあるぞ？」

ヴィータの言葉になのはは頭を抱えた。

「とは言ってもねえ……」

もともと今日は模擬戦をやってその反省で一日使う予定だったから……」

「あ、なのは。」

あの話はみんなにしたの？」

「あの話……？」

なのははフェイトの言葉に首を傾げた。

そんな彼女にフェイトは微笑みながら答えた。

「なのはの訓練の意味。」

本当に今日のなのははボケボケさんだね」

「ボケボケ……!?!」

酷いよ、フエイトちゃん!!」

「いや、今日の高町はボケボケだろう」

「そうだな、ポンコツもいいところだ」

「てい、ティアナー。」

みんなが苛める〜!」

自分の周りに味方がいないとみると、教え子を引きずり込もうとするなのは。

そんな彼女に苦笑しながらティアナは口を開いた。

「なのはさんがポンコツなのはどうでもいいとして、訓練の意味って何の話ですか?」

「ティアナまで!?!」

ティアナの発言になのはは涙目になる。

そんな彼女に一言。

「だって気絶させられましたから。」

別に何か危ないことしたわけでもないのに……」

その一言でなのはの中で何かが壊れたのか、なのはは「うにゃー!」
といいながら顔を伏せてしまった。

そんな彼女を見たヴィータが「やりすぎたか」と呟いたが、そのつぶやきに突っ込むものは誰一人としていなかった。

余談だが、このリミッター解除騒動は地上本部どころか、本局にも長らく伝えられる話となるのだった。

その話を聞くたびになのはは気恥ずかしい思いになるのだが、それはまた別の話。

第二十二話

「あゝゴホン！」

なのは弄りが終了して数分後、立ち直ったなのはは一度咳払いをして場の空気を切り替える。

「さて、さっきから話に出てきた訓練の意味って言葉だけ……。」

みんなは今までの訓練はどうだったかな？」

「正直な感想を言ってみろ。」

別に怒ったりしねえから」

なのはの問いに首を傾げ、ヴェータの言葉に納得するフォワード四名。

真つ先に答えたのは切り込み隊長であるスバルだった。

「めっちゃきつかったです」

「ホントに正直に言いやがったな。」

ほかは？」

「基礎の訓練ばかりだなあ、と思つてましたけど……。」

「基礎の割に応用の訓練はあんまりなかったなあと思います」

「言ってみれば、地味でしたかね」

スバル以外の意見を聞いたなのはは苦笑しながら頷いていた。

「やっぱりそう思うよね。」

地味できつい、応用もしないで基礎訓練ばかり。

みんな不満に思つてたんじやないかな？」

なのはのその言葉に四人は躊躇いながらも頷いた。

「本当は私も応用の訓練もしっかりやっていきたいと思つてるんだけどね。」

その前にしつかりと基礎を固めないといけないって考えてるんだ。

まあ、その理由を今から話そうと思うんだけどいいかな？」

「理由ですか……。」

「そう、私が今の訓練を行うきつかけになったこと。」

始まりはね……。」

とある世界、そのとある国の小さな町に一人の少女がいた。

その少女はいたって普通——実家が喫茶店をやっていて武道場があるのがふつうなのかはおいておいて——の家の末っ子だった。

その世界には魔法なんて存在しない。

科学がある程度発達した管理外世界。

そんな世界に住む一人の少女が魔法の世界に踏み込んだとある事件。

今でいう「PT事件」。

とある研究者が自分の願いを叶えるために遺失物——ロストロギア『ジュエルシード』——を狙ったことから始まったこの事件は、件のロストロギアがばら撒かれた世界のとある少女と管理局所属の『アースラ』の魔導師で最悪の危機を脱した。

この事件を経て、少女は魔法という自分が自分でいられる証を手に入れた。

その後、その世界でいくつか大きな事件を収束に向かわせた少女は管理局に入り、日々任務に勤めていた。

「だけど、その女の子の身体はもうボロボロだった。

碌に訓練もせずに魔導師になった女の子は、自分の限界を超えても休もうとはしなかった」

一人話していたのはは端末を操作し、一つの映像を映し出した。

そこには茶色の髪をした幼い少女が砲撃魔法を放っている場面だった。

「あれって、砲撃魔法……!」

「あんな小さな女の子が……!?!」

「そう、その女の子には幸か不幸か才能があった。

その小さな身体では受け止めきれないほどの反動のある、砲撃に対してのね。

砲撃魔法の反動の大きさは、スバルとティアナはわかってるよね？」

「はい」

「身を持って体感しました」

スバルとティアナの返事を聞いたなのはは言葉をつづけた。

「女の子は、自分の得意とする砲撃を何度も撃ち続けた。

基礎のできていない身体にとってそれは自分をも傷つける諸刃の剣だということに気づかずだね」

やがて、その時は来た。

それはとある世界での遺跡調査隊の護衛任務だった。

少女はその日、少し体調が悪かった。

だが、彼女はその不調を無視して任務に向かった。

そして、任務終了直前に傷を負った。

「その時は陸から出向していた一尉の人に庇ってもらって事なきを得ただけだね」

これがその時の女の子の様子、と言ってなのは映像を切り替えた。

すると、そこに映ったのは病院のベッドの上で身体中を包帯でまかれた少女の姿だった。

「この時、この女の子の身体にたまった疲労と、大小の傷、その治療のためにこんなになっただ。」

女の子の身体には無茶し続けて傷ついた部分が多くあったんだ。

そして、そんな傷ついた身体で砲撃魔法を撃っていたからね、それはもう反動が身体にすさまじい影響を与えていたんだ」

なのはは苦笑しながら続きを話す。

「それで、しばらくしてさっき話した女の子……、もうわかかってると思うけど、私を助けた陸の一尉の人にね、怒られたんだ。」

『基礎もできていない未熟な奴が戦場あそこに来るなんてどうかしてる。

出てくるならしつかりと基礎を鍛えてからにしろ』ってね」

「ん？」

なのはの言葉にスバルとティアナは首を傾げたが、今は彼女の話を聞くことを優先した。

「もうね、その言葉を聞いて自分でも何をしたいのかわつたのが決まっただよ。

まずは自分の身体をしつかりとしたものに作り上げるってことが第一目標になって、夢が教導官になるってことになったんだ。

私みたいに、無理して大怪我をしたりする子が少なくなるように、戦場から無事に帰ってこられるようになってね」

これで私の話はおしまい、というとなのはは手元に置いてあったお茶を口に含んだ。

「あの時は本当に大変だったんだ。

私が助けてくれた男の人に怒られてるときにフェイトちゃんが来て、勘違いしてね」

「う、なのは。

あの話はしなくても……」

「いいや、言っちゃうもんね。

さつきボケボケとかさんざん言ったこと忘れてないからね」

フェイトが「そ、そんな……」と叫んでいるのを無視してなのはは話を続けた。

「それで、フェイトちゃんってばその男の人に『そこまで言うならあなたはどのぐらい強いんですか』って聞いちゃって、なんやかんやで模擬戦になってね」

「フェイト隊長と、その人がですか……？」

「うん。」

結局、フェイトちゃんの惨敗。

指一本触らせてもらえなかったみたい。

私の怪我が治った後に二人してみっちりしごかれたよ……」

あはは、となのはは苦笑いしていた。

そんな彼女にティアナが質問を投げかけた。

「あの、その男の人の言葉つてもう一度言ってもらえますか、一番印象に残ってるところを」

「ん？」

『戦場で生き残りたいなら基礎をしつかりと鍛えろ』……」

「『そうすれば生きて帰ってこられる』」

「あれ、なんで二人がその言葉を知ってるの!？」

なのはの言葉を遮り、スバルとティアナが口にした言葉を聞いたなのはは驚きの声をあげた。

そんな彼女にティアナは苦笑しながら尋ねる。

「なのはさん、その男の人って『キヨウ・カーン』って人じゃないですか?」

「え!？」

なんでティアナがあの人の名前知ってるの!？」

確かにある意味有名な人だけど、その言葉知ってるのってあまりいないのに!!」

なのはの驚きの声を聞きながらスバルとティアナは答えた。

「あく、カーン教官、今は第四陸士訓練校の教官で……」

「俺たちの担当教官でした。」

さっきの言葉はあの人からいつも聞かされた言葉です」

「な、なるほど……。」

管理局に入ってから世界が狭いなんて考えたこと初めてだよ……。

じゃ、じゃあ、あの子の教え子を私が教えることになったわけだね。

なんだ、二人が文句言わなかった理由がやっとわかったよ」

「なのはは真っ先にスバルとティアナが文句を言うだろうねって言うてたからね」

「なのはさん……。」

「あ、あはは……。」

「ごめんなさい」

フェイトの告げ口を聞いた二人はなのはにジトーとした視線を向けた。

それに耐えきれなかったなのはは苦笑すると、すぐに謝罪の言葉を

口にした。

「とりあえず時間も潰せたな。」

「この後はどうする?」

「そろそろ解散にしないとな」

「訓練時間はここにいていいけど、私たちも新人どもも仕事があるしな」

「そうだね、それじゃあみんな。」

「今日は解散!」

「デスクワーク、頑張つてね!」

「エリオとキヤロは明日は模擬戦があるから早めに上がってもいいからね」

「はい!」

「わかりました!」

「それじゃ、失礼します」

「ありがとうございました!」

フォワードの四人はそれぞれロビーを後にした。

その後、シグナムとヴィータもそれぞれの仕事場に向かいその場を去っていった。

そしてロビーに残ったのはなのはとフェイトの二人だけとなった。

「それで、なのは。」

「気になることって?」

「うん、今日の模擬戦のことなんだけど……」

「模擬戦で何かあったの?」

「スバルとティアナの作戦、どこかで見たような感じがしたの。」

知識としては知らないけど、こう身体が覚えてるみたいないな感じで「なのはは頭を指で叩きながらフェイトにそう伝えた。

「確かに、外から見ててもなのははティアナのスナイプシューターを紙一重で躲していたね。」

「まるでそこにあるのがわかってるみたい」

「うん。」

レイジングハートが警告してくれてすぐになんか身体が動いたの。

いつもなら少し隙ができるはずなんだけど……」

「気になる？」

「ううん、ちよつと不思議に思っただけ。」

あの作戦はティアナが一から考えたって言ってたし、教本やほかの戦闘データを見てもあの戦術は乗ってなかった。

確実に二人のオリジナル。

だからそれを紙一重といっても躲しきった自分がなんか変に思えちゃって」

「まあ、時間が経てば思い出すかもしれないよ。」

とりあえず今日の分の仕事しないと」

「そうだね、ごめんねフェイトちゃん。」

時間取らせちゃって」

なのはの言葉にフェイトは首を横に振って微笑んだ。

「別にいいよ」

「ありがとう、フェイトちゃん」

なのはは何とも言えない気持ちを胸に抱えながらも、教え子たちが自分の訓練の意味を理解してくれたことに対して嬉しさを隠しきれないまま、その場を後にした。

第二十三話

スターズの模擬戦の翌日。

訓練場は先日と同じ廃棄都市区画でフェイトとエリオ、キャロの三人は向かい合っていた。

「それじゃあ二人とも、準備はいい?」

「はい!」

「よろしくお願いします!」

フェイトの言葉に力強く答える二人。

そんな彼らを見てフェイトは頷き、離れたところで待機しているシグナムに通信を送る。

「シグナム、お願いします」

『心得た。』

……はじめ!!』

シグナムの凜とした声による開始の合図とともにキャロはある魔法を発動させつつ、昨日スバルとティアナに言われたことを思い出していた。

「いっ?」

フェイトさんの一番の武器はその高速移動。

いくらリミッターが掛けられているって言ってもアンタたちじゃまず捉えることは難しいでしょうね」

「そ、それじゃあどうすれば……?」

「一番の武器ってことはそれを使わせないようにすればいいってことだ。」

やり方はお前たちで考えるとして、俺たちから言えることは……」

「キャロ!」

「うん、エリオ君！」

フリード、ブラストフレア!!」

キャロの掛け声とともにフリードの口から炎の塊が連続で放たれ、それはフェイトに辿り着く前にその場から消え去った。

《後ろですー!》

「ッ!？」

フリードの火球が消え去ったことを疑問に思ったフェイトに愛機からの警告が届く。

それを耳にしたフェイトは考えるよりも先にその場から飛び去った。

その直後、彼女のいた場所にフリードの火球が直撃し、周辺に炎を撒き散らした。

「なるほど、そういうことか。」

考えたね、キャロ」

フェイトは火球の飛んできた方向を向くとそこにはキャロの魔力光を放つ転移の魔法陣が浮かび上がっていた。

「ティアナ、スバル。」

あれはお前たちの入れ知恵か？」

「いえ、確かに『先制攻撃でペースをつかみ取れ』とは言いましたけど……」

「あれはあいつらが自分で考えた方法ですよ」

離れたビルの屋上で模擬戦の観戦を行っていたシグナムが隣に立つスターズの新人二人に尋ねる。

彼女の質問に対してスバルとティアナはどちらも驚いた表情で答えた。

「キャロのやり方は最適な方法だね」

「ああ、フェイトの高速移動は別に瞬間移動しているわけじゃねえ。

必ず通る道つてのがあからな。

普通なら当たらない攻撃でも……」

「キャロの転送魔法ならその道を防ぐように攻撃を送ることができ
る」

「それだけじゃないだろうな、エリオも何かしらのやり方を持つてると見てもいいな」

「やるね、二人とも。」

「だったら……!」

《H a k e n S a b e r》

「ハアツ!!」

キャロからの攻撃を避けながらも、フェイトの顔には笑みが浮かんでいた。

そして、バルディッシュの鎌の部分をキャロへと向けて放った。

「エリオ君!」

「任せて!」

「ストラーダ!!」

《L o a d c a r t r i d g e》

「プラズマビュート、行けツ!!」

フェイトの魔力刃が迫る中、エリオはキャロの前に立ちストラーダを構える。

構えた槍から葉莢が吐き出されると同時に、雷撃の鞭がやりの穂先から飛び出し魔力刃を絡め取った。

「うそっ!?!」

「返しますよツ!!」

《H a k e n S a b e r》

エリオの魔力を付加された刃はその持ち主に歯を剥いた。

まさか自分の魔法をそっくりそのまま返されるとは思っていないかったフェイトはバルディッシュで刃を切り払う。

「ッ!」

「デヤアアツ!!」

だが、その隙を逃さずにエリオはフェイトに接近し切りかかった。
「いいタイミングだ。」

「だけど！」

「クウツ！」

フェイトは障壁を展開しストラーダの刃を受け止めた。

すぐさまその場から離脱しようとしたエリオだったが、フェイトの張った障壁にストラーダの刃が食い込み離れず、フェイトのかざした手から放たれた魔力弾を喰らってしまった。

「エリオ君！」

「大丈夫！」

魔力弾を身体に決められたエリオだったが、あたる直前に張った障壁に魔力弾を防ぐことに成功したエリオはフェイトの障壁を蹴り飛ばすことでストラーダを引き抜き、その場から後退した。

「キャロ、アレをやる。」

「頼むよ」

「任せて、エリオ君。」

「フリード！」

エリオの言葉に頷いたキャロはフリードにブラストフレアを発射させる。

先ほどとは違い、転移の魔法陣を利用せずに放たれた火球は彼女の近くのビルに直撃しその瓦礫でフェイトの視界から二人を隠した。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。」

言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。

錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

未だに視界の晴れないフェイトの耳に聞こえてきたのは鎖を引く音。

その音が聞こえた直後、彼女のいる空間の四方八方から彼女の退路を塞ぎ、捕らえんと鎖が放たれた。

「この鎖、キャロだね。」

「でも！」

退路を塞がれたとしてもフェイトは慌てることなく自身に襲い掛

かってくる鎖をバルディッシュで切り払う。

その様子を見ていたキャロの顔には笑みが浮かんでいた。

「エリオの攻撃が来ない……」。

この隙を逃がさずに来ると思うんだけど……ッ!!」

鎖を払いながらフェイトはエリオの気配を探っていた。

キャロの鎖に周囲を囲まれ動きを止めた今に仕掛けてこないということはないということを彼女はだれよりもわかっていた。

《マスター!》

「……ッ!」

そして、彼女は目にした。

彼女のいる場所からさほど離れていない距離にあるビルの屋上に立つ少年を。

「ストラダ、行くよ」

《了解》

「カートリッジロード!」

ストラダから魔力が溢れ、穂先から紫電が走る。

雷を纏った槍をエリオは構え、そして飛んだ。

「はあああッ!」

《Speerschneiden》

エリオはストラダの穂からブースターがせり出し、空中でさらに加速する。

それを見たフェイトはすぐにそちらへと意識を向けた。

「貫くッ!」

「バルディッシュ」

《Haken Slash》

魔力の刃でストラダを受け止めたフェイトだったが、加速によって勢いのついたエリオを止めることはできなかった。

「……ッ!」

「キャロ!」

「任せて……!」

大きく体勢を崩したフェイトをさらにフリードの火球が全方位から襲い掛かる。

フェイトは障壁を張りながら、最大加速で火球群を突破する。だが、その行動を見極めていたエリオが彼女の上をとっていた。

ストラーダによる加速を行い、紫電を右足に纏わせたエリオは、フェイトへと一直線に落ちてきた。

「ライトニング……フォールツ!!」

「クッ!」

エリオからの渾身の一撃を障壁越しに受け止めたフェイトはそのまま地面へと叩き付けられる。

フェイトが叩き付けられた衝撃で舞い上がった土煙で彼女の姿を見失ったエリオは思わずある言葉を口にしてしまう。

「やったか……!」

所謂、やられていないフラグである。

「うん、今のはよかったよ」

「なッ……!」

後ろから聞こえてきた声のエリオは驚きの声をあげる。

視界の端に金色の髪が通り過ぎたと感じた直後、彼は浮遊感を感じていた。

「クッ……!」

「エリオ君……!」

キャロは投げ飛ばされたエリオを受け止めるが、子供である彼女では同じほどの体格であるエリオを受け止めることはできず、大きく体勢を崩してしまった。

「これって……!」

「バインドツ!」

体勢を立て直そうとする二人だったが、バインドをかけられ、ダメ押しに周囲にフェイトの射撃魔法である『フォトンランサー』が所狭しと展開されていた。

「二人とも、まだやる?」

「こ、降参です……!」

フェイトの最後通告に顔を引き攣らせながら二人は両手を上げて降参を告げた。

その後、スターズ、ライトニングの模擬戦の映像を見ながらフォワード陣の反省会が行われた。

スターズについては特に問題はなかったが、ライトニング、特にエリオの戦い方については賛否両論であった。

賛成側であるシグナム、スバルの意見は「近接型は近づいてなんぼ。近づくためには多少の無茶はしょうがない」というものであった。

また、反対側であるなのは意見については「小さいときからの無茶はダメだって」というものだった。

結局、今回の模擬戦で行われたエリオの『ライトニングフォール』についてはよっぽどのがない限り使用不可、ということになった。エリオは少し残念そうにしていたが、キャロと二人でフェイトに勝てたことをよろこんでいた。

そして、フェイトはそんな二人を見て嬉しそうに笑っていた。

おまけ

「さて、スバル。

チョットお話しようか」

「え、ちよ、なのはさん？」

「エリオの技って絶対スバルから影響受けてるよね。

そのことについてじっくりお話ししよう？」

「テイ、ティアナ！

助けて!!」

「……スバル、あんたのことは忘れないわ！」

「は、薄情者ーッ!!」

そんな会話を聞いたヘリパイロットがいたとかいないとか……。

第二十四話

とある研究施設にて、その少女は首を傾げていた。

「う〜ん……」

少女こと、戦闘機人No. 9『ノーヴェ』は先日であつた彼女のオリジナルといつてもいい少年、スバルのことで頭を悩ませていた。

「このなんか喉の奥に魚の小骨がつつかえたような感じ……」

何とかなんねえのか……」

そんな彼女の背後から近づく影が一つ。

ノーヴェの真紅とはまた違った赤色の髪をした少女、戦闘機人N

o. 11『ウエンデイ』だ。

「ノーヴェ、な〜に悩んでるんツスか？」

「なんだ、お前か」

ノーヴェのその態度にウエンデイは唇を尖らして抗議の声をあげた。

「なんだはないつすよ……」

せっかく相棒が心配してやってるっていうのに……」

「え？」

「え……」

ノーヴェはウエンデイの相棒という言葉に疑問の声を上げ、ウエンデイは彼女のその態度に落胆の声をあげた。

「なんすか、今の『お前が心配、明日は雨でも降ってくるんじゃないか』みたいな声は!?!」

「いや、明日はチンク姉のナイフが降ってくるんじゃないかとは思つたが」

「な〜お酷いつすよ〜!!」

ノーヴェのあんまりな言葉にウエンデイは涙目になりながらノーヴェに抱きついた。

そんな彼女の顔を手で押しつけようとするノーヴェだったが、どちらも戦闘機人として強化された肉体を持ち、結局はどちらからともなく離れることになった。

「それで、本当にどうしたツすか。

いつのもノーヴェエなら、『なんでもねえ!』で済ませるのに」

「……お前にはぜってー言わねえ」

「え〜!」

「なんでツすか!?!」

「だっってお前口軽いだろ」

「軽くないツすよ!!」

面白そうなことならペラペラしゃべるツすけど」

「それでよく口が軽くねえって言えるな!!」

「つまり、ノーヴェエの悩んでることはあたしにとって面白いことってことツすね!!」

「あ、しまった……」

ウエンデイの返事に、ノーヴェエは自分の失言を悟った。

その様子を見たウエンデイは自分の中でノーヴェエの悩むことについて絞り出していった。

「わかったツす!」

今日の晩御飯の当番がメガ姉ってことが悩みツすね!!」

「ちげえよ、なんであたしが晩御飯のことで悩まないといけねえんだ。

お前じゃあるまいし」

「酷い!?!」

「じゃあ、チンク姉と喧嘩したとかつすか?」

「なんであたしがチンク姉と喧嘩するんだ。

ありえねえだろうが」

「考えてみたらそうツすね。

チンク姉大好きっ子なノーヴェエがチンク姉と喧嘩するなんてありえないツすよね」

「非常に突っ込みたい発言があったが無視するぞ」

「あとは……」

あんまり思いつかないツすね。

せいぜいこの間あったタイプゼロの弟の方のことぐらいツすかね……」

「ッ！」

この時、ノーヴェエは自分の犯した痛恨のミスを悔やんだ。

この喧しい相棒のような少女にその反応を見られたことだ。

「お、なんか脈ありッすか〜？」

「な、何の事だか……！」

「知ってるッすか、ノーヴェエって嘘つくとき右上の方を向くッすよね……」

「え、マジか……あ」

「むふふ〜」

二度あることは三度ある。

ノーヴェエは今日だけでウエンデイに引っ掻き回されてばっかりだった。

「な、なんだよ……」

「諦めるッすよ、ノーヴェエ。」

もうネタは割れてるッすよ。

とつとつとゲロつちまつた方が楽になるッすよ〜」

ウエンデイからの追及に耐え切れなくなったノーヴェエはついに自分の胸に収めていた思いを吐露した。

彼女の思いを聞いたウエンデイは神妙に頷き、口を開いた。

「なるほど、そう言うことだったッすか。」

「ここはあたしも一肌脱ぐッすよ！」

「いや、お前は別に何もしなくてもいいから」

「そう言わずに！」

「まずはほかに意見を聞いてみるッす!!」

「はあ!？」

「ちよ、まてええー!？」

ノーヴェエの制止を無視してウエンデイは彼女の襟元をつかみ取ると、その場から走って行ってしまった。

「ん？」

ノーヴェとウエンデイが？」

『はい、何やらノーヴェがウエンデイに悩みを打ち明けたところウエンデイが暴走して……』

「ハハハ、彼女はどちらかというときセイン似になったのだろうね。」

いいじゃないか、あの二人はもともとコンビでの戦闘を行うのをメインにしている。

仲がいいのはいいことだよ、姉妹としても、コンビとしてもね」

とある部屋でスカリエツティは長女ウーノから二人についての報告を受けていた。

ウーノの少し不満気な表情に対するスカリエツティの顔からは嬉しさが滲み出していた。

「ノーヴェがタイプゼロ・セカンド……いや、あえてスバル君と呼ばせてもらおう。

彼と出会ったことは完全な偶然だったが、それはいい結果だったのかもしれないね」

『しかし、今のノーヴェには揺らぎが多すぎます。

このままだと作戦に支障が……』

「それも含めていいんだよ。

彼女のそれは人間としての心が育つているということだ。

君たちは戦闘メカじゃあないんだからね。

人としての揺らぎ、大いに結構。

彼女たちがどのように育っていくのか、私はものすごく楽しみだよ」

スカリエツティのとても楽しそうな表情を見たウーノはそれ以上何も言わず、一つため息を吐くのだった。

「まずはデイエチからツす！」

「いや、いきなり何の用？」

ノーヴェを引きずり回したウエンデイは研究所の中にあるメカニックルームに来ていた。

そこには戦闘機人No. 10『デイエチ』が自分の固有武装である『イノームスカノン』をばらしていた。

「実は、かくかくしかじかで」

「それじゃ伝わらねえだろうが」

「まるまるうまうまということか。」

ゴメン、私もそれはわからないかな」

「いやなんで伝わってんだよ……!」

「そうっすか、まああまり期待はしていなかったっすけどね。」

それよりも、デイエチは何をしてるっすか?」

ウエンデイはデイエチに尋ねる。

そんな妹をちらりと見ながらデイエチはイノームスカノンの整備を再開した。

「前にドクターの手伝いをしてね、その時に言われたんだよ。」

『自分の使うモノは出来るだけ自分で整備した方がいいよ。』

その方がどんな調子なのかつかみやすいからね』って

それでちよつと自分でやってみたら、いつも以上にやりやすくなつたから、それ以来自分でやるようにしてる」

「なるほど……。」

確かにそうかもしれないっすね。

それで、こつちのは何なんっすか?」

「これってガジエットI型……?」

それにこつちはIII型改のデータも……」

デイエチの言葉を聞いて頷くウエンデイと興味なさそうにしながらもしつかりと話を聞いていたノーヴェは彼女の机の端の方に置いてあつた端末に目を向けた。

「ああ、それはイノームスカノンの整備中にちよつと考えたんだ。」

ガジエットは数をそろえるためのものだったのはわかってるんだけど、さすがにあれだけの数があつて全部同じ装備するのは見栄えがしないからね」

デイエチはウエンデイから端末を受け取ると、あるページを開き、二人にも見せた。

「これはガジエットI型改つてところかな」

「なんかゴテゴテつけてるっすね」

「重そうな機体だな……」

二人の感想にデイエチは頷きながら言葉をつづける。

「これは言ってみればフルアーマーガジエットつてところかな。」

確かに機動性は極端に落ちるけど、その代わりにこの後付装甲イコライザに大量のエネルギー弾を詰め込める。

一回で全部打ち切れればいいだけの話だから、撃ちきったらそれで終わりの機体」

「なんでそんなん考えたんだ?」

ノーヴェのもとともな質問にデイエチは静かに答える。

「だってそっちがかっこいいじゃないか」

「え……?」

「フルアーマーは浪漫だつて、これに書いてあつたからね。」

それに、こっちのIII型改カスタムには私のイノームスカノンの改良型を乗せて……」

「ちよ、デイエチ?」

「どうしたツすか!」

「なんかスイッチ入っちゃったみたいだな……」

急に饒舌になったデイエチに驚くノーヴェとウエンデイだったが、彼女の話を聞き終えるまでの約一時間、ひたすら浪漫武器（いわゆる現実味のない巨大ロボの武装）について聞かされたのだった。

「うう〜疲れたツす〜」

「デイエチにあんな面があつたなんて……」

その後、メカニックルームから退散した二人が次に来たのはトレーニングルームだった。

今、その部屋の中では四人の少女たちがいた。

トーレ、チンクの上位ナンバーの二人と、つい最近目覚めたばかりであるNo. 8『オットー』とNo. 12『ディード』の二人。

今は、トーレとチンクの二人が対一で模擬戦を繰り返している最中だった。

「ちようどいいっす、あの二人に聞いてみるッすよ！」

「あの二人って……」

ウエンデイの向かった先にいる二人を見てノーヴェはため息を吐いた。

「オットー、ディード、ちよつといいっすか？」

「はい」

「なんででしょうか、ウエンデイ」

「実はノーヴェがかくかくしかじかというわけなんすよ」

ウエンデイの言葉にオットーとディードはお互いの顔を見て一言。

「ウエンデイ、そのような言葉では何を言っているのかわかりません。

もし言語機能に障害が出たのなら検査することをお勧めしますが」

「うくん、まだ二人には早かったっすかねえ？」

「いや、この二人はまだ起きてから一月も経ってねえから」

ノーヴェの突っ込みにウエンデイは「そうだったっすね、ならまだできなくて当然っす！」と呟いた。

そして、その言葉を聞いたディードがウエンデイに尋ねた。

「ウエンデイ、その技能は習得した方がよろしいのですか？」

「必要なら、僕たちも習得するように努力しますが……」

「そうっすね、まあ二人はまだ生まれたばかりっすから、少しずついろんなことを覚えていく方がいいっすよ！」

そのうち教えてあげるッすから！」

ウエンデイの言葉に二人は頷いた。

そうしているうちに、トーレとチンクがノーヴェたちのいる方向に向かって歩いてきていた。

「なんだ、二人とも。」

来ているのなら声をかければいいものを」

「いやー、お二人があまりにも真剣な表情で模擬戦をしていたツすか
らね。

声をかけるのをためらってたツすよ。

二人は何であんなに真剣にやってたツすか？

いつもなら軽く流す程度なのに」

「今日の夕飯、どちらが先に口をつけるかということだな。

模擬戦で負けた方が晩御飯を誰よりも早く口をつけるということ
にしていたのだ」

トーレの答えにノーヴェたちは首を傾げた。

オットーとデイドは無表情で、だった。

そんな妹たちの様子を見て、チンクは苦笑しながら説明した。

「今日の晩御飯の担当はクアットロだっただろう？

だから、何か仕掛けてくるだろうからな」

「あいつが担当の時の夕飯がどのようなものか、忘れたわけではない
だろう？」

「ま、まさか！

メガ姉が当番の時いっつも一番にトーレ姉とチンク姉が箸をつけ
ていたのは……！」

「妹たちをクアットロの魔の手から守るためだ。

どんなことでも飲み込んで見せるさ」

「話が逸れたな。

それで、ノーヴェはどうなんだ」

「……あたしたちはさ、ドクターの目的のために生み出されたんだよ
な。

ドクターの夢、叶えてやりたいって思ってる。

だけどさ、それと同じくらいにやりたいことができてる……」

ノーヴェはそう答え、そして。

（それも、自分のオリジナル……あいつのことが頭から離れない
なんてな……）

他の皆には言わずに、心の中でそう呟いた。

「あたしはどうすればいいんだろうな」

妹の疑問に姉であるトーレとチンクは微笑みながら答えた。

「なら、とにかくやってみるだけだろう。」

自分のやりたいこと、なすべきと思っただけだ。

どうすればいいじゃない。

やるかやらないか、だ」

「ちようど、例のマテリアルの反応が出たらしい。

ドクターに頼んでみたらどうだ？」

悩んでいるときには身体を動かすのが一番だ」

「いい、のかな……」

自分のやりたいことやって」

ノーヴェは姉の言葉を聞き、一人呟く。

そして、部屋の外へと向かって走り出していた。

「トーレ姉、チンク姉！

サンキュー！

ちよつと、ドクターに頼んでくる!!」

「あ、ちよつと待つツすよ、ノーヴェ!!」

「やれやれ」

二人が走って去っていったのを見届けた二人は苦笑しながら言葉を交わした。

「トーレ、さつきノーヴェに言ったこと、誰からの受け売りだ？」

「誰からでもない、これだ」

チンクの問いにトーレは懐から取り出した『友情、努力、勝利』を
題目とする週刊誌をチンクに渡した。

「これは？」

「ある管理外世界の雑誌だ。」

中々に面白いものが増えてな。

以前あの世界の近くに寄ったときに寄り道して買って来た。

それ以降続きが気になってな」

中々やめられんよ、とトーレは笑いながらそう呟いた。

チンクはため息を吐きながら隣に立つ姉に向かって口を開いた。

「私は近く、仕事が入ってくるはずだ。」

ノーヴェたちのことは頼むぞ、トーレ」

「ああ、当たり前だ。」

特にノーヴェはドクターが許可するなら初の実戦だ。

注意しておくさ」

「ドクター！」

「おや、ノーヴェ。」

答えは出たのかい？」

「なんでドクターが……ってそれはもういいんだ。」

マテリアルとレリックの回収、それにあたしも行っていいか？」

研究所に入ってきたノーヴェを認めたスカリエツティは手に持っていたコーヒーの入ったカップをテーブルの上に置きながら尋ねる。

ノーヴェはスカリエツティが自分が悩んでいたことを知っていたことに対して驚きを示していたが、すぐに気持ちを切り替えて、生まれて初めてのお願いをしていた。

「ノーヴェ、あなたの武装はまだ調整中よ。」

そんな状態であなたを出すことはできないわ」

「え……」

スカリエツティの隣に立つウーノからそう告げられて、ノーヴェはとても残念そうにうなだれていた。

そんな彼女を見ながらスカリエツティは笑う。

「ハハハ、ノーヴェも人間らしくなってきたね。」

そんなに行きたいのかい？」

「あ、アア！」

「ふむ、決意は固い、か」

なら、と呟きながらスカリエツティは端末を操作しあるものを呼び

出した。

部屋の壁の中からロボットアームを使い、あるものがスカリエツティの机の上に置かれた。

スカリエツティはノーヴェエは近くまで寄らせると、それを彼女に渡した。

「ドクター、それは！」

「これって……」

『プロトナックル』と『プロトエッジ』だ。

君の『ガンナックル』と『ジェットエッジ』の試作型だけど、性能は保証するよ」

スカリエツティはそう言いながら散らばった資料の中から一枚を取り出し、ノーヴェエに手渡した。

「その二つのマニュアルだ。」

「一つ約束できるなら、その装備で出ることを許そう」

「ホントに!?!」

「ああ、だけど君はまだ実戦経験はないんだ。」

いざというときのバックアップに徹すること。

それだけ約束してくれ」

スカリエツティは笑みを浮かべながらノーヴェエの頭に手を置き、髪を撫でた。

その笑みは、普段の彼が浮かべるような悪人顔ではなく、ただ一人の父親としての笑みだった。

「わかった」

「よろしい。」

さて、では協力者にも連絡を入れておくでしょう。

ルーテシアはともかく、アギトは私のことを信用はしていないだろうからね」

スカリエツティは肩を竦めながら部屋に置かれている通信機で通信を始めた。

「ノーヴェエ、その二つの装備はドクターが作ったとはいえ試作品です。決して無茶をしないように」

「わかったよ、ウーノ姉」

ノーヴェはそう言っつてその部屋を後にした。

その背中をウーノはどこか心配そうに見つめていた。

「ウーノ、チンクを呼んでくれないかな」

「チンクをですか？」

「わかりました」

ノーヴェが部屋を出ていつてからしばらくして、スカリエツティは眉間に皺を寄せて画面を睨んでいた。

「まさか、この私が出し抜かれるとはね……」

スカリエツティはそう呟くと、笑みを浮かべながらキーボードをたたき始める。

「いいだろう、ならば徹底的に潰させてもらおうとしようか！」

彼の見つめる画面には『type the end』、『type 5』と映し出されていた。

ルート分岐

スバルは薄く明かりの灯ったメンテナンスルームである作業をしていた。

彼の目の前に置かれたそれは、以前まで彼が使用していたローラーブーツ。

マツハキヤリバーとは別に、彼にとっては思入れのある品だった。

『この子が私の先輩ですか、相棒』

「ん？」

ああ、そうだ。

そして、俺が初めて自分の手で一から作り上げた最初の相棒」

外装を取り外して内部をむき出しにしていたそれを見ていたスバルはマツハキヤリバーの言葉に頷いた。

「やっぱり所々無理があったんだよな。

まだまだだったってことだ」

懐かしむように呟きながらローラーブーツの部品を手にとって異常がないかを確認する。

『ですが、相棒ともに走り抜けてきた。

今の私よりも、ずっと長く』

「なんだ、マツハキヤリバー。

嫉妬してるのか？」

スバルは愛機の言葉に苦笑しながら工具を手にとって部品を取り付ける。

『私たちデバイスに心があるのなら、そうでしょうね。

なんとなくですが、この子が相棒と駆け抜けた日々は到底かなわない。

それほどまで相棒とともにいれたことに対して羨ましいし、少し悔しくも思います』

あまりにも人間じみた言葉にスバルは目を見開き、驚き、そして相棒に声をかけた。

「まあ、こいつは俺の魔導師としての毎日を一緒に走ってきたからな。

まあ、今の相棒はお前だ、マツハキヤリバー。
今まではこいつが俺の相棒だった。
だけど今はお前が俺と一緒に走ってくれる。
これ以上のことは考えられないよ」

『相棒……』

わかりました。

いつか、一番のパートナーだと言われるその日まで私はあなたと一緒に駆け抜けます』

「今でもそう思ってるんだがな……」

『私が自分でそう言える時までということですよ。』

それまで、よろしくお願いします』

「おう、これからもよろしく頼むぞ、マツハキヤリバー」

スバルは愛機からの言葉をうれしく思いながらローラーブーツを見つめる。

「やっぱり、最後の部品が重要か」

本来、このローラーブーツはマツハキヤリバーの予備として取っておいたスバルだったが、マツハキヤリバーの頑丈性はピカイチであり、その必要性はないと感じていた。

そこで、彼は別の用法で再利用することを考えた。

『この子は相棒がまた使用するのですか？』

「いや、それはない」

マツハキヤリバーの言葉を聞いたスバルの頭の中には一人の少女が映し出されていた。

愛機の言葉を否定し、外装を取り付けたローラーブーツを持ちあげる。
「まあ、あいつなら扱えるだろうしな」

メンテナンスルームから出たスバルは、夜空の下、隊舎から寮までの道を歩いていた。

そんな彼にマツハキヤリバーが声をかける。

『そう言えば、相棒。』

何時ぞやの眼鏡をかけた女性から連絡はあったのですか？』

「ん？」

ああ、まだないな。

どうしたんだ、急に」

『いえ、相棒の軟派な態度に対して少し思うことがあったのですが……』

もしも、マツハキヤリバーが人間だったならため息を吐きながら出てきそうな言葉である。

そんな愛機の様子を疑問に思ったスバルはすぐに尋ねる。

「なんだよ、軟派な態度って」

『ティアナさんという女性ひとがいながらほかの女性に連絡先を教えるところですよ』

「いや、そこでなんでティアナが出てくるんだよ……。」

「だいたい、あいつは仕事上のパートナーであって、そういう関係じゃ……。」

『では、相棒は彼女のことを誰かに取られてもいいと考えているので？』

マツハキヤリバーの言葉にスバルは言葉を濁らせる。

『まあ、此処から先は相棒が自分で決めることです。』

私は一切関与しませんので』

『それでは』といながらスリープモードに入った愛機を見ながらスバルは「なんなんだよ、いったい」と呟きながら頭を掻く。

寮までの道を歩きながらスバルはマツハキヤリバーに言われたことを思い返していた。

ティアナのことをほかの誰かに取られてもいいのか。

その言葉を聞いたとき、スバルは彼女が自分以外の男と一緒に仕事

をしている姿を思い浮かべてみると、自身でも考えられないほどにイラつきが生まれていた。

「なんかいやなんだよな、それって」

そして、いったんティアナのことを頭の外へたたき出すと、もう一人の少女のことを考える。

以前町で偶然出会った少女。

名前すらも聞いていないが、どこことなく他人に思えないその少女のことを考える。

だけど、その途中で彼の頭に橙色の髪の少女がチラついた。

そのことに驚きを感じたスバルは二人のことを考えるのを意識してやめた。

だが、その後もずっと二人の顔のことが頭から離れなかった。

「あー、もう！

なんなんだよ、まったく!!」

頭を掻きむしりながら大声を上げるスバル。

そんな彼の携帯端末が不意に音を立てた。

「こんな時間に誰だ？」

スバルは端末を取り出すと、そこに映し出された番号を見て目を見開きながらも通話のボタンを押した。

ティアナルート 第一話

「さて、今日の最後の訓練は私との模擬戦ということだが、用意はいいな？」

「はい！」

いつもの如く、日課となっている早朝訓練最後の模擬戦。

この日のスバルの相手はシグナムだった。

スバルの返事を聞き、シグナムは愛剣『レヴァンティン』を構える。

「いい返事だ。」

では、来い！」

「行きます……ッ！」

掛け声とともに、スバルはその剣の間合いに飛び込んだ。

「はい、今日の訓練はここまで！」

みんな、お疲れ様！」

「「お疲れ様でした……」」

「お、お疲れ様……でした……」

訓練後のミーティングで、なのはに返事をするフォワード四名だったが、みな疲れ切っており、返事にも元気がなかった。

特にひどいのはスバルだった。

彼の場合は、身体中小さな切り傷だらけで、膝はガクガクと震えており、今にも倒れてしまいそうな様子だった。

「ちよつとスバル、大丈夫なの……？」

「し、シグナムさん、パネエ……」

こっちの攻撃全部切り払うし、逆に攻撃はこっちの防御ごと切り裂いてくるんだもん……。

マジ死ぬかと思った……」

「なんというか、ご愁傷様？」

「「お、お疲れ様です」」

「あ、あはは……」。

シグナムさん、いったい何本模擬戦やったんですか？」

四人の中では一番体力のあるスバルがここまでへばっているのを不思議に思ったのは後ろに控えていたシグナムに尋ねる。

「ん？」

「だいたい三本ほどだが？」

「シグナム相手に三本はきついよ……。」

スバル、よく頑張ったね……。」

「相変わらず容赦ないな、お前」

「何を言う、私は二本目で止めたんだが、スバルがあと一本と言つてな、仕方なしに三本目をやったんだ。」

ちなみに、最後の模擬戦の時、中々いい一撃を喰らわせてもきたがな」

フェイトやヴィータの言葉に反論しつつも、シグナムはスバルのことをほめていた。

「とりあえず、スバルはもちろんだけど、みんな。」

今日の訓練は厳しくしたんだけど疲れたかな？」

「え、ええ」

「実は言っていなかったんだけど、今日の訓練が第二段階の見極めのテストだったんだ」

なのはの告白に四人の顔は驚愕に染め上げられた。

「で、どうだったかな？」

「合格」

「はやつ」

なのはの問いかけに即答するフェイト。

あまりにも即答ぶりにスバルとティアナは声をあげた。

「ま、これでダメならそれも問題なんだけどな」

「その時は、また私たちが鍛えなおすだけだが」

「あ、あはは……。」

ヴィータとシグナムの言葉にエリオとキャロは苦笑い。

「というわけで、訓練の第二段階終了！」

みんな、よく頑張ったね」

「デバイスのリミッターも、一段階解除することになるから、あとでシャーリーのところに行ってきてね」

「明日からはセカンドモードでの訓練を中心にしてやっていくからな」

「はい！」

「つて、明日……?」

ヴィータの言葉にキヤロが首を傾げた。

「ああ、訓練再開は明日からだ。」

まあ、第二段階終了の褒美みたいなものだな」

「今まで一人一人の休みはたまにあったけど、みんなでの休みはなかったからね」

今日は私たちも隊舎で待機だから」

「今日はこの後はフルでオフだよ。」

街にでも行って遊んでくるといいよ」

教官たちからの言葉に新人四人が喜んだのは語らずともわかるだろう。

こうして、機動六課の休日は始まったのだった。

「ティアナ、あれとつてくれ」

「はい、これね」

「サンキュー」

「ああスバル、それ貸して」

「はいよ」

「ん、ありがと」

ヴァイスは目の前の光景を歯ぎしりをしながら見ていた。

あれやそれという言葉でレンチやドライバーを貸し借りしているスバルとティアナを見て彼は、”お前らどこの夫婦だ!”と叫びたい気持ちにかられた。

「これで良しつと。」

ヴァイスさん、工具貸してくれてありがとうございますございました」

「お、おほ。」

しっかし、いつ見ても見事なもんだよな。

そのバイク、お前が自分で作ったんだろう？」

ヴァイスは目の前に置かれているスバルのバイクを見ながらそう尋ねる。

「正確には俺たちですけどね。」

訓練校時代に皆で部品代出し合って一台作り上げたんです」

「それで、最後に所有権巡つての大乱闘。」

参加者はみんなまとめて教官の鉄拳喰らって沈黙しましたがけど、スバルがそれを勝ち取ったつてところですよ」

「ある意味ホラーだな、それって」

たった一つのバイクを求めて全員が敵のロワイヤル、B級映画も真っ青な状態である。

「いや、あの時の教官の拳骨はめっちゃくちゃ痛かった。」

全員が一撃でやられたからなく」

「あたしは参加してなかったけどね」

「な、なんというか、すごい人だな。」

お前らの教官つてのは。

まあ、お前らの昔話はいつでも聞けるからいいとして、早く行かねえと時間なくなっちゃうぞ」

ヴァイスは手を振って二人を早く行くようにせかした。

二人は彼の言葉に従ってバイクにまたがり、そのまま六課の出入り口に向かって走っていった。

そんな二人の背中が見えなくなるまで見ていたヴァイスは一言。

「青春しんでんなあ……。」

対して、俺には誰一人……。」

いいもんね、俺にはラグナがいるから！」

シスコン此処に極まれりといった感じの一言だった。

「二人とも、ハンカチは持った？
忘れ物はない？」

困ったことがあつたらすぐに連絡入れるんだよ？

あと、お小遣いは大丈夫？」

「あ、あの、フェイトさん」

「私たちも、もうお給料もらってますので……」

「あ、そうだったね」

「まったく、テストロッサの過保護ぶりもすごいものだな」

「ああ、まったくだ」

隊舎の玄関でエリオとキャロの身だしなみのチェックを行っていたフェイトに背後から声をかけたのはシグナムとヴィータだった。

「あ、二人ともどうしたの？」

「いや、私はこれから聖王教会の方へな」

「あたしは108部隊の方へな。

ナカジマ三佐が合同捜査の捜査本部を敷いてくれるって話でな。

あと、108の魔導師連中の教導。

まったく、教導官の資格なんて取るもんじゃねえな」

「でも、いやってわけじゃないでしょ？」

面倒くさそうに言うヴィータに、外から戻ってきたなのはがそう尋ねた。

その問いにヴィータはそっぽを向きながら「ま、まあな……」と答えた。

「あ、なのは。

スバルたちはもう行ったの？」

「うん、スバルの運転するバイクにティアナが後ろに乗ってね。

まあ、あの二人だから大丈夫だとは思うけど、ちょっと心配かな」

主にスバルがティアナに何か言っただけで途中で事故ったりしないかという方面で、となのはは心の中でつぶやいた。

そんななのはの胸の中にある言葉には気づかないフェイト

トはエリオとキヤロを送り出した。

「ひゃっほうッ！」

「やっぱり気持ちいいわね！」

こうガツンと飛ばすつてのは」

人っ子一人通っていない道を、スバルたちを乗せたバイクは制限速度ギリギリオーバーで走っていた。

その速さで感じられる風をスバルとティアナは存分に浴びていた。

「なんかこのままずっと走っていききたい気分ね」

「なんならこのまま走っていくか？」

別にそれでも構わないぞ？」

「んー、今日はいいかな。」

久しぶりに買いたいものとかあるし」

「そうかい、なら少しスピード上げるぞ！」

しっかり捕まってるよ!!」

「ちゃんと止まれるスピードでね!!」

そしてスバルがスピードを上げたために、ティアナは体制を崩さないようにスバルの背中に密着する。

その時、彼の背中にとても柔らかい二つのものが感じられたが、今はバイクの運転に集中することにしたのだった。

それから、約三十分走り続けたスバルたちは、目的の街へとたどり着いていた。

「うーん、やっぱりツーリングつてのは最高ね。」

ねえ、あんたもそう思うでしょ？」

バイクから降りてヘルメットを外したティアナは大きく伸びをしながらスバルに尋ねる。

「あ、ああ」

それに対してスバルは少し顔を紅くしながら答えた。

少し様子が変だと思ったティアナは彼に尋ねる。

「スバル、あんた体調でも悪いの？」

「いや、ちよつとな」

ティアナの問いにはぐらかす様に答えるスバル。

そんな彼に少し心配したティアナは彼に近寄る。

「ホントに大丈夫なの？」

本当のこと言いなさい」

「わかったよ……」

ティアナの問い詰めに観念したスバルは一度ため息を吐き、そして思っていたことを言い放った。

「ティアナつてき、着やせするんだな」

その直後、ティアナの顔が真っ赤に染まり、スバルの頬を思いつきり抓った。

「あんたは！

なんで！

そんなセクハラ発言を！

こんな公衆の面前でするの!!」

「い、痛い痛い!!」

すまん！

謝るから抓るのやめてー!!」

そんな会話を周囲の人々は暖かい目で見ていたそうだ。

ティアナルート 第二話

「なに、横転事故……？」

どうしてそんな案件が私のところに回ってきたんだ？」

地上本部の総指令室でレジアスは娘のオーリスの持ってきた資料に目を通して、そこに書かれた事故のことを尋ねる。

「いえ、ただの横転事故ではないらしいです。」

現在108部隊の捜査官からの報告で、事故にあったトラックは缶詰などの日用品を運んでいたそうですが……。

現場にガジェットと思わしき物体と、生体ポッドの残骸が放置されていたそうです」

「生体ポッドだと……？」

オーリスの報告にレジアスは眉を顰めた。

生体ポッドとガジェットの残骸。

この二つのものが関わる事柄など数える程度にしか存在しない。

「レリックがらみか……」

「そう考えるのが妥当かと。」

「どうなされます？」

「一課の人員を派遣しますか？」

「いや、この案件は108に任せよう。」

108の部隊長はナカジマ三佐だったな。

彼なら六課との協力で何とかしてくれるだろうからな」

「では、そのように」

「ああ、頼む」

レジアスが書類に必要事項を書き加えオーリスに渡すと、彼女は一礼して部屋を去っていった。

娘が出ていったのを確認したレジアスは机の引き出しからある一枚の資料を取り出す。

「聖王教会から盗まれた聖王の聖遺物紛失……。」

なぜ今頃になって地上に渡してきた、上層部の老害どもめ……！」
レジアスは資料を見ながらそう呟いた。

『そうか、そつちもちゃんと楽しんでんだな?』
「はい!」

シャーリーさんから渡された『これさえあれば一日楽しめるガイド』にあるところを一つずつクリアしていくつもりです!」
『クリアって……。』

まあ、何か困ったことがあれば連絡してくれ』

『そんなに離れてるわけでもないから、すぐに行けると思うわ』

「はい、ありがとうございます」

「その時はすぐにでも連絡しますので」

『わかった。』

じゃ、しつかり楽しめよ!』

街の公園のベンチに座って休憩していたエリオとキャロはスバルたちからの通信が切れたのを確認すると、互いに笑いながらベンチから立ち上がった。

「それじゃ、次のところに行こうか……ってアレ……?」

「どうしたの、エリオ君?」

歩き出そうとしたエリオは何か気になったのか、後ろを振り返った。

キャロはそんな彼にどうしたのか尋ねる。

「いや、今スバルさんにそっくりな人がいたんだけど……」

「スバルさんに?」

でもさっきまで通信してたでしょ?」

「そう、だよな。」

うん、見間違いだと思う。

パツと見たときの髪の色も違ったし……。

行こうか」

エリオはキャロの指摘に頷き、自分の中でも納得させた。

彼はキャロの手を握って、公園の出口に向かって歩いて行った。

反対側の出口に向かった二人組の少女に気づかず。

「マテリアルはこの街で行方が分からなくなった。」

その現場を見たかっただけ、案の定管理局がいたから、このまま私は予定地点に向かう」

「ああ、マテリアルにはレリックも一緒にあったんだろう？」

なら、例の部隊が来る可能性が高い。

あたしはそっちが目的だからな……。

ルーお嬢様には？」

公園を突っ切り、廃棄都市区画に入ってしまった二人は周囲に気を配りながら歩みを進めていた。

茶髪の少女——デイエチは隣を歩いているノーヴェエに答える。

「レリックの回収はお嬢様とガリユーがやるらしい。」

ノーヴェエはお嬢様の援護に入れる距離で待機だって」

「あまり近くにすぎるとあの融合騎が喧しいからな……。」

ノーヴェエは協力者の一人である失われた古代ベルカの遺産

『融合騎』である少女の顔を思い出したため息を吐いた。

「自分で行きたいって言ったのはノーヴェエ。」

ちゃんと仕事はやる」

「わかってるよ」

ノーヴェエの呟きにデイエチは「そう」と答えると、それ以降口を開くことはなかった。

しばらく歩き続けた二人は分かれ道でそれぞれの方向に足を向けた。

「じゃあ、私はこっちだから」

「おう。」

またあとでな」

「うん、また」

デイエチはそう言って背中に担いだ荷物を一度背負いなおしてから去っていった。

ノーヴェエは彼女が背を向けたと同時に反対の方向へと足を進めた。

「はあ……」

ノーヴェはここに来るまでの経緯を思い返していた。

相棒であるウェンディに本当のことを言えず、話がどんどん大きくなり、終いには自分が一番信頼している姉の一人にも本当のことを言わなかった。

「戦いたいつてのものもある。」

けど……」

ノーヴェは右手を一度握り込むと、自分の胸にあてる。

「あいつの戦いを見たいって思いが一番大きいんだよな……」

彼女の眩きはだれにも聞かれることなく風に流されていった。

「それにしても、このんびりした時間を過ごすなんて久しぶりだな」
「そうねー。」

いつも訓練で、休みをもらってもアンタは定期検査、あたしは遠出する手段がないから街に行くことはなかったしね」

一通り遊んだスバルとティアナは露店で売っていたフライドポテトをつまみながら多くの人がいる街を眺めていた。

「平和だな」

「そうね、事件とか起こってなきやいいけど」

家族連れやカップルで楽しんでいる人々を見ながらそう呟く二人。
そんな二人に声をかける者がいた。

「まったくだ。」

せつかくの家族サービスの日に事件が起きられては敵わん」

「……」

突然、背後から聞こえてきた声に対して無言で振り向く二人。

二人の後ろに立っていた男性を見て、二人は驚きの声をあげた。

「いきよ、教官!?!」

「おう、久しぶりだな。」

ナカジマにランスター」

してやったりという感じの笑みを浮かべながら男性——キョウ・

カーンは二人の名を呼んだ。

「あ、あの。」

「なんでここに……?」

「さっきも言っただろう、家族サービスだ」

「え、じゃあそちらにいらっしやる方が……?」

ティアナはキヨウの言葉に反応し、彼の隣に立つ女性とその女性の後ろに隠れている4歳くらいの子供に目をやった。

「ああ、妻のイリヨウと娘のケイだ」

「妻のイリヨウです。」

あなたたちのことはキヨウからよく聞かされてたわ」

「ど、どうも」

「ほら、ケイも」

イリヨウは自分の足にしがみついている娘を促した。

母に背中を優しく押された女の子は恐る恐る前に出て小さな声で自己紹介をする。

「け、ケイです……」

それだけ言うと、ケイは再びイリヨウの後ろに隠れてしまった。

「あらあら、ごめんなさいね。」

「この子、少し人見知りだから……」

「いえ、可愛らしい娘さんですね」

「そうだろう、イリヨウに似たんだと俺は思ってる」

自慢げにそう言ってきたキヨウを見てスバルが驚きの声をあげた。

「教官が優しい笑顔を……!」

「お前は俺をなんだと思ってたんだ……?」

「え、あ、あはは……」

スバルの呟きを聞いたキヨウは、教官としての射抜くような視線を彼に向ける。

三年ぶりのその視線に貫かれたスバルは冷や汗を流しながら目をそらした。

「ところで、お前らは確か機動課に配属になってたんじゃなかったのか?」

「あ、はい。」

機動六課の実戦部隊として配属になってます」

「毎日戦技教導官の訓練でしごかれてますよ……」

「機動六課の戦技教導官って言えば……」

スバルの言葉にキヨウは何かを思い出す様に呟く。

「高町なのは一等空尉です。」

確か、教官と隊長は面識があるとか？」

「ああ、思い出した。」

無茶して落とされそうになったあのチビツ子か」

キヨウはティアナの指摘に手をポンと叩き合わせる。

チビツ子発言にスバルとティアナは苦笑いを浮かべた。

「じゃあ、今日はオフってところか？」

「はい、ここのところ休みがなかったからって」

キヨウの疑問にティアナが答える。

すると、意外な人物が爆弾を放り投げてきた。

「あら、じゃあ二人は休みを利用してデートしに来たってところかしら。」

お邪魔しちゃったかしらね？」

「で、デートツ!?!」

「あら、違ったの？」

爆弾を放り込んだイリヨウは腕の中で眠ってしまったケイを抱きながら首を傾げていた。

デートという言葉に顔を真っ赤にするティアナとスバル。

特にスバルはティアナの女性としての特徴を先ほど（故意じゃないとしても）味わった感触を思い出して、頭の中の回路が一気にショートしてしまった。

「す、スバルとはただの仕事のパートナーで、べ、別に恋人とかじゃ!!」

「あら、予想外に食いついてきたわね。」

そんなに反論するってことは、彼のこと少しは意識してるってことじゃないの?」

「だ、だから!!」

あーもう！

スバル、あんたからも……つて!!」

「こいつなら今使いもんにならんぞ」

イリヨウのからかいに翻弄されたティアナはスバルにも何か言うように彼の方を向いたが、先ほどのショートから未だに立ち上がっていないスバルを見て頭を抱えた。

「イリヨウ、これ以上俺の教え子をからかわんでくれ。

特にこいつは生真面目だから」

「あら、それじゃあ仕方ないわね」

キヨウからの注意に本当に残念そうにイリヨウはそう言った。

「えっと、ティアナちゃん？」

「……はい」

「そうブスツとしないの。」

せつかくの可愛らしい顔が台無しよ？

はい、これ」

イリヨウは頬を膨らましていたティアナに一枚のメモ用紙を渡した。

「これ、なんですか……？」

「私の連絡先。」

何か困ったことがあつたら連絡ちようだい。

相談ぐらいなら乗ってあげられるから」

「じゃあさっそくお願いできますか？」

「あら、何かしら？」

「ここでショートしてるスバルを再起動させたいんですけど、何かいい案ありませんか？」

ティアナはぶっきらぼうにそう尋ねた。

イリヨウは「あら、そんなの簡単よ」と答えてケイをキヨウに預けてスバルに近づき、

「おばあちゃん直伝。」

斜め45度からのチョップ！」

「え……」

チヨップした。

言葉通りにきれいな45度の角度から彼の頭に向かって軽い打撃を与えた。

「あ、アレ？」

「俺何してたんだけ？」

「うそ、あんなので治るの……?」

「案外人ってのはこうすることで正気に戻ったりするのよ。」

キヨウが結婚式の時にフリーズしたときもそうだったし」

「ちよ、イリヨウ。」

その話をこいつらの前で……」

まさかの妻から自身の恥ずかしい話をされるとは思っていなかったキヨウはイリヨウを止めようと彼女に近づいたとき。

『こちら、ライトニング4。』

緊急事態につき、現場の方向をします。

サード・アベニューF-23路地裏にてレリックらしきケースを発見、ケースを持っていた5、6歳の少女を1人保護。

少女は現在意識不明。目立った外傷は無し、指示をお願いします」

マツハキャリバーとクロスミラージユから緊急事態を告げる連絡が届いた。

「サードアベニュー……。」

「ここから近いな」

「すぐに向かわないと。」

「教官たちは……」

「俺たちのことは気にするな。」

「自分たちのやるべきことをしっかりこなせ」

「二人とも、ケガしないようにね」

キヨウは教官や父親としての顔ではなく、歴戦の戦士の顔で二人に告げる。

その横でイリヨウは心配そうな表情で二人を見ていた。

「はい！」

スバルとティアナは二人に一礼するとすぐにその場から走り去つ

ていった。

機動六課の短い休日は終わりを告げた。

ティアナルート 第三話

機動六課指令室

「ゴメン、遅れた！」

状況は？」

「たった今、高町隊長とフェイト隊長、シヤマル先生が現場に到着。保護した少女の検査を行っているところです」

「そうか、ありがとうな。」

シヤマル、どないな感じや？」

指令室に飛び込んだはやては副官であるグリフィスから報告を受けると、通信機でシヤマルにライトニングが保護した少女の容体を尋ねる。

『バイタルは安定してる……。』

危険な反応も無し……。

大丈夫です！』

「そうか。」

なら、いったんその子とレリックをへりに搬送してくれる？」

『はいー！』

「さてと、みんなは現場検証をお願いね。」

本当は私たちが行くべきなんだろうけど……」

「私もなのはも、下水道っていう限定された空間での戦闘はあまり得意じゃないから」

シヤマルが少女の検査を行っている最中に、現場に到着したなのはとフェイトはフォワード四人に指示を出していた。

「私は砲撃魔導師、フェイトちゃんは高機動魔導師だからね……。

狭い空間では一人の方がやりやすいってタイプだから……」

「なのはちゃん、この子をへりまで運んでくれる？」

「あ、はい」

シャルルからお願いされたのはは寝かせていた少女を抱き上げる。

「それじゃ、下のことは任せたよ。」

「私たちもたぶん空で待機することになるから、頑張って」

「はい！」「」

「さてと、みんな。」

「短い休みは堪能したわね？」

「切り替えていくぞ。」

「しつかり仕事はしないとな」

「はい！」

『『『Standby ready』』』』

「『セットアップ！』」

四人同時にバリアジャケットを展開。

路地裏の一角に一際明るい光がともされた。

「下水道つてだけに臭いな……」

「まだ臭いだけなんだから我慢しなさい。」

「汚れはバリアジャケットのおかげでつかないんだから」

「下水道に降り立った四人はその臭いに顔をしかめていた。」

「レリックの予想位置は、此処かどれ位離れてるの？」

「そこまで遠くはありません……！」

「動体反応、ガジェット来ます！」

「ッ、散開！」

「各個に撃破！」

「一分で片づけるわよ!!」

「はいっ！」

「おう！」

ケリユケイオンからの警告と同時にティアナが指示を出す。

ガジエットの姿が現れると同時に橙色の魔力弾が戦闘のガジエットI型三機を貫き、爆散させる。

「フリード！」

ティアナに続くようにフリードの口から火球が吐き出され、装甲の薄いガジエットI型は炎に包まれた。

そして、その炎を突き抜けたスバルとエリオが残されたIII型を捉えた。

「行くぞ、エリオ!!」

「はい、スバルさん!!」

『Load cart ridge』

二人のデバイスから魔力が溢れだす。

スバルは暴れ出そうとする魔力を右足に集中させエリオの背中に蹴りを放つ。

そして、彼のすぐ隣を走っていたエリオは自分の背中に向かってくるスバルの右足を足場にする。

「行けえ!!」

「はあぁーッー！」

右足に加速魔法を使用したスバルの蹴りによる加速と、ストラダーのブースターによる加速によって、エリオは駆け抜けた。

その速度は、III型のカメラには捉えられず、III型が自分の装甲に接触反応を感じた瞬間、機体は真ん中から真っ二つに切り裂かれ、崩れ落ちた。

「よしー！」

「やりましたよ、スバルさん!!」

兄貴分であるスバルとの初めての合わせ技を成功させたエリオは喜びの声を上げ、二人はハイタッチを交わした。

その様子を見てティアナは一言。

「エリオの汚染が広がってる……」

『こちらロングアーチ^{ゼロ}。』

みんな、聞こえる?』

『スターズ1、ライトニング1、聞こえています』

「フォワード四名、オーケーです」

入口付近でガジェットを撃破した四人はレリックの予想地点に向かっていている途中に、はよてからの全体通信を受けた。

『よし、ならちよつとした報告や。』

まず、なのは隊長とフェイト隊長はこれから沿岸部に向かってもらう。

敵性目標……まあ、ガジェットⅡ型の編隊が向かってきてるからそつちに向かつてもらう』

『スターズ1、了解』

『ライトニング1、了解。』

でも、フォワードのフォローはどうするの?』

『そつちにはあたしが向かう』

フェイトがはよてに尋ね、その答えを告げる前に途中でヴィータが通信を割り込んできた。

『ナカジマ三佐が許可をくれた。』

それから……』

『陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹です。』

別件での捜査に当たっていたのですが、そちらとの関連性も有りそうなので協力させてもらいます』

「姉貴……?」

予想外の人物の参加に驚きの声をあげるスバル。

『了解や。』

リインはヴィータと合流してな。

フォワード陣はギンガと一緒にレリックの捜索に』

『はいですー!』

「了解しました。」

ギンガさん、こちらの位置をそちらに送ります。
準備はいいですか？」

『わかった。』

位置確認、どこに向かえばいいのかしら？」

「キャロ、レリックの予想地点までに合流できそうな場所は？」

「ポイントF92あたりなら大丈夫そうです」

ティアナはキャロの返事に頷き、ギンガにそのポイントの情報を送る。

ギンガは「なるべく最短距離で向かうわね」と言うのと通信を切った。

「ギンガさんって、スバルさんのお姉さんなんですよね？」

「ああ、年齢も階級も二つ上で、俺の格闘技の姉弟子ってやつだな。

一回も勝てたことがないけど。

まあ、心配しなくてもいいぞ。

たぶん二人とも可愛がられるから（いろんな意味で）」

「え……？」

スバルのボソつと言った最後の言葉を聞きそびれたキャロは首を傾げる。

そんな三人にティアナは注意を呼びかけた。

「ほら、こっちからポイント指定したのに遅れたら失礼でしょ。

さっさと行くわよ」

「はい！」

「了解つと」

リーダーからの注意を受けた三人はスバルを先頭に下水道を走り抜けていった。

ティアナルート 第四話

闇を青色の道が切り開く。

「ぜええいッー！」

一筋の光となったスバルの蹴りがガジェットを吹き飛ばし、その先にいた数体のガジェットを巻き込み倒れる。

そこにスバルは容赦のない砲撃を撃ちこんだ。

「スバル、後ろー！」

「ッ……いー！」

ティアナからの警告に従い、すぐさま回避行動をとると、そこにⅢ型のアームが振り下ろされた。

下水があたりに撒き散らされる中、ティアナの弾丸がⅢ型のコアを撃ちぬく。

「イライラするのはわかるけど、集中しなさい。

じゃないと……」

「……わかつてるよ」

ティアナの注意にスバルはぶつきらぼうに答える。

彼がこのようにイライラしているのは先ほど、ギンガからの報告にあった、ある言葉に対してだった。

ギンガはとある横転事故の現場検証に立ち会っていた。

その場にあっただのはガジェットと、小さい子供程度の大きさのものが入る生体ポッド。

この二つの要因から導き出されるのは……人造魔導師。

「あんたの身からしたら、到底我慢できることじゃないってのはわかるけどね」

「……」

エリオたちが保護した女の子はその人造魔導師の素体として生み出された可能性が高いということだった。

そして、その言葉を心底嫌っている人物も多かった。

スバルもその一人。

「ティアナさん、こっちは終わりました！」

「よし、先に進むわよ。」

スバル！」

「わかった……とまれ！」

ティアナに促されて先頭を進もうとしたスバルだったが、すぐに他の三人に静止を呼びかけた。

「何か来る……！」

「何かって……ッ！」

スバルの言葉に首を傾げるティアナだったが、その直後に彼らの目の前の壁が崩壊した。

すぐに戦闘態勢をとる四人だったが、その奥から出てきた人物を見てすぐに警戒を解いた。

「姉貴……！」

「ギンガさん！」

「久しぶり、スバル。」

ティアナも

壁をぶち抜いて彼らの目の前に現れたのはスバルの姉であり、今回の捜査協力者であるギンガだった。

その豪快な登場の仕方にエリオとキャロは呆然としていた。

「というか、局員が公共設備ぶっ壊してくるなよ……」

「え、だって最短距離で来るなら一直線に来た方が早いじゃない。」

それに、ここはもう廃棄都市区画だから問題なし」

「いや、問題ありすぎじゃ……」

「その前にスバルはギンガさんのこと言えないわよ」

壁を壊して進路を確保してきたというギンガにスバルが詰め寄るが、そんな彼にティアナは言葉を投げかけた。

「え……？」

「あんた忘れたの？」

前の部隊で火災現場で救助活動中に突入口がないからって壁に砲撃で穴開けたじゃない」

「……そうでした」

こういったとんでもないことをしでかすところはやはり姉弟だな、
と思ったティアナは悪くないはずだ。

ギンガのことを不思議そうな視線で見っていたエリオとキャロに氣
づいたティアナは一度咳払いをして空気を切り替えた。

「ギンガさん、こっちの二人が今の私たちのチームメイトのエリオと
キャロです」

「あら、ずいぶん可愛らしいチームメイトね。」

ギンガ・ナカジマよ、よろしくね」

「エリオ・モンディアルです、よろしくお願いします！」

「キャロ・ル・ルシエと、フリードリヒです。」

よろしくお願いします」

ギンガが微笑みながら二人に挨拶すると、二人は慌てて返事をす
る。

「ちなみに、俺のシューティングアーツの師匠でもあるから、かなり強
いぞ。」

怒らせたらひどい目に合うから気をつけるよ？」

「あら、スバル？」

この間の続きをしたいのかしら？」

ギンガの笑顔の裏側に潜む怒気を感じ取ったスバルは冷や汗をダ
ラダラ流しながら誤解を解こうとしたが、その前にティアナが疑問を
口にした。

「ギンガさん、この間って？」

「前の検診の時にね……」

「——ッ、動体反応来！」

ガジェット、来ます！」

ギンガのティアナに対して口を開こうとした直後、キャロの警告と
ともに突き当りの曲がり角からガジェットが飛び出してきた。

「姉貴——」

「話はここまでね。」

ティアナ、指示出してくれる？」

「わかりました」

ガジェットから放たれた攻撃を後ろに飛び退くことで回避する三人。

ガジェットの数を確認したティアナはすぐにギンガとスバルの二人に指示を出した。

「私がいまず風穴を開けます。」

エリオはその隙に奥まで切り込んで。

スバルとギンガさんはそこから穴を広げてください」

「了解！」

「ギャロ、抜けてくる奴は任せるわよ？」

「はい！」

瞬時に出された指示に従い、前衛の三人はティアナの橙色の砲撃によつてこじ開けられた風穴に突っ込んでいった。

「タアアッ!!」

ギンガの声とともに繰り出された蹴り落としがガジェットを地面に叩き付け爆散する。

「姉貴ッ！」

「ッ！」

その背中を狙っていたI型のコアをスバルの右腕が貫き動きを止める。

二人はそのまま背中合わせで周囲を見回し、同時に同じ方向に駆け出した。

「スバル、TNF、行けるわよね？」

「もちろんッ！」

ギンガは横目で隣を走るスバルに尋ねる。

その返答は彼女が予想していた通りのものだった。

「リボルバーシユート！」

合図無しに同じタイミングで放たれる二つの魔力弾が彼らの標的とされたIII型の腕を吹き飛ばす。

腕を吹き飛ばしたときに周囲に撒き散らされた煙に紛れてスバルがⅢ型の上を飛び越し背後をとった。

「スバル！」

「ドンピシャッ!!」

Ⅲ型がギンガとスバルのどちらかを排除するべきかの判断を下す時間を与えずに二人は拳をⅢ型に叩き込む。

「ナツクル……」

「ジエツト……」

叩き込まれた拳に魔力が集中し、彼らの腕に装着されたりボルバーナツクルから二発の空薬莖が排出される。

「バンカーツ！」

「マグナムツ!!」

前後からの挟撃によって内部を蹂躪されたⅢ型は二人が拳を引き抜くと同時にその巨体を四散させた。

「……………」

そのあまりにもの手際の良さにエリオとキャロは驚愕していた。

「ああ、エリオとキャロはギンガさんとスバルのコンビは見たことなかったんだっけ？」

「はい、スバルさんから聞いたくらいで……」

「まさかあそこまで息がぴったりだなんて、思ってもいませんでした……………」

ティアナは二人の反応に苦笑しながら応える。

「ギンガさんとスバルのシューティングアーツの師匠って誰か二人は知ってる？」

「あ、はい」

「確かお二人のお母さんでしたよね？」

「そう。」

そのお母さんにシューティングアーツの模擬戦で勝てるように二人で考え出したのが、さっきのコンビネーション攻撃。

二人は『TFN』シューティングアーツフォーメーションって言ってるけど」

ティアナは少し前の方で先ほどのコンビネーションの感覚を言い合っているギンガとスバルを一目見て、言葉を続けた。

「ま、ギンガさんとスバルの姉弟きょうだいとしての阿吽の呼吸ってのもあるんだらうけど、あれだけのコンビネーションをやったのけるってのはすごいわよね」

ティアナの「少し悔しいけど」という呟きはだれにも聞かれることはなかった。

ティアナルート 第五話

「スバルさん、さっきのコンビネーションっていくつかパターンがあるんですか?」

ガジエツトの集団を撃破した五人はキャロの指示に従ってレリツクのあるであろう場所に向かっていった。

その途中で、エリオは先ほどのスバルとギンガのコンビネーションで感じた違和感を尋ねていた。

「どうしてそう思った?」

「えっと……なんとなくですけど、スバルさんやギンガさんの攻撃の選択肢がいくつか取れるように感じたから、です」

スバルはエリオの答えを聞くと、笑いながら彼の頭を乱暴に撫でまわした。

「わわっ!」

「よく見てるじゃないか、偉いぞエリオ」

スバルはエリオの頭を撫でまわすのを止め、彼の頭を二度ポンポンと叩きながら彼の質問に答えた。

「さっきのはVer. 38だ。」

「ちなみにTNFは108式まである」

「ええッ!」

「そんなにあるんですか?」

スバルとエリオの少し後ろを走っていたティアナは隣に並走するギンガに尋ねる。

「さすがに108はないけど、50くらいはあるわよ。」

お母さんと模擬戦をするようになってほしい二日に一回は新しいパターンを考えていたから」

「けど……」とギンガは苦笑しながら言葉を続けた。

「一回も勝てなかったのよね。」

さっきやったのも、私とスバルの前後からの同時攻撃も軽く捌かれ

「ちゃったのよ」

「話を聞いて思ったんですけど、ギンガさんとスバルのお母さんってものすごい人なんじゃないんですか……?」

ティアナの問いにギンガは嬉しそうに笑いながら「ええ、すごい人だったわよ」と答えた。

「キャロ、そろそろじゃない?」

「はい。」

この先にレリックの反応がありません」

下水道を駆け抜けてきた五人は少し広い空間に出ていた。

「よし、なら手分けして探しましょう。」

この広さの空間でレリックを見つけるとなると大変かもしれないけど」

ティアナは周りを見回しながらため息を吐いた。

彼らのいる空間はそれなりの広さの場所だった。

砂漠から特定の砂粒を探すほどの難しさはないが、結構骨の折れそうだということは確かである。

「何があるかわからないから、気をつけろよ」

「はいー!」

「ふふ、了解」

エリオとキャロはスバルの注意に頷き、ギンガは弟の成長を嬉しそうに微笑みながら答えた。

「はあ……。」

なんで休日返上して下水道で探し物してるんだろうな……」

「しようがないでしょ、それが仕事なんだから」

二つのグループに分かれてレリックの探索を行っていたスバルたちだったが、暗い下水道という環境で探し物をするというストレスに耐え切れなくなったスバルが愚痴を零した。

「探索魔法でも使えば一発なんだけど……まあ、無理か」

「レリックが反応したらどうなるかわからないから無理ね」

「はあ……」

二人そろってため息を吐く。

「教官たちは今頃家族で楽しんでるんでしょね」

「前から思ってたけど、教官ってどうやってイリヨウさんと出会ったんだろうか……」

「案外、教官が若いときに入院してそのままゴールインって感じだったりして」

「くしゅん！」

とある店の中で男女が同時にくしやみをした。

「誰か噂でもしてるのかしら？」

「イリヨウは美人だからな。」

話題が上がってもおかしくはないか」

「それより、あんた帰りに研究所によりたいって言ってたけど、どこか体の具合でも悪いの？」

「いや、例のパーツが出来上がったって博士から連絡があつてな。」

それを受け取りに行く」

「それって……」

「あ、ありました！」

口を開こうとしたティアナだったが、キャロからレリックの発見の知らせが届くのを認めると、口を閉じてキャロの方へ足を運んだ。

「ん？」

彼女に続いてキャロの方へ行こうとしたスバルだったが、彼の耳に何か地面を蹴りつける音が聞こえてきた。

「なんだ……？」

スバルは周囲を見回したが、彼自身はもちろん、ほかの誰一人とし

て飛び跳ねたりはしていなかった。

そして、先ほどよりも一際大きな音が二度聞こえてきた直後、彼の視界の隅、正確にはキャラコの背後の空間が歪んだ。

「キャラコッ!!」

「え……きやあああ!?!」

スバルが咄嗟に警告を飛ばすが、キャラコがそれを理解する前に歪んだ空間から魔力弾が放たれ、彼女のすぐそばに着弾した。

「キャラコ、大丈夫か!?!」

「だ、大丈夫です……」

でも、レリックのケースが……!」

キャラコの視線の先にレリックのケースが転がっているのを見たスバルは舌打ちをしながらもキャラコに攻撃を加えた何かがある空間を睨みつける。

「でやああああっ!!」

エリオが一気に加速し、その空間に入り込みストラーダを一閃。

そのまま距離をとってスバルとキャラコの近くに着地した。

「クッ!」

だが、先ほどの一瞬の間にエリオの頬に一筋の切り傷が走っていた。

「エリオ君!」

「大丈夫」

エリオは駆け寄ったキャラコを止めるように手を広げる。

スバルはエリオたちから少し離れたところでエリオが切りつけた空間に視線を向ける。

すると、歪みが次第に薄くなり、人型の何かが立っていた。

(スバル、少しでも動きを見せたら一撃決めるわよ)

(わかった)

人型の反対側にいるであろうギンガからの念話にスバルは了承の意を伝えた。

人型が姿を現してから数十秒、どちらも動かずに互いの動きに注視していた。

スバルとギンガは人型から発せられる気配を警戒し、人型は前後を挟んでいる二人を警戒していた。

だが、その均衡は崩れた。

「あッー」

キャロがレリックのケースに近づく足音に気づき、そちらに駆け寄ったのだ。

レリックのケースに手を伸ばしたのは、キャロやエリオと変わらな
いであろうほどの年の紫の長髪の少女。

その少女は彼女の足もとにあるレリックのケースに手を伸ばそう
としていたキャロに手を向けた。

「邪魔……」

「ッ、きやあああ!?!」

単純な魔力放出。

だが、不意を突かれたキャロは咄嗟に障壁を張るが、圧倒的な魔力
の奔流は障壁ごとキャロをたやすく吹き飛ばした。

「キャロッ!?!……うああッ!!」

「ッー」

「スバルッ!!」

吹き飛ばされたキャロを受け止めようとしたエリオだったが、衝撃
を逃がすことができずにそのまま近くの柱に叩き付けられた。

そして、スバルは二人の方へ意識を傾けてしまい、その隙を人型が
逃すはずがなかった。

人型がスバルに接近し、その腕から伸びる突起がスバルに迫る。

「こなくそッ!!」

「ッー」

スバルの腕にめがけて突き出された突起を人型の懐に飛び込むこ
とで、狙いをずらし逆にスバルの攻撃範囲に人型を捉えた。

「姉貴ッ!!」

「タアアッ!!」

突起が肩を霞めながらスバルは人型の腹に拳を叩き付ける。

スバルの拳をもろに受けた人型は後ろに吹き飛ばされ、さらに後ろ

から迫っていたギンガに壁際まで蹴り飛ばされた。

キヤロとエリオを吹き飛ばした少女は足元に落ちているレリックの入ったケースを手にとってその場を去ろうとした。

「ごめんね、乱暴で」

だが、彼女の首に橙色の魔力刃が突きつけられ動きを止めざるを得なかった。

少女が魔力刃の発生源を目で追うと、背後からティアナが現れた。「でもね、これ本当に危ない物なの。」

渡してもらえるかな？」

ティアナは少女の動きに気を配りながら、そのように告げた。

何があってもすぐに取り押さえられるように。

「スターレンジホイール!!」

刹那、彼女の視界は白く染まった。

突如として放たれた妨害魔法によってティアナをはじめとしたフォワードメンバーは視覚と聴覚を潰された。

「ぎゃあ!?!」

そして、視界を潰され、状況の把握すらも困難になったティアナは壁際から一気に接近してきた人型に蹴り飛ばされ少女との距離を離されてしまう。

ぼやける視界の中、クロスミラージユを構え魔力弾を少女に放つも、人型が身を挺して防いでしまい、その肩の甲殻を砕くだけという結果になってしまった。

「ティアナ、大丈夫か!?!」

いち早く回復したスバルとギンガがティアナのそばに駆け寄る。

「ええ、大丈夫よ。」

でも……」

ティアナはよろよろと立ち上がり、目の前の少女と人型に視線を飛ばす。

「つたくもー。」

あたし達に黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ、ルーラーもガリキューも」

その時、天井付近からの声とともに小さな影が降りてきた。

「アギト……」

「ホントに心配したんだからな」

ルーラーと呼ばれた少女はその小さな助っ人の名前を呼ぶ。

小さな影——融合騎アギトはスバルたちに背を向けて少女たちに話しかける。

「ま、もう大丈夫だぞルーラー。」

何しろこのあたし！

烈火のお、劍精！

アギト様が、来たからな!!」

アギトの掛け声とともに彼女の周囲に縮小版の花火が上がる。

ただでさえ暗い下水道の中で光らせるものだから、スバルたちの方からでもその模様がきれいに見えていた。

「芸が細かいな、おい……」

スバルの言葉に突っ込むものは誰一人としていなかった。

「オラオラあ！

お前らまとめて、かかってこいやああつ！」

「じゃあ、遠慮なくそうさせてもらうわ」

アギトの威勢のいい啖呵の直後、ティアアナが指を鳴らす。

刹那、アギトたち三人（？）の周囲に数十を超える魔力弾が姿を現した。

「備えあればなんとやら。」

さて、動かないでね？

うっかりレリックに当たったりしたらごつちも洒落じやすまないから」

ティアアナはとても素晴らしい笑顔でそう告げた。

ティアナルート 第六話

彼女ノーヴェはそこでじっと待っていた。

光の通ることのない下水道の一つで。

『はあ、いい、ノーヴェちゃん。』

ちゃんとお仕事してるかしら？』

「ちゃんとやってる」

彼女の耳にあまり聞きたくないタイプの声が聞こえてきた。

だが、自分から言い出したことなので文句は言わない。

『そう？』

ならいいんだけど……』

「ああ、ちよつと待って。」

お嬢様たちが魔力弾に囲まれた」

彼女の目の前に一つのモニターが浮かび上がった。

ぼんやりと光るモニターを見つめたノーヴェが姉に指示を求める。

「どうすればいい？」

魔力弾あの大半は外側かたちだけのからっぽだ。

だけど、お嬢様たちには」

『ま、わからないでしようね。』

こっちはディエチちゃんちゃんのサポートで動けないから、ノーヴェちゃんが助けてあげてね。

でも、ドクターに言われたことは』

「あくまでもサポートに徹する。」

わかってるさ」

クアットロは『それじゃあね』と言って通信を切った。

通信が切れたことを確認したノーヴェはモニターも消し、再びその空間は闇に包まれる。

「IS発動『破壊する突撃者』』

眩くような小さな声で紡がれた言葉とともにノーヴェの足もとに魔法陣とは異なるテンプレートが展開する。

「エアライナー、展開」

ノーヴェエが右手を振るうと同時にスバルたちのウイングロードと酷似した道が創られる。

ノーヴェエは認識阻害用のマントとサングラスをしっかりと着用し、静かに駆け出した。

「クウ……いー」

大量の魔力弾に囲まれたアギトは悔しそうに唸り、ルーテシアもまた悔しそうに表情を歪めていた。

ルーテシアのそばに立つ人型——召喚虫ガリユーはどうかにかして魔力弾を突破しようとするが、彼の足もとに彼らを囲んでいる魔力弾のうちの一発が撃ち込まれる。

「動かないでって言うてるの。」

そこの、召喚獣と同じなら人の言葉がわかるわよね？

ご主人さまの安全のためには、動かない方が身のためよ？」

ティアナの言葉とともに一発の魔力弾がルーテシアの周囲に集められる。

それを見たガリユーは構えを解いた。

「スバル」

「あいよ」

ガリユーに戦闘の意思が無いことを認めたティアナは相棒の名前を呼び、スバルは彼女の言わんとしていることを察した。

スバルはすぐにレリックのケースを持っているルーテシアのもとに行き、ケースを手取る、が。

「……」

「……」

ルーテシアはケースの取っ手をギュッと握っており、離そうとはしなかった。

そんな彼女の額に向けて左手を上げ、そして……。

「……アウツ!?!」

デコピンを放った。

指先に魔力を込めた地味に痛い一撃だった。

「レリック確保ー」

「あ……」

決して後には残らないが手で押さえなければ痛いという非常に質の悪いデコピンを喰らった彼女からスバルは素早くケースを奪い取った。

「なんか弱い者いじめしてるみたいでいやだが、これも仕事なんだ。

悪いな……」

ケースを手にしたスバルがルーテシアに背を向け、ティアナ達の方へ戻ろうとしたとき、ギンガの声が彼の耳に届いた。

「スバルッ!!」

「——ッ!!」

その声に反応したスバルはすぐにその場から飛び退く。

その直後、彼のいた空間を黄色の道が貫いた。

「ウイングロード……!?!」

ティアナ達のもとまで下がったスバルはティアナのばら撒いた魔力弾を砕いている道を見て目を見開いた。

「こいつは……!」

「エアライナー……」

ノーヴェエ……?」

スバルが離れた直後に彼のいた空間を貫いた^{エアライナー}道が彼らの周りに漂う魔力弾のいくつかを打ち砕いた。

その隙を逃さずに、ルーテシアたちは魔力弾の包囲から脱出した。

包囲から脱出した彼女たちのそばにエアライナーの上を駆けてきたノーヴェエがマントを閃かせながら降り立った。

「ドクターからの指示だ。

お嬢様たちが危なくなったら助けるようにと」

「別にお前らの助けなんかなくなたって……!」

「ありがとう……」

「る、ルールー!？」

ゼストのおっさんも言ってただろっ!？」

こいつらにあまり関わるなって!!」

ノーヴェたちを嫌っているアギトはノーヴェに食って掛かろうとするが、ルーテシアがあっさりと礼を言ったために彼女に声を飛ばした。

「でも、あのままだったら捕まってた……」

アギトも……」

「ううッ!」

ルーテシアの言葉に反論できないアギトは渋々といった感じでノーヴェに礼を言う。

「こつちにも目的があった。

お嬢様たちはレリックの確保を。

あたしはあの青髪と戦^やるために来た」

「わかった。

ガリユー、お願い」

ルーテシアの声に頷いたガリユーが一足先に前に出た。

そんなガリユーを押さえるためにギンガが拳を振るう。

それを見たノーヴェは向こう側でスバルが自分を警戒しているのを感じる。

「感謝する」

「さっきのお返し。

あとはよろしく」

ルーテシアの言葉を聞いたノーヴェはスバルに目掛けて一気に加速した。

「てめえ、いったい何者だ!？」

「……」

「だんまりかよ……!」

スバルは突然現れ、自分たちの妨害をしてきた目の前の人物に対してどこか既視感を覚えていた。

いつどこで見たのか彼自身にもわからないが、目の前の男か女かもわからない人物と彼は確かに会ったことがあるという確信を得ていた。

「シ……ッ！」

「……ッ！」

スバルの突き出した右手を、ノーヴェは難なく捌いた。

スバルの攻撃を捌きながら、ノーヴェはあることに気づいた。

(こいつ……、あたしを誘い込んで……?)

スバルの攻撃を捌いた直後の一瞬の隙に、ノーヴェは周囲に視線を向ける。

自分よりも後方にいるルーテシアとアギト、そして自分と同じぐらい前に出てギンガと戦闘しているガリユー。

そのすべてがある一定の方向に向けてじわじわと進んでいることにノーヴェは気が付いた。

『いいわよ、スバル。』

このままひきつけて！』

『了解！』

『もうすぐヴィータ副隊長も来る。』

そしたら……』

『こいつらを止められるってことだな』

スバルはノーヴェに魔力弾を放ちながら、ティアナと作戦の確認をしていた。

そんな彼らの念話に割り込むものがいた。

『よし、中々いい判断だぞ。』

スバルにティアナ』

『『ヴィータ副隊長！』』

『私も一緒ですよ！』

状況を正確に把握した、ナイスな戦術です！』

(こいつは、そろそろ引く準備しとくか……)

一方、スバルとの拳打の応酬の中で、近づいてくる魔力反応に気づ

いたノーヴェは逃走を考え始めていた。

「ルーラー！ 何か近付いてきてる!!」

ノーヴェがそう考え始めたのと同時にアギトが声を上げた。

「魔力反応……でけえっ!？」

「うおりやあああああああつっつっ!!」

ミシミシと天井が軋む音を立てた途端に、その天井を何かが突き抜けた。

大量の瓦礫が落下し、周囲を煙が覆う。

そして、一拍置いて煙の中からリインが飛び出してきた。

「捕らえよ、凍てつく足枷！」

フリーレンフェツセルン!!」

リインが手をかざした先にいたルーテシアとアギトの周囲に風が巻き起こり、二人を一瞬で氷の中に閉じ込める。

ガリユーは二人が閉じ込められたことにより、ギンガから意識を逸らした。

そして、その隙を逃すほど彼女は甘くはなかった。

「ぶっ飛べええええっつっつ!!」

ギガントフォームのグラーフアイゼンをガリユーに叩き付ける。

その力に押し負け、ガリユーは壁まで吹き飛ばされた。

その様子を見ていたノーヴェはいち早く離脱を図る。

「逃がすかッ!!」

「……ッ!」

彼女を捉えようと接近しようとするスバル。

そんな彼の目の前で、ノーヴェは懐から取り出した円筒を地面に叩き付けた。

刹那、スバルの視界は閃光とノイズで埋め尽くされた。

(こいつ!?)

あまりにも強さの閃光は、その場にいた全員の視界を奪った。

視界が回復するまでのわずかな隙。

だが、ノーヴェにはそのわずかな隙があれば十分だった。

スバルの視界が回復したときにはすでに彼女の姿はなかった。

(あいつ、俺や姉貴にジヤミングを……。
マジで何者なんだよ……)
スバルの疑問に答える者はだれもいなかった。

ティアナルート 第七話

「ちっ……」

地下に天井をぶち抜くというとんでもない登場の仕方をした
ヴィータはガリユを吹っ飛ばした方を見て舌打ちしていた。

「こっちもです……」

その横をふわふわと浮かんでいるリインも悔しそうに声を出した。
ガリユが叩き付けられたであろう壁には何物もおらず、リインの
仕掛けた拘束魔法はその役目を果たすことはなかった。

「逃げられた、ですね」

リインが拘束魔法を解除すると、そこには結構な大きさの穴が空い
ていた。

直後、地下の空間が揺れ始めた。

「……大型召喚の気配があります。」

多分、それが原因で」

「ちっ、天井に押しつぶされる前に脱出するぞ！

スバル!!」

「了解!!」

キャロの報告にヴィータは眉を顰めながらも脱出の指示を出す。
ヴィータに名指して呼ばれたスバルはすぐに拳を地面に叩き付け、
ウイングロードを展開した。

「スバルとギンガが先頭で行け！ あたしは最後に飛んでいく！」

「はい！」

「了解！」

ティアナは螺旋状に展開されたウイングロードをスバルとギンガ
が上っていくのを横目に、レリックのケースを持つキャロに話しかけ
ていた。

「キャロ、ちよつといいかしら？」

「すぐすむから」

「はい？」

「ちよつとした嫌がらせをしてやるわ」

ティアナの顔には悪い笑みが浮かんでいた。

スバルたちが地上に向かっていているとき、彼らが先ほどまでいた空間の丁度真上、そこに家と同じぐらいの大きさの甲虫が鎮座していた。名を地雷王。

ルーテシアの使役する召喚虫の一つで、今もその名の通り雷を放電していた。

「ちよ、ダメだつてルールー!!」

これはまずいって!!」

地雷王を見下ろすことのできる位置、近くのビルの屋上でアギトは地雷王を見下ろすルーテシアに呼びかけていた。

故あつて管理局と対立している彼女たちだったが、彼らを殺すということはしたくはなかったアギトはルーテシアに必死に止めるように叫ぶ。

「埋まった中からどうやってケースを探す？」

あいつらだつて、社員とはいえ潰れて死んじやうかもなんだぞ!」

「あのレベルなら、多分これくらいじゃ死なない。」

ケースは、クアットロとセインに頼んで探して貰えばいい」

「いや、確かにそう簡単に死にそうな奴らじゃなかったけど……つてそうじゃなくて!!」

あの変態博士やナンバーズと関わっちゃダメだつて!!

さつきノーヴェに助けてもらったけどさ!!

ゼストの旦那も言つてただろう!?

あいつらあたしたちに隠し事が多すぎ——」

アギトがそこまで言つたとき、何かが陥没する音が響き渡つた。

音のした方を見ると、地雷王のいる位置を中心に円状に窪み、地雷王の発していた電撃も止んでいた。

「ああ、やっちゃまった……」

その様子を見てアギトは項垂れた。

先ほどまで戦っていた相手がかんりのレベルの魔導師だということこ

とを理解していた彼女は、彼らがそう簡単に死ぬとは思っておらず、その口調は軽いものであった。

「ガリユー、大丈夫……？」

ルーテシアの問いに、彼女から少し離れたところに立っていたガリユーは静かに頷く。

だが、彼（？）の左胸からは血が流れていた。

そこは丁度、最初にエリオが切りつけた場所であった。

「戻っていいよ……」

アギトがいてくれるから……」

ガリユーは返答の代わりに頭を下げ、その身体が紫に輝きその場から消える。

そして、ルーテシアが地雷王の方にも戻るように指示を出そうとする。

「地雷王も……い……」

言葉が続ける前に、異変が起きた。

地雷王の真下に桃色の魔法陣が浮かび上がり、そこからいくつもの鎖が飛び出し地雷王に巻き付き拘束する。

「なんだ……？？」

「召喚……」

脱出はするとは思っていたが、此処まで早いとは考えてもいなかった二人は動揺した。

さらに、彼女たちに向けて二本のウイングロードとヴィータが迫る。

「ッ……!!」

「くそッ!!」

二人が何かをする前に、彼女たちの真正面にいつの間にか現れたティアナが魔力弾を放つ。

アギトは炎弾を、ルーテシアは虚空から呼び出したダガーを放つが、ティアナには躲され、ヴィータに対しては足止めすらならなかった。

「……」

そのままルーテシアはその場から飛び退き、高架の手摺に着地、アギトもすぐそばまで飛んできた。

だが、その直後ルーテシアには接近したエリオの手に握られたストラーダの切っ先を突きつけられ、アギトの周囲には氷のダガーが浮かんでいた。

「ここまでです」

エリオに遅れて到着したリインが二人にバインドをかけながらそう告げる。

それを追うようにヴィータ、スバル、ギンガと到着し二人を包囲する。

逃げ道を塞がれたことを理解したルーテシアは俯き、アギトももがくのを辞めて地面に降りた。

「子供を虐めてるみてーで、いい気分はしねーが。」

市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他諸々で逮捕する」

ルーテシアたちが拘束された頃。

廃棄都市区画の中でも一際高いビルの屋上に二つの人影があった。

一人は眼鏡をかけてケープを纏った髪を二つに纏めた女性。

もう一人はマントに身を包み、身の丈ほどの大きさの何かを抱え、髪を首の後ろで一つに纏めた少女。

二人の共通した特徴は、事情を知らない者が見たら痴女と勘違いするであろうボディースーツだ。

それぞれの首のところに『IV』『X』と刻印された金属プレートが貼り付けられている。

「デイエチちゃん、ちゃんと見えてる〜?」

眼鏡をかけた女性——クアットロがもう一人の少女——デイエチに話しかける。

クアットロよりも少し下のところに立つデイエチは空を見上げながら応える。

「ああ、遮蔽物もないし空気も澄んでる。」

よく見える」

「デイエチの見つめる先、そこにはヴァイスの操縦するヘリが存在していた。

普通の人間なら絶対に認識できないそれを、デイエチの眼は確かに捉えていた。

「でもいいのか、クアットロ？」

撃っちゃってさ。

「ケースは平気だろうけど、”マテリアル”は破壊することになっちゃう」

「ふふ、ドクターとウーノ姉さま曰く、あのマテリアルが本物なら……。

本当に『聖王の器』なら、砲撃ぐらいなら死なないから大丈夫、だそうよ？」

軽く笑みを浮かべながら答えるクアットロにデイエチは「ふうん」と興味なさげにヘリを見つめ、そして物体にかけた布を取り払った。すると、小柄な少女が抱えるにはあまりにも巨大な砲身がその姿を現した。

「さて、それじゃさっそく——『クアットロ』——ん？」

砲撃の指示を出そうとしたクアットロの目の前に一つのモニターが映し出された。

「どうしました？」

ウーノ姉さま

『ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「ああく。」

「そういえば、例のチビ騎士に捕まってましたねえ」

ウーノからの報告にどこか楽しそうに答えるクアットロ。

「そんな妹に呆れたようにため息を吐きながらも報告を続けるウーノ。

『今はセインが様子を窺っているけど……』

「フオローしますう？」

どこか抜けたような口調とは反対に、クアットロの視線は鋭いもの

に変わっていた。

『お願い』

「了解です」

ウーノの短い返答とともにモニターが閉じられた。

クアットロは眼鏡の位置を直すと、様子をうかがっているという妹^{セイ}に念話を飛ばす。

「セインちゃん？」

「それで、目的は何だ？」

何でレリックを狙った？」

場所は移り、高架の上では拘束されたルーテシアたちに対してヴィータが尋問を行っていた。

拘束したとはいえ、危険物であるレリックを強奪しようとした二人に対して、スバルたちは周囲を囲い込むように包囲し、ケースを抱えたエリオと戦闘能力に劣るキャロの背中を守るようにギンガが立っていた。

「……」

ヴィータが強い口調で尋ねるが、ルーテシアは一向に口を開こうとしなかった。

そんな彼女に、スバルやティアナも加わって尋ねるのだが、まったく答える気配すらも見せなかった。

『はぁ、ルーお嬢様』

『クアットロ……』

そんな彼女の頭にクアットロの声が響いた。

予想外の人物からの連絡に少し目を見開いて驚いた彼女だったが、ヴィータたちはまったく気づいていなかった。

ティアナのみ、彼女の表情の変化に眉を顰めたのみだった。

『何やらピンチのよう。』

お邪魔でなければクアットロがお手伝い致します♪』

どこか楽しそうに提案するクアットロにルーテシアは再び瞑目し頷く。

『お願い』

『はい』。

ではお嬢様？

クアットロが言うとおりの言葉を、その赤い騎士に』

「見えた！」

「よかった、へりはまだ無事!!」

その頃、空に現れたガジェットⅡ型の迎撃に向かっていたなのはとフェイトだったが、あからさまな陽動に相手の狙いがへりに積んだレリックと少女にあると判断した二人は全速力でへりの護衛に向かっていた。

少し離れたところにへりが滞空しているのを確認した二人はほとと胸をなでおろしたが、直後に廃棄都市区画の離れたところに現れたエネルギー反応に目を見開いた。

『砲撃のチャージ確認！』

物理破壊型、推定Sランク！』

ロングアーチからの悲鳴のような報告に二人の顔に緊張が走った。

「何かヤバイ……ッ！」

ストームレイダー、回転数上げろ!!」

同時刻、ロングアーチからの通信よりも早く、ヴァイスは背中を走る嫌な予感に従って自分のデバイスに指示を出す。

ヴァイスは操縦桿を握りしめ、後ろに乗っているシャマルに注意を促す。

「シヤマル先生、しつかり捕まっけてくれよ!!」
「え？」

「きやああー!?!」

シヤマルが安全ベルトをしているのを確認したヴァイスはすぐに操縦桿を倒しヘリを地上に向かわせた。

インヒューレントスキル
「I S ・ヘビィバレル展開」

砲身の先に巨大なエネルギーの塊を浮かべ、ヘリを捉えたデイエチが眩く。

それをデイエチの後ろに立ち、眺めているクアットロが楽しそうに眩く。

『逮捕はいいけど……』』

『大事なヘリは、放っておいていいの?』』

「!?!」

ルーテシアの言葉にその場にいた全員の顔が驚愕に染まった。

先ほどまでだんまりを決め込んでいた彼女が口を開いたと思えば、この言葉だ。

特にヴィータはその言葉に動揺していた。

『「貴女はまた」』

後ろでクアットロが何かを呟いているのを無視してデイエチはカウントダウンを続ける。

だが、そんな彼女は目の前のヘリが動きを見せたことに驚いていた。

「気づかれた……?」

「でも、もう遅い」

『「守れないかもね」』

「発射——ッ!」

刹那、凄まじい閃光とともにそれは放たれた。

物理破壊目的のエネルギー。

空を飛ぶヘリなど木端微塵にできるそれは、廃棄都市区画の空を引き裂き、そして轟音とともに空に爆炎を散らした。

ティアナルート 第八話

『砲撃……へりに、直撃……』

『そんな筈ない！ 確認して！』

『ジャミングが酷い……精査できません！』

ロングアーチの音が響く。

ヴィータをはじめとしたフォワードメンバーも全員が呆然としていた。

「そんな……」

「ヴァイス陸曹と、シャマル先生が……」

「……っ!!」

「てめえっ!!」

エリオとティアナが呟いた直後、ヴィータがバインドで拘束されているルーテシアに掴みかかる。

その行為を目にして、スバルはすぐに我に返った。

今にも殴り掛かりそうなヴィータを後ろから羽交い絞めにして引き止めようとする。

「ちよ、ダメですってば、ヴィータ副隊長!!」

「うるせえ!!」

「離せ、スバル!!」

スバルの拘束を解こうともがくヴィータだったが、さすがに拘束した相手を殴らせるのはまずいと判断したスバルは全力で彼女を押しさえこんだ。

「ッ!!オイツ!!」

仲間が居んのか!?

何処にいる!! 言えっ!!」

振りほどけないことを理解したヴィータは少しでもルーテシアに近づき、大声で怒鳴りつける。

今の彼女は冷静さを失っていた。

ふつう仲間のことを話すわけがないという単純なことすらも頭から消えていた。

「副隊長、少しは落ち着い——」「エリオ君、足もとに何かが!!」——
「ッ!?!」

グイータを何とか落ち着かせようとしたスバルだったが、彼の隣にいたギンガの鋭い声に反応し振り返る。

直後、地面を透過し人影が飛び出してきた。

「うわッ!?!」

「いただきますい!」

その人影はすれ違いざまにエリオからレリックのケースを奪い、逆側の地面に沈み込んだ。

地面を砕くわけでもなく、まるで水に潜るように消えていった。

「くそッ!」

「逃がすかッ!?!」

人影を追うようにスバルが飛び出し、スバルの拘束を解かれたグイータも少し遅れて人影の潜った地面の方に向かうが、すでにその人影は姿を消していた。

「あんな奴もいたのかよ……」

「まるで万国人間ビックリショーね……ッ!」

スバル、後ろ!!」

消えていった人影の能力に驚きを隠しきれなかったスバルはそう呟き、ティアナも言葉を続けようとしたが、彼女の視線の先——スバルにとって丁度背後——に先ほどの人影が現れていた。

人影はルーテシアを抱えようとしていた。

「野郎ッ!?!」

『H a k e n I m p u l s e』

ティアナの声に反応したスバルは振り向きざまに魔法を放つが、一瞬遅く、ルーテシアごと地面に潜られてしまった。

「くそッ!?!」

「ああ!?!」

「どうした、ライン!?!」

攻撃が間に合わなかったことに舌打ちするスバル。

それと同時に、ラインの声が響き渡った。

「逃げられたです……」

ヴィータがラインに尋ねると、ラインは先ほどまでアギトを縛っていた拘束具を握りしめ、悔しそうに呟いた。

「反応は!？」

「ダメです……、反応、ロストしました」

「……………くそお!!」

ラインの報告にヴィータは地面を叩く。

ヴィータだけでなく、その場にいた全員が俯き拳を握りしめていた。

事件解決につながる重要な情報源を逃がしてしまったのだから。

「そうだ……ロングアーチ!!」

ヘリは無事か!?

落ちてないよな!？」

「どお？」

「デイエチちゃん、何か見える？」

「少し待って……あのタイミングで砲撃を察知されるとは思ってなかったから、吃驚したけど……」

同時刻、砲撃を行ったデイエチとそれを観測していたクアットロは遠方の煙の立ち上るのを見つめていた。

そして、ヘリが撃墜されたのを確認……

「うそくん……」

「フルパワーじゃなかったとはいえ、あれを防ぐとは……」

できなかった。

「こちらスターズ1、ヘリの防衛に成功!!」

ヘリとデイエチたちの間に立ちふさがるように桃色の防御魔法を発動させたのはは全体通信で報告する。

彼女は間一髪、限定解除の申請が通ったことによりヘリと砲撃の間

に潜り込むことに成功したのだった。

「犯人補足、フェイトちゃん!!」

『任せて!』

なのははレイジングハートを構えて、親友に位置情報を送る。

フェイトからの返答になのはは頷き、ヘリの方を向いた。

「ヴァイス君、ヘリは大丈夫?」

『何とか大丈夫です。』

助かりましたよ、なのはさん』

その後、結果からいうと、犯人には逃げられた。

ヘリ砲撃の主犯である二人組——クアットロとデイエチ——はフェイトからの追跡をクアットロのIS『シルバーカーテン』を用いて逃亡。

だが、その直後に聖王教会に訪問していたクロノ・ハラOWN提督と、全体通信に割り込みをかけたレジアス・ゲイズ中將によるなのははやての限定解除を用いた大規模魔法による捕縛を目論んだが、魔法の直撃の直前、何者かが二人を回収。

そのまま離脱を許してしまった。

「逃がした、か……」

ロングアーチからの報告を聞いたヴィータは苦々しい表情ではやてへの報告を続ける。

「ああ、こっちは最悪だ。

召喚士一味には逃げられ、ケースは持っていかれちゃった。

逃走経路も攫めねえ……」

新人どものコンディションは最高だった、完全にあたしの落ち度だ……」

「あ、あのヴィータ副隊長……」

報告中のヴィータにスバルが話しかけるが、無言のままグラーファ

イゼンを突きつけられ押し黙ってしまった。

「ヴィータ副隊長、少しよろしいでしょうか？」

「……なんだ!？」

「報告中だぞー!」

怒鳴り声を上げる彼女にティアナが少し冷や汗をかきながら言葉を続ける。

「あのですね、言いそびれてしまってたんですけど。

実は、レリックにちよつとした工夫をしまして……」

「まったく、チンクに言われたとおりに遠くで見守っていなければどうなっていたんだ……」

「ごめんなさい、トーレ姉さま。

「おかげで助かりました」

「面目ない」

スカリエツティのアジトでトーレ、ルーテシアをはじめとした七人は廊下を歩いていった。

「礼ならばお嬢様に言え。」

「お嬢様の集団転移がなければ我々は全員捕まっていた可能性が高い」

「別にいい。」

「それより、レリックの確認」

「あ、はーい!」

ルーテシアに促され、ケースを運んでいたセインが近くにあった土台にケースを置き、蓋を開いた。

「じゃじゃじゃーん……つて、アレツ!？」

ケースを開いたセインだったが、そこにあるべきものがなかった。

空っぽならまだしも、本来レリックが収まっていたであろう場所に紙が貼り付けられていた。

『スカ』

「これはいったい？」

「セインちゃん、ちゃんと確認したの？」

「はあ、こんなのが私の姉とは……」

「ちや、ちゃんと確認したって!!」

ほら、記録にもこんな風に!!」

姉妹からの視線に耐え切れなくなったセインは慌てて情報を開示する。

そこにはレリックの反応が確かにケースから放たれていた。

「この馬鹿者どもが!」

突如、彼女たちにトーレの怒声が叩き込まれた。

トーレは一つのモニターのある部分を指さし彼らに尋ねた。

「お前たちの眼は節穴か!」

「こういうわけです」

ヴィータへ説明をしていたティアナはキャロの帽子をとった。

キャロの頭には、なぜか花がちよこんと咲いていた。

「ケースは間違いなく本物でした。」

私のシルエットって衝撃に弱いから、下手にシルエットで増やしても奪われた時点ではれてしまいますからね」

ティアナの説明を聞いているヴィータとリインはポカンと口を開けたまま彼女の話聞いていた。

「ですから、一度ケースを開封して中のレリックだけに嚴重に封印を行って」

「中身は、直接戦闘の機会が少ないキャロに持ってもらうことにしたんです」

「帽子の中ってのも、隠すにはうってつけだったので」

ティアナの説明を聞いて、ヴィータは彼らの手際の良さに驚きの声を上げながらも、部下の成長を確かに感じていた。

ところ変わってスカリエッツィのアジト。

レリックの番号が目的のものではなかったことを確認したルーテシアとアギトはその場をすでに去っていた。

そんな中、トーレがノーヴェに尋ねる。

「お前はどうかだったんだ？」

自分のやりたいことをやっただろうか？」

トーレの問いにノーヴェは答えずらそうに顔をしかめた。

「まだ、よくわからない。」

自分のやりたいこと、やらなきゃいけないことってのが……」

「ノーヴェちゃんってばまだそんなこと言ってたの？」

私たちはドクターに創られた存在。

なら、私たちの存在意義はすでに決まりきったことじゃないの」

ノーヴェの歯切れの悪い答えを聞いたクアットロが眼鏡の位置を整えながらそう告げた。

「そりゃそうだろうけど……」

「ふむ……」

妹の様子を見たトーレは一つの決断を下した。

「そろそろ、お前たちにも話しておくべきなのかもしれないな。」

ドクターが私たちが創りだした意味を」

「創り出した意味……？」

トーレの言葉にデイエチが首を傾げる。

セインとノーヴェもまた、同じような反応を示していた。

「ああ、チンク以降に稼働した者にはまだ話していなかつたからな。」

丁度いい機会かもしれない」

トーレはそう言って彼女たちに背を向けて歩き出した。

「ドクターに許可を求めてくる。」

ノーヴェとデイエチは先に部屋に行ってる。

クアットロとセインはそのケースを捨てておけ。

中身のないケースは不要だからな」

トーレはそう告げてスカリエツティのいる部屋へと向かっていった。

「ドクターの目的って……？」

「チンク姉からも聞いてなかったな、そう言えば……」

トーレに言われたとおりにノーヴェとデイエチはその場を後にする。

残されたクアットロとデイエチはため息を吐きながらケースの方へと目を向けた。

「みんな、お疲れ様」

「特にティアナ、よくやったね」

「ありがとうございます」

高架に降り立ったなのはとフェイトがティアナをはじめとしたフォワードメンバーに労いの声をかける。

「この後の陸士401部隊への引継ぎは私たちでやっておくから、みんなの仕事はおしまい。」

報告書の作成は明日でいいからね」

「エリオとキャロはへりに乗って帰るとして、スバルたちはどうする？」

「あ、帰りに研究所に向かうので結構です」

「そう？」

「じゃあ、気を付けて帰るんだよ？」

なのはとフェイトはそう言って現場検証を行っている部隊の方へと歩いて行った。

エリオとキャロ、あとギンガも一緒にへりへと乗り込んでいった。

「さてと、帰るか」

「そうね、早くしないと駐車場の料金が馬鹿にならなくなっちゃいそ

うだし」

軽く伸びをしながらスバルは隣を歩くティアナに尋ねる。

「なあ、どうせお前のことだ。」

ケースからレリック抜き取るだけじゃないんだろ？」

「あら、わかる？」

「何年一緒に仕事してきたと思ってるんだよ。」

それぐらいわかるさ。

で、どんな嫌がらせしたんだよ？」

「あれ、なんか紙の下にある……」

「セインちゃん、どうかしたの？」

すでに彼女たち二人しかいない廊下でレリックのケースに紙以外のものが入っていることに気づいたセインはその紙を一気に引っぱがした。

その際、何かを引き抜く音がしたのだが、とんでもない規模の魔法を浴びせられそうになったクアットロは気づかなかった。

疲れきっていても好奇心はあったために紙の下にあったものを覗きこもうとした。

刹那、膨大な光と音がその空間を埋め尽くした。

「目が、目があゝ!!」

「ちよつとした仕返し、ね」

ティアアナルート 第九話

「博士、部品取りに来ましたよー」

スバルはとある部屋の木製の扉をノックしつつそう告げた。

最先端の技術を扱う研究所に似合わない木製の扉が内側に開かれ、中から待つてましたと言わんばかりの笑顔でサカキが顔を出した。

「おお、スバル君、待つていたよ」

サカキはスバルに中へ入るように促す。

スバルが部屋に入ると、サカキは部屋の奥に置いてある本棚の本の位置を変える。

すると、カチツと何かがはまる音がして本棚が横にずれ、その場所に鋼鉄の扉が現れた。

「いや、いつ見てもすごいですね」

「そうだろう？」

やはり研究所というからには、こういった秘密の部屋の一つはあつた方がいいと考えてね」

浪漫だよ、とサカキは楽しそうに言いながら扉を開いた。

「はあ……」

スバルがサカキ博士のもとを訪ねているとき、ティアナは研究所の待合室で相棒の用事が済むのを待つていた。

先ほどの戦闘の報告書を書き始めるかとも思った彼女だったが、さすがに仕事場ではないところでそれをするのは不味いだろうと考え、結果やることなくて退屈しているところだった。

「ねえ……」

「ん？」

そんな彼女に声が掛けられた。

声のした方をティアナが振り向くと、そこには一人の少女が立っていた。

その少女はツナギ姿で上半身はタンクトップという、ティアナから

すれば同じ女としてその格好はどうよ、と思わずにはいられない格好だった。

「ティアナ・ランスターさんだよね……？」

「そうだけど……、あなたは？」

「私、サカキ博士の助手をしているリツカ・クスノキっていうの」

少女——リツカ——は「ちよつと失礼するね」と言って手に

持っていた荷物を床に置き、彼女の向かい側に座った。

「いや、なんかサカキ博士の部屋にいたら『これからちよつと男同士の話があるから』って言われて追い出されちゃったんだ。

で、此処に来たらあなたがいたから声をかけてみたってわけ」

「サカキ博士って言ったわよね？」

「なら、私のことも？」

「うん、スバル君から聞いてるよ。」

「からかうと面白い娘だってね」

リツカの言葉に何時ぞやのスバルの言葉が重なって聞こえたティアナは額に青筋を浮かべながらも、初対面の人になるのは悪いとなんとか我慢した。

「アハハ、やっぱり面白い娘だ。」

「あ、コーヒー飲む？」

「……お願い」

ティアナがむつとしながら答えると、リツカは笑いながら待合室に備え付けられてるコーヒーメーカーのもとへ歩いて行った。

「あ、そうだ、コーヒーに何入れる？」

「ミルク、砂糖、塩があるけど」

「ミルクを……って塩なんて入れるの？」

「研究所じゃ当たり前だよ？」

糖分と塩分のどっちをとるかでいれるのを変えるんだ」

ティアナの問いに「やっぱりその反応がふつうだよね」といいながらコーヒーを淹れはじめた。

「スバルの知り合いってどこか普通じゃない人ばかりね……」

そう呟かずを得なかつた彼女だった。

「これが……」

スバルの目の前には一つの部品が置かれていた。

「そう、以前から僕が開発していた魔力変換炉の超小型版だ。マギリングコンバーター

試作型の大型版があるとある戦闘に使用されてからその性能に目をつけた人がいてね。

研究費用もそちらから出してもらえた。

で、そのうちの正式生産型の第一号を君にね」

サカキは部品を手に取りながらそう告げる。

「大型ってどのくらいの大きさだったんですか？」

「一昔前の冷蔵庫並みの大きさ。」

とてもじゃないが機動戦には向かない代物だったよ」

我ながらよくあんなものを渡したものだよ、とサカキは苦笑しながら答える。

「この小型版は、性能は以前のもので変わらない。

けど、小型化の影響から使用は一回限りだ。

デバイスにかかる負担が尋常じゃないからね、使ったらその場でパージするように」

「わかりました」

サカキは手に取った部品をスバルに手渡す。

スバルはそれをじっと見てから、マツハキヤリバーの格納領域にしまい込んだ。

「それと、これも渡しておくよ」

「ありがとうございます」

彼が部品をしまい込んだのを確認したサカキは近くの机に置かれた箱を手にとってスバルに渡した。

「いきなり部品の他にも作ってほしいものがあるって言われたからね。」

リツカ君に頼んで作ってもらったんだよ」

「リツカが？」

サカキから手渡された箱をポケットにしまい込みながらスバルは首を傾げた。

「そうさ、君からの頼みだからって部品を作った直後だったのにすぐにとりかかってくれたんだ。」

あとで礼を言っておくのをお勧めするよ」

「なるほど、ティアナも苦労してるんだね」

「そうなのよ……。」

まったく、こっちの気苦労も知らずにさ……。」

研究所の待合室では、ティアナとリツカが互いのスバルに対する愚痴を零しあっていた。

以前からスバルによつて様々な苦労を掛けられた二人。

初対面だというのにすでに長年の友言つてもいいほどに意気投合していた。

「でも、そんな彼だから気になってるんでしょ？」

「き、気になってなんか……ないわけでも……ないけど……。」

そ、そういうリツカはどうなのよ？」

「どうって？」

リツカの言葉に顔を紅くしながら反論するも、だんだんと声が小さくなつていくティアナ。

ティアナは自分がされた質問をそっくりリツカにそのまま返した。

「リツカだって、スバルとそれなりに付き合いあるんでしよう？」

「ああ、そういった感情はないよ。」

あたしにとつてスバル君は……そうだね、言い方は悪いかもしれないけど教科書代わり、かな？」

「教科書……？」

ティアナはリツカの言葉に首を傾げる。

「その言葉が一番しつくりくるんだよね。」

友達を教科書代わりつてのも悪いんだけど、私の夢のための勉強をスバル君でさせてもらってるってところ」

「リツカの夢って……?」

「高性能な義手義足の開発。」

「そのためには戦闘機人としての技術を利用するのが一番なの」

「立派ね」

「管理局員してるティアアナも立派だよ」

リツカは自分のカップに淹れたコーヒー（塩）を飲み干すと、立ち上がる。

「ティアナの愛しいボーイフレンドも来たことだし、邪魔者は退散するよ」

「い、愛しいって!?!」

ティアナの抗議を笑って躲したリツカは、部屋に入ってきたスバルのもとに向かう。

「やあ、スバル君。」

希望したものを渡したんだから、しつかり頑張るんだよ」

「わかってますよ、リツカさん。」

「ちゃんと稼働データは送りますんで」

リツカはスバルの当たらずも遠からずな答えに苦笑する。

「そっただけじゃないんだけどなあ」

「え?」

「ああ、なんでもない。」

「それじゃ、またね」

リツカは笑いながら部屋を出ていった。

スバルはそんな彼女の様子に首を傾げながらソファに座っているティアアナを呼んだ。

「ティアナ、そろそろ帰るぞ」

「え、えええ!」

「チヨット待つて」

ティアナは焦った様子で答えると、荷物をまとめて部屋の出口に向

かっついていった。

「あ、そうだ。」

「ティアナ、これ」

「ん？」

「何よ、これ」

研究所を出て、駐車場に向かう途中でスバルはポケットの中から取り出した箱をティアナに手渡した。

箱を受け取ったティアナは首を傾げる。

「まあ、開けてみろって」

「……」

「これって……！」

スバルに促されて箱を開け、中に入っているものを取り出す。

彼女の手には、橙色に彩られた星形ネットワークレスが握られていた。

「ほら、俺たちって結構長いことコンビ組んでたけど、こんなものは一つも持つてなかっただろう？」

「だからちよつと博士に頼んで、作ってもらった」

スバルはそう言っつて自分の手に持つネットワークレスを見せた。

ティアナのものと同様に青色の星の形をあしらったものだった。

「あんた、タイミング良すぎよ……」

顔を紅くしたティアナはそっぽを向いてボソツと呟く。

「なんか言っつたか？」

「なんでもない」

その後、二人はスバルのバイクのもとまでたどり着いた。

スバルが先に乗り、その後ろにティアナが乗る。

その時、ティアナがスバルの名前を呼んだ。

「その、ありがとうね」

横目で見た彼女の微笑みはスバルの脳裏に焼き付けられた。

場所は移り、スカリエッツィのアジト。

「ふむ……」。

いい頃合いかもしれないね。

いいだろう、トーレ。

あとで皆を集めておいてくれるかい？

そろそろチンクから定時連絡が入るころだから、それがすんだら始めるとしよう」

「わかりました。」

それでは」

スカリエッツィの返答を聞いたトーレは一礼すると部屋を出ていった。

それを見届けたスカリエッツィはウーノに話しかける。

「というわけだ。」

ウーノ、すまないが資料の準備を頼めるかい？」

「わかりました。」

どの程度のものを用意すれば？」

ウーノの言葉を聞いたスカリエッツィは少しも考えるそぶりを見せずに答える。

「すべてだよ。」

私の生まれた理由から、私の計画まで」

「承知しました」

ウーノが先ほどのトーレと同じく一礼して部屋を出ていった直後、スカリエッツィのいる部屋に一つのモニターが映し出された。

『ドクター』

「やあ、チンク。」

どうだったかい？」

『やあ、チンク。』

「どうだったかい?」

「ドクターの言う通りでした」

チンクは自身のいる部屋を見回しながら答える。

そこには様々なものがあつた。

大型のコンピューター、モニター、検査用機器、そして、大型生体ポッド。

『やはりか、例のあれがあつたんだね』

「はい。」

対戦闘機人用戦闘機人。

タイプゼロ・ジエンド」

チンクの見つめる先、生体ポッド中には、タイプゼロセカンドと呼ばれているスバルや、彼女の妹の一人であるノーヴェと同じ顔をしたモノが浮かんでいた。

『起動はしているのかい?』

「いえ、これは外側だけです。」

まだ中身は完成はしていなかったようで。

しかし、プロトタイプが数体起動しており、V型をすべて失うことになってしまいました」

そして、彼女の足もとには、生体ポッドの中に浮かんでいるモノと同じ顔をしたモノが五体、転がっていた。

すでにその目から光は消えていた。

『まあ、V型はジエンド用の保険も兼ねていたからね。よしとしよう。』

それで、プロトタイプほどの程度のものだったんだい?」

「ガジェット以上、私たち未満といったところですよ。」

外側は我々と同じですが、頭の中が違いました。

あれではただの機械と同じです」

『そうか……』

「あの、ドクターはどうやってこの施設を……？
今まで見つけられなかったものを……」

チンクの問いにスカリエツティは微笑みながら答える。

『何、その施設を作った者は私たちのことを疎ましく思う者だということ。』

そして、その連中をさらに疎ましく思う者がいる、ということだよ
『連中を疎ましく思う者……、まさか……！』

『おっと、それ以上は口にしない方がいいよ。』

何処で誰が聞いているかわからないからね』

チンクを遮ると、スカリエツティはすぐに指示を出した。

『では、その施設は破壊してしまってくれて構わないよ。』

というか、徹底的にやってくれ』

「いいのですか？」

『構わないよ。』

私はね、娘たちを傷つける存在を許すほど心は広くないのさ』

チンクは彼の言葉をうれしく感じていた。

「わかりました。』

それでは」

『うん、気を付けて帰ってくるんだよ』

スカリエツティはそれだけ言うと、通信を切った。

通信の切れたことで、薄暗かった部屋がさらに暗くなった。

そんな暗闇の中でチンクは一人呟く。

「悪いな、お前たちも目的があって生み出されたのかもしれないが、私と自分を壊す可能性のあるモノを存在させるほどお人よしではない
のでな」

この日、一つの山が地図から消えた。

ティアナルート 第十話

廃棄都市区画での戦闘から一夜明け、六課隊舎の廊下をスバルたちは談笑しながら仕事場に向かっていった。

前日に戦闘を行ったために、今日の早朝訓練は中止となり比較的ゆつくりとした仕事開始を迎えた四人だったのだが……。

「さてと、報告書書かないと……」

「ある程度纏めたといつても、これをさらに報告書に仕上げるのは面倒よね……」

「まったくだ」

互いに隣り合わせに座るスバルとティアナは愚痴を零しあいながらも手を休めることはなかった。

だが、その進み具合には差があった。

頭を働かせて指示を出すティアナと、頭は悪くはないが、身体を動かす方が落ち着くと言つて憚らないスバルだ。

仕事の進行度に違いが出るのは考えるまでもなかった。

そんな時、不意にティアナに通信が入ってきた。

「アレ、なのはさんからだ……」

ティアナはなのはからの通信に首を傾げながらも会話ボタンを押す。

『あ、ティアナ、おはよう』

『おはようございます。』

あの、何か……?」

『うん。』

ちよつと、みんなで私の部屋まで来てもらえるかな?』

『なのはさんの部屋に?』

『そう、ちよつとお願ひしたい事があるんだ』

『はあ……あの、お願ひつて』

『あつー!』

ごめん、それはこつちに来てから言うから、急いで来てね!』

『あ、なのはさん……』

ティアナが言い終わる前になのはからの通信が途切れる。

なのはの慌てぶりを疑問に思いながらも隣にいるスバルや、エリオとキヤロを呼んでその場を後にした。

「なのはさん、スバル以下四名来ましたよ」

『あ、ゴメン！』

今、手が離せないから入ってきて！』

「失礼します」

一言断つて部屋へと入る四人。

すると、そこにはなのはと、彼女のスカートを握りしめている涙目の金髪の少女がいた。

「あれ、その子って……」

「エリオとキヤロが保護した子だよな」

「うん、そうだよ。」

名前はヴィヴィオ。

ほら、ヴィヴィオ、自己紹介しよう」

「……ヴィヴィオ、です」

なのはに促されておぼろげとスバルたちを見て、小さな声で挨拶をする少女——ヴィヴィオ。

「なのはさん、確かこの子ってまだ病院なんじゃ……？」

「そうなんだけどね。」

今朝、様子を見に行ってから離れてくれなくて」

なのはは苦笑しながら答える。

そして、その続きを念話で伝える。

(それに、この子の身辺警護もしないといけないし)

(ああ、なるほど……)

なのはの言葉に、ヴィヴィオの特異性を思い出すスバル。

彼女のような小さな女の子が通るはずのない下水道を通り、レリックのケースを運んでいたこと。

さらに保護した彼女、もしくは同時に確保したレリックを狙ってへの撃墜未遂まで起こされる始末。

どこからどう見ても普通の少女ではなかった。

「私、今から少し出かけなきゃいけないんだ。」

だから、私が戻るまでヴィヴィオの相手をしてあげて欲しいんだけど……」

「え……」

なのはの言葉にヴィヴィオはこの世の終わりが来たかのような表情を浮かべる。

要は泣き出す直前である。

「やあだあああつっ！」

「いっっちゃやだあああつっ!!」

「ああ、ごめんね。」

「お願いだから泣かないで」

わんわんと泣きはじめるヴィヴィオに困り顔なのは。

スバルたちは目の前の光景に苦笑する。

“ エース・オブ・エースにも勝てない者がいた”

四人の心が一つになった瞬間だった。

泣き止む気配のないヴィヴィオになのはがほとんど困りだしたとき、ティアナがスバルに目くばせし、スバルはそれに頷く。

ポケットから何かを取り出し泣いているヴィヴィオの口の中にそれを放り込んだ。

「ふえ……」

「ほくら、甘いだろう？」

もう一個あるぞ？」

彼が取り出したのは一口サイズのチョコレートだった。

口の中に甘いものが入り込んだことで、泣き止んだヴィヴィオの前に彼はそれを持った手を右に左にと動かす。

その動きに合わせてヴィヴィオの視線も右に左にと動いた。

「ほらほら、もう一個ほしいなら、こっちに取りに来るんだよ」

「ん……」

なのはと離れることに不安を覚えるヴィヴィオだったが、一度知ってしまったチョコレート味の抗えず、テテテ、とスバルのもとに

歩いて行く。

「ヴィヴィオ確保〜」

「わッ〜」

スバルは近づいてきたヴィヴィオの両脇に手を入れて持ちあげた。急に持ち上げられたことにビックリしたヴィヴィオは手足をバタつかせるが、小さい子供なうえに、日々鍛えているスバル相手には虚しく空を切るだけだった。

「う〜！」

「あらら、ご機嫌ななめか……。

なら、こうだ!!」

「きやあぁーッ〜」

スバルはヴィヴィオをさらに高く持ち上げ、続けてその場をぐるぐると回り始めた。

はじめは怖がっていたヴィヴィオだったが、次第にその声は楽しむ声になっていき、スバルが彼女を下におろしたときにはもつとせがんでいた。

「な、なんかスバル、小さい子の相手に手慣れてる……?」

「救助部隊の時に、小さい子を落ち着かせるために勉強してましたからね、あいつ」

「あ、あはは……」

自分が手こずったヴィヴィオをいとも簡単に泣き止ませたスバルになのはは呆けたまま呟いた。

「じゃあ、ヴィヴィオ。

なのはさんが帰ってくるまでいい子にできるか?」

「いい子にしたらさっきのまたやってくれる?」

「おう、もつと面白いこともしてやるぞ」

「じゃあ、待ってる!」

ヴィヴィオはそう言って花のような笑顔を浮かべた。

その笑顔に安心したなのははヴィヴィオに手を振って部屋を出ていった。

「はあ……」

ティアナ達がなのはの部屋に呼び出されて数時間後。

ティアナは一人ため息を吐いていた。

「なんで私が報告書全部やらなきゃいけないのよ……」

そう、現在ティアナはスバルの分の仕事まで請け負っていたのだつた。

理由は単純明快。

ヴィヴィオがスバルから離れなかったからだ。

なのはが去った後、仕事に戻るためなのはの部屋を後にしようとしたスバルたちだったが、ヴィヴィオが涙目で彼らを見ていたのだつた。

そんな彼女を見たティアナは一言、「あんたの分まで私がやっつくから」と。

「あんなこと言わなけりゃよかった……」

そう、ティアナは失念していたのだ。

戦闘、それもレリックを狙ったガジェットのみならず、敵対勢力まですることが判明した今回。

その報告書がいつも通りに済むはずもなかった。

30%増しの量を二人分。

明らかに普通なら終わらない量である。

だが、ティアナはデスクワークに限って言えばフォワード四人の中では一番効率よく終わらせることができる。

実際、すでに自分の分は終わらせて今はスバルの報告書に取り掛かっていた。

「それにしても、スバルと張り合うほどの格闘技能って、このマント野郎はいったい何者なのよ……」

ティアナはマツハキャリバーからパソコンに転送した戦闘データをしながら呟く。

(あのマントは何らかのからくりがある。

たぶん認識阻害系の何か)

モニターに映るマントを着込んだ人物を見ながらティアナは手を動かしながら頭の中で相手の手札をまとめていく。

彼女が、ノーヴェの纏ったマント(正確にはサングラスにもだが)に掛けられた認識阻害の能力を見抜いたのは、単に彼女自身の持つ幻術魔法の中に認識阻害系のものであるからである。

(それに、あのウイングロードに似たアレ。

スバルはウイングロードは先天性のモノだって言ってた。

なら、あれは別物……?)

いや、それにしても使い方から何まで似すぎて……)

そこまで考えたティアナは報告書を作る手を止め頭を掻きむしる。

「つて、あたしがそこまで考える必要はないわね。

こういったことは上に任せるとしましょうかね」

「ヴィヴィオ、いい子にしてるかなー」

「もう、なのはは心配しすぎだよ。

エリオとキャロの話だと、スバルがずっと一緒にいてくれてるらしいから、大丈夫だよ」

用事を終えたなのはとフェイトは六課の寮の廊下を並んで歩いていた。

心配そうにヴィヴィオのことを話すなのはに、フェイトは苦笑しながらそう言う。

だが、その言葉を聞いたなのははさらに心配そうにフェイトに顔を近づけ口を開く。

「スバルがずっと一緒にいるから心配なんだよ！

スバルがヴィヴィオに変なこと教えてたらどうするの!？」

「変なことって……」

「私やだよ!？」

ヴィヴィオがスバル張りに熱血な性格になったら！

フェイトちゃんだって、エリオやキャラが熱血になったらいやでしょ!？」

「ん〜。」

確かにキャラが熱血つてのは合わないかもしれないけど、エリオならあまり違和感ないかな……?？」

それに、スバルと一緒にいるってことはいいことでもあるし」

「なんで?？」

「最近エリオとキャラがわがまま言うてくれるようになったからかな?？」

二人はスバルにもっとわがまま言うようにした方がいいって言われたからって言ってたけど。

この間ちよつとスバルとエリオの部屋に行ったら何か作ってたし」「フェイトちゃん、男子の部屋をこっそりのぞくのはどうかと思うけど……」

フェイトの親バカぶりに今度はなのはが苦笑しながら今度からは男子寮に入るのは遠慮するように告げる。

二人は、そんな話をしていると寮母のアイナからヴィヴィオがいると言われた部屋に辿り着いた。

「ヴィヴィオ〜、いい子にして……『いくぞ、これが俺の全力全壊!』……え?？」

なのはが部屋のドアを開け、声をかけるが胡坐をかいたスバルの膝の上に座ったヴィヴィオは彼女の声など聞こえていないようでテレビの画面に夢中だった。

『闇を切り裂く、閃光の刃……!』

『星よ集え、闇を切り開く刃となれ!』

テレビの画面に映っているのは少年たちがそれぞれの杖から必殺の魔法を放つ場面だった。

『プラズマ……セイバアーツ!!』

『ハイペリオン……スマツシャアーツ!!』

「ナニコレ?」

「アニメ、だよね……?」

「あ、なのはママ、フェイトママ!!」

「お疲れ様です、なのはさん、フェイトさん」

テレビ画面が魔法の表現でいっぱいになったときに呟いたなのはの声に反応したヴィヴィオが二人の存在に気づき二人に駆け寄った。そんな彼女を受け止める二人に向かってスバルが声をかける。

「スバル、さっきのは?」

ヴィヴィオを抱き上げたなのはがスバルに尋ねる。

「ああ、魔砲戦記マジカルバスターのことっすか?」

「何それ……?」

アニメの題名を聞いただけではわからない二人は首を傾げる。

「数年前にあったアニメですよ。」

とある世界で開発された強大な力を持った宝石が、魔法の文化のない世界にばら撒かれて、それを巡ってその世界のごく一般の少年と、宝石を使って大切な人を取り戻そうとする少年の物語ですよ。

すごい人気で、放送終了後に映画化決定で、今度は実写版があるって話です。

なんでも実際に起きた事件をもとに作ってるらしいですよ?」

「へ、へえ〜」

「すごいんだよ!」

こう、ドカーンってなってズバーンって」

(なんか聞いたことあるような話だなく)

ヴィヴィオの幼い子供ならではの擬音語を用いた会話に苦笑しながらそう考えるフェイトだった。

「さてと、なのはさん達が帰ってきたなら、俺は仕事に戻りますね」

「あ、うん。」

ありがとうね、スバル」

「いえ、ヴィヴィオと一日遊んで俺も楽しかったですし」

「スバルお兄ちゃん、もう行っちゃうの？」

ヴィヴィオの少し悲しそうな顔を見たスバルは彼女の頭を撫でながら優しく語り掛ける。

「お兄ちゃんは少しやらないといけないことがあるんだ。」

「だから、今度はみんなで遊ぼうな」

「みんな？」

「そう、俺やなのはさん、フェイトさん、ティアナにエリオ、キャロ、ほかにもいっぱいの人とな。」

「だから、今はなのはさん達と一緒に遊ぶんだぞ？」

「うん……！」

スバルの言ったことを子供なりに理解した彼女は笑顔で答える。

そんな彼女に背を向けてスバルは仕事場に足を向けた。

「ほら、あとはあんたが直接やらないといけないやつだけなんだから。」

「まったく、大変だったんだから、感謝の一つぐらいはしなさいよ」

「うむ、褒めて遣わそう」

「調子に乗るな！」

ティアナルート 第十一話

にぎやか声、肉や野菜を焼く音、楽器を鳴らす音。

ミッドチルダ首都クラナガンに置いて、猛暑日となった今日。

ティアナは着慣れない浴衣を着てスバルとともに街中を歩いていた。

普段着なれない服装で、気をつけながら歩いていたティアナは、今までの経緯を思い出していた。

数時間前……

「夏祭り？」

普段通り、日課となっている早朝訓練を終えたフォワード四人なのは、フェイト、ヴィータは朝食の後にはやてに呼び出されていた。

はやてはなのはの言葉に頷きながら言葉を続けた。

「そうや、今日は管理局地上本部主催のサマーフェスティバルが行われるんや。

で、本来ならその警備任務に駆り出される予定やったんやけど……」

はやてはそこで一度咳払いをする。

「さつきレジアス中將から連絡が入ってな。

どうも地上本部でも昨日の戦闘を見とったっぽくてな。

で、しかもフォワード四人が休暇返上でレリックの確保に動いたことを知ったレジアス中將がな、

『若者が休みを潰して仕事をしていたのだ。

だったら祭りぐらいは楽しませてやるのが上の仕事だろう』って「でも、レリックの反応があったときはどうすればいいの？」

「祭りの時はレリックの回収は特務一課が受け持つらしいで。」

あちらさんの目標が中々捕まらないから少しはいい息抜きになる

だろうって。

というわけで、こちらは今日の仕事は定刻通りに終了。

みんなで祭りに行くで〜」

はやてが言葉に合わせて右手を突き上げる。

それに乗ってフォワードの四人やリインも嬉しそうに手を突き上げていた。

「あ、じゃあ久しぶりにあれが着れるね」

「ん、そうやな」

「じゃあ、二人の分もあるの?」

「そうやなあ……。」

キャロはうちの小さいときのものを使えばいいだろうし、浴衣なんて子供用じゃなければほとんどの体系に合わせられるから大丈夫だと思う」

「決まりだね」

なのは、フェイト、はやては三人で着ていく服の話をしていたが、ミッドチルダ生まれのフォワード四人は何のことなのかサツパリだった。

「それじゃ、仕事が終わったらティアナとキャロは私たちの部屋に来てくれるかな?」

「え、あ、はい」

「わかりました」

なのはの言葉に頷く二人。

「それじゃ、祭りを楽しむためにお仕事頑張ろう!」

祭りのことを知らされたスバルとティアナはそれぞれの机で自分の仕事を淡々と、しかし猛然とこなしていた。

陸士訓練校を卒業して以来、祭りというものに縁がなかったという理由もあるが、それよりもっと大きな理由が彼らにはあった。

(祭りって言えばだれかと一緒に回るものだろうけど、誘えるのって

テイアナぐらいしかいない。

「というか、あいつ以外と一緒に回ってもそんなに楽しめなさそうだな。」

「……って、待てよ……女子テイアナと一緒に祭りを見て回るって……」

（祭りって、誰かとワイワイしながら回るのがふつうよね……）

「誰かと一緒って、スバルしか誘う人いないわね。」

「訓練校の時はあまりそういうことには頓着しなかったし……」

「それに、スバル以外と一緒に遊ぶってのが想像できないわね。」

「アレ、ちよつと待って、男子スバルと一緒に祭りを見て回るって……」

（一般的にデートって呼ばれるものなんじゃ……）

「二人は同じタイミングで同じことを考えていた。」

「意を決した二人は相方に話しかけた。」

「なあ」

「ねえ」

「……」

「同じタイミングで話しかけたことによって、二人の間に沈黙が広がる。」

「そして互いに相手に譲ろうと考え、少し待って再び口を開いた。」

「あのさ」

「あのね」

「……」

「二度あることは三度ある。」

「同じようなことを二回も繰り返した二人は恥ずかしさから互いに視線を逸らした。」

「何してんだ、あの二人は」

「その様子を離れたところから見ている者がいた。」

「なのはとヴィータである。」

「青春してるね〜」

「そうだな。」

「というか、あの二人は以前から付き合ってたんじゃないのか？」

「あく、うん、あの二人の以前いた隊の人から聞いたんだけど、二人と」

も互いのことを仕事上のパートナーとして考えてやってきたらしいよ。

でも、数日前、というかあの休暇から隊舎に帰ってきてから様子がおかしかったんだよね」

なのはの言葉にヴィータは相槌を打ちながらようやく話し始めた二人を見て頷いた。

「とりあえず、一つわかったことがある」

「何がわかったの?」

ヴィータの意味深な発言に首を傾げるのは。

そんな彼女にヴィータはズバっと単刀直入に告げる。

「お前、年下に先越されたな」

「……ッ!?!」

ヴィータの言葉にハツとするのは。

そんな彼女にヴィータはさらに追い打ちをかける。

「というか、下手したら相手がいなくてもまま子持ちになるな。」

ヴィヴィオを引き取るんだよね、お前」

「うう……!」

「どうするんだ?」

下手したら相手がいなくてもあの二人の式に呼ばれたりするかもしれないぞ?」

「わ、私にはユーノ君が……」

「そう言うセリフはあいつをデートの一つにでも誘ってから言うんだな」

ヴィータの辛辣な一言になのはは祭りの前だというのにテンションが急降下してしまった。

だが、しばらくして、ヴィヴィオが彼女に祭りのことを尋ねると、なのはのテンションは一気にもとに戻ったらしい。

「うーん、やっぱりキャロにはこっちの方がいいんじゃないかな?」

「そうだね、この花柄なんてのはどうかかな？」

「おく、出張任務の時も思ったけど、ティアナって脱いだらすごいんやなく」

「八神部隊長、それセクハラです」

「アハハ、冗談や冗談。」

で、ティアナにはこっちの方がええかな？」

「どうだろう、あっちの方がいいんじゃないかな？」

「あ、ヴィヴィオこれがいいー！」

「わあ、ヴィヴィオちゃんとってもかわいいです！」

※以上、女子更衣室内でのやり取りをお送りしました。

「長いな」

「長いですね」

「キュクル〜」

「男子お二人さん、お待ちせや」

ロビーで女性陣を待っていた二人と一匹ははやての声に反応して振り返った。

「エリオ君、どうかな？」

「え、あ、うん。」

似合ってるよ」

「えへへ……」

はやてに率いられてやってきたキャロとティアナがその浴衣姿を披露する。

ティアナは橙色のシンプルなもの、キャロは白地に桃色の花柄の浴衣を見に纏っていた。

「……何よ」

「いや、似合ってる」

「そう、ありがとう」

エリオとキャロのコンビとは違い、はしやいだ感じはないが、スバルは視線を逸らし、ティアナは頬をほんのりと赤く染めていた。

それを見たはやては一言。

「あく、なんかうちらお邪魔みたいやね」

「お邪魔虫ですう」

ティアナルート 第十二話

「焼き鳥いかがですかー!」

「ママー、あれほしい!」

「焼きパスタ、おいしいですよー。」

「おひとついかがですかー!!」

「さあさあ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい!!」

「サマーフェスティバル限定の魔法ショーが始まるよ!!」

「管理局地上本部主催のサマーフェスティバルは盛況を極めていた。」

様々な世界を管理する管理局の地上本部があるため、様々な世界の食べ物や遊びの店が構えられていた。

そんな中を、スバルとティアナは並んで歩いていた。

「いやー、にぎわってるな」

「そうね、まあ年に数回の祭りだしね。」

「けど、こうしてみると結構いっぱいあるわね」

「すでに祭りが始まって一時間以上過ぎた時間帯。」

メインイベントである花火までまだまだ時間があるが、すでに会場は人でいっぱいだった。

「けど何かしら、なんか視線を感じるんだけど……」

「確かにそうだな。」

「誰か有名人でも近くにいないんじゃないのか?」

二人は周囲からの視線を感じながらも、それを無視しようとしたが、その視線の中から自分たちを見ているとはつきりとわかるものがあったため、周りを見渡した。

「今、誰か見てたよな?」

「ええ、それも結構近くから」

「どうする?」

「あつちに行きましょう。」

「ここよりも人が多いから撒けるはず」

二人は行く先を変えて人の多い方へと足を向けた。

そして、その背後をこそこそと隠れてついていく影が二つ。

「いやあ、ビビったわ。」

アレ、気づかれたとちゃうん？」

「ていうか、なんではやてちゃんはこのな尾行まがいのことをしてる
ですか？」

二つの陰——はやてとリインはスバルたちから離されないように
歩きながら小声で話していた。

先ほど、スバルたちが周囲から感じていた視線は、はやて彼女のものだっ
た。

「だって、シグナムたちは六課で待機。

なのはちゃんとフェイトちゃんはヴィヴィオと一緒に祭りを楽し
んでる。

だからと言ってほかに誘う人おらんやん」

はやてはいつの間にか確保していた焼き鳥を一本手に持ちながら
言葉を続ける。

「だったらほかにやることなんてほかの色恋沙汰を楽しむしかないや
ろ？」

祭りを楽しみつつ二人がどんなどころを回っていくのか、楽しみや
しな」

「野次馬根性丸出しです」

はやての楽しそうな笑みを見たリインは呆れたように呟いた。

「さてと、何から食べるか」

「いきなり食べ物つてのがあんたららしいというか……」

「せっかくの祭りなんだ。

楽しまないと損だろ？」

「それもそうね……ってアレ？」

スバルの言葉に頷いたティアナの視線がとある出店の一つを捉え
た。

「ねえ、あれなに？」

「あれ？」

スバルはティアナが指さした方に目を向ける。

そこには『冷やしカレードリンク』と書かれていた。

「冷やしカレードリンク？」

「なんだろう、この名前からして外れな気がするけれど興味引かれるのって」

「行ってみるか？」

「そうね、ちよつと怖いもの見たさってのもあるけど」

二人はそう言つてその店に足を向けた。

店に近づくにつれて、その店の店員の顔が見えてきた。

「あれ、サカキ博士？」

「ん？」

「おお、スバル君じゃないか」

店にいたのは眼鏡をかけたキツネ目の男性、というかサカキだった。

「何やってんですか」

「何って、うちの研究所からの出店だよ。」

一応、うちも管理局に所属する施設だからね」

「この冷やしカレードリンクってのは？」

「リツカ君が考えた飲み物だよ。」

ほかにもおでんパンや小豆サイダーなんてものもあるけど、おひとつどうだい？」

スバルからの質問に答えたサカキは笑いながら尋ねてきた。

二人は互いに見あいながら頷いた。

「あたしは小豆サイダーを」

「冷やしカレードリンクとおでんパンを」

「毎度ありがとうございます」

二人から代金を受け取ったサカキは二人に「あとで感想を聞かせてくれるかな」と言つて仕事に戻つていった。

そんな彼を見送った二人は買ったものを手に再び歩き出した。

サカキから勧められたものはいずれも普通に考えたらおいしくは

ないであろうものばかりだったが、二人は怖いもの見たさに買ってしまつたというところだ。

「そつちはどうだ？」

「小豆味のサイダーね。」

「まずくはないわね。」

「そつちは？」

「正直なんでこんなのに金を出したんだって感じ。」

「冷えたカレースープ飲んでるみたいだ」

「おでんパンの方は？」

「冷やしカレードリンクの入っていた缶を近くのカゴに入れてスバルはティアナに促されてもう一つの缶を口に運んだ。」

「おでんって確かなのはさん達の世界の料理だったわよね？」

「ああ、俺も親父が作ってくれたのを一度食べたけど、白米とならあうけどパンとは……。」

「おお？」

「なに、どうしたの？」

「おでんパンを口に入れたスバルが驚きの声を上げた。」

「いや、これ串が入ってるって思ったらゆでてないパスタの麺だった。なるほど、これなら丸ごとかじりつけるわけだ」

「串って、本場のおでんには串なんて刺さってるの？」

「家で食べる分にはわからないけど。串に具を刺して出すところもあるらしい」

「二人はしばしの間、地球の料理のことを話題にしながら歩みを進めていった。」

「邪道や！」

「おでんをパンに挟むなんて邪道や!!」

「食わず嫌いはいけないよ。」

「というわけでおひとつどうぞ」

「……うまいやん」

「おいしいです」

「ねえ、スバル、あれって……」

「あ」

サカキと別れてしばらくあてもなく歩いていた二人は驚きで目を見開いた。

「焼きそばいなかですかー!」

彼らの視線の先にはティアナと同じように浴衣を着て客の呼び込みをするギンガの姿があつた。

「姉貴」

「あら、スバル。」

それにティアナも」

「どうもです」

彼女のことを呼んだ二人に気づいたギンガは嬉しそうに微笑んだ。

「何してんの?」

「ああ、これ?」

「これはね……」

スバルが彼女の浴衣姿に疑問を抱いていると思ったギンガは身体をクルリと回して浴衣を見せる。

「呼子つてのをやってるのよ。」

「いわゆる看板娘ね」

「その浴衣、お似合いですね」

ティアナは彼女の浴衣を見て素直に口に出していた。

ギンガの着ている浴衣は、薄い紫に朝顔の絵柄がかかれたもので、彼女の髪の色とあつて非常に似合っていた。

「ありがとう、ティアナ。」

「これってお母さんが着ていたんだって」

「お袋が?」

「うん、だから似合ってるってのは褒め言葉だね。」

お母さんみたいな女性になつてることだから」

そう言つてギンガは店の方に顔を向ける。

「お父さん、スバルたち来たよ！」

「え、親父？」

ギンガの呼び声に店の中から一人の男性が出てきた。

くすんだ銀色の短髪の頭にタオルを巻いた男、スバルとギンガの育ての親であるゲンヤ・ナカジマである。

「おう、久しぶりだな、スバル」

「何してんの」

「何って、焼きそば作ってる。」

何しろ今年の祭りで一番売り上げのよかった陸士部隊には臨時ボーナスが出るからな。

その点、うちはギンガという看板娘がいるからな」

「……」

「あ、あたしもほしいものあるし」

ギンガが浴衣を着て呼子をしている理由を察したスバルが彼女の方を見ると、ギンガは目を逸らしながら小さな声で呟いた。

「まあいい。」

とりあえずお前らもくってけ」

「え、親父のおごり？」

「バカヤロウ、管理局員、それも一部隊長が公私混同してたら部下に示しがつかねえだろうが！」

「さっきまで私欲にまみれた動機話してませんでしたかあ!？」

親子、というよりも歳の離れた友人みたいなやり取りを見ていた

ティアナは、（やっぱり親子って似るものなのね）と思っていた。

「なあギンガよ」

「何、お父さん？」

スバルとティアナが去った後、彼らの後ろ姿を見ていたゲンヤは娘に尋ねる。

「あの二人、あれで付き合ってるのか？」

ゲンヤは先ほどまでの二人の様子を見て思ったことを尋ねていたが、その問いに対してギンガは言葉を濁した。

「はたから見れば、相性抜群のカップルなのにね」

「俺たちはどうやってても部外者だからな、隊も違うから毎日様子を見ることもできねえ。」

というわけで」

ゲンヤは店から出てくると、スバルたちの向かった方に行こうとしていた浴衣姿にサングラスというあからさまに怪しい女性——もとい、はやてを捕まえる。

「き、奇遇ですね、師匠」

「人の子の後ろをつけてる子狸に手伝ってもらおうか」

ティアナルート 第十三話

ゲンヤたちと別れた二人は少し離れたところを歩く見覚えのある後姿を見つけた。

「あれ、なのはさん？」

「ん？あ、二人とも！」

「スバルお兄ちゃんだ！」

「おおつとヴィヴィオ、楽しんでるか？」

「うん！」

二人が見つけたのはなのはとヴィヴィオだった。

後ろから二人に声をかけられたなのは二人に向かって手を振り、ヴィヴィオはスバルに向かって突進してきた。

スバルは幼女の突進を軽く受け止めると彼女を持ち上げその場をぐるぐると回り、ヴィヴィオは嬉しそうに笑い声をあげる。

「あはは、ヴィヴィオはスバルに懐いてるね。」

「私以上になつてるかも……」

「スバルが異常に小さい子供に好かれやすいだけですよ。」

あの性格が原因じゃないですかね？」

ティアナはスバルの誰にでも距離を感じさせずに接してくる性格が、小さい子供に限らず彼を慕う者が多い理由だと考えていた。

陸士訓練校然り、以前の部隊然り、機動六課然りと。

「あ、ティアナもそこに惹かれたんだね？」

「ふあー！」

ヴィヴィオと戯れるスバルを見ていたティアナはなのはの言葉に驚きの声をあげてしまう。

「な、なななにを！」

「あはは、隠せてると思つてた？」

女の子つてのは自分のこと以上に、他人の色恋には敏感なんだよ？」

なのははその視線を人ごみのほうへ向ける。

その視線が向けられた方にいる一人の背中がビクツとしたが、絶賛

混乱中のティアナはそれに気付かなかった。

「それにね」

「……?」

「私たちがティアナぐらいの年の時は仕事ばかりで、ティアナたちみたいに青春してなかったから、二人にはしつかりと楽しんでほしいんだ」

「なのはさん……」

なのはの言葉に対して意外という表情を浮かべるティアナ。

そんな彼女の顔を見たなのはは笑顔でその言葉を投げかけた。

「だから、好きな子にはさつきと告白したほうがいいよ?」

「な、なのはさん!」

ティアナが赤面して叫ぶと、なのはは笑いながらヴィヴィオとスバルのほうへ歩いて行った。

「ほら、ヴィヴィオ。」

「そろそろ行くよ」

「うん!」

「なのはさん、フェイトさんは一緒じゃないんですか?」

「あ、うん。」

「フェイトちゃんはね……」

「ああ!?!」

キャロの持ったポイに穴が開き、そこから金魚が下に落ちてしまった。

「あはは、キャロ、惜しいね」

「次は僕が!」

「お、ガールフレンドにいいとこ見せな、少年!」

店の親父からポイと器を受け取ったエリオはしつかりと狙いを定めて金魚を掬う。

一匹、二匹と順調に掬うことができたエリオだったが、五匹目で水でびちよびちよになったポイがついに破れてしまった。

「ああ、破れちゃった……」

「惜しかったね、エリオ。」

「おじさん、私にも一ついい?」

「おお、いいぞ。」

「ほら、頑張りな」

二人の後ろで見ていたフェイトは二人が楽しそうにやるので、親父からポイと器を受け取る。

一度深呼吸したフェイトは真剣な目つきで目の前のビニールプールを見つめる。

そして……。

「ハアツ!!」

一瞬で器いっぱいにごんもりと金魚が盛られた。

目の前の自分よりも年下の年頃の女の子が一瞬でそんなことをしてしまったことに驚いた親父は顔をひきつらせていた。

「お嬢ちゃん、さすがに取りすぎだ」

「ええ!」

「エリオとキヤロと一緒に祭を楽しんでるよ」

「ああ、あの二人と一緒にいるんですか」

フェイトが金魚すくいでやらかしているとは全く思ってもいないスバルたちはそう言って笑いあった。

その後、スバルとティアナは去って行った。

それを確認したなのは近くでイカ焼きを食べていたはやてのもとに向かう。

「はやてちゃん」

「や、なのはちゃん。」

「奇遇だな」

「何してるの?」

「いやあ、あのな……」

はやてから事の経緯を聞いたなのは呆れたようにため息をつい

た。

「二人に気づかれるから、程々にしないとだめだよ？」

「わかつとる、わかつとる」

ほな、とはやてはリインを伴ってその場を去った。

そんな彼女を見ながらなのははひとり眩く。

「なんかスバルたちって本当に青春してるなく。」

「今度ユーノ君を遊びに誘ってみるかな？」

「いやー、管理局の祭りって結構いろいろやってるんだな」

「そうね、さつき広場でやってたショー見た？」

綿菓子を片手に歩いていた二人は祭りの規模の大きさに感心していた。

「ああ、魔法使ったヒーローショーか。」

めちやくちや派手だったな、背後の爆発とか」

「あれ、幻影魔法を応用してたわ。」

結構高難易度の技術のはずなのに、それをヒーローショーに使うなんて……」

ティアナは自分では行使するのが難しい高難易度の魔法をショーに使っている魔導士がいることに対してため息をついていた。

「まあ、魔法なんて使い方次第でどうにでもなるからな。」

そのいい例だな、さつきのショーは」

「フェイクシルエットとオプティックハイドを同時使用して、本物は姿を消して、シルエットのほうに砲撃魔法を叩き込んで、爆発のエフェクトと一緒に本物はその場を出ていくって。」

まあ、子供にはそんなことはわからないんだろうけど、幻影魔法の同時使用って本当に難しい……「お、あれなんだ？」って、スバル！」ティアナが一人でぶつぶつと呟いている途中でスバルが何かを見つけて彼女の手を引いて少し歩く速さを早くした。

「せっかくの祭りなんだから、魔法の考察は後にしようぜ。」

ほら、なんか面白そうな食べ物売ってるし」

スバルの言葉を聞いたティアナは呆れながらもそのとうりだと考え、彼の視線の先へ目を向けた。

その先には『揚げピザ』と書いた看板が立てられていた。

「いらつしやいませー！

何にしますか？」

「おすすめは？」

店員であろう少年が二人に気づき、注文を尋ねる。

メニューの中からおススメを聞くスバルに対して店員はすぐに答え、スバルはそれを注文しようとした。

そんな時、彼に声をかける者がいた。

「ナカジマにランスターか？」

「教官!？」

店の奥から顔を覗かせたのは、つい先日再会したキョウであった。

「なんで、教官がここに？」

「なんでもここは第四陸士訓練校の出してる店だからだ」

キョウの言葉を聞いたスバルは看板を見直した。

すると、その看板の隅に確かに彼らの在籍していた訓練校の校章が小さく刻まれていた。

「確かに……」

「訓練校は毎年順番で店を出すことになってな。

今回は俺たちの番だったってことだ」

「あ、あの、教官」

「なんだ？」

スバルたちと話し込んでいたキョウに店員の少年が恐る恐る話しかけた。

「先ほどナカジマと仰いましたか？」

「ん、ああ。

そうか、お前らは初めて見るんだったな。

こいつらがスバル・ナカジマとティアナ・ランスターだ」

キョウの言葉にその少年だけでなく、店の奥で作業していた訓練生

の多くが驚きの声を上げた。

「本当ですか!？」

「あの“伝説の世代”の!？」

その異様な空気にティアナだけでなくスバルまでもが少し引き気味だった。

「伝説の世代って?」

「お前たち二人をはじめとしたあの時期に在籍していた訓練生のことを第四陸士訓練校ではそう呼ぶようになったんだ」

「なんで?」

スバルが首を傾げたとき、店員の一人が声を上げた。

「それはいくつもの伝説を刻み込んだからですよ!!」

「その伝説って?」

「曰く、初めての訓練の際の壁上りで相方を壁のはるか上まで投げ飛ばした」

その言葉にスバルとティアナはピクリと反応する。

それ、俺（私）たちのことだ、と。

「曰く、射撃魔法のシミュレータがカンストした」

「曰く、格闘訓練の際に相手を壁にめり込ませた」

「曰く、訓練校始まって以来最高額の修理費を叩き出した」

「曰く、一人の女を巡って男子訓練生全員で殴り合いの大乱闘に発展したとか」

他にもいろいろありますよ、という店員の言葉を聞いた二人は頬を引きつらせていた。

「ま、まあバイクを女と見立てれば間違ってるわね」

「確かにカンストさせてたわね」

自分たちのやらかしたことがまさか伝説になっていたとは思っていなかった二人はそう呟くことしかできなかつた。

「まあ、お前らは今日はお客さんなわけだが。」

おい、できてるか?」

「はーい」

頃合いを見て話を終わらせたキョウが奥にいる一人に尋ねると、袋

に入れられた出来立てを持ってきた。

「それ食って、二人で楽しんで来い」

「あ、じゃあお金を……」

ポケットから財布を取り出そうとしたスバルをキョウは手をかぎすことで止めた。

「ああ、金は要らねえよ」

「え、でも……」

「俺の奢りだ」

キョウのその言葉にスバルとティアナは胸を貫かれた。

「これが大人の格好よさなのか!？」

「やだ、なんかこの間の子煩悩な父親とは全然違う」

二人はキョウに頭を下げる。

「気にするな、日ごろ頑張ってる教え子にちよつとしたご褒美ってところだ。」

遠慮せずに食べ

「はい！」

「ああ、熱いから……」「熱ッ!!」……気をつけるよって言おうとしたんだが遅かったか」

「さてと、俺は少し休憩するがお前ら、ちゃんとやれよ?」

「はい！」

「任せてください！」

「サボってたら今度の模擬戦は倍の量やってもらうからな」

スバルとティアナが揚げピザを平らげて去っていった後、しばらくしてキョウは店にいる訓練生たちにそう告げた。

「おら、お前ら気合入れろ!!」

「模擬戦倍はいやだろ?!!」

「おう!!」

「やあああつてやるぜ!!」

訓練生たちの気合が上がったことを確認したキヨウは店の裏側へ向かった。

「ふう……」

「なんだ、意外と先生姿も似合ってるじゃないか」

店の裏側で一息つこうとした彼にとある人物が声をかけてきた。

「意外とは余計ですよ、レジアス中将閣下」

「ふん、お前にそう言われるのはなんか変な感じだ。」

「以前と同じで構わん」

「変わってませんね、部隊長殿」

キヨウの前に姿を現したのは、ミッドチルダでは知らない人はいないといっても過言ではない人物であるレジアスだった。

管理局の制服ではなく、普通の一般市民が着るような服を着ていたが、彼女自身のプロポーションがモデル並で、かつその身からにじみ出ているオーラで存在感を出していた。

「それで、今回は何のようで?」

「何、管理局主催の祭りだ。」

「お忍びで楽しんで構わんだろう?」

レジアスの楽しそうな表情を見たキヨウはため息を吐く。

「相変わらずですね、オーリスさんがかわいいそうだ」

「あと、もう一度だけ尋ねに来た。」

カーン、特務一課に来る気はないか?」

「……」

レジアスの勧誘にキヨウはもう一度ため息。

「以前も断りを入れた上で、申し訳ありませんが、俺は特務一課にはいきませんよ」

「そうか」

「ええ。」

今の俺は訓練生あいつらを育て上げることが一番の生きがいになってるんですよ。

あいつらがどんなふうに着、活躍するのか。

それを人づてに聞くのが楽しいんです」

キヨウはそれに、とつづける。

「一課にはあいつがいるんです。」

俺は必要ないでしょう」

「まあ、第四陸士訓練校最大の問題児コンビの片割れだからな」

「それは言わないでください。」

今でもそれで校長には弄られるんです」

キヨウの言葉にレジアスは声を上げて笑う。

一通り笑うと、レジアスはその場から背を向けた。

「もう行かれるので？」

「ここにはお前の言葉を聞きに来ただけだからな。」

それに、そろそろ帰らねばオーリスから怒られるからな」

「部隊長も、娘には勝てないのですね」

「まあな」

レジアスはそう言ってその場を後にした。

そんな彼女を見送ったキヨウは立ち上がり、店の方へと歩みを進める。

祭りを訪れている人々にとって夕食時のピークが迫っており、店員たちの罵声にも似た声が彼のもとにまで聞こえていた。

「さて、俺も一仕事頑張りますか」

それからしばらく、一通り祭りを楽しんでいたスバルとティアナは休憩所ともなっている広場で一休みしていた。

「いやあ、いろいろ珍しいものがあって面白かったな」

「そうね。」

はあ、今日だけで結構カロリーとってしまった……」

広場にあるベンチの一つに座っている二人は既にだいぶ暗くなっ

てきた空を見上げる。

そこには雲一つない星空が広がっていた。

「きれいだな」

「そうね」

二人は短く言い合う。

しばらく二人はお互いに口を開かずに祭りの喧騒をBGMにして
星空を眺めていた。

その後、スバルがベンチから立ち上がる。

「何か飲み物買ってくる。」

ティアナは何かいるか?」

「じゃあ、紅茶でも頼もうかしら」

「了解。」

すぐに戻るから」

そう言って去っていくスバルの背中を見送ったティアナは再び星
空の観察という暇つぶしを再開した。

「ん?」

スバルがその場を去ってから数分後、ティアナは自分の方に歩いて
くる人影に気づく。

彼女にはその人影に見覚えがなかった。

「よお、お嬢ちゃん。」

少し俺と遊ばないか?」

ティアナは露骨に嫌な顔をする。

見るからに関わり合いになりたくない人種である。

「お生憎様、人を待ってるの。」

わかったらどこかに行ってくれないかしら」

ティアナは不機嫌な表情を隠しもせず言い放つ。

だが、男はまったく意に介さず彼女に近づく。

「そんなこと言わずに。」

君を待たせるようなやつ放っておいて、楽しいことしようぜ?」

いい子にしてたらちゃんとお楽しみめるからよ」

男の顔が浮かべる笑みに背筋をこわばらせるティアナはベンチか

ら立ち上がろうとしたが、此処で彼女にとって着慣れない浴衣という服装が仇になった。

うまく体制を整えることができずに尻餅をうってしまったのだ。

(しまっ……！)

「ほら、逃げるなよ」

「……ッ！」

尻餅について咄嗟に動き出すことができなかったティアナに男の一人が手を伸ばす。

今の彼女にとつて、それは今まで味わった以上の恐怖を抱かせるのには十分だった。

思わず悲鳴を上げそうになったが、何とかこらえたのは彼女の意地の成せる技だったのかもしれない。

(スバル……ッ！)

ティアナは目を閉じ顔を背ける。

その時、彼女の脳裏に浮かんだのは、スバル相棒の顔だった。

「捕まえろ」

男の手がティアナに触れようとする。

「はい、そこまで」

だが、その手がティアナの身体に触れることはなかった。

横合いから伸びてきた手にその腕を掴まれたのだ。

ティアナはその声を聴いて目を開く。

そこには今まさに彼女が望んだ存在がいた。

「なんだ、てめえ？」

「邪魔すんなよ……！」

男たちは邪魔した存在——スバルを睨みつける。

スバルは彼のことなど最初から認識していないかのように振る舞い、ティアナに話しかける。

「大丈夫か、ティアナ？」

「スバル……」

ティアナは目の前にスバルがいることに安心し、スバルもまたティアナがまだ何もされていなかったことに安堵の息を吐く。

「無視すんなよ、オラアツ!!」

そんな彼に無視されたと考えた男はスバルに掴まれていない方の手で、彼に拳を振るう。

だが、普段管理局員としてなのはの訓練を受け、一人の格闘家としてかなりの腕を持つスバルにとってチンピラの放つ拳は避けるにも値しなかった。

「なっ!?!」

スバルは視界の外から放たれた拳を造作もなく掴み取る。

男はありえないものを見たといった感じに驚愕に顔を染めた。

「……ッ!」

スバルはその一瞬で男を地面に叩き付け、さらに腕を背中に回し身動きをとれないようにする。

「痛うツ!」

「悪いな、俺って相棒が乱暴されそうになったからって許せるほど心広くないんだ。

それに、お前みたいなやつがいると誰かが不幸になるからな。

ここで逮捕してもいいんだぞ」

スバルは静かに、しかし確実に怒気を含んだ声で男に語り掛ける。

「す、すまなかつた!」

もうしねえから許してくれ!!」

スバルの言葉を聞いた男は大きな声でスバルに謝罪の言葉を投げかける。

「もうしないと約束するか?」

「する、するから!!」

男の言葉を聞いたスバルは少し考えた後、男の上から降りる。

スバルは男に背を向けて「もう二度とするんじゃないぞ」と言っ
てティアナを立ち上げらせようとした。

「へ、馬鹿がツ!!」

「ス、スバル!!」

その時、男が懐からナイフを取り出し、スバルに向かってその腕を伸ばし、それを見たティアナはスバルの名前を叫ぶ。

「……ッ!!」

「ガッ!?!」

だが、男のナイフはスバルどころか、彼の服すらも切り裂くことはなかった。

ティアナがスバルの名前を呼ぶのと同時に、スバルは男の腕の下に肩を入れ、男の身体を背中を持ち上げ、そのまま地面に叩き付けた。所謂、背負い投げである。

さらに彼は男の上に自分の身体を落とすことで、男の意識を完全に断つたのだった。

「馬鹿だな、お前みたいなのやつが素直に帰るなんて思ってるわけないだろうが」

とりあえず現行犯逮捕ツと、いいながら男にバインドをかける。

その後、騒ぎを聞きつけた管理局員に男を引き渡すスバルの背中をティアナはじっと見ていた。

(こいつの背中って、こんなに大きかったっけ……)

「ティアナ?」

気が付くと、ティアナはスバルの背中に頭を当てていた。

彼女の行動を感じたスバルは疑問の声を上げたが、ティアナは「なんでもない」と言っけて口を閉じる。

「もう少しだけ、こうさせて」

「あいよ」

周囲から人がいなくなった広場で、二人はしばらくじっとしていたのだった。

そんな彼らを星空の光が優しく照らしていた。

「まったく、ヒヤヒヤものやな」

「スバルが間に合ってよかったですね」

「まあ、飛び出そうとはしたけどな。」

「でも……」

二人から離れたところでじっと二人のことを見ていたはやては彼

らを見て言葉を続ける。

「なんや、心配いらんかったかもなあ」

「いい雰囲気です」

「ほな、うちらも戻ろうか。」

若いお二人の覗き見はここまでや」

はやてとりインはそつとその場を去っていった。

祭りは次第に終わりに向かっていた。

番外編 その二

その日、彼は少し早目に仕事を終えられるようにいつも以上のペーパーで仕事をこなしていた。

現場での活動を主にしている彼にとって、デスクワークとは決して得意分野ではなかったが、彼には終わらせなければならぬ理由があった。

「よし、終了つと」

そして、今最後の書類を片付けたところだった。

「それじゃ、部隊長。」

お先に失礼します」

「ん？」

ああ、もうそんな時間か」

男は部屋の奥にいる上司のもとへ挨拶に行き、仕事を終えたことを報告する。

報告を受けた彼女は彼の終わらせた書類を預かり、自分の机の引き出しにしまい込んだ。

「それで、例の少女の怪我はどんな具合なのだ？」

柄にもなく説教をかましたと聞いたが？」

「もともと疲労蓄積が原因のものが多かったために、ほとんどの怪我は完治しているそうです。」

それでも任務に支障が出るほど無理をしたのはいただけませんでしたが」

男は肩を竦めながら言葉を続けた。

「まあ、リンカーコアに損傷はないので魔法の使用は可能なそうです。」

怪我が治るまでは使用禁止ということらしいですけど」

「そうか……。」

将来有望な若い魔導師が潰れるのは避けなければならないからな。

お前のおかげで本局の方に借りを作ることができたな。

その点は、お前に感謝してもいいな」

「感謝するぐらいなら給料増やしてください」

「却下だ」

彼女の即答に彼は苦笑する。

「それでは」

「ああ、気を付けていけよ、カーン」

「怪我はだいぶ良くなったということでもいいんだな？」

「はい、まだしばらく魔法は使っちゃいけないですけど……」

隊舎を後にしたキョウは管理局本局の医療施設にいた。

彼の目の前のベッドには腕や足に包帯を巻いた少女——高町なのはが座っていた。

以前、彼が参加した作戦に彼女も参加しており、その最後に彼女の撃墜の危機をカーンが身を挺して防いだというのがこのあらまじだった。

「本当は早く魔法の練習もしたいんですけど……」

「医者ということは聞いておけ。」

「さもないと痛い目にあうぞ」

なのはが俯きながら呟くと、キョウは神妙な表情をしながらそう告げる。

「キョウさんも、そう言うことがあったんですか？」

「まあ、な……」

取り合えず、医者ということは絶対に守ることだ」

「なら、その医者 of 検査に遅れないでほしいですね」

キョウは突然後ろからかけられた声にビクついた。

彼は目の前の少女が青くなっているのを見た後に、恐る恐る振り返った。

そこには、額に青筋を浮かべているキョウの担当医であり、なのはの担当医である女医が立っていた。

「いや、あの、それは……」

「言い訳は無用。」

早く来てください。

彼女の方が重傷だったとはいえ、あなたも決して軽い怪我ではなかったのですよ」

キヨウはその時、彼女の身体から一種のオーラのようなものを感じていた。

彼女は魔力を持たない。

だが、キヨウは確実に彼女から重^{プレッシャー}圧を受けていた。

「はい……」

「じゃあ、なのはちゃん。」

またあとでね」

「あ、はい！」

女医はキヨウの襟首を掴み、引きずりながら病室を出ていった。

その光景になのはは呆然としながらもキヨウを片手で引きずっていった女医はいつたい何者なんだろうと、入院してから何度も考えたことを、また考え始めたのだった。

なのはのいる病室から引きずられたキヨウは、廊下でなのはを庇ったときに受けた腕の傷の検査の結果を聞かされていた。

「検査の結果ですが、ちゃんと言いつけ守ってるみたいでよかったです」

「まあ、あんなことは二度とごめんなので……」

キヨウは女医の視線から目をそらした。

そんな彼に対して女医は大きいため息をつく。

「それはそうよ、まったく。」

あの時、あなたが血だらけで運ばれたときはもうだめかと思ったんだから」

彼女は先程までの言葉遣いとは違い、フレンドリーな話し方でキヨウにそう言う。

「血だらけって言うがな、あれほとんど高町の嬢ちゃんの返り血なんだが」

「だけど、心配したのよ。」

まったく、こつちの気苦労も知らないで……」

「すまない。」

「……」

女医はキヨウの口に指を当てる。

「わかってる。」

あなたがそういう人間だつてのは。

それに、そういうあなただから私はあなたのことを……ね」

「イリヨウ……」

キヨウは女医——イリヨウの顔を見つめる。

二人はそのまま顔を近づけようとしたが、たまたまそこを通りかかった看護師がいたために一瞬で顔を離れた。

まあ、二人の顔がほんのりと赤く染まっていたために隠しきれてはいなかったが。

『それじゃ、三人とも。』

準備はいいかい?』

月日は流れ、なのはの怪我も完治し、晴れて退院できた次の休日。

キヨウは本局の所有する模擬戦スペースに立っていた。

「オツケーだよ、クロノ君」

「こつちも大丈夫」

キヨウの目の前にいる二人の少女が通信で聞いてきた男——クロノ・ハラオウン執務官に返事をする。

『カーン二尉?』

「こちらもいつでも行けます」

クロノの言葉に静かに答えるキヨウ。

すでに三人はバリアジャケットを見に纏っていた。

キヨウのバリアジャケットは一般局員に支給されるものに彼が独

自分で組み込んだロングコートというものだった。

『なのはちゃん、キョウ。』

二人の怪我は一応完治はしたけど、無理は禁物です。

こちらが無理だと判断した場合には模擬戦は中止させてもらいますが、よろしいですね?』

「はい!」

「よろしく頼む」

クロノから通信機を受け取ったイリヨウが二人に釘をさす。

その言葉に肯定する以外の言葉は受け取らないという雰囲気を感じ取った二人は即答する。

『それでは、模擬戦開始!』

「さて、どう来るか」

クロノの合図とともにキョウはその手にデバイスを起動させる。

こちらもバリアジャケットと同様に一般支給されるものであった。

静かにデバイスを構える彼をなのはとフェイトは警戒しながら観察していた。

「なのは」

「気を付けて、フェイトちゃん。」

あの時、意識朦朧だったけど、あの人はとても強かった」

「……勝てる見込みは?」

「正直勝てる気がしないの」

なのはの言葉に眉をしかめるフェイト。

フェイトは彼女がそう言った弱気な発言は聞いたことがなかった。

そんな彼女がそこまで言う相手。

無意識に彼女のデバイスを握る手に力が入った。

「クロノ執務官、質問いいですか?」

「なんででしょうか?」

観戦ルームでイリヨウは隣に立つクロノに気になっていたことを尋ねた。

「彼女たちとキョウの模擬戦を許可したことです。」

「なのはちゃんたちとキョウの実力の差はわかりきっているはずですが……？」

「彼女たちに知ってもらいたいからです。」

「世界にはまだまだ自分たちよりも巧い存在がいるということを」

クロノの言葉にイリヨウは首を傾げる。

それに対してクロノは目の前で行われている模擬戦から目をそらさずに言葉を続ける。

「すべては話せませんが、彼女たちはすでに何度か、とある世界の危機を救っています。」

「ですが、今の彼女たちの戦い方は言い方は悪いですが力のごり押しで何とかというところです。」

「まあ、あの年齢であれだけの魔法を扱えるのは流石、としか言えませんが。」

それでもそれ以外の戦い方があるということを知ってほしい。

「そう思っただけです」

「それに、とクロノは続ける。」

「自分と似た戦い方をする地上のエースの戦いをこの目で見たかったというのがあります」

「それは執務官としてですか？」

「さあ、それはどうでしょうね」

クロノのその言葉でイリヨウは彼の思いを知り、その視線を模擬戦の方へと戻した。

放たれる直射魔法をデバイスから発生させた魔力刃で捌く。

キョウはその手応えから相手の力量を測りとる。

「なるほど、いいな」

そう呟くと、彼の顔には薄く笑みが浮かび上がっていた。金色の直射魔法の合間に彼に殺到する桃色の誘導弾。

それを切り払いその場から離脱する。それを追うように一筋の光が駆けた。

「速い、だが……」

その光が彼の後ろを取ると同時にその手に握った鎌を振り上げる。しかし、その鎌が振り下ろされることはなかった。

「なっ!?!」

「確かに速い。」

俺が今まで見てきた中でもかなりの速さだ。

だが、それだけなんだよ、君のは」

光——フェイトは己のデバイス『バルディッシュ』にキョウのデバイスが当てられていることに気づいた。

「正確に言えば、素直すぎるんだよ君は。」

攻撃も、機動も何もかも」

キョウはフェイトに語りながらデバイスに魔力を込める。

フェイトが離れられないように、そしてなのはが彼を狙い撃てないようにバインドを仕掛け、位置を調整しながら教師のように。

「まずは一人」

威力を弱めた速射魔法がフェイトに向かって至近距離から放たれた。

速射とは言いえ砲撃魔法を直に食らったフェイトは地面に叩き付けられた。

『フェイト、撃墜判定だ』

クロノの言葉が部屋の中に響く。

その報告を聞きながらキョウは右肩をちらりと見る。

そこには小さくない焦げ跡がついていた。

「あの一瞬で当ててきた、か」

キョウはそう呟くと楽しそうな表情を浮かべる。

そんな彼に向かって六発の誘導弾が迫る。

「コントロールは合格」

その誘導弾を回避する機動で飛翔するキヨウだったが、誘導弾は彼の後を離れなかった。

「狙いも正確か」

回避することができないと判断したキヨウはデバイスで六つの弾丸を切り裂いた。

爆発による煙の中から飛び出したキヨウだったが、次の瞬間、彼の手足に強固なバインドが仕掛けられた。

「このタイミングでバインドか」

キヨウは手を軽く引いてみるが、仕掛けられたバインドはビクともしなかった。

彼はバインドを仕掛けたのはが次に何をするのかを目で追う。

彼の視線の先には、レイジングハートに魔力を集中させるなのはの姿があった。

「まあ、定石通りセオリーにいくなら砲撃をズドンだろうな。

その判断は正しいぞ、嬢ちゃん」

キヨウは彼女の顔を一目見て、自分の周りに数発の魔力弾を生成する。

「え……!?!」

直後、キヨウの周囲に浮かべられた魔力弾が一斉に爆発。

広範囲に広がる煙が彼の姿を覆い隠した。

「……………」

なのはは彼の行方を見失わないように煙の方から目を逸らさなかつた。

そして、煙の中から彼の羽織っていたロングコートの裾が飛び出した。

「シュートツ!!」

すでに臨界まで魔力を溜めていたなのははその方向に砲撃を放つた。

だが、その砲撃はキヨウの身体を捉えることはなかった。

「そんな、どこに……!?!」

なのははすぐにキヨウの姿を捉えようと周囲に気を配るが、彼の姿

を捉える前に彼女の首筋に魔力刃が添えられた。

魔力刃を首筋に構えられたことにより、なのはは身動きすることすらもできなくなった。

直後、クロノによる撃墜の認定が下った。

「あ、あの。」

「どうやって……?」

「狙いは悪くなかった。」

「だけどな」

なのはは黙って彼の声を聴いていた。

「あの戦法がたぶん今のお前さんの切り札なんだろう?」

「……はい」

「だったら理由は一つだ。」

「俺の方が引き出しの数が多かったってわけだ」

「キョウの引き出しという言葉に首を傾げるなのは。」

そんな彼女の様子を見たキョウは笑いながらその場を去っていった。

彼の言葉の真意を理解しかねている彼女のもとに、フェイトが飛んでくる。

「なのは、大丈夫?」

「フェイトちゃん……。」

「最後、あの人どうやって?」

「なのはは隣まで飛んできたフェイトに模擬戦の最後の攻防のことを尋ねる。」

「なのはが撃ったのは、あの人が投げ出したコートだけ。」

「なのはの注意がそっちに向いている極短時間の間に、ソニックムーブでなのはの後ろに回り込んだ。」

「速度は私よりも遅いかもしいれないけど、使うタイミングや最短距離を選ぶのは経験からくるものだと思う」

「そっか……。」

「やっぱり、私たちってまだまだだね」

「うん」

二人はキヨウが去っていった方を見ながらそう言って決意を新たに固めていた。

今よりももつと強くなる、という決して折れない決意を。

「どうでしたか？」

あの二人は」

模擬戦を終えたキヨウはクロノと二人きりで言葉を交わしていた。

「二人ともあの年齢であそこまでやれるとは、さすがとしか言えませんよ。」

もつとも、高町のお嬢ちゃんの方はまだまだ粗削りなところが目立ちますね」

キヨウは先ほどの模擬戦のデータを呼び出しながら自分の考えをクロノに伝えていく。

「それに比べて、あなたの義妹さんは基礎がしっかりできてる。かなり優秀な指導者がいたんでしようね。」

戦い方がすでにかんりの域に達してる」

キヨウはそこまで言うとは一度口を閉じる。

「ですが、二人ともまだまだ足りないものが多すぎる。」

あなたもそう思っていたのでは？」

「そうですね……。」

今回の模擬戦を見て改めて思いましたよ。

あの二人にはもつといろいろなことを教えなければならないということを」

「なら、その指導者に丁度いい人を一人知ってます。」

紹介状を書いておきますよ」

「それはありがたい。」

その人は誰なんですか？」

「ファーン・コラード三佐。」

私の恩師ですよ」

「——ま、お——さま」

「ん？」

キヨウは身体をゆすられる感覚を覚え、目を開いた。

彼の視界に映ったのは一人の制服を着こんだ女性——いわゆるCAと呼ばれる職種の女性だった。

「おはようございます。」

本機はミッド臨海空港に到着しましたので、お客様もお降りになってください」

「あ、ああすみません。」

すぐにおりませんで」

背筋を伸ばしながら立ち上がったキヨウは荷物を手に持ち急いでその場を後にした。

荷物を片手に発着ゲートをくぐったキヨウは先ほどまで見ていた夢のことを思い出していた。

「また、懐かしい夢を見たものだな」

一月に及ぶ出張任務を終えたキヨウは現在家で彼の帰りを待っているであろう婚約者であるイリヨウのことを思い浮かべる。

「とりあえず二週間は休暇がもらえるから、イリヨウと二人でゆっくり過ごすとするかな……」

最愛の人とのひと時を思い浮かべながら歩みを進める彼の耳にとある声が聞こえてきた。

「お兄ちゃん!!」

「ああ、もう泣くなよ。」

ほら、飴玉やるから、な！」

キョウがその声のした方に視線を向けると、そこには深い蒼色の髪をした少年と迷子であろう茶髪の少女がいた。

少年が少女にポケットから取り出した飴玉を渡し、一言呟いた。

「はあ、俺も姉貴とはぐれたつてのに……」

でも、放っておけないからな」

「ラグナー！」

キョウはそんな彼のもとに足を向けようとしたが、彼らの方に向かっていく青年が視界に入ったのを認めるとそちらへ行こうとはせず、あとはその青年に任せることにしたのだった。

その後、彼がその蒼髪の少年が教師と教え子の関係になるとは知る由もなかった。

ティアナルート 第十四話

広い空間でモノを打ち付ける打撃音が響く。

その音を打ちだしている二人の人物は互いに拳や蹴りを繰り返し広げていた。

「ハアッ！」

「デヤア!!」

二人の人物——ギンガとスバルは管理局の制服ではなく、訓練の際に着る動きやすい服装で互いの攻撃を捌いていた。

ギンガの拳をスバルが肘を使い逸らせば、その隙を突くようにギンガの蹴撃が繰り返される。

「——ッ！」

「なっ?」

だが、スバルはその蹴り上げられたギンガの右足を手でつかみ、そこを支点に側転の要領で彼女の側面に回り込んだ。

スバルの予想外の行動に虚を突かれたギンガだったが、スバルが彼女に拳打を放つ前にその拳を蹴り上げた勢いに乗せた左足で蹴り飛ばす。

「これで……ッ！」

「まずッ!」

拳が蹴り上げられたことによって体制を大きく崩されたスバルの脇腹にギンガの回し蹴りが見事に極まった。

スバルは蹴りの勢いのまま壁まで吹き飛ばされた。

「あ、スバル、大丈夫!」

「な、なんとか……」

予想以上に勢いの乗った蹴りが入ったことに驚いたギンガが彼のもとに駆け寄る。

そんな彼女に対してスバルは痛みを堪えながらも蹴られた部分を彼女の見えるように腕をどかした。

「あ……」

そこには蹴りが極まる直前にスバルが咄嗟に張った防御魔法の魔

法陣が浮かんでいた。

さて、今回なぜギンガが機動六課に来ているのかというと、部隊長であるはやてが戦力不足を感じ、それをレジアス中将に相談したところ、彼女から陸士108部隊に彼女の派遣の要請が下ったという理由だった。

「はい、二人ともご苦労様」

スバルが防御をギリギリで成功させていたことに安堵していたギンガのもとになのはをはじめとした隊長、副隊長が揃って近づいてきた。

「どうだった、ギンガ？」

「そうですね……」

魔法の使用のタイミング、方法、体術。

どれもが以前よりも巧くなってました」

ギンガは壁際でティアナから受け取ったスポーツドリンクをがぶ飲みしている弟を見ながらそう答える。

「正直、予想以上でした」

「まあ、私たち相手に組み手をやって上手くなってなかったら、逆におかしいことだがな」

「特にザフィーラ相手にスバルはよく組み手してたからな」

ギンガはシグナムとヴィータの言葉に首を傾げた。

彼女も普段二人が剣やハンマーといった得物を扱う騎士だということを知っていたために、組み手をやっている姿がどうも思い浮かばなかったのだ。

そんな彼女の様子に気づいたシグナムは肩を竦めながら口を開く。

「私たちとて時と場合によっては徒手空拳で戦うときもあるさ」

「狭いところじゃ得物は逆に邪魔になるからな。

そう言った時のことも考えなきゃならないんだよ。

特に、なのはは近づかれたときのために結構スバル相手に格闘戦の訓練してるしな」

「そうなんだよね」。

スバルって基本的に忠実な格闘家としてもかなりの腕だから、訓練相

手に持ってこいなんだよ。

おかげで、シグナムさん達に接近されてもそれなりに相手できるところになったんだ」

「そ、そうなんですか……」

ギンガは、自分が記憶していたなのは戦い方を思い出し、戦慄を覚えた。

砲台役としての魔力砲撃を放つのはにとつての弱点の一つである接近戦。

それを古代ベルカ式の使い手であるシグナムたち相手に落とされないほどの実力を持つということがどうしたことなのか、それを理解してしまったギンガは引き攣った笑顔を見せるだけだった。

「さてと、今回の任務もこの間と同じよ」

数時間後、スバルたちフォワードメンバーは地下道の入口で簡単な作戦会議を行っていた。

出向したばかりであるギンガは今回は彼らのフォローという理由でこの場にはいない。

「この地下道の先にガジェットと、正体不明のエネルギー反応が確認されたわ。」

で、ロストロギアの可能性があるから、私たちがガジェットを叩いて可能であればブツを確保する。

何か質問は？」

地下道の地図を広げていたティアナが周りの三人に視線を向ける。

スバルたちからの質問がないのを確認したティアナは地図を収納する。

「さあ、さっさと終わらせるわよ」

「「おっー」「」

「あらら、もう突破されたか〜」

スバルたちが地下道のガジェットを相手にしているころ、その奥の方で彼女はモニターを眺めながら困ったように呟いた。

モニターの中にはⅢ型に四本の足を取り付けた改良型であるⅢ型改も数機映っていた。

「やっぱりガジェットたちじゃ相手にならないか〜」

「Ⅲ型改もあつさりやられちゃってるつすね〜」

水色の髪の少女と、特徴的なしゃべり方の少女——セインとウエンデイはモニターに映るガジェットのやられっぷりを見ながらのんびりとした会話を繰り返していた。

「まさかお前の現地稼動試験の時に連中と出くわすとはね……」

クア姉く、どうすればいい?」

セインが念話で別の場所にいるクアットロに尋ねる。

すると、彼女たちの目の前にクアットロの映ったモニターが映し出される。

『ウエンデイちゃんにもしものことがあったらまずいから、帰ってらっしゃい。』

あ、Ⅲ型改は全部出しちゃっていいわよ〜。

どっちみち、生産ラインはもうできてるし』

「はいよ〜」

「あー、メガ姉、メガ姉。」

ちよつといいつつすか?」

セインがモニターを消そうとしたとき、ウエンデイがクアットロを呼び止める。

『なあに、ウエンデイちゃん?』

「あたしも一当てしたいっす!」

せつかく外に出たのに、何もしないで帰るのは嫌っす!」

『ん〜、なら一発だけならいいでしょう。』

一発撃つてすぐに帰ってきなさい。

あなたたちをこんなところで失うわけにはいかないってことはわかってるわよね〜?」

「やったーッす。」

「ありがとうっす、メガ姉!」

ウエンデイはすぐに自分の固有武装である『ライディングボード』を取り出し構える。

「さてと……ここっす!」

彼女の放った弾丸は遠く離れた、スバルたちと戦闘を行っているⅢ型改の背後に直撃する。

「だが、直撃しただけで爆発は起きなかった。」

「アレ、不発か?」

「違うッすよ〜。」

「信管を遅延型にしてるだけっす。」

「そして……」

セインに説明するウエンデイが手を『ボンッ』と開くと同時にⅢ型改の中にめり込んだ弾丸が周囲に衝撃波を撒き散らす。

「Ⅲ型改自身のエネルギーも全部一気に爆発させるっす。」

「相手が並の魔導師なら行動不能になる範囲攻撃っすよ!」

Ⅲ型改の爆発を確認したウエンデイはライディングボードに寝そべりながらセインのもとに戻ってくる。

「そんな妹を見ていたセインはモニターに映る光景を見て楽しそうに笑みを浮かべた。」

「ウエンデイ、やっぱり連中、並の魔導師じゃないみたいだな」

「ほえ?」

「ほら、蒼髪のやつが前面を覆う形で障壁張ってる。」

「で、爆発の瞬間にチビ騎士とチビ竜、それにオレンジツインテールの魔力弾がこっちに向かってる」

「は〜、やっぱりやるもんすね〜。」

「さすが、ノーヴェがお熱なスバルんっす」

「ん?」

「何か言ったか……?」

「いやいや、何も言っていないですよ。」

「ささ、さつさと帰るツすよー!」

ウエンディの様子に首を傾げながらもセインはその場から彼女たちを連れて地面に潜っていった。

エリオとフリードがたどり着いたときには、そこには誰かがいたという痕跡しか残されていなかった。

「結局、今回ははずれだったってことか?」

任務を終え、機動六課の隊舎に戻ったスバルとティアナは二人で缶コーヒーを飲みながら並んで海を眺めていた。

「どうかしらね。」

エリオの話だと誰かがいた痕跡があるみたいだけど……」

「地下道だからな……。」

ホームレスなんかの可能性もあるし……」

スバルは缶の中に残ったコーヒーを一息に飲み干し、大きく息を吐いた。

「そうなのよね……。」

でも、最後の攻撃、自爆にしては様子がおかしかった……」

「確かに……ん?」

ティアナの言葉に頷いたスバルだったが、彼のポケットで端末が震えるのを感じた彼はティアナに断りを入れてその場から離れた。

「非通知……?」

端末の画面に映る番号に見覚えがなかったスバルは首を傾げながらも通話ボタンを押した。

「はい、スバル・ナカジマですが」

『……あたしだ』

耳にあてたスピーカーから聞こえてきた声に聞き覚えのあったスバルは驚きに目を見開いた。

「ああ、あの時のメガネっ子が」

『眼鏡っ子って……』

まあいい。

今いいか?』

「どうした?」

何か困ったことでもあったか?」

『いや、そうじゃない。』

ただ……』

「ただ、なんだ?」

スバルは相手の声が少し暗いを感じ、ゆっくりと問いかける。

『こっちの事情でな、もう前みたいには会えない。』

何も連絡なしにはどうかと思って、連絡しただけ』

「会えない、か。」

まあ、その事情とやらは聞かないでおくよ」

『すまねえ……』

「まあ、こういうこともあるさ。」

いつかまた、俺とお前の道が交わるのを祈るだけだな」

そう言っつてスバルは一つ大事なことを聞き忘れていたことを思い出した。

「なあ、名前は?」

『名前……?』

「次にあったときに名前知らなかったら不便だろ?」

『……ノーヴェだ』

「ノーヴェか、いい名前じゃないか」

『……ああ、あたしも気に入ってる。』

碌に話もできなかつたけど……、またな』

「またな、ノーヴェ」

時間にして数分の会話。

だが、その数分で相手がかかなり悩んだ末での別れだということのスバルは直感で感じていた。

「出会い別れは人生にはつきものってことか。」

ああ、あいつとは気が合いそうだったんだがな……」
一人呟くその声はどこか寂しさを感じさせるものだった。

「またな……か」

スカリエッツィのマジトの周辺の森の中で彼女は先ほどまで使っていた端末を目に呟く。

そして、その端末を素手で握りつぶした。

「何を迷ってるんだ、あたしは。」

もう決めたんだろ。

ドクターの夢を手伝うって」

ノーヴェは懐から一枚の紙切れを取り出す。

それは以前、スバルから渡された彼の連絡先が書かれたメモ用紙だった。

「さようならだ、スバル。」

もう、あたしとお前の道は交わらねえよ……」

ノーヴェはそう呟き、メモ紙をバラバラに引き裂いた。

ふと不意に吹いた風にそのバラバラになった紙は吹き飛ばされ、空に巻き上がっていった。

ノーヴェはそれを見た後、森の奥に向かって歩みを進め、その闇に消えていった。

ティアナルート 第十五話

「はあ、はあ……」

機動六課の訓練スペースでギンガは息を荒げていた。

彼女の周囲ではエリオとキャロが座り込み、フリードもエリオの頭の上でぐったりしていた。

「ねえ、スバル……?」

「ん?」

「なんだ、姉貴?」

彼女の隣で水を飲んでいたスバルは彼女の方を見て首を傾げた。

「これって、いつもやってるの?」

「たまに、だけど結構な頻度でやってる」

ギンガの言うこれというのは、フォワード四人対前線隊長四人の模擬戦のことである。

先日ギンガが六課に出向になった後、初めてこの模擬戦が行われたのだった。

「もう一ついい?」

ギンガの問いにスバルと、彼の隣で汗をぬぐっていたティアナが頷く。

「なんで二人は息切らしてないの?」

「慣れました」

「え?」

「慣れました」

二人の息ぴったりでありながら棒読みな答えにギンガは「慣れたんだ」と呟くことしかできなかった。

「はあく、疲れた……」

「私は疲れたってレベルじゃないんだけどね……」

「大丈夫ですよ、ギンガさん。」

「次第に慣れますから」

午前の訓練を終えた五人は汗をシャワーで洗い流し、その足で食堂に向かっていた。

その途中でスバルは後ろから自分の名前を呼ぶ声に反応して振り返る。

「スバルお兄ちゃん！」

「ん？」

スバルが振り返ると、その視線の先には彼の方に走ってくるヴィヴィオの姿が映った。

それを認めると、スバルは走ってくるヴィヴィオを受け止める体制をとり、ヴィヴィオもそこに向かって走ってくる。

「おっと」

そしてスバルは、走って彼にぶつかってきた彼女を受け止めると、その勢いのままヴィヴィオの身体を持ち上げ、その場でぐるぐると彼女を回した。

「わっいー！」

ヴィヴィオの楽しそうな表情を見たギンガは微笑みながら口を開いた。

「小さい子に好かれるのは相変わらずなのね」

「ええ、たぶんスバルがなのはさん達以外なら一番ヴィヴィオに懐かれていますしね」

その後、ヴィヴィオを追ってきたのはとフェイトも交えて大人気で食堂へ向かうこととなった。

そして、食堂にて……。

「ヴィヴィオ、ピーマン残したらダメだよ？」

「うー、苦いのきらくい……」

「そんなこと言わないの」

「いやー」

ヴィヴィオの頼んだチキンライスの中にピーマンが入っており、まだ小さい子供であるヴィヴィオにとってピーマンの苦さは食べられるものではなかったようだ。

フェイトが何とか食べさせようとするが、ヴィヴィオは頑なにそれ

を拒む。

それに困った表情をしたなのはがスバルに尋ねる。

「ねえ、スバル。」

「何かいい手はないかな？」

「そうですね……」

なのはに頼まれたスバルは少し考えた後、自分がスープを口に運ぶために取ってきたスプーン（未使用）でヴィヴィオのチキンライスを一掴み分掬って彼女の口に近づける。

「ほらヴィヴィオ、あ〜ん」

「い〜や〜！」

スバルがスプーンを近づけるものの、ヴィヴィオは顔を背けてしまう。

そんな彼女にスバルはため息を吐きながら、口を開いた。

「ほら、好き嫌いしていると、なのはさんやフェイトさんみたいな格好良くて綺麗な大人になれないぞ？」

「え……」

スバルの言葉に小さく声を出すヴィヴィオ。

彼女はすぐ隣にいるのはとフェイトを見る。

「……食べる」

「ほら、あーん」

「あーん……にが〜い……」

ヴィヴィオはスバルから差し出されたスプーンを口に含み、我慢しながらもちゃんとそれを飲み込んだ。

「よし、ちゃんと食べられたじゃないか〜。」

「偉いぞ」

「ヴィヴィオ、偉い……?」

ヴィヴィオはなのはの顔を見る。

そんな彼女に向かってなのはは頷きながら彼女の頭を撫でる。

「うん、偉い偉い」

「えへへ……」

微笑ましいひと時である。

そんな光景を見ながらティアナはぼそりと呟いた。

「ヴィヴィオが我慢して食べてるんだから、好き嫌いするような人はいなくなるでしょうね〜」

「……」

ティアナの言葉を聞いた一人の少女の肩がビクついた。

その少女は隣の少年の皿に移そうとしていたニンジンを手静かに引っ込めた。

「頑張ります……」

「よろしい」

「これがあぁなって、こうなって……」

午後、機動六課の隊舎でスバルは一人で苦手なデスクワークをこなしていた。

そんな彼のもとになのはがカップを二つ持って近づいてきた。

「やっほー、スバル。」

「仕事捗ってる?」

「ぼちぼちです。」

「いや、デスクワーク苦手で……」

「まあ、今日はライトニングは現場検証、副隊長も別の部隊との共同任務。」

ギンガも一度108に戻って引継ぎの最終調整、ティアナも部隊長に連れていかれたしね」

「本局に、でしたよね?」

「うん。」

「はい、コーヒー」

なのはから手渡されたカップを受け取りスバルは一口、口に含む。

一口、それだけでスバルはこのコーヒーがインスタントのものではないということに気づいた。

そして、そのコーヒーを以前飲んだことがあるということも。

「なのはさん、このコーヒーって……」

「あ、気づいた？」

「そうだよ、翠屋のオリジナルブレンドコーヒー」

「なのはははカップを口に運び、一口飲む。」

「まあ、お父さんのに比べればまだまだただなだけどね？」

「でもこれでも喫茶店の娘ですから」

「いや、それでもおいしいですよ。」

「インスタントのものと比べるのは失礼なぐらいに」

「あはは、そう言ってくれるとうれしいな」

「なのははとスバルはその後、他愛のない話をしばらくし続けた。」

「結果、スバルの仕事が進まなかったのは話すまでもないだろう。」

ミッドチルダのはずれにある森の中に巧妙に隠されたアジトの一室で彼は周囲に立つ娘たちに顔を向ける。

「さて、皆。」

「報告を聞かせてもらえるかい？」

「はくい、まずガジェット生産ラインの方はすべて全力稼働中です。」

「でも、V型の生産はしなくてもいいんですか？」

「彼——ジェイル・スカリエッティはクアットロの質問に首を縦に振って答える。」

「あれは対ジェンド用に保険代わりとして開発したものだ。」

「そのジェンドもない今、V型は必要ないよ」

「スカリエッティから感じられる有無を言わさない雰囲気クアットロは驚きながらも引き下がる。」

「私をはじめ、全員のメンテナンスは完了しています」

「それは結構。」

ウーノ?」

「はい、先ほどドゥーエからの報告がありました。」

『掃除は完了した』そうです」

スカリエツティはトーレとウーノの言葉を聞き、目をつむる。

そして、その瞼を開いたとき金色の瞳が怪しく輝いた。

「では、先行潜入組の皆は出発の準備をしてくれ。」

目標は管理局、ミッドチルダ地上本部及び、聖王の器であるヴィ

ヴィオ君、タイプゼロ・ファースト、ギンガ・ナカジマ君。

特に彼女の方は可能な限り連れて帰るように」

スカリエツティはそこで言葉を区切ると、大降りに腕を広げた。

「さあ、私の夢の懸け橋への第一歩への下拵えだ。」

皆、頼んだよ?」

ウーノを除いた10人は静かにその部屋を出ていった。

彼女たちを見送ったスカリエツティは一人呟く。

「もう、後戻りはできないな……。」

だが、もう迷ってはられないのだ……」

ウーノが見た彼の目は、人が何かの覚悟を決めた目だった。

ティアナルート 第十六話

9月11日

機動六課の隊舎ロビーにフォワードメンバーをはじめとした前線メンバー全員が集められた。

「というわけで、明日はいよいよ公開意見陳述会や」

整列した彼らの前に立つはやてがそう切り出す。

「明日14時からの開会に備えて、現場の警備はもう始まつてる。」

なのは隊長とヴィータ副隊長、リイン曹長とフォワード4名はこれから出発、ナイトシフトで警備開始」

「みんな、ちゃんと仮眠とった？」

「はい！」

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝に集合入りする。」

それまでの間、よろしくな」

「はい！」

はやての言葉に返事をするスバルたちだったが、その中にギンガがいないことに気づいたスバルは首を傾げる。

「あの、姉貴は？」

「ギンガは一足先に現場に行ってもらってるよ。」

向こうで合流やな」

「そうですか」

何も知らされていないかったことに少し不満気に答えるスバル。

そんな彼を見ながらはやては一度ため息を吐き、その場にいる全員を見る。

「ほな、皆よろしく頼むな」

「はいっ！」

「おろっ？」

スバルたちが屋上のヘリポートに到着すると、ヘリの近くには寮母のアイナとヴィヴィオが立っており、ヴィヴィオのそばになのはが腰を下ろしていた。

「アイナさん、どうしたんですか？」

「ああ、みんな。」

「ヴィヴィオがね、ママの見送りするんだって聞かなくて」

「ティアナが代表で尋ねるとアイナが困ったように笑顔で答える。」

「ああ、なるほど」

「確かにヴィヴィオが来てから夜間出動は初めてだったわね」

「アイナさん、ヴィヴィオのこと、お願いしますね」

「任せて、スバル君。」

「みんなも、お仕事頑張つてね」

「アイナからの言葉に頷いた四人はその視線をなのはとヴィヴィオに向ける。」

「なのはママ、今日は外でお泊りだけど、明日の夜にはちゃんと帰ってくるから」

「……ぜったい?」

「うん、絶対に絶対。いい子にしてたら、ヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作つてあげるからね」

「……うん」

「ママと約束、ね?」

「うんっ」

小指を絡めながらそう言葉を交わすのはとヴィヴィオ。

二人は意図してはいなかったかもしれないが、そのやり取りはこれから任務に向かうフォワードメンバーの緊張を程よくほぐしたのだった。

「それにしても、ヴィヴィオ、本当に懐いちゃってますね」

「全く」

地上本部へ向かうヘリの中で、スバルとティアナが口を開いた。

「なのはは二人の言葉に少し戸惑った表情をする。」

「そうだね。」

「結構、厳しく接してるつもりなんだけどなあ……」

「きつとわかるんじゃないですか？

なのはさんが優しい、って」

「そうかなあ……。」

それを言うと、スバルだって結構懐かれてると思うけど……？」

「スバルに対しては年の離れたお兄ちゃんみたいな感覚じゃないですかね？」

「そうだよなあ。」

なのはさんに向ける感情とはまた違うものだよな」

フォワードメンバーの言葉になのはは照れ笑いを浮かべた。

そんな中、その場にいる全員の思いをリインが代表して口にした。

「もういつそ、本当になのははさんの子供にしちゃうとか！」

リインの言葉になのはは首を横に振る。

「受け入れて貰える家庭探しは、まだまだ続けるよ」

「いい受け入れ先が見つかって、ヴィヴィオが納得してくれれば……」

「納得……しない気が」

「私もそう思います……」

「うん、うん」

「ええ〜」

なのはの言葉にエリオとキヤロが答え、スバルとティアナも頷く。

「あれだけ懐かれてたら納得しませんよ。」

たぶん以前以上に泣きつかれるんじゃないでしょうかね？」

スバルの言葉になのはは苦笑しながら口を開く。

「そりゃあ、ずっと一緒にいられたら嬉しいけど……。」

本当にいいところが見つかったらちやんと説得するよ？

……いい子だもん。幸せになって欲しい」

「今も十分幸せだと思ってると思いますけどね」

「そ、そうかな？」

「俺はそう思います。」

まあ、ヴィヴィオがそう思っただけじゃなければそれまでですけど、あの懐きようからすると……」

「ま、まあ……そんな家庭が見つかるまでは、私が責任持って育ててい

くよ。

それは、絶対に絶対」

「そのまま高町家の娘になりそうだな」

『うんうん』

「そ、そんな〜」

ヴィータの言葉になのは以外の全員は頷いた。

皆のその行動になのはの悲鳴とともにヘリの中は笑いに包まれた。

管理局ミッドチルダ地上本部、その廊下をレジアスはオーリスを伴って歩いていった。

レジアスは少し後ろを歩くオーリスに尋ねる。

「警備の状況はどうだ？」

「現在は陸士36、91、106部隊をはじめとした局員が配置についております。

シフトの交代は3時間後。

すでに交代要員は待機しています」

「会の主な議題は確か、アインヘリアルと地上の防衛についてだったな?」

「はい」

「まったく……、アインヘリアルあんな大砲なんぞ地上で役に立つと思っっているのか連中は……。

私なら、あんなもの作る金があるなら局員の給与に回してやるというのに……」

「仮にアインヘリアルあんな大砲の建設費をすべて給与の増額に回すと、一人当たり30%のアップが見込まれますね」

手に持ったタブレットを操作しながらオーリスはスラスラと答え、その事実その事実にレジアスは大きくため息を吐いた。

オーリスはため息を吐くレジアスに対して、一つ疑問に思ったことがあった。

「ですが、なぜここまで警備を？」

地上本部の防御は鉄壁を誇ります。

中将はそれ以上の何かが来るとお思いで？」

「ふむ……」

オーリスの問いにレジアスは少し考えるそぶりを見せ、そして答えた。

「確かにこの防御は鉄壁だろうな、魔法に対しては。」

だが、此処を狙う者がそれ以外のものを使ってきた場合はどうなる？」

「まさか……」

「鉄壁ということ誇るのはいい。」

だが、物事は常に最悪を考えて行動しなければならんからな」

レジアスの答えに納得したのか、オーリスはそれ以上は何も言わなかった。

(すまんな、オーリス。

本当はお前にも話しておきたいところだが、真実を知る者は少ないことに越したことはないからな……)

レジアスの胸中の思いはだれにも知られることはなかった。

9月12日 AM 3:15

「うう、寒い寒い……」

地上本部の外周を警備していたティアナの元に、スバルがそう呟きながらやってきた。

季節は夏を過ぎ、秋に入りかけたというところであるが、この時間は存外冷える時期でもあった。

「ちよつと、どこに行つてたのよ……?」

「いや、差し入れだつて言われてな」

スバルは手に持っていた紙コップをティアナに渡し、それに水筒の中身を注ぐ。

水筒からは温かいお茶が注がれ、湯気が立ち上った。

「温まるわね」

「本当、感謝感激だなく」

冷える外で飲む温かいお茶は格別だった。

温かいお茶は冷え切った彼らの身体をゆつくりと温めていった。

「そう言えば、さっきの人……」

「何？」

「いや、これ渡してくれた人なんだけどなく」

ティアナは隣でお茶を飲むスバルの顔を見る。

スバルはそんな彼女の視線に気づくことなく話を続けた。

「かなり強そうな人だったなく」

「強そうね。」

私たちが知ってる人と比べるとどのぐらい？」

「そうだな……。」

「多分、教官ぐらい、かななく？」

「ふくん、それはすごいわね。」

寒空の下で警備任務という気の張る任務を行っていた二人は、差し

入れのお茶を飲むことでその気が緩んでいた。

そして、その緩み故に気づけなかった。

なぜ、それほどの実力を持った人物が重役の護衛についていないの

かという違和感に……。

ティアナルート 第十七話

9月12日 PM 5:57

公開意見陳述会が開始されすでに数時間がたった。

すでに日も傾き、その姿を地平線の向こう側へ隠そうとしている。

そんな中、スバルたち四人とギンガ、ヴィータ、リインは南側のエントランスに集合して互いに報告を行っていた。

「とりあえず、異常なしか。」

だが、最後まで氣イ抜くんじゃねえぞ」

「「「はいー」」」」

「残りの時間はそんなに長くないので、此処からは全員で一緒に警備するですよ！」

リインの言葉にティアナが疑問の声を上げる。

曰く、一か所で固まって警備しても意味がないのではと。

その問いにヴィータが頭を掻きながら答えた。

「ほかの陸士部隊の人がな、お前らが仕事してる中で休んでられるかって言ってきてな。」

で、こつちとしてもお前らが疲れていざというときに何もできないのは困るから、ありがたく手伝ってもらってる。

もうすぐ公開意見陳述会も終わりだから、まあ問題はないだろう」
ティアナはヴィータの答えを聞いた後に周囲を見回す。

すると、先ほどまで彼女とスバルが回っていたところあたりに、確かに別の部隊の局員が歩いているのを確認した。

「ああ、ギンガ。」

ちよつと北側向こうの方に報告してきてくれないか？」

「わかりました」

ヴィータの指示に従ってギンガは地上本部の中へと向かっていった。

そんな彼女の背中を見ていたスバルはなぜか、胸に突き刺さるような悪寒を感じていた。

「やあ、マリー君。」

「どうしたんだい？」

地上本部からさほど離れていない研究所の一室で、サカキは本局の第四技術部にいるマリーからの通信を受けていた。

『いえ、少し気になることがありますて……』

「気になること……？」

マリーの言葉に首を傾げる彼の端末にいくつかのデータが送られてくる。

それはつい先日、検査を受けたギンガの身体データだった。

「これは、ギンガ君のデータじゃないか。」

「これがどうかしたのかい？」

『いえ、今送ったのはこの間の検査の時のものです。』

そして、これがその前のもの』

サカキの端末にさらにデータが追加で送られてくる。

そのデータを見たサカキは目を見開いた。

「これは……！」

『はい、ギンガの機械的な部分と生態的な部分。』

その一部の数値がずれ始めているんです。

こんなこと今までなかったことだったので、サカキ博士の意見も聞きたいと思ひまして……』

「ふむ……」

サカキは自分の頭の中で立てた仮説を彼女に話そうと口を開くが、その直前に彼の部屋が微かに揺れた。

その直後、彼の部屋に研究員の一人が飛び込んできた。

「博士!!」

「何事だい？」

「そんなに慌てて……」

「それが……!!」

彼の口から出てきた言葉を聞いたサカキはマリーに断りを入れて、通信を切った後にすぐさま部屋を飛び出した。

「ナンバーズ、N.O. III トーレからN.O. XII デイードまで、全機配置完了」

スカリエッツィのラボの一室。

そこでウーノは鍵盤の形をしたコンソールを叩きつつ、準備が整ったことを告げる。

『お嬢とゼスト殿も、所定の位置につかれた』

『攻撃準備も全て万全。あとはGOサインを待つだけですう』

「ええ」

妹たちからの報告に頷き、ウーノは後ろに座っているスカリエッツィに視線を向ける。

彼女の視線の先には椅子に深く座り、静かに目を閉じているスカリエッツィの姿があった。

「ドクター、合図を。」

皆、待っています」

「ああ……」

スカリエッツィはゆっくりとその瞼を開いた。

そこには静かに燃える金色の瞳が鈍い輝きを放っていた。

「私のこの行いで、一つの歴史が終わる。」

それはある意味で愚かで、不適當な選択なのかもしれない……」

音を立てずに立ち上がったスカリエッツィは通信を繋げている彼の娘たちに語り掛ける。

「だが、私はもう決めたのだ。」

さあ、我々のスポンサー諸氏に見せつけてやろう。

私たちの思いと、その覚悟を」

スカリエッツィは大きく右腕を振り、そしてその言葉を言い放った。

「さあ、奏でよう。」

崩壊への序曲を……！」

「むふふ、さあ電子の織り成す嘘と幻の銀幕芝居をお楽しみあれ」
地上本部から離れた地点でクアットロはコンソールを叩きながら
地上本部の中央指令室のサーバーを乗っ取り、その電子的な目をす
べて潰していた。

『中央指令室制圧完了したよ』

『こちら地下の電源室の破壊を完了した』

チンクとセインからの報告を聞いたクアットロは彼女たちに次の
指示を出しながら、地上本部のカメラを乗っ取りその中の様子を覗い
ていた。

同時刻――

地上本部の公開意見陳述会の開催場所となっていた部屋では先ほ
ど襲った揺れの原因を一人の局員がレジアスに伝えているところ
だった。

「恐らくは……」

「そうか、始まったか」

局員から報告を受けたレジアスは立ち上がり部屋の出口へと向か
おうとする。

すると、そんな彼女を呼び止める声が部屋に響いた。

「会を中止になさるおつもりですか、レジアス中将閣下」

その声を上げたのは所謂反レジアス派と呼ばれる派閥に属する少
将だった。

「緊急事態だ。」

「会なぞいつでも再開できるだろう」

「いえ、この会は日程の調整から準備まで多くの時間を費やしてきた
ものです。」

「それを……」

男の言葉が続く途中で、部屋を一際大きな揺れが襲い、出口の隔壁
が下ろされ、照明も非常灯を除きすべて消え、部屋から明かりが消え

た。

「な、なんだ!？」

「はあ、話が長いから閉じ込められたじゃないか。

高々照明が落ちただけだ、びくびくするな。

それにすぐに元に戻る」

レジアスが目の前でおびえる男の様子にため息を吐きながらそう告げる。

彼女がそう言った直後に部屋の照明がすぐに復活した。

「ほらな」

レジアスは鼻で笑い、彼から背を向けて出口へと歩みを進めていった。

「ダメです、どこも開きようがありません」

「外では戦闘が起こってるっちゅうに……!」

彼女が手近な出口に辿り着くと、そこには六課の部隊長であるはやて、聖王教会代表であるカリム・グラシア。

彼女たちの付き添いで会議に参加していたシグナム、シスターシャツハが出口の前で苦虫を潰したような顔をしていた。

「どうした、小娘」

「あ、レジアス中将」

レジアスの声に反応した彼女たちはレジアスに向けて敬礼をしようにするが、レジアスがそれを手で制した。

「緊急事態だ、そう言ったことはやらないでいい。

それで、扉がまだ開いていないのか?」

「はい。」

まだ、ということとは開く手段があるのですか?」

カリムがレジアスに向けて尋ねる。

「ああ、地上本部が外部からハッキングを受けた際に、カウンターを仕掛けるように別の施設に頼んでいたのだがな。

まあいい。

そこをどけ、小娘」

はやてはレジアスの言葉に従ってその場から少し離れる。

扉を何とか開こうとする局員も下がらせたレジアスは懐から筒状の物体を取り出した。

「ふっ……！」

レジアスがそれを一振りすると、その筒状の先端が伸び、一振りの剣と同等の長さになった。

彼女はそれを扉に向けて一閃する。

「な……!?!」

彼女が腕を振るった直後、扉が斜めに切り裂かれ、上半分が床へと落ちた。

分厚い扉が落ちる重い音が部屋の中へ響き渡る。

「ほら、出口ができたぞ」

「え、あ、あの、レジアス中将？」

それは……?」

はやては驚きながらも彼女の手握られている棒を指さす。

それはかなり小さいが甲高い音を連続して出していた。

よく見ればその棒そのものが高速で振動しているようにも見える。

「私が作らせた。」

質量兵器と言われようが、物は使いようだ」

「作らせたって……」「レジアス中将!!」……?」

彼女の言葉に呆れた表情をするはやてだったが、彼女の後ろから聞こえてきた怒鳴り声に驚き振り返る。

そこには先ほどレジアスが鼻で笑い飛ばした男が怒りの形相で詰め寄ってきていた。

「それは質量兵器ではないですか!!」

なぜそのようなものを!!」

「騒ぐな、そんなどうでもいいことを今は話している状況でもないだろう」

「どうでもいいこと……!?!」

質量兵器を使用するという重大な違法行為をどうでもいい……!?!」

「この戯け者がツ!!」

グチグチといつまでも言葉を連ねる少将にレジアスがついにキレ

た。

「いいか、我々のすることはなんだ!？」

ここで役に立たない大砲の話をするだけでも、防衛計画の話をする
ことではない!!

今、この場所を守らんとする局員の被害を押しえつつ、このバカ騒
ぎを早急に終わらせることだろうがツ!!

それすらも忘れたか、この馬鹿者がツ!!」

レジアスの怒声に続いたのは、痛いほどまでの静寂だった。

レジアスの怒気を直に受けた少将はその場でへたり込んでいた。

「いつまで突っ立っているつもりだ!!

各々持ち場につけ!!」

彼女の雰囲気当てられ動くことすらも忘れていた周囲の局員に
指示を出す。

その傍らで、はやてに言葉を送る。

「行け、今こそお前たちの本領を發揮する時だ」

「はいっ！」

シグナム、行くよ!!」

「はッ！」

はやてとシグナムがその場を去っていくのを見届けたレジアスは
会議の会場を臨時の指令室として地上本部の外で奮戦している局員
の指示に向かうのだった。

ティアナルート 第十八話

「むふふのふ〜」

クアットロは地上本部が見える位置で笑みを浮かべながら地上本部のハッキングを行う手を動かしていた。

空中に投影されたパネルを弾くように叩き、モニターに映る局員の混乱を見てさらに笑みを深くする。

「あら〜？」

だが、そんな彼女の手が一瞬だけ止まった。

彼女の奪っていた施設の機能の一部、正確には本部全体を包み込む魔力障壁の維持といった限定的なものだが、それらが奪い返されるのはもう少し後だと予想していた彼女にとって意外なものだった。

「シルバーカーテンの嘘と偽りのショーを見破ってくるなんて……。」

ドクター以外にも、面白い人がいたようね……。」

クアットロはその奪い返されたところのコントロールを諦め、ほかの部分へとその手を伸ばそうとした。

だが、それすらも拒まれてしまった。

「予想以上にできるわね〜。」

というか、これは……。」

クアットロは取り戻されそうになっている施設の区画を見て、思わず舌打ちをする。

そしてすぐに姉のウーノへと通信を繋げた。

『どうしたの、クアットロ』

「ウーノ姉さま、少しお手伝いお願いできますか〜？」

『あなたが手伝いを頼むなんてね。』

どうしたのかしら』

「例のタイプゼロ・ファーストを隔離した区画の隔壁のコントロールが奪われそうなんです〜。」

ですから、そこは私が死守しますので、ウーノ姉さまにはとにかく連中を引つ掻き回してください〜」

『タイプゼロ・ファーストの確保は陛下の確保と同レベルでの行動目

的。

いいでしょう、少し待つてなさい」

ウーノからの通信が切れ、直後に彼女に対しての対処が見るからに遅くなり、地上本部を囲む魔力障壁が薄くなる。

「魔法障壁減少。」

ルーお嬢様、よろしくお願いします」

「わかった……。」

遠隔召喚……」

ルーテシアの小さな声とともに地上本部の周囲にガジェットI型、III型、およびIII型改が大量に現れる。

「あとはお任せくださいな。」

お嬢様は礼の場所へ」

『うん』

クアットロの言葉にルーテシアは頷き、通信を切った。

モニターが消えるのを確認した彼女は再びその視線を地上本部に向けた。

「さあ、ドクターの夢のために踊りなさい。」

「デイエチちゃん、やってちょうだい」

『了解、ISヘビィバレル発動。』

バレット、エアゾルシエル……発射ッ！』

「ちつ、やっぱり陸士部隊じゃガジェットの相手は厳しいか……！」

「先ほど撃ち込まれた砲撃により、本部内にはガスが入り込んでいます。」

幸いにも、致死性のもではなく麻痺性のもです。

今データを送ります」

ガジェットが本部周辺に現れたことを知ったヴィータたちはガジェットが集中して現れた正面玄関の方へと足を向けていた。

その途中で、本部内にガスが撃ち込まれたことを知ったラインによつてすでにバリアジャケットを展開していたスバルたちへ防衛データを転送されていた。

「なのはさんのところには俺たちが行きます。

なのはさん達にレイジングハートたちを届けないと……ッ！」

「頼む！」

リイン、本部の指令室との連絡は取れねえのか!？」

「通信障害が酷いです。」

本部への通信と本部からの通信の両方が遮断されてます！」

リインからの報告に舌打ちをするヴィータだったが、そんな彼女に
ティアナが一つ気づいたことを尋ねる。

「ヴィータ副隊長、六課の方にはつながらないのですか？」

「ロングアーチなら……！」

「そうか……！」

「ロングアーチ、聞こえるか!？」

ティアナの提案をすぐに聞き入れたヴィータは機動六課に待機し
ているロングアーチに通信をつなぐ。

すると、すぐに反応が返ってきた。

だが、その声はどこか慌ただしかった。

『ヴィータ副隊長！』

『今どちらに!？』

「地上本部の外にいる！」

「部隊長に通信繋がられるか!？」

『無理ですよ！』

それより、今こちらのレーダーに反応がありました！

そちらに接近する飛行物体多数！

ほとんどはガジェットII型のようなのですが、二つだけ魔力反応が高い
ものが！

「推定オーバーSです！」

「ちっ！」

「そっちにはあたしとリインが向かう！」

「地上はティアナ達に任せるぞ！」

「了解です！」

ロングアーチからの通信を切ったヴィータは後ろを走るスバルた

ちに向かつて手に持っていたシユベルトクロイツとレヴァンティンをティアナに渡す。

「そいつらをはやてたちに渡してくれ」

「了解です！」

ヴィータの言葉を聞いたスバルとエリオもその手に握るレイジングハートとバルディツシュを強く握りしめる。

「よし、行け！」

ヴィータの声に従ってスバルたちは本局の内部に突入する。

それを見送ったヴィータは隣を飛びリインを呼び寄せる。

「リイン、最初からユニゾン行くぞ！」

「はいです!!」

ヴィータはポケットからグラーフアイゼンを取り出す。

「ユニゾンイン!!」

刹那、彼女たちを光が包み込む。

光が消えたとき、そこには白い騎士甲冑を纏い、髪の色も赤から白髪に変化していた。

「行くぞ、地上本部には一機たりとも近づかせねえ！」

(はいですツ!!)

夜空を一筋の光となったヴィータが駆け抜ける。

「ダメだよ、なのは。」

何処も隔壁で閉鎖されてる」

「魔法の運用にも支障をきたすほど濃いAMFに本部に対してハツキングして通信を遮断か。」

並の魔導師じゃ封殺されちゃうね、これは……。

それがこっちの混乱を効果的に引き出してる。

呆れるほどに有効な組織的攻略法だね」

地上本部の上層部にあるロビーに閉じ込められたのはとフェイトは現状の確認をしていた。

ため息を吐きながら周囲を見回す。

「やっぱり、あそこから出るしかないかな……？」
なのはは視線の先にエレベーターの扉を捉えながらそう呟いた。

数分後、なのはとフェイトはエレベーターの箱体コンテナを吊るすワイヤーを掴み、一気に下まで滑り落ちていた。

「こんなこと、陸士訓練校での訓練以来だね」

「あまり好きじゃなかったなく、この訓練。

魔力でコーティングしてるって言ってもなんか嫌だよ」

「そう言えば、なのははいつもこの訓練の時嫌がってたね。

でも、こんなこともあるから、いろんな訓練受けていてよかったよ」
「そうだね。」

緊急時の対応マニュアルはスバルたちも知ってるから、集合場所まで一気に行くよ、フェイトちゃん！」

「中将、陸士206部隊の鎮圧部隊がガジェットガジェットの排除を完了！」

「そいつらには一時の休息を与えておけ。」

空いた穴には91部隊を当てろ」

「了解です！」

外部の協力者の介入で、一方的に極近距離での通信を可能とした地上本部の公開意見陳述会の会場は臨時の指令室となっていた。

そこでレジアスが部下からの報告を受けて、それに指示を出していた。

「空の方はどうなっている？」

「本部に接近中のガジェットII型の編隊を本局所属の航空部隊が迎撃に向かいましたが、苦戦中です。」

「どうやら、戦闘機人が編隊に紛れ込んでいたようです。」

「現在、機動六課所属のウィータ三尉が迎撃に向かいました」

「レジアスの問いにそばに控えていたオーリスが答える。」

その返答にレジアスが頷き再び戦況を示すモニターに目を向けようとしたとき、部屋を大きな揺れが襲う。

「なんだ!？」

「本部直上に魔力反応、推定オーバーS！」

「まっすぐにここに向かっていきます!!」

オペレーターという言葉と同時に部屋の天井を突き破り一人の金髪の男が部屋に降り立った。

「久しぶりだな、レジアス」

「時と場所を考えろ、この馬鹿者が……」

レジアスの後ろに立った男——ゼストは静かに口を開く。

「お父さん……!？」

「オーリスか、大きくなったな。」

「だが、今は時間がない。」

「レジアス、答えてもらうぞ」

ゼストの視線がオーリスに向けられるが、次の瞬間には目の前で背を向けているレジアスに向けられる。

「すまんが今は緊急事態だ、また別の機会にしてみよう」

「——ッ!？」

（下からッ!？）

レジアスが指を鳴らすと同時にゼストのすぐ真下の床から一人の男が彼を掴み上げ、そのままゼストの空けた穴から上空に押し出される。

予想外の対応にゼストと、彼とユニゾンしているアギトは驚きの声を上げる。

「むッ!？」

「……」

ゼストが槍を振るい、男を振り払おうとするが彼の手にした槍を男はゼストが力を入れにくいポイントを掴んでいた。

結局、ゼストは地上本部の上空まで押し上げられてしまう。

「お久しぶりです、ゼスト隊長」

「やはりお前か……」

本部を飛び出した直後に男から離れたゼストは男の顔を見て納得した表情を浮かべる。

そんな彼に対して男は静かにゼストに声をかける。

「久しいな、ミルズ」

男の名はイングレット・ミルズ。

金髪金眼の容姿と、その情け無用な戦い方から彼と敵対した犯罪者たちは彼をこう呼んだ——ジェノサイド金色の破壊神——と。

「からだ機体の方はどうだ、セツテ」

「心配ご無用です、伊達に遅く生まれていませんから」

地上本部に向かうガジェットⅡ型の編隊の中で、トーレは隣を飛ぶ妹に声をかける。

戦闘機人N.O.7、セツテ。

スカリエッティの生み出した12人の戦闘機人の中でも最後発稼動組の一人である。

彼女は桃色のロングヘアを風に流しながらトーレの問いに答える。

その声はどこか機械的なところが感じられた。

「そうか、何かあれば知らせろよ。」

姉としても、お前の教育係としても心配だからな」

「いらぬ心配です。」

トーレの方こそ私以上に高機動戦闘を行うのですから、身体の負担はあなたの方が上のはず」

「違ういな」

セツテの切り返しに肩を竦めるトーレ。

そんな彼女たちの耳に警告の音が響いた。

『警告だ、お前らの飛行許可は下りていない。』

ただちに停止しろ』

「素直に言われて止まるとでもっ？」

『なら、実力を行使させてもらう！』

警告の声とともに彼女たちの目の前の雲の中から数発の誘導弾が飛び出してくる。

トーレとセツテはガジェットのアMFの濃度を上げることにかき消そうとするが、誘導弾の周囲に張られた魔力を消すだけで、その中にある鉄球は速度を保ったまま彼女たちに襲い掛かった。

「実体弾……！」

「回避……！」

それを見つけた二人は左右に離れることで回避する。

鉄球は彼女たちのすぐ後ろを飛んでいたガジェットを貫き、爆発させた。

「今の魔法は……ッ！」

トーレがガジェットを貫いた鉄球を用いた魔法を使う魔導師をデータの中から検索し、弾き出したのと同時に、彼女の背後から大槌を振り上げたヴィータが現れた。

「ギガントハンマアーツ!!」

「IS発動、スローターアームズ……！」

ヴィータのグラーフアイゼンがトーレに直撃する直前、自らの固有武装『ブーメランプレード』を呼び出したセツテによってその攻撃は阻まれた。

攻撃を防いだ反動で互いに距離をとる三人。

「機動六課、スターズ分隊副隊長ヴィータと」

(リインフォースツヴァイです！)

「武器を捨てて投降しろ」

トーレは目の前に現れた人物がスカリエツティから聞かされていた、彼らの行動の要である部隊の所属であることを思い出していた。

「断る」

「なら、仕方ねえな」

トーレの言葉を聞いたヴィータはグラーフアイゼンを構える。

それを認めた二人も互いの固有武装を構える。

「お前の初陣の相手がベルカの騎士とはな。」

不安なら下がってもいいぞ?」

「一人の時と、二人の場合での勝率の違いより拒否します。それに、先ほども言いましたが伊達に遅く生まれてません。私の力、どこまで通じるかい機会です」
セツテのその言葉にトーレは小さく笑みを浮かべる。
その後、自然な形で戦いの幕は開かれた。

ギンガはその時、隔壁に閉鎖された空間から何とか脱出しようとしていた。

グイータたちと別れ、一人になった彼女だけを残し閉じられた隔壁。

どこからか脱出できる場所を探しているギンガのもとに彼女は現れた。

「タイプゼロ・ファースト、ギンガ・ナカジマだな」

その声に反応したギンガはリボルバーナックルを構える。

暗闇の中から現れたのは銀髪に眼帯という特徴的な姿をした少女、チンクだった。

「なぜ、っていうのは無駄かしらね。」

あなた、戦闘機人ね」

「話が早いな。」

ならば単刀直入に言おう。

ギンガ・ナカジマ、ドクターのもとに来てもらおう

こちらとしてはできれば手荒なことは避けたい」

「ドクターっていうと、スカリエッティのことよね」

ギンガの問いにチンクは首を縦に振る。

チンクの肯定の意思表示を見たギンガはカートリッジを一発装填^{ロード}する。

「お断りするわ。」

私には帰る場所がある」

「来てもらう理由が、お前の身体の事に関してでもか？」
「ええ」

「ならば仕方ない。

穩便に済ませたかったが」

チンクはそういつて両手の指の間にナイフを挟み構える。

「IS発動、ランブルデトネイター……い」

「はあああつ!!」

誰にも知られることなく、二人の戦いは始まった。

照明の消えた通路を走るスバルたち。

「相棒ツ!!」

『Protection』

先頭を駆け抜けるスバルは咄嗟に障壁を張る。

「うおおつ!!」

「——ツ!?!」

だが、その障壁は繰り出された蹴りの衝撃を逃すことができずにすべてスバルに叩き付けられた。

スバルはその蹴りの勢いに押されて壁に叩き付けられる。

「スバル——ツ!?!」

目の前で壁に叩き付けられる相棒を見たティアナが声を上げるが、そんな彼女たちの周囲にエネルギー弾が展開され、即座に爆発する。

間一髪、爆発に巻き込まれずに後退したティアナだったが、そんな彼女たちの耳に何者かの声が聞こえてきた。

「おい、ウエンディ。

目的忘れてねえだろうな？」

「当たり前っすよー!!」

一番面倒な連中をここで足止めっすよねー」

暗闇の中から出てきたのはガジェットを引き攀れた二人の少女、ノーヴェとウエンディだった。

ガジェットに周囲を囲まれて舌打ちするティアナだったが、彼女の耳にスバルの声が届いた。

「前みたいに会えないってのはそう言う意味かよ……、ノーヴェ……」

！
叩き付けられた壁から出てきたスバルの声はどこか悲しげな声音
だった。

ティアナルート 第十九話

薄暗い通路で、ノーヴェは壁際に立つスバルを見つめていた。

「なんでって顔をしてるな——ッ！」

「——ッ！」

「ノーヴェッ！」

その視線の意味を感じ取ったスバルは、一気に加速してノーヴェをウエンデイから引き離す。

スバルに押し流されたノーヴェを援護しようと、ライディングボードを構えるウエンデイだったが、それを橙色の魔力弾が妨げる。

「この——ッ！」

ウエンデイは魔力弾が飛んできた方を見ると、すでにフォーメーションを組んだティアナ達が彼女に向かってきていた。

「エリオ、キャロ、脱出のタイミングまであの赤毛を足止めするわよ！」

「はいっ！」

先陣を任されたエリオがウエンデイに向かっていくのを見ながらスバルの方へ視線を向ける。

（後でどういうことなのか聞かせてもらおうからね、バカスバル！）

「最初にお前とあったときは、気のせいだと思った。

俺の耳の聞き間違えだってな」

スバルはほかの四人が戦う場所からある程度離れた場所に辿り着くと、すぐ近くに顔があるノーヴェに語り掛ける。

「だけど、二度目。

下水道で俺たちに襲ってきたマント野郎。

その時にも、似たような駆動音が聞こえた。

これで疑問に思った」

「——ッ！」

接近し拳打蹴撃の応酬をしながらも、ノーヴェエの攻撃を捌き続けながらスバルは口を閉じなかった。

「そして、さっきの蹴りだ。」

三度目、これで確信したよ。

あの時のメガネっ子、ありやお前だな、ノーヴェエ」

「……ああ、そうだよ」

互いに再び距離をとる。

スバルの言葉を肯定したノーヴェエの表情は言葉に言い表せないほどに酷いものだった。

「前のようには会えないってのは、俺とお前が敵同士になるからってことか」

「ああそうだよ。」

あたしとお前は敵同士だ、なれ合いなんてできっこないんだよ……！」

ノーヴェエの悲鳴のような声とともに蹴りがスバルに向かって襲い掛かる。

彼女の足にはスバルのマツハキヤリバーと酷似した武装、『ジエツトエツジ』が装備され、ジエツトエツジの推進器から得た推力によって彼女の蹴りは戦闘機人としての力以上の威力を持っていた。

スバルはそれを左腕に障壁を張り、受け止めるが、衝撃を完璧に逃がすことはできずに後ろに押し流される。

「もう、あたしは選んだんだ！」

ドクターの夢を叶える手伝いをする！

だから、もうあたしとお前の道は交わらないんだよツ!!」

ノーヴェエは叫びながらジエツトエツジを駆り、加速の勢いを乗せた拳をスバルに向けて放つ。

「な——ツ!?!」

「道が交わらない……?」

その拳はスバルの障壁すらも張っていない左手に受け止められた。

だが、加速のついた戦闘機人の拳を魔法なしの素手で受け止めた左手の皮は破れ、スバルの左手からは血が流れていた。

それでも、スバルは痛みを堪えながら言葉を紡ぐ。

「どんな形であれ、道は交わってるだろうが……。」

敵味方だろうと、それは変わらねえんだよ……。」

スバルは魔力を込めた右手を振りかぶる。

「この……馬鹿野郎がッ!!」

そして、その拳はノーヴェエが咄嗟に張った障壁を打ち砕き、彼女の身体を通路の端まで吹き飛ばした。

「ノーヴェエ!!」

テイアナ達三人を相手に奮戦していたウエンデイはノーヴェエが吹き飛ばされたところを目にして、そちらに気が向いてしまった。

「エリオ、今!」

「はいっ!!」

「しまッ——!?!」

その隙を逃すエリオではなかった。

魔力変換資質によって生み出された雷を刃に纏わせ、ストラダーを上段に構え、高く跳び上がる。

「サンダー……」

「クッ……!」

ウエンデイは周囲にガジェットを集めAMFの濃度を高めながら、空中でストラダーを振りかぶるエリオにライディングボードを向ける。

「レイジッ!!」

「う、うわあ!?!」

エリオの放った電撃はウエンデイの攻撃を弾き飛ばし、さらに高濃度のAMFすら貫通して彼女にダメージを与えた。

「今よ、スバル!!」

「了解ッ!」

エリオの電撃がウエンデイとガジェットにダメージを与えたのを

確認したティアナは離れていたスバルを呼び寄せ、複数の通路が交わったところまで移動する。

「待つツすよってえ!？」

ダメージから抜け出したウエンデイは彼らを逃さないと視線をそちらに向けるが、彼女の視界には四人の姿がいくつも映っていた。

「幻影……ッて、サーモセンサーにも魔力センサーにも反応有り!？」

あのガンナー、戦闘機人のシステムを……!？」

ウエンデイは構えていたライディングボードを立て掛ける。

「逃げられたツすね……。」

ノーヴェ、大丈夫ツすか？」

ウエンデイは吹き飛ばされた後、動く気配のなかったノーヴェが立ち上がったのを見て彼女のもとに向かう。

少しふらつきながらも立ち上がったノーヴェの顔には迷いが見えた。

「おろろ？」

なんか、様子が変わツすね。

何か言われたツすか？」

「まあ……な。

敵味方だろうが、それも一つの道の交わり、かなんで、あいつはこつちを迷わせるんだろうな」

「なんのことツすか？」

「お前には関係ねーよ。

それより、どうするかだな。

追えるか？」

ノーヴェは視線をスバルたちが消えていった方へ向ける。

「無理ツすね。

「こ丁寧にジャマーまでばら撒かれたツすよ」

「なら……?？」

ノーヴェが口を開こうとした時、通信が繋がられた。

『ノーヴェ、ウエンデイ。

少しこつちを手伝ってくれ』

「いいっすよー。」

何すればいいっすか?」

通信から聞こえてきた声は、ノーヴェが一番信頼しているチンクからだった。

『今、ギンガ・ナカジマと戦闘中だ』

「IS発動、ライドインパルス……!」

「こいつ!」

スバルたちがノーヴェ、ウエンデイと戦闘中の一方で、ヴィータとリインはトーレとセットのコンビネーションに苦戦していた。

(後ろですー!)

「このお!!」

リインからの警告を聞いたヴィータは背後にまわり、手足に装備されたインパルスブレードで切りつけようとしていたトーレをグラーフアイゼンで迎撃する。

「(こ)……ッ!」

「リインッ!」

(はいです!!)

トーレの攻撃をアイゼンで防いでいる彼女に、横から手にしたブーメランブレードで切りつけてくるセットをユニゾン状態のリインが制御している魔力弾が牽制する。

セットの攻撃がうまくいかなかったことを認めたトーレはすぐにその場から離れる。

「こいつら、コンビネーションのタイミングが息ぴったりだな、畜生め」

(それに、この膂力……。

これが戦闘機人の力、ですか……)

彼女たちの戦闘を身を持って体験しているヴィータは舌打ちをし

ながらも冷静に判断する。

「ユニゾン状態の融合騎との連携……。」

適合率も練度もかなり高いのでしょうか」

「さすがは、夜天の守護騎士といったところか」

「トーレ、一ついいでしょうか？」

トーレとセツテもまた、警戒を続けながらヴィータとリインの戦い方を振り返っていた。

そんな中、セツテがトーレに対して、一つの提案を上げた。

「あれを試してみたいと」

「まあ、この膠着状態をどうにかするには仕方ないか……。」

援護は任せろ」

二人は互いに頷くと、トーレがその加速性を生かした突進をヴィータに仕掛ける。

ただまっすぐ突っ込んでくる相手とは思えなかった彼女はすぐに魔力弾による迎撃を試みる。

「何っ!？」

だが、その魔力弾はトーレの背後から飛び出した二本のブーメランブレードによって切り裂かれる。

さらにその二本の獲物は互いにぶつかり合い、ヴィータの視界を惑わせるように機動を変える。

「ライドインパルス!!」

「アイゼンツ!!」

『Panzerrhindernis』

そして、トーレはそのブーメランブレードの不規則な機動に紛れてヴィータに接近し、腕のインパルスブレードを彼女に叩き付ける。

間一髪、グラーファイゼンが張った障壁が彼女をその斬撃から守る。

しかし、トーレの背後からさらに二本のブーメランブレードが彼女に迫る。

「リインツ!」

(はいですツ!!)

トーレの攻撃を受け止めているヴィータに代わって、彼女の中にいるリインが二つの障壁を張ってブーメランブレードをやり過ごす。

だが、その直後、彼女に影が落とされる。

「後ろ……ッ!?!」

「これで終わり」

(ヴィータちゃんツ!!)

トーレとの鏖迫り合いの直後、彼女の後ろに現れたのはさらに二本のブーメランブレードを手に持ったセツテだった。

上段からの振り下ろしは、リインが張った障壁を叩き割りヴィータを直撃。

そのまま彼女の身体を遥か下にあるビルの屋上に叩き付けた。

「目標の撃墜を確認」

「見事なものだな。」

相手はあの夜天の守護騎士、実戦経験なら我々以上のものだったはずだが。

まあ、いい。

行くぞ、セツテ」

「了解」

二人は撃墜したヴィータのことを無視してその場を飛び去った。

ビルに叩き付けられたヴィータの身体が一度光り、彼女のバリアジャケットが白色から通常の赤色に戻る。

その時、彼女の身体からはじき出されたリインが急いでヴィータのもとへ駆け寄る。

「ヴィータちゃん!」

「しっかりしてください、ヴィータちゃん!!」

「う……」

リインがヴィータの身体を思いっきり揺らすが、反応が小さく、さらに彼女の顔色も悪くなっていた。

「ヴィータちゃん、ヴィータちゃん!!」

夜の空に、リインの声が虚しく響いた。

ティアナルート 第二十話

地上本部内部

エレベーターシャフトを降りてきたなのはとフェイトは、スバルたちとの集合場所に辿り着いていた。

「みんなはまだ来ていないみたいだね」

「結構早く行動に移したから、予定よりも早く着いたのは仕方ないよ」

二人は周囲の状況を確認しながらスバルたちを待とうとし、彼女たちの名前を呼ぶ声を聴いてそちらを見た。

「なのはちゃん、フェイトちゃん！」

「無事だったか、二人とも」

「ご無事で何よりです！」

「はやてちゃん!？」

「シグナムとシスターシャツハも」

二人は通路を駆け抜けてきたはやてたち三人を見て驚きの表情を浮かべた。

「どうやって隔壁を？」

「隔壁の方はレジアス中將が切り開いたんや。」

で、今会場は臨時の指令室になつとる」

「私たちは中將のお言葉に甘えてここまで来たのだ」

「そうだったんですか」

状況を把握したなのはとフェイトは、スバルたちがデバイスを持ってくるということを伝える。

その直後、その場所にスバルたちが現れた。

「なのはさん、フェイトさん！」

「アレ!？」

部隊長とシグナム副隊長、シスターシャツハまでいる!？」

集合場所までやってきたスバルたちは、なのはとフェイトがいることに安心し、はやてたちがいることに驚きの声を上げた。

「なのはさん、レイジングハートです」

「バルディッシュや、シュベルトクロイツ、レヴァンティンも一緒に」

「ありがとう、スバル、皆」

スバルたちが預かっていた隊長陣のデバイスを渡す。

なのはたちはすぐにバリアジャケットを展開し、デバイスを手に持つ。

「通信は？」

「ダメや、指令室とは連絡がつかへん。」

「ロングアーチの方とは……つながった！」

ロングアーチとの通信がつながったことに喜びの笑みを浮かべるはやてだったが、向こう側からの通信の状況が悪いことに違和感を覚える。

『……ぶたい……う……』

「グリフィス君？」

「どないしたん!?!」

『襲撃……ろ……かの……、いま……応援……ツ!!』

「グリフィス君、グリフィス君!?!」

「……あかん、切れた」

「はやてちゃん、六課がどうしたの!?!」

はやてと六課の通信の様子を見ていたなのはは顔色を変えてはやてに詰め寄る。

「そんな彼女をシグナムとフェイトがはやてから引き離す。」

「わからへん。」

「だけど、何かが起きているのは確かや」

「そうだ、姉貴……!」

なのはと同じく、はやての様子を見ていたスバルは一人でわかれたギンガの安否を確認するために彼女に通信を繋げようとするが……。

「どうしたんだよ、姉貴……!」

「無事なら出てくれ……!」

スバルの祈るような声を上げるが、彼の通信機からはノイズしか聞こえなかった。

「マツハキャリバー、ブリッツキャリバーに直通で繋げろ!」

『無理です、通信障害が酷すぎます』

「くそっ！」

「状況がわからない。

はやて」

「わかつとる。

みんな、よう聞いて」

フェイトの言葉に頷き、はやては目の前にいるフォワードメンバーの注意をひきつける。

「これより、隊を分けます。

足の速いライトニングは六課に戻つて。

スターズはギンガの安否確認と、本部に侵入した敵の排除。

シグナムはヴィータの方に。

ヴィータからの反応がさつきからないんや。

心配やから、応援に行つてくれるか？」

「了解だよ、はやて」

「わかつた」

「承知しました、主」

隊長、副隊長の同意を得たはやては頷き、彼女たちを送り出した。

「姉貴……、無事でいてくれ……!!」

「ておおおっ!!」

燃え盛る炎に囲まれた機動六課の隊舎を背にしたザファイラの拳が彼の近くで障壁を張り続けているシャマルに近づこうとしていたガジェットを粉碎する。

「大丈夫か？」

「ええ、でも……」

シャマルは息を荒げながら上空で彼らを見下ろす人物を見上げる。

戦闘機人No. 8オットー。

少年のようにも見える彼女は無表情な顔で彼らを見ていた。

「はあああっ！」

ガジェットを操っているであろうと考えたザフィーラは彼女に向かって跳んだ。

「ザフィーラ、後ろ!!」

「——ッ!?!」

「ISツインブレイズ、発動」

だが、その拳がオットーに届こうかという距離で、彼の後ろに現れたロングヘアの少女——戦闘機人No. 12、デイド——がその両手に持った二振りの剣を振り上げていた。

「ぐおおあ!?!」

シャマルの声を聞いたザフィーラが後ろを見た瞬間、デイドが手にした双剣『ツインブレイズ』を振り下ろす。

間一髪で防御が間に合ったザフィーラだったが、その衝撃は空中では逃がすことなど叶わず、地面に叩き付けられてしまう。

「二人でよく防いだ」

地面に激突したザフィーラのもとに駆け寄るシャマルを見下ろしながらオットーは抑揚のない声で告げる。

「だけど、僕のIS、レイストームの前では無駄」

オットーが右手を六課隊舎に向け、その手のひらに緑色のエネルギーギアが収束する。

「——ッ、防いで、クラールヴィント!」

シャマルが隊舎の周囲に障壁を新たに張りなおすが、オットーの放った砲撃に威力に押されてしまう。

「しづとい……」

「ッ!!」

「……やらせはせんッ!!」

シャマルが障壁を張ったのを確認したオットーはさらに左手を彼女に向け、砲撃を放つ。

だが、その砲撃がシャマルに直撃する直前に彼女の前にザフィーラが立ち上がりその砲撃を受け止める。

しかし、彼らの奮戦もそこまでだった。

砲撃の威力を一人で受け止めたザフィーラは弾き飛ばされ、何度も

地面と衝突を繰り返し、ようやく身体は止まったが、彼の意識はすでになかった。

そして、ザファイラを吹き飛ばした砲撃の余波をモロに受け、近くの残骸に叩き付けられた。

彼女が意識を失いかけたことによつて、砲撃を防いでいた障壁も消滅し砲撃はすべて隊舎に直撃した。

「グッ……！」

くそ、外はどうなってんだ!?

シヤマル先生や、ザファイラの旦那は……!?!」

隊舎を一際大きな揺れが襲ったとき、通路に築いたバリケードの内側でヴァイスは呻くように声を出した。

彼の前方には多くのガジェットの残骸が転がっている。

『マスター、次が来ます』

「つたく、少しは休ませろつての!」

ヴァイスは手に握ったストームレイダーからの忠告を聞きいれ、視線をバリケードの向こう側に向ける。

そこには先ほどから彼が撃ちぬいているガジェットI型が三機迫っていた。

「……………ッ!」

だが、その三機はヴァイスが三回、ストームレイダーの引き金を引くことでその役目を果たせずじやないただの鉄屑と化した。

「今の俺は狙撃手^{スナイパー}じゃなくてただのヘリパイなんだがな!」

『今ごろそのヘリは目の前のゴミと同様の姿になつてるでしようが』

「きつついこというなよ、相棒……!」

ストームレイダーからの言葉を聞いたヴァイスは大きくため息を吐いた。

彼の操縦していた最新型のヘリは、すでに格納庫でガジェットによつて破壊されている。

そのことを思い出した彼はやるせない気持ちを抱いていた。

「だいたいな……ッ!？」

さらに言葉が続けようとした彼だったが、狙撃手としての勘が彼に相棒を構えさせた。

そして、彼が覗くスコープの中に映ったのは、紫色の髪をたなびかせる少女——ルーテシアだった。

「——ッ!」

ヴァイスは、彼女が通路に現れた瞬間にその引き金を引いていた。ただの子供が戦場に来るはずがない。

ならばあの少女は何者だ？

決まっている、目の前に広がっているガジェットこの残骸れと同じ敵だ。

刹那の間にそう結論付けた彼の判断は間違っではいなかった。

「何ッ!？」

唯一の失敗は、彼女が一人ではなかったということ。

ヴァイスの放った魔力弾は、彼女の傍らに現れたガリユーによって弾かれた。

ガリユーが弾いた魔力弾に気づいたルーテシアはその手をヴァイスに向ける。

「邪魔……!」

「ぐあぁッ!？」

彼女の手から放たれた魔力の塊に吹き飛ばされたヴァイスは背後の壁に叩き付けられ、バリケード代わりに立てていたロッカーが彼の足を挟み込んだ。

意識が途切れかけていた彼は、足から響いた何かが折れるような音と、直後に襲ってきた痛みによって意識を何とか保たせていた。

だが、ルーテシアの放った魔力の塊は彼の他にもガジエットの残骸までも吹き飛ばしており、彼の周囲は瓦礫に埋もれていた。

すなわち、機動六課における残存戦力のほとんどが無効化された瞬間だった。

「ぬうッ!!」

「ハアアッ!!」

地上本部直上、空という広大な空間を使って、二人の男は互いの武器を叩き付けていた。

ゼストの持った槍と、ミルズの腕に嵌めた籠手。

二つの武具は、持ち主を勝利に導かんと相手に迫るが、互いに決定打を打ち込めないでいた。

「やるようになったな、ミルズ」

「貴方が俺を拾ってくれたからですよ」

互いに距離をとり、デバイスを構える。

そんな中、ミルズは小さく、だがしつかりとした声でゼストに語り掛ける。

「ストリートチルドレンだった俺を、貴方は拾ってくれた。

今の俺は、貴方がいたからだ。

その恩を、今返します」

ミルズは籠手を嵌めた手を握りしめる。

その籠手に魔力が満たされると同時に、その籠手の形がぐにやりと、液状に変化した。

「来るか……!」

「ブレード」

『コピー、レヴァンティン』

次の瞬間、ミルズの手には一振りの剣が握られていた。

その姿は、シグナムの愛剣『レヴァンティン』そのものだった。

(武器が変わった……!?)

「来るぞ」

ゼストは自分の中で驚きの声を上げるアギトを落ち着かせ、目の前のミルズを警戒する。

「行きます……!」

「——ッ!」

刹那、ゼストの槍とミルズの剣が交錯する。

互いに相手の攻撃を得物で弾き、その隙を何とか詰めようとする。

「ハンマー」

『コピー、グラーフアイゼン』

何度かの衝突の後、ゼストの攻撃の一瞬のスキを突いたミルズは再びその得物の姿を変えた。

(また変わった!?)

どうなってるんだよ、あいつのデバイスは!?)

「あれがあいつのデバイス、『パラディン』だ。

そう言うものだと考えなければ負けるぞ、アギト」

ミルズのデバイス『パラディン』。

その正体は特殊な液体金属を用いた高性能デバイスだ。

デバイスの形態変形の礎となった技術を用いたデバイスであるが、液体金属の操作、コスト、出力調整の常時変化などの様々な要因から一機のみ製作された幻のデバイス。

それを彼は己が手足のように使いこなしていた。

「ふんッ！」

「グッ……い！」

(くっそーッ!!)

ハンマーでの一撃は先ほどまでの攻撃とは違い、ゼストを防御ごと弾き飛ばした。

直後にミルズはさらにパラディンの形態を変更させる。

「バスター」

『コピー、レイジングハート』

ハンマーの形態から、杖に変わったパラディンの先端に真紅の魔力が収束される。

(あれはやべえ!!)

旦那ッ!!)

「わかっている」

それを見たゼストは、アギトの力も借りて障壁を張る。

そして、閃光は放たれた。

「強くなったな、ミルズ」

「いえ、まだまだ未熟者です」

砲撃と障壁の衝突によって起きた閃光が晴れると、そこには互いの得物を相手に突きつける二人の姿があった。

ゼストの言葉にミルズは首を横に振りながらそう答える。

その時、ゼストは地上本部から大きな魔力反応のいくつかが出てくるのを感じた。

「ここまでか、悪いが引かせてもらおうぞ」

(ちよ、旦那!?)

「構いません、自分の今の任務は貴方をここで止めることでしたので。

それと……」

互いにデバイスを下げる二人。

去ろうとするゼストの背中にミルズは言葉を続ける。

「レジアス中將からの伝言です。

すべての決着がつく日にすべて話す、と」

「……わかった、と伝えてくれ」

ミルズの言葉にゼストは静かにそう答えてその場を去っていった。

ミルズは去っていくその背中をいつまでも見続けていた。

「姉貴……!」

はやてからギンガの安否の確認の任務を言い渡されたスバルは全速力でギンガの信号が途絶えたポイントに向かっていた。

『スバル!』

先行しすぎよ!!』

「悪い、だけどツ!!」

ティアナからの通信に対しても碌に答えずにひたすら前に進む。

そして、彼の視線の先に通路を塞ぐ隔壁が映った。

「マツハキャリバー!」

『Load carttridgge』

スバルの右腕から一発の空薬莖が排出される。

そして、青色の砲撃が隔壁を撃ち抜いた。

「姉貴ッ！」

隔壁にあいた穴からその中に飛び込んだスバルはギンガの姿を探す。

そして、彼の視線の先にそれは飛び込んできた。

「あね、き……う？」

ひび割れた壁の下に倒れ込むギンガ。

その右手は粉碎されており、頭部からの流血によつて、彼女の周囲は血で赤く染め上げられていた。

そして、彼女の周囲にいる三人の少女。

その三人の顔はどれも驚愕に染まっていた。

ガシャン……

その時、スバルは自分の中で何かが外れる音を感じた。

「——ッ!!」

直後、スバルの周囲にある瓦礫を彼の身体からあふれ出すエネルギーの奔流が吹き飛ばした。

ゆっくりと下を向いていた彼の顔が上を向く。

「姉貴から、離れる……」

その瞳は静かに金色に輝いていた。

ティアナルート 第二十一話

「スバル！」

先行しすぎよ!!」

なのはに抱えられ、スバルの後を追うティアナは通信で彼に呼びかける。

『悪い、だけど!!』

ティアナとなのはの遙か先を疾走するスバル。

彼へつないだ通信が切られたことに対してティアナは眉を顰めていた。

「仕方ないね……。

こういつた場所じゃ、スバルの方が速い」

「ええ……」

「大丈夫、こっちがその分急げばいいだけの話だから！」

ティアナはなのはの言葉を聞きながら、胸に何かがつかえたような感覚を覚えていた。

(何か、嫌な予感が……!)

魔法少年リボルバースバル 『ティアナルート 第二十一話』

荒れ狂うエネルギーの奔流の中心でスバルは静かに、しかししっかりとした声で言葉を紡いだ。

「もう一度言う……」

スバルの言葉とともにリボルバーナックルに装填されている残りの五発のカートリッジが一気に排出される。

空薬莖が地面に落ちると同時にスバルの身体に扱いきれないほどの魔力が溢れ出す。

「姉貴から……」

『ディバインバスター』

スバルの周囲に六つの魔力の塊が生成される。

「離れる……っ!!」

『リボルバーシフト』

直後、チンクたちに向けて六つの砲撃が斉射された。

「ノーヴェエ、ウエンデイっ!!」

「クッ!」

「ちよ、危なっ!!」

見え見えの砲撃は戦闘機人たる彼女たちにとって避けるのは造作もないことだった。

だが、彼女たちの前方に直撃した砲撃は大量の煙を巻き上げた。

「逃がすか……ッ!」

「チンク姉、下がってッ!!」

その煙の中からスバルが飛び出す。

加速をつけた彼を止めるためにノーヴェエがチンクの前に出て、右手を前にかざす。

その右手にはめた固有武装『ガンナツクル』から広範囲にエネルギー弾が放たれる。

「ハアーツ!!」

「なッ!」

だがスバルはその弾幕を障壁すら張らずに突破してくる。

ノーヴェエの放ったエネルギー弾によって白いバリアジャケットのいたるところが赤く染められるが、スバルは右の拳をノーヴェエに放つ。

「退きがれノーヴェエ。

今の俺は、手加減なんか出来そうもない。

たとえ顔見知りであつてもだ……ッ!!」

「……ッ!」

その拳をノーヴェエは右腕に張った障壁で受け止めるが、スバルの瞳が一際輝くと、その障壁すら粉微塵に碎かれ右腕に彼の拳が襲い掛かる。

スバルの拳が触れた途端に、ノーヴェエは自分の右腕に生じた異常を認知していた。

「このおッ!!」

その直後にノーヴェエは跳び上がり、ジェットエッジの出力を上げスバルに蹴りかかる。

(どんな形であれ、道は交わってるだろうが……)

敵味方だろうと、それは変わらねえんだよ……。

この……馬鹿野郎がッ!!)

彼の言葉がノーヴェエの頭を横切った。

蹴りを放ったノーヴェエだったが、その言葉とともに目の前のスバルの顔を見て、一瞬だが、身体の軸がブレた。

体制が若干とはいえ崩れた蹴りの威力は本来のそれをはるかに下回った。

そして、スバルはその蹴りを回し蹴りで相殺する。

タイミング、威力、そのほかすべての要素を打ち消されたノーヴェエの蹴りはスバルに完全に止められた。

「邪魔をするな……ッ。」

どけええッ!!」

「——あぁッ!!」

さらにスバルの力が上がり、ノーヴェエは空中から地面に叩き付けられ、その勢いのまま壁際まで吹き飛ばされる。

「ノーヴェエッ!!」

「ウエンデイ、ノーヴェエを回収してすぐに撤退しろ。」

あれは姉が抑える」

チンクは指に挟んだナイフをスバルの足もとに投げつけ、即座に爆破する。

スバルは爆発の勢いに押され、後ろに下がる。

「でも、いくらチンク姉でも……ッ!」

「行けッ!」

「——ッ!!」

ウエンデイはチンクのその声と同時にノーヴェエを戦闘機人の膂力を活かして肩に担ぐ。

「ノーヴェエ、しっかり捕まってるッすよ!」

IS発動、エアリアルレイブツ!!」

「逃がさない……ッ!」

「行かせんツ!!」

チンクはISを発動したウエンデイがノーヴェエとともにその区画を離脱するのを見届け、さらにナイフを追加で投擲する。

今度はナイフがスバルに接近する前に爆発するが、スバルはそれを障壁を張ってやり過ごす。

「——ッ、邪魔をするな……!」

「チイツ……!」

スバルの右手がチンクに迫る。

チンクは後ろに跳び下がることで、その拳を回避する。

目標を失った拳は彼女のいた場所に大きな亀裂を生んだ。

二人の戦いはまだまだ始まったばかりだった。

「うう……!」

「——ッ、ノーヴェエ。」

気づいたツすか?」

「ウエンデイ……?」

ウエンデイに担がれた状態で目覚めたノーヴェエは周囲を見回し、そして、チンクがいないことに気づいた。

「ウエンデイ、チンク姉は!」

「スバルの足止めに残ったツすよ」

「そんな……!」

チンク姉……ッ!」

ウエンデイの言葉を聞いたノーヴェエは身体を動かしてウエンデイから離れようとするが、右腕を中心に身体中から不具合を示す痛みが彼女を襲った。

「ちよ、無茶しちゃダメツすよ、ノーヴェエ!!」

右腕は完全に機能停止してるし、全力で壁に叩き付けられた衝撃で基礎フレームにも歪みが出てるんツすから!!」

「でも、チンク姉が!!」

「セイン姉に頼んで助けに行ってもらってるっす。

私たちは先に戻るッすよ!

今のノーヴェが行っても邪魔になるだけっす!」

「——ッ!!」

ウエンデイの言葉がノーヴェの胸に突き刺さる。

彼女の言葉を否定したくても、今のノーヴェにはその言葉に対する反論の言葉が出なかった。

「む……!」

はやてからの指示通りにシグナムはヴィータたちの反応があった場所に向かっていた。

そのポイントよりも地上本部に近いところで多くのガジェットII型を相手に行っているヴィータとリインがいた。

だが、シグナムはヴィータの動きにキレがないことに遠目からでも気づいた。

そして、彼女の後ろから迫るガジェットII型の存在にも。

「紫電一閃っ!」

「——っ!?!」

シグナムの放った一撃がガジェットを爆散させる。

それに気づいたヴィータは彼女の顔を見るなり驚きの表情を浮かべた。

「シグナム……、何でここに?」

「主から言われてな。

お前たちの反応が一時的に消えたことを心配なさっていたぞ。

それより、リイン、ヴィータに何かあったのか?

動きがおかしかったが」

「聞いてください、シグナム!」

ヴィータちゃんさっきの戦闘で肋骨にひびが入ってるのに戦ってたんですよ!!

怪我人だというのに!!」

「おい、リインっ!!」

「——っ!?!」

リインがシグナムに事情を説明していた時に、ヴィータが声を上げるが身体を走った痛みで中断せざるを得なかった。

「なるほど、事情は理解した。」

リイン、ヴィータをしっかりと治療してやってくれ」

「はいです!!」

「待てよ、シグナム。」

「ガジェットはどうする……」

「私がすべて落とすさ」

シグナムはヴィータにそういうと、レヴァンティンを構える。

構えたレヴァンティンから空薬莖が一つ排出される。

「烈火の将、シグナム。」

「推してまいるっ!」

ノーヴェとウエンデイが去った区画で、スバルとチンクは未だに死闘を繰り広げていた。

だが、スバルの身体にはすでかなりの傷が刻まれていた。

ノーヴェの放ったエネルギー弾によってできた傷、チンクのIS『ランブルデトネーター』によって起こされた爆発によって巻き上げられた破片によって切り裂かれた腕や頬などからは血が流れていた。

対するチンクはスバルの拳に当たらないように立ち回ったおかげで傷などはなかったが、その代わりに一撃で戦闘不能にされる可能性がある攻撃を避け続けるという精神的疲労を感じていた。

「ハアッ!!」

「クッ!!」

二人の撤退を支援するために殿となったチンクだったが、目の前で

自分たち、機械の身体を持つ者の天敵と呼べるスバルの戦い方を、彼の攻撃を紙一重で躲しながら観察していた。

スバルの戦い方として牽制で小ぶりの攻撃を続けて相手の体制を崩し、機会を逃さずに大振りの攻撃を放つということをチンクはこの数分の攻防で確認していた。

そして……

(来た……ッ！)

その時が来た。

魔力弾による牽制。

チンクはそれを後方に飛び退くことで回避し、指の間にナイフをはさみ、彼の現れるであろう空間に投擲する。

そして、ナイフが何かに当たった手ごたえを感じたチンクはそれを爆破させる。

彼女の目の前に爆煙が広がる。

チンクとしては彼を追跡不能にする程度に負傷させるつもりだった。

正確に言えば、膝を壊すということだ。

だが、その考えが間違이었다。

『ディバインバスター』

「なに——っ!？」

煙を引き裂く青色の砲撃がチンクを襲う。

間一髪、チンクは固有武装『シエルコート』に搭載されているAMF発生装置の出力を最大にして直撃を凌いだ。

だが、その直後煙から飛び出してきたスバルの右手が彼女を、障壁ごと吹き飛ばした。

「ば、馬鹿な……ッ！」

地面に倒れながらチンクはスバルを見た。

そこで彼女は気づいた。

彼の服装が先ほどまでと変わっていることに。

『魔力量危険域』

スバルは先ほどまで羽織っていた白いロングコートを脱ぎ去り、黒

地に青いラインの入ったインナーの姿で彼女を見ていた。

なんとか立ち上がろうとするチンクにスバルは駆ける。

魔力弾を放った後、スバルはそろそろ自分の攻撃パターンをチンクが予測できるようになっているだろうと考えた。

そこで、彼はそれを逆手にとつてこの膠着状態を打破しようとした。

煙の中にわざと踏み込み、コートの裾を前にあらかじめ翻しナイフを受け止める。

ここでナイフを攻撃と判断したバリアジャケットが自動的に爆発。

ナイフの爆発と同時にだったために、スバルが予想していた以上の衝撃が彼を襲ったが、彼の作戦は一応の成功を見せた。

そして、ついにその拳がチンクを捉える。

「まだだッー！」

「——ッ!!」

チンクは倒れたまま、接近するスバルの目の前に数多のナイフを召喚する。

スバルはそれをすでにかなりの傷を負っている左手で払いのけようとする。

だが、それよりも早く、チンクのI.S.によってナイフが爆発した。

チンクは至近距離で起こした爆発の余波を受けて地面を転がる。

うつぶせになっていた彼女は爆発の起こした炎の中、立ち上がる一つの影を見た。

「——ッ、呆れるくらい頑丈だな……!!」

彼女の見たのは、傷だらけになりながらもその場に立っているスバルだった。

だが、一目見ただけでもすでに戦闘は無理だろうという有様だった。

ナイフを払いのけた左腕は肘から先が原型を留めないほどに破壊され、さらに魔力枯渇によって、バリアジャケットを突き抜けて彼に

ダメージを与えていた。

だが、彼の眼はいまだにチンクを捉えていた。

「チンク姉っ！」

「セインか、助かった」

彼が一步足を進めようとしたとき、チンクの背後に地面から飛び出したセインが現れる。

妹の登場に安堵するチンクだった。

「よっしゃ、すっかりつかまっててよ？」

「ああ、任せる」

セインの背に寄せられたチンクはちらりとスバルのほうを見るが、すぐに視線をセインの背に向けた。

「IS発動、『デーブダイバー』っ!!」

そして、セインとチンクはその姿を消した。

彼女たちが去った後にその区画に到着したティアナたちが見たのは、壁際に倒れているギンガと、ゆっくりと膝から崩れ落ちたスバルだった。

ティアナルート 第二十二話

「酷いモノね……」

地上本部と機動六課が襲撃された翌朝。

ティアナは資料を持って崩壊した機動六課の隊舎の現場検証を行っていた。

(スバル……)

ティアナは今も病院で眠っているであろうパートナーのことを思う。

彼女は、昨夜のことを思い出すだけでも身体が震えそうになっていた。

チンクたちが撤退した後、倒れ込んだ彼をティアナが抱き起したときに、彼の身体のいたるところから血が流れて、彼の体温が低くなるのを感じた。

その時、彼女は言い様のない恐怖を感じた。

今まで一緒にいた者がいなくなるという恐怖を味わったティアナは一つの思いをその胸に抱いていた。

(ちよっと、気恥ずかしいけど、後悔は、したくない……)

スバルとギンガをティアナとなのはが回収してしばらくしてガジエツトはその姿を消した。

地上本部及び機動六課における損害はかなりのものとなっていた。地上本部側では、警備任務にあたっていた局員の三分の一が負傷。死者が出なかったことは幸運と言ってもいいだろう。

そして、機動六課の方が損害率でいえば地上本部以上のものだった。

フォワードメンバーの四人のうち前衛を張るスバルが左腕損失といった重症。

エリオも六課付近における戦闘で右腕を負傷していた。

さらに、陸士108部隊からの出向扱いのギンガも右腕の破損及び

頭部裂傷という具合。

六課の防衛についていたザフィーラ、シャマル、ヴァイスの三名の負傷。

最後に、六課で保護していた少女、ヴィヴィオを連れ去られるという最悪に近い形での敗北だった。

「酷くやられたな……」

「シグナム副隊長……」

現場を見回っていたティアナに遅れてきたシグナムが声をかけた。

「ヴィータ副隊長やリイン曹長は……?」

「幸い、回復魔法ですぐに完治できる程度の怪我だったらしい。」

二、三日は安静にしておかなければならないそうだが、すぐに戻ってくるさ。

リインも一応検査を受けてはいるが、あいつは夕方にでも戻ってくる。

負傷した六課所属の局員も全員峠は越したようだ」

シグナムのその報告にほっと胸をなでおろすティアナ。

普段スバルたちと一緒にいるとは言っても、同じ職場に働く者が一人も欠けなかったことはうれしい報告だった。

「それで、高町隊長はどうだ?」

「……中で検証中です。」

ヴィヴィオが攫われて、悲しいはずなのに、それを感じさせないで……」

「そうか……。」

その資料を渡してくれ」

ティアナはシグナムの言葉に首を傾げながらも手に持った資料を彼女に渡した。

「あとの仕事は私がやっておく。」

お前も、病院に顔を見せに行ったらどうだ?

スバルも目を覚ましたとエリオから連絡があつてな」

「——ッ、はい!」

ありがとうございます、シグナム副隊長!!」

シグナムは、彼女に一礼して走っていくティアナの背中を見ながら微笑んだ。

「……あれが若さか」

彼女のポツリと呟いた一言はだれにも聞かれることはなかった。

「はあく、お前も無茶するなあ、エリオ？」

病室で目覚めたスバルは、同室となったエリオと、彼の見舞いに来ていたキャロに先日の襲撃の報告を聞いていた。

その途中で、スバルはストラダーとケリユケイオンに記録されていた戦闘データをみてそう呟いた。

「あの時は、ちよつと頭に血が上つてて……」

「ま、お前にそれを言う資格は俺にはないか」

ヴィヴィオが攫われていくのを直接見たエリオは、乗っていたフリードの背から飛び出し、ストラダーの推進力のみで彼女を連れ去ろうとしていたルーテシアに追い迫ろうとしたのだが、ガリユールとルーテシアの援護に回っていたディードによって、海に叩き落されたのだった。

その後、エリオを救出したキャロによって呼び出された真竜『ヴォルテール』によって六課を襲撃していたガジェットは一掃された。

うつむきながらそう答えるエリオを見て、スバルは自分の左肩に手を当てる。

今は病院から貸し出された病院服の上着を羽織っているために一目ではわからないが、袖の肘から先のところには何もなかった。

「……………」

三人そろって無言になったとき、カラカラと病室のドアが開いた。

「……なんでみんなしてだんまりなの？」

部屋に入ってきたティアナは暗い顔をしている三人に驚きの表情を浮かべながらスバルのベッドの横に置いてある椅子に座った。

「ほら、差し入れ。」

「どうせまだ何も口にしてないんでしょ？」

「ん、サンキュー」

ティアナは手に持っていたビニール袋の中から缶ジュースを取り出しプルタブを開きスバルに渡す。

それを受け取ったスバルは一気に飲み干した。

「それで、二人には話したの？」

「ああ、俺と姉貴の生まれから身体のことまで全部な」

手に持った缶を見ながらそう答える。

ティアナはちらりと隣のベッドに腰掛けるエリオと、すぐそばに立っているキャロを見て口を開く。

「ごめんなさいね、私から言うのを止めてたの。」

もうちよつとしたら言ってもいいかもって話をこの間してたんだけど……」

「いえ、そんな」

「それに、お話を聞いて、ああそうだったんだって納得できましたし。」

ほら、スバルさんってどこか人間離れたところがありますから」

「そ、それもそうだな……」

「言われてみれば、ね」

エリオとキャロの顔を見てスバルたちは苦笑いしながらそう答える。

そんな時、キャロがエリオの袖を軽くつまんで彼に念話で部屋を出ることを伝える。

それにエリオも頷き、ベッドから降りた。

「僕たち、ちよつと食堂まで行ってきますね」

「スバルさんも、温かい食べ物とか食べますよね」

二人はすぐに部屋を出ていった。

それはもう、スバルたちが声をかける間もないほどに。

「気使わせちまったかな？」

「まあ、今のあんた見たらそう考えるのも無理ないわね」

二人が出て言ったことで部屋は静かになった。

「ギンガさんは？」

「まだ目覚めてないらしい。」

一応、修復は終えたらしいけど、右腕は……」

「あんたと一緒か」

ティアナはスバルの左腕を見ながらそう呟く。

「ケーブルとかなら取り換えるだけでいいけど、今回みたいなのその部位を失った場合は、その部分を丸ごと取り換える必要があるしな。」

多分、俺も姉貴も腕は肩から取り換えることになる。

それでもスペアなんてあるわけないから、しばらくは片腕だ」

「あんたは片腕でも戦うんでしよう?」

「まあ、な」

ティアナの言葉に頷くスバルの頭に浮かんだのは一人の少女の顔。考え込んでいる彼の顔を見たティアナが彼に指摘する。

「あの赤毛の子のことでしょう?」

「……ああ。」

多分、あいつは自分がやらなきゃっていうことだけしか見えていないんだと思う。

でも、一つだけのことだけしか見ないのは、ほかのことを見ないようにしているんだよな。

その中には、大切なこともある」

スバルは空になった缶を握りながら言葉を紡ぐ。

「だからさ、どうにかして目を覚ましてやらないとって思うんだよ。」

それがお節介だったとしても」

ティアナはそんな彼の表情を見て一つ大きなため息を吐く。

「つまり、あんたは出会ってそれほど経ってない相手のために、片腕でも戦おうって言うのね?」

「………ああ」

ティアナはスバルを呆れた表情で見る。

スバルは彼女の視線から目を逸らす。

「まあ、その方があんたらしいわよね。」

見ず知らずの人のために身体張って助けるっていうお人よしというか、なんというか」

ティアナは大きくため息を吐く。

そして、彼女がスバルに真剣な表情で話しかける。

「スバル、今からちよつと真面目な話しするから」

「え……う？」

いきなりの雰囲気の違いに驚くスバルだったが、目の前に座る彼女の顔を見て彼も自然と真剣な表情になる。

「スバル、あたしはあんたのことが好き」

「……………はい？」

いきなりの言葉にスバルは目が点になった。

「あたしは、スバル・ナカジマのことが好き」

「マジ……………う？」

「本気よ」

スバルが呆然と答えると、ティアナは顔を紅くしながらもはっきりと答える。

「本当は、こんな時にいうことじゃないんだろけど、我慢できなかった」

「我慢って…………」

「だって、昨日あんたが倒れたとき、あたし、怖くなったの。」

兄さんみたいに、あんたまでいなくなるのは、考えたくなかった。

だから、後悔したくなかったから、あんたに伝えたかったの、あたしの気持ちを…………」

「いや、けどなんで俺？」

「好きになっちゃったんだから、しょうがないでしょう!!」

あんたのことが全部、そのお人好しなところとか、一度決めたらやり通すところとか全部!!

理解できないなら、何度でも言う。

あたしは、あんたのことが大好き」

「え……、あ、う、うん…………」

スバルは自分の口の中がカラカラに乾いているのを感じた。

「そ、そんなこと考えたこともなかったし、というか、今でも信じられないし、いきなりだし…………」

スバルは手をわたわたと振り、しどろもどろに話す。

だが、それも仕方のないことだろう。

今まで仕事のパートナー兼仲のいい友達といった関係だと思っており、彼女のことを異性として意識し始めてすぐの告白である。

そんな彼に混乱するなと言う方が無茶であろう。

「返事は……その、今じゃなくていいから」

「え？」

「今返事もらっても、なんかあんたが弱ってる時に入り込んだみたいで、嫌だし。」

それに、今は大変な時でしょう、色恋沙汰で仕事に支障きたすのは不味いし」

それに、とつづけながらティアナは立ち上がる。

「今はあんたも休まないよ。」

ほら、とにかく返事はこのゴタゴタを終わらせてからね」

「え、あ、ああ……」

終始、スバルを置いてきぼりにしてティアナは部屋を去っていった。

部屋に残されたスバルはベッドの上で彼女が出ていった出口を見ながら一言呟いた。

「え、どうしろって言うんだよ……」

その後彼は、エリオとキャロが戻ってくるまでスバルは頭を抱えてベッドの上をぐるぐると転がっていた。

ティアナルート 第二十三話

ティアナがスバルの部屋から去って数時間後、すでに日も沈み空には星が瞬いていた。

そんな夜空のもと、当のスバルは病院の屋上で一人遠くに明るく浮かび上がる地上本部を見つめていた。

(あたしは、あんたのことが大好き)

もちろん、頭の中は昼間のティアナの発言でいっぱいだった。

気になり始めていた異性からの突然の告白。

彼女には休めと言われたスバルだったが、突然の告白によって混乱した頭では休むにも休めなかった。

「夢、じゃないよな……」

そう言いながらスバルは右手で自分の頬を思いつきり引っ張り、痛みを感じた。

頭の中を整理しようとして外に出たスバルだったが、静かな病院の屋上というところで整理しようにも、少しでも彼女のことを考えると、先ほどの告白の言葉が思い出される。

「ここにいたか、バカ息子」

「……親父」

そこで、なんとかこの気持ちに整理をつけようとした彼がとった策は、経験者である父を頼ることだった。

「むふ。」

急に連絡よこした理由は何だ？」

冷える夜空の下で、スバルの隣に立つゲンヤは息子にそう尋ねる。

「えつとき、親父とお袋はさ、なんで知り合っただ？」

「いきなりどうした？」

「なんで俺らのことを聞きたがる？」

「ちよつと気になったから……」

ゲンヤはスバルの様子がいつもとは違うことに気づいたが、あえてそのことは指摘しなかった。

ゲンヤは手摺にもたれかかりながら思い出す様に口を開いた。

「そうだな、あいつとの出会いってのは仕事での付き合いからだっただけだ」

その時、俺はまだ部隊長なんて立場じゃ無くてな、とある部隊との合同捜査のために部隊の代表としてクイントと会ったんだ。

まあ、最初はこんな別嬪さんが捜査官だなんて信じられなかったさ。

だけどな、合同捜査ってなだけに一緒に調べものなんかもするようになって、あいつがすごいってのはわかった。

そして、仕事の時だけじゃなくてプライベートでも会うようになった。

その時はわからなかったんだが、その時から俺はあいつに惚れてたんだろうな。

おっと、話が逸れたな。

で、公私問わずに会うようになった俺らだったが、それも仕事の打ち合わせがほとんどだった。

まあ、たまに食事を一緒にする程度だな。

それで、無事に追ってた事件を解決して俺はあいつとの関係もおしまいだって思った。

しばらく時間が経つと、何をしてもしつまらない時間ができた。

なんでかって考えると、たとえば仕事の関係だったとしてもあいつ……、クイントと一緒にいた時間がとても楽しかったからだった。

まあそこからはあれだ。

俺があいつに告白して今に至るってところだ。

「つまり、どういうこと？」

「誰かを好きになるのに特に理由なんざいらねえってことだ。

俺だってなんであいつのことを好きになったかって聞かれたら、こう答えるな。

『あいつと一緒にいるのが楽しいから』ってな」

ゲンヤは隣に立つスバルの頭に手を置き、笑いながらそう告げた。

「親父は、まだお袋のこと好きなんだな」

「おう、当たり前だ。

俺が愛した女はクイントだけだからな」

「そっか……」

スバルの顔を見たゲンヤは優しい笑みを浮かべながら彼に話しかける。

「まあ、なんで悩んでたかは聞かないが、答えは自分で出すんだな。

何事も経験だ、経験」

スバルの頭から手をどけてゲンヤはその場を去っていく。

その背中を見ながらスバルは彼女のことを考えていた。

「俺は……」

「メガ姉く、チンク姉はどうなんすか？」

スカリエツテイのラボの一室で、ウエンデイは隣でパネルを操作しているクアットロに尋ねる。

クアットロは指で眼鏡の位置を直すと、壁に並んでいる生体ポッドの一つに視線を向けながら答える。

「基礎フレームに歪みが見えるからねく。

全部取り換えることになると思うわよ。

チンクちゃんだけじゃなくて、ノーヴェちゃんの右腕も同じ」

「……………」

クアットロの言葉を聞いたウエンディはチンクの入っているポツドの前に立っているノーヴェを見る。

ノーヴェの背中を見るからに落ち込んでいた。

「にしても、なんでチンク姉やノーヴェのフレームに損傷が？

殴られるぐらいじゃ歪むようなものじゃないよね？」

「ゼロセカンドのIS『振動破碎』は、私たちにとって天敵もいいところ。

彼の四肢に直接触れたところから振動波を流し込まれたら一発でお釈迦になる代物ね」

「まさに一撃必殺か」

クアットロとともにチンクのポツドの制御を行っていたセインはポツリと呟く。

「でも、そんなもの喰らってなんでフレームが歪むだけでスنداتツすか？

普通なら……………」

「普通なら触れたところを中心に様々な破損が起きるわよね」。

歪みだけじゃなくて、破断、膨張、エトセトラ、エトセトラ。

今回は運が良かったって言うしかないわよ」

「運？」

「そう、たぶんそれが彼にとっての最後の一線だったんじゃないかしらね」。

スバル・ナカジマは、自分や姉であるギンガ・ナカジマを人間としてみている。

なら、同じような存在である私たちも人間として認識していると思うわよ」。

で、管理局員として、人として、人殺しはね」

クアットロの真剣な表情を見たセインとウエンディは驚きの表情を浮かべる。

そんな時、不意に一つのモニターが浮かび上がった。

『クアットロ、ドクターが呼びよ』

「あ、はーい！」

セインちゃん、チンクちゃんの様子見ておいてね〜」

「はいよ〜」

「そいじゃ、行くつすね〜。」

ノーヴェはどうするつすか?」

「あたしは、いい……。」

しばらくここにいる」

ノーヴェはウエンデイの方を見らずにそう答える。

相手の返事を聞いたウエンデイは、そうつすか、と頭を掻きながらその場を後にした。

「あたしは——ッ！」

「およ」

ノーヴェたちと別れたウエンデイは少し先に立つその少女を見て声を上げた。

「ルーお嬢様！」

「……ウエンデイ」

「およ、あたしのご存知でしたっすか!?!」

ウエンデイは初対面であるその少女——ルーテシアが自分のことを知ってたことに驚いた。

「ドクターが話してた。」

皆、自慢の娘だって。

三時間ぐらい、話につき合わされた」

「あ、あはは。」

お疲れ様っす」

ルーテシアからの言葉を聞いたウエンディは引き攣った笑みを浮かべながらそう答えた。

よく見ると、ルーテシアの顔に疲れが見えた。

そんな彼女から目を外し、ルーテシアの視線の先を追う。

そこには多くの生体ポッドが並んでおり、その中にルーテシアをそのまま成長させたような姿の女性が入っていた。

「これ、お嬢様のお母さんっすよね？」

「うん、今はまだ眠ってる。」

ドクターの話だと、あと少ししたら目覚めるからって」

「一ついいっすか？」

「なに……？」

ウエンディは生体ポッドからルーテシアに視線を移し、一つの問いを投げかけた。

「お嬢様は何でドクターの手伝いをしてくれるっすか？」

「この人たちを助けてくれたから。」

この人だけ生きてても、この人が目覚めたときほかの人がいなかったら寂しいだろうから……。

それで、この人たちを助けてくれたドクターには感謝してる……。

だからドクターの手助けをする」

ルーテシアは少し視線を逸らし、ほかの生体ポッドに目をやる。

そこには多くのポッドが稼働しており、そのすべてに人が入って眠りについていた。

「そうっすか。」

ありがとうございますっす」

「……あたしはもう行くから。」

ウエンディは、どうするの？」

「そうっすね。」

しばらくここにいるっすよ」

ルーテシアはウエンディに向かって「じゃあ、また」と言うと、転移魔法でどこかに行ってしまった。

ウエンディは一人になったその空間で一人壁に視線を向ける。

「ルーお嬢様のお母さん、メガーヌ・アルビーノ。」

そして、あの三人のオリジナルっすか。

これも運命ってやつっすかね〜」

彼女の独り言はだれにも聞かれることなく、小さく消えていった。

「本当にいいのかい、ギンガ君?」

「はい」

「しかし、お父さんや、スバル君にも言わないというのは……」

「お願いします、サカキ博士」

「……今の君は、平均台の上で水一杯のバケツを両手に持って振り回しているようなものだ。

限りなく奇跡に近いバランスで何とか保っているんだよ。

それこそ、いつその水がこぼれ、台から落ちるかもわからないよう
な」

「……………」

「機械的な部分と生態的な部分。」

そのバランスが少しずつズレ、そしていずれは……」

「生きることもままならないことになるとしても、かい?」

ティアナルート 第二十四話

サカキは自分の部屋で頭を抱えていた。

「ここまで頭を悩ませた問題はいつ以来だろう……」

彼が頭を抱えることになった原因は、ギンガとスバルについてだった。

彼が一番の興味を持って接しているのはスバルだが、姉であるギンガに何かあればスバルが悲しむのは必定。

そんな彼をサカキは見たくはなかった。

そして、その最悪のことが起きようとしていた。

以前のギンガの身体の異常がついに許容できる範囲を超えた。

病室にいるギンガにとってもそれは耐え難い苦痛を与えるものだ。

少しの調整で、その苦しみを和らげることができない。

だが、ギンガはそれを望んではいなかった。

「まったく、ここまでそっくりだね、彼ら姉弟は……ん？」

大きいため息を吐いたサカキだったが、彼のプライベートのパソコンに一つのメールが届いているのに気付いた。

「こ、これは……!!」

その中身を確認したサカキはその部屋を飛び出していった。

「あ、お、おはよう」

「お、おう」

その日、スバルが病室を出たとき、ちょうど部屋に入ろうとしていたティアナと鉢合わせしていた。

互いに昨日のことを思い出して顔を紅めていたが。

「ど、どこか行くの？」

「ああ、姉貴が気が付いたって連絡が昨日の夜あつてな。

今からちよつと行こうとしたところだ」

「そう、ギンガさん、目が覚めたんだ」

ティアナはスバルの言葉にホッと息を吐いた。

部屋から一步出て扉を閉めるスバル。

「あゝ、一緒に行くか？」

「……うん」

ギンガが收容されている研究所まで、街の中を走るレールウェイの中で二人は無言だった。

だが、それは決して互いに喧嘩したとかではなく、どちらも話しかけようとしては中断するという感じで生じた無言だった。

「昨日のことだけだな」

「うん」

「返事は、お前が言った通り、このゴタゴタが終わってからする。

終わらせて、それから、俺の気持ち、ちゃんと伝えるから」

座席に座りながらスバルは隣に座るティアナに語り掛ける。

「絶対に」

「……約束よ」

「ああ、約束だ」

揺れる列車の中でティアナがスバルの肩に頭をコトンと当てる。

彼女の重みを感じながら、スバルはしっかりと頷いた。

「なんか、ちよつと見ない間に二人とも仲良くなってない？」

「な、何のことですか？」

ギンガのいる病室に着いた二人に向けられた彼女の言葉は、二人を狼狽させるのには十分な言葉だった。

彼女の言葉にスバルは目を逸らし、ティアナは引き攣った笑いを浮かべるしかなかった。

「なんとなく、ね？」

女の勘ってやつかしらね」

ギンガのその言葉に二人は苦笑を浮かべるしかなかった。

「それで、傷の具合はどうなんだよ、姉貴？」

「右腕以外はほとんど直ってるわよ。」

頭切ってたから血が結構出てたけど、それももう修復終わったしね」

「こういう時に限っては、機械の身体に感謝だな」

ギンガとスバルがそんな風に笑って言い合っているとき、部屋の扉がノックされた。

ノックの音が響いたとき、三人は互いに顔を見合わせ、ギンガが返事をする。

「あいてますよ」

「失礼するよ」

扉を開いて入ってきたのは、サカキだった。

彼はケースを手に持ちながら部屋に入る。

「おや、スバル君もいたのか。」

なら丁度いい。

君を呼ぶ手間が省けたよ」

「何かあったんですか……？」

部屋にスバルがいたことに驚きの表情を浮かべたサカキだったが、すぐにいつもの笑みが浮かぶ。

そんな彼に対してギンガは首を傾げながら尋ねる。

「おっと、そうだったね。」

実はギンガ君とスバル君。

君たちがいい知らせがあつてね」

サカキはティアナが部屋の隅から持ってきた椅子に彼女に礼を言いながら座り、メガネの位置を直しながら口を開く。

「二人はグランツ君のことを覚えているかな？」

「フローリアン博士ですか？」

あの人がかしたんですか？」

「実は、ここに彼から研究資料用に送ってもらったものがある」
そう言つてサカキは手に持ったケースの蓋を開けた。

そこには二つの腕が収められていた。

「これは……」

「腕……？」

「そう、彼が開発したアンドロイド『ギアーズ』のプロトタイプの予備パーツだよ。」

「ここからが本題だ。」

「このギアーズの身体は君たちと同じ機械の身体だ。」

そして、彼らは君たち二人の身体をベースに作られた」

サカキの言葉にギンガとスバルは何か気づいた顔をする。

「まさか……！」

「そう、そのまさかさ。」

「この腕を少し調整すれば、君たちに取り付けることも可能だ。」

さて、この選択肢を差し出された君たちはどうする？

もちろん、断つてくれてもいい。

本来腕を失つた君たちはこのまま負傷局員としてしばらく前線から離れられる。

僕としてもそうしてくれた方がいいと思つてる」

まあ、選ぶのは君たちだ、と言つてサカキはその口を閉じる。

そして、すぐに二人は答えを彼に伝えた。

「ありがとうございます。」

「これでちゃんと戦える」

「弟が戦うつて言うのに、姉が寝ているだけってのは情けないですしね」

「うん、君たちならその選択を選ぶと思つていたよ。」

実はもう準備は始めているんだ。

スバル君は先に研究室に向かつていてくれ。

リツカ君がそこで調整を始めるから」

「姉貴は？」

「彼女にちよつと話があつてね」

サカキの少し強めの言葉にスバルは戸惑いながらもティアナを連れて部屋を出ていった。

「さて、ギンガ君」

「私の身体のことですよね？」

もう時間が……」

サカキがギンガを見ると、彼女は先に彼の要件を言い当てる。

彼女は感じ取っていた。

すでに自分の身体が思うように動かなくなるということを。

顔を俯かせてそう言う彼女だったが、サカキは軽い感じで声をかける。

「まあ、君の身体のことなんだけどね。

まだ確証を得たわけでも、安全が確認されたわけでもない。

だけど、一つだけ、それをどうにかできる方法がある、と言ったらどうするかい？」

燃え盛る草原。

すべてのものを焼き尽くす臭いだけが、彼の鼻に刺激を与えていた。

人も、建物も、森も、すべて。

男は心の中で呟いた。

——これで、すべて終わりだ……——

だが、それはだれにも聞かれることはなかった。

燃える、燃える。

すべてが燃える。

彼の生まれた街が、偉大な王が築いた城が、平和だった国が。

彼が作り出したあるもののせいで、この国、いや世界は狂ってしまった。

彼は所謂天災と呼ばれる者だった。
故に気づいてしまった。

自分たちが暮らす世界の他にも、人々が暮らす世界があることに。
そして、絶望を撒き散らすだけになったこの世界が、平和に暮らしている世界に禍わざわいをもたらずであろうことも。

そこからの彼の行動は早かった。

それは彼自身のケジメでもあった。

まともな思考を残した者はこの世界にはいなくなっていた。

そんな世界は、邪魔なだけ。

彼はその世界を滅ぼす魔王になることを選んだ。

「——これですべて終わり。」

あとは……」

男は手に持ったそれをコメカミに向け、引き金に指をかける。

——願わくば、この世界の跡を誰も見つけなくてくれ——

そして、一つの音が彼の耳を打つのと同時に、彼の意識は消えた。

「——よし、成功だ……ッ!!」

「すぐに最高評議会に連絡を……ッ!」

そして、彼は目覚めた。

彼は長い夢を見ていたようにも感じていた。

「……………」

徐々にはつきりとしてきた思考の中で彼は……………。

「——クター、ドクター」

「……………ん」

耳を打つ自分の長女の声で彼、ジェイル・スカリエツティは瞼を開く。

視界の中には、ウーノ、クアットロ、デイエチが揃っていた。

「準備、整いました。」

いつでも始められます」

「ああ、ご苦労様だ、ウーノ」

スカリエツティは固まっている関節をほぐす様に身体を動かす。

「久しぶりに夢を見たよ」

「夢、ですか？」

ウーノはスカリエツティの言葉に首を傾げる。

今までそう言った話をしたことがなかった彼が、唐突にそのようなことを言ったことを疑問に思っていた。

「ああ、とても懐かしくて、クソツタレな夢だよ」

その時、彼の目はとても冷たいモノだった。

スカリエツティはウーノから受け取った白衣を羽織ると、寝台に横たわっている少女——ヴィヴィオのもとに近寄る。

「さあ、始めよう」

——「世一代の大勝負を——」

ティアナルート 第二十五話

「それで、左腕の調子はどうなの？」

スバルとギンガがサカキからの提案を受け入れた五日後、無事に腕の装着を終えたスバルは怪我の完治も相まって病院を退院することになっていた。

病院を出るために廊下を歩いているスバルは、左腕を軽く回しながら答える。

「少しバランスが取りづらいけど、片腕の時よりはマシだな。」

それに、いざとなれば体感センサーの調整をすればすぐになれる」「そう。」

ギンガさんは？」

「姉貴は俺よりも怪我酷かったからな。」

一応、後二、三日は様子を見るんだと」

スバルはそう言いながら自分の胸に手袋で包まれた左手を持っていく。

だが、そこにはいるべきである彼の相棒はいなかった。

「そういや、修理に出してたんだったな……」

スバルはマツハキャリバーを本局の技術部に出していることを思い出し、小さく呟く。

「結構ボロボロだったものね」

「ハア、ダメだな。」

いくら頭に血が上ったとしても、あいつのことをまったく考えなかったからな……」

そう、地上本部での戦闘の際、彼の全力に堪え切れなかったマツハキャリバーはその機体ボディに無数の損傷を受けていた。

そのため、マツハキャリバーは今、本局技術部に預けられているのだった。

「それでも、あんたを最後までサポートし続けてたんだから、ちゃんと謝りなさいよ？」

「わかってるよ」

「酷いな……」

「隊舎をはじめとした施設はほとんど破壊されたわ。

かろうじて寮は無事だったけど……」

病院を後にしたスバルとティアナは機動六課に足を運んでいた。

そして、変わり果てた職場を目にしたスバルは一言、口にした後、何も言葉にすることができなかった。

「ヘリやあんたのバイクがあった格納庫も、デバイスルームも全部やられてた。」

幸い、あんたのバイクは修理可能な範囲だったけど……」

「この状況でよく修理可能な状態だったな……」

運がいいというか、なんとというか……」

「ヴァイスさんの容体は？」

「意識は戻ってるらしいけど、まだヘリの操縦は無理らしいわ」

ティアナは破棄処分が決定しているヘリを見つめながらそう答える。

「あ、スバルにティアナ。」

「こつちに来てたんだ」

「なのはさん……」

「お疲れ様です」

瓦礫の山となっている格納庫跡地を前で話す二人になのはが手を上げながら近づいてきた。

「あの、なのはさん。」

「この間は、すみませんでした。」

「単独先行して……」

「あれは仕方がないよ。」

スバルがトップスピードで行かなかつたら、ギンガも攫われていたかもしれないんだしき。

ギンガが攫われるのを防いだ時点で、単独先行のことは不問です。でも、次は気を付けてね」

「……はい」

スバルはなのはに頭を下げるが、なのはは彼の頭を優しく両手で挟んで、頭を上げさせた。

「なのはさん、ヴィヴィオのことは……」

「助けるよ、絶対に。」

スカリエツティがなんであの子を攫ったのかはわからないけど、絶対に助ける」

なのははそう言って決意の籠った目を二人に向ける。

スバルとティアナはその目を見て、息を飲んだ。

「でも、その前に」

「!?」

「ごめんな、無理言つて」

「まったくだよ……」

いくらはやてからの頼みだといっても、今回のことは骨が折れた」時空管理局本局の艦船ドッグを見下ろせる通路ではやては一人の男と会っていた。

男——ヴェロツサ・アコースは、窓の外を見ながら大きくため息を吐く。

そこには次元航行部隊の中でも古株と言ってもいいほどの船がその身体を休めていた。

「廃艦間近のL級艦船、アースラ。」

経年劣化により、長期任務に耐えられないってことで近いうちに処分されるからつてことで回してもらえただけど……」

「これから先は、移動できる本部があつた方がええ。」

まあ、まさかアースラが回ってくるとは思ってらんかったけど」

「いやだったかい？」

「ううん。」

アースラは私にとってももう一つの家みたいなもんや、嫌なわけない」

ヴェロツサの言葉に対して首を横に振り、はやては窓に近づき手を当てる。

「おやすみ前に、もう一働き頼むよ。」

頑張ってな、アースラ」

「そうか、八神はアースラに」

「はい、六課の壊滅を受けて、クロノ・ハラオウン提督が手を回したそうで」

はやてがアースラをその目で見つめているとき、地上本部ではレジアスがそのことについて報告を受けていた。

今、彼女の娘であるオーリスは別件で司令室にはおらず、ここ数週間、オーリスの補佐を務めていた女性が代わりにレジアスに報告書を渡していた。

「まあ、六課の戦力を無駄にすることは出来んからな。」

地上部隊の魔導師はハッキリ言ってAMFの中ではあまり戦えん上に、アインヘリアルなんて大砲の警備に戦力を裂かれてる状態だしな。

あれの維持費にいくらかかるんだ？」

「アインヘリアルの維持費は、一般支給されているデバイスをアップグレードさせたものをほとんどの武装隊に配備させることができるほどですね」

女性の答えにレジアスは大きいため息を吐きながら歩みを進める。

「はあ……。」

まったく、最近の問題が多すぎる。

まあ、こんな時に脳味噌連中から連絡がないのは助かるが……」

レジアスはここ二週間ほど音信不通になっている最高評議会の三人(?)のことを思い出すが、彼女にとつて彼らの存在は邪魔でしかないのですぐに頭の中から消えていった。

レジアスは手に持った資料を見ながら廊下を歩いて行く。

だから、彼女が気づくことはなかった。

彼女の後ろを歩く女性が笑みを浮かべていることに。

「グツ、ゴホツ!!」

「だ、大丈夫かよ、旦那!?」

ミッドチルダから遠く離れた森の奥。

ゼストはそこで身体を休めていた。

だが、彼は木にもたれかかり、激しい咳を繰り返していた。

「……心配するな。

少し休めば治る。

アギト、すまないが薬を持ってきてくれないか……」

「お、おう!」

すぐに持つてくるから、座つてろよ旦那!!」

アギトはそう言って少し離れたところに置いてある荷物のもとにまで飛んでいった。

それを見届けたゼストは咳をしたときに口を覆っていた手を見つめる。

「さすがに、無理が祟ったか……」。

だが、もう少しだけ……」

彼の掌には真っ赤な血が、べつとりと付着していた。

ティアナルート 第二十六話

地上本部及び機動六課がスカリエツティからの襲撃を受けて一週間。

六課の機能を移したアースラの会議室に機動六課の主なメンバーは集まっていた。

「みんな、そろっとるね」

その部屋に、そう言っではやてはグリフィスを伴って入ってくる。彼女が上座の席に座った後、フェイトが皆を代表してはやてに問いかける。

「はやて、六課の方針はどうなったの？」

「うちの目的は最初と同じや。」

ロストログア、レリックの回収」

はやてはそう言うと、手元のパネルを操作して部屋の中央にモニターを映し出した。

「そして、さっき地上本部から届いたのがこれや」

「これって……」

モニターにはミッドチルダの地図だった。

そこには二ヶ所のポイントが示されていた。

「地上本部と聖王教会が協力して探り当てた、スカリエツティがいると思われるポイントや。」

「この二か所にもレリックがあると思われる」

「ということは……」

「その二か所に突入して、レリックの確保がこれから六課がやるべき仕事や。」

そのついでに、スカリエツティやその協力者の確保、攫われたヴィオオの救出もやっていくよ」

はやてからの言葉を聞いたティアナは誰にも気づかれることなく小さくため息を吐いた。

（屁理屈よね、それって……）

「でもはやてちゃん、そんなことしてほかのところから何か言われる

んじゃ……」

「まあ、理由は話したけど、どうやっても屁理屈なんやもんなく。

でも、三提督やレジアス中將からのお墨付きや。

文句は言われても邪魔はさせへんから」

はやてはそう言っつて席を立つ。

「出撃は明日に予定しとる。

みんなはそれまで待機しといてな」

会議室でのミーティングを終えたのはとティアナはアースラの休憩室でコーヒーを飲んでいた。

「ティアナ、スバルはまだ本局かな？」

「たぶん、そうですね。

マツハキヤリバーの受け取りと調整があるそうですが、出撃までには合流できるそうです」

「そっか、準備は万全にしとかないとね」

時空管理局本局

その一室で、スバルはポッドの中に浮かべられたマツハキヤリバーと向かい合っつて話し合っつていた。

「すまん、お前のこと、考えない戦い方で……」

『いえ、あれは私が悪かったのです。

相棒の本気についていけなかった。

貴方と走り続けると言っつたというのに……』

マツハキヤリバーの言葉を聞いたスバルは初任務のことを思い出

していた。

確かに彼はマツハキヤリバーにそう言っていたな、と苦笑した。

「それで、修復ほどの程度済んだんだ？」

『ほぼ完了しています。』

あとはマイスターとの調整と……』

マツハキヤリバーがそこまで言ったとき、スバルは部屋の扉が開く音に反応して扉の方を見る。

「シャーリーさん？」

怪我は大丈夫なんですか!？」

「みんな頑張ってるのに、私だけ寝てるわけにはいかないからね」

それに、とシャーリーは言葉を続ける。

「マツハキヤリバーの強化プランについて、スバルに許可をもらおうと思ってるね」

「強化プラン……?？」

その言葉に反応したスバルはシャーリーが操作しているモニターをのぞき込む。

「そ、外部フレームの強化や出力アップといったところかな。

すぐに終わる作業だけど、スバルにかかる負担が増えるからね」

「魔力消費量1.5倍、重量1.8倍……。

重量バランス、フレームの変化……。

大丈夫です、これぐらいなら」

「じゃあ、この方向で調整するね」

シャーリーがスバルの許可を得たとき、部屋の扉が開き、マリイが部屋に入ってきた。

「ごめんねー、ちよつと遅れたかな?？」

「大丈夫ですよ、先輩。」

ちよつとスバルからマツハキヤリバーの強化についての許可をもらったところです」

シャーリーとマリイが話しているとき、スバルは部屋に入ってきたマリイの後ろに立っている少女を見て驚きの声を上げた。

「あれ、ラグナちゃん!？」

「お久しぶりです、スバルさん」

スバルの驚いた表情を見て、白衣に身を包んだ少女——ラグナ・グラセニツクは笑みを浮かべながらそう答えた。

「え、なんでここに？」

「あれ？」

お兄ちゃん、言っただけじゃなかったんですか？

私、しばらく前からここで働いていたんです」

「いやー、ラグナちゃん優秀で助かってるよ。」

もの覚えもいいし」

二人の会話を聞いていたマリーがそう口を挟んだ。

「私には、リンカーコアはありませんから……。」

でも、私でも誰かのためになれるならって思っただけ」

「そっか」

スバルは気になっていたことについて彼女に尋ねた。

「そう言えば、ヴァイスさんの見舞いには……？」

「行きましたよ？」

怪我也完治してないってのに六課の隊舎に行くって言ってたので、
「^眠気絶させてきました」

彼女の発言に、スバルは頬を引き攣らせながら苦笑するしかなかった。

その日、彼女は朝から多くの人間と連絡を取っていた。

「ああ、報酬は指定の口座に振り込んでおいた。

いいか、くれぐれも他言はするなよ？」

何？

したらどうなるかって？

想像にお任せするさ。

買ったものが親にばれても知らんがな」

手に持った受話器を下ろすし、大きくため息を吐く。

そんな彼女のいる部屋にオーリスが資料を持って入ってくる。

「今ので最後ですか？」

「ん、ああ。」

全部で73人。

我ながら、あんな連中と交渉なんてやれたと思っっているさ。

管理局公認のハッカーなんてな」

レジアスは目頭を揉みながら大きく伸びをする。

オーリスは目の前で激しく自己主張する親の二つの双丘を白い目で見る。

そんな娘の視線などに気づきもしないレジアスは言葉を続ける。

「初めから地上本部のスタッフは予想外の事態には弱いとわかっていました」

「だから外部のハッカー達に対策を頼んでいたのですね」

「ああ。」

だが、公式にそれをするのは不味いから、見返りは私のポケットマネーからだったかな」

レジアスはオーリスから資料を受け取り目を通そうとする。

だが、その時、彼女のいる部屋に警報が鳴り響く。

その警報を耳にした彼女だったが、すぐにそばに置いてある受話器を取り上げる。

「……………そうか、わかった。」

すぐに行く」

受話器の向こう側から事態を聞いたレジアスはすぐに立ち上がり、ハンガーに架けていた上着を手取る。

「行くぞ、オーリス」

「何かあったのですか？」

部屋の出口に向かうレジアスの背中を追って歩き出したオーリスはその背中に尋ねる。

「アインヘリアルが落とされた」

「では…………」

「ああ、始まるな」

「状況は!?!」

「アインヘリアル一号機から三号機を戦闘機人およびガジェットが襲撃。」

すでに二号機と三号機は破壊され……一号機も破壊されました!」
同時刻、アースラのブリッジでもアインヘリアル襲撃の報が届いていた。

ブリッジに駆け込んだはやては、スバルとギンガとともに合流したシャーリーから報告を受ける。

「いやな感じで分散しとる……。」

隊長たちを出すわけにもいかんか……ッ!」

「戦闘機人、アインヘリアルから撤退していきます!!」

「動きが早いですね」

「あかんな、完璧に後手に回つとる。」

何とかせな……。」

「ッ!」

アコース査察官から通信です!!」

「繋いでッ!」

はやての指示に従ったブリッジクルーはすぐにモニターを呼び出す。
モニターに映った人物、ヴェロツサはどことなく焦った表情で彼女に呼びかける。

『はやて、こちらでスカリエツテイのアジトを発見した。』

だけど予想以上に敵の数が多くてね、今はシスターシヤツハが叩き潰してるけど時間の問題だ。

教会からも戦力の派遣を頼んだけど、そちらからも戦力を送ってくれないかな?..』

「了解や、すぐに向かわせるから持ちこたえて」

『助かるよ……ッ!』

なんだ、この揺れはッ!』

「ヴェロツサ……!』」

「部隊長!」

「これをッ!!」

ブリッジのメインモニターにそれを映し出された。

「なんや……、これ……」

それは船だった。

アースラなどをはじめとする管理局所属の次元航行艦とは大きさが違いすぎる桁外れの船。

それがミッドチルダの、首都クラナガンからさほど離れていない森の中から浮かび上がった。

『やあ、ごきげんよう。』

管理局の諸君』

「スカリエッツィッ!」

それは、アインヘリアルの襲撃の報告を受けて待機していたなのは達のもとにも聞こえていた。

『見えるかな、あの船が。』

あれこそが、古代ベルカの遺産であり、私の望む世界を作り上げる【聖王のゆりかご】だ!!』

画面に映る男、スカリエッツィは身体全体を使い、その自身の心情を伝えようとしていた。

そして、さらに現れた別のモニターに映るその少女をなのはは見逃さなかった。

「あ、ああ……ヴィヴィオ……ッ!!」

なのはの、血の繋がっていない、しかし最愛の娘は、まるで王の座る玉座のようなその小さな身体には不釣り合いな巨大な玉座に座らされていた。

そして、その玉座の背後からは幾本ものチューブが四方に張り巡らされ、何かを彼女から吸い上げている様子だった。

『これは、君たち管理局員に対する挑戦状と思ってくれたまえ。

私の望みが勝るか、君たちの正義が勝るか。

その時を楽しみにしているよ』

『戦闘機人、地上本部へ進行を開始しました!!』

『別ルートからも、オーバーSランク魔導師が、地上本部に向かっていきますッ!!』

「スバル、あれッ!」

「ノーヴェ……ッ」

アースラのブリッジからの映像を見たスバルは、彼女の姿を見つけると、その拳を握りしめた。

『さあ、終焉の始まりだッ!!』

フフフフ……、ハツハハハハハハ!』

ティアナルート 第二十七話

『状況は予想していた以上に最悪な方向や。』

ジェイル・スカリエツティの思惑は何なのか不明。

だけど、あの巨大船が予想されるポイント、二つの月の魔力が満ちる場所に辿り着いたら、ミッドチルダの市民の安全が脅かされる』

巨大船、聖王のゆりかごが浮上してすでに数十分。

アースラでの緊急ブリーフィングのために、スバルたちは会議室に集まっていた。

『巨大船のポイント到達阻止のために次元航行艦隊も出撃してる。』

今も、航空部隊がゆりかご周辺に展開しているガジェットの排除に向かっているはず」

「ゆりかごだけじゃない、スカリエツティのアジトの制圧と、地上本部に向かっている戦闘機人の捕縛。」

やることはいっぱいあるけど、高濃度のAMF環境下での戦闘を行える魔導師はまだそんなに多くない」

『そこで、機動六課を三つのチームに編成する。』

まず本部に向かっている戦闘機人、それはスバルたちに任せる。

別ルートから本部に向かっている魔導師……、騎士ゼストの方は、シグナムとリインが』

「アジトには私が、ゆりかごには」

「私とはやて部隊長、ヴィータ副隊長が行く……でいいんだよね？」
『そうや。』

もう時間がない。

準備ができ次第、出撃頼むよ』

「みんな、準備はいい？」

「」「はいっ！」「」

出撃の準備を終え、格納庫に集まったスバルたちは、なのはと

ヴィータの前に並んで立っていた。

「今回の出撃は、今までで一番ハードになると思う」

「あやし等も、お前らのピンチになっても助けてやれねえ」

「でも、目を閉じて、今までの訓練を思い出してみて？」

なのはの言葉に従い、目を閉じるスバルたち五人。

「何度もやった基礎訓練、嫌って程磨いた、それぞれの得意技。

痛い思いをした防御練習、全身筋肉痛になっても繰り返したフォーメーション。

いつもボロボロになるまでやった、私達との模擬戦」

なのはの言葉とともに、スバルたちの顔がどんどん青ざめていく。

彼女の訓練を受ける期間が短かったギンガは比較的マシだったが、残る四人、特にスバルとティアナは今にも吐きそうな表情を浮かべていた。

「目、開けていいよ」

なのはは目の前に立つ五人の姿を見て、苦笑する。

「訓練メニュー考えた私が言うのもなんだけど、皆きつかったよね？」

「それでも、ここまで五人ともよくついて来た」

「特にスバルとティアナはよく頑張ったよ。」

私が教えてきた中で一番キツイ訓練メニューだったんだから」

なのはのその言葉に、スバルとティアナは頬を引き皺らせながら笑うしかなかった。

彼らは、彼女の考えた訓練メニューは彼女の教えを受けた者はだれでもこなしていると考えてやっていたために、その分の驚きも含まれていた。

「五人とも誰より強くなった……とは、ちょっと言えないけど。

だけど、どんな相手が来ても、どんな状況でも絶対に負けないように教えてきた」

なのはとヴィータは、そう言いながら笑みを浮かべる。

「守るべきものを守れる力、救うべきものを救える力。

絶望的な状況に立ち向かっていける力。

「ここまで頑張ってきた皆は、それがしっかり身に付いてる」

その言葉は、スバルたちの中に何の抵抗もなく入り込んでくる。そして、それは彼らの中で自信となってその心を強くする。

「夢見て憧れて、必死に積み重ねてきた時間」

言葉が続けながら、なのはは拳を握りしめて前を出す。

「どんなに辛くてもやめなかつた努力の時間は、絶対に自分を裏切らない。

それだけ、忘れないで」

最後にそう言っつて、締めくくる。

浮かべていた笑顔は彼らの知る、なのはの、強くて優しいエースオブエースの顔だった。

「キツイ状況を、ビシツとこなして見せてこそそのストライカーだからな」

「「「……はいっー」」」

ヴィータは不敵な笑みを浮かべながら彼らにそう告げ、スバルたちも自信に満ちた顔で答えた。

「じゃあ、機動六課フォワード隊、出動！」

「行っつてこい!!」

「「「了解ー」」」

今までで一番の敬礼をなのはとヴィータに返して、スバルたちは踵を返して走り出した。

だが、へりに向かう彼らの中で、スバルだけが立ち止りなのはの砲に振り返った。

「なのはさん、ヴィヴィオのこと、頼みます」

「スバル……」

「あいつに、あげようと思つてたチョコ渡してないんで」

スバルのその言葉になのはは吹き出しながら答える。

「うん、任せて。」

スバルも、気を付けてね」

「はい」

スバルはもう一度、彼女に敬礼をして、今度こそへりの方へと走つていった。

「スバルの奴、完全に兄貴になってるな。」

六課こくごに来てから、エリオとキャロキャロの相手してたけどさ」

「うん、もう完全に下の子を思いやるお兄ちゃんだよな。」

ヴィヴィオにとっても、スバルはお兄ちゃんなんだろうなあ」

走り去るスバルの背中を見ながら、なのはとヴィータはそう言葉を交える。

「さ、私たちも行こう」

「おう」

「遅いぞ、スバル」

「ヴァイスさん……ッ!?!」

ヘリの後部ハッチの前で彼を待っていたのは、今も病院にいるはずのヴァイスだった。

「なんでここに!?!」

「お前らを無事に降下ポイントに連れてくれためだよ。」

直接戦やりあった訳じゃないが、無駄に消耗して戦える相手でもないだろう?」

途中までの露払いをしてやるってことだよ」

ヴァイスはそう言ってヘリの中へ入っていく。

スバルの眼には、その背中がとても大きく、頼りがいのあるモノに見えていた。

「フォワードのみんなは出撃でたんやね?」

「うん。」

シグナムとリインも一緒に出たよ」

「次はあたしたちの番だな」

スバルたちが出るのを見送ったなのはとヴィータは、アースラの下
部ハッチのある区画にいた。

「……………」

「なのは……………」

フェイトは、ここに来てなのはが一言も話さないのを気にして彼女
に視線を向ける。

その視線に気づいたなのはは決意の籠った表情で答える。

「大丈夫だよ、フェイトちゃん。」

ヴィヴィオは絶対に助ける。

スバルとも約束したんだし」

「……………気を付けてね、なのは。」

私が言えることじゃないかもしれないけど、なのははすぐに無茶す
るから……………」

「約束はできないけど、善処はするよ」

フェイトはなのはの言葉に額を押さえながらため息を吐く。

「そう言うと思ったよ、まったく……………」

なのは、ヴィヴィオは任せるよ」

「うん。」

フェイトちゃんも気を付けて」

『降下部隊、ポイント到着。』

お願いします』

「ほな、行こうか」

「了解！」

アースラの艦内アナウンスを聞いたはやてはその場でバリアジャ
ケットを展開し、開かれたハッチから外に飛び出す。

彼女に従ってなのはたちもバリアジャケットを身に纏い、その身を
空に投げ出した。

「久しぶりのリミッター無しの状態や。」

加減を間違えんようにな!!」

「大丈夫だよ、はやて」

「やることは変わらないから」

「そう言うことだ」

「心強いなあ……」

はやてはなのはたちの返事に笑みを浮かべながら、その頼もしさをうれしく思っていた。

「フェイトちゃんはそろそろ……」

「うん、このままスカリエツテイのラボまで一直線に行く」

「それじゃ、フェイトちゃん。」

またあとで」

「うん、なのはも。」

ヴィヴィオも一緒に」

フェイトはそう告げて三人と別の方角へとその進路を変えていった。

「さ、うちらも」

「うん……ッ!」

はやてに促され、なのはとヴィータはその高度を下げ、雲を突き抜ける。

その先には、巨大な船と、その周りに展開するガジェットとそれを押しとどめるために魔法を放つ航空魔導師部隊が激しく争っていた。

(ヴィヴィオ、待っていて……ッ!)

今、助けに行くからッ!!)

なのははその手に握るレイジングハートを構え、飛翔した。

「ゆりかごの方はどうなっている?」

場所は移り、地上本部の司令部。

そこでレジアスは後ろに立つ女性局員にそう尋ねた。

「高濃度のAMFが発生しているようで、苦戦しています。」

現在、機動六課所属の魔導師が三名合流しましたが……」

「まあ、そう簡単には流れは変わらないだろうな」

だが……、とレジアスは言葉を続けた。

「規格外の魔導師ならほかにも当てがあるのではな」

「まったく、あの人は人使いが荒いッたらないな」

男は靴紐を結びながらそうぼやいた。

そんな男に苦笑しながら二枚のカードを渡す女性。

「でも、行くのでしょうか？」

「頭の上であんなデカブツが浮かんでたら、ケイが静かに眠れないからな」

男——キヨウは女性——イリヨウからカードを受け取る。

「お父さん……」

「どうした、ケイ？」

キヨウは足にしがみついた娘を抱き上げる。

ケイはキヨウの首に一度強くしがみついた。

「けが、しないかね……？」

「ああ、お父さんは強いからな。」

ちやんと帰ってくるさ」

キヨウはケイを優しく抱きしめ、彼女をイリヨウに受け渡した。

「そうだな、この騒ぎが終わったら、三人でどこか旅行にでも行こう」

「いいわね、それ。」

「どこにするか決めておくから、ちやんと帰ってきてね」

「ああ。」

行ってくる」

キヨウは住処を出る。

その顔は、優しい父の顔から、鋭い目つきの戦士のそれになっていた。

「おわッ!?!」

「グッ……!?!」

揺れるヘリの中で、スバルたちは身体をぶつけないように手すりなどにしがみついていた。

「コラア、アルト!!」

もちっと丁寧に操縦しろ!!」

『す、すみません!』

でも、あのガジェットたちしつこくつてッ!!』

ヘリの中でヴァイスの怒声が響く。

現在、スバルたちを乗せたヘリはノーヴェたちの進路上に向かうコースを飛んでいた。

ガジェットⅡ型の追撃を受けながら。

「バカヤロウ!」

こいつは前の新型とは違うんだ!!

以前の感覚で飛ぶんじゃねえ!!」

『そ、そうか……!?!』

ヴァイスの言葉を聞いたパイロットのアルトはすぐに操縦桿を手に引きその身をビルの上にさらした。

「スバル、腰のベルト掴んでくれ。

絶対に離すなよ」

「了解ッ!」

ヴァイスはそう言うと、ヘリの側面のドアを開いた。

スバルが彼のベルトを握ったのを確認すると、ヴァイスはその身を

ドアから乗りだした。

その手には銃型の彼の愛機『ストームレイダー』が握られていた。彼の視線の先には、彼らの乗るヘリを追ってきた二機のガジェットⅡ型の姿。

「ストームレイダー」

『いつでも撃てます』

「アルトツ!!」

『はいッ!!』

ヴァイスの合図に従い、アルトが操縦桿を左に思いつきり倒す。ヘリの急旋回を認めたガジェットⅡ型はその進路を変える。

「狙い撃つ……ッ!」

『スナイプシューター』

進路を変更する際に、一瞬だけ二つの機影が一直線に並んだ。

その瞬間をヴァイスは逃さずに、引き金を引いた。

放たれた弾丸は、二機分のAMFを物ともせず、そのコアを撃ち抜いた。

「す、すげえ……」

「スナイパーの名は伊達じゃないってな」

その様子を直に見ていたスバルは素直に、賞賛の声を上げた。

身体をヘリに戻し、ドアを閉めたヴァイスは、中で彼の腕に驚きの表情を浮かべている皆に向けてそう答えた。

ティアナルート 第二十八話

空を悠然と飛ぶ船——聖王のゆりかご。

その周辺はまさに激戦区にふさわしい様相を呈していた。

休む暇もなく襲い掛かってくるガジエツトⅡ型。

空をも覆いつくさんばかりにゆりかごの砲門から放たれる紫の砲撃。

「航空魔導師隊、スリーマンセルで当たって！」

単独での戦闘は避けて、確実に、だけど迅速に撃ち落して!!」

そんな状況に内心舌打ちをするはやては、周囲の航空魔導師に指示を出しながら飛行するガジエツトの編隊を撃ち落す。

だが、それだけやつても敵の数は減るどころか増えてきているように彼女には感じられた。

敵味方が入り乱れる乱戦状態のため、はやてが最も得意としてい広範囲殲滅魔法は使えない。

そんな状況に歯噛みしながらはやては一つの考えに至った。

「外からチマチマやつてもどうにもならん……。」

やつぱり、中から止めるしかないか……ッ！」

はやては目の前のゆりかごを苦々しい顔で見上げる。

その規格外の巨体には、はやての魔法でも致命傷を与えることはできないだろう。

ゆりかごを止めるためには、内部に侵入して動力炉を潰すしかない。

『24番射出口より、小型機多数!』

『南側の射出口からもⅡ型およびⅢ型の射出を確認!!』

「!」

はやての思考に割り込む形で、この戦域にいる魔導師からの念話が繋がった。

その内容は彼女にとってかなり苦しいものであったが、はやてはそれを顔には出さずに周囲で彼女の撃ち漏らしを撃ち落していた魔導師に指示を出す。

「皆、落ち着いて！」

拡散されたら手が回れへん。

叩ける小型機は空で叩く、潰せる砲門は今のうちに潰す！

ミッド地上の航空魔導師隊、勇気と力の見せ所やで！」

『はい!!』

はやての激励に、魔導師たちは得物を構え、己が敵に狙いを定めた。戦いはまだ始まったばかりだった。

「せえいッ!!」

気合を込めた声とともに振るわれたグラーフアイゼンによって、一機のガジェットが空中で叩き潰され、スクラップと成り果てた。

ヴェータは返す刀で背後から接近していたガジェットI型を、吹き飛ばし粉碎する。

「中に入る突入口を探せ！」

突入部隊、位置報告!!」

ヴェータはガジェットが密集する場所に向かって飛翔し、突入部隊への指示を出す。

そこから少し離れたところでは、なのはが密集したガジェットに向かって砲撃を放ち、その存在をこの世から消し去っていた。

「第七密集点突破、次ッ!!」

機械音とともに、レイジングハートから噴き出す蒸気を払いのけながらなのはは次の密集点に向けてその矛先を向ける。

今、彼女の手握られているのは杖というよりも、槍と評した方がいい代物だった。

レイジングハート・エクセリオン、その全力稼働を示す形態『エクシードモード』。

普段のレイジングハートに比べて、攻撃的なデザインのそれは、彼女の覚悟の証でもあった。

最初から全力全開。

彼女には手加減するつもりも、出し惜しみするつもりもなかった。
(ゆりかご)の阻止限界時間まであと三時間……ッ！)

なのはは新たな標的をその視界に認めると、即座に砲撃を放った。
まさに鎧袖一触。

今の彼女にとつて、ガジェットは己の道を塞ぐ障害どころか、路傍の石と同じ存在だった。

「邪魔をしないでッ!!」

阻止限界時間まで——後、二時間五十七分。

「烈風一陣ッ!!」

掛け声とともに、彼女の両手に握られたトンファアから二発のカートリッジが排出される。

排出が終わるとともに、彼女——シャツハ・ヌエラは得物を回転させながら跳び上がる。

「切り裂け、ヴィンデルシャフトッ!!」

辿り着く先は、ガジェットの密集した場所。

その中心に降り立ったシャツハは間髪入れずにデバイスを振るい、ガジェットを文字通りに『切り裂いて』いく。

彼女の通った後には、スクラップと成り果てたガジェットの残骸が転がるだけだった。

「はああああっ!!」

シャツハの戦っている地点から少し先に進んだところ通路では、大型の皿型が通路を塞ぎその触手^{アーム}を伸ばし、弾幕を張っていた。

だが、その弾幕のわずかな隙間を金色の光が駆け抜けていく。

並の魔導師や騎士では通り抜けることすらできないであろう場所を金色の光——フェイトは躊躇いなく駆け抜け、皿型の懐に飛び込む。

「せえええいつつ!!」

バルディツシユにカートリッジが装填される。

デバイスに魔力が充填されたのを確認し、フェイトは幅広の大剣を振り上げ、天井ごと目の前に展開するⅢ型の群れを押しつぶした。

すべてのガジェットを撃破したフェイトとシヤツハは顔を見合わせ頷いた。

そんな彼女達の下に、二匹の犬が駆け寄ってくる。ただの犬ではない。

その二匹の犬は、淡い緑色の光を纏い、その身体は透けていた。

この犬は、ここを突き止めた査察官ヴェロツサリアコースのレアスウシエントリヒ・ヤクトキル、無限の猟犬で生み出されたものであり、今はスカリエツテイの居場所まで2人を案内する役目を担っていた。

『別働隊、通路確認。危険物の順次封印を行います』

フェイトと共に突入した部隊から、通信での報告が届く。

「了解。各突入ルートは、アコース査察官の指示通りに」

『はい!』

別働隊への指示を出した後、フェイトは隣に立つシヤツハに微笑んだ。

「ありがとうございます、シスター・シヤツハ。」

御二人の調査のお陰で、迷わず進めます」

「探査はロツサの専門です。」

この子達が、頑張ってくれました」

フェイトの言葉にそう返しながらシヤツハは足元の二匹の犬の頭を撫でる。

そしてフェイトに視線を戻して力強く告げる。

「このまま奥へ。スカリエツテイの居場所まで!」

「はい!」

そんなシヤツハに頷いて、フェイトは先に進む。

この先に、あの男が。

フェイトが長年追いつけていた男——ジェイル・スカリエツテイがいる。

そう考えるだけで、彼女の手は相棒を強く握りしめていた。

ゆりかごが空を昇る空域から離れたところをゼストとアギトは高速で飛行していた。

「旦那、もうすぐ地上本部だ」

「ああ、わかっている」

アギトは隣を飛ぶゼストの表情を一目見て、今までずっと思っていたことを尋ねることにした。

何故かは彼女にはわからなかったが、この機会を逃すと二度と聞けなくなるという思いが彼女の頭をよぎったからだ。

「旦那、なんであのレジアスってやつにこだわるんだよ？」

何かあいつとあつたのか？」

「……………」

ゼストは彼女の方をチラリと見て、少し間をおいて口を開いた。

「俺が以前、首都防衛隊にいたことは話したな？」

俺はその隊の隊長として、あいつは地上の指揮を執る頭としてミツドの平和を願っていた。

だが、あるとき俺の部下が掴んだ違法研究所への介入をあいつは中止させた。

はじめは何かの手違いだと思った。

だが、それから何度も同じようなことが続いた。

俺はあいつに尋ねたが、終ぞ答えることはなかった。

あとは、お前も知っている通りだ」

ゼストの率いる隊は、違法研究所に押し入り、そこでスカリエツテイ一味との交戦、そして、彼を含んだ隊員の全滅となったのだった。

「俺は、あいつが何を考えて俺たちの行動を止めていたのか、それを知りたい。」

レジアスは理由もなくあのようなことをする奴ではないというのは知っているからな」

「旦那……」

アギトはゼストに対して、自分の胸に思い浮かんだ言葉を投げかけようとする。

「旦那ッ！」

「ム……ッ！」

だが、彼女たちに向けて大きな反応が高速で近づいていることを察知したアギトはすぐさまゼストに呼びかける。

彼女の声に反応したゼストがデバイスを構えた直後、彼らの上空の雲の中から一人の騎士がその手に握った剣を振るいながら飛び出してきた。

「ハアアアッ!!」

「……ッ!!」

剣と槍が触れ合った瞬間、爆発が起こる。

その爆発の衝撃を利用して騎士から距離をとったゼストとアギトは、間をおかずにユニゾンを果たす。

「防がれた、か……」

（あの融合騎が直前に知らせたみたいです。）

中々やりますです）

騎士——リインとユニゾンしているシグナムは右手に持った^{レヴァンティン}愛 剣を構えなおす。

構えた剣は一瞬、彼女の紫の魔力光に包まれ炎を纏った。

（——ッ、あの魔力光は……!?!）

「どうした、アギト……?？」

（な、なんでもねえ!!）

一回で決めるぞ、旦那ッ!!）

「……ああ」

（炎熱加速ッ!!）

アギトの驚きの声を聞いたゼストは彼女に尋ねるが、アギトはそれをなんでもないと答え、彼の槍に炎を纏わせる。

アギトが自分の身体のことを思っているということを理解しているゼストは、彼女の言葉に従いデバイスを構えた。

「すまないが、そこをどいてはくれないか。」

「この先に用があるのだが」

「それはできません。」

貴方の目的がなんであれ、それは公務の妨害とみなされます、騎士ゼスト」

「俺のことを知っているか」

「ええ、貴方は我々ベルカの騎士にとって模範とされる人ですから」

「——退いてはくれないか……。」

「ならば……ッ！」

「——ッ!!」

時間にして一分にも満たない時間であったが、ゼストは目の前に立ちふさがる騎士がかつての自分と同じように職務を全うするべくこの場に来ていることを理解した。

「紫電……一閃ッ!!」

「ムウンッ!!」

刹那——、二人の剣閃が交わる。

そして、閃光が弾ける。

「クッ!!」

「アギト……ッ！」

（加速ッ!!）

剣と槍が交わった瞬間に起きた爆発に両者ともに弾き飛ばされるが、シグナムが体勢を整える間にゼストはその背中から炎を吹き出し、その推進力で彼女に迫っていた。

「速いッ！」

（緊急防御ッ!!）

その動きに回避することは不可能だと悟ったシグナムは左手に握った鞘を前に構え、それにリインフォースが氷の盾を付随させた。

「ハアッ!!」

「グッ!!」

だが、ゼストの一撃はその氷の盾ごとレヴァンティンの鞆を打ち砕いた。

その衝撃にシグナムは彼と地上本部を結ぶ直線からはじき出される。

(シグナムツ！)

「リイン、大丈夫か？」

(はい、でも……)

シグナムはゼストの去っていった方角——地上本部の方を見る。

「さすがは、首都防衛隊のエースというところか。」

リイン、お前は主のもとに向かえ。

本部には私が向かう」

(了解です！)

シグナムは砕かれた鞆を魔力を使って修復すると、レヴァンティンをその鞆に納めた。

彼女の指示に従い、リインフォースはすぐにユニゾンを解除する。

「それでは、シグナム。」

気を付けてください！」

「ああ、お前もな」

リインフォースは彼女に一度敬礼をしてすぐにその場を後にする。

シグナムもまた、ゼストを追うために地上本部へその足を向けた。

「降下ポイントの安全を確認、アルト！」

『はいッ！』

みんな、頼んだよ！』

ヘリの側面のドアからガジェットの機影がないことを確認したヴァイスは操縦席のアルトに呼びかける。

アルトの返事とともに、ヘリの後部ハッチが開かれた。

「よし、行くか」

「先頭はスバル、頼むわよ。」

次にあたしが降りて、その次にエリオとキャロ。

ギンガさん、最後お願いします」

「はいっ！」

「任せて」

ティアナの指示にスバルたちは頷く。

「六課フォワードチーム行きますッ！」

「キャロ、反応は？」

「ダメです。」

さつきまではあつたのですが……」

地上に降り立ったスバルたちはリーダーに先ほどまで出ていた反応の方へと向かっていたが、そのリーダーには肝心の戦闘機人の反応が映っていないかった。

「——ッ、フリードッ!!」

「お、おい、キャロ!？」

その時、スバルとティアナ、ギンガの後ろをついてきていたエリオと一緒にフリードに乗っていたキャロが突然速度を上げて先頭に踊り出た。

「あれって……」

「あの時のチビツ子か」

キャロの突然の突出に驚いたスバルたちだったが、彼らの丁度目の前の廃ビルの屋上に特徴的な紫のロングヘアの少女が立っていた。

「向こうから出てきたってこと?」

「予定変更ね。」

先にあの子を捕まえるわ。

ギンガさん、横の召喚虫を頼めますか?」

「わかったわ。」

ウイング——」

瞬間、ギンガはその場から吹き飛ばされた。

「姉貴ッ!？」

「ギンガさんッ!!」

吹き飛ばされたギンガの名前を呼ぶ二人だったが、そんな彼らに向けて極太の砲撃が浴びせられた。

二人はその場から飛び退くことで何とか直撃を避ける。

「スバル、無事ッ!？」

「もちのロンッ!」

『スバル、ティアナ』

「ギンガさん!」

「無事ですか!？」

追撃を警戒しながら、砲撃によって巻き上げられた砂埃の向こう側を凝視するティアナとスバルだったが、そんな彼らにギンガからの念話が届いた。

『何とか、ね。』

それよりも、こっちに戦闘機人を二人確認したわ。

多分そつちにも……』

「来たみたいだ。」

二人、反応のあった四つと数はあってるな」

スバルが砂埃の中から飛び出してくる二人の戦闘機人を認める。

その中に、彼が止めると決めた彼女もいた。

「ノーヴェ……」

「スバル、わかってるわよね?」

「ああ、絶対に止める……ッ!」

「ならいいわ。」

あつちは任せるわよ」

「言われなくてもッ!!」

その言葉とともにスバルはマツハキヤリバーを駆り、ノーヴェに向かって走り出した。

阻止限界時間まであと——二時間四十三分。

ティアナルート 第二十九話

「スバルさん！」

ティアナさん!!」

スバルたちがノーヴェ、ウエンデイの二人と戦闘に入ったのを、フリードに乗って上空から見ていたキャロは二人に呼びかける。

『エリオ、キャロ、お前らはあのチビツ子を止めてこい!!』

『あたしたちは大丈夫だから!』

「でも——ッ、エリオ君?」

二人の言葉にキャロは躊躇うが、彼女の前に座っていたエリオはフリードの手綱を引き、フリードをビルの屋上にいるルーテシアに向かわせる。

「今はルーテシアを止める。」

あの子を手早く止めて、すぐにスバルさん達の方に向かおう。

大丈夫、スバルさん達は強いから、僕たちが行くまで絶対に負けない」

「でも……」

キャロの不安そうな声を聞いたエリオは後ろを振り返って、彼女の震える手を握りしめる。

「大丈夫だよ。」

なのはさんも言ってたでしょ?

僕たちは『ストライカー』だって」

エリオの中で、出撃前に言われた言葉がしっかりと根を張っていた。

そして、その枝はキャロの心にも伝わる。

「だから、きつとできる」

「うん。」

そうだよね。

あの子の事情を聞いて、止める」

「行こう、キャロ」

「うん、エリオ君!」

迫る双刃をギンガは左手のナツクルで受け流し、その勢いで回し蹴りを相対するデイドに叩き込もうとするが、蹴りが彼女の身体に突き刺さる前にデイドはその射程から逃れていた。

「ク……ッ！」

ギンガはデイドへの注意をそらさずに、先ほど自分がこのビルの中に叩き込まれた場所に視線を移す。

そこには、大きな穴が開いていたが、その先にはビル全体を包み込むバリアが張ってあった。

「よそ見をしている暇はないですよ」

「——ッ!!」

ギンガの耳に静かに聞こえてくる声。

彼女がその声に反応して視線を戻すと、そこには彼女の首に目掛けて振るわれた刃が迫っていた。

ギンガはその一撃を身体ごと後ろに倒れ込むようにして紙一重で躲し、地面につけた手でその身体を跳ね上げ、体制を整えると同時にデイドに接近し双剣の間合いの中に飛び込んだ。

「ハアッ!!」

「……………んー！」

超近接戦闘ではギンガの方に分があるが、デイドは彼女が放つ拳や蹴りの連撃を腕や足で受け流していた。

そのことに気づいたギンガは仕切り直しとばかりに、足元に魔力弾を放ち彼女との距離をとる。

「貴女、私の戦闘データを……」

「はい、私は完成してそれほど時間は経っていませんので」

ギンガの問いに、デイドは感情の乏しい声で答える。

彼女の言うことはつまり、ギンガとの直接的な戦闘は今回が初めてだが、以前の戦闘で彼女の戦闘データを蓄積したチンクたちからの

データを共有しており、そのフィードバックを受けているということだ。

ギンガにとってデイドは初めての相手であるが、デイドにとってはギンガと戦うのは二度目ということになる。

その事実にも、ギンガは舌打ちをすることを堪えられなかった。

「オラア!!」

ヴィータによって振り下ろされる鉄槌にガジェットが叩き潰され、爆発する。

爆発によって撒き散らされた煙を一振りで薙ぎ払い、すぐそばで砲撃を放ってガジェットの編隊を消滅させたのはのもとに向う。

「数だけが多いな。」

「このままじゃジリ貧だぞ」

「ロングアーチの方でも突入口を探してるけど、まだ見つかってないって」

なのははゆりかごの方を見ながらそう告げる。

だが、次の瞬間二人は背中合わせに周囲を警戒する。

「これは……」

「あつちも本腰入れてきたな」

ヴィータの言葉と同時に彼女たちの周囲に今までとは比にならない数のガジェットが現れる。

彼女たちが知る由もないが、同時にゆりかごの周囲でガジェットを破壊して回っていたエース級の魔導師の周囲にも同様にガジェットが現れていた。

それはゆりかごのシステムが彼女たちのことを脅威と認識したことに他ならなかった。

「どうするっ？」

「どうするもなにも……ッ!？」

『こちら第三突入部隊、ゆりかご内部への突入口を確保！』

現在、先発隊が突入を開始しています!!』

なのはがレイジングハートを構えようとした直前、彼女たちの耳に進入路の確保の報が届いた。

「突入口が見つかったか!」

「でも、この数を突破するのは……ッ!」

ガジェットから放たれる砲火を回避しながら魔力弾を放つなのはは歯噛みする。

突入口を確保したとあれば、あとは内部に侵入しヴィヴィオの救出と動力炉の破壊を最優先にするべきである。

だが、今もなお数を増やしつつあるガジェットを突破し、それを果たすとなれば些か厳しいモノがあった。

すでになのはの魔力は全体の七割強といったところ。

周囲にいるガジェットを破壊するのに、出し惜しみしなければ時間はかからないが魔力の残量をできるだけ保っておきたい。

「なのは」

「ヴィータちゃん?」

「行け」

そんな彼女の顔を見た、ヴィータは自然にその一言を口にした。

「でも……!」

「ヴィヴィオを助けるんだろが!!」

「ここで止まってられる状況か!？」

「……ッ!」

なのははヴィータの声に顔を歪ませる。

彼女は任務の適正云々を抜きにして、ヴィヴィオを救出するのは自分しかないと思っっている。

だが、彼女は自分の中には、此処でヴィータを置いて自分だけで行くという方法に対して激しく反対している自分がいることも感じていた。

「クツ——!?!」

「なんだ、この魔力反応？」

「速い——ツ!?!」

ヴィータの言葉に従い、ガジエツトの中を突っ切ろうとしたのはだったが、彼女のリンカーコアが一つの魔力反応を捉えた。

ヴィータも同じように、その反応を捉えたようで、その反応の持ち主がこちらに近づいているのを感じていた。

だが、その反応の移動速度が異常だった。

ガジエツトの間をすり抜けるように、しかし最短の距離を移動し、すれ違いざまにガジエツトが爆発していた。

そして、その反応をなのはどこか懐かしく感じてしまった。

「あ、貴方は……!?!」

「よう、久しぶりだな。」

高町のお嬢ちゃん」

彼女にとつての、教導官としての、先輩。

キョウ・カーンは彼女たちの上空からニヤリと笑っていた。

「あ、あんたは確か!?!」

「キョウ・カーンだ。」

前にも会ってるはずだが、昔話はあとにしよう」

彼の顔を見て、目の前の人物が以前なのはを救った局員だと気づいたヴィータは声を上げるが、それを制したキョウは周りを見渡してそう告げた。

「さて、実はお前さんたちの隊長さんから指示をもらったんだよな。」

お前さんらを援護するようになって」

「はやてちゃんが?」

「ああ、だからここは俺に任せろ。」

助けなきやいけない子がいるんだろう?」

キョウはゆりかごをチラリと見た後、なのはを見る。

「キョウさん、此処は任せてもいいですか?」

「ふっ、そのために来たんだ。」

「こつちのことは考えなくてもいいぞ」

「では、お願いします！」

彼女の顔からは迷いはなかった。

それは、娘も同然の子供を救うという使命からか、それとも目の前の男に対しての信頼の証か、それはだれにもわからない。

だが、今は、彼女の中から一つの思いだけが表に出ているということが重要だった。

「道は開ける。」

あとはお前らがどうかしろよ？」

「はい！」

ヴィータちゃん、すぐに行くよ」

「応よー！」

キョウの構えた杖から数十発の魔力弾が連射される。

高密度の弾幕は、砲撃を放ったかのようにガジェットの群れを叩き落としていき、彼女たちの前に道が創られる。

「今だッ！」

「行きますッ!!」

キョウの合図とともに、なのはとヴィータはトップスピードで道を駆け抜けていく。

それを見届けたキョウは、彼女たちを追おうとするガジェットに砲撃を叩き込む。

「悪いな、嬢ちゃんに言った通り、お前らには俺の相手をしてもらわないといけないんだよ」

もしも、ガジェットに感情というものがあれば、その機からだ体を震え上がらせていただろう。

それほどの圧プレッシャー力が彼から放たれていた。

「このッ!!」

ティアナは瓦礫の陰から身を乗り出して、ターゲット目標に向けて引き金を引く。

放たれた魔力弾はウエンデイの乗ったライディングボードを捕らえることはできずに、彼女の後ろへと流れていく。

姿を現したティアナに向かってウエンデイは手に持ったライディングボードの砲口を彼女に向ける。

「もらいッス!!」

「クツ……!」

砲口を向けられていることを察したティアナはすぐにその場から飛び出す。

彼女が飛び出した直後、彼女が隠れていた場所はウエンデイが放った砲撃によって瓦礫ごと撃ちぬかれていた。

「オプティックハイドゥー!」

「フエイクシルエツトツ!!」

「おっ!」

瓦礫から飛び出したティアナは、煙が自分を隠しているうちに、自らの姿を消して、分身を多数放つ。

「残念、幻術それについては対策済みっすよ!!」

「嘘ッ!」

だが、ウエンデイは煙の中から飛び出してきた幻影には目もくれず、姿を消しているティアナに向かって迷わずに弾丸を放った。

ティアナとしては、自分の姿を見失ってくれば御の字といった程度の思惑で使った幻影魔法であったが、迷わずに自分を狙い撃たれるとは思ってもいなかった彼女は身体を投げ出すようにその弾を回避した。

「かくれんぼは終わりにするっすよー!」

アンタの幻影魔法は役に立たないってのはわからないわけじゃないっすよね!!」

ウエンデイのあたりに響く声ををティアナは横転したトラックの陰から聞いていた。

「ハアハア……!」

荒くなつた息を静かに整えながら、頭の中で情報を整理する。

(あいつの攻撃はあのボードからの砲撃。

移動も、あのボードに依存している……。

でも、こつちの幻影は通じない上に、以前の戦闘データの時以上に砲撃の威力も増してる……。

機動性でも火力でも負けてる、か……)

情報を整理する傍ら、彼女の耳はウエンデイの足音を正確に捉えていた。

その持ち主が、徐々に自分のいる場所に近づいていることも。

(使いたくはなかったけど、そうも言ってもらえないか……ッ！)

彼女の手は、その胸にあるペンダントに伸びていた。

地下深くにある通路。

その両脇の壁には、ナンバーが刻まれたプレート付きの生体ポッドが所狭しと並べられていた。

フェイトとシヤツハはその様子を見て、眉を顰める。

「これは……人体実験の、素体？」

「だと思えます。」

人の命を弄び、ただの実験材料として扱う。

あの男や、つながつている連中は、そう言ったことを平然と行うようなやつなんです……ッ！」

フェイトは、拳を握りしめながら答える。

自分や、エリオ、スバルやギンガといったような存在を生み出すために平然と、面白半分にも人の命を弄ぶ。

それを行っていたであろうスカリエツティや、その研究を使っていた違法研究者たちへの怒りを彼女は感じていた。

「……1秒でも早く、止めねばなりませんね」

「ええ」

先へ足を進めようとする直前。

彼女たちのいるフロアを激しい揺れが襲う。

原因はすぐに判明した。

彼女たちのすぐ下の床が盛り上がり、そこからガジェットⅢ型が彼女たちに向けてアームを伸ばしていた。

すぐに飛び退いて回避しようとする二人だったが、シャツハが飛び退く直前、壁から飛び出してきた青髪の少女——セインが彼女の身体に抱き付きその勢いのままさらに反対側の壁に飛び込んでいった。

「シスターツ!!」

(フェイト執務官、こちらは無事です、大丈夫。

戦闘機人を一名、確認しました。

この子を確保してからそちらに合流します)

フェイトはすぐさまⅢ型を二つに切り裂き、シャツハに通信を繋げる。

すると、返答はすぐに返ってきた。

安堵の息を吐くフェイトだったが、すぐに聞こえてきた手を叩く音に反応して振り返る。

「この区画に辿り着くまでの予想タイムよりも三分も早いとは。

さすがだよ、フェイト・テストアロツサ・ハラオウン執務官」

そこいたのは、白衣を着た男。

このラボにいる人間で、傍らに二人の戦闘機人を連れていているということと、彼女の頭なの中に記憶されている男の顔が一致した。

「ジェイル・スカリエツティ……ッ!」

「そうだ、私がジェイル・スカリエツティだ。

以後、お見知りおきを」

恭しく一礼する男に対して、フェイトは警戒を強める。

「さて、こちらとしても君たちに話したいことが多くあるんだが……。

お茶でもどうかな?」

「ふざけるな……ッ」

笑顔でそう誘うスカリエツティだったが、フェイトはその誘いを一蹴する。

「ふむ……。

まあ、私から出されたお茶など、普通なら飲むわけがないか。

とりあえず、こちらにも君たちに話しておきたいことがあるのだが

？」

「ジェイル・スカリエツティ。

貴方には逮捕状が出ている。

話したいことなら、然るべき場所で話してもらおう」

「こちらとしては、この場で直接話したいところだが……。

致し方ないか……。

トーレ、セツテ」

「なんででしょうか」

スカリエツティが後ろの立っている二人に話しかけると、彼の左後方に立っていたトーレが彼に尋ねる。

「私はこの奥で最後の準備を進めておく。

その間に、彼女の相手を。

もちろん、全力でね」

「了解です」

トーレの返事に頷き、スカリエツティは通路の奥へ向かう。

そんな彼にフェイトは声を飛ばす。

「待て、スカリエツティッ!!」

「逃げる気はないよ。

私を捕まえたいのならば、その二人を倒してからにしたまえ」

スカリエツティは振り向きながらそうフェイトに投げかける。

「とはいえ、彼女たちの能力は折^ちり紙付きだ。

君でも、本気を出さなければ負けるかもしれないねえ」

「クッ……!」

彼の言葉にフェイトが苦虫を潰したような表情を浮かべるのを見て、スカリエツティは楽しそうに笑いながらドアの向こう側へ消えていった。

「そう言うことです、フェイトお嬢様」

「ドクターを捕まえるのならば、私たちを倒してから」

「……わかった。

貴女たちを倒して、スカリエツティを捕らえる。

バルディッシュ」

フエイトの声に続き、バルドイツシユから薬莖が吐き出される。

高濃度のAMFの中で霧散していた魔力を補充するように、バルドイツシユの刀身が一際輝く。

「それでこそですッ!!」

「ハアーツ!!」

飛び出すフエイトとトーレ。

トーレの援護のために、得物を構えるセツテ。

超高速の戦いの幕が、今切つて落とされた。

阻止限界時間まであと——二時間五分

ティアナルート 第三十話

「シュートツ!!」

『Divine Buster』

ゆりかごの内部を飛翔するなのはは、前方に現れたガジェットの群体を砲撃で一掃する。

なのはは、ガジェットの爆発によって撒き散らされた破片の中を躊躇わずに突き抜け、煙の向こう側に出る。

「レイジングハート、ヴィヴィオのいると思われる場所までどのくらいかな?」

『この進行速度ならば十五分といったところですよ』

「なら、このまま行くよ……!」

レイジングハートからの答えに頷きなのはは前を向く。

その時、頬に鈍い痛みを感じた彼女は手でその部分を拭くと、血がべつとりとついていた。

先ほど、ガジェットの残骸の中を突っ切った時にできた傷である。

『マスター、治療は?』

「かまわないよ。」

この程度ならしばらくすれば傷口はふさがるから」

女としては、顔に傷が残るのはうれしくないが、今はヴィヴィオを救うという最優先目標があった彼女にとって、頬の傷は気にするほどのものでもなかった。

「それに、ヴィータちゃんとも約束したしね。」

ヴィヴィオを助けるまで、無駄な魔力は使いたくない」

『了解です』

なのはは、ゆりかごに突入し、動力炉に向かったヴィータの言葉を思い出していた。

ヴィヴィオを救って、無事にみんなで六課に戻る。

その一つの約束を守るために、なのはは先を急いだ。

「クアットロ、高町なのはは予想通りのルートを来てるよ」

その様子をモニターから見ているダイエチは、部屋の中央に位置する玉座に眠るヴィヴィオのそばでガジェットへの指令を飛ばしているクアットロにそう告げる。

「あらく、やっぱりく？」

ヴィヴィオ
陛下の準備はまだなのよね〜」

「ガジェットによる足止めは？」

「今のエースオブエースにガジェットごときで足止めになると思う？」

「思わない」

即答するダイエチにクアットロは苦笑しながら「そうなのよね〜」
と言いながらパネルを操作する。

「それじゃ、最後の追い込みに入るからダイエチちゃんは予定通りに」
「了解。」

「ちゃんとここまで来るようにすればいいんだろ？」

「お願いね〜。」

しばらくは私はこっちに付きつきりになるから、ガジェットの援護は出来ないけど……」

「ガジェットはいても邪魔になるから丁度いい。」

「それじゃ」

ダイエチはそう言って足元に置いていたイノームスカノンを担ぎその部屋を出ていく。

「さくと、それじゃあと少しで終わりますからね〜。」

それまでゆっくりとおやすみくださいな、陛下」

玉座で眠るヴィヴィオを見つめるクアットロ。

その目はまるで——だった。

ゆりかごから離れた空域で、フリードに乗ったキャロは、ガジェットII型に乗って空を駆けるルーテシアを追っていた。

「シューティンググレイツ!!」

「……ッ」

キャロの放つ魔力弾と、ルーテシアの魔力で構成されたナイフが衝突し、爆発する。

「なんで、こんなことするの……ッ?」

キャロの呼びかけにルーテシアは無言でナイフを射出する。

フリードが急上昇と急降下を繰り返し、誘導を乱されたナイフは互いにぶつかり、空に虚しい火花を上げる。

「何か、理由があるのならッ!!」

「——ッ!!」

それでも呼びかけを続けるキャロだったが、ルーテシアはその言葉に応じることなくナイフを三度射出した。

呼びかけに集中していたキャロは、反応が遅れ、障壁を張るがナイフの爆発によってフリードの体勢が大きく崩される。

その隙を逃すルーテシアではなかった。

とどめと言わんばかりにこれまで以上に数を増やしたナイフをキャロに向けて放った。

二人が空中戦を繰り返している少し下のビルの間でエリオは腕の突起を刃のように振るうガリユートの攻撃をストラダーダで捌いていた。

「ストラダーダッ!!」

『Beschleunigt』^{加 速}

ガリユートの刃を、後ろに飛び去ることで回避したエリオは、ビルの壁に張り付き、ストラダーダのブースターを噴かせて一気に上昇。

「ハアッ!!」

体勢を立て直したフリードの背に乗り迫りくるナイフを一閃のもとに切り伏せた。

「エリオ君ッ!」

「キャロ、大丈夫?」

エリオは、キャロに怪我がないことを確かめると、ガジェットに

乗ったまま自分たちを見つめるルーテシアを見つめる。

「どうして、こんなことをするんだ。」

君にだって、スカリエツティがしようとしていることはわかっているだろう!？」

「あの人のせいで、多くの人が傷ついている。」

なんで協力しているの？

理由を話してくれれば、手伝えることなら私たちも協力するから
!」

「お願いだから、話を聞いて!!」

ルーテシアには、わからなかった。

自分と同じぐらいの年齢で、管理局員として戦っている二人が。

以前の戦闘で、彼らのことを殺してしまうかもしれないことをしていた自分と話しをしようとする事が。

そして、目の前の彼らのことを見ていると、胸の内に湧いてくるこの苛立ちが何なのか。

「……ッ！」

ガリユー……ッ！」

「——ッ！」

ルーテシアの声に応じて、エリオを追ってきたガリユーがフリードの背に立つエリオに向かっていく。

そんな彼(?)に対して、エリオもまたストラダーを構えて空を走る。

「——ッ!!」

「なんで、何も話してくれないの……?」

残ったキャロに向けてルーテシアは魔力弾を放つ。

だが、その魔力弾は彼女に当たることなく、虚空から現れた鎖に砕かれた。

キャロは俯きながら、言葉を紡ぐ。

彼女の言葉とともに、フリードの周囲に桃色の魔力弾が生成される。

その数——二十。

「言葉にして、話してくれなきゃ……わからないってばあッ!!」
「クツ……!?!」

桃色の光が、青空を切り裂いた。

「——ッ!!」

「クツ!!」

視界の外から放たれた刈り取るような蹴りをスバルは左腕を使い直撃を避ける。

ノーヴェは防御に入ったスバルに攻撃の隙を与えないために続けざまに回し蹴りを放った。

「——ッ!?!」

だが、その蹴りはスバルの左手に掴まれ彼女は彼の成すがままに投げ飛ばされる。

「おおおッ!!」

「グッ……!?!」

体勢を崩しながらも着地したノーヴェはスバルが自分に向けて飛び込んできているのを認めると、すぐに彼に向けてエネルギー弾を放つ。

だが、狙いが正確なエネルギー弾はすべてマツハキヤリバーが張った障壁に阻まれる。

「ハアアッ!!」

「……ッ!!」

懐に飛び込んだスバルはノーヴェに向けて拳を放つが、それをノーヴェは受け止める。

お返しとばかりに反対の塞がれていない腕でスバルに殴り掛かるが、迫りくる拳を、スバルはその腕を掴むことでノーヴェの動きを捕らえる。

「ノーヴェッ!!」

なんのためにまた戦うんだッ!!」

「そんなことは決まっている。」

ドクターの望みのためだ……ッ」

ノーヴェはスバルを蹴り飛ばし、距離が開いたところでエネルギー弾を打ち込む。

「戦闘機人は創られた存在だ。」

創造主のために戦うことの何が悪い」

エネルギー弾がスバルの周囲に着弾し、彼の姿が煙の中に消えていく。

彼をその場から逃がさないために、ノーヴェはさらに追加でエネルギー弾を放つ。

「このっ！」

スバルは自分に直撃するエネルギー弾を見極めて『リボルバーシユート』で彼女の攻撃を相殺する。

だが、ノーヴェの攻撃を撃ち落したときに生じた爆煙の中からノーヴェが飛び出し、彼の身体を蹴り飛ばした。

「ガ——ッ!？」

「私からしたら、お前たちタイプゼロが異常だ。」

お前たちもまた、私たちと同じだ。

創られた存在のはず。

なのに、なぜ自分の意志で戦える?」

蹴り飛ばされた衝撃が抜けきる前に、ノーヴェはスバルの服の襟を掴み、何度も地面に叩き付ける。

二度三度と固いコンクリートの地面に叩き付けられるスバルだったが、何とか彼女の腕を掴み戦闘機人としての膂力で拘束を解き彼女の動きを止める。

「俺が、人間だからだ……ッ！」

確かに俺たちは創られたかもしれない。

だけどなあ……ッ！」

地面に叩き付けられたときに切った額から流れ出る血を気にすることもなく、スバルは目の前の少女に語り掛ける。

「創られた存在、戦闘機人の前に、一人の人間だ！

心で考えることのできる、立派な生き物なんだよ……！

例え創造主の望みだとしても、それを自分の意志で戦うならまだいい!!」

スバルはノーヴェエの瞳を見つめて、言葉を放つ。

「今のお前は、ただの機械と一緒だ!!」

入力されたプログラムを実行するだけの、思考もできない一昔のコンピュータと同じなんだよ!!」

ノーヴェエの視界にスバルの瞳に映る自分の姿が映り込む。

何日も、何日も思考の狭間で悩み抜いた彼女の頬は以前よりも艶も張りも失われ、その瞳は光を失っていた。

「悩んだのはわかるさ……」。

お前がなんで悩んでいるのか、わからない。

けど、なんでそんなになるまで抱え込んだんだよ……?」

スバルの瞳が悲しみの色を帯びる。

そんな彼の表情を見た、ノーヴェエは自分の心が揺さぶられるのを感じた。

「なあ、今からでも遅くない。

戦うのを止めろ。

なんで悩んでいるのか、教えてくれノーヴェエツ!!」

「もう……遅いんだよ……ッ」

「なに……ツア!?!」

ノーヴェエがぼそりと言葉を発したが、スバルがそれを聞き届ける前に、彼女は彼の身体を壁まで投げ飛ばした。

咄嗟に受け身を取ったスバルだったが、彼の目には、ノーヴェエが辛そうな表情でいるように見えていた。

「もう決めたんだよ、あたしはッ!!」

あたしは戦闘機人として命を得た。

だったら、あたしを生んでくれたドクターの夢を叶えるのが、あたしの戦いなんだよ!!」

だから、これ以上私を惑わせるな……ッ!!」

ノーヴェは叫び声とともにスバルに突進してくる。
そんな彼女に対して、スバルは一言、言い放った。

「この……分からず屋が……ッ！」

『Gear thir d.』

Drive Ignition.』

刹那、スバルの周囲に魔力の激流が渦を巻いた。

瞬時にマツハキャリバーの出力が上昇し、リボルバーナックルに装填されている魔力カートリッジに込められた魔力すべてを一気に開放する。

そのあまりにもエネルギーの熱上昇によって、マツハキャリバーは赤熱化し蒸気を上げる。

そんな中でも、スバルは目の前に迫るノーヴェの拳を紙一重で躲し、彼女の腹を蹴り飛ばす。

「ガ——ッ！」

「なんでそこまでこっちの話を聞かないかは知らんが、その考え方はダメだ、ノーヴェ」

蹴り飛ばされたノーヴェはすぐに跳ね起き、スバルに殴り掛かる。

だが、その拳は、人のそれではなく、本能で生きる獣のものと同じだった。

そして、本能で繰り出される拳ほど、スバルにとって見切るの易だった。

「な——ッ!？」

拳を躲し、ノーヴェの懐に飛び込んだスバルは彼女の腹に拳を当てる。

すでにその拳には魔力の収束が完了されていた。

「少し頭冷やせ、この馬鹿野郎が」

『Strike Blast
ストライクブレイザー』

放たれた蒼き一撃は、ノーヴェの身体を呑み込んだ。

ティアナルート 第三十一話

「ほー、あっちも派手にやってるっすね〜」

姿を隠したティアナを探していたウエンディはライディングボードを担ぎ、ノーヴェとスバルの方に視線を向けながらそう呟いた。「さてと、あっちも決着つきそうだし、こっちもさっさと終わらせませうかね〜」

(スバルつちを倒した後のノーヴェのことも心配っすからね〜)

ウエンディは待機させていた十機のガジェットI型改を集める。

「さー、もういい加減に出てきたらどうっすか？」

今出てくる方がまだましな終わり方にできるっすよ〜？」

彼女の呼びかけに、ティアナは答えず、返ってきたのは魔力弾のみだった。

誘導されて発射もとを読ませなかった弾をライディングボードで防ぎながらウエンディはため息を吐いた。

「頑固っすね〜」

まあ、いいっすけど」

彼女の眼が、人特有の熱源を捉えた。

彼女がライディングボードをその熱源が隠れている場所に向けると、周囲のガジェットもその武装のロックを解除し、彼女の照準と同じポイントをマークする。

「それじゃ、おやすみなさいっす!!」

砲口に光が集まり、そして、弾けた。

ライディングボードの砲撃と、デイエチ謹製の改良型のガジェットによる飽和攻撃。

熱源が隠れていた場所は、木端微塵に吹き飛ばされ、当たりには濃い煙が立ち込めていた。

そして、その煙を橙色の光が引き裂いてガジェットを貫いた。

「な——ッ!?!」

ガジェットが爆散する中、ウエンディは煙の中から道が伸びているのを見た。

そして、その道を駆ける橙色の弾丸を。

「間一髪、つてところね。」

クロスミラージュ、ウイングロードの制御は任せるわよ?」

『お任せください』

煙の中から飛び出したティアナはその脚で空を貫く道を走っていた。

『スターキャリバー』。

スバルが、彼女の力となるために、彼が使用していたローラーブーツをアツプデートしたデバイス。

魔力量は並の彼女がウイングロードを万全に使用できるように最新型の魔力変換炉^{マギリングコンバーター}を備えた、彼女の翼。

「さあ、行くわよツ!!」

『Drive ignition』

ティアナの視線が、ウエンディを貫く。

彼女の思考を予測したクロスミラージュによって、彼女の走るべき道が創られ、彼女が走り去ると同時に道は霧散し、霧散した魔力はスターキャリバーのマギリングコンバーターによって新たな道となる。

「ちっ……!」

対するウエンディも、ライディングボードを上昇させる。

互いに銃口を向ける。

そして、その銃口から光の刃が放たれた。

「ちよ、今のを捌くつすか……!?!」

ウエンディは背後に走り去ったティアナに驚きを隠しきれなかった。

彼女の腕に装備したライディングボードの銃口からは人の腕ほどの長さの光刃が伸びていた。

すれ違いざまにそれをティアナに叩き付けようとしたウエンディだったが、対するティアナは、両手に持ったクロスミラージュのうち片方を即座にダガーモードに切り替えてその刃を切り払ったの

だった。

「悪いけど、こっちもやられるわけにはいかないのよッ！」

「上等っすッ!!」

橙色と黄金の軌跡が空を駆ける。

二つの軌跡の間を、いくつもの光が行き交い互いにそれを避ける機動で駆け抜ける。

「しまった……ッ!?!」

だが、それも終わりに近づいた。

ティアナの放った弾丸の一つが、ウエンデイの乗ったライディングボードを撃ち抜いたのだ。

損傷によって飛行能力を失ったライディングボードは、失速し、次第にその高度を下げるしかなかった。

「悪いけど、終わらせるわよッ!!」

『Phantom Blazer』

「ああ……ッ!!」

クロスミラージュから二つの砲撃が放たれる。

ウエンデイはライディングボードを縦のように構えて、防ぐが、損傷したライディングボードの上では衝撃を逃すこともできずに、地面に叩き付けられた。

「クッ……!」

すぐに起き上がり、ティアナを見つけようとしたウエンデイだったが、背後からの声が彼女の耳を叩いた。

「チエックメイト。

まだやる?」

ウエンデイが首を少し動かし、背後を見ると、そこにはクロスミラージュを構えたティアナが不敵な笑みを浮かべていた。

そんな彼女の顔を見たウエンデイは大きいため息を吐き、ライディングボードを放り投げて両手を上げた。

「降参っす。

まったく、とんだ隠し玉っすよ……!」

スターキャリバーが光に包まれ、そして彼女の手になまる。

ティアナはそれを首に掛けながらウエンデイの呟きに答えた。
「そりやそうよ。」

「なんたって、あのスバルが作ったんだもの。
隠し玉としては最高よね」

「デヤアアアッ!!」

ヴィータは、雄叫びとともにグラーフアイゼンを振るい、目の前にいるガジェットⅢ型を叩き潰す。

Ⅲ型が爆散したのを確認するとともに、上がっている息を整えながらポケットの中から残っているカートリッジを取り出す。

「まだ、残ってるな……」

手のひらにあるカートリッジを握りしめ、顔を上げ、その先に続く通路を見る。

「ここまできれば、あとは動力炉まであと少し……ッ!!」

と、そこまで呟いた彼女の背中を悪寒が走り抜けた。

自分の感覚に従い、身を投げ出したヴィータだったが、彼女の背中に一文字の傷が入る。

痛みを堪えながら、ヴィータはすぐにグラーフアイゼンを振るい背後にいた何かを粉碎した。

「くそ、何が……!?!」

背中から響く鋭い痛みを感じながらヴィータは響くような足音を耳にした。

音のする方——動力炉に続く道の先に視線を向けると、そこには、鎌のような腕を持つ四脚の戦闘機械が群れを成して彼女に向かっていった。

「はは、そうかよ……」

「てめえら、あの時の奴の同類か……!!」

ヴィータの記憶の一つに、目の前のそれと合致するものが存在した。

数年前、なのはが撃墜された日。

その時、彼女の背中を貫いたそれ。

ヴィータの中で一つの感情が膨れ上がる。

「こんなところでまた会うなんてな……」

全部、ぶっ潰す……ッ！」

「IS『ヘヴィバレル』発動

最大出力」

デイエチは両手で砲を構え、人の眼では視認できない距離にある通路を見ていた。

ガジェットからの信号の途絶によって、彼女の目標である『高町なのは』の位置はわかっていった。

あとは、彼女に察知されるように砲撃を放つだけ。

そう考え、デイエチは視界になのはが映った瞬間、引き金を引いた。

『マスター』

「わかってる。」

レイジングハート、カートリッジロード」

同時刻、放たれた砲撃を察知したなのははレイジングハートを構え、カートリッジを装填する。

なのはは自分の勘がささやく言葉に従い、もう一つの言葉を発する。

「ブラスター1」

なのはの言葉とともに、彼女の身体から魔力が溢れ出す。

ブラスタ―、使用者とデバイスの限界を超えた強化を施す彼女の切り札。

それを彼女は躊躇いもなく使うことを決めた。

『blast erl, Drive ignition』

「ハイペリオンスマッシュャーッ!!」

レイジングハートから放たれた魔力の奔流は、通路を彼女の魔力光で明るく照らし、デイエチの身体をも呑み込んだ。

「ハアアアッ!!」

「チイー！」

フェイトとトーレの刃が交差する。

フェイトのバルディッシュとトーレのインパルスブレード。

自然、バルディッシュの方がトーレのインパルスブレードを押し返す。

トーレの体勢が崩れた瞬間を狙って切り込もうとするフェイトだったが、横合いから彼女を挟み込む機動で向かってくるブーメランブレードを避けるために後ろに飛び退く。

「……………」

フェイトは自分を間に挟んで立つトーレとセツテへの対抗策を頭の中で弾きだしていた。

(この先に、スカリエッティがいるけど、この二人を抜けないと。

だけど、このAMFの中での戦闘は……………)

全力で行けば、抜けられるかもしれないけど、そうしたら、なのはたちの援護に……………いや)

「バルディッシュ」

『Plasma Lance』

フェイトの眩きと同時に、バルディッシュによって彼女の周囲に魔力弾が生成、即座に彼女の周囲で爆発し、その姿をトーレたちの視界

から消した。

「クッー」

「血迷ったか……っ？」

彼女の突然の行動に眉を顰めたトーレだったが、煙の中から彼女の羽織っていた上着が飛び出し、それに対してセツテが反応し、得物を投げつける。

「なに……!?!」

だが、そこに彼女の目標はいなかった。

そして、セツテが己の得物を一瞬とは言え手放したタイミングを彼女が見逃すはずがなかった。

「フルドライブ」

『R i o t B l a d e s e t』

突然の魔力の膨大にトーレは目を見開く。

そして、彼女の目の前でセツテが壁に叩き付けられた。

「セツテッ!!」

トーレが声をかけるが、壁際に倒れたセツテは返事をする事はなかった。

「意識を刈り取っただけ、命に別状はない」

「フェイトお嬢様……」

本気というわけですか」

トーレは目の前に降り立ったフェイトを見て、笑みを浮かべた。

彼女の前に立つ者は、自分の全力をぶつける相手にふさわしいと改めて感じたからだ。

だが、フェイトは首を振った。

「まだ、本気じゃない。」

「だけど、出し惜しみはしない」

（そうだ、私はここでスカリエッティを捕まえる。

なのははヴィヴィオを、はやてはゆりかごを、皆はみんなのやるべきことを。

だから、私は信じるだけ）

一度目をつむり、静かに息を吐く。

自分の中から、焦りや怒りといった余計なものをすべて吐き出す。
そして、一言。

「リミットブレイク」

『R i o t Z a m b e r D r i v e i g n i t i o n』

バルディッシュの低い音声とともに、彼女の周囲にさらに魔力が溢れ出し、渦を巻く。

高濃度のAMFの中での魔力の奔流に姿を隠したフェイトが、新たな力を身にまとう。

その姿を見たトーレはさらに笑みを深くした。

「悪いけど、一瞬で蹴りをつける」

「望むところ、と言わせてもらいます。」

IS、ライドインパルスッ!!」

フェイトが両手に握った二本の長剣を構える。

トーレがその足元に金色のテンプレートを出現させ、その身体に力を溜めこむ。

「いぎッ!!」

「……ッ!」

刹那、閃光が走る。

互いの位置関係を入れ替えたところで、勝負はついていた。

フェイトの持つバルディッシュの二振りの長剣の片方の魔力刃が砕け散る。

そして、トーレのインパルスブレードがすべて切り落とされた。

「さすがですね、フェイトお嬢様。」

どうぞ、先にお進みください」

「あとであなたたちにも話を聞かせてもらおう。」

そのつもりで」

フェイトは、トーレの方を振り返らずにその場から走り去っていった。
た。

彼女が去った後、トーレはその場に座り込み、先ほどの一撃を思い返す。

「まさか、片方の長剣で私の攻撃をすべて凌ぎ切るとは……。」

上には上がいるのだな……」
悔しそうに呟く彼女の顔は、嬉しそうな表情を浮かべていた。

「ねえ!!」

戦っている理由だけでも、教えて!!」

「あなたに話すことなんてない」

ガジエツトに乗ったルーテシアの周りに魔力刃が浮かび上がり、正確にキヤロへと放たれた。

「……ッ!!」

キヤロは自分に向かって放たれたナイフを障壁を張ってやり過ごすが、障壁と衝突したナイフは爆発を起こし彼女の視界を潰した。

「ルーちゃん!!」

「……ッ!」

キヤロの注意が自分から逸れたのを感じたルーテシアは乗っているガジエツトから飛び降り、ビルの屋上に降り立つ。

そんな彼女の後を追うように、キヤロも彼女のいるビルから少し低いビルに飛び降りた。

「どうしても、教えてくれないの……?」

「……私は、私のお願いを叶えてくれるドクターの手伝いをするだけ」

「そんなことのために……ッ!」

「そんなことなんかじゃないッ!!」

キヤロの言葉に、初めてルーテシアが声を荒げた。

そんな彼女の隣に先ほどまでエリオと切り結んでいたガリユアが現れる。

それと同時に、キヤロの前にエリオがストラダーダを構え、ルーテシアとガリユアに視線を向ける。

「あなたたちにとっては、そうかもしれない。

けど、私にとっては、大事なこと」

「それでも！」

「あなたたちは、隣に誰かいてくれたからそう言えるの!!」

「——ッ!!」

「私には、ずっとガリユー達しかいなかった。

ゼストやアギトもいつかはわかれるから……。

でも、ドクターは、私の願いを叶えてくれるって、約束した」

ルーテシアの足もとに魔法陣が現れる。

それと同時に、ガリユーの身体に力が漲り、周囲のビルの上で雷王が現れる。

「それは……!!」

「そんな叶え方、間違ってるよ!!」

「うるさいッ!!」

エリオとキャロの言葉に、ルーテシアは耳を貸さず、その目に涙を浮かべながら言葉を紡いだ。

「私は、もう一人はいやなんだ!!」

だから……、あたしの邪魔をしないでッ!!

白天王「——ッ!!」

「——ッ!!」

ルーテシアの叫びとともに、周囲の地雷王が雷を発し、ガリユーが渾身の一撃をエリオに叩き込む。

そして、ビルの間を通る道路に巨大な魔法陣が出現し、そこから巨大な身体を持つ召喚虫が呼び出された。

白天王。

ルーテシアの使役する最大の召喚虫。

それ、この世界に呼び出された。

「クッ!!」

「エリオ君!!」

ガリユーの一撃をストラダーで受け止めたエリオだったが、その力の差に徐々に押されていた。

彼は、駆け寄ろうとしたキャロを言葉で制す。

「キャロ、君はルーテシアを！」

「でも!!」

「あの子は、寂しいだけなんだ!!」

止めてくれる人がいないから……!!」

キャロは彼の言葉で、彼が何を考えているのかを理解した。

彼女は、以前までの自分たちと同じ。

だから……。

「ヴォルテールツ!!」

彼女は、その名を呼ぶ。

最強の真竜を。

「コンツ!!」

玉座の間!!」

通路を最大速度で駆け抜けたのはは、ついにその場所に辿り着いていた。

彼女の目の前には、巨大な扉。

一人で開けるには大きすぎるそれを、彼女は砲撃で撃ち抜くことで無理やりこじ開けた。

「ヴィヴィオツ!!」

なのはが玉座の間に飛び込むと、その先には、幼い少女の身体には不釣り合いなほどの大きさの椅子に座り込んだまま意識のないヴィヴィオの姿があった。

「ヴィヴィオ、今助けるから……ツ!?!」

『玉座の間に侵入者を確認。』

ゆりかごの安全確保のため、玉座の間にての戦闘行為を許可。

聖王の鎧、インストール。

《戦闘パターンS》発動』

なのはがヴィヴィオに向けて一步を踏み出した瞬間、彼女たちのいる部屋のどこからともなく、機械の音声が響き渡った。

「レイジングハート、これは?！」

『わかりません。』

ですが、何かよろしくないことがあるのは確実にでしょう』

相棒からの警告に苦虫を潰したような表情を浮かべるのは。

だが、彼女のその表情も長くは続かなかつた。

「ううーうう……あああああーっ!!！」

「——ッ、ヴィヴィオ!!！」

玉座に座るヴィヴィオの身体に、光が集まり、彼女の姿を包み込んだ。

そして、その光が砕け散ると、そこには少女の姿はなく光を失った瞳の女性が立っていた。

「ヴィヴィオツ!？」

「侵入者、確認……。」

「これより、排除を開始する……。」

限界時間まであと——一時間四十二分。

ティアナルート 第三十二話

『Shoot』

キヨウのデバイスから撃ちだされた魔力弾がガジェットを貫き、さらに数体のガジェットのコアを砕いた。

爆発するそれらを傍目に次の標的に照準を合わせるが、その照準を躲すような機動を取ったガジェットに首を傾げる。

「なんだ……？」

ガジェットの動きの変化を疑問に思いながらも、すぐに修正し魔力弾を発射。

今までと同じように、狙いをつけたガジェットを撃ち抜くはずだったそれは、別のガジェットからの砲撃に叩き落された。

「何……ッ!?!」

魔力弾を撃ち落す、などというただの機械であるガジェットがやったことに驚く。

魔力弾を撃ち落したガジェットを一発ではなく、三発の魔力弾で三方向からの射撃で撃ち落とし、周囲を見回す。

「どういふことだ……？」

彼の視界に映ったのは、今までの動きなどとは比べ物にならないガジェットだった。

「でええいッ!!」

同時刻、ゆりかごの動力炉を目指して通路を進むヴィータもまた、ガジェットの変化に気が付いていた。

だが、今の彼女にはそのことを考えている暇も理由もなかった。

振り下ろされたグラーフアイゼンが、ガジェットIV型の鎌を打ち砕く。

(反応が早くなってやがる……がッ!)

「それがどうしたッ!!」

『explosion』

アイゼンに魔力が送られ、その姿を変え、後部にブースターが、先端にスパイクが展開される。

「悪いが、てめえらにこれ以上時間かけられねえ。

速攻でぶち抜くッ!」

ヴィータは、雄叫びを上げながら、ガジェットの中へと飛び込んでいった。

「クッ……!」

迫りくる拳をレイジングハートで受け流す。

だが、ヴィヴィオは受け流された勢いのまま回し蹴りを放つてくる。

それを咄嗟に張った障壁で受け止めるが、魔力によって強化された蹴りなのはの身体を容易く吹き飛ばした。

「ヴィヴィオ……!」

「お願い……、目を覚まして……ッ!!」

「目標、依然抵抗の兆し有り。」

「戦闘パターンSにて排除行動続行」

「ヴィヴィオッ!!」

「どういうことよ、これはッ!?!」

彼女がそれに気づくのは必然だった。

ゆりかごの中心部、システムの根幹をなす部屋。

そこでクアットロはゆりかご内部と周辺のカジエットの操作を担当していた。

だが、それが彼女の制御を離れた。

具体的に言うと、なのはが玉座の間に突入した直後から。

「ヴィヴィオ^{陛下}の身体情報が更新されて……！」

システムエラーッ!？」

クアットロは鍵盤型のキーボードを目にもとまらぬ速さで叩き、様々な情報が映し出されるモニターを凝視した。

そして、一つの結論に至った。

「ゆりかごのシステムが、陛下の意識を操ってる……?!？」

その考えに至った直後、彼女は自分のとるべき行動を始めていた。

「そう言うこと……！」

いいわ、やってやろうじゃないの……ッ!!」

彼女は、かけていたメガネを取り、目の前に浮かぶモニターに集中する。

クアットロの誰にも知られることのない戦いが始まる。

スカリエツティは椅子に座りながら、部屋の扉が叩き切られるのを見て笑みを浮かべ拍手を送る。

「スカリエツティ……ッ！」

「ブラボーだよ、フェイト・テスタロッサ君？」

僕の予想よりも数分早かった」

スカリエツティは扉を切り裂いたフェイトに向けてそう告げるが、フェイトはスカリエツティに警戒の視線を向けるだけで何も答えなかつた。

そんな彼女に対してスカリエツティは肩を竦める。

「さて、せっかくご足労いただいたところ悪いけど、少し話を聞いてもらおうでしょう」

「……話なら、然るべき場所で話してもらおう！」

フェイトはバルディッシュを構えてスカリエツティに向けて飛び出す。スカリエツティが指を鳴らすと同時に、彼女のすぐ真下から真紅のエネルギーで構成された縄が彼女とバルディッシュを絡め取

る。

「私は話を聞いてくれ、と言ったんだよ。」

すぐに終わるから、そこでじっとしておいてくれ」

フェイトが縄をほどこうともがくが、さらに追加で彼女の身体に縄が巻き付く。

「くっ……！」

「さて、ようやく落ち着いて話すことができる。

おっと、その前に……」

スカリエツティがモニターの一つをフェイトの方へと飛ばす。

フェイトは目の前に差し出されたモニターを怪訝な表情で見つめるが、そこに映っていた内容を理解すると同時にその顔には驚きが浮かんでいた。

「これは……！」

「さすがは現役の執務官。」

一目見るだけで理解するとはね」

「どういうことだ、スカリエツティ……ッ！」

フェイトは目の前に座る男と、今まで自分が追ってきた人物。

その二つが同一のモノだとは思えなくなっていた。

「これに載っていることは……！」

「すべて、本当のことだ。」

この十数年、私が突き止め、潰してきた違法研究所の場所、研究目的、成果。

そのすべてのデータだ」

「来たか、ゼスト」

「アポなしですまん、レジアス」

一方、地上本部ではレジアスとオーリス、オーリスの補佐役である

女性が来るべき来客を待っていた。

そして、司令室の扉がゆつくりと開かれ、ゼストとアギトが部屋へと入ってきた。

最も、レジアス自身が彼と会うつもりでいたため、ゼストたちは抵抗という抵抗を受けずにすんなりと司令室までたどり着くことができた。

「お父さん……！」

「オーリス、少し待て」

レジアスは、今にも飛び出しそうなオーリスを制する。

「オーリスは、お前の副官か？」

「ああ、優秀だよ。」

それで、ここに来たということとは

ゼストはアギトを下がらせて、レジアスの前まで歩いて行く。

「俺が聞きたいことは一つだけだ。」

お前の正義は、どうなっている」

「私の正義は今も昔も変わらない。」

ミツドの平和を守る、それだけだ」

「少し、昔話をしよう」

ミツドチルダとは別の世界。

そこに一人の男がいた。

男は、一言でいえば天才だった。

一を聞くことで十を身に着ける。

そんな男だった。

そんな彼には一つの望みがあった。

『人の役に立ちたい』

ごく普通の願いだった。

そして、男はその願いを叶える。

初めて世に出したものは、所謂介護用の補助機械だった。

男は、自分の作ったモノが、人の役に立ち、喜びの声を上げさせることができたことがうれしかった。

男は、見ず知らずの他人の喜びの声を聞きたいと次々に新たなものを作り出した。

そして、そのすべてが多かれ少なかれ、笑顔を生み出していた。

だが、いつの世にも、人の笑顔を作れるものを悪用する者はいた。

男の創りだした介護ロボットは、自立兵器のもとなり、伝染病の予防のためのワクチンは、化学兵器へと転用された。

男の創りだしたものが、人々から笑顔を奪う。

それでも、彼はモノを創り出すことをやめなかった。

笑顔が見たいから。

それだけの理由で、様々なものを創り出す。

しかし、彼は知ってしまった。

自分のいる世界。

それとは別の世界があるということ。

そして、それを遠くない未来、この世界の人々が見つけるであろうことも。

すでに、彼の世界には破滅が広まっていた。

そして、その破滅の波は放っておけば、世界の壁を超える。

彼は一つの決断を下す。

多くの世界を守るために世界を壊すことを。

彼の目論み通り、世界は滅びへの道を一気に駆け降りた。

彼はその世界の技術が外へと漏れ出さないように、狭間を作り上げる。

そして、その罪を受け入れ、その生涯の幕を下ろした。

だが、人というものは彼の想像以上に欲が深かった。

彼が作り出した狭間を超えて、その世界に降り立つ者がいた。

そして、彼の遺伝子情報を入力し、新しい彼を創り出したのだった。

「まあ、彼らにとって、予想外だったことは、彼の記憶にこびりついたものだろうね」

人の笑顔を守る。

現代によみがえった彼——ジェイル・スカリエツティの根つきにあるもの。

それだけが、彼を突き動かしていた。

「だが、私にも失敗はあった」

「お前たちが突入した違法研究所。」

あの時、その場所でスカリエツティの生み出した戦闘機人とガジェットのパフォーマンスという名の研究所の破壊が行われていた」

「どういうことだ……?」

「私がお前たちの隊の行動を押さえようとしていたのは、お前たちが調べ上げた場所のほとんどが、スカリエツティが潰す予定の研究所だったということだ」

七年前、ゼスト率いる首都防衛隊の全滅。

その真相は、研究所での破壊活動を行っていたガジェットが、突入してきたゼスト隊の隊員を攻撃目標だと誤認したためだった。

攻撃を受けた局員は、すぐさまガジェットへの迎撃を開始。

だが、高濃度のAMFの中でまともに戦える魔導師はその当時はほ

とんどいなかった。

結果、ゼストをはじめとしたゼスト隊は、その特別任務での怪我の治療で隊を離れていたミルズを除き全員がM I Aと判定された。

「じゃあ、スバルやギンガのお母さんたちは……！」

「私のミスだ。」

彼らが突入してきた直後に、ガジェットの緊急停止を行ったが、間に合わず、命に関わるほどの傷を与えてしまった。

今は、別の世界で治療し終えているところだ。

もつとも、それで償いができるとは思っていないがね」

「……………スカリエッティ、いくつか聞かせてもらおう。」

あなたの目的はいったい何だ？

ヴィヴィオを攫い、ギンガを狙った理由は？」

「単純な話だよ。」

君たちが保護した少女。

ヴィヴィオと言ったかな。

彼女の身体が酷く不安定だったためだ」

「不安定…………？」

「プロジェクトF。」

彼女はそのなりぞこないの研究で生み出されたんだ。

だから、その身体は普通の人間以上に脆い。

下手をすれば、十年も生きられない身体だったんだ」

「そんな…………!?!」

「だから、レリックと聖王のゆりかごが必要だったんだ。」

聖王のゆりかごは、その名の通り、聖王をコアとして起動する兵器だ。

だからこそ、ゆりかごは聖王の身体を万全なものに整える機能がある。

その機能を使えば、ヴィヴィオの身体も直すことは可能だった」

「それじゃあ、ヴィヴィオは…………！」

「恐らく、高町なのはが救い出していれば大丈夫なはずだ。」

さて、次に、ギンガ・ナカジマの方だが。

君は、彼女とスバル君が戦闘機人だということは知っているだろう？」

「ああ……」

「なら、ギンガ君が始まりの戦闘機人だということとは？」

スカリエツティの言葉に対してフェイトは首を横に振る。

「彼女は、戦闘機人として初めてまともに生きることができた初めての個体なんだ。

スバル君をはじめ、僕の娘たちも彼女のデータを基に生み出された。

だけど、それは裏を返せば彼女は……言い方は悪いかもしれないが、『試作機』ということなんだ」

「試作機……？」

それがなんでギンガを攫おうとした理由になる？」

「試作機ってのはね、どこか不具合がないかなどの問題点を見つけるために作られる物だ。

そして、彼女にもごくわずかだが、その欠陥が見つかった。

小さいものだが、それが原因でギンガ君の全身に負担がかかって、彼女の人のとしていられる時間はほとんど残されてはいなかったんだよ」

「なッ……!?!」

フェイトは彼の言うことに、言葉を失う。

つまり、今も戦闘中のギンガは、無理しているということなのか？

そんな考えが彼女の頭に浮かんだとき、スカリエツティは静かに、だがしつかりと答えた。

「心配しなくてもいい。

本当は彼女の身体を直接治療するつもりだったんだが、それは止められてね。

腹案として考えていた、管理局で僕が一目置いていた人物にそれを頼んでおいた。

彼が私の送ったデータをちゃんと見てくれたならば、彼女の身体に

「ついでには心配ないよ」

「お前はなぜスカリエツティと手を組んだ？」

「奴が、たとえ違法研究所を潰しまわっていたとしても、犯罪者として手配されていたことはお前も知っていただろう？」

「簡単なことだ。」

「奴と直接会って、奴の目が嘘を言っていたなかつた。」

「それだけのことだ」

「それに、と言葉を続ける。」

「奴が昇華させた戦闘機人のシステムは、他にも応用が利く」

「どういうことだ……？」

「お前も地上の局員として働いていたなら分かるだろう？」

「地上の戦力は本局に比べて少ない。」

「それを無理して回しているんだ。」

「局員の中から腕や足を失う者も多く出ている。」

「そんな連中に、対してトップとしてやれるのはそう言うことだけだ。」

「戦闘機人としてではなく、義手義足の代わりとして奴に作らせてもいる」

「レジアスの言葉に覚えがありすぎるゼストは、彼女の答えを聞いて深くうなずいた。」

「彼女の言ったことは、彼にとってもどうにかしてやりたいと思っていただけでもあったからだ。」

「スカリエツティ、貴方の目的はいつたい……？」

「最後に聞かせろ、レジアス。
お前の正義とはいったい何だ？」

「決まっているよ。」

人々の笑顔を守る。

それだけだよ」

「ミッドの平和だ。」

私の正義は最初から最後までそれ一つだ」

(アレ……?)

そっか、あたしは……スバルに負けたんだ……)

ノーヴェエは水の中にいるような浮遊感の中で、ぼんやりとした意識
の中でそう考える。

(人として、か……)

あたしは焦ってたのかな……?)

ノーヴェエは一人、考える。

彼女にとつての、思い人である彼に言われたことを。

(まあ、ドクターの目的はほとんど達成したも同然だし。

ゆっくり考えていけばいいか……)

ノーヴェエは、自分の意識が深いところから浮き上がるのを感じる。

そして、彼女の視線の先に、明るい光が照らし込む。

(まったく、スバルには気付かされてばっかりか。

帰ったら、礼ぐらい言わないと……)

そして、彼女はそれに手を伸ばした。

——ドロリ——

（——ッ!?!）

そして、彼女腕に、何かが巻き付いた。

それは熱く、苦しいという感覚を、ノーヴェの脳に直接叩き込んでくる。

（な、んだよ、これッ!?!）

く、そッ!!

離れろ……ッ!!）

ノーヴェは腕を振るい、それをはらい落とそうとした。

だが、それは彼女の腕から離れるどころか、腕を伝って、肩、胸、足と広がり、そして彼女の顔にまで達しようとしていた。

（熱い、苦しい、熱い、苦しい、熱い熱い熱いアツイアツイ熱いアツイアツイアツ——ッ!!）

彼女の思考はそこで途切れた。

ティアナルート 第三十三話

静寂が部屋を満たす。

すべてを話し終えたレジアスと、彼女の決意を聞き届けたゼストはどちらも口を開くことはなかった。

だが、内線の呼び出し音が静寂を切り裂いた。

「私だ。」

……ああ、わかった。

すぐに向かう」

受話器を少々乱暴に置き、レジアスは立ち上がった。

「レジアス……」

「悪いが、お前と話せる時間は終わりだそうだ。」

私はこれから地上の指揮を執る」

「そうか……ッ！」

「旦那ッ！」

レジアスが彼の傍を通り過ぎた時、ゼストの身体が大きくふらついた。た。

何とかデバイスを杖代わりに膝を着いたが、倒れるのを免れた。

「そんな身体では無理はできんだろうな。」

オーリス」

「は、はい」

「この馬鹿を医務室に連れて行ってやれ」

「レジアス……？」

レジアスの言葉に眉を顰めるゼスト。

それもそうだろう。

先ほどまで、彼は彼女たち管理局と敵対行動をとっていた。

そんな彼を拘束するわけでもなく、医務室に連れていくなど普通では考えられなかった。

「お前にはこの騒動の後にたっぷり働いてもらおうからな。」

こんなところで潰れてもらっては困る」

「しかし……」

ゼストには彼女の言葉に素直に頷くことができなかつた。それも彼が騎士としての精神を持つているからだろう。だが、レジアスはそんな彼にはお構いなしに彼の腕を掴み彼の身体を引き上げる。

「グダグダ言うな。」

今まで私とオーリスを心配させた罰だ。

大人しく医務室で治療を受けろ」

「む、むう……」

彼女の、ゼストの妻としての言葉に彼は今度こそ折れるしかなかつた。

そんな彼にオーリスは静かに肩を貸す。

「いいかオーリス。」

しつかりとつかんでおけ。

今度は逃がさんようにな」

「はい」

オーリスは短く答えて、ゼストとともにその場を後にした。

そんな彼らの後を追つてアギトが飛んでいこうとしたが、彼女の身体をレジアスが掴んだ。

「ちよつと待て、ちんちくりん」

「なにすんだよ……！」

てか、ちんちくりんって何だ!!」

「お前にはやつてもらふことがある」

アギトは彼女のいうことに心当たりがなく、首を傾げるだけだったが、その直後に司令室に入ってきた人物を見て、彼女の言わんとすることを理解した。

「ご無事でしたか、レジアス中将」

「無事も何も、危害を加えるために来たわけではなかったがな」

レジアスは、来訪者——シグナムに向けてアギトを放り投げる。放り投げられたアギトだったが、シグナムにぶつかる前に体制を整えた。

「お前は彼女と一緒にガジェットを落としてもらう。」

スカリエツテイからの資料によると、お前と彼女の相性は抜群だそうだからな」

「……旦那は、どうなる?」

「アギト……」

「心配するな。」

「この医者は優秀だ。」

「しっかりと治してくれるだろうよ」

彼女の言葉に渋々ながらも頷き、アギトはシグナムの傍まで飛んでいく。

「来てもらってすぐですまん、シグナム二尉。」

悪いが、そのちんちくりんに言った通りだ。

「ガジェットの排除、頼めるか?」

「了解です。」

「では、失礼します」

シグナムは、見事といえる敬礼をレジアスに向け、アギトを伴いすぐに司令室を後にする。

そんな彼女たちを見送ったレジアスは一度大きくため息を吐き、言葉をついで。

「それで、お前は どうする?」

「戦闘機人N.O. 2、ドゥーエ?」

「お気づきになられましたか」

「当たり前だ。」

「私を誰だと思っている」

「レジアスは そう言いながら振り向く。」

その先には、金色の長髪を手で払いながら微笑む美女が立っていた。

「それで、 どうします?」

「私も逮捕しますか?」

「そうだな……」

「逮捕はあとだな。」

「この騒動が終わるまでは、私の補佐を任せる」

試すような笑みを浮かべていたドゥーエは、彼女の言葉を聞いて目を丸くして驚いていた。

「悪いが、管理局は人手不足だ。」

「優秀な奴を遊ばせる余裕はないのでな」

「はあ、ドクターとはまた違うタイプの天才ですね、これは……」

ドゥーエの呟きは、誰にも聞かれることはなかった。

「私だ。」

今現在を持って、特務一課の任務を変更する。

新たな任務は……」

「聞いたな、これより特務一課は任務を変更。」

ゆりかご周辺の掃除に向かう」

「蹴散らせ」

「ハアツ!!」

「てえいッ!!」

拳と剣、斬撃と打撃。

閃光と爆音がビルを傷つける中、ギンガとデイドは互いに紙一重の戦いを続けていた。

ギンガの拳をデイドが肘を使って受け流す。

拳を放つという隙を突いたデイドの剣がギンガの腕を掠める。

腕を走る痛みに顔を顰めるギンガだったが、即座に彼女の身体を蹴り飛ばす。

「ちっ……っ！」

「ハア……ハア……」

地面に剣を突きさし、勢いを殺したデイド。

そんな彼女を見ながら、ギンガは己の身体に違和感を感じていた。

（やっぱり、まだ完調じゃなかったかな……）

でも……）

「ふっ……っ！」

（負けるわけにはいかないッ!!）

一瞬でギンガを自分の間合いに捉えたデイドは、両手の剣を横に振るった。

その一撃は、ギンガの意識を刈り取るほどの威力を秘めた必殺の一撃。

「な……ッ!!」

だが、その一撃はギンガには届かなかった。

横薙ぎに振るわれた剣は、ギンガの肘と膝に挟まれ、砕け散っていた。

戦闘機人としての、反射があればこそその芸当だった。

「ごめんね、少し痛いかもッ!!」

『Knuckle Bunker』

ギンガの左腕のナックルから二発の薬莖が装填される。

距離を取ろうとしたデイドの左腕を右手で掴み、動きを止める。そして、魔力を纏った、一撃が放たれた。

「ハア……ハア……」

ギンガは、ちょうど反対側の壁に叩き付けられたデイドが、起き上がらないのを確認して大きく息を吐いた。

ここ一番の大勝負に勝った。

その事実が、彼女からある一つのことを忘れさせていた。

そう、彼女の相手は、一人ではないということ。

『マスターツ!!』

「——ツ!?!」

緊張の糸が切れていたギンガは、ブリツツキヤリバーからの警告に一瞬遅れて反応する。

そんな彼女の視界に映ったのは、緑色のエネルギー弾だった。

「クツ……!!」

エネルギー弾が爆発する直前にその場を飛び去ったギンガだったが、エネルギー弾は続々と彼女に迫ってくる。

そして、そのうちの 하나가、痛んだビルの柱を吹き飛ばした。

それは必然だった。

先ほどまでの戦いで、彼女のいるフロアはいつ崩れてもおかしくない状態だった。

そんな中、柱の一つが砕かれたことで天井が崩落しギンガの左腕と脚を鉄筋が挟み込むのも必然だった。

「…………ツ！」

「ようやく捉えた」

何とか鉄筋をどかさうともがくギンガだったが、そんな彼女の目の前にエネルギーを手のひらに集中させたオットーが舞い降りてくる。

「これで、終わりにする。

デイドも助けないといけないし……」

オットーの手から閃光が放たれる。

だが、その閃光はギンガの右手に弾かれた。

「な…………ツ」

「ねえ、貴女。

オットーって言ったかしら？」

オットーは即座にエネルギーを収束させるが、それよりも早く、ギンガの右手が彼女の方に向けられる。

「こんなこと、聞いたことないかな？」

オットーは、向けられた右手からの反応を捉えた。

だが、同時にありえないという思いも抱いた。

そのエネルギー反応は、どこまでも自分のIS^もと酷似していたから。

「できる女つてのはね……。

隠し玉持つてるのよ……ッ！」

そして、オットーの顎を撃ち抜いた。

「痛い……！」

オットーの意識を刈り取ったことを確認することすらも忘れて、ギンガは何とか抜け出した左手で右肩を押さえる。

押さえた右肩からは火花が上がっており、周囲に焦げくさい臭いを撒き散らしていた。

「やっぱり、ちよつと無理があつたかな……ッ！」

そう、彼女がオットーに向けて行ったエネルギー放射は、本来の使い道にはないものだった。

そして、本来の使用方法にないものを使った場合のモノの末路は決まっている。

「この腕も、もうダメかな……？」

申し訳なさそうにギンガは呟く。

だが、彼女の表情は次の瞬間、凍り付いた。

彼女のいるビルが崩れ始めたのだった。

今まで周囲に結界を張っていたオットーが意識を失ったために、結界が消え去り、ビルの崩壊が始まったのだった。

「ク……ッのお……！」

片手で鉄筋を持ち上げ何とか抜け出そうとするが、鉄筋はビクともしない。

そして、彼女の丁度真上の天井が崩れた。

(ツ……!!)

崩れてきた天井、ギンガにはそれがゆっくりと映っていた。頭を左手で庇おうと、掲げる。

(アレ……?)

死を覚悟したギンガだったが、いつまでたつても、天井が落ちてこないのを不思議に思い、瞑っていた瞼をゆっくりと開いた。

「間に合ったようだな」

そこには立派な褐色の筋肉があった。

天井を受け止め、彼女を救ったのは、立派な犬耳を持った男——ザファイラだった。

「ザファイラさん……?’」

「ああ、間一髪といったところだったな」

ギンガの脚を挟んでいる鉄筋を持ち上げ、彼女を救い出したザファイラは周囲の状況を確認する。

「これは、すぐに出ないとまずいな。」

「シヤマル、戦闘機人とギンガの回収を頼む」

『わかったわ、座標の特定に少しかかるから、それだけ持ちこたえて』
「承知した」

念話での指示を受けたザファイラは腕を交差させて、床に叩き付ける。

「縛れ、鋼の軛ツ!!」

彼の声とともに床や壁から拘束条が崩れかけていたビルを受け止める。

だが、すでに限界を超えていたため、揺れは少しずつ激しくなっていた。

「シヤマルツッ!」

『了解ッ!』

ギンガたちはその場から転送される。

彼女たちが去った直後、ビルは跡形もなく崩れ去った。

ガジェットの動きが変わった。

その報告を受けたキョウは、周りの魔導師を下がらせ、一人で周囲のガジェットを撃ち落していた。

しかし、ゆりかごも一人でかなりの数のガジェットを落としているキョウを外における最大級の脅威だと認識したのか、彼の周囲には彼が撃墜した以上の数のガジェットが集結していた。

「シュートツ!!」

今もまた、キョウの構えた杖の先から放たれた誘導弾が次々にガジェットのコアを的確に撃ち抜く。

それでも、ガジェットはひるむことなく彼に向けてレーザーやミサイルの嵐を放つ。

「くそッ、数が多すぎる……ッー!」

『警告、六時方向、敵機三十』

迫りくるレーザーの雨を隙間を縫うように回避し、ミサイルの嵐を砲撃で風穴を開けることで抜け出す。

だが、敵の攻撃を回避した彼の行動を予測したガジェットが即座に彼の背後から攻撃を仕掛けようとする。

「チィ……!」

振り向く暇がないと直感で感じたキョウは、左手の杖を脇に差し込み後ろへ砲撃を放とうとする。

「サイズ」

『コピー、バルディッシュ』

だが、彼が砲撃を放つよりも先に、真紅の刃がガジェットを切り裂いた。

「教官生活で鈍ったか、キョウ・カーン」

「誰が鈍ったって、イングレット・ミルズ」

真紅の鎌を持って彼の前に現れたのは、特務一課の部隊長であり、訓練校時代の彼のパートナーであったイングレット・ミルズだった。

キョウはミルズの言葉に頬を引き攣らせながらデバイスを肩に担

ぐ。

「お前だ。」

訓練校時代のお前ならこの程度、どうということとはなかっただろう」

「言ってくれるなあ……おい。」

「だったら、此処で勝負つけるとするか？」

「いいだろう。」

「お前との勝負は訓練校時代には決着がつかなかったからな。」

「ここで白黒つけるか」

互いにガジェットの警戒をしながらも、二人は久しぶりに会えたパートナーとの会話を楽しんでいた。

「負けた方は奢りだ」

「いいだろう。」

「どちらが多く潰すか、でいいな」

「おう」

二人は合図も無しに互いの背後にいる敵に突っ込んだ。

そして、彼らの前に立ちはだかるものはすべて叩き落され、切り裂かれ、撃ちぬかれた。

今の彼らにとって敵はこの場所にはいなかった。

そんな彼らの活躍を遠目に見て、はやては頬を引き攣らせていた。

「あれ、が特務一課かあ……。」

「なんや、皆化け物みたいに強いやないか……。」

「歩くロストログアが敵わんって思うのはどうかと思うで……。」

彼女の目の前には次々にガジェットを落としていく特務一課の隊員の姿があった。

「彼らの参戦によって、戦域からガジェットが抜け出すことはなくなった。」

「だが、それでもゆりかごから放出されるガジェットの数の方が多

く、彼らがいてようやく膠着状態に持ち込んだといったところだ。
「これは、やっぱり中から潰さんとあかんな。

行こうか、リイン」

「はいですッー！」

はやての言葉に、つい先ほど辿り着いたリインが頷く。

「ユニゾン・インツ!!」

はやての中にリインが溶け込む。

茶色だったはやての髪は白く染まり、瞳も青色に変わっていく。

『魔力安定しています。』

行けますよ!!』

「了解や。」

ロングアーチ00、これよりゆりかご内部に突入するでツ!!」

最後の夜天の主が、飛び立つ。

戦いは終局へと向かいだした。

阻止限界点まで残り————一時間二十五分

ティアナルート 第三十四話

「さて、私の話はこれでお終いだ」

スカリエツティは大きく息を吐きながら、フェイトの身体に巻き付けていた鎖を消し去った。

「スカリエツティ……」

「おっと、同情ならやめてくれたまえ。」

確かに、私の目的は人の笑顔を守るというものだったが、そのために少数とは言え笑顔を奪っていたのも事実だ」

フェイトが言葉を発する前に、スカリエツティは手をかざしながら彼女に言い放つ。

「だから、君は私を犯罪者として扱うんだ」

「……わかった。」

ジェイル・スカリエツティ、貴方を大規模騒乱罪並びに諸々の罪で逮捕します」

フェイトの言葉にスカリエツティは満足そうに頷き、彼女に一つのメモリーを手渡す。

彼の掌の上にあるメモリーを手にとったフェイトそれをバルデイツシュの格納領域にしまい込んだ。

「さつき送ったデータと、私の研究資料のすべてだ。」

今のメモリーと、私の頭の中にしかないものだから、君が持っていてくれ」

「なぜ、私に？」

レジアス中將に渡すこともできたはずだが……」

「そのレジアス中將が、君に預けるように言ってきたんだよ」

彼の言葉に、フェイトは一度だけ会った地上のトップのことを思い出しながら大きくため息を吐くのだった。

「ここか……ッ！」

ガジェットの群れを突破したヴィータは背中の傷から血を流しながらも、ゆりかごの動力炉に辿り着くことに成功していた。

「行けるな、アイゼン」

『もちろんです』

「よし、アイゼンッ！」

『Zerst-rungsform』

ヴィータは肩に担いでいたグラーフアイゼンを構え、カートリッジを三発装填する。

補充された魔力が、アイゼンからヴィータへと伝わり、アイゼンの姿を破城槌へと変化させる。

アイゼンのドリルが唸りを上げ、ブースターが火を噴いた。

「ウラアアアッ!!」

ヴィータの小柄な体からは考えられない力で振るわれたアイゼンは、動力炉を守る障壁に阻まれるが先端に装着されたドリルが唸りを上げて障壁を削る。

短時間の膠着とともに、アイゼンと障壁の間で爆発が起こる。

爆発の衝撃によって吹き飛ばされたヴィータは体制を整えながら動力炉を睨む。

『危険な魔力反応を探知。』

防衛プログラムを作動、非戦闘員は動力炉へ続く通路から退避してください。

繰り返します……』

「ちっ……。」

やっぱ簡単には行かねえか……」

ヴィータは煙の中からその無傷の姿をさらす動力炉と、彼女との間に現れる防衛砲台を見て舌打ちを一つ。

その瞬間、彼女に砲口を向けた防衛砲台から砲撃が放たれた。砲撃から生じた煙に彼女の姿がかき消される。

「だったら、何度でもやるだけだ!!」

アイゼンッ!!」

『了解』

「ぶっ潰すッ!!」

背中から感じる熱い痛みを堪えながら、ヴィータは砲台の群れの中へと突っ込んでいった。

「戦闘パターン、S34」

「ヴィヴィオ……ッ!」

ヴィヴィオの身体から虹色の魔力が溢れ出す。

その魔力は彼女の右腕に収束し、螺旋の回転を始める。

「あれは……ッ!」

「アクティブ」

彼女の右手の魔力を見て、なのはが目を見開く。

その直後、ヴィヴィオが静かな声とともに接近し右腕を突きだす。

だが、その一撃はなのはを穿つことはなかった。

『Restrict Lock』

「捕まえたッ!!」

螺旋回転する魔力の塊は、なのはの顔のすぐ横の空間を貫いていた。

間一髪、その一撃を避けたなのはは、レイジングハートが最速で発動させたバインドが解ける前にヴィヴィオの身体にレイジングハートを突きつける。

「シュートッ!!」

『Short Buster』

放たれた砲撃は、ヴィヴィオの身体を守る『聖王の鎧』に阻まれ彼女の身体に直撃することはなかったが、彼女となのはの距離は離れた。

未だにバインドをほどこくことに意識を向けているヴィヴィオを警戒しながらなのははレイジングハートに話しかける。

「レイジングハート、あれをやろうか」

『身体への負担は?』

「ヴィヴィオを救うためだもの、考えていられないよ」

『了解です』

レイジングハートの言葉とともに、マガジンに残っているカートリッジのすべてを装填する。

愛機に魔力が充満したことを確認したなのはは、大きく息を吸って……

「ブラスター『ちよつと待ったーッ!!』ワンッ!？」

驚きの声とともに彼女の身体に魔力が流れ込んできた。

なのはは、いきなり大声で叫んできた彼女——クアットロを睨みつけた。

『あらら、ちよつと遅かったか』

「貴女はッ!!」

なのはは目の前のヴィヴィオに警戒しながらモニターに映るクアットロに言葉を投げつけようとするが、クアットロが手をかざしてそれを止めさせる。

『すみません』。

こつちにも時間がないので、簡潔にお話しします』

「……」

『沈黙は肯定と受け取るわよ。』

今の彼女、ヴィヴィオはゆりかごのシステムに囚われてる』

「囚われてるもあなたたちがッ!!」

『こつちにも想定外だった。』

だから少し時間をちようだい』

「そう言われて信用するとも……?」

『彼女の意識をシステムから切り離す。』

だけど、それだけだと確実じゃない。

そこであなたに彼女を直接止めてほしい』

「……何分でできる?」

『五分……いや、三分でやれる』

「なら、早く。」

「こつちにも余裕はないから」

彼女の言葉にクアットロは返事も無しにモニターを切った。

「さてと、ヴィヴィオを助ける算段も付いたし、もう一頑張りしようか」

『了解です、マスター』

なのはどの通信を切ったクアットロは、ゆりかごの中枢で大小さまざまなモニターを映し出す。

「さてと、大口叩いたからには、ちゃんとやらないとね……！」

彼女は、そう言いながら鍵盤型のキーボードの上に指を置いた。

「まずはシステムの中枢に潜り込む……！」

抜け穴を探せ、どんなに頑強な城にも隙はある。

抜け穴、抜け道、どんな隙も逃すな……。

隙のできたところから一気になだれ込め……！」

目にもとまらぬ速さで鍵盤を弾く指と、すべてのモニターをしらみつぶしに見るために動く目。

その二つが、たった一つの、抜け穴を見つけた。

「見つけたッ!!」

その隙を逃すクアットロではなかった。

その穴を一瞬だけ広げ、システムの中に入り込む。

余談だが、システムの抜け穴の原因が動力炉の防衛へとリソースを割かれたためだった。

「さあ、ここから本番。」

クアットロの織り成す電子の嘘と幻のショーの開幕よッ!!」

廃ビルが立ち並ぶ廃棄都市区画で、二匹の召喚獣がぶつかり合う。
白い召喚虫——白天王と、黒い召喚獣——ヴォルテール。

二匹の規格外の召喚獣は、その余波を撒き散らしながら戦いを繰り広げていた。

白天王が腕を振るえば、ヴォルテールはその腕を受け止める。

巨大故に動きは緩慢だが、その行動だけで彼らの周囲のビルはその余波を受けて吹き飛ぶ。

そんな中、キヤロは目の前のルーテシアに呼びかけていた。

「もうやめて、ルーちゃん!!」

あなたのその感情は、全部召喚獣^{あの子}たちに伝わって、あの子たちまで傷つける!!」

「あなたたちには、守ってくれる人、大切な人が隣にいるからそう言える……!!」

私は、もう一人はいや……ッ!!

寂しいのはもう嫌なのッ!!」

だが、キヤロの言葉は、彼女の心には届いていなかった。

今の彼女の心を占めるのは、寂しい思いをしながら生きてきた記憶。

そして、その寂しさを埋めてくれる存在、母親であるメガーンの目を覚まさせる邪魔をする彼女たちに対する怒り。

その二つが、白天王やガリユ、地雷王、インゼクトに伝わり暴走と言っていいほどの力を出していた。

「邪魔をしないでッ!!」

「ッ、ケリユケイオンッ!!」

『Boosted Protection』

キヤロはルーテシアが放った魔力による衝撃波を障壁で防ごうとするが、彼女の想定以上の威力を持ったそれを完全に相殺することはできなかった。

衝撃波によって撒き散らされた土煙の中で、キヤロは一つの決断を下すことにした。

「ケリユケイオン、行くよ。」

我が乞うは、疾風の翼。

我に駆け抜ける力を」

『Boost Up Acceleration』

ケリユケイオンから桃色の魔力が彼女の身体を包み込む。

キャラはさらに言葉を紡ぐ。

「我が乞うは、城砦の守り。

我に清銀の盾を」

『Enchant Defence Gain』

さらに桃色の魔力が彼女の腕に纏わり、桃色から赤く輝きはじめる。

「猛きその拳に、力を与える祈りの光を」

『Boost Up Strike Power』

ダメ押しとばかりに、ケリユケイオンが輝き、彼女の魔力が拳を優しく包み込んだ。

「行くよ、ルーちゃんッ！」

煙が晴れると同時にキャラはその場を駆け出した。

ルーテシアはそれに反応してダガーを射出するが、キャラは自己ブーストによって強化されたスピードでそのダガーの隙間を縫ってルーテシアに迫る。

(スバルさんに教わった、たった一つのこと……ッ！)

ダガーを凌いだキャラは防御の強化を行った腕を顔の前で構えてルーテシアの放った魔力放出の中に突っ込む。

『いいか、キャラ。』

後方支援フルバックと言っても、絶対に敵と真正面から戦わないなんてことはない』

『いざってときのために、接近戦で一番大事なことを教えておく。』

相手も支援魔法を主軸にしている魔導士の時限定だが、何とかなるはずだ』

『大事なのは、飛び込みと、間合いと……』

「飛び込みと間合いと……ッ」

「——ッ!?!」

ルーテシアの放った魔力放出の波の中から飛び出したキャロが彼女の懐に飛び込む。

『「気合だッ!!」』

ルーテシアの間合いの内側に入り込んだキャロは、その拳を思いっきり彼女に叩き付ける。

キャロの拳が届く前に、ルーテシアは障壁を張ったが、強化を施されたキャロの拳はその壁を容易く打ち砕き、ルーテシアの腹部に辿り着いた。

「ケリュケイオンッ!!」

『Magic absor^{魔カ}ption^取』

キャロの言葉とともにケリュケイオンが接触部からルーテシアの魔力を吸い出す。

すでにかなりの魔力を消費していたルーテシアは、急激な魔力流出によって、その意識を深く閉ざした。

「ルーちゃん……」

意識を失い倒れ込む彼女の身体をキャロは優しく抱き、そっと床へと寝かせた。

そして、ルーテシアの意識が失われると同時に、白天王や地雷王、インゼクトは沈黙した。

「エリオ君は……!」

キャロとルーテシアの戦っていた場所から少し離れた場所で、黄色と紫の光が交差する。

「もうやめるんだ、ガリユーッ!!」

「……………ッ!!」

ビルの上に降り立ったエリオはストラダーダを構えながら目の前のガリユーに叫び続ける。

だが、ガリユーはエリオに向けてその腕の刃を向ける。

「クウ……………」

「——ッ!!」

ガリユーからの攻撃を何とか捌くエリオだったが、彼はガリユーの動きに違和感を感じていた。

先ほどからガリユーの動きが鈍っている。

具体的には、周囲から聞こえていた雷の音が鳴りやんだころから。

「ガリユー、君はッ！」

「——ッ!!!」

エリオがたどり着いた一つの可能性。

それは彼がルーテシアからの魔力を受け取っていないということ。魔力による補助が無くなって、彼の動きは一瞬だけ鈍っていた。

だが、それをガリユーは自分の命を削り取って身体能力を上昇させている。

「もうやめるんだ、ガリユーッ!!」

このまま戦い続ければ、君はッ!!」

エリオが必死に呼びかけるが、ガリユーはそれを聞こうともしない。

それどころか、さらに自分の身体から触手や刃を生み出し、雄叫びを上げる。

ガリユーの胸の内には、一つの思いだけ存在していた。

主であるルーテシアの笑顔を自分では生み出せない。

それを彼は理解していた。

ならば、彼女に幸せを感じてもらうためには何をすればいいのかを彼は考えた。

はじめは彼女とほかの召喚虫だけだったために、一つも考えが浮か

ばなかった。

だが、ゼストやアギト、スカリエツテイやその娘たちと出会ったことで彼の中で一つの答えが浮かび上がった。

自分では笑顔を与えてあげられない。

ならば、その笑顔を与えられるように彼女を支える。

彼女の邪魔をするものは、自分たちが取り除く。

その思いだけで今、彼は立っていた。

「ガリユー……」

エリオは、身体中から血を流しながらも戦う意思を見せるガリユーにストラーダを向ける。

今の彼には、ガリユーの思いが伝わっていた。

例えば言葉を交わすことができなくても、戦うことしかできなくても、ガリユーの戦う意味を知った。

そして、戦う意味を知ったからこそ、エリオは彼を止めると決めた。

「君の思いはわかった。」

けど、君が傷ついたら、悲しむ人がいる。

だから、僕は君を止める……。

ストラーダ、フルドライブッ!!」

『Drive ignition』

ストラーダから四発の空薬莢が排出される。

カランカランと薬莢が落ちる音が響く中、ストラーダの穂先から推進器^{ブースター}がせり出し、切っ先が二つに割れた。

『ストライクフレイム展開』

二つに分かれた切っ先の間に黄色の魔力刃が生み出される。

エリオの魔力を使用したそれは、彼の電気変換の性質を受け継ぎ、ストラーダは雷を纏う。

「行くよ、ストラーダ」

『了解です、マスター』

「ッ!!」

エリオがストラーダを構えて、飛び出す。

彼に対してガリユーもまた飛び出す、彼の突き出した刃はエリオのいた空間を切り裂くだけだった。

「——ッ!?!」

エリオの姿を見失ったガリユーはすぐさま彼の姿を捉えようとするが、その前にガリユーの身体は衝撃に襲われていた。

「ハアッ!!」

「——ッ」

ビルの屋上を何度もバウンドしていく彼は、直前まで自分がいた場所にエリオを見つけた。

だが、その直後彼の姿が掻き消え今度はガリユーの真後ろに現れた。

何とか体勢を立て直そうとするガリユーだったが、その前にエリオの振るうストラーダが彼の目に映った。

ガリユーは振るわれたストラーダによって、その身体を上空に打ち上げられる。

打ち上げられた衝撃を逃すこともできない状態だが、彼の目にはすでに自分よりも上に跳び上がったエリオの姿があった。

「——ッ!!」

「でえいっ!!」

苦し紛れに放ったガリユーの攻撃は、ストラーダで払われ、さらにエリオの踵落としがガリユーの身体にめり込み、彼を屋上に叩き付ける。

だが、エリオの攻撃はそれで終わりではなかった。

「まだッ!!」

ガリユーが立ち上がるよりも早く、彼の身体を再び上空に蹴り上げる。

そして彼を追う形で跳び上がったエリオは、ストラーダのブースターを吹かして彼を追い抜きざまに切り抜ける。

切り抜けた先には、黄色の魔力光の障壁。

その障壁に足を着け、方向を変えてさらに跳び上がる。

「もつと速くッ!!」

もつと、もつともつとツ!!」

何度もガリユートの身体を切りつけ、蹴り上げ、叩き落とす。

彼の軌跡は、彼の魔力光と相まって、雷のように昇って行った。

「これでツ!!」

そして、十分な高さまで跳び上がったエリオはストライダーを上段に構え、遅れて打ち上げられてきたガリユートに向けて振り下ろした。

「終わりだーッッ!!」

「——ッ!!」

叩き込まれた槍は、ガリユートの刃を打ち砕き彼の身体をビルの屋上に叩き付けた。

その勢いはとても強く、ガリユートの身体は屋上をぶち抜き、その下のフロアまでたどり着いていた。

「——ッ!」

だが、ガリユートはまだ立ち上がる。

すでに満身創痍と言ってもいい状態だが、彼にとっても負けられない理由があった。

そして、彼が顔を上げる。

その先には、落ちてくる勢いを乗せた斬撃を振り下ろすエリオがいた。

「紫電一閃ッ!!」

ダメ押しの一撃を受ける。

すでにボロボロだったガリユートはその身体を横たえることとなった。

「おやすみ、ガリユート」

意識を失う前に、ガリユートの耳に届いた言葉は、彼を気遣う言葉だった。

ティアナルート 第三十五話

ゆりかご阻止限界点まであと——一時間七分。

残された時間の中、ゆりかごの動力炉の防衛砲台をすべて破壊した
ヴィータはグラーフアイゼンを引きずりながら動力炉の前までたどり着いていた。

「——ッ、アイゼンッ!!」

『了解』

ヴィータは身体中にできた傷から血を流しながらも、アイゼンを掲げて目の前にある標的を見続ける。

彼女の言葉とともに、すでにその機体に輝を走らせているグラーフアイゼンは、四発のカートリッジを惜しげもなく装填する。

「ふ……ッ!!」

アイゼンの姿が、基本形態である槌から、破城鎚へと姿を変える。

その直後、短く息を吸って止める。

そして、ヴィータは跳んだ。

すでに魔力が枯渇し始めている彼女は、飛行にも魔力を最低限しか回さず、すべてを一撃に回すという賭けに出た。

魔力による最低限の補助を受けた跳躍で、彼女の身体は動力炉の上まで踊り出た。

自分の真下に獲物があることを確かめるまでもなく、彼女はアイゼンを上段に振り上げる。

背中への傷が、彼女の神経を刺激するが、わずかに顔を顰めるだけでそのまま……

「ツェアシユテールングスハンマアアアッ!!!」

振り下ろした。

振り下ろされたグラーフアイゼンのドリルと、動力炉を覆う障壁が削りあい、火花を起す。

障壁との干渉で、グラーフアイゼンのドリルに走った輝がさらに広がる。

「ッ、ブチ貫けエエエッ!!!」

彼女の咆哮とともに、パリンとアイゼンのドリルが砕けた。

「ツアア……ッ!!」

アイゼンのドリルが折れるとともに、彼女の身体は障壁から起こった爆発で吹き飛ばされる。

すでに魔力を使いきった彼女は、体勢を整えることもできず、真つ逆さまに通路へと落ちていく。

朦朧とする意識の中、ヴィータは動力炉の障壁が健在であることを目にして、その目に涙を浮かべる。

「ごめん……みんな……!」

ゴメン……はやて……ッ!」

そんな彼女の涙で潤んだ視界の端を、黒い羽根が舞った。

ヴィータがそれを目にしたとき、真つ逆さまに落下していたヴィータの身体がふわりと何かに受け止められる。

「謝ることなんかない」

「……ああ」

ヴィータは、潤んだ視界でもわかった。

自分を受け止めてくれた者が誰なのか。

「うちの自慢の騎士、鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵くろがねグラーフアイゼンが、全身全霊で打ち込んだ一撃や。

それで砕けんものなんて、この世界にあるわけないやろうが」

「はやてえ……!」

ヴィータを受け止めた人物——はやての目にはしつかりと映っていた。

砕けたアイゼンのドリルの先端が、障壁に食い込み、亀裂を生み出していることに。

そして、彼女が腕の中にいるヴィータに告げると同時に、そこを起点として、障壁は粉微塵に砕け散った。

「さあ、ヴィータは少し休んどき。

あとは」

「私たちがやりますからッ!!」

ゆつくりと通路に降り立ったはやては、ヴィータを壁際に座らせ、

そう伝える。

ヴィータがその言葉を理解するよりも早く、はやての帽子にしがみついていたリインが飛び出してそう言い放った。

「さてと、いこかりイン」

「はいですッ!!」

「ユニゾンインツ!!」

ヴィータに背を向けてはやてとリインは、むき出しになった動力炉を前に一つになる。

リインがはやての中に入ると同時に、はやての茶色の髪は白く染まり、深い蒼色の瞳は、明るい空色へと変わっていく。

「出し惜しみはなしや。」

最初っからフルパワーでいくで」

『はいです!』

手加減容赦情け無用です!』

はやてが右手に持った杖『シユベルトクロイツ』を掲げ、左手に持った魔導書『夜天の魔導書』のページが勢いよく開いていく。

『魔力充填完了ですッ!!』

「よっしゃ、いくでえ……!」

リインの言葉とともに、夜天の魔導書から白い光が溢れ出し、シユベルトクロイツの周囲に三つの高濃度の魔力収束体が生成される。

『響け終焉の笛、ラグナロク!』

紡がれたのは、破滅の言葉。

三つの収束体から放たれた魔力の奔流は、はやての目の前で一つに合わさる。

『一点集中ッ!』

ブラストシュートオツ!!』

神々の黄昏を意味するその一撃は、ヴィータによって障壁を失った動力炉を一瞬で吹き飛ばし、反対側の壁を突き抜け、ゆりかごに風通しのいい通路を一つ創りだした。

『Time up.』

Gear third.

Set off』

「ハァー……ッ！」

渾身の一撃を、ノーヴェエに叩き込んだスバルは、マツハキヤリバーの声を聴いてようやく大きく息を吐いた。

赤熱化していたマツハキヤリバーから大量の蒸気が噴き出され、スバルもまた、リボルバーナックルから空薬莖をすべて取り出し、新しいカートリッジをセットしていった。

「稼働効率は……？」

『103%を突破しました。』

今まで一番の出来栄です』

マツハキヤリバーの言葉にスバルは苦笑を禁じ得なかった。

実際、マツハキヤリバーのギアサードの状態での稼働効率は今まで低いものだった。

そんな結果しか出ていないものを使用して尚、最高の結果を実戦で叩きだせたことにスバルは驚きを隠せえなかった。

「とりあえず、ティアアナの方に……『エネルギー反応増大ッ!!』——ッ!?!」

身体の異常がないかを確認めて、相方の援護ティアアナに向かおうとしたスバルだったが、マツハキヤリバーの警告と同時に背中を走る悪寒を感じてすぐに振り返る。

「ノーヴェエ……？」

そこには、先ほど彼が倒した、少女、ノーヴェエがゆっくりと立ち上がる姿があった。

スバルはすぐに彼女の様子がおかしいことに気づき、呼びかける。

「!!!」

だが、その呼びかけへの返答は、獣と聞き間違えるほどの咆哮だった。

「ノーヴェツ!?」

「ッ!!!」

スバルが声を上げるが、ノーヴェエはその呼びかけには反応を示さず、ジエツトエツジの出力を上げて彼に迫った。

「クツ……!」

「アツ!!」

ノーヴェエの右手が突き出される。

動きは単調、だが、その速度が異常だった。

「なっ!?」

スバルは自分の頬に走った傷に驚愕した。

確かに彼女の攻撃を避けたはず。

だが、実際にはコンマ数秒の差でしかなかった。

「オオオツ!!」

「くそツ!!」

スバルは、次々に繰り出されるノーヴェエの攻撃を捌いていく。

だが、戦闘機人としての身体の反応速度を上回る攻撃は、彼の身体にいくつもの傷をつくる。

頬、腕、脇腹、太ももと言った身体中に走る、鋭い痛みで顔を顰めながらスバルはノーヴェエへの呼びかけを止めない。

「ノーヴェエ!!」

正気に戻れ、このままじゃ……ツ!!」

「ガアアツ!!!」

『Protection』

スバルは苦虫を潰したかのような表情を浮かべながらノーヴェエの目を覚まさせようと呼びかけるが、ノーヴェエには届かない。

わずかな隙に繰り出されたノーヴェエの拳を回避は不可能と判断したマツハキヤリバーが障壁を張る。

スバルの障壁とノーヴェエの拳。

押し合う障壁と拳の間から広がる火花の向こう側、ノーヴェエの瞳を見たとき、スバルは息を飲んだ。

はじめて彼女と会ったとき、スバルはメガネの向こう側に見える彼

女の眼がきれいな金色だったことを覚えている。

だが、今の彼女の眼は赤く染まっていた。

そして、均衡が崩れた。

ノーヴェエの拳が障壁を貫いた。

「ヤバ……ッ!!」

「ウウオツ!!」

障壁が砕け散る。

スバルはすぐに距離を取ろうとするが、ノーヴェエの左手が彼のコートをガツシリと掴んでいた。

自分に向けられた拳が、どれほどの威力を持つのかなど考えるまでもなかった。

衝撃に備えて両腕を交差させて身体に力を入れて衝撃に備える。

『Reactive Purge』

「……ッ!!?」

だが、その衝撃は襲ってはこなかった。

拳が直撃する直前、マツハキヤリバーがロングコート外装に使われている魔力を爆発させたのだった。

爆発の衝撃によってコートを掴んでいたノーヴェエの手は離れ、拳の威力は失われる。

スバルは突然の爆発によって拳の直撃は避けたが、体勢を崩し、地面に倒れ込む。

「ガ——ッ!?!」

「……!!」

すぐさま立ち上がろうとしたスバルだったが、それよりも早く、ノーヴェエが彼の身体に馬乗りになり、彼の首を両手で掴んだ。

スバルは締め上げられる腕を、両手で掴み、意識が落ちるのを堪える。

「ノーヴェエ……ッ!」

「……ッ、スバ……ル……ッ」

「……ッ!!」

気を抜けば失いそうな意識の中、スバルは彼女の瞳に涙が浮かんで

いるのを見た。

『Protection EX』

「……ッ！」

迫りくる拳を桃色の障壁が阻む。

だが、目の前の少女——ヴィヴィオは、お構いなしに拳を叩き付ける。

「戦闘パターンS13」

ヴィヴィオの口から機械的な言葉が紡がれる。

それと同時にヴィヴィオの拳に捻りが加わり、一撃で障壁に亀裂が走った。

「やっぱり。」

レイジングハート」

『Barrier Burst』

あと一撃で障壁が砕け散るというタイミングで振り下ろされたヴィヴィオの拳が障壁に触れる直前、障壁が爆発を起こす。

爆発の威力は『聖王の鎧』によつて完全に防がれるが、爆風によつてヴィヴィオの身体は大きく後ろに吹き飛ばされた。

体勢を崩さないように踏ん張ったヴィヴィオが次に見たのは、桃色の砲撃だった。

「シュートッ!!」

『Short Buster』

最速のタイミングで放たれた砲撃はヴィヴィオを直撃し、さらに距離を離すこととなった。

「レイジングハート。」

「どうかな?」

『マスターの予想通りです。』

先ほどからの彼女の戦い方は、訓練の際にフオワードメンバーや、マスターたちの戦い方と同じです。

特に、スバルの戦闘パターンが多くみられます』

「スバルの戦い方かあ。」

それは悪手だよ、ヴィヴィオ」

砲撃によって巻き上げられた煙の中から六発の魔力弾とヴィヴィオが飛び出してくる。

その速度は、先ほど彼女たちが話題にあげたスバルよりも早かった。

だが、なのはは落ち着いて六発の誘導^{アクセルシューター}弾を展開し、迫りくる魔力弾を撃ち落す。

「ごめんね、ヴィヴィオ。」

せっかく学んだ戦い方だけど……ッ！」

「——ッ!?!」

誘導弾と魔力弾が衝突し、爆炎を起こし、その中からヴィヴィオがなのはに向けて拳を突き出す。

岩をも砕くその拳をなのはは恐れることなく、レイジングハートでかち上げる。

勢いを乗せた腕を思いっきり上に叩き上げられたヴィヴィオは無防備に懐をさらすこととなった。

その隙を逃さず、なのははレイジングハートの切っ先をヴィヴィオの身体に向ける。

「ディバインバスターッ!!」

超至近距離からの砲撃。

流石の聖王の鎧でもこの攻撃を完全に防ぐことはできず、ヴィヴィオの身体は玉座の間の反対側まで吹き飛ばされる。

「スバルの戦い方は基本、一回きりの初見潰し。」

今のも模擬戦^{1対1}の時にやられたからね。

私には通用しないよ」

レイジングハートを構えながらなのはは教え子に教えるように優しく口にした。

その時、空中に浮いている彼女でも感じられるほどの揺れがゆりかごを襲った。

「レイジングハート、今のは？」

『恐らく、動力炉の爆発かと』

「そっか、ヴィータちゃんの方はうまくいったんだ。

なら、こつちも頑張らなきゃね」

なのはの前には、破損した甲冑を再生し、なのはの元へと向かってくるヴィヴィオの姿があった。

「あのチビ騎士と夜天の主が動力炉を潰したようね……！」

一方、ゆりかごの中枢でシステムへの介入を試みていたクアットロは、激しい揺れを感じた直後、一時的にシステムがダウンした際に、^{ヴィヴィオ}聖王の意識の切り離しに取り掛かっていた。

「システムの復旧まであと一分。

何、こんなのドクターのプライベートPCに入り込むのよりはずつ

と簡単……ッ!!」

システムの復旧まであと40秒。

「意識の切り離しと同時にシステムの破壊ウィルスの設定完了ツ!!

これで……!!」

残り15秒。

「私の勝ちっ!!」

クアットロの指が、キーを押した。

「はぁーい、聞こえますか〜?」

『聞こえてる。』

なんか、ヴィヴィオの様子が変だけど……」

クアットロはなのはに通信を繋ぎ、状況を確認する。

なのはは心配そうな表情でモニターとは別の方向を向いていた。

「システムから切り離した反動ですよ。

すぐに収まります。

けど、此処からはあなたの仕事。

システムから意識は切り離せたけど、肉体の方は聖王の鎧が操作しているも同然」

『どうすればいい?』

「貴女の得意技。

魔力ダメージによるノックアウトで、彼女はもとに戻ります」

『わかりました。』

協力に感謝します』

なのはのその言葉にクアットロは人をからかうような表情で尋ねる。

「あらあ、いいのですか?」

私があなただをだましているかもしれないですよ?」

『あなたのさつきまでの眼を見ればそれはないことはわかるよ』

「……それじゃ、あとは任せましたよ」

クアットロはなのはの言葉に面白くないといった顔で通信を切った。

通信が切れたことを確認した彼女は大きくため息を吐いた。

「まったく、私は肉体労働こっは専門外なんだけど……ッ!!」

そう言いながらその場から飛び退く。

直前まで彼女がいた場所に幾多もの光線が降り注いだ。

「システムに介入し、聖王の意識を切り離したから敵対認定ってところかしらね?」

でも、遅すぎでしたね?」

少し離れたところで膝をついていたクアットロは楽しそうに呟く。

「まったく、ウエンデイちゃんから借りという正解だったわね」

そう言ったクアットロの右手には、ウエンデイの固有武装である

『ライディングボード』が握られていた。

「さてと、あとはあの人が陛下を助けるまで粘るだけね。

これでも戦闘機人、簡単にはやられませんよ?」

ティアナルート 第三十六話

時間は少し遡る。

すべてを話し終えたスカリエツティは彼と、彼が潰してきた違法研究所の研究データをフェイトに渡した。

フェイトがデータの入ったメモリーをバルディッシュに収納するのを確認したスカリエツティは大きく息を吐いて口を開いた。

「これでもうやり残したことはない。

さあ、私を連れて行ってもらうかな」

スカリエツティはそう言いながら両手を前に出す。

「こういうものは形式とは言えちやんとやっておくべきだろう?」

「……ジエイル・スカリエツティ。

貴方を大規模騒乱罪および諸々の罪で逮捕します」

フェイトは頷きながら彼の手に、バインドを仕掛ける。

金色の魔力の輪が彼の両手を拘束したのを確認したフェイトは外にいる別働隊へと連絡を入れる。

「こちらフェイト・T・ハラオウン執務官。

主犯のジエイル・スカリエツティの確保しました」

『了解です。』

ですが、まだラボの外ではガジェットが多くがまだ稼働中でして戦闘が続いています。

必要はないかもしれませんが、ラボの内部にも稼働しているガジェットがいるかもしれません。

気を付けてください』

「了解、情報の提供ありがとうございます。」

これからジエイル・スカリエツティを……」

移送します——と続けようとしたフェイトだったが、彼女の声をラボの内部に響き渡る警報がかき消した。

「なんだッ!」

「これは……ッ!!」

突然の警報に警戒を示すフェイトだったが、彼女のすぐそばに立つ

ていたスカリエッツィは驚愕に目を見開いていた。

「スカリエッツィ、この警報はいつたい!？」

「……すまない、ハラオウン執務官。」

「どうやら、私にはまだやらなければならぬことがあったよう
だッ」

「なにを……!？」

彼の言葉に眉を顰めるフェイトだったが、次の瞬間、彼女の仕掛け
たバインドを解除したスカリエッツィはすぐさま壁際に設置されて
いるモニターとパネルを起動させた。

「どういうことだ、いったい誰のが……ッ!!」

鍵盤型のパネルを、凄まじい速さで叩きながらモニターを凝視する
スカリエッツィ。

「何があった?」

「詳しく説明する暇はないが、簡単に言うと私の娘の誰かのリミッ
ターが強制解除された」

「リミッター……?」

スカリエッツィの言葉に首を傾げるフェイト。

そんな彼女に向けてスカリエッツィはパネルを操作することをや
めずに答える。

「機械の身体を手に入れた戦闘機人。」

その身体は普通の人間より何倍も頑丈で強力だ。
だけど、いくら頑丈でもベースは人間。

生身の身体を持っているんだ。

機械としての100%の能力を發揮すれば、身体が持たない。

だから私は彼女たちにリミッターを掛けたんだ。

人としての身体を失わせることがないように」

ならば、なぜ彼女たちを戦闘機人として生み出したのか。

そんな言葉がフェイトの喉元まで出かかったが、一つの答えに辿り
着いた彼女はその言葉を呑み込んだ。

「そうか、だからリミッターを……」

「君の思っている通りだよ。」

彼女たちには、この騒動を終えた後は自由に生きてもらいたかった。

戦闘機人としてではなく、ただの人間として。

一人の弱い人としてね」

スカリエツティは、そう答えると、それ以降、フェイトのことなど気に掛けることなく目と手を動かした。

そして、ついに見つけた。

「ノーヴェ、君だったのか……ッ！

だが、なぜだ。

彼女のリミッターは最高のものをつけていたはずだ……ッ!!」

ラボの内部で彼と行動を共にしていた四人、ウーノ、トーレ、セイ
ン、セツテ、それから身体の修復途中であるチンクを除いた戦闘機人
のバイタルデータを一からチェックしていたスカリエツティは、四人
目でリミッターが外れているのが、ノーヴェだと断定した。

戦闘機人としての能力がトップクラスの彼女には最高級のリミッ
ターを仕込んでいた。
それが外れている。

リミッターの解除にはスカリエツティのみが把握しているコード
を入力するしか方法はなかった。

「まさか……ッ」

原因を探る時間はなかったが、彼は一つの仮説に思い至った。

それは、ここ最近の彼女の様子がおかしいと気づいていたからこそ
の結果だった。

「心の揺らぎが、リミッターを解除したとでも言うのか……ッ!？」
戦闘機人としての自分と、人としての自分。^{ノーヴェ}

その間を揺れ動いていた彼女の心は一つの鎖を引き千切った。

「スバルツ!!」

「あ、ちよ!!」

一方、スバルとノーヴェエの戦いの近くにいたティアナは、膨大なエネルギー反応を感知すると、すぐさま駆け出した。

彼女によって拘束されていたウエンディはティアナが自分を放つて走り去ったことに対して信じられないといった表情を浮かべていた。

「いや、スバルっちが心配なのはわかるけどさあ……ん？」

『……イ、聞こえるかい……』

ウエンディ……ッ！』

「はいはい、こちらウエンディっすよ……ってドクターッ!?」

ティアナが走っていった方向をじっと見ていたウエンディは、スカリエッツィからの突然の通信に驚く。

「突然どうしたんすか？」

「なんか今やばいことが起きてるみたいっすけど……」

『今すぐノーヴェエの元に向かってほしい。』

詳細は省くけど、ノーヴェエが危ない!!』

困った顔でそう答えるウエンディだったが、スカリエッツィの言葉に彼女の顔から笑みが消える。

ウエンディは一度大きく息を吸うと、両手を拘束していたティアナのバインドを力技で砕き、両手の自由を取り戻した。

「それで、どうすればいいっすか？」

『まずはスバル君たちと合流してくれ。』

あとはその時に話す』

「了解っす」

ウエンディはスカリエッツィからの通信を切ると、近くに立てかけていたライディングボードに乗ると、一気にトップスピードまで加速する。

「まったく、手のかかる姉っすね……ッ！」

「……ッ、ハッ……ッ!!」

「ウウ……ッ、ス、バ……ル……ッ!」

ノーヴェに馬乗りになれ、首を締め上げられているスバルは、何度も意識を失いそうになるが、それを何とか防ぐ。

だが、彼の戦闘機人としての力をもつてしても、今の彼女の両手を引きはがすことはできなかった。

「……ッ!!」

「ガア……ッ!?!」

だが、次の瞬間、ノーヴェの肩に何かが衝突する。

スバルには薄れている意識の中でそれが何かを確かめるほどの余裕がなかった。

それでも、これが彼女の拘束を解く最初で最後のチャンスだということとは理解できた。

「……アアッ!!」

翠の瞳が、金色に輝く。

ノーヴェの力が一瞬弱まった瞬間、スバルの両手がノーヴェの手と首の間に隙間を作る。

開いた気道から新鮮な空気がスバルの身体に入る。

そして、さらにノーヴェの肩、腕、腰と、先ほどと同様に何かが衝突する。

その衝撃によってノーヴェの身体が揺らぎ、スバルはその隙に、彼女の身体を思いっきり蹴り飛ばした。

スバルはノーヴェの身体が地面と何度もぶつかり、反対側の壁に激突するのを見ながら、盛大に咳き込む。

「スバルッ!!」

「ガハ……ッ!」

てい、ティアナ……?」

スバルは、スターキャリバーを駆って自分のもとに向かってくる彼女の姿を、涙でにじむ視界に捉えた。

ティアナはノーヴェと彼の間を塞がるように立つ。

「大丈夫なの!?!」

「……まあな。

戦闘機人の身体は伊達じゃない。

……来るぞッ!!」

スバルとティアナはノーヴェエが自分たちの方へと向かっているのを見て、戦闘態勢に入る。

距離があるとはいえ、今の彼女のスピードなら彼らのもとに来るのは数秒だ。

その間に、スバルとティアナはアイコンタクトで作戦を伝え合っていた。

「落ち着くツすよ、ノーヴェエッ!!」

だが、彼らのもとにノーヴェエがたどり着くよりも先に、彼女の身体を遅れてきたウエンデイがライディングボードで撥ね飛ばした。

「ちよ、あんた何やってんのよ!?!」

「こつちにも事情があるツす。

とりあえず、あんたたちに話がしたいって。

その間、ノーヴェエはこつちが抑えるから、早めにお願ひするつすよ!!」

ウエンデイはそう口早に告げると、一つのモニターを彼らの前に展開させ、すぐに立ち上がったノーヴェエの元へと駆けていった。

そんな彼女の後姿を見ながら、スバルはモニターの中に映る男に話しかける。

「それで、あんたは俺たちに何をさせたいんだ？

ジェイル・スカリエツティ」

『単刀直入に言うとするよ。』

ノーヴェエを、私の娘を助けてほしい……』

「わかった。

それで、俺たちは何をすればいい？」

スカリエツティの懇願するような声で発せられたその言葉を聞いたスバルは、ティアナの方をチラリと見て、すぐに答えた。

画面の中のスカリエツティは、彼らの返答の速さに言葉を失ってい

た。

『そ、即答だね……。』

先ほどまで、いや今でも私は君たちの敵対人物であることには変わりはないはずだ……。

『それなのに……』

「あんた、馬鹿だろ。」

誰かを助けるのに理由がいるのか？

そこに助けを求める人がいるなら、手を差し伸べる。

それが管理局だ」

スバルの言葉に、スカリエツティは目を見開き、そして静かに笑った。

『そうだね。』

誰かを助けるのに、理由なんかいらぬ、か。

君の言う通りなのかもしれないな』

スカリエツティは一度頷くと、再び彼らに向けて言葉を投げかける。

『君たちには、彼女を止めてもらいたい。』

スバル君なら、わかるかもしれないが、今のノーヴェは不安定な状態だ。

いや、暴走と言いかえた方がいいね』

「なんで私たちに頼むの？」

あなたの自慢の娘たちでは止められないということはないはずよ？」

そう、いくらノーヴェが暴走状態であっても、スカリエツティの生み出した戦闘機人が数人でかかれば彼女を止めることは容易いとは言えないが、可能だ。

しかし……。

『今、君たちの周囲で戦闘可能な娘はウエンディだけなんだよ。』

そのウエンディも、ノーヴェに比べれば戦闘機人としての力は一段も二段も劣る。

『今この時間を稼ぐだけで精一杯のはずだ』

彼らの周囲で戦闘を行っていたのは、ノーヴェ、ウエンデイ、オットー、デイドの四人。

そのうち、ノーヴェと一対一^{サシ}で対抗できるのは辛うじてデイドのみ。

だが、オットーとデイドはすでにギンガによって意識を刈り取られており、ウエンデイだけが戦闘可能という状態だった。

「だから、俺たちに頼んだってことか。」

「それで、具体的な案は？」

『幸か不幸か、ノーヴェの暴走はまだ始まったばかりだ。』

本来なら、意識がシステムに乗っ取られて、あんなふうには咆哮を上げることすらないはずだからね』

「つまり、彼女がシステムに抗っているってこと？」

『その通りだよ。』

そこでだ、彼女の肉体を魔力ダメージでノックダウンしてほしい。

彼女の暴走の原因は肉体のリミッターが外れていることだ。

だから、肉体の許容を超えるダメージを受ければ強制的に肉体の能力をシャットダウンすることが可能はずだ』

スカリエツティの言葉に、スバルとティアナは頷き、了承の意を示す。

「そうだ、あんたの近くにフェイトさんはいるか？」

『スバル？』

「どうしたの？」

スカリエツティはすぐに、そばに立っていたフェイトと場所を交代し、モニターにフェイトの顔が映る。

「いや、これからちよつと無茶するんで、なのはさんに謝るときに証人になってほしいかなと」

『無茶って……。』

「今度は何をする気なの……？」

「ぶっつけ本番で新しいクロスシフトの実践です」

「クウ……ッ!!」

ノーヴェエから繰り出される攻撃をライディングボードを使って何とか受け流すウエンデイ。

彼女が、時間を稼ぐためにノーヴェエとの戦闘に入っただけで三分が経過していた。

もともと、後方支援を主な仕事とするウエンデイが、暴走状態のノーヴェエとこれだけの時間、やりあえていたことは軌跡に近い。

「やっぱ強いっすね……ッ!!」

でも……ッ!!」

「うえん……デイ……ッ!!」

「……ッ!!」

ウエンデイがライディングボードの銃口を向けようとした直後、ノーヴェエの蹴りがライディングボードを直撃する。

得物ごと吹き飛ばされるウエンデイだったが、吹き飛ばされた直後に、彼女は体勢を整えるよりも先にライディングボードの銃口をノーヴェエに向けた。

「もらいッス」

「……ッ!!」

ノーヴェエがその場から飛び退くよりも先に、銃口から光が放たれた。

ノーヴェエに向けて一直線に向かったそれはノーヴェエの姿を呑み込み、周囲に煙を撒き散らす。

背中から地面にぶつかったウエンデイは咳こみながら煙の方を見て、一言。

「やったっすか……!?!」

だが、彼女の言葉とは裏腹に、煙の中からノーヴェエが、身体中から蒸気を出しながら飛び出してきた。

背中から落ちた衝撃による痛みが抜けていないウエンデイは咄嗟にライディングボードを盾にするが、ノーヴェエが放った拳が、彼女の盾を砕き、彼女の身体を空中に打ち上げた。

「ガッ……!?!」

「うえん…ディッ!!」

身動きの取れない状態で、空中に打ち上げられたウエンディは、ノーヴェエの追撃をすべてその身に受けた。

蹴り、拳、踵落としと続けざまに三連撃を受け、地面に叩き付けられる。

(あー、此処までつすかね…?…?)

叩き付けられた衝撃と、身体に蓄積したダメージによって薄れゆく意識の中、ウエンディはぼんやりと視界に映るノーヴェエを見ながら来るであろう衝撃を覚悟していた。

だが、その衝撃は来ることはなかった。

「ゴメン、遅くなったわね」

「あとは俺たちに任せてくれ」

その代り、彼女の眼には、蒼と橙色の髪が映っていた。

「まったく、おそいつすよ……」

ウエンディは痛みを堪えながら、弱々しい声でそう答える。

「ティアナ、ウエンディを少し離れたところに移してくれ。」

時間は稼ぐ」

「はあ、わかったわよ。」

目的は忘れないようにね」

スバルの言葉に従い、ティアナは倒れているウエンディを背負って彼女を運んでいった。

「……ノーヴェエ」

「……ッ!!」

スバルが彼女の名前を呼ぶ。

その声に反応したノーヴェエは、スバルに肉薄し、右の拳を突きだした。

だが、その拳をスバルは静かに受け止める。

「ゴメン、お前がそんなに悩んでるなんて俺にはわからなかった。

でもな……」

「……す、バル……ッ!」

「お前の親父^{スカリ}さん^{エッ}から聞いた。

「お前が今苦しんでいる理由を」

動きを止められた右手を引きはがそうとするノーヴェだったが、スバルの手はそれを許さなかった。

彼女を離さないように、自分の言葉を届けるために。

「お前が自分のことに悩んでいることも……ッ！」

「……がッ……ッ!!」

ノーヴェの蹴りがスバルの横腹を貫く。

だが、それでもスバルは離さない。

「悪いが、俺はお前じゃないから、お前の悩みに答えを教えられるわけじゃない。

「……」

自分に迫る拳を、スバルはがっちりと掴む。

「一緒に悩むことはできるだろう？」

「だから、俺はお前と一緒に話をするために、俺はお前を助けるッ!!」

「スバ……ルッ……!!」

「お前はどうかんだ、ノーヴェ！」

助けてほしいのか、ほしくないのか!?

お前の親父さんはお前を助けてくれて頭を下げたまで俺たちに頼んできたぞ!!

「お前は、どうなんだ、ノーヴェ!!」

スバルはそう言いながら目の前のノーヴェの顔に自分の顔を突きつけ、彼女の眼を見つめる。

「……わ、たし……ハ……ッ！」

「まだ……し……にたく……ない……ッ！」

「助け……て、……ッ!!」

彼の瞳には、真っ赤に染まった瞳から涙を流しながら助けを求める一人の少女が映っていた。

「わかった、助けるさ。」

「これからも俺たちが、いつでも助けてやる。」

「だから、少し我慢しろよ……ッ!!」

「スバルは、両手に力を込める。」

先ほどの蹴りの痛みがまだ身体に残っているが、それを堪えながらノーヴェを投げ飛ばした。

それほどの勢いをつけて投げたわけではないため、ノーヴェは空中で体勢を整えて着地する。

「話は終わった？」

「ああ、しつかりと聞いた。

助けてってよ」

ノーヴェが着地した直後、ウエンディを安全な場所まで運んでいったティアナが戻ってくる。

スバルの返答に「そう」と短く相槌を打つティアナ。

「クロスシフトRS、行けるか？」

「ぶつつけだけど、やるしかないでしょう？」

それに、私を誰だと思ってるのよ。

スバル・ナカジマのバディ、ティアナ・ランスターよ。

この程度、やってのけないとね」

「そうだったな。

それじゃ、行くか」

「ええ」

スバルとティアナは互いに頷きそれぞれの愛機に命令を飛ばす。

「フルドライブツ!!」

『Standby ready』

二人の身体から、蓄えられていた魔力が溢れ出す。

マツハキヤリバーから蒸気が噴き出し、スターキヤリバーに装備された魔力変換炉が唸りを上げる。

「ギア……」

「モード……」

「エクセリオンツ!!」

二人の声が、響き渡った。

ティアアナルート 第三十七話

「ギア……」

「モード……」

「エクセリオンツ!!」

『Drive ignition』

マツハキヤリバーの外装の一部がパージされ、蒼き翼がその姿をさらす。

マジリングコンバーターによって、ティアナの周囲の魔力素をすべて彼女に適合する魔力へと変換され、余剰魔力が、ティアナの背から四つになって噴き出し、その勢いは、彼女の身体を空中へと浮かべた。「行けるか?」

「ええ、魔力の供給も安定してる。

行けるわよ」

スバルは隣に浮かぶティアナを横目に見ながら尋ねる。

それに対して、ティアナは両手にクロスミラージュを持ちながら答える。

その視線は、静かにノーヴェを捉えていた。

「なら、行くぞ……クロスシフト、『ランページスターズ』ツ!!」

「……ッ!!」

スバルとティアナが同時に飛び出す。

陸と空に蒼と橙色の道が浮かび上がる。

道路を一直線に駆け抜けるスバルの周囲に六つのスフィアが展開される。

「デイバインバスターツ!!」

『リボルバーシフト』

六つの蒼い砲撃は、ノーヴェの周囲に着弾し彼女の視界を奪う。舞い上がった煙はノーヴェの身体も隠してしまうが、彼女には見えなかった。

「狙いは外さない……ッ!!」

『Cross Fire and Shoot Barrett』

浮遊する魔力素を取り込むことで縦横無尽に空中を駆け抜けるティアナの目には、ノーヴェエの身体から発せられるエネルギー反応がしっかりと映っていた。

その反応へと彼女の両手に握られたクロスミラージュから十数発の誘導弾と直射弾が発射される。

「……がッ!?!」

弾速の速い直射弾がノーヴェエの脚を射抜く。

脚を撃ち抜かれたノーヴェエの身体がバランスを崩し、そこに追撃で誘導弾が連続して彼女の身体を空中に打ち上げる。

「スバルッ!!」

「わかってる……ッ!」

ノーヴェエの身体が打ち上げられたのを確認したティアナはすぐさま相棒の名を叫ぶ。

彼女の声に答える前に、ノーヴェエの後方に回り込んでいたスバルは空に向かって伸びるウイングロードを駆け昇る。

「打ち抜くッ!!」

『Knuckle Bunker』

硬質のフィールドに覆われた拳がノーヴェエの身体に接触した直後、フィールドが弾け飛び、その衝撃がノーヴェエの身体を貫き、彼女の身体を逆方向に吹き飛ばす。

「ブラストシュートッ!」

『Phantom Blazer』

ティアナが放った砲撃がノーヴェエの身体の勢いを止める。

そこにスバルが飛び込み、彼女の身体をガツシリと掴んだ。

「逃がさないッ!!」

「ティアナッ!!」

「了解ッ!」

ノーヴェエを掴んだスバルは、そのまま上へ昇っていく。

そんな彼の周囲に膨大な魔力を溜め込んだスフィアがいくつも現れ、そのすべてがノーヴェエだけに向けてピンポイントで砲撃魔法を放った。

「これで最後だ、ノーヴェツ!!」

「行くわよ、クロスミラージュ」

『了解。』

シフトチェンジ。

ハウリングシフト』

スバルが自分と同じ高さまで上昇しているのを見たティアナは右手に握ったクロスミラージュを左手のものの前に添える。

すると、クロスミラージュの銃床が左手のもの銃口と合わせり巨大な一つのライフルへと姿を変えた。

『クロスミラージュ・エクセリオンモード・ハウリングシフト』。

彼女の最強の切り札の一つ。

それを今解放した。

「ティアナツ!!」

「わかってるわよー」

すべてのスフィアの攻撃を受けたノーヴェエを連れて、スバルがティアナの傍を通り抜ける。

彼女はスバルの声に反応して、すぐにその後ろを追いかける。

「ノーヴェエ、これで助けてやるからな……ッ」

スバルはノーヴェエの身体にリボルバーナックルを当てる。

その拳から六発の空薬莖すべてが排出され、魔力が充填される。

「準備はいいな?」

「当然」

スバルは隣に並んだティアナが自分と同じように、ノーヴェエに銃口を当てるのを見て尋ねる。

ティアナの答えに頷くスバル。

そして、声をそろえた。

「せーの……」

「行けええええッ!!!」

『Strike Blazer』

『Starlight Breaker』

蒼と橙色の砲撃が、ノーヴェエの身体を包み込んだ。

ゆりかご、玉座の間――

なのは自分の目の前で頭を抱えて声を荒げていたヴィヴィオが静かになったのを見て、名前を呼びながら近づこうとする。

「ヴィヴィオ……、ヴィヴィオッ!!」

「来ないでッ!!」

だが、彼女の行動はヴィヴィオから止められた。

頭を抱えながら片手で放った虹色の魔力弾がなのはの足もとで弾ける。

「ヴィヴィオ……!?!」

「身体が、いうことを効かないの……。」

「これ以上、なのはさんを傷つけない……ッ」

「どうしたの？」

ヴィヴィオ、いつもみたいに、なのはママって呼んでくれないの?」

ヴィヴィオの自分の呼び方が、変わっていることに気づいたなのは彼女に尋ねる。

「思い出したの……。」

私が、このゆりかごの心臓の一つだった聖王のクローンってことに。

小さい姿をしていたのは、優れた魔法技術と戦闘能力を持った人に守ってもらえるように。

そして……、本当のママなんていないってことに……」

「ヴィヴィオ……ッ」

「だから、これ以上私に近づかないで。」

このままじゃ、少しの間だったけど家族だったなのはさんを……ッ！」

ヴィヴィオはその瞳に涙を浮かべながら叫ぶ。

自分から離れる、もう自分に構うなど。

なのはは、そんな彼女に向けて言い放った。

「それがどうかしたの？」

「え……」

なのはの言葉が予想外だったのか、ヴィヴィオは驚きの声を上げるだけだった。

「たとえば、過ぎた時間が少なくても。

私はヴィヴィオのことを本当の家族だって思ってる。

例え、血が繋がってなくても、私たちは家族でいられるって思ってる。

例え、ヴィヴィオが過去の人のクローンだからって、私がヴィヴィオを見捨てる理由にはならないよ」

「でも、でも……」

「でもじゃないッ!!」

ヴィヴィオの言葉を声上げて遮るなのは。

彼女の剣幕に口を閉じるヴィヴィオ。

「それにね、約束したんだ。

フェイトちゃんや、スバルと。

絶対に連れて帰るって。

みんな、ヴィヴィオの帰りを待ってるんだよ？

ヴィヴィオが造られた存在だからって嫌う人なんていない。

みんな、ヴィヴィオをヴィヴィオとしてみてくれる。

だから、一緒に帰ろう、ヴィヴィオ？」

「……………」

なのはが手を彼女に向けて差し出す。

その手を見て、ヴィヴィオは俯きながら呟く。

「ほら、ちゃんと言葉にして言ってるらん？」

言葉は、自分の言いたいことを相手に伝える魔法なんだから」

「帰りたい……ッ!!」

「帰りたいよ、皆のところ……」

「だから、助けて……なのはママアツ!!」

「ヴィヴィオの口から紡がれたのは、助けを求める声。」

「それに答えるために、なのは大きく頷いた。」

「助けるよ。」

「いつだって、何度でもッ!!」

『Limit break』

「ブラスター2ッ!!」

『Drive ignition』

レイジングハートの機械的な声とともに、なのはから膨大な魔力が溢れ出す。

高濃度のAMFに満ちたこの空間においても視認できるほどに溢れだす魔力の奔流は想像を絶するものだ。

「レイジングハート、狙いは一つ。」

「わかってるよね?」

『ヴィヴィオの身体に埋め込まれたレリックを露出させ、封印。』

リスクの高い方法ですが、ヴィヴィオの身体とマスターの身体の負担を考えるならばこれが最良の選択かと思われれます』

「なのははレイジングハートを構える。」

「行くよ、ヴィヴィオ!」

「……ッ!!」

「なのはが飛び出すのに反応してヴィヴィオの身体に纏わりつく聖王の鎧が彼女の拳をなのはに向けて振り下ろした。」

『ブラスターピット展開』

「だが、拳がなのはを捕らえる直前、小型の遠隔操作機器『ブラスターピット』がバインドを展開しながらその腕を絡め取った。」

「ちよつとだけ、痛い我慢してね、ヴィヴィオッ!!」

『Load cartridge』

腕を絡め取った瞬間に、ヴィヴィオの懐に入り込んだなのははレイジングハートの切っ先をヴィヴィオに突きつける。

聖王の鎧がその進行を阻もうとするが、レイジングハートの切っ先が二つに分裂し、桃色の魔力刃が姿を現し、その障壁を貫く。

ヴィヴィオに届く道が開いたことを確認したなのはは装填されているすべてのカートリッジの魔力を放出させる。

「デイバインバスターツ!!」

「ああああアアツツツ!!!」

桃色の砲撃がヴィヴィオの胸を貫く。

そして、その膨大な魔力の流れによつて聖王の鎧は碎け散り、ヴィヴィオの身体から赤い宝石がその姿をさらす。

「レイジングハートツ!!」

『レリックナンバー、封印』

姿を現したレリックをなのはは片手で掴み取り、すぐに自分の魔力を流し込み、その活動を停止させた。

レリックからの魔力供給が途絶えたヴィヴィオは、その身体を虹色の光を放ちながら元の幼児の姿へと戻っていく。

「ヴィヴィオツ!!」

宙に浮いていたヴィヴィオの身体が静かに地面に降りていくのを、なのはは自分の身体で優しく受け止めた。

「ヴィヴィオ、大丈夫……ッ!?!」

「だい、じょうぶ……だよ……」

「ああ、ヴィヴィオツ!!」

ヴィヴィオが小さくとも、しっかりとした声で答えたことに、なのはは涙を浮かべながら彼女の身体を抱きしめる。

「あのね、なのはママ……」

「何、ヴィヴィオ?」

ヴィヴィオはなのはに抱かれながらも、彼女に伝える。

自分が、今一番伝えたい思いを。

「助けてくれて、ありがとう……」

ティアナルート 第三十八話

小さい振動が続くゆりかごの中を、はやととリインは彼女たちが出せる最高速度で飛翔していた。

動力炉を破壊した後、応急処置を行ったヴィータを突入部隊に引き渡した後、彼女たちは玉座の間を目指していた。

「リイン、あとのくらいや!？」

「玉座の間まであと300です!」

「なら、急ぐ……なんやツ!？」

はやとたちが曲がり角を曲がった直後、ゆりかごを今までで一番大きな揺れが襲った。

飛翔しているはやとたちまでもがその震動に驚き、動きを止めるほどの強い揺れだった。

「今のは!？」

「玉座の間からゆりかごの中枢に向けての大魔力砲撃です!」

多分……」

「なのはちゃんやろうな……!」

急ぐで、リイン!」

「はいですツ!!」

「なのはちゃんツ!!」

「大丈夫ですかツ!？」

玉座の間に辿り着いた二人は、扉をぶち抜いて中に突入する。

だが、彼女たちの目に映ってきたのは想像していたものとはかけ離れた光景だった。

「ちよつと、いきなりぶつ放すなんて聞いてなかったんですけど……ツ!」

「いや、でもあのタイミングじゃないと貴女に当たらないで全部撃ち

「落すことできなかつたし……」

「だからって、あんな大出力じゃなくてもいいでしょう!？」

ほら、これッ!

ウエンディちゃんに無理言っ借りてきたのに粉々ッ!!

帰つたら絶対文句言われますよ!？」

「あ、あはは…… (面倒くさいなあ、もう……)」

まず目にするのは、壁にあいた巨大な穴。

そして、その近くでなのはに詰め寄るクアットロと、その傍で座つて彼女たちの様子を見ているヴィヴィオ。

「な、なんやこれ……?」

「さ、さあ?」

彼女たちの言葉にツツコミを入れる者は誰もいなかった。

浮かび上がる感覚とともに、ノーヴェは自分の意識が戻り始めているのを感じていた。

夢を見ているときのような浮遊感を感じながら、ノーヴェはゆっくりと目を開いた。

「ッ、ノーヴェ!!」

よかつたつす、目が覚めたツすね!!」

「……ウエンディ……?」

意識が戻って最初に見るのがウエンディか、とも思わないノーヴェであったが、彼女であったことはノーヴェにとってはありがたかつた。

これがスバルだった場合には今までの想いと、先ほどまで自分の意識とは関係なしに彼を傷つけていた罪悪感で彼女の頭はぐちゃぐちゃになっていたとノーヴェは確信できていた。

「どうなって……?」

「スバルつちとティアナつちにボコボコにされたツスよ。

で、肉体の方を強制的にシャットダウン。

あとはノーヴェの意識が戻るのを待ただけだったってところっす
「そうか……」

ノーヴェはそう言っただけで起き上がろうとするが、彼女の身体を激しい
痛みが襲った。

痛みに悶える彼女を見たウエンディは慌てて彼女を寝かせる。

「まだ寝てなきやダメっすよ！」

さつきまで限界超えてたんだから!!」

「……そうだったな……」

ノーヴェのどこか気の抜けた返事にウエンディはため息を吐いた。

「ハア……」

そうだ、スバルたちから伝言っすよ。

『まだ仕事が残ってるから、話はそれが終わってからだ』だって。

それまでここで大人しくしてるっすよ」

「あとから、か……」

わかったよ」

ウエンディから、スバルの言葉を受けたノーヴェは降下してくるへ
りの音のする方に意識を向けた。

「スバルさん、ティアナさんツ!!」

「おお、エリオにキヤロ。」

大丈夫だったか?」

「はいっ!」

お二人も無事だったんですね?」

「まあね。」

さて、これからのことなんだけど……」

スバルとティアナは、フリードに乗って合流したエリオとキヤロに
今後のことを話そうとしたが……

「これがヴォルテールか……」

映像では見たけど……」

「デカいな……」

フリードの後をゆっくりとついてきたヴォルテールに目を奪われて話どころではなくなっていた。

それもそうだろう。

魔導師としての経験はエリオたち以上の二人だが、ビルの高さよりもでかい竜など相対する機会等はなかったのだから。

いつまでもそのデカさにあつけにとられていそうな二人だったが、へりの音に意識を引き戻された。

「おう、新人ども！」

そろつてるなッ！」

「ヴァイスさん、どうしたんですか!？」

へりの後部ハッチから飛び降りたヴァイスは彼らのもとに走つてくると、すぐに要件を口にした。

「ロングアーチからだ。」

なのはさんと部隊長、リイン曹長からの通信が途絶えたらしい。

突入部隊の話だと魔力の結合が不可能なほどのAMFがゆりかごの中に張られたらしい。

そこで……」

「私たちに白羽の矢が立ったってわけですか」

「その通りだ。」

それと、ライトニングの二人はスカリエッツィのラボに向かってくれ。

フェイトさんがスカリエッツィの確保には成功したが、ラボの外にはガジエツトどもがうようよしてららしい」

「はいっ！」

二人が返事をした後、ヴァイスはまたすぐにへりの中へ戻っていく。

「あの、スバルさん、ティアナさん」

「ん？」

どうした、エリオ」

エリオから呼びかけられた二人はエリオとキャロの方に視線を戻した。

「あの、ゆりかごの中で気を付けてください……。」

魔力の結合ができない空間では魔導師はほとんど無効化されますし……。」

「大丈夫だ。」

俺はいざというときの戦闘機人モードもあるし」

「私たちの本職はむしろ救助活動よ。」

アンタたちに言われなくてもわかってるわよ。」

それに、危ないって言ったらそっちも同じでしょ?」

「は、はい……。」

むしろ直接戦闘が行われるというところではエリオたちの方が危険でもあるのだ。

ガジェットの数是不明、司令塔であるティアナと切り込み隊長であるスバルを欠いた状況での戦闘はライトニングにとっては少々荷が重いとところもある。

少し緊張気味の二人を見たスバルは一息つきながら右腕をティアナの肩に腕を回し、左腕でエリオとキャロを近くに引っ張り込こむことよって、四人は顔突き合わせる形になる。

「いいか、俺たちは今までずっと一緒だった。」

「だけど、これからもずっと一緒ってわけにはいかない。」

「今回はその練習だ。」

「しっかりとやることやって、全員でまた顔を合わせるぞ?」

「今度はなのはさん達も一緒にだ」

「ええ」

「はいつ!!」

緊張もほぐれた二人が、フリードに乗ってラボの方へと向かうのを見送ったスバルは、シヤマルに肩を借りながらへりを降りてきたギン

ガと話していた。

「姉貴、大丈夫なのか？」

「ちよつと無茶しすぎたかな？」

肩のジョイントが壊れちゃった……」

アハハと、苦笑しながら頭を搔くギンガ。

そんな彼女をスバルは心配そうな表情で見つめる。

「そんな顔しないでよ。」

ほら、スバルにはまだ仕事があるでしょう？

これ持つていきなさい」

「は……？」

スバルは、ギンガの左手から渡されたものを見て驚きの声を上げる。

その手には、ブリッツキヤリバーが置かれていた。

「姉貴、これ……」

「言っておくけど、貸すだけだから。」

ちゃんと帰って返しなさいよ？」

「……おう」

「よし、二人とも乗ったな。」

アルト、いいぞー！」

『了解ッ！』

二人が乗り込むと、すぐにハッチが閉じへりが上昇を始めた。

上昇の際の揺れを感じながら二人はへりの中にあるものを見て言葉
葉を失っていた。

「あの、ヴァイスさん……？」

「これは？」

「……お前さんの担当からの贈り物だと。」

ほれ、通信」

「わっ……！」

スバルは目の前のものを見て、頬を引き攣らせながらヴァイスに尋ねた。

それに対して、ヴァイスもまた呆れながら答え、彼に通信機を投げ渡した。

投げられた通信機を落とさずにキャッチしたスバルはそのモニターに映る人物を見てなるほどと納得してしまった。

「あの、博士。

これは？」

『前に話したと思うけど、レジアス中将直々に却下された実験兵装だよ。』

よくできてるだろう?』

「博士、二、三言、言わせてもらってもいいですか?」

『なんだね?』

スバルはモニターに映る人物——サカキに対して思ったことをぶちまけた。

「なんでハンマー……?」

『実益とロマンを兼ね備えた素晴らしいものだよ?』

何、ちよつとサイズが大きくて推進器付きの金槌さ。

何の問題もないよ』

「ちよつと!?!」

この人一人分はありそうな大きさがちよつと!?!

それにふつう金槌に推進器はついてませんよ!?!」

『まあ、まあ。

確かに推進器は不味かったね。

だけど、今回はありがたいだろう?』

サカキの言葉に首を傾げるスバル。

理解していない彼に向けてサカキは事実を突きつけた。

『すでにゆりかごの突入口のいくつかは塞がれてる。

幸い突入部隊の脱出は終えていたけどね。

それで、今君たちがいる地点から、ゆりかごの内部に入るための入口はないんだよ』

「つまり、これでゆりかごに穴開けて入り込めと……？」

『その通り。』

ちなみにこの『ハイブーストハンマー』は、そう言ったことを目的に作られた面もあるから、ビンゴなのさ』

「ムう……」

彼の言い分にも一理あることを理解しているスバルは何も言い返せなかった。

そんな彼に向けてサカキは静かに語り掛けた。

『これは、君たちにちゃんと帰ってきてもらえるようにという僕からのお願ひでもあるんだ。』

僕は君たちという星をまだまだ観察し終えていないからね。

ちゃんと帰ってきてもらわなければ困るんだよ』

いいね？と念押しされるスバル。

いつもの彼と違い、真剣な表情の彼に対してスバルは頷いた。

『それと、それはもう今回だけの使用だから、ブッチギリの最大出力に設定しているよ！』

注意してね』

「うおいつ!？」

最後の最後でいつも通りのサカキの言葉に驚きの声を上げたスバルだった。

「あ、これすごく状態がいい……」

その頃、ティアナはそんな彼を放っておいて、ヘリの奥に鎮座していたバイクの状態を確認していた。

ティアナルート 第三十九話

ヘリの中から外を見ていたスバルがぼそりと呟いた。

「見えた……」

未だに多くのガジェットと魔導師が戦闘を繰り広げている中、船体の多くの部分から煙を上げながらも悠然と飛行する船、聖王のゆりかご。

それを見つめながらティアナは気を引き締める。

「あそこになのはさん達が……」

「あんなデカイ船が仕事場になるなんて思ってもいなかったな」

「そうね、今までもキツイ現場はあったけど、今回よりはマシだったかもね」

超ド級の船体を前にしても、おびえることなく話している二人を見て、ヴァイスは一つため息を吐いた。

「ベテランの雰囲気出しやがって、頼もしすぎじゃないかお前ら」

「これでも二、三年レスキューとしてやってましたから」

「ある意味機動六課まよりもキツイ場所でしたからね」

二人はそう言って不敵に笑みを浮かべる。

遺失物管理課とレスキューではその役割が違いすぎる。

主にロストログアの暴走を未然に防ぎ管理するための機動課と、事故現場における救命行動を任務とするレスキューでは現場の雰囲気も違ったものとなる。

同じ人命を救うという点においては違いはない。

だが、レスキューにおいては、間に合わない場合もある。

二人も例外ではなかった。

それでも、心折れずにやってきた二人は、確かにベテランと言ってもいい貫録を身に着けていた。

「それでこそだな。」

アルト、できるだけ近づけ!!」

『やっけますけど……ッー!』

ヘリの後部ハッチを開き、ヘリの中から近づいてくるガジェットを

狙い撃つヴァイスが、アルトにそう叫ぶが彼女は慎重にならざるを得なかった。

近づいてくるガジェットは、すでにヴァイスの迎撃をかくぐるものも多くあった。

それでもヘリが撃墜されていないのは、単にアルトの操縦技術のおかげでもあった。

「くそっ、このまま間に合わないぞ……ッ!!」

ヴァイスが苦虫を潰したような表情でそう愚痴る。

ティアナが自分も迎撃に回るといったとき、彼はそれを却下した。

これから救助活動を行おうとする者が疲労しては話にならないからだ。

「どうにかして道をつくらねえと……ッ」

「なら、その役目は我らが担おう」

近づくガジェットを撃ちぬきながらそう呟く彼が見たのは、紫色の魔力と炎がヘリの周囲にいたガジェットを焼き尽くすところだった。

「あ、姉さんッ!!」

「シグナム副隊長ッ!!」

三人が見たのは、炎の翼を背にしたシグナムの姿だった。

「アレ、でもその格好は……?」

「なに、ちよつとした助っ人が来たんだ。

それより、ガジェットをどうにかすればいいのだな?」

『あ、はいッ!』

道さえ開ければあとはこちらから突っ込みますッ!』

「心得た」

ヘリのコックピットから外部通信でアルトがそう告げると、シグナムはヘリよりも少し上空に昇った。

「というわけだ、アギト。

何かいいものはないか?」

『あるよ。』

あたしだけだと使いきれなかったとっておきが。

アンタとレヴァンティンと一緒にやられるッ!』

シグナムは、自分の中にいるアギトの自信たっぷりな言葉に笑みを浮かべる。

「そうか、ならば見せつけてやるとするか。」

我らの力をッ！」

『応よ!!』

コード送信……ッ!』

『コード受諾』

アギトから魔法のデータを受け取ったレヴァンティンがその姿を剣から弓へと変化させる。

そして、シグナムの背中から大量の炎が噴き出す。

彼女の足もとに、炎で構成された魔法陣が現れる。

『Phantom Phoenix』

レヴァンティンの声が響き、炎がシグナムを包み込む。

だが、彼女にはその炎が自分を優しく包み込むのを感じていた。

「飛べ、フアントムフェニックスッ!!」

彼女が限界まで弦を引き、そして放った。

放たれたそれは、炎を纏った鳥の姿を顕現した。

それは、彼女の本来持つ魔法『シュツルムファルケン』と同様に鳥の姿を模していたが、それ以上の焰を身に纏っていた。

そして、そのままガジェットと魔導師の戦っている場に突っ込む

と、炎はガジェットのみを的確に破壊し、消えていった。

「今だ、アルトッ!!」

『了解ッ!!』

シグナムの言葉と同時に、ヘリはすぐさま加速し切り開かれた道を駆け抜けていった。

その姿を見送ったシグナムは周囲に現れたガジェットを切り捨てた。

「さて、我らはこのままここ足止めだ。

いいいな?」

『応よッ、烈火の剣精の力、見せてやるぜッ!!』

「その意気だ。」

行くぞッ!!」

アギトの頼もしい声とともに、シグナムは群がるガジェットの中へと飛び出していった。

「よし、ポイントに到達だ!!」

行つて来い、二人ともッ!!」

「了解ッ!!」

「ウイングロードっ!!」

ウイングロードがギリギリ届く場所までやってきたヘリの中から、スバルが道呼び出しその上を駆けていく。

そのあとをバイクに乗ったティアナが遅れずに飛び出した。

ウイングロードの上を走るスバルには、ゆりかごの船体のどこを破壊すればいいのか、それが見えていた。

そして、彼は左手に姉から託されたりボルバーナツクルを装着する。

「行くぞ、マツハキヤリバー」

『了解です、相棒』

スバルの言葉に、マツハキヤリバーが答える。

そして、彼の目の前に、マツハキヤリバーの中に格納されていた『ハイブーストハンマー』が現れる。

「コネクトッ!!」

『Drive ignition』

スバルは躊躇いなく巨大なハンマーの柄につけられた、コネクタに右腕を突っ込む。

マツハキヤリバーの声とともに、突き入れられた右腕のリボルバーナツクルの歯車状のパーツ『ナツクルスピナー』が唸りを上げる。

ナツクルスピナーが回転数を上げると、ハイブーストハンマーに取り付けられた推進器が火を噴きだし、その力を推進力へと変える。

「ブーストッ!!」

スバルが叫び、その身を推進力のみで前へと進む。ウイングロードがゆりかごとぶつかり、それ以上先へ道は続かない。

だが、スバルにとっては関係なかった。

道がなければ、作り出すだけ。

「ブチ貫けええッ!!」

自分を鍛え上げた副隊長の動きを頭の中で思い出し、自分の身体で再現する。

スバルが振り抜いたハンマーは、ゆりかごの船体を大きく揺るがした。

船体と接触した直後、ハンマーの中である機構が動作し、ハンマー内部で圧縮された空気の塊がハンマーの先頭を打ち出した。

打ち出された先頭は、ゆりかごの壁を打ち抜いた。

「ティアナッ!!」

「わかつてるわよッ!!」

開けた穴から、スバルとティアナはゆりかごの内部に飛びこんだ。

内部に侵入した直後、スバルの足もとまで伸びていたウイングロードが消滅する。

「本当に魔力の結合ができない……ッ!」

「気にするな、最初からわかってたことだ。

行くぞっ!!」

「ええ……ッ!!」

スバルは右腕から使用不可能となったハイブーストハンマーを切り離し、ティアナとともに玉座の間を目指して走り出した。

だが、しばらくすると、ゆりかごの防衛機能が彼らを敵性体と認識し迎撃を始める。

スバルは魔法が一切使えないティアナの盾となるために、バイクよりも先を走り防衛砲台を潰していく。

「スバルッ!!」

「でえいつ!!」

防衛砲台の数は多くはないため、スバルが前に出るだけでティアナへの攻撃が減っていく。

「スバル、前！」

「あれはッ！」

さらに進むと、彼らとは別の場所からゆりかごに侵入していた突入部隊の局員たちの姿が見えてきた。

そして、その中に彼らが見知った人物がいるのに気付くと、スバルは声を上げて彼女の名前を呼んだ。

「ヴィータ副隊長!!」

「スバル、ティアナ!？」

彼女——ヴィータはボロボロの身体にも関わらず、突入部隊への攻撃を行っていた防衛砲台を片っ端から潰している最中だった。

そんな時、彼女の耳に聞こえてきたスバルの声に驚きの表情を浮かべながら彼らの方へと視線を向けてきた。

「なのはさんと部隊長の救助に行ってきます!!」

「あとは任せてくださいッ!!」

「あ、おい……!!」

ヴィータが彼らに声をかけようとするが、そんな暇もなく彼らは彼女の横を走り去っていった。

「あいつら……」

過ぎ去っていく二人の背中を見て、ヴィータは、頼んだぞ、二人とも……と静かに胸の中でエールを送った。

「おら、さっさと脱出準備だ。」

あとはあの二人に任せてこの船から出るぞ！」

「ゆりかごの阻止限界点まであと40分！」

「次元航行部隊の到着はまであと何分だ!？」

「あと5分ツ!!」

「間に合わせるツ!!」

二人はタイムリミットまであと少しという状況の中、玉座の間への最短ルートを爆走する。

そして、それが見えた。

「見えた、あそここの壁の向こうよ!!」

「よしッ!!」

玉座の間と通路を仕切る壁。

それが彼らの目の前に見えた直後、スバルはさらにスピードを上げて、壁に迫る。

彼の金色の瞳は、以前以上に輝きを放っていた。

「でええいつ!!」

スバルの出せる最高速度の勢いの乗った左の拳が壁に叩き付けられる。

だが、壁には亀裂が入るだけで碎けることはなかった。

だが、それでもスバルは止まらない。

マツハキヤリバーのローラーが回転し、床の間に火花が走り煙が立ち上る。

「踏ん張れよ、マツハキヤリバーッ!!」

『All right!!』

スバルの右腕から甲高い振動音が響く。

そして、スバルはそれを壁に走った亀裂の中心——先ほど殴りつけた場所へと寸分の狂いなく叩き付けた。

ピシリ——と小さな音になり、それは次第に大きくなり壁の全体に亀裂が走った。

そして、轟音を立てながら壁は崩れ去った。

「なのはさんッ!!」

「助けに来ましたッ!!」

その後、彼らはゆりかごから無事に脱出。

機動六課所属のヘリへの帰還に成功。

同時刻、スカリエツティのラボ周辺のガジェットも、エリオ、キャロ、フリード、ヴォルテールによって大半を破壊し、ラボ周辺の安全の確保に成功した。

ゆりかごは、クロノ・ハラOWN提督率いる次元航行艦隊のアルカシエルの一斉掃射によって次元の狭間に落とされ、その船体を原子レベルまで分解されることとなった。

主犯であるジェイル・スカリエツティと、彼の娘たちの逮捕とゆりかごの破壊によって、今回の大規模騒乱は終わりを迎えた。

後の研究者たちは今回の騒乱において、これほどの規模の事件にシテは死者が一人もいないことに首を傾げていた。

研究者の一人は、ジェイル・スカリエツティの目的が管理局の破壊とは別のものであるのではと考えたが、その考えは時代の中へと消えていった。

ただ、一つ言えることは。

ゆりかごの阻止限界点を防ぎ、スカリエツティの逮捕に尽力した奇跡の部隊があったということだけだった。

ティアナルート 第四十話

『JS事件』。

違法研究者であるジェイル・スカリエツティが起こした大規模騒乱はこの名で呼ばれることとなった。

主犯であるジェイル・スカリエツティは自らの罪を認めるものの、事件に対することには一切口を割らなかった。

彼の娘である戦闘機人たちは、二人を除いて全員が事件の捜査に協力的だったため、特別保護プログラムに組み込まれることとなった。

ナンバーズの長女であるウーノは、黙秘を貫きスカリエツティと同じ軌道拘置所に収監された。

次女であるドゥーエは、レジアス中将自らが監視することを条件に、彼女の補佐官として従事することとなった。

また、彼が自分のラボで拉致監禁していた元首都防衛隊所属の局員は全員が無事に保護されることとなった。

JS事件の数日後。

修復を終えた六課の寮の部屋で中々寝付けなかったティアナは、ベッドから抜け出し夜空の元を歩いていた。

聞こえてくるのは自分の足音と波の音だけ。

「あ……」

そんな中、彼女の視線の先には芝生の上で座り込み空を見上げる一人の青年の姿があった。

焦げ茶色の制服に身を包んでいる彼だったが、左の袖の中にはあるべきものがなかった。

「スバル。」

帰ってたのね」

彼女は座り込んでいるスバルの隣に座る。

「ああ、ついさっきな

しばらく寝付けそうになかったからここでちよつと空見てた」

彼女が隣に座り込んだことで、彼女の身体から感じる柑橘系の香りに少しドキツとしながらスバルは答える。

「腕、やっぱりダメだったんだ……」

「やりすぎだつて怒られたよ。」

しばらくは片手の生活に逆戻りだ」

ティアナがスバルの左の袖を見ながらそう尋ねると、彼は左肩あたりを右手で摩りながらそう答える。

「……ギンガさんは大丈夫だったの？」

「ああ、姉貴も右手が痛んでるけど、他は大事ないってさ。」

あと、お袋もな」

「そう、よかつたじゃない」

スバルは、姉と、死んだと聞かされていた母親が生きていたことに對して嬉しそうに答えた。

そして、互いに無言になる二人。

「……………」

「……………」

どちらもしゃべらずに自分たちの遥か彼方で輝く星々を見つめる。

だが、そんな時間も長くは続かなかつた。

「なあ、ティアナ」

「どうしたのよ、そんなに改まって」

空から視線を戻したスバルは、隣に座るティアナの顔を真剣な表情で見つめる。

スバルの視線を感じたティアナは少し驚きながらも、彼に尋ねる。

「前に言つたら？」

このドタバタが終わったら、返事するって」

「あ、ああ……。」

あれね……」

スバルの言葉に、自分が何を言ったのかを思い出したティアナは顔を紅くしながら目を逸らす。

すべて終わって、冷静になった頭で考えたら、とんでもないことを

口走っていたということに気づいた彼女は恥ずかしくてスバルの顔を直接見ることができなかった。

だが、それはスバルも同様だった。

自分の相棒だと考えていた彼女からの告白、父との話。

そして、自分の中で彼女のことをどう思っているのかということ。

今まで女子との関わりといえば、ティアナだけだったが、そんな彼女の自分を自分が異性として見るようになったことでスバルもまたティアナのことを意識していた。

実際、彼の心臓は今でも鐘が鳴っているかのようなスピードで鼓動を刻んでいる。

「あー、あまりこういうのには慣れてない……ッていうか初めてだからさ。」

回りくどいのはやめにする」

「ティアナ、お前が好きだ。

お前のことが欲しい。

だから、付き合ってくれ」

「え、ちょ……ッ!？」

スバルのプロポーズ紛いの告白に、殊更顔を紅くするティアナ。

自分から告白しておきながらだが、彼女の頭の中はスバルの言葉が反響し、真っ白になっていた。

顔を紅くしながらアタフタとしている彼女は、珍しいものでもあった。

「ほ、本当……?」

「ああ、本当だ。

マジ
本気だ」

何とか混乱の極みから脱したティアナが、最後の確認として尋ねると、間髪入れずにスバルは答える。

そのあまりにも即答ぶりに、ティアナは俯き顔を彼から見えないようにした。

「お、おいティアナ？」

「な、なんでもない……ッ！」

そんな彼女に驚き、今度はスバルがワタワタと慌てだす。

だが、ティアナの方が小さく震え、嗚咽のようなものが聞こえてくるとスバルはそっと彼女の肩に手を置いた。

「泣いてるのか？」

「な、ないてなんか……くしゅんっ！」

スバルの言葉に反論しようとしたティアナだったが、途中でくしゃみで言葉をさえぎられてしまう。

いくら夏の終わりとは言え、夜中の海辺は潮風も吹いておりそれなりに冷える。

また、寝付けずにベッドから抜け出したティアナの格好は半そでのTシャツにホットパンツだけという防寒性もなくでもない服装だった。

「ほら、これ着とけ」

「あ……い！」

そんな彼女の肩に、スバルは自分が来ていた制服の上着を掛ける。両肩から感じるスバルの温かさに、ティアナは顔を上げる。

そして、目の前にスバルの顔があった。

「……」

互いに両想いの二人。

そんな二人が近くに相手の顔があればどうなるのか。

それも恋愛経験ゼロの二人だ。

次第に顔が近づくのは必然だっただろう。

「ほら、もう少ししや……ッ！」

「行けっ！」

「ちよ、部隊長！」

「押さないで下さいよッ！」

「はやてちゃんもヴァイス陸曹も少し静かにしてくださいですう……っ！」

だが、それは彼らの耳にその声が聞こえてこなければの話だった。

あと数センチで互いの唇が触れ合うという距離で、彼らの耳に聞こえてきたその声は彼らが座っている場所のすぐ近くの植え込みから

聞こえていた。

「あー、なんだ。」

ほら、もう冷えるから部屋に戻って寝ろ。

上着は明日返してくれればいいから」

「あ、うん。」

わかった。

その、アリガト」

二人は同じタイミングで立ち上がり、寮への道を歩いて行った。

そんな二人を見ていた、三人は、植え込みからのそのそと出てため息をついた。

「はあ、あと少しやったのに……」

「ちつと騒ぎすぎましたかね？」

「邪魔しちやつたですう……」

三人は、二人が両思いだということに気づいており、J S 事件後、二人がくつつく瞬間を見逃すまいと常日頃注意していたのだった。

だが、そのチャンスはもはやめぐってくることはないだろう。

今回のことで二人がそういう行為を成すときは、周囲に注意を払うことは確実だからだ。

「さ、帰って寝ようか。」

明日も仕事やしな〜」

「寝不足は乙女の天敵ですう」

「俺もこのところ寝不足だから、今日はもう寝るかな……」

そして、三人もそのことには気づいていた。

だからその場から立ち去ろうとする。

しかし、そんなはやとヴァイスの肩をつかむ者がいた。

「ちよつと待とうか、はやてちゃん、リイン、ヴァイス君？」

「あ、なのはさん、奇遇つすね」

「こんな夜中にどないしたんや？」

「ね、寝不足は乙女の天敵ですよ……？」

いつの間にか彼らの背後にいたなのはに対して、三人は無難な言葉で尋ねる。

もつとも、三人とも身体中から冷たい汗が流れ、足はガクガクと震えていたが。

「うん、ちよつと教え子の恋路を見ものにしてる人がいたみたいだからちよつと注意しにね」

「そ、そうなんかー。」

そりや早く見つけなきゃあかんなー。

なー、ヴァイス君？」

「そ、そうっすねー。」

あ！

だったら俺たちも見つけるの手伝いますよー。

ねー、リイン曹長？」

「そ、それはいいですねー。」

手伝いますよ、なのはさん？」

三人は、目の前で笑顔（ただし目は笑っていない）を浮かべるのはにそう告げる。

だが、なのはの返答はいたってシンプルだった。

「少し、頭冷やそうか」

次の日、六課の職員から部隊長、リイン曹長、ヴァイス陸曹が何かに怯えているという報告が各所で挙げられたが、些細な問題だろう。

「ああ、姉貴？」

身体は大丈夫か？

……ああ、こっちも平気だから。

それとき、俺、やりたいこと見つけた。

……あいつを隣で支えていきたいって思ったんだ。

ああ、わかってるよ。

やってやるさ。

惚れた女を守れなくて何が男だってんだ」

スバルの告白から、数か月後。

機動六課も、その役目を終えようとしていた。

「そうか、フェイトさんからか」

「ええ、執務官補佐の試験受けてみないかって」

六課の食堂で、スバルとティアナは温かい飲み物を手にしながら話していた。

あの一軒以来、二人の距離は今まで以上に近づいているのは確かだった。

そんな二人が話している内容は、ティアナの夢への一歩目ということ。

「つまり、ティアナの執務官への道が開けたってことか」

「まだ、スタートラインに立つ前の話よ。」

まずは試験に受かってからの話。

アンタはどうするのよ」

「俺か？」

まあ、お前の夢が見えてきたんなら、俺の夢も叶えるかな？」

スバルの言葉に首を傾げるティアナ。

「夢って何よ？」

「謎のある男ってカッコいいと思わないか？」

「馬鹿じゃないの」

ティアナはスバルの言葉に対して、冷たい視線を向ける。

だが、それでもスバルが何も答えないことを理解しているティアナは素直に諦めることにした。

「そう言えば、今日は部隊長見てないわね？」

「なんか、親父の隊に行ってるみたいだぞ？」

ティアナがふと思ったことを口にしたら、スバルはすぐに答えた。

「108部隊に？」

「なるほど、つまりお前さんは部隊長としての仕事はしばらくやるつもりはない。

そう言いたいんだな？」

「は、はい……」

陸士108部隊。

そのこの部隊長室で、はやてはゲンヤと対面していた。

「この一年で痛感したんです。

まだ私には部隊長は荷が重かったということに。

だから、しばらくはどこかの部隊長の補佐としてやっていきたいな
と思ってます」

温かいお茶の入った湯呑を両手に持ちながらそう告げるはやて。

そんな彼女の様子を見たゲンヤはため息を吐き、懐から取り出した
数枚の紙を引き裂いた。

「つまり、お前はこれだけの部隊長依頼を断るってことだな。

ま、子狸にしては考えたんじゃないやねえのか」

「師匠には負けますけどね……」

「確かに、お前は優秀だな。

才能もあるんだろう、だけど圧倒的に経験が足りなかった。

それを補いたってことだな」

湯呑に入ったお茶を一口飲み、喉を潤したゲンヤははやてにそう尋
ね、はやては静かに頷いた。

「よし、ならお前に丁度いい場所がある」

「へ……う？」

「ほらよ。

これ見てみる」

ゲンヤの差し出した紙を受け取り、内容に目を通すはやて。

そして、ある部分を見て、彼女の頬は引き攣った。

「あ、あの……師匠？」

「これ、渡す紙間違ってますか……？」

「間違ってますねえぞ。」

「それはお前宛てだ。」

「なぜかは知らんが俺のところに届いたがな」

「いや、でも……。」

「なんで『特務一課』の部隊長補佐の候補に私の名前があるんですかッ!？」

「そりゃ、お前。」

「さつき補佐として経験積んでいきたいって言ってただろうが。」

「お前ならそう考えるだろうって思ってた俺が推薦しておいた」

「いや、でもッ!!」

「ちなみに、例の戦闘機人のあー、トーレとセツテもその部隊に行くことになってるから」

「ちよ!？」

「そう、戦闘機人として、戦うことをやめたくはないと主張したトーレとセツテは、短期間の保護プログラムを終えたのちに彼女たち以上の戦闘能力を持つものが集まる特務一課への配属が決定していた。」

「ちなみに、部隊長は別の部隊で副部隊長をしていた男性が務めることとなっており、現部隊長であるミルズは第二小隊の隊長となることが決定しており、隊の主力となる第一部隊の隊長には、管理局に復帰したゼスト・グランガイツが務めることになっている。」

「そのことが書いてある紙を見たはやては仰天し、ゲンヤに断ろうとするがゲンヤはそれを受け取らなかった。」

「おめえ、俺がお前の断ったことで俺にも迷惑かかってんだぞ？」

「それとも何か？」

「師匠の好意を無にするってのか？」

「グツ、卑怯ですよ、師匠……」

「大人ってのは卑怯な生き物なんだよ。」

「よかったじゃねえか、一つまた大人になったな」

「ハハハと笑いながら湯呑に残ったお茶を飲み干すゲンヤを見て、は

やては一言恨めしそうに呟いた。
「このタヌキ親父め……ッ！」

0076年、4月28日。

一年間という試験期間を終えた機動六課では、最後の業務が行われていた。

隊舎のロビーでは、はやてが整列した局員に向けて最後の挨拶をしていた。

「長いようで短かった1年間。

本日を持って、機動六課は任務を終えて解散となります」

はやての言葉をBGMにして、スバルは隣にいるティアナと念話で会話していた。

(ホント、あつという間だったな)

(あつという間というか、濃密というか。

とにかくいろいろあった一年だったのは確かね)

(一年前は……ああそうだ。

確か、便所を我慢してたんだったな)

(ああ、そう言えばそうだったわね……)

二人してそんなくだらないことを話していると、はやての挨拶も終わりに近づいていた。

「皆と一緒に働けて、戦えて。

心強く、嬉しかったです。

次の部隊でも、皆どうか元気に——頑張って」

——魔法少年リボルバースバル 第四十話——

「なんか、あつという間でしたね」

「そりゃ、八神部隊長の挨拶は短いからな。

最初の時もそうだったろ？」

「それに、この後はお別れ二次会もありますしね」

「そうなのよねー」

ロビーでの解散式を終えたフワードメンバーは、二次会の予定されている場所へと向かっている最中だった。

「あ、そう言えばティアアナさん。」

執務官補佐の試験、合格おめでどうございます」

「おめでどうございます！」

「ありがとう、エリオ、キャロ。」

でも、まだまだこれからよ。

私はその先が夢なんだから」

ティアアナはそう言いながらエリオとキャロの頭を撫でる。

そう、依然フエイトから勧められた執務官補佐の試験を彼女は一発で合格した。

そのことを聞いたスバルは、思わずティアアナを抱きしめてしまうほどの喜びようだったという。

「でも、これで六課のみなさんとはお別れなんですよね……」

「スバルさんやティアアナさんともお別れ、なんですよね」

先ほどまでティアアナのことで喜んでいた二人だったが、今度はこれから六課は本当に解散するという事実には悲しそうな表情を浮かべる。

そんな二人の額に向けてスバルは弱めのデコピンを放った。

「そんなにしょんぼりするなよ。」

別に二度と会えないわけじゃないんだ」

額を押さえる二人と視線を合わせるようにしやがむスバル。

スバルは二人の顔を見ながらしっかりと言葉投げかける。

「それにね、別れてるのは、別に悲しいことばかりじゃないのよ」

「別れた後には必ず新しい出会いが待ってるんだよ。」

人つてのは出会いと別れを繰り返していくもんなんだ。

そうやって、つながりを増やしていくんだよ。

だから、お前らもいつまでもウジウジするなよ。

それに、まだ六課はある。

最後まで楽しむほうがいいと思うぞ?」

「そうですね……!」

「いつまでも悲しんでちゃだめですもんね!」

「そう言うことだ。」

子供は笑顔が一番だからな」

二人が笑顔になったのを確認したスバルは立ち上がり、二人の頭に手を乗せ撫でまわした。

スバルが二人を撫でまわしていると、後ろから声をかけられた。

「みんな、ちよつといいかな?」

「あれ、なのはさん?」

「姉貴も……?」

スバルたちは、自分たちの近くになのはたちが近づいていることに気づき、首を傾げた。

あとは二次会だけなので彼女が自分たちを呼ぶ理由がわからなかったのである。

「二次会の前に、ちよつとね」

「「「うわあ……ッ!」」」

なのはとギンガについて行った四人が見たのはこの一年間、世話になりっぱなしだった訓練スペース。

そこに広がる光景に、皆言葉も無しに、感嘆の息を吐いた。

目の前に広がる桃色の花を咲かせた木々。

そして、その花びらが風に舞って空を桃色に埋め尽くすその様は幻想的な空気を醸し出していた。

「この花って、確か……」

「うん。私やなのはちゃんの故郷の花」

「お別れと始まりの季節に、つきものの花なんだ」

エリオの言葉にはやるとフェイトが答える。

スバルは以前ゲンヤに聞いた話を思い出していた。

彼自身、見るのは初めてで、その光景には言葉を失っていた。

「おーし、フォワードメンバー集合!!」

「二二はいッ!」

桜の見せる光景に目を奪われていた四人は、ヴィータの掛け声で意識を引き戻し、声をそろえてすぐに横に並ぶ。

スバルたちが整列するのを待って、なのはが一步前に入る。

「まずは4人とも、1年間、任務も訓練もよく頑張りました」

「この1年間、あたしはあんまり誉めた事無かったが……お前ら、まあ随分強くなった」

「二二……ッ!」

なのはの言葉に続いて、ヴィータの言葉に驚く四人。

確かにヴィータが彼らを褒めたことなど一年の間に両手の指の数で事足りる程度だった。

「辛い訓練、キツイ状況、困難な任務……だけど、一生懸命頑張って、負けずに全部クリアしてくれた」

なのはの言葉とともに、一年の間にあつたいろいろなことが彼らの頭の中を過ぎ去っていく。

短くも濃厚な一年。

この一年は四人に取って忘れられない一年間になった。

「皆、本当に強くなった。」

4人とも……もう、立派なストライカーだよ」

「なのはさん……ッ!」

その一言で、四人の涙腺は崩壊寸前だった。

「あーもう、泣くな! バカタレ共!」

「二二……はい!」

そう言って四人に厳しい言葉を投げかけるヴィータの目にもまた、きらりと光るものがあつた。

「……さて、折角の卒業、折角の桜吹雪。湿っぽいのは、無しにしよう!」

全員が涙を滲ませている中で、湿っぽい雰囲気吹き飛ばすように、なのはが声を張った。

「そうだな」

「自分の相棒、連れてきてるだろうな？」

「「……………へ？」」

シグナムとヴィータの言葉に首を傾げる四人。

自分の得物を持ち出し、すごい笑顔で構える二人に対して、スバルたちの第六感は最大級の警告音を鳴らしていた。

「えっと、なのはさん？どーゆーことでしょうか？」

「折角最後だもん。」

全力全開！

手加減なし！

機動六課で最後の模擬戦!!」

なのはの言葉を聞いたフェイトは、慌てながらなのはの隣に向かう。

「全力全開って……………聞いてないよ!？」

そ、それに今日は折角卒業なんだし……………」

「まあ、やらせてやれ。」

「これも思い出だ」

「硬いこと言うなよ。」

リミッターも解除されたんだしよ」

「も、もう。」

なのはッ!」

「心配ないない。」

皆、強いんだから」

なのはの言葉にフェイトは心配そうな顔でスバルたちの方を見る。

「全力で行くわよ」

「相手はリミッター無しの隊長陣だ。」

「どんなこととしてでも勝つぞー!」

「「はいッ!!」」

スバルたちはやる気満々。

それでもフェイトはどこか不満そうだったが……………」

「フェイトママ、頑張ってる」

「も、もう。」

仕方ないなあ」

同じく訓練スペースに来ていたヴィヴィオの声援には勝てなかった。

渋々とだが、バルディッシュを取り出す。

そして、全員がバリアジャケットを身に纏う。

桃色、金色、紫、赤、蒼、橙色と様々な光が桜の花びらを照らした。

「それじゃあ皆、準備はええか!?!」

「はい!」

「それじゃあ……」

「レディー……」

「ゴーツ!!」

桜とは、別れと出会いを示す花。

だが、別れでもそれが悲しいものばかりではない。

現に、この時の彼らの顔には笑顔が溢れていたのだから……。

——魔法少年リボルバースバル ティアナルート——

《完》

ティアナルート エピローグ

新暦77年

ミッドチルダを震撼させたJS事件から三年。
とある民家の一室で彼女は目覚めた。

「あぁっ!!」

寝坊したッ!!

おい、ウエンディツ、起きろッ!!」

「ん〜?」

なんすか、朝から大声出して……」

「バカ、お前時計見てみるッ!!」

「……あわわッ!」

寝坊っすッ!!

なんで起こしてくれなかったんすか!?!」

「昨日目覚ましセットしたのはお前だろうがッ!!」

「そこはノーヴェも確認しておいてほしかったっすッ!!」

「朝から騒がしいな……」

一家の大黒柱であるゲンヤは二階でドタバタしている娘たちに呆れてため息を吐いていた。

「あら、いいじゃないの、にぎやかで。

私は楽しいからいいけど?」

ギンガは寝坊なんてしないし、スバルはしばらく帰ってこないからちよつとぐらい騒がしいぐらいがちようどいいと思うわよ?」

そう言いながらキッチンから出てきたのは、二年前に意識を取り戻したゲンヤの妻で、ギンガとスバルの母親のクイントだった。

意識を取り戻し、リハビリを終えた後彼女は管理局には復帰しなかった。

流石に十年近く寝たきりと言っていい状態だったため、彼女自身が戻るのを望まなかったのである。

今では家を守る専業主婦として、近所のママさんたちとの交流を深めているところだ。

「まあな。」

「そうだ、チンク、デイエチ、学校の方はどうだ？」

嬉しそうに語るクイントに苦笑しながらゲンヤは自分の前で朝食を口にしていたチンクとデイエチに尋ねる。

「はい、特に問題は……」

「そうじゃなくて、友達とかはできたのか？」

「ええ、まあ……」

「少々うつかり癖のあるやつが一人……」

「ほう、また面白そうな奴と絡んでるんだな。」

「大事にしるよ？」

「はい」

ゲンヤはチンクの返事にウンウンと頷きながら、彼女の隣に座るデイエチに視線を向けた。

「デイエチの方はどうだ？」

「一人で機動兵器作り上げようとしてるのが一人。」

「私と話が合うのがいるなんて思いもしなかったから、よかった」

「そ、そうか……」

デイエチの言ったことに頬を引き攣らせるゲンヤ。

彼は管理局では質量兵器の開発や使用を禁じられている中で機動兵器を製作する学生がいることに驚愕していた。

ちなみに、JS事件の後、保護プログラムを終えたチンク、ノーヴェ、デイエチ、ウエンデイはナカジマ家に引き取られていた。

スバルは姉が二人に妹が二人増えたことに言葉を失っていたが、最近では姉弟仲は良好なようだった。

そして、チンクとデイエチにはスカリエッテイがリミッターを最大まで引き上げ、彼女たちが戦闘機人としての力を容易には引き出せないようにした。

今では彼女たちは普通の学生として生活している。

チンクは魔法関係の学校に、デイエチは技術関係の学校。

そして、ノーヴェとウエンデイはその力で他人を助ける仕事をした
いという思いから、救助隊の訓練校に通っていた。

「みんなおはよう！」

行ってきますッ!!」

「あッ！」

ノーヴェ待つッすよッ!!

行ってきますッ!!」

準備を終えたノーヴェとウエンデイは、二階から駆け降りてきてす
ぐに朝食である食パンを口に咥えて外に飛び出していった。

「まったく、少しは落ち着きというものをだな……」

「まあまあ、いいじゃないの。」

それよりも、確か今日だったわよね?」

「ええ、きつと驚くでしょうね」

「絶対に驚く」

「八神部隊長補佐」

「ん?」

特務一課が再結成されて一年半。

その隊舎で彼女——八神はやて一等陸佐は、自分の名前を呼ぶ声
に振り向き、そしてその顔に笑みを浮かべた。

「ああ、トーレ。」

どないしたん?」

「いえ、報告書の提出をと思いまして。

今は大丈夫でしょうか?」

彼女の後ろに立っていたのは、かつて戦闘機人のNo. 3としては
やての率いていた機動六課と戦っていたトーレだった。

今では、彼女も管理局の制服を身に纏って、地上の治安を守る一員
として働いていた。

「今回の研究所はどんな場所だったんや？」

「詳細は不明ですが、人体実験を行っていた研究所だったようです。すでにデータなどは消去されており、手がかりもほとんどありませんでした。」

今は第三小隊と調査チームが施設の調査を行っています」

「そうか、わかった。」

あとは私が部隊長に渡しとくから、トールレはもう休んでええよ？

確かこの後は休暇やったよね？」

「ええ、セツテと一緒に別の世界で少し腕試ししてきますよ」

トールレの嬉しそうな笑顔にはやては苦笑しながら答える。

「もう、すっかりと休まなあかんのに。」

トールレも立派な戦闘バトル狂ジャンキーやな」

「もともと、戦うのが主任務だったので、そう言う性格にもなります。本来なら、シグナム殿と一戦やりたかったのですが、生憎休みが合わずに……」

「ああ、だからこの間シグナム、元気なかつたんやな……。」

まあええわ。

あまり意味ないかもしれんけど、気をつけてな」

「はい。」

では、失礼します」

トールレは見本ともいえる見事な敬礼を彼女に向けて、去っていった。

そんな彼女の背中を見ながらはやては一言。

「どんな場所にも、あんな人はいるもんやなあ……」

「はやてちゃんー！」

「お、リインやないか。」

なにかあつたんか？」

「部隊長がお呼びですよ？」

早く行かないとまたお説教ですう」

「そらまずいな。」

ほな、はよう行こうか」

「ねえ、ヴィヴィオ、私へんじやないかな？」

「ちよつとは落ち着こうよ、なのはママ……」

とある場所で、なのはとヴィヴィオはある人物を待ち合わせていた。

だが、その待ち人が来るまでなのはは何度も自分の服装を確認しては隣にいるヴィヴィオに尋ねるといふ行為を繰り返していた。

普段とは違い、まったく落ち着きがない母親にヴィヴィオは呆れながら答えていた。

「なのはー！」

「あ……ッ！」

その時、なのはたちの待ち人がやってきた。

メガネをかけた好青年——なのはの魔法の師匠であり、彼女が好意を抱いている人物、ユーノ・スクライア。

ユーノは駆け足で彼女たちの元まで来ると、なのはに話しかける。

「ゴメン、少し遅れちゃった」

「ううん、こつちもさつき来たところだから」

「ホントは三十分くらい前からだけど（ボソ……）」

デートの定番のセリフを言ったユーノとなのははだったが、彼女の隣にいるヴィヴィオは小声でそう呟いた。

「ヴィヴィオも久しぶり」

「久しぶりです、ユーノさん！」

あ、それとも、ユーノパパって言った方がいいですか？」

「ちよ、ヴィヴィオッ!？」

「アハハ、パパはまだ早いかなく」

「まだなんですね」

テンパるなのはと、冷静に答えるユーノ。

そして、ユーノの言葉に脈ありだと勘づくヴィヴィオ。

どこか変わった三人組は、そのまま目の前にある門を潜った。

「ごこつて、最近有名になった遊園地だよね？」

「うん、なんでもちよつと前までは閉園の危機にあつたらしいけど、いろいろやって持ち直したんだって。」

この前エリオ君とルーテシアと一緒に来たキャロが『面白かったですよ』って言つてたから」

「へえ……。」

あ、そう言えばスバル、合格したんだってね？

おめでどうつて言つておいてくれないかな？

よく無限書庫に来てて、話したんだけど連絡先聞くの忘れちゃつてさ」

「ああ、そう言えば今日からだつたね、スバルお兄ちゃんの新しい仕事」

「そうか、ティアナ、ビックリするだろうなあ」

時空管理局、本局。

その通路で、その二人は並んで歩いてた。

「さてと、今日からはもうティアアナも執務官。

いろいろ大変だろうけど、頑張つてね」

「はい、今までありがとうございました！

これからも、お世話になるかもしれないけれど、よろしくお願いします」

二人——フェイト・T・ハラオウンと、ティアナ・ランスター。

並んで歩いてる二人の着ている服装は、黒の制服。

執務官を表す唯一のもの。

だが、フェイトは着慣れた雰囲気だが、ティアナに関してはまだ制服に着られているという感じだった。

「うん、何か大きな事件の時は一緒になるかもしれないから、その時は

よろしくね」

「そんなことはない方がいいんですけどね」

フェイトの言葉に、ティアナは苦笑しながらそう答える。
機動六課が解散して二年。

ティアナは、執務官補佐として、フェイトとともに様々な世界での仕事をこなしていた。

そして、難関と言われる執務官の試験を突破したティアナは、今日、晴れて新米の執務官として任官することになったのだった。

「それもそうだね。

あ、それと、もう一つ」

「……………」

なんですか？」

思い出したかのように手を合わせるフェイトにティアナは首を傾げた。

「ティアナも、執務官補佐やっててわかったかもしれないけど、執務官には最低一人は補佐がいるの。

だけど、ティアナにはまだいないから、私の知り合いに頼んでおいたから」

「え……………」

「大丈夫、ティアナも知ってる人だし、補佐官の試験も満点で合格した優秀な人だから。

それじゃ、執務官としての仕事、頑張ってね!!」

「え、ちよ、フェイトさん……………!?!」

行っちゃった……………」

足早にその場を去っていったフェイトの背中にティアナは、手を伸ばしかけるがすでにその時にはフェイトの身体は離れていた。

仕方ない、と肩を落としながら彼女は自分に与えられた部屋に入った。

それからしばらくして、彼女の部屋の呼び鈴が鳴った。

「あら、もう来たのかしらね」

『そのようです』

ティアナの言葉に、デスクの上におかれたクロスミラー・ジュが言葉短く返答する。

「どうぞ」

「失礼します」

聞こえてきたのは、青年の声。

初対面の人物、それも優秀な成績で補佐官になったとフェイトから聞かされていたティアナは軽く姿勢を正して中へ入るように促した。

そして、その人物が入ってきたと同時に、彼女の頭の中は真っ白になった。

「本日付けで、ティアナ・ランスター執務官の補佐官となりました、スバル・ナカジマです。」

「これからよろしくお願ひします」

「な、な、な……ッ!!」

青年——スバルは部屋に入ると、見事な敬語でティアナにそう告げた。

対するティアナは、しばらくぶりに見た愛する人がここにいるという事実を未だに信じられていなかった。

「あ、あんた、スバルッ!!」

「な、なんで!?!」

「なんでって、俺がお前の補佐官だからだよ。」

「ほら、補佐官のバッチもあるぞ?」

デスクから立ち上がり、スバルのもとに詰め寄るティアナ。

この一年近く、ティアナは補佐官として、また執務官を目指すための勉強で忙しく、スバルもまた彼女とはあまり連絡を取らないようにしていた。

そして、一年という歳月は、スバルの身体を一回り大きく成長させた。

自分よりも高い場所にある彼の顔を見ながらティアナは、彼に詰め寄るが、スバルは制服の襟につけられた補佐官を示すバッチを見せる。

「それに、言っただろ?」

俺の夢が決まったって」

「え……、ああ、あの時ね」

「そうだよ、あの時のことだ。」

俺の夢は、お前を隣で支えること。

俺の夢も、お前の夢も一緒に叶えた。

これからは、ずっと一緒だ」

スバルの言葉に、ティアナは目に涙を浮かべながらも笑顔で答えた。

「バカッ！」

「バカで結構。」

お前と一緒にいられるなら、バカになってやるさ」

二人は、仕事場だということを忘れ、互いの背に腕を回した。

二人の影が一つになるのを、二人の愛機は、静かに見守っていた。

これが、後の時代に、管理局の英雄と呼ばれるほどのコンビとなるティアナ・ランスター執務官とスバル・ナカジマ執務官補佐の始まり。

二人は公私に渡り、互いのことを支え、時には言い争いながらも、後の世を駆け抜けていった。

ティアナルート 番外編 その一

JS事件が終わって、二か月後……。

「え、休みですか？」

「うん、今日はスターズ、明日はライトニングは終日休日とします」
事件が終わっても、フォワードメンバーの訓練は終わらない。

ゆりかご内部での怪我が回復したなのはとヴィータによる訓練は、
一時期は軽めのものばかりだったがここ最近は、事件前の一番キツイ
訓練以上のものが行われていた。

そんな早朝の訓練を終えたスバルたちになのはが告げたのは休日
の知らせ。

急にできた休日に喜びの声を上げる四人。

そんな四人の様子を見たなのはとヴィータは苦笑しながら話を
つけた。

「今回の休みは、事件解決の後もまとまった休みがなかったことに対
してのお詫びみたいなものもあるんだ。

だから、ちゃんと気分を切り替えてね」

「とりあえず、ライトニングの明日の訓練はフェイトに頼んであるか
ら、明日はがんばれよ。

スターズは、今日は目いっぱい遊んで来い」

「「はいっ！」「」」

「それじゃ、クールダウンして解散！」

「「「お疲れ様でした！」「」」」

「それで？」

「今日はどうするの？」

「どうするって言われてもなあ。

いきなりの休みだからやることもないし……」

なのはたちから休みをもらった二人は、以前と同様に、バイクで街

まで足を運んでいた。

以前と違うのは、ティアナがスバルの腕に自分の腕を絡ませているということだけ（周囲では、独り身の男が血涙を流していた）。

「それもそうね……。」

「ゲーセンにでも行く?」

「お、いいな。」

「確かあれが稼働してたはず」

ティアナのゲームセンターに行くという提案を聞いたスバルは、あることを思い出しそれを快諾した。

「おーおー、やっぱりいつ来てもここは騒がしいな」

「これがないとゲーセンっては何もないけどね」

しばらく歩いていた二人は目的地であるゲームセンターに辿り着いた。

中に入ると、外に漏れていた音が、大音量で彼らの鼓膜を叩き、その音を伝えてくる。

「そう言えばスバル、さっき言ってたあれって何よ?」

「ああ、行けばわかるさ」

ティアナがスバルに尋ねるも、彼はそれに答えず足を進め、ティアナも彼に遅れないように彼の後を着いて行く。

彼が足を止めたのはゲームセンター内の一角に設置された大型の機械の前だった。

少なくとも一人一人は入れる電話ボックスのような機械が四つ横に並び、その真ん中に大型のモニターが設置されていた。

「これ?」

「ああ、今話題のシミュレーターゲーム。」

『エクストリームデュエル』だ」

スバルは何も知らないティアナにそのゲームの内容を説明していった。

エクストリームデュエルとは、とある科学者が魔導師の戦闘シミュレーターを遊戯用にしたモノがもととなった者である。

そのため、現役の魔導師であれば、デバイスをセットするだけで自分の使える魔法が忠実に再現されるようになっていく。(元が管理局でも使用されていたシミュレーターなので、レアスキルの再現もある程度可能となっている)

そして、魔導師でない一般市民でも楽しめるように、プレイ時に一枚割り当てられるカードに登録された魔法を使用可能になるなどの救済措置もとられている。

そのカードを集め、自分なりの戦術を創り出しデッキをセットすることで、現役の魔導師相手に勝利することも可能だ。

また、二対二のチーム戦のため、互いにコンビネーションを求められるというところもある。

そう言った戦略性も必要となるこのゲームは稼働して一月も経たずに大人気のゲームとなったのだ。

「スバル、そのとある科学者って……」

「サカキ博士だよ。」

拘留中のスカリエツティと話している最中に思いついたんだと

「いったい何を話してたのよ、その二人は」

大人気ゲームの誕生の裏話を聞いたティアナはげんなりとしていた。

そんな彼女をそばに、スバルは大型モニターの中で行われているリアルタイムの試合を観戦することにした。

「へえ、片方はエリオたちと同じくらいの女の子じゃないか」

「相手は……私たちと同じくらいの学生みたいね」

モニターに映っていたのは、四人のプレイヤー。

片方は、茶色のショートヘアに紫色のバリアジャケットを来た少女と、水色のツインテールにレオタードにマントの少女。

対するものは、どちらも黒髪の半そでの学生服を着た青年の二人組。

一見すると、青年組の方が有利に見えるかねないが、戦況は完全に少

女二人組の方に傾いていた。

水色の髪の少女が圧倒的なスピードで戦場を駆け抜け、青年のコンビネーションを崩す。

そのスピードについて行こうとした時、二人に向けて炎を纏った砲撃が加えられる。

何とかその砲撃を防いだ二人だったが、片方はマントを纏った少女の鎌に吹き飛ばされ、もう片方はショートヘアの少女の仕掛けたバインドに捉えられてしまう。

『いつくぞー、パワー極限ッ!』

『疾れ明星、すべてを焼き消す炎と変われ……ッ!』

モニターから二人の少女の声が聞こえてくる。

ツインテールの少女の手から六つの雷の刃が相手に突き刺さりその動きを封じる。

また、ショートカットの少女は、動けない相手の懐に一気に飛び込み相手を砲撃で吹き飛ばす。

『雷光封殺爆滅剣ッ!!』

『真・ルシフェリオンブレイカーッ!!』

彼女たちの声が聞こえてきた後、片方は突き刺さった雷の刃が爆発し、もう片方は、なのはのスターライトブレイカーもかくやと言わんばかりの砲撃が相手を呑み込み勝負は決した。

「すごいわね、なのはさん並の砲撃じゃないの」

「というか、あれはカードから出る魔法じゃないな。」

つまり、あの二人は魔導師ってことだな」

スバルとティアナが少女たちのことを観察している間に、機械から負けた二人組が悔しそうに出てきた。

「くっそー、なんだよあれ。」

強すぎだろ」

「これで六連勝。」

ここに居るのは全員負けっことだな」

そんな言葉を耳にした二人の顔には笑みが浮かんでいた。

ゲームとはいえ、あれほどの腕前の魔導師に自分たちがどれほど通

用するのかを確かめてみたいという思いが二人の胸には浮かんでいた。

「なになに、『星光の殲滅者』に『雷刃の襲撃者』？」

「すごい名前ね」

「名前はかっこいいな。」

「それに戦い方も」

「どう、あれに勝てると思う？」

「やってみるしかないだろう」

「そうこなくっちゃね」

二人はそう言いながら機械の中へと足を進めた。

「ねーねー、シユテルン。」

みんなそこそこ強いけど、なんか詰まんない」

その時彼女——シユテル・ザ・デストラクターは自分の相方としてこのゲームに参加しているレヴィ・ザ・スラツシャーがつまらなそうに話しているのを無表情な顔で聞き流していた。

「そうですね……。」

「なら、次の対戦相手で最後にしましょうか。」

「王たちもそろそろ集合場所に来る頃でしょうから」

「うん、わかったー！」

聞き流してはいても、彼女も同じ思いだった。

「遊戯とは言え、勝負事。」

もつと熱くなれる闘争が楽しめると思っていたところでこれだ。

これでは退屈になるのも当たり前前だと、彼女は心の中で考えていた。

「あ、シユテルン、次の人が来たみたいだよ！」

「ええ……ッ！」

レヴィからの知らせを受けたシユテルは目の前に展開された魔法陣から現れた二人の少年と少女を見て心が震えた。

かつて、自分と魔法の勝負で競い合った自分のオリジナルと似たバリアジャケットを纏った二人組。

そして、その身体から溢れる強者の匂い。

無意識に彼女の顔には笑みが浮かび、手に持った愛機『ルシフェリオン』を握る力が強くなった。

「ごきげんよう。」

あなたたちの相手を務めさせていただきますシュテル・ザ・デストラクターと申します。

シュテルとお呼びください」

「僕はレヴィ、レヴィ・ザ・スラッシュャー！」

よろしくね！」

勝負を始める前の礼儀として名乗りを上げる。

彼女たちの名を聞いたスバルたちもまたそれぞれ名乗りを上げる。

「管理局機動六課スターズ分隊所属のスバル・ナカジマだ」

「同じく、スターズ分隊所属のティアナ・ランスターよ」

管理局。

その名前を聞いたシュテルは二人から匂う強者の匂いに納得がいった。

「さて、名乗りを上げたのです。

始めましょう、心躍る闘争をッ！」

ティアナルート 番外編 その二

シュテルとレヴィ。

二人を前にしてスバルとティアナは中々出ることができなかった。二人の実力が自分たち以上であることは先ほどの戦闘でよくわかっていた。

そのため、うかつに手を出したらやられることを今までの経験から理解していた。

「どうする？」

「向こうの出方を待っていたいけど……ッ」

待ちの一手ではどうしようもないということを瞬時に判断したティアナだったが、彼女よりも早くレヴィが動いた。

「来ないなら、こつちから行くよおッ!!」

「スバルッ！」

「応きッ!!」

飛び出してきたレヴィに対してスバルが真正面からぶつかると。

振り下ろされたレヴィのデバイス『バルフィニカス』とリボルバーナックルが火花を散らす。

「やるやるっ!!」

でも、これならどうかなッ!!」

一端スバルから距離を取ったレヴィは素早く四発の直射魔法を展開する。

「スバルッ！」

「レヴィの邪魔はさせません」

スバルに向けて放たれたそれを撃ち落そうとするティアナだったが、彼女に向けて炎の奔流が迫る。

それを紙一重で躲すが、バリアジャケットに焦げ目がつく。

「チィッ！」

「パイロシューターッ！」

互いに誘導弾を撃ちあうシュテルとティアナ。

だが、シュテルの誘導弾は炎熱の変換がされており、掠るだけでダ

メージを受ける。

戦況は確実にシユテルに傾いていた。

「くそッ！」

「いつけえッ、電刃衝!!」

放たれた直射弾を何とか捌くスバルだったが、完璧にすべてを捌くことはできずに数発もらってしまふ。

「ヤバッ！」

「逃がさないよッ！」

光翼斬ッ!!」

そのうちの一発が、スバルの両腕をかち上げた。

体勢が崩れたスバルに対してレヴィはその隙を逃さずに斬撃を飛ばす。

「マツハキヤリバーッ！」

『All right』

スバルの掛け声とともに、リボルバーナックルから二発のカートリッジが吐き出される。

「ハーケンインパルスッ!!」

「オワッ!!」

スバルの脚から放たれた魔力弾がレヴィの斬撃を切り裂き、レヴィ自身にも迫った。

それを危なげなく回避したレヴィだったが、その速度にはさすがに驚いていた。

「おー、すごいッ！」

だったら、こっちも本気で行くよッ!!」

『スプライトフォーム』

レヴィがスバルにそう宣言し、バルフィニカスのコアが二度明滅すると、レヴィのバリアジャケットが弾けた。

「これが僕の真骨頂ッ!!」

「何っ!?!」

手にしたバルフィニカスが鎌の状態から大剣へと姿を変え、レヴィは先ほど以上の速さでスバルに迫った。

経験から察したスバルは、すぐに防御態勢を取るが、レヴィのスピードに乗せた大剣の一撃はスバルを吹き飛ばした。

「まだまだ、これからだよッ!!」

「ええい……ッ!」

「クロスミラージュッ!」

『Fake Silhouette』

シュテルの一瞬のスキを突いて、ティアナはフェイクシルエツトを展開し無数の自分の姿を周囲に顕現させる。

それに対して、シュテルはその幻影に驚きながらも冷静に言葉を放つ。

「幻影ですか。」

「なら、すべて焼き付くつのみッ!!」

『フレアバースト』

ルシフェリオンから放たれた火炎弾は幻影の中心にたどり着くと、周囲に炎を撒き散らす。

周囲にばら撒かれた炎は幻影をすべて残らずに消し去った。

「いない……ッ!?!」

幻影の中に本体がないことに気づいたシュテルだったはずなのに、その場から飛び退いた。

すると、先ほどまで彼女がいた空間の背後から数発の直射弾が通り抜けた。

「なのはさん直伝のアクセルシューター、やってみせるッ!!」

「やはり、貴方たちはナノハの……ッ!!」

ティアナは以前では扱いきれなかった数の誘導弾を確実に操り、シュテルに追いつがる。

対するシュテルは、自分に迫る誘導弾を撃ち落せるものは砲撃で撃

ち落とし、それを逃れたものはルシフェリオンで打ち砕いた。

「やっぱりやりずらいッ！」

スバルッ!!」

「ヤバっ、シュテルンっ!!」

「了解ッ!!」

「……………ッ!?!」

シュテルルが背後から飛んできたレヴィの警告に気づいたときには、彼女の身体はスバルの拳に捉えられていた。

「シュテルン……………ッ!?!」

「よそ見は……………禁物よッ!!」

シュテルルが吹き飛ばされたことに気を取られたレヴィは、いつの間にか近づいていたテイアナに砲撃を撃たれた。

間一髪、直撃を避けたレヴィだったが、砲撃の余波で彼女の身体は弾き飛ばされてしまう。

「ナイスタイミング、スバル」

「こつちもやり辛かったからな。」

そつちは頼んだ」

「ええ、任せなさい」

背中合わせにそう言いあう二人の目には、互いの次の相手の姿しか映っていないかった。

「中々いい拳でした……………」

「ちえ、あんな見え見えの砲撃に飛ばされちゃうなんて……………」

「ですからこちらも」

「もう頭に来た……………」

「本気で行くっ!!」

『Drive ignition』

「まずいな……………」

「本気にさせちやっただみたいね……………」

「どうするっ..」

「どうするって、決まってるでしょ..」

「フルドライブッ!!」

『Drive ignition』

「ギア」

「モード」

「エクセリオンッ!!」

「デイズターヒートッ!!」

「デイバインバスターッ!!」

「甘い甘い……ッて嘘おッ!？」

「こつちよこつちッ!!」

「捉えた、打ち抜くッ!!」

「炎熱ッ!!」

「雷光一閃ッ!!」

「グウ……ッ!!」

その後、その試合は白熱したものとなった。

赤と青の砲撃が飛び交い、その間で水色と橙色の軌跡が交わる。

片方で爆発が起きれば、片方では障害物である廃墟が切り裂かれる。

まるで本物の戦闘を間近で見ているような雰囲気、観客たちは味わっていた。

だが、物事には始まりがあるように、終わりも訪れる。
すでに四人に与えられた耐久値はあと一ケタとなっていた。

「次で終わりですね……。」

本当なら、もつとこの闘争を楽しみたいところですけど……っ」

「またやればいい。」

これはゲームなんだから」

「そうだね、またやってくれるかな、オレンジちゃん？」

「こつちの休みが取れてればね」

それぞれの位置は、レヴィとシュテルが、スバルとティアナを挟み込む形になっている。

スバルとティアナは互いに相手の背を感じ、そして、長年一緒に戦ってきた経験から相手が次、何をするのかを数ある可能性から絞り込み、特定した。

「疾れ明星、すべてを焼き消す炎と変われッ！」

「パワー全開ッ!!」

「この一撃にすべてを掛ける……ッ!!」

「集え明星、すべてを貫く光となれ……ッ!!」

互いのデバイスに魔力が集中する。

そして、全員の魔法の発射のタイミングが揃ったとき、ティアナの声が響いた。

「スイッチッ!!」

彼女の声を聞いた直後、スバルはティアナと場所を一瞬にして入れ替えた。

「真・ルシフェリオンブレイカーッ!!」

「砕け散れ!雷神滅殺極光斬ッ!!」

「スターライトブレイカーッ!!」

「ストライクブレイザーッ!!」
シュテルとティアナの砲撃。
レヴィの斬撃とスバルの高圧縮された魔力の奔流。
そのすべてが一瞬にしてはじけ飛んだ。

「いやー、楽しかったっ！」

「またやろうね!」

「こっちもいい気分転換になったさ。」

「なあ、ティアナ」

機械から降りたレヴィとスバルが互いにそう言いながらティアナの方を向く。

「なるほど、貴女とあちらの少年はナノハの教え子ということですね。
通りで、戦い方に彼女の顔がチラついたわけだ」

「あの、シュテルさんはなのはさんと知り合いなのですか？」

「というか、向こうのレヴィさんもだけど、そっくりなんですけど……」

「なに、魔法戦のライバルといったところですよ。」

昔、ナノハと戦うことがあったという程度ですが」

「なーんか、難しい話してるね」

「というか、俺も気になってたんだが、レヴィはフェイトさんと何か関係あるのか?」

シュテルとティアナの話を聞いていたスバルは、隣で頭の後ろで両手を回しているレヴィに尋ねる。

その問いに対して、レヴィは少し考えるそぶりして、答えた。

「んー、姉妹みたいなものかな?」

向こうがお姉ちゃん、僕が妹みたいな」

「へえ、フェイトさんにも妹がいたんだな。」

なんというか、雰囲気似てないけど」

「さて、それでは私たちはこれで」

「もう行くのか？」

「うん、僕たちも他に一緒に来てる子がいるしねー」

「そう、なら気を付けてね。」

まあ、貴女たちなら大丈夫でしょうけど」

「お気遣い感謝します。」

それでは、また」

「まったねー」

そう言ってシユテルは丁寧なお辞儀をし、レヴィは元気いっぱい
手を振って、その場を後にした。

去っていく彼女たちの背中を見ながら、スバルはティアナに話しか
ける。

「強かったな」

「ええ、とつても。」

でも……」

「渡り合えた。」

やってきたことは無駄じゃないってのはわかった」

「なのはさんとヴェータ副隊長には感謝しきれないわね」

「まったくだ」

そう言いながら、二人は、また彼女たちと戦える日が来るのを楽し
みにしていた。

「む、来たか。」

遅かったな」

「申し訳ありません、王よ」

「ごめんねー。」

「ちょっと面白い子たちと遊んでたんだー」

「ふむ、うぬらが面白いということは、強かったのか？」

「ええ。」

「それも、ナノハたちの教え子だそうですね」

「ほほう、あの子鴉と一緒にあったあいつの……。」

「あれから十年たっているというのは本当らしいな」

「ねえ、王様。」

「今日はこれからどうするの？」

「そうだな……。」

「子鴉どものところに行くのも面白いと思っておったが、今日はユーリのために来たのだ。」

「今日のところはやめておこう」

「そのユーリはどこに？」

「姿が見えませんが……。」

「あれ、そう言えばあの二人もいないねー」

「ユーリをあの姉妹が連れて行ってしまったのだ。」

「まったく、どこをほつつき歩いているのかもわかりません。」

「そこでだ、お前たちにも手伝ってもらおうぞ。」

「シユテルは西を、レヴィは東を頼む。」

「我は南に向かう」

「承知しました、ディアーチェ」

「まっかせてー！」

「この後、彼女たちが引き起こす騒動に、機動六課が巻き込まれることになるとは、この時はだれも思ってもいなかった。」

「しかし、その話はまた別の機会に。」

ティアナルート 番外編 その三

——え、いきなりなんだよ、リリイ——

——スウ兄のことを教えてって、ていうか、アイシスもかよ……

——ゴホン、スウ兄は俺の恩人で、憧れなんだ——

——魔法戦記リボルバースバルForce——

——予告編——

「くそ、ここは鉱山遺跡じゃなかったのかよ……」

『どう見ても研究所ですね。』

何やら怪しげなものもありますが……』

ごく普通の一般人である少年、トーマ・アヴェニールとその相棒ステイード。

彼らが出会ったのは、言葉を話すことができないう少女リリイ。

——ダメっ、来ちゃダメッ!!——

「大丈夫、俺が助けるから……ッ!」

「侵入者だと……ッ!?!」

いかん、今すぐ焼却処分だッ!!

シュトロゼックごと消し炭にしろッ!!」

「——ッ!」

「まずいな……」

「大丈夫、絶対に助けるから」

エンゲージ

誓約

魔法とは異なる力、ECデИБライダー。
それを手に入れた彼の生活は、一変する。

「旅は道連れ世は情けつてね」
物好きな美少女、アイシス。

「いいか、坊主。
要件は一つだけだ。

テメエが盗み出したデИБライダーとリアクター、両方纏めてこっち
によこせ。

ガキのオモチヤには過ぎた品だ」
謎の襲撃者、ヴェイロン。

『『動くな』と警告はしたぞ。

一歩でも動けば、誰であろうと斬り伏せる」
「面白いことを言う騎士だ。

公僕とは思えんな」

古代ベルカの騎士、シグナム。

ECデИБライダー保持者、サイファア。

「そうか……。

シグナムが……。」

「意識不明の重体です。

アギトも……。」

「仕方ない、できれば戦力は十分に整えてからがよかったんやけど、も
う四の五の言ってられる暇はないな」

「なら……っ」

「うん、特務六課の切り札を使うよ」

「スバル！」

「なのはさんツ!!」

「久しぶり、ティアナは？」

「あいつは今別ルートから調べてます。

ティアナからは俺はこっちの方に行けって言われて」

「うん、今回はそれがいいかも。

どっちにしろ、戦闘になる可能性は高いから」

「主砲二人、準備はええか!？」

『アグレッツサーー、了解!』

ストライクカノン、撃ちますツ!』

「ウォーハンマー、プラズマパイル命中!

敵艦上部隔壁を貫通しましたツ!!」

「主砲は機関部への砲撃を継続ツ!

突入部隊、準備はええな!!」

「こちら突入部隊、いつでも行ける」

「スバルさん、大丈夫ですか、トーマのこと……」

「心配するな、エリオ。」

トーマは必ず助ける。

お前はお前の心配をしてろ」

「行くよ、エリオ、スバル。」

突入だ」

「はいッ!!」

「外壁、完全に修復されたみたいです」

「関係ないな、どっちにしろ制圧して出る予定だったんだ」

「ほう、これまたずいぶんな自身だな。

我々の本拠地に取り込んでおきながら、生きてそのまま帰れるとでも？」

「管理局特務六課制圧部隊だ。ライオットチーム

一応言っておく、武器を捨てて投降しろ」

「ソードブレイクッ!!」

「ハッ!

右腕、いただきだ」

「誰がッ!!」

——やめてくれ——

「スバルさんッ!」

「モードBSK、発動ッ!」

——やめてくれ 痛いんだ……——

「ハハハッ!!

やるなあ、公務員ッ!!」

——傷つけようとする意志が——

「バルディッシュユ……ッ！」

「やらせんよッ！」

——破壊しようとする力が——

「こちらアグレッツサー2！」

ウォーハンマーのバッテリーがヤバイッ！
一度帰還するッ！」

——頭の中に突き刺さる——

「アグレッツサー1、なのはちゃん!!

砲撃はまだ行けるな!」

——なんでみんな、どうしてみんな——

「少しきついけど、まだ行けるよ！」

——俺や、俺が大切にしているものに……——

「制圧部隊との連絡は!」

「依然通信不能!!

敵艦内の状況把握も不可能です!」

——酷いことばかりするんだ……ッ——

「ステラ、振り切れないのですか?」

「向こうも最新鋭の艦だから、難しい。
けど、やってみる」

——傷つけるものみんな 邪魔をするものみんな——

「……………あああッ！」

——怖い戦いも全部みんな——

『Start-up
起 動』

——消えてなくなればいいっ!!——

『Divide Zero Eclipse』

(くそ、BSKモードが一発で強制解除された……………ッ！
視力回復を最優先……………ッ！)

「管理局の人……………」

要救助者が二名います。

お願いです、この二人を助けて」

「……………ッ、トーマ……………ッ!？」

「その声、スウ兄……………!」

「こちら飛翔戦艇フツケバイン操舵手兼管制責任者。

今現在、侵入してきた局員と民間人二人を預かってます。

無事に返す意思はあるから、安心して」

(子供……………?)

「あと数分もあれば私たちの翼は力を取り戻す。

それまでの間は一応人質です。

攻撃してこないこと。

それから!!

特務だか何だか知らないけど、当面は私たちに関わらないでよね!!
そりや指名手配されてるのは知ってるけど、私たちは少なくともこの数年は管理世界での大きな事件は起こしてないんだから!!

ちゃんと外でやってるんだから、面倒な手続きまでやって追つてくるよりも先にやることがあるでしょ!?!」

「こちら、特務六課部隊長八神一佐や。

生憎やけど、こちらは地上と海のどちらからも特例が下つとる。

管理外でも、あんたらを追い回すというな。

安心してええで。

アンタらに言われんでもこの騒動の裏はこつちも知つとるから」

『相棒、行けますか』

「ああ。

BSKの連発はきついが、そうも言ってられないからな。

あのバカヤロウは一度ぶん殴ってやらねえと気がすまねえ」

『ならば行きましょう。』

貴方の助けを待ってる人がいます』

「了解、ソードフィッシュ1。」

スバル・ナカジマ……出るツ!!」

『来ました』

「わかってるよ。

スバルツ!!」

「はいっ!!」

『ソードブレイカー、発動』

「目覚ませこのバカ野郎ッ!!」

「トーマッ!!」

大丈夫、私が絶対に貴方を助けるからッ!!」

——リアクトドライブッ!!——

「これは……ッ!」

『どうかしましたか、ランスター執務官?』

「ええ、重要な資料を見つけたわ。

今からそつちに戻るから……ッ!」

——振り下ろされた凶刃

『ランスター執務官?』

どうしたのですか?

何かあったのなら、こちらから向かいますが?

ランスター執務官、応答を……』

——忍び寄る不穏な影

「なるほど、エクリプスウイルスか。

次代を担うクリーンエネルギー。
新時代の灯火ともしびとなりうる可能性を秘めた力か」

——時代は進み、新たなる力を求める者が現れる。

「人を犠牲にして得るクリーンエネルギーなんて糞くらえだよ。
私自ら潰してやろうじゃないか。」

そうは思わないか、レジアス閣下？」

「ふん、そのようなこと聞かれるまでもない。」

それで、何が望みだ？」

「決まっています。」

彼女たちを呼び出してほしい。

彼女たちには悪いが、これは流石に見過ごすのは無理だからねえ」

「いいだろう。」

それで、お前は どうする？」

「何、もう一人手伝いを頼みたい人物がいるから、そちらに挨拶に行こうと思ってる。」

ウーノ、彼女たちへの連絡は任せるよ」

「はい、ドクター」

「やあ、久しぶりだね、ドクター。」

いや、ジェイル・スカリエツテイ」

『ああ、数年ぶりだね。』

プロフェッサー・サカキ』

魔法戦記リボルバーズバルForce

Coming soon

ノーヴェルット 第一話

夜の海岸で、スバルは不意に鳴った携帯端末の画面を見る。

「非通知……？」

そこに映っていた電話番号は、彼の端末に登録されていないものだった。

その覚えのない番号にスバルは首を傾げながらも通話ボタンを押す。

「はい、もしもし？」

『あ、あたしだ。』

この間、道を尋ねた。

スバル・ナカジマ……の番号であつてるんだよな……？」

端末から聞こえてきた遠慮がちな声を聞き、スバルは以前街で出会った少女の顔を思い出していた。

「ああ、確かに俺がスバルだ。」

それで？

何かあつたのか？」

『別にようはないけど……』

まだちゃんとした礼をしてなかったから』

「礼……？」

この間お礼は言われた記憶があるけど……』

『あれは言葉だけだろ。』

それじゃこつちの気が済まないんだ』

真面目な奴だな……とスバルはそう思いながら苦笑する。

スバルは近くの芝生に座りながら、そうだなと考え、そして一番大事なことを思い出した。

「そうだ、一番大事なことを忘れてた」

「ん？」

なんだ？」

「名前、教えてくれよ」

『あー、そう言えば言っていなかったな……』

スバルの言葉を聞いた少女もまた思い出したかのように呟く。
すると、少女は一度ため息を吐いて言葉を続けた。

『名前か……。』

ノルンって呼んでくれ』

「ノルン……、うん。」

いい名前じゃないか」

少女……ノルンの言葉にスバルは彼女の名前を小さく繰り返して
そう返す。

彼の返答にノルンは声を上ずらせた。

『……それで？』

名前を覚えてくれてただけじゃないだろうか？』

「え？』

俺はそれだけで十分だったんだが……」

『それじゃあたしの気が済まないって言ってるだろうが。』

ほかになんかはないのかよ？』

スバルは顎に手を当てて考え込む。

そして、一つの答えに行きついた。

『どうしても言うなら……。』

これからもちよくちよく話し相手になつてくれないか？』

『話し相手？』

別にいいけど……、なんでだ？』

別にお前相棒とかいないわけじゃないだろ？』

ノルンはスバルにそう尋ねる。

彼女の問いにスバルは苦笑しながら答える。

「相棒だからこそ、話せないこともあるんだよ。」

まあ、管理局のことを話すのがダメなこともあるけど……」

『そこは仕方ないだろ。』

まあ、話し相手つてのは別にいいけど。

お前はそれでいいのかよ？』

「だからいいって。」

時間は……そうだな。」

今と同じくらいなら仕事も終わってるからいいか。
というわけで、よろしくなノルン」

『勝手に決めるなよ。』

まあこつちも別にその時間は空いてるからいいけど……』
そうして、彼らの奇妙な関係は始まりを告げた。

「話し相手……か」

ノルン——ノーヴェは手に持った端末の画面に映る番号を見ながら小さくため息を吐く。

「何やってるんだろうな、あたしは……」

本来、あり得るはずのなかった関係。

それを自分から繋ぎ止めることになるとは思っていなかったノーヴェは、自分の中でそれも悪くないかと思っていることを不思議に思っていた。

「なんであんなこと言ったんだか……」

そう言いながらも、彼女の顔には微笑みが浮かんでいた。

それから、彼らはそれなりの回数の会話を続けていた。

曰く、訓練が大変。

曰く、姉の悪戯がシャレにならない。

曰く、相棒の訓練の密度が異常。

曰く、父親の作った発明品が暴走した。

曰く、同僚のヘリパイロットの妹自慢が長い。

曰く、父親が研究していたものが爆発した、等々。

色々なことを話し、彼らは互いのことをそれなりに理解し始めていた。

「あー、ノルン？」

朝早くに悪いけど、今日は何か予定あるか？」

『ん？』

急にどうしたんだ？

別に予定はないけど……』

二人が文通ならぬ電通の関係になって十数日後、スバルは恐る恐るノルンにそう尋ねた。

早朝訓練を終えた彼ら新人達に対して、ホテルアグスタ以降初めての全日休養が与えられたのだ。

そこで彼はノルンとあつて話がしたいと考え、彼女に電話したという事だった。

彼の言い方を疑問に思いながらもノルンは予定はないと答え、その答えに対してスバルはほっと安堵の息を吐いた。

「いや、しばらく休みがなかった事でオールで休みが入ったんだよ。

だからさ……その……、久しぶりに会って話さないかって思ったんだが……」

『別にいいけど……』

「いいのか!？」

よし、じゃあそうだな……、十一時頃に駅前で！」

『お、おう。』

なんか嬉しそうだな、お前』

「そりゃ、いつも声だけの相手と顔合わせて話すんだ。

楽しみに決まってるだろ？」

それじゃ、十一時にな」

『ああ。』

それじゃ』

ノルンとの約束をつけたスバルは、訓練後の疲れなど吹き飛んだかのような表情で隊舎へと戻っていった。

そんな彼の後ろ姿を見ていたエリオとフリードが首を傾げているとも知らずに。

「……どうする」

その時、ノーヴェエもまた彼女なりに悩んでいた。

彼女たちナンバーズに対して、スカリエツティは特に生活に対しての制限を設けてはいなかった。

そのため、彼女たちの中には普通の人間としての生活というものに対しても理解のある者が多かった。

そして、ノーヴェエもその一人だった。

彼女とて、戦闘機人とはいえ一人の少女だ。

普通の服を着たりするし、女性向けの雑誌を読んだりもする。

そのため、彼女は今非常に悩ましい問題に直面していた。

「どれを着ていけばいい……う？」

ノーヴェエは自室のクローゼットの中に並ぶ服を見ながらそう呟いた。

クローゼットの中には、彼女が自分で買った服や、彼女の姉妹が買ってくれた服が並んでいた。

そこで彼女は今回、どの服を着ていくかについて悩んでいたのだ。た。

「ふつうの服で行くべきか……」

いやでも、この間読んだ雑誌には『意中の男性を喜ばせるにはギャップも必要』って書いてあったし……。

いや、そもそもなんであいつが意中の男性に分類してるんだあたしは……。

いっそのことウエンディに頼む……いや、あいつのことだ。

きつと面白がってついてくるにちがいない……」

クローゼットの中からいくつもの服を取り出して、鏡の前で自分の前にかざしては別のものと取り換えたりと忙しくやっている最中にも考え事を止めないというのは流石と言うべきかなんというべきか。

「何をそんなに悩んでいるのだ、ノーヴェエ？」

「ウオわあっ!？」

だが、そんな状態では、自室の中に姉であるチンクが入ってきていたことに気づくことはできなかった。

突然声をかけられたノーヴェエは手に持っていた服を落としながら声を上げた。

「そ、そんなに驚くことか？」

「い、いや……。」

でも、チンク姉、どうして?」

「いや、お前の部屋を通りかかったら変な声が聞こえたからな。

少し気になったんだ。

それよりも、ノーヴェエ。

どこかに出かけるのか？」

服が散らばっている部屋を見てチンクはノーヴェエにそう尋ねた。

尊敬する姉である彼女から尋ねられたノーヴェエに答ええないという

選択肢はなかった。

「なるほど、以前お前が言っていた文通相手と会うことになったが、どの服を着ていけばいいのかわからない、ということだな」

「う、うん……。」

「ならば姉に任せておけ」

「はっ。」

チンクの自信たっぷりな声と表情を見て、ノーヴェエは間の抜けた声を上げる。

そんな彼女にチンクは笑みを浮かべながら答える。

「何、妹の服装選びを手伝ってやろうと思っただけだ。

心配するな、他の皆には黙っておいてやる」

「え、ちよ、チンク姉?」

「さーて、どの服からいこうか……。」

「これか?」

「あ、これもいいな……。」

「……。」

嬉々としてノーヴェエの服を選び始めたチンクを見て、彼女は諦めの

表情を浮かべるしかなかった。

ノーヴェルト 第二話

スバルがノルンとの約束したその日、ティアナはヴァイスに彼のバイクを借りるために格納庫を訪れていた。

今、彼女の目の前でヴァイスは自分のバイクの整備を行い、最後のチェックを行っているところだった。

「よし、いい調子だ」

バイクのアクセルを空噴きさせ、エンジンの調子を確認めたヴァイスは笑顔で頷きながら鍵をティアナに投げ渡した。

「そら、こけたりするなよ」

「大丈夫ですよ。」

免許はちゃんと持ってますし」

鍵を受け取ったティアナはバイクに跨り、エンジンを始動させる。手袋をつけてヘルメットを被ろうとしていたティアナにヴァイスはどうしても気になっていたことを尋ねた。

「今日はスバルと一緒にやらないだな。」

さつき一人でバイクに乗って出ていったが」

「ええ、なんか最近文通してる相手と待ち合わせしてるって聞きましたよ」

ヴァイスはヘリの整備のために格納庫を訪れた際に、スバルが一人で自分のバイクで六課を出て行っていたのを思い出しながらティアナに尋ねる。

ティアナは、彼の問いにヘルメットのひもを締めるのを止めて答えた。

その顔はどこか寂しさを滲ませていた。

「お前はそれでいいのか？」

「何がですか？」

「だから、スバルのことだよ。」

そういった気持ちはなかったのか？」

「……スバルのことは、男って言うより手のかかるやんちやな弟、みたいな感じですよ。」

だから、スバルにはそう言った気持ちはありません」

ヴァイスの遠慮のない問いにティアナは手に持ったヘルメットを両手で握りしめながら少し声音を落としながらも答えた。

その答えを聞いたヴァイスはそれ以上聞くことはなく、バイクを発進させた彼女の背中を見送った。

『以上より、非魔法装備の充実により地上の検挙率はこれまでより20%以上の向上が見込むことができる。』

よって私は非魔導師局員における非魔法装備の配備を提案する』

六課の食堂では、地上本部のトップであるレジアス中将の演説についてのニュースが流されていた。

そんなニュースを聞きながら、なのはたち六課隊長陣は遅めの朝食を採っていた。

「相変わらず強気な発言だよな」

「だが、レジアス中将自身、大規模テロ行為を未然に防いだ経験がある。」

その経験からの発言だろうな」

画面の中でレジアスが静かに、だが力強く演説しているのを聞いてヴィータとシグナムはそう口にする。

ヴィータは少し呆れを交えた声だったが、シグナムの言葉を聞いて、納得したかのように頷く。

「まあ、経験則ってのは馬鹿にできねえからな……。」

しかもあの人、魔力持っていないんだろ？

よくそんな状況でテロを阻止できたな」

「相手も非魔導師のテロ組織だったからこそと言えるが、質量兵器に向かつて魔法なしでは流石にためらいが出るな」

二人は画面の中で演説を続けるレジアスに対して少しの畏れと尊敬の眼差しを向けた。

そんな二人をよそに、なのはたちは別の話題で盛り上がっていた。

「じゃあ、エリオたちは二人でデート……ツていうか遊びにいったん

「やね？」

「うん。」

「ちゃんとお金も地図も渡したし、大丈夫、だと思う」

「ティアナとスバルはそれぞれ別々に街に行つたみたい。

でも、意外だったかな。」

「あの二人がバラバラで遊びに行くなんて」

「そうやね。」

「あの二人はいつも一緒やったからなあ……。」

「てつきり二人で遊びに行くもんやと……。」

「なのは、フェイト、はやての三人はコップに淹れたコーヒーをゆつくりと飲みながら世間話と興じていた。」

「例え、管理局のエースと呼ばれても、若い女性が三人集まればそう言つた話になるのは仕方がないと言えるだろう。」

「そのまま、三人は朝食が終わるまで楽しげに話していた。」

「さて、六課の食堂で話題にあげられていることなど知らないスバルは、待ち合わせ場所に辿り着いていた。」

「時間は待ち合わせの十分前。」

「スバル自身は待ち合わせに遅れるなどありえないと考えての時間だった。」

「まあ、まだ来てないよな……。」

「スバルは駅前をざっと見回したが、以前見たノルンの綺麗な赤髪は彼の視界にはなかった。」

「少し残念と思いつつも、時間よりも早く来たのは自分の方だと思出し、近くにあったベンチに腰掛けて待つことにした。」

「だが、ベンチに座つた直後、スバルの端末に一通のメールが届く。」

『今着いた。』

『どこにいる？』

「その文字を見たスバルはキョロキョロと周りを見渡すも、彼女の姿は見えなかった。」

すぐにスバルは返信のメールを打つが、そんな彼の頭にポストと柔らかなモノが置かれた。

「もう見つけた」

「お、おう……」

スバルは自分の頭に置かれたのが彼女——ノルンの鞆だと気づき、その視線を上に向け、言葉を失った。

スバルの視線に気づいたノルンは怪訝な表情を浮かべながら彼に尋ねる。

「な、なんだよ……」

何か言いたげだな」

「い、いや……」

前あつたときはまた服の雰囲気違ったから……」

「やっぱり似合わねえよな、あたしにこんな格好」

スバルの言葉にノルンが暗くなりながら答えると、スバルは慌てて手を振りながらそれを否定した。

「違う、違う！」

似合ってたというより似合いすぎてその、か、かつこよさと可愛さがいい感じになってると思う」

「か、かわいいって……まあ、姉が選んでくれた服だし……」

ノルンは顔を紅くし、指をツンツンと突き合わせながらゴニョゴニョとそう口にする。

スバルはそんな彼女の様子に苦笑する。

「さてと、どこに行く？」

まず二人は、互いに行きたい場所に行くことにした。

スバルはゲームセンター、ノルンはアクセサリーショップという希望を出したため近くにあったアクセサリーショップに入るようになった。

「いらっしやませー」

店員の挨拶を聞きながら二人は店の中に入っていく。

その店は外からでは中が見えない構造だったが、店の中は落ち着いた感じの雰囲気が出ていた。

「へえ、いろんなのがあるんだな……」

「この間はこの店を探してたんだよ。」

「この辺りは結構店が多くて迷ってたんだ」

スバルとノルンはそう言いながら棚に飾られているアクセサリーを見ていく。

その中でノルンは数字をかたどったアクセサリーを選んでいく。

その数は一から十二までとかなりの数になっていた。

「結構多く買うんだな」

「ああ、上の姉から下の妹までな。」

結構いろいろと厳しいんだよ、うちは。

だから、誰かが出かけたら何か土産をもって感じになってる」

「姉妹、か。」

俺にも姉貴がいるんだけど、贈り物なんてした覚えがないな……」

今度何か買っていくか？と悩むスバルをよそにノルンはレジへと進みアクセサリーの代金を支払う。

そんな中、あるアクセサリーをスバルがしげしげと見つめて手に取った。

「どうしたんだ？」

「いや、ちよつとな」

ノルンからの問いを曖昧な言葉で返したスバルは手に持ったアクセサリーをノルンの方に向ける。

スバルのその行動に首を傾げるノルンだったが、スバルは彼女に構わずにそのアクセサリーをレジに持っていき代金を支払った。

「お、おいスバル？」

「ちよつと動くなよ？」

袋に入れることなくそれを持ってノルンの背中に回ったスバルはそれをノルンの首にかけた。

ノルンの首元には、流れ星をかたどったネックレスが揺れていた。

「ちよ、これ!？」

「うん、似合ってるな」

「いや、そうじゃなくて!!」

ノルンは自分の胸元にあるネックレスを指さしながらスバルに向けて尋ねるが、スバルはそんな彼女に向けていつも通りの感じで答える。

「これからもよろしくって感じの贈り物だ。」

「ダメだったか?」

「う……。」

「はあ、わかった、受け取るよ」

スバルの言葉に裏がないことを今まで知っていたノルンは彼の言葉にため息を吐きながらもそう答えた。

「でもなんで星なんだ?」

「いや、なんとなくノルンにはそんな感じの流れ星が似合うと思ってな。」

「うん、その服ともいい感じだしよかった」

「……………サンキュー」

「おう」

「へえ…………」

アクセサリーショップを後にした二人は、ゲームセンターに足を運んでいた。

初めて入ったのか、ノルンは中の雰囲気声を上げていた。

「結構いろいろなのがあるんだな」

「まあ、此処はミッドでも一番の場所だからな。」

ここに来ればどんなゲームでもできるってのがこのゲーセンの触れ込みらしい」

中を歩きながら二人は気が向いたゲームを楽しんでいった。

対戦型の格闘ゲームをやってスバルが乱入してきたゲームマーにコテンパンにされたり、ダーツでノルンが真ん中に刺したりといった

こともあった。

パンチングマシンでスバルが桁外れの値を出したときにはスバルが店員から「魔法での身体強化は禁止です」と怒られたりもしていたが、二人はそれなりに楽しんでいった。

そして、二人はゲーセンの出口付近に設置されていたプリクラでの記念写真を取っていた。

とはいっても、二人とも男女でのツーショットなど初めてなこともあり、互いの頬は紅くなっており、その表情もガチガチに固まっていたが、二人にとってそれは確かに繋がりを示すものだった。

「結構遊べたな」

「まあ、な」

ゲーセンから出た二人は、その後ミッドの中心付近の公園のベンチに座って休んでいた。

二人は青く晴れた空を見上げながらそう呟いた。

「こんな遊びは初めてかもしれないねえ」

「そうなのかな？」

「ああ、出かけることはあっても少しの間だけだったり、一人だけの時が多かったからな。」

それに、だ、男と二人つきりつてのも初めてだったし……」

「あー、まあな」

視線を逸らしながらそう言ったノルンに対してスバルは頬を掻きながら苦笑するしかなかった。

実際スバルもそう感じていたからだった。

今までティアナと遊びに行ったことはあっても、彼女とはあくまで仕事上のパートナーとしての関係しか感じていなかった。

だが、目の前の彼女は自分にとってどうなのだろう、とスバルは自問する。

「スバル？」

「……わかんねえな」

「ん？」

「何がだ？」

「なんでもない」

ノルンが自分の顔を覗き込むようにしていたことに気づいたスバルは彼女の顔から目を逸らしてそっけなく答えた。

そんな彼に対してノルンもまた相槌を打つだけに終わる。

会話がなくなったとき、スバルのポケットに入っていたマツハキヤリバーから全体通信を知らせる音が鳴り響いた。

その音を聞いたスバルはすぐに気持ちを切り替える。

「すまん、ノルン。」

「今日はここまでだ」

「仕事か？」

「ああ、せっかくノルンと遊んでたつてのにな。」

「悪い、また今度遊びに行こう！」

「ああ、またな！」

ベンチから立ち上がったスバルは彼女にそう言ってすぐにその場を後にした。

「またな、か」

公園から出ていく彼の背中を見ながらノルン——ノーヴェエは静かに口にする。

「最初で最後だったけど、楽しかったぜ、スバル」

そう言いながら、ノーヴェエは首にかけられたネックレスを外した。

『やあ、チンク。』

「どうだったかい？」

「ドクターの言う通りでした」

チンクは自身のいる部屋を見回しながら答える。

そこには様々なものがあった。

大型のコンピューター、モニター、検査用機器、そして、大型生体ポッド。

『やはりか、例のあれがあつたんだね』

「はい。」

対戦闘機人用戦闘機人。

タイプゼロ・ジエンド」

チンクの見つめる先、生体ポッド中には、タイプゼロセカンドと呼ばれているスバルや、彼女の妹の一人であるノーヴェと同じ顔をしたモノが浮かんでいた。

だが、いくつかの生体ポッドの中には、中身がないものも存在していた。

『起動はしているのかい?』

「プロトタイプのもものが数体と、そして完成体が一体起動してこの場から飛び去っていくのを確認しました。」

また、プロトタイプのもものが施設の防衛行動に入ったために破壊しましたが、ガジェットv型も破壊されてしまいました」

そして、彼女の足もとには、生体ポッドの中に浮かんでいるモノと同じ顔をしたモノが五体、転がっていた。

すでにその目から光は消えていた。

『まあ、v型はジエンド用の保険も兼ねていたからね。

よしとしよう。』

それで、プロトタイプはどの程度のものだったんだい?』

「ガジェット以上、私たち未満といったところですよ。」

外側は我々と同じですが、頭の中が違いました。

あれではただの機械と同じです」

『そうか……』

「ですが、これはプロトタイプに限ったものです。」

能力だけでいえばタイプゼロ・セカンドと遜色ないものでした。

完成体となると……」

『下手をすると、タイプゼロ・セカンド以上のものか……』

「やれやれ、ご老人方も厄介なものをつくってくれたものだよ……」
「あの、ドクターはどうやってこの施設を……？」

「今まで見つけられなかったものを……」
チンクの問いにスカリエツティは微笑みながら答える。

『何、その施設を作った者は私たちのことを疎ましく思う者だということ。』

そして、その連中をさらに疎ましく思う者がいる、ということだよ』
「連中を疎ましく思う者……、まさか……！」

『おっと、それ以上は口にしない方がいいよ。』
何処で誰が聞いているかわからないからね』

チンクを遮ると、スカリエツティはすぐに指示を出した。

『では、その施設は破壊してしまってください構わないよ。』
というか、徹底的にやってくれ。

地図から山一つ消えるくらいならどうにでもできるとも言われたから』

「いいのですか？」
『構わないよ。』

私はね、娘たちを傷つける存在を許すほど心は広くないのさ』
チンクは彼の言葉をうれしく感じていた。

「わかりました。』
それでは」

『うん、気を付けて帰ってくるんだよ』
スカリエツティはそれだけ言うと、通信を切った。

通信の切れたことで、薄暗かった部屋がさらに暗くなった。
そんな暗闇の中でポッドの前に立ったチンクはその中身に向けて

一人呟く。
「悪いな、お前たちも目的があつて生み出されたのかもしれないが、私とて自分を壊す可能性のあるモノを存在させるほどお人よしではないのでな」

この日、一つの山が地図から消えた。

ノーヴェルルート 第三話

「はあ……」

スバルはその日、一人でデバイスルームに入り浸っていた。そんな彼の大きなため息に対して彼によつて簡易メンテナンスを受けているマツハキヤリバーは彼に尋ねる。

『今ので今日五回目のため息です。』

どうしたのですか、相棒？

貴方らしくもない』

「いや、最近ノルンと話できてないなと思ってな」

マツハキヤリバーを弄る手を止めてペットボトルに入っている水を飲みながらスバルは答える。

すでに、スバルとノルンが街で遊んだ日から一月が経っていた。

あの日、エリオからの通信を受け、集合したフォワードメンバーと、途中で彼らと合流したギンガは下水道にてガジェットや、ロストログア『レリック』を狙う少女、ルーテシアとその召喚虫ガリユー、融合騎アギトとの戦闘を繰り広げた。

結局、彼らの逮捕することは叶わなかったが、レリックとレリックを持つていた少女ヴィヴィオの保護に成功した。

その一週間後、ノルンからメールでしばらく連絡できなくなるという知らせを受けたというところだ。

『要するに、相棒は寂しいということですか？』

「まあ、そうかもな。

ついこの間までは毎日声は交わしていたんだし、それがなくなるとな」

愛機からの指摘に苦笑しながらそう答える。

実際、彼自身少しやる気が出ないことに気づいていた。

訓練も仕事も、集中してやっているのは変わらないが、どうにも必要以上のことをする気が起きなかった。

もちろん、なのはたちもそれには気づいているが、スバル自身がどうにかしない限り意味がないと考えているため、基本的には様子見に

徹しているのである。

『相棒、呼び出しです』

それからしばらく、マツハキヤリバーのメンテナンスに集中していたスバルだったが、マツハキヤリバーが通信を開いたことによって、メンテナンスを中断した。

「はい、スバルですが」

『あ、スバル？』

これから今度の警備任務の確認をするからロビーに来てくれるかな？』

モニターに映し出されたのはなのはだった。

なのはの要件を聞いたスバルはすぐにマツハキヤリバーのメンテナンスを終えて、その場を後にした。

地上本部で行われる公開意見陳述会。

管理局において、重要視される会議の一つが地上で開かれる際の、地上本部の警備。

それが今回六課に与えられた任務だった。

「今のところ異常なし、か。」

スバル、そっちは？」

「こっちも異常なしだ」

そして、スバルたちもまた夜間の警備任務に精を出していた。

スバルとティアナ、ギンガとエリオとキャロ、ヴィータとリインの組み合わせで六課に割り当てられた範囲を見張る。

「それにしても、やっぱり地上本部の警備任務となるとやっぱり嚴重よね」

「そうだな。」

レジアス中將の方針の決定つてのものもあるし、それに反対する連中に対する牽制つてのものもあるんだろうな」

「ま、あの人のやり方つて正しいのかもしれないけど、管理局の前提ひっくり返しかねないからね」

警備任務の傍ら、そのような世間話をしている間にも、テイアナはスバルの様子が少しおかしいことに気づいていた。

長年一緒にコンビとしてやってきた相方の様子の変化が気になるテイアナだったが、個人的な問題に入り込むほど無遠慮でもない彼女は彼のことを気に留めておく程度で済ませることにしたのだった。

「……………」

「どうしたツすか、ノーヴェ？」

計画の発動までの待機場所で、ウエンデイは隣にいるノーヴェがいつも以上に静かなことに気が付いた。

いつもならしゃべりはしないが、それでも話しかけたら反応する程度の余裕はある。

だが、今の彼女は何か思いつめたような表情を浮かべていた。

「なんでもない」

「どう見ても何かに悩んでるみたいだったツすけどねえ。」

あ、もしかして少し前まで電話してた相手のこと考えてたとかっすか？」

「……………」

「あっちゃー、踏み込まない方がよかつたツすかねえ…………？」

ウエンデイはノーヴェの様子がまたもとに戻ったのを見て、困った顔でそう呟いた。

一方で、ウエンデイの言葉を耳にしたノーヴェは、先ほどまで考えていたことがまた頭をよぎってしまっていた。

（今回の作戦は、地上本部に襲撃をかけること。

やっぱり、お前もいるんだよな、スバル…………）

ウエンデイが隣で何か言っているが、ノーヴェの耳には何も入ってこなかった。

（いつもお前のことばかりだな、あたしは…………。）

もう認めるしかないのかな…………）

ノーヴェは、自分の中にあるスバルに対する気持ちをはっきりと認識する。

はじめは自分が倒すべき相手を知るために、近づいた。だけど、その時のスバルの裏のない言葉に、彼女の心は動かされた。少しずつ、少しずつ彼のことを知りたくなり、始めた電話での会話を互いのことを話し、スバルのことを知っていき、もつとスバルのことを知りたいと思う自分がいた。

街で一緒に過ごした一日。

時間にして数時間だったが、彼女にとってはそれは価値のある数時間だった。

そして、自分の中にスバルに対して、自分が好意を抱いていることに気づいた。

だけど、自分とスバルは相容れない存在。

敵同士、犯罪者と管理局員、スカリエツティの娘と、スカリエツティの逮捕を目的とする六課のフォワードメンバー。

二人の間にはこれほどまでに埋められない溝がある。

だから――

(あたしは、スバル、お前のことが好きだったよ)

だから、彼女は自分の気持ちに鍵をかけた。

9月12日 PM 5:57

公開意見陳述会が開始されすでに数時間がたった。

すでに日も傾き、その姿を地平線の向こう側へ隠そうとしている。

そんな中、スバルたち四人とギンガ、ヴィータ、リインは南側のエントランスに集合して互いに報告を行っていた。

「とりあえず、異常なしか。」

だが、最後まで気イ抜くんじゃねえぞ」

「「「はいー」」」」

「残りの時間はそんなに長くないので、此処からは全員で一緒に警備

するですよ！」

ラインの言葉にティアナが疑問の声を上げる。

曰く、一か所で固まって警備しても意味がないのではと。

その問いにヴィータが頭を掻きながら答えた。

「ほかの陸士部隊の人がな、お前らが仕事してる中で休んでられるかって言ってきてな。

で、こつちとしてもお前らが疲れていざというときに何もできないのは困るから、ありがたく手伝ってもらってる。

もうすぐ公開意見陳述会も終わりだから、まあ問題はないだろう」ティアナはヴィータの答えを聞いた後に周囲を見回す。

すると、先ほどまで彼女とスバルが回っていたところあたりに、確かに別の部隊の局員が歩いているのを確認した。

「ああ、ギンガ。

ちよつと北側向こうの方に報告してきてくれないか？」

「わかりました」

ヴィータの指示に従ってギンガは地上本部の中へと向かっていった。

そんな彼女の背中を見ていたスバルはなぜか、胸に突き刺さるような悪寒を感じていた。

「ナンバーズ、N.O. III トーレからN.O. XII デイードまで、全機配置完了」

スカリエツテイのラボの一室。

そこでウーノは鍵盤の形をしたコンソールを叩きつつ、準備が整ったことを告げる。

『お嬢とゼスト殿も、所定の位置につかれた』

『攻撃準備も全て万全。あとはGOサインを待つだけですう』

「ええ」

妹たちからの報告に頷き、ウーノは後ろに座っているスカリエツテイに視線を向ける。

彼女の視線の先には椅子に深く座り、静かに目を閉じているスカリエツティの姿があった。

「ドクター、合図を。」

皆、待っています」

「ああ……」

スカリエツティはゆっくりとその瞼を開いた。

そこには静かに燃える金色の瞳が鈍い輝きを放っていた。

「私のこの行いで、一つの歴史が終わる。」

それはある意味で愚かで、不適切な選択なのかもしれない……」

音を立てずに立ち上がったスカリエツティは通信を繋げている彼の娘たちに語り掛ける。

「だが、私はもう決めたのだ。」

さあ、我々のスポンサー諸氏に見せつけてやろう。

私たちの思いと、その覚悟を」

スカリエツティは大きく右腕を振り、そしてその言葉を言い放った。

「さあ、奏でよう。」

崩壊への序曲を……!」

ノーヴェルート 第四話

「メインコンピュータにハッキンググッ!?」

「すぐに回線を切れッ!!」

「ダメですッ、止まりません!!」

「くそッ、何がどうなってる!?!」

地上本部総司令部は混乱の極みにあった。

突如として総司令部の目であるセンサーが機能を停止、続いてメインコンピュータもその役目を果たすことができなくなる。

それと同時に、地上本部の周辺に大量のガジェットが出現し、現場の注意がそちらに向いた瞬間、地上本部に一筋の砲撃が撃ち込まれた。
総司令部を潰された警備部隊は自分たちでその行動を判断しなければならなくなった。

「むふふのふ〜」

クアットロは地上本部が見える位置で笑みを浮かべながら地上本部のハッキングを行う手を動かしていた。

空中に投影されたパネルを弾くように叩き、モニターに映る局員の混乱を見てさらに笑みを深くする。

「あらっ？」

だが、そんな彼女の手が一瞬だけ止まった。

彼女の奪っていた施設の機能の一部、正確には本部全体を包み込む魔力障壁の維持といった限定的なものだが、それらが奪い返されるのはもう少し後だと予想していた彼女にとって意外なものだった。

「シルバーカーテンの嘘と偽りのショーを見破ってくるなんて……」

ドクター以外にも、面白い人がいたようね……」

クアットロはその奪い返されたところのコントロールを諦め、ほかの部分へとその手を伸ばそうとした。

だが、それすらも拒まれてしまった。

「予想以上にできるわね。」

「というか、これは……」

クアットロは取り戻されそうになっている施設の区画を見て、思わず舌打ちをする。

そしてすぐに姉のウーノへと通信を繋げた。

『どうしたの、クアットロ』

「ウーノ姉さま、少しお手伝いお願いできますか？」

『あなたが手伝いを頼むなんてね。』

『どうしたのかしら』

「例のタイプゼロ・ファーストを隔離した区画の隔壁のコントロールが奪われそうなんです。」

ですから、そこは私が死守しますので、ウーノ姉さまにはとにかく連中を引つ掻き回してください。」

『タイプゼロ・ファーストの確保は陛下の確保と同レベルでの行動目的。』

『いいでしょう、少し待つてなさい』

ウーノからの通信が切れ、直後に彼女に対しての対処が見るからに遅くなり、地上本部を囲む魔力障壁が薄くなる。

「魔法障壁減少。」

ルーお嬢様、よろしくお願いします。」

『わかった……』

『遠隔召喚……』

ルーテシアの小さな声とともに地上本部の周囲にガジェットI型、III型、およびIII型改が大量に現れる。

「あとはお任せくださいな。」

お嬢様は礼の場所へ」

『うん』

クアットロの言葉にルーテシアは頷き、通信を切った。

モニターが消えるのを確認した彼女は再びその視線を地上本部に向けた。

「さあ、ドクターの夢のために踊りなさい。」

「デイエチちゃん、やってちょうだい」

『了解、ISへビィバレル発動。』

「バレット、エアゾルシエル……発射ッ！」

「くそッ、ガジェットの手前は陸士部隊じゃまだ無理か！」

「先ほど撃ち込まれた砲撃により、本部内にはガスが入り込んでいます。」

「幸いにも、致死性のもではなく麻痺性のもです。」

「今データを送ります」

「ガジェットが本部周辺に現れたことを知ったヴィータたちはガジェットが集中して現れた正面玄関の方へと足を向けていた。」

「その途中で、本部内にガスが撃ち込まれたことを知ったリインによつてすでにバリアジャケットを展開していたスバルたちへ防衛データを転送されていた。」

「なのはさんのところには俺たちが行きます。」

「なのはさん達にレイジングハートたちを届けないと……ッ！」

「頼む！」

「リイン、本部の指令室との連絡は取れねえのか!?!」

「待ってください……！」

「ダメです、本部の通信システムそのものがダメになってるです」

「リインからの報告にヴィータは思わず舌打ちをする。」

「だが、次の瞬間彼女は六課に待機しているロングアーチに通信をつないだ。」

「おい、ロングアーチ！」

「聞こえてるだろ！」

「応答しろ！」

『ヴィータ副隊長！』

『今どちらに!?!』

「地上本部の外にいる！」

部隊長に通信繋がられるか!？」

『無理ですよ！』

それより、今こちらのレーダーに反応がありました！

そちらに接近する飛行物体多数！

ほとんどはガジェットⅡ型なのですが、二つだけ魔力反応が高いものが！

推定オーバーSです！』

「ちっ！」

そつちにはあたしとリインが向かう！

地上はティアナ達に任せるぞ！」

「了解です！」

ロングアーチからの通信を切ったヴィータは後ろを走るスバルたちに向かって手に持っていたシユベルトクロイツとレヴァンティンをティアナに渡す。

「そいつらをはやてたちに渡してくれ」

「了解です！」

ヴィータの言葉を聞いたスバルとエリオもその手に握るレイジングハートとバルディツシュを強く握りしめる。

「よし、行け！」

ヴィータの声に従ってスバルたちは本局の内部に突入する。

それを見送ったヴィータは隣を飛ぶリインを呼び寄せる。

「リイン、最初からユニゾン行くぞ！」

「はいです!!」

ヴィータはポケットからグラーフアイゼンを取り出す。

「ユニゾンイン!!」

刹那、彼女たちを光が包み込む。

光が消えたとき、そこには白い騎士甲冑を纏い、髪の色も赤から白髪に変化していた。

「行くぞ、地上本部には一機たりとも近づかせねえ！」

(はいですッ!!)

夜空を一筋の光となったヴィータが駆け抜ける。

「ここもダメか……」

その時、一人地上本部の中に閉じ込められたギンガは何かその場から脱出するための出口を探していた。

だが、彼女のいる区画につながっている通路のすべてが隔壁によって遮断されていた。

「仕方ない……ッ！」

隔壁を破壊して外に出ようと構えたギンガだったが、彼女の戦闘機人としてのシステムが飛来するナイフを察知し、その場から飛び退いた。

「タイプゼロ・ファースト、ギンガ・ナカジマだな」

その声に反応したギンガはリボルバーナツクルを構える。

暗闇の中から現れたのは銀髪に眼帯という特徴的な姿をした少女、チンクだった。

「なぜ、っていうのは無駄かしらね。」

あなた、戦闘機人ね」

「話が早いな。」

ならば単刀直入に言おう。

ギンガ・ナカジマ、ドクターのもとに来てもらおう

こちらとしてはできれば手荒なことは避けたい」

「ドクターっていうと、スカリエッツィのことよね」

ギンガの問いにチンクは頷き、肯定の意を示す。

それを見たギンガはリボルバーナツクルに二発のカートリッジを装填する。

「残念だけど、この後は予定がいっぱい詰まってるの。」

他をあたってちょうだい」

「来てもらう理由が、お前の身体の事に関してでもか？」

「ええ」

「ならば仕方ない。」

「穏便に済ませたかったが」

「チンクはそういつて両手の指の間にナイフを挟み構える。」

「IS発動、ランブルデトネイター……い！」

「はあああっ!!」

「誰にも知られることなく、二人の戦いは始まった。」

「照明の消えた通路を走るスバルたち。」

「相棒ッ!!」

『Protection』

「先頭を駆け抜けるスバルは咄嗟に障壁を張る。」

「うおおっ!!」

「——ッ!?!」

「だが、その障壁は繰り出された蹴りの衝撃を逃すことができずにすべてスバルに叩き付けられた。」

「スバルはその蹴りの勢いに押されて壁に叩き付けられる。」

「スバル——ッ!?!」

「目の前で壁に叩き付けられる相棒を見たティアナが声を上げるが、そんな彼女たちの周囲にエネルギー弾が展開され、即座に爆発する。」

「間一髪、爆発に巻き込まれずに後退したティアナだったが、そんな彼女たちの耳に何者かの声が聞こえてきた。」

「おい、ウエンディ。」

「目的忘れてねえだろうな？」

「当たり前っすよー!」

「一番面倒な連中をここで足止めっすよねー」

「暗闇の中から出てきたのはガジェットを引き攀れた二人の少女、ノーヴェとウエンディだった。」

「ガジェットに囲まれたことに対して舌打ちをするティアナだった。」

が、彼女の耳に聞こえてきたのは今にもくじけそうなスバルの声だった。

「なんで、お前がそこにいるんだよ……ノルン……ッ！」

「なあ、何かの間違いだよな？」

お前はこんなところにいるわけない……そうだろ、ノルン!」

ノーヴェは、目の前で彼女に訴えかけるスバルを見て、覚悟はしていたが胸が張り裂けそうな痛みを感じていた。

彼女の視界に映るスバルの目には、目の前にいるノーヴェしか映っていないかった。

「違う」

「違うって何がだよ……ッ！」

「あたしはノルンなんかじゃない。」

あたしは、戦闘機人N.O.9、ノーヴェだ……ッ！」

「……ッ!!」

覚悟はしていた、していたはずだった。

だけど、そんなものは無駄だと言わんばかりに彼女は、スバルに向けて言い放った。

「散開ッ!!」

スバルの様子が尋常でないということにいち早く気づいたティアナは即行動に移した。

フリードのブラストフレアとティアナの射撃魔法で近くのカジエツトを貫き、爆風でその身を隠す。

その隙にエリオがスバルを回収する。

即席の作戦だったが、スバルの戦意を取り戻すために必要なことだった。

「スバル……ッ！」

「ティアナ……？」

物陰に隠れたティアナはエリオが連れてきたスバルの胸倉を掴み

上げ、彼に向けて言葉を投げかける。

「あんたとあの赤髪にどんな関係があったのか、私は知らない。

だけど、今あんたが戦わないで、誰が戦うってのよ!!」

「……………くそ」

胸倉を掴みあげられたままのスバルは、頭を二度振り、リボルバーナックルを装備した右手で額を軽く殴る。

一度俯き、次に顔を上げた彼の顔には、以前とは比べ物にならないほどだが戦意が戻っていた。

「悪い……、作戦は？」

「とにかく連中の目をくらませて速攻で離脱。

これしか無いわ。

いい、時間との勝負よ」

ティアナの言葉に全員が頷き、彼女の出す合図でそれぞれのするべきことを実行に移す。

スバルとエリオは、晴れかけた煙の中からそれぞれの相手を強襲。

その間にキャロのブーストを受けたティアナが幻影を創り出し、それを囿にして撤退する。

それがティアナの作戦だった。

「クッ!!」

「ハアツツ!!」

スバルと対峙したノーヴェエは、自分に向けて突っ込んでくるスバルを見て顔を歪ませた。

先ほど、彼に自分から遠ざけるようなことを言ったが、彼女もまた彼と戦うことにためらいを覚えていた。

二人の関係は、敵味方だと割り切るほど弱いものではなかったということだ。

迫りくるスバルの拳を受け流しながらノーヴェエはあることに気づいた。

データで見たときよりも狙いが荒いということに。

スバル自身もそのことに気づいており、小さく舌打ちをする。

今の彼は、ティアナによって戦意を取り戻したが、その戦意の大半は、管理局員としてやるべきことをやらなければならないという義務感に似たもののためだった。

頭ではわかっていても、彼の身体が、拳が、目の前の少女を倒すことを拒んでいた。

「クソツタレがッ!!」

「うわっ!？」

だから、スバルは優先順位を切り替えた。

ノーヴェを倒すのではなく、自分たちを追ってこれないようにする。

そう考えた直後、スバルの手はノーヴェの腕をガツシリと掴み、ガジェットが密集している場所へとぶん投げた。

「マツハキヤリバーツ!!」

『Cartridge load』

「リボルバーシュートツ!!」

投げ飛ばされたノーヴェは空中で体勢を立て直し着地するが、その直後に放たれた魔力弾がガジェットのコアを打ち抜き、爆発させる。

外と比べれば狭い通路での爆発は、その隣にいたノーヴェも巻き込んだ。

「ノーヴェ!!」

ティアナ達三人を相手に奮戦していたウエンディはノーヴェが爆発に巻き込まれたところを目にして、そちらに気が向いてしまった。

「エリオ、今!」

「はいっ!!」

「しまッ——!？」

その隙を逃すエリオではなかった。

魔力変換資質によって生み出された雷を刃に纏わせ、ストラダーを上段に構え、高く跳び上がる。

「サンダー……」

「クッ……!」

ウエンデイは周囲にガジェットを集めAMFの濃度を高めながら、空中でストライダーを振りかぶるエリオにライディングボードを向ける。

「レイジッ!!」

「う、うわあ!?!」

エリオの放った電撃はウエンデイの攻撃を弾き飛ばし、さらに高濃度のAMFすら貫通して彼女にダメージを与えた。

「今よ、スバル!!」

「了解ッ!」

エリオの電撃がウエンデイとガジェットにダメージを与えたのを確認したティアナは離れていたスバルを呼び寄せ、複数の通路が交わったところまで移動する。

「待つッすよってえ!?!」

ダメージから抜け出したウエンデイは彼らを逃さないと視線をそちらに向けるが、彼女の視界には四人の姿がいくつも映っていた。

「幻影……ッて、サーモセンサーにも魔力センサーにも反応有り!?!」

あのガンナー、戦闘機人のシステムを……!?!」

ウエンデイは構えていたライディングボードを立て掛ける。

「逃げられたっすね……」

ノーヴェエ、大丈夫っすか?」

ウエンデイは爆発に巻き込まれた後、動く気配のなかったノーヴェエが立ち上がったのを見て彼女のもとに向かう。

彼女が見たノーヴェエの顔には、悲しみが浮かんでいた。

「ノーヴェエ……」

「すまん、ウエンデイ。」

逃がしちまった」

ノーヴェエは何ともないという風に言うが、彼女の様子を見てウエンデイはすべてを把握した。

「ノーヴェエ、大丈夫っすか?」

「身体は問題ない。

爆発も想定内の規模だったし」

「そうじゃないっすよ」

ノーヴェエの言葉をすぐに否定する。

今の彼女は精神的に不安定だと。

稼働初期から基本的に一緒に行動していたからこそ見抜けることだった。

「どう考えても、今のノーヴェエは普通じゃないっすよ。

すぐに戻った方が」

「大丈夫だって言ってるだろ！」

「……ッ！」

ノーヴェエの大声を聞いて、口を閉じるウエンデイ。

そんな彼女にノーヴェエは一言「ゴメン」と呟き、彼女に向けて背を向けた。

「今は、やることをやる。」

それが、ドクターの望むことだし。

あたしがやるって決めたことだから……」

「ノーヴェエ……」

背を向けたノーヴェエの肩が小さく震えているのを見たウエンデイが彼女に手を伸ばそうとしたとき、通信が入る。

『ノーヴェエ、ウエンデイ。』

少しこつちを手伝ってくれ』

「いいっすよー。」

何すればいいっすか？」

通信から聞こえてきた声は、ノーヴェエが一番信頼しているチンクからだった。

『今、ギンガ・ナカジマと戦闘中だ』

ノーヴェルルート 第五話

地上本部内部

エレベーターシャフトを降りてきたなのはとフェイトは、スバルたちとの集合場所に辿り着いていた。

「みんなはまだ来ていないみたいだね」

「結構早く行動に移したから、予定よりも早く着いたのは仕方ないよ」

二人は周囲の状況を確認しながらスバルたちを待とうとし、彼女たちの名前を呼ぶ声を聴いてそちらを見た。

「なのはちゃん、フェイトちゃん！」

「無事だったか、二人とも」

「ご無事で何よりです！」

「はやてちゃん!？」

「シグナムとシスターシャツハも」

二人は通路を駆け抜けてきたはやてたち三人を見て驚きの表情を浮かべた。

「どうやって隔壁を？」

「隔壁の方はレジアス中將が切り開いたんや。」

で、今会場は臨時の指令室になつとる」

「私たちは中將のお言葉に甘えてここまで来たのだ」

「そうだったんですか」

状況を把握したなのはとフェイトは、スバルたちがデバイスを持つてくるということを伝える。

その直後、その場所にスバルたちが現れた。

「なのはさん、フェイトさん！」

「アレ!？」

部隊長とシグナム副隊長、シスターシャツハまでいる!？」

集合場所までやってきたスバルたちは、なのはとフェイトがいることに安心し、はやてたちがいることに驚きの声を上げた。

「なのはさん、レイジングハートです」

「バルディッシュや、シュベルトクロイツ、レヴァンティンも一緒に」

「ありがとう、スバル、皆」

スバルたちが預かっていた隊長陣のデバイスを渡す。

なのはたちはすぐにバリアジャケットを展開し、デバイスを手に持つ。

「通信は？」

「ダメや、指令室とは連絡がつかへん。」

「ロングアーチの方とは……つながった！」

ロングアーチとの通信がつながったことに喜びの笑みを浮かべるはやてだったが、向こう側からの通信の状況が悪いことに違和感を覚える。

『……ぶたい……う……』

「グリフィス君？」

「どないしたん!?!」

『襲撃……ろ……かの……、いま……応援……ツ!!』

「グリフィス君、グリフィス君!?!」

「……あかん、切れた」

「はやてちゃん、六課がどうしたの!?!」

はやてと六課の通信の様子を見ていたなのはは顔色を変えてはやてに詰め寄る。

「そんな彼女をシグナムとフェイトがはやてから引き離す。」

「わからへん。」

「だけど、何かが起きているのは確かや」

「そうだ、姉貴……!」

なのはと同じく、はやての様子を見ていたスバルは一人でわかれたギンガの安否を確認するために彼女に通信を繋げようとするが……。

「どうしたんだよ、姉貴……!」

「無事なら出てくれ……!」

スバルの祈るような声を上げるが、彼の通信機からはノイズしか聞こえなかった。

「マツハキャリバー、ブリッツキャリバーに直通で繋げろ!」

『無理です、通信障害が酷すぎます』

「くそっ！」

「状況がわからない。

はやて」

「わかつとる。

みんな、よう聞いて」

フェイトの言葉に頷き、はやては目の前にいるフォワードメンバーの注意をひきつける。

「これより、隊を分けます。

足の速いライトニングは六課に戻つて。

スターズはギングの安否確認と、本部に侵入した敵の排除。

シグナムはヴィータの方に。

ヴィータからの反応がさつきからないんや。

心配やから、応援に行つてくれるか？」

「了解だよ、はやて」

「わかつた」

「承知しました、主」

隊長、副隊長の同意を得たはやては頷き、彼女たちを送り出した。

「姉貴……、無事でいてくれ……!!」

はやてから指令が下された直後、スバルはすぐさまギングのいるであろうポイントに向かった。

彼の背を見ていたティアナはなににすぐにスバルの後を追うように頼んだ。

「けど、どうしてスバルを……?」

「今、あいつは精神的に不安定なんです。

詳しいことは省きますけど、今のあいつを放っておくと何するかわからないので」

「……わかつた。

ティアナがそう言うなら、それが正しいんだろうね。
すぐに追うよ」

彼女の言葉に頷いたなのはティアナの身体を抱えて自身が出せる最高速度でスバルの後を追った。

『くそッ！』

あの男は何をしている!?!』

『無駄だな。』

通信はすべて切られているし、奴が作った予備のラボはすべて自壊している』

『しかし、こちらの監視を掻い潜ってこれだけのことを成すとはな。』

やはり天才と言うのは本当だったな』

地上本部から少し離れた、ミッドチルダの廃棄都市区画の地下で、彼らは頭の中に映される映像を見ながら声を上げる。

一人は激昂し、一人は疑問を口にする。

そして、最後の一人はその手腕に感心していた。

しかし、誰一人として頷いたり机に手を叩き付けるようなことはない。

否、脳だけの存在である彼らにはそのような行為は不可能だった。

彼らは最高評議会。

管理局の生みの親であり、脳だけとなりながらも世界を見守ってきた存在。

だが、すでに彼らもその存在を維持するのに限界が近づいていた。自身の身に限界が近づいていることに気づいた彼らは、その命が潰える前にやれることをやってみようと思おうと躍起になっていたところで、今回の騒動である。

彼らが創りだす様に指示したスカリエッティの反逆行為。

予期せぬ彼の行動に三人はその対応策を模索していた。

『奴がこちらの指示に従わないことは今回のことでわかった。

いつそのこと処分してしまうか』

『しかし、奴の技術力は得難いものだ。』

「そう易々と捨てるのはいかなものか……」

ジェイル・スカリエツィイに対する対策を考えている最中、彼らがいる部屋のドアが開かれる。

そこにいたのは、一人の女性局員だった。

「皆様、簡易メンテナンスのお時間です」

『おお、お前か。』

今は少し話さなければならんことがあるからな、手早く頼む」

女性局員がお辞儀をして部屋に入ってきたのを認めたりーダー格の脳はそう彼女に告げる。

女性局員もまた、彼の言葉を聞き、ニツコリと微笑み――

「はい、すぐに終わりますので」

――その手に付けられた爪で脳が浮かんでいるポッドのガラスを切り裂いた。

「まったく、手こずらせてくれる……」

壁際で座り込んで気を失っているタイプゼロ・ファーストキに近づきながらそう呟くチンクを、ノーヴェは黙って見ているしかなかった。

「いやー、意外と手ごわかったっすね」

「……………」

彼女の後ろでウエンデイがそう言うが、ノーヴェの耳には入ってこなかった。

今の彼女の胸の中には何かが抜け落ちたかのような虚無感が広がっていた。

スバルと戦い、彼を裏切り、次は彼が大事に思っている姉であるギンガを手にかけた。

これでもう、どうやっても以前のように彼と話すことはできない。

その可能性を自分から潰したという事実には、ノーヴェは痛みを覚えていた。

「……………ッ！」

いや、そのことはすでに承知の上でのこの作戦だった。父であるスカリエツティの願いを叶える。

それが今の彼女の第一目的。

それを成すためには、自分のことはどうなつてもいいと彼女は考えていた。

「ウエンデイ、彼女を……ッ!？」

ギンガの様子を探っていたチンクがウエンデイに話しかけようとした瞬間、閉じていた隔壁の一つが吹き飛んだ。

突然の出来事に遅れながらも対応する三人。

ギンガとウエンデイは自分の武装を構え、チンクはギンガから離れるように飛び退いた。

「姉貴ッ！」

隔壁にあいた穴からその中に飛び込んだのはスバルだった。

ティアナの静止も聞かずに先行した彼は、すぐにギンガの元へと駆けつけたのだった。

「あね、き……う？」

そして、彼女の姿を一番に目をする事になった。

ひび割れた壁の下に倒れ込むギンガ。

その右手は粉碎されており、頭部からの流血によって、彼女の周囲は血で赤く染め上げられていた。

そして、彼女の周囲にいるノーヴェたち。

その三人の顔はどれも驚愕に染まっていた。

「スバル……ッ」

ノーヴェは彼の名前を口にする。

だが、その直後、スバルの周囲にある瓦礫を彼の身体からあふれ出すエネルギーの奔流が吹き飛ばした。

ゆっくりと下を向いていた彼の顔が上を向く。

『……ッ!!』

その瞳は紅く染まっていた。

目の前が真っ赤に染まった。

——なんで。

壁に倒れ込む姉貴も。

——なんで、お前は……

白いバリアジャケットも。

——俺を、こんなにも苦しめる……

すべてが赤に染まった。

——どうしてだ、どうして、お前は、俺から奪う……

目の前にいる敵も。^{ノ、レ、ウ、エ}

——もう、いい

視界のすべてが、血の色に染まった。

——俺を、苦しめるものは……

——全部、コワシテシマエ

ノーヴェルト 第六話

吹き荒れるエネルギーの流れを感じたチンクは、その異様な光景に目を奪われていた。

彼女の中で、目の前の、紅く光る瞳の少年は彼女がデータで知っていた彼とは違う。

彼と同じだが、まったく違うものをスバルから感じていた。

「まずいな……」

この時、彼女の頭には撤退という選択肢が浮かび上がっていた。

だが、彼女がその決断を下すよりも早く目の前のケモノスバルは彼女たちに向けて駆け出した。

「チィ……ッ、ノーヴェ!?」

向かってくるスバルに向けて取り出したナイフを投げつけようとしたチンクだったが、彼女の傍を駆け抜けるようにしてノーヴェエが前に出たために投擲の瞬間が遅れる。

「——ッ!!」

『——ッ!!』

ノーヴェエは右手でスバルの顔に目掛けて拳を振るった。

だが、それをスバルは容易く受け止める。

「ちいッ!!」

ノーヴェエは受け止められた拳を引こうとするが、スバルの手はそれを許さなかった。

引きはがそうとしても微動だにしないことに驚きながらもノーヴェエは彼の顔に目掛けて蹴りを放つ。

「どうだ——ッ!?!」

蹴りに対して、スバルは何のアクションも起こさなかった。

防ぐものもない蹴りはスバルの側頭部を直撃する。

しっかりとした手ごたえを感じたノーヴェエだったが、何ともなかったように立つスバルを見てその顔が驚きに染まった。

『——ッ!!』

「——アッ!?!」

そして、彼の瞳がノーヴェエの目に映ると、彼女は理解した。彼の目に浮かぶ感情のすべてが。

怒りや悲しみといった負の感情、虚無。

それが、自分のやってきたことだと、お前がこうしたんだ、と彼女に突きつけてきた。

ノーヴェエは、瞳から目を逸らそうとした瞬間、スバルは彼女の腕を掴みとり彼女の身体を二度、三度と地面に叩き付けた。

叩き付けられるたびに、彼女の身体を走る痛みを感じたノーヴェエは、彼が受けた痛みはこれ以上なのだとわかってしまった。

薄れる意識の中、スバルに掴まれた反対側の手は、握りしめられることはなかった。

「ノーヴェツ!!」

「ノーヴェエを巻き込むかもしれないが、四の五の言ってられんかッ!!」

IS発動、ランブルデトネイターツ!!」

ノーヴェエ前に出たことでステインガーを投擲することが出来ないでいたちんくだったが、そのノーヴェエがスバルによって破壊されるかもしれないという最悪の状況を防ぐために手に持ったステインガーを放った。

投げられたナイフは、ノーヴェエを叩き付けようとしていたスバルの背後で爆発を起こす。

ステインガーを察知していたスバルはノーヴェエを素早く投げ飛ばし、その場から離れたため、爆発には巻き込まれなかったが、ノーヴェエの回収という目的は果たした。

「ウェンデイ、お前はノーヴェエを連れて撤退しろ」

「了解っす。」

チンク姉は、どうするっすか?」

回収したノーヴェエを肩に担ぎながらウェンデイは姉に尋ねる。

彼女の問いにチンクは背中を向けながら答える。

「私は、あれの足止めをする。」

何、以前にも同じものやっただことはある。

心配するな」

「わかったつす。」

気を付けてくださいつすよ。

IS発動、エアリアルレイヴツ!!」

ウエンデイがライディングボードに乗って浮かび上がった瞬間、スバルが彼女に向けて駆けだした。

だが、彼の攻撃範囲にウエンデイが入る前に、スバルの目の前にナイフが現れ即座に爆発する。

先ほどと違い、不意を突かれたスバルは爆発によつて吹き飛ばされるが、即座に体勢を整える。

その動きは野生のケモノを彷彿とさせる動きだった。

スバルは邪魔をされた獣のようにチンクにその視線を向ける。

そんな彼を見てチンクは自分の中にある、一つのプログラムを起動させた。

「すまないが、お前を行かせるわけにはいかない。

ここで足止めをさせてもらう」

『ツ!!』

チンクが両手の指に三本ずつステインガーを呼び出しスバルに向けて放つ。

六本のステインガーはスバルの周囲に突き刺さり、彼を六方からの爆発で覆い尽くした。

だが、スバルは爆発の中を突っ切つてチンクに向けて飛び出してくる。

『ツ!!』

「ハアツ……!」

スバルが振りかぶった拳が彼女に触れる直前に高周波振動を発生させたことをチンクの左目に埋め込まれているセンサーが捉える。

そして、その拳が彼女に触れる瞬間、チンクはその拳を一瞬だけ触れて、その力の流れに逆らわずに彼の身体を彼女の背後の壁に叩き付けた。

「ツ!?!」

スバルを壁に叩き付けたチンクだったが、彼女の脳内では身体に起きた不具合を痛みとして彼女に伝えていた。

「やはり、オリジナルは違うということか……ッ！」

一瞬の接触で、彼女の身体の骨ともいえるフレームに僅かな歪みが生じたことにチンクは舌打ちをしながらそう呟いた。

叩き付けられた衝撃から立ち直ったスバルはすでにチンクのことを獲物^{ターゲット}として認識していた。

「まったく、厄介な……」

そんな彼を見ながらチンクは左手から伝わる違和感を無視して、その手にステインガーを握らせた。

まずは目の前の脅威を自力で何とかする。

そうしなければ、妹たちとの再会など無理だと彼女は感じていた。

「ハア……ハア……」

ドゥーエは非常灯がぼんやりと照らし出す通路の壁にその背中を預けて、乱れた息を整えていた。

「まったく、あんなのが出てくるなんて、思ってもいなかった。

やってくれたわね、あの脳味噌だけの老人たちも……」

ドゥーエは先ほど始末した最後の最高評議会の脳味噌のことを思い出しながら不機嫌そうに呟いた。

彼女の固有武装『ピアッシングネイル』を嵌めたままの右手は、不自然に垂れ下がった左手を押さえていた。

「まさか、タイプ・ジエンドが……」

彼女もまた、スカリエッティからその存在は知らされていた。

それでも、諜報活動がメインの自分が相對するなどは思ってもいなかった。

「……ッ!!」

一息つこうとしたドゥーエだったが、彼女の中にある人としての脳が彼女の身体をその場から飛び退かせた。

その直後、彼女が今までいた場所の丁度真上から、天井を撃ちぬいてそれは降りてきた。

「タイプ・ジエンド……ッ！」

ドゥーエはすぐにでも動けるように構えながら、目の前の存在を睨みつける。

深い海のような蒼色の髪、光を宿さない漆黒の眼。

その瞳を見た瞬間、彼女は目の前の存在が自分にとつての天敵だということを感じ取る。

資料などは関係なく、彼女の中の生物としての部分がそう叫んでいた。

『戦闘機人N.O. 2、ドゥーエ、確認。』

破壊する』

「……………ッ!!」

機械的な感情などまったくこもっていない声が聞こえた直後、ジエンドの拳がドゥーエに向けて放たれていた。

ドゥーエはその拳を大きく背を反ることで躲した。

元々、諜報活動をメインとする彼女がその一撃を避けることができたのは奇跡に等しかった。

だが、それでも彼女はスカリエッティが生み出した戦闘機人の一人だ。

逸らした身体をそのまま後ろに倒し、動く右手を床に当ててその身体をさらに後方に飛ばした。

「ガハ……………ッ!?!」

だが、その動きすらもジエンドはついてきた。

後方に大きく飛び去ったドゥーエの身体を蹴り飛ばしたのだった。その速度は彼女の想定をはるかに超えていたということに他ならなかった。

蹴り飛ばされたドゥーエは壁に叩き付けられ、その場に崩れ落ちる。

闇に堕ちそうになる意識をどうか保ち、立ち上がろうとするが身体中に走った激痛が未だに残っていた。

そんな彼女に向けてジエンドは駆け出し、そして……

『炎熱加速ッ』

「デヤアッ!!」

反対側の壁まで吹き飛ばされた。

自分に迫っていた死の気配が途切れたことを不思議に思ったドウーエは視線を上げ、そして目の前にいるはずのない人物に驚きの表情を浮かべた。

「騎士、ゼスト……!?!」

ドウーエは目の前に立つ男の名を口にした。

彼女が驚くのも無理はなかった。

目の前の男は、スカリエツティによつて甦らされたが、彼のことを心底嫌悪していたはず。

そんな彼が、彼が創りだした自分を助けるなど夢にも思っていないかった。

「どう、して……?」

「スカリエツティに頼み込まれたからな」

『娘を助けてくれって言われたら、断れねえよ。』

断れば騎士の名が廃るってな』

ドウーエの問いにゼストと彼とユニゾンしているアギトはそう答えた。

ドウーエの危機を知ったスカリエツティは、彼らに助けを求めたのだった。

犯罪者としての協力ではなく、一人の娘を助けてほしいという父親として。

「掴まれ。」

奴もまたすぐに立ち直る。

この場から立ち去るぞ」

「は、はい……!」

ドウーエは差し出されたその手を右手でしっかりと掴み、何とか立

ち上がった。

その後、彼女を先に行かせたゼストは奥の壁に叩き付けたジエンドが立ち上がるのを見て、その槍を振るった。

その日、ミッドチルダ郊外の廃棄都市区画から一つのビルが消えた。

ノーヴェルート 第七話

ノーヴェエを担ぎながら通路を駆け抜けるウエンデイは、その姉の意識が戻り始めているのに気付いた。

「うう……！」

「——ッ、ノーヴェエ。」

気づいたツすか?」

「ウエンデイ……?」

ウエンデイは彼女に向けてそう尋ねる。

ウエンデイに担がれた状態で目覚めたノーヴェエは周囲を見回し、そして、チンクがいないことに気づいた。

「ウエンデイ、チンク姉は!?」

「スバルの足止めに残ったツすよ」

「そんな……！」

チンク姉……ッ!?!」

ウエンデイの言葉を聞いたノーヴェエは身体を動かしてウエンデイから離れようとするが、右腕を中心に身体中から不具合を示す痛みが彼女を襲った。

「ちよ、無茶しちゃダメツすよ、ノーヴェエ!!」

右腕は完全に機能停止してるし、全力で壁に叩き付けられた衝撃で基礎フレームにも歪みが出てるんツすから!!」

「でも、チンク姉が!!」

「セイン姉に頼んで助けに行ってもらってるツす。」

私たちは先に戻るツすよ!

今のノーヴェエが行っても邪魔になるだけツす!」

「——ッ!!」

ウエンデイの言葉がノーヴェエの胸に突き刺さる。

だが、ノーヴェエの頭の中は最後に見たスバルの真っ赤に染まった瞳でいっぱいだった。

「悪い、ウエンデイ」

「え、ちよ、ノーヴェエツ!?!」

ノーヴェはそう言って、進行方向とは逆向き……スバルとチンクが戦っているであろう場所に向けて駆け出した。

彼女の背中から彼女の名前を呼ぶ声が聞こえるが、ノーヴェはそれを無視した。

スバルとチンク。

ノーヴェにとって大切な二人が戦うのは、耐えられないことだった。

フリードに乗って地上本部から機動六課に戻ったエリオとキャロの目には、変わり果てた六課の隊舎が映っていた。

闇に染まった空を明るく照らし出す炎に、機動六課の隊舎は包まれていた。

そして、彼は視界に一つの影を捕らえる。

「あれは……ッ!!」

「……ッ、フリードッ!!」

夜空の中を駆け抜けていく一機のガジェットII型。

その上に乗った長髪の少女に抱えられた少女、ヴィヴィオ。

その姿を見たエリオは即座にストラーダを構えて、飛んだ。

——いいか、エリオ。戦闘するのは頭を使うのがふつうだ——
構えたストラーダからカートリッジが排出され、推進力としての焰が噴き出す。

彼の動きを察知した召喚虫——ガリユーがII型の上から飛び出し、彼を海へと叩き落とそうとその刃を振り下ろした。

——だけどな、そうじゃないときもある。時には考えるよりも先に身体を張ってやらないといけないときもある。それを見誤るなよ？——

自然に身体が動いた。

エリオはその胸に怒りを感じながらも頭の中では、ひどく静かに兄貴分である青年から教えられたことを思い出していた。

そして、その視線は自分に迫る刃をしっかりと捉えていた。

「デエエイッ!!」

「——ッ!？」

エリオはその刃の間合いを見きり、ストラダーの軌道が無理やり変え、そのエネルギーのすべてをガリユーに叩き付けた。

少年一人を空に飛ばすほどの推進力を持ったもののエネルギーとさらにガリユー自身の速度も相まって、その衝撃は凄まじいものとなった。

ガリユーを叩き落としたエリオはさらにガジェットⅡ型を追おうとしたが、背後に現れた気配を感じ取りストラダーで身体を庇うように構えた。

「いい反応です」

エリオの背後を取った彼女——戦闘機人No. 12、デイドは両手に持った固有装備『ツインブレイズ』を上段から振り下ろした。

振り下ろされた双剣は、ストラダーを真つ二つに叩き切り、彼の身体を海中に叩き落とそうとした。

「——?」

だが、彼の身体は双剣に叩き落されることなく、その場から消え去った。

デイドはすぐに周囲を見渡し、彼の存在の有無を確かめようとしたが、その直後、彼女の周囲を桃色の魔法陣が取り囲み彼女に向けて火炎弾を放った。

「これは……!」

火炎弾を切り裂きながら回避するデイドは、六課の隊舎の方に残っているであろうオットーに通信を飛ばした。

「オットー、そっちに召喚士がいる。」

排除して」

『そうしたいのは山々なんだけど……、その召喚士が槍騎士を呼び戻

して参ってる。

「こつちで合図するから、同時に撤退する」

「了解……！」

「エリオ君……ッ！」

「わかってるよ、キャラ……ッ！」

「ここからは一人も逃がさないッ!!」

フリードの背中に降り立ったエリオは後ろにいるキャラにそう答え、ストラダを構える。

そんな彼の背に向けて、キャラも支援魔法を発動する。

「ケリケイオンッ！」

『Enchant Field Invade』

ケリケイオンが発動した支援魔法は、フィールド貫通、つまりAMFを無視させるというものだった。

桃色の魔力がエリオの身体を包み込んだ。

自分の身体が、後ろにいる少女の力を借りて底上げされているのを感じるエリオは、今の自分でできる最大の魔法を発動させようとする。

「ストラダッ!!」

『Explosion』

ストラダに二発の魔力カートリッジが装填される。

キャラの魔法とカートリッジによる魔力補助を受けたエリオは言葉紡ぐ。

「アルカス・クルタス・エイギアス。

疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。

バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

その言葉は彼にとってキャラと同じくらいに大切な人から受け継いだ魔法。

紡ぐ言葉は、つながっている証。

それを詰まることなく送り出していく。

「何をするかわからないけど……」

エリオが詠唱を始めたのを見たオットーはその隙を逃さない。
片手をエリオに向ける。

「隙だらけ……ッ!？」

エリオに向けて彼女が砲撃を放とうとした直後、オットーの背後から火炎弾が放たれた。

戦闘機人としてのセンサーが、その攻撃を察知してその射線上から退避する。

「ち……ッ!」

「フォトンランサー・フアランクスシフト」

オットーが再び視線をエリオに向けると、その視線の先には、大量の魔力スフィアが生成されていた。

フォトンランサー・フアランクスシフト。

エリオにとって、最大の火力を誇る魔法。

「行くよ、キャロ」

「うん、エリオ君」

エリオの言葉に、キャロもまた頷く。

「撃ち砕け、ファイアーツ!!」

その言葉とともに、すべてのスフィアから何発もの魔力弾が一斉に撃ちだされる。

だが、その魔力弾の目標は、オットーたちではなかった。

「どこを狙って……ッ、何……ッ?」

その出鱈目な方向に撃たれた魔力弾に対して訝しんだオットーだが、直後に彼女の近くに滞空していたガジェットⅡ型が魔力弾に撃ち抜かれ、爆散した。

「まさか……ッ!」

オットーが周囲を見回すと、いくつもの桃色の魔力陣が浮かび上がっていた。

しかし、その存在は極限にまで使用する魔力を抑えることによって魔力光を抑え、周囲の暗闇に溶け込んでいた。

しかもその魔法陣から放たれる魔力弾は、最低三つはオットーに向

けられていた。

そして、彼女が知る由もないが、少し離れた場所にいるデイドに對しても同じように魔力弾が襲い掛かっていた。

フォトランサー・オールレンジシフト。

これこそ、エリオとキヤロが編み出した二人の魔法。

大切なものを守るために編み出した、二人の力。

それが今、彼らの大切なものを壊そうとした者に対して牙をむいた。

「デイド、今すぐ撤退を。」

これ以上は不味い……ッ！」

『了解……ッ！』

オットーは周囲のガジェットを盾に使いながらその場から退避する。

圧倒的な物量、認知外からの攻撃。

そのどれもが、今の彼女たちに撤退を選ばせるためには十分だった。

爆発、轟音、震動。

そのどれもがその場所には存在した。

「くそ……ッ！」

悪態を吐きながら迫りくる拳を動く右手で捌き、ダガーを呼び出し爆破する。

至近距離からの爆発によって、彼女——チンクの小柄な体も吹き飛ばされるが、空中で体勢を立て直し着地する。

すでに、彼女の身体はボロボロだった。

スバルの能力、『振動破碎』によって、彼の拳を捌き続けた左手は完全に機能を停止。

防御用の固有武装『シエルコート』もすでにスバルによって破壊さ

れていた。

「そろそろ、頃合いか……。」

どうにかして、離脱したいところだが……。」

右手にダガーを呼び出し、未だに晴れない煙の中にいるであろうスバルを警戒する。

チンクが煙の方に注視していたその瞬間、彼女から見て右に向けて何か飛び出した。

「……ッ！」

それが人の頭と同じぐらいのコンクリート片だとセンサーが認識したときには遅かった。

どんなに彼女たちの身体が機械と適合しても、人間としての部分が非常時には出てくる。

そのため、コンクリート片だと理解しても、身体はすぐには反応しない。

チンクが反対側から彼女に迫っているスバルを見たときには、彼の回し蹴りがから空きだった腹部に叩き込まれていた。

「——ッ!!」

小柄なチンクの身体は、スバルの渾身の回し蹴りによって、何度も地面に叩き付けられながら壁まで吹き飛ばされた。

身体中が悲鳴を上げているのを感じながら、チンクは何とか立ち上がろうとする。

「グ……ッ!!」

だが、その前にスバルが彼女の首を左手で掴み、彼女の身体を壁に叩き付け、身体を自由を奪う。

ノイズの走る視界の中、チンクはスバルが右手で拳を作るのを見た。

(さすがに、あれをもらえば終わるな……)

彼の右手から発せられる高周波の振動を感知しながら、チンクは静かにそう思った。

妹たちの撤退の時間を稼げたことが第一だった彼女にとって、スバルを釘づけにした時点で彼女にとっては勝ちだった。

一つ心残りだったのは、その妹たちともう二度と会えないであろうということだった。

だが――。

「チンク姉っ!!」

聞こえるはずのなかった妹ノーヴェエの声^ノが聞こえてきた。

その声に反応したチンクはそちらに目を向ける。

そこには、戦闘によって動かなくなった左手を抑えて、泣きそうな顔で自分たちを見るノーヴェエがいた。

馬鹿者が、と言おうとするがスバルの手によって首を掴まれているために言葉にすることができず、短く息を吐くだけとなった。

そして――

拳は振り下ろされた。

ノーヴェルト 第八話

気が付くと、彼——スバルは燃え盛る炎に包まれた建物の中にいた。

自分が置かれた状況に一瞬、動揺するが自分の周囲の焰からの熱を感じることで、レスキュー部隊にいたときの感覚が呼び起されすぐさま姿勢を低くして煙を吸い込まないように口元を袖で塞いだ。

「どういうことだ……？」

確かさつきまで地上本部の警備を、と考えたところで彼は重要なことを思い出した。

「そうだ、姉貴は……ッ！」

連絡の取れていないギンガのことを思い出した彼にとって、そこがどこなのかはどうでもよくなった。

すぐにその場から走り出し、彼女を探す。

「姉貴……！」

くそ、此処どこなんだよ……ッ!!」

熱さによって噴き出す汗を拭いながらスバルはその場から出るための出口を探す。

熱によって歪んだドアを蹴り飛ばし、その区画から出ると、先ほどまで彼がいた場所よりも広い空間に出た。

広いといっても、その場所もまた炎に包まれ瓦礫によって様々なモノが破壊されていたが、偶然残っていたそれを彼は見つけた。

「どういうことだ……!?!」

スバルは自分の目がおかしくなったのかと考えるが、自己診断能力によって彼の目は正常であることは一瞬でわかった。

だが、それでも彼の目の前には信じられないものがあるのは確かだった。

「何がどうなってんだよ……」

そこには、『ミッド臨海空港』の看板が炎に焼かれながらもその存在を示していた。

「とにかくここから離れないと……」

目の前の看板のことは気になるが、このような訳の分からない場所で焼け死ぬつもりはない彼はすぐにその場を離れようとした。

だが、彼がその場から動こうとした時、彼の耳に小さいながらも誰かを呼ぶ声が聞こえてきた。

「ええい、くそ……ッ！」

その場から離れようとしていたスバルだったが、助けを呼ぶ声があるならば彼の取る選択肢は一つだけだった。

すでに煙が充満し始めているその空間の中でたった一つの声を頼りに助けを求める者の元へと向かうのは厳しいものがあつた。

「こつちか……ッ」

煙が視界を覆い始めた中、スバルは機械の身体を駆使して目的地へと向かう。

すでに周りは火の海だったが、小さく聞こえる声は確かに近づいていた。

「このッ！」

道を塞いでいる瓦礫を蹴り飛ばし先へと進む。

そして、彼は見つけた。

「大丈夫か……ッ!？」

一人の少年を。

「もう無理だよ……」

助けてくれよ……誰でもいいから……」

蒼い髪と翡翠の瞳を持った少年を。

幼き頃の自分と瓜二つの存在を。

「……どうなってるんだよ」

その存在を目にしたときの彼は、すでにまともにも考えることもできなかつた。

すぐそばに自分とそっくりな——否、同じ存在がいることに彼は理解が追い付かなかつた。

「とりあえず、この場所から……」

「——ッ!!」

スバルが左手を彼に伸ばそうとしたとき、目の前の少年は彼の方を

向いて怯えはじめた。

「お、おいっ」

「いや、いやだ。」

助けて……まだ、死にたくない……」

少年の言葉を聞いたスバルは首を傾げるが、その直後、彼の右手が彼の意志とは関係なしに振り上げられた。

「なっ!?!」

右腕だけが勝手に振り上げられ、さらに彼が意図的に使用していなかったISまでも起動していた。

咄嗟にその右手を左手で押さえようとするが、その力は自分の身体とは思えないほどに強力だった。

「やめ、ろ……ッー」

歯を食いしばり、右手を止めようとするが、右手は少年を潰さんとはばかりに力を強くする。

そして……

「助けて……助けてよ、ギン姉ッ!!」

「チンク姉っ!!」

自分を呼ぶ声を聞き、自分に振り下ろされる拳から瞼を閉じたチンクは、いつまでもその衝撃と痛みが襲ってこないことを不思議に思い、目をあけると、彼女のすぐ左に彼の拳があるのに驚く。

今でも高周波振動を起こしている右手は彼女の頭を捉えようとするが、何かに阻まれたかのように動きを止めていた。

「何が……ガッ!?!」

何が起こっているのか理解できなかったチンクだが、彼女の首を掴んでいたスバルが彼女の身体を投げ飛ばした。

小柄な彼女の身体は左手一本で投げられ、それをノーヴェが身体で受け止めた。

「チンク姉っ!!」

「助かった、ノーヴェ。」

だが、何が……?」

チンクは自分を受け止めたノーヴェにお礼を言うが、その視線は今もまだ壁に向けて拳を向けているスバルを捉えていた。

「うう……うあああああつあああああッ!!」

次の瞬間、スバルは悲鳴にも聞こえる声を上げながらその拳を壁に叩き付けはじめた。

何度も何度も、何度も何度も何度も、何度も何度も何度も何度も叩き付ける。

右腕に装着されたりボルバーナックルが許容ダメージを超え、解除され、左手のバリアジャケットが破け、血が流れても壁を殴るのを止めなかった。

その様子を見ていたチンクとノーヴェは彼の様子が先ほどとは別の意味でおかしいことに気づいていたが、そのあまりにも悲壮な叫びを上げながら壁を殴り続ける彼から目を背けた。

「ッ!!」

やがて、両手がボロボロになるまで壁を殴り続けていたスバルは、壁に思いつきり頭を打ち付けて、その動きを止めた。

その瞳には、先ほどまでの怒りの焰はなく、光を失った目からは一筋の涙が流れていた。

「チンク姉……」

「行くぞ、ノーヴェ。」

すでに彼の仲間がこちらに近づいている。

早く離れないとまずい」

「……わかった」

チンクにそう言われたノーヴェは彼女の身体に肩を貸して立ち上がる。

その時、彼女は、立ったまま機能を停止したスバルの姿を振り向いて見るが、すぐにその顔を前に向けてその場から走り去っていった。

その時、彼女の目に涙が浮かんでいたことに、チンクは気が付かなかった。

「スバル……ッ！」

チンクとノーヴェがその場から去った数分後、その区画に飛び込んできたティアナとなのははその変わり果てたスバルとギンガの姿に言葉を失った。

右腕を潰され、頭から血を流しているギンガ、身体中から血を流し、破れた皮膚の中から機械の身体を覗かせているスバル。

そんな二人の姿に呆然となったティアナだったが、なのははすぐに彼らの傍によつて安否を確認する。

「ティアナ、二人とも大丈夫。

すぐに連絡を」

「は、はいッ！」

なのはにそう指示されたティアナはすぐさま地上本部の医療班へと通信を繋げてケガ人がいることを告げた。

長い夜は終わりを告げた。

「礼を言うよ、騎士ゼスト。」

「ドゥーエのことを救ってくれたこと、感謝する」

スカリエツティは、ドゥーエが入った生体ポッドの前でゼストに頭を下げる。

そんな彼の姿に驚きの表情を浮かべるアギトだったが、ゼストは静かに答える。

「今回は一人の父親としての頼みを聞いたただけだ。

あの時のお前は信じられると俺が思ったからそうしただけのこと」

「ありがとう……」

ゼストの言葉を聞きながら、スカリエツティは娘の命を助けてくれた彼に感謝し続けた。

『うう……うあああああつあああああツ!!!』

鮮明に思いだせる彼の叫び。

それをノーヴェは一人、ラボの外で彼の最後の姿を思い出していた。

スバルをあんな姿にしたのは自分だ。

彼への思いを断ち切り、何も告げずに彼を裏切った自分が、スバルを壊しかけた。

彼は大切な者が、傷つけられた痛みと、裏切られた痛みを同時に受けた。

スバルをそんな風に苦しめたのは自分だ。

「ああ……ああああアアアツあッ……い！」

闇に染まった森の中で、彼女は一人自分の行いを悔い続けた。

ノーヴェルルート 第九話

地上本部、および機動六課襲撃の翌日。

ティアナはサカキに呼び出され、彼の部屋を訪れていた。

「さて、ティアナ君に来てもらった理由は言わなくてもわかるよね？」

「スバルのことですか」

サカキの問いにティアナは即座に答える。

彼女の反応にサカキは笑みを浮かべながら首を縦に振る。

「現在、スバル君とギンガ君の身体は修復中だ。

言い方は悪いけど、彼らにとってあの程度の損傷^{ケガ}は部品を交換すれば

ばいいだけの話なんだ。

ギンガ君の方はすでに意識も戻っているしね。

「だけど、問題はスバル君の方なんだ」

「スバルが……？」

サカキの顔から笑みが消え、真剣な表情でティアナにスバルの現在の状態を伝える。

「さっきの話に戻るんだけど、スバル君の身体の修復は表面的なものだけなんだ。

具体的に言うと、機械の身体を隠す人工皮膚のみだね」

「それだけ、ですか？」

「そう、それだけなんだ。

僕たち人の場合なら、折れた骨はつながるまで固定するのがふうだね。

スバル君たちは折れた部分は取り換えることですぐに直すことができる。

「だけど、そのためには、新しく取り換えた部品を脳——つまり戦闘機人としてのメインコンピューターに認識させる必要があるんだ」

サカキはメガネを指で押し上げながら言葉を続ける。

「しかし、彼の脳がそれを受け付けないんだよ」

「え……」

彼の言葉にティアナは目を見開いた。

脳が部品を認識しない。

それはつまり――

「スバルは、スバルはどうなっているんですか……?」

「彼の脳は、今は最低限の機能、身体の現状維持に必要な分だけを残してすべて停止しているんだ。」

こちらからのアクセスはできない状態で、彼は今も眠り続けている状態だね。

本当はしたくなかったことなんだけど……」

サカキはデスクの引き出しからいくつかの資料を取り出し、机の上に置いた。

「彼の脳の記録、というよりもメインコンピュターのログを見させてもらった。」

その結果から言うと、彼は現実から目を逸らしているといった方がいいかな。

所謂心の自閉機能が働いている状態だ。

恐らく、スバル君にとって、認めたくないことが続けざまに起きたんだろうね」

「自閉……、認めたくないこと、か……」

破壊された六課の隊舎の代わりに与えられた臨時の隊舎のデスクでティアナは報告書を作りながら先日のサカキの話进行を思い返していた。

（スバルが認めたくないことって言う……、やっぱりあれのことなんだろうけど……。）

多分それだけじゃないはず……、確証はないけど……）

とりあえず明日病院に行つて……と考えたところでティアナの頭に軽い衝撃が走つた。

「ヴィ、ヴィータ副隊長……」

衝撃を受けた頭を摩りながらティアナが後ろを振り向くと、そこには書類がまとめられたファイルを片手に呆れた表情のヴィータが立っていた。

「考え事するのはいいけどな、そう言うのは仕事の時以外にしとけよな。」

あのバカのこと気がなるのはわかるがな」

ヴィータの指摘通り、ティアナのモニターは先ほどからほとんど進んでいなかった。

そのことに気づいたティアナは頭を下げる。

「すみませんでした……」

そんな彼女の様子に、ヴィータは大きくため息を吐く。

「仕方ねえ、いったん休憩だ」

「え、でも……」

「そんな状態の奴に仕事やらせても碌なことにならねえのは目に見えてるからな。」

ほら、行くぞ」

そう言ってすぐにその場から歩き出したヴィータを追うためにティアナはすぐさまモニターの電源を落とした。

「スバルの奴がねえ……」

休憩室で購入したコーヒーを片手にヴィータはティアナから聞いたことを自分の中で整理する。

事情を呑み込んだヴィータは対面に座り、紅茶の入ったカップを口に運んでいたティアナに向けて口を開く。

「あたしはそんなに心配ないと思うけどな」

「いや、そんな簡単にはいかないんじゃない……」

あつさりとそう答えたヴィータに対してティアナは頬を引き攣らせながらそう尋ねる。

「まあ、人間だれしも認めたくないことの二つや三つはある。

お前もそうだっただろ？」

「は、はい……」

ヴィータの言葉に思い出されるのは、唯一の肉親だった兄の死と兄の夢を継ぐというプレッシャーに押しつぶされそうになっていたころの自分。

思い当たる節があったためにティアナはそう答えるしかなかった。

「あたしだってそうだ。

だけど、今はこうやって前を向いて生きてる」

「……」

「どんなに嫌なことであっても、トラウマになっているようなことでも人はそれを乗り越えられる。

あたしはそう考えてる。

お前はどうかんだ？

そうじゃないのか？」

ヴィータはティアナに語り掛けるように尋ねる。

その問いに対する答えは一つだった。

「……はい」

「だったら、やることは決まってるはずだ。

お前はもうするんだ？」

ヴィータはそう尋ね、コーヒーを飲み干す。

そんな彼女に対してティアナはカップの中をすべて飲み干し、立ち上がった。

「ヴィータ副隊長、すぐに仕事に戻ります。

さっさと終わらせて、様子を見に行かないと」

「今すぐ行ってきてもいいんだぞ？」

立ち上がったティアナに向けてヴィータはそう聞くが、ティアナは首を横に振った。

「ちやんとやるべきことはやっています。

多分、今はまだ考えてる最中だと思っんで」

ティアナの言葉にヴィータは少し考えるように目を逸らし、そして

そのまま彼女に言葉を投げかけた。

「外出許可はあたしがやっておく。」

仕事終わったら行つてこい」

「……ありがとうございます」

彼女の言葉に対してティアアナは頭を下げるが、ヴィータは照れ隠しにカップを傾けながらコーヒーを飲み干した。

「ありがとうございます」

その後、ノルマを終えたティアアナはすぐさまスバルが入院している病院へと向かった。

ナースステーションで彼の部屋の番号を聞き、その脚を向けた。

「あ、ティアアナさん！」

その途上、彼女を呼び止める声を聞き、ティアアナは声の聞こえてきた方を見た。

「キャロ、あんたなんでここに？」

「一応の身体検査です。」

この間の戦闘データを見たフェイトさんが受けなさいって言われて……」

ティアアナは自分の方に向かって小走りで寄ってきたキャロにそう尋ねる。

キャロはティアアナの問いに対して、苦笑しながらそう答えた。

「それで、身体の方は大丈夫だったの？」

「はい、明日まで魔法の使用は控えるようには言われましたけど、身体の方は大丈夫です」

「キャロがここにいてるってことは、エリオもいるのよね？」

エリオの方は大丈夫なの？」

ティアアナはいつもはキャロと一緒にいるエリオがこの場にはいないことに気づき、彼女に尋ねる。

「エリオ君は一日検査入院だそうです。」

右手の骨にひびが入ってたそうで」

「そっか。」

エリオにはしつかりと休むように言っておきなさいよ？

スバルと似て、エリオも結構無茶しそうだから」

「はい！」

あ、ティアナさんはスバルさんのところに行くんですか？」

「ええ、そうだけど……。」

何かあったの？」

「いえ、特に何かあったわけじゃないんです……。」

でも、さつき私たちがいったとき、まだ目覚めてなくて……」

キャロが俯きながらそう答える。

そんな彼女の頭にティアナは手を乗せながら口を開く。

「大丈夫よ、あいつはいつだって最後にはちゃんと戻ってくるんだから。」

スバルのことは私に任せて、あんたはエリオと一緒にいなさい」

「はい……！」

ティアナの言葉にキャロは少し元気を取り戻し、頷いた。

「えっと……ここね」

キャロと別れたティアナはスバルのいる病室の前に辿り着いていた。

ティアナは一応の礼儀として病室のドアを静かに開き、中に入った。

「スバル……？」

病室に入った瞬間、ティアナは違和感を感じた。

人の気配が全くしないのだ。

スバルが自閉モードに入っているとは言え、そこに一人一人がベッドに横たわっていればなんとなくは感じる事ができる。

だが、それが感じられない。

つまり、その部屋にはスバルがいないということに他ならなかった。

「あのバカ……ッ」
胸騒ぎがしたティアナは病室を飛び出した。
彼のいるであろう場所へ。

ノーヴェルートの 第十話

スバルの病室から飛び出したティアナは、彼がどこにいるのかを考
える前にその脚を病院の屋上へ向かう階段へと向けていた。

流石に病院の中で走るのは拙いので大股で小走り気味に階段を
登って行く。

そして、病院の中だからか普通なら埃が舞っていてもおかしくない
屋上の入口へと辿り着いたティアナはそのままドアを開いた。

「やっぱり……」

沈みかけている西日が彼女の目に入ってくるが、ティアナはその光
の中で彼がいるのを感じていた。

眩しい日差しを手を掲げて遮りながらティアナは屋上に設置し
てあるベンチに腰掛けているスバルの元へと向かう。

「そんな格好していると風邪ひくわよ」

スバルの座っているベンチのすぐそばまで歩いてきた彼女だった
が、彼がまったく反応しないことにため息を吐きながら彼の隣に腰掛
けた。

「まったく、あんたが病室にいないからこっちは慌てて来たつてのに
……」

ティアナは隣に座っているスバルを横目に言葉を紡ぐ。

「……何でここがわかった？」

「あんたは自分が思っている以上に単純なのよ。」

前からそう、訓練校時代も何か考えることがあれば一人で高い場所
に行つて、一人で悩みを解消しちゃつてき。

今回はまだ解決してないみたいね」

そこまで言つてティアナはスバルの方を向く。

「ほら、少しは話してみなさいよ。」

一人で悩むより誰かに話を聞いてもらった方がまだ楽になるわよ」
「……」

彼女の言葉を聞いたスバルは一度目を瞑り、そして自分の中で渦巻
いている気持ちを吐きだす。

「何のために戦おうとしてるのか、ちよつとわからなくなってきた」
「……は？」

「今まではさ、お袋みたいになって誰かを守りたいって思ってた。
誰かを守るためなら戦えるって。」

「だけど、この間の作戦の時、あいつが……ノーヴェエが来たときから、
うまくは言えないけど、なんか変なんだよ……。」

「本部にいる人たちを守るためには戦わないといけない。
だけど、あいつとは戦えないんだ……。」

「それで？」

「アンタはどうしたいのよ」

「スバルは右手を何度も握りしめるが、その拳には力が入っていな
かった。」

「そんな彼に対してティアナは彼の本心を聞きだそうとする。」

「……それがわからないんだよ。」

「誰かを守るためにはあいつを……、ノーヴェエたちを止めたい。」

「だけど、俺は……。」

「姉貴がやられてたのを見て、自分の中で何かが外れて、もう少しであ
いつらを殺すところだった」

「“振動破砕”……」

彼の言葉を聞いて、ティアナはスバルの、戦闘機人としての彼の能
力を思い出した。

それは彼と同じ戦闘機人に対しての絶対的なアドバンテージを誇
る能力。

機械の身体を問答無用で壊しに行く、対戦闘機人用と言ってもいい
力。

「人を守るために魔導師になった。」

「誰かを助けたいから局員になった。」

「俺が、誰かを殺そうとしたんだ……。」

「そんな俺が、これからも戦っていいのよ、それがわからない」

……」

スバルの声がだんだんと小さくなっていくにつれて、顔を俯ける。そんな彼を見ていたティアナは彼にどうしても聞いておきたいことを尋ねた。

「ねえスバル、あんたにとってあのノーヴェって娘に対する気持ちはなんなの？」

大切な友達？それとも自分と同じ存在ってことでの同情？」

「……最初は、なんとなく気が合うって程度だった」

彼女の問いに、スバルはノーヴェとの出会いから思い出しながらゆっくりと口を開いた。

「……何となく、あいつがふつうじゃないってのは感じてたってのもある。

けど、二人で会ってる時は、話してる時はそんなことは感じなかった……。

それで、あいつのことが、頭のどこかに、いつも考えてることが、多くなつた……」

「……なるほど、つまりあれね。」

あんたにとつて、ノーヴェは好きな女の子ってところなのね」

スバルの本音を聞きだしたティアナはそう結論付けた。

恋愛というものをしたことが無い彼女にも、彼がノーヴェに恋心を抱いていることは理解できた。

「そう、なんだろうなあ……。」

俺は、ノーヴェのことが好き、なんだろうなあ……」

「それで、そのことを踏まえてもう一度聞いわ。」

あんたはどうしたいのよ？」

自分の中にくすぶっていたものを、相棒ティアナに聞いてもらったことで、それを理解したスバルに彼女はもう一度尋ねる。

自分の中の恋心を理解したうえで、スバルがどうしたいのかを。

「俺は、あいつを止めたい。」

けど、俺は……あいつの姉を殺しかけたんだ……。

今更、どうやってあいつの前に行けばいいんだよ……」

それでも、未だに弱気なことを言う彼に対して、ティアナは大きなため息を吐き、一言だけ口にした。

「スバル、齒喰いしぼりなさい」

「は……？」

ティアナの一言に疑問の声を上げたスバルだったが、次の瞬間、彼は頬に強い痛みを感じながら屋上の床に叩き付けられていた。

「痛つてえ……」

スバルは右手で殴られた頬を抑えながら自分の前に立つティアナを見上げる。

彼の目に映ったティアナは、握りしめた拳が震えていた。

「ティアナ……？」

「今のあんたは見るに堪えない。」

いつまでもウジウジと弱気なことを……！」

「私の知ってるスバル・ナカジマは、自分が正しいと思ったことは全部やり通す！」

そんな奴だった。

でも、今のあんたは何よ？

いつまでも自分の殻にこもって一人で解決しようとして!!

なんでよ、あんたはなんで、いつも一人で解決しようとするのよ

……。

今回だつてそう、自分の気持ちを殺して、一人で納得しようとした。

少しは周りを頼つたらどうなのよ!?

アンタは、一人じゃないでしょう!?

アンタには相棒わたしがいる!!

私だけじゃ頼りないなら、仲間エリオやキャロがいる!!

なのはさんや、フェイトさん、ヴィータ副隊長にシグナム副隊長だつている!!

一人で解決しようとしなくてよ……！」

ティアナの泣き出しそうな顔を見たスバルは、言葉を失った。

彼女に言われるまで、自分がどれだけ彼女たちのことを気にもして

いなかったことを思い知らされたからだ。

「あんたにとつて、あたしは何なの!？」

「頼りにならない相棒?」

「違う……ッ」

「だったら一つ言つてあげるわ。」

「アンタは、あの時のことを気にしてるけど、その力でギンガさんを助けられたってことは覚えておきなさい」

「……俺が、助けた……?」

「姉貴を……?」

ティアナの一言で、彼はハッと気づいたように彼女の顔を見つめる。

「ええ、そうよ。」

確かにあんたはノーヴェたちを殺すところだった。

それでも、アンタがギンガさんを助けたことには変わりはないわ」
膝をつき、座り込んでいる彼と視線を同じにして、ティアナは続ける。

「アンタがあのかを嫌っているのは知ってる。」

でも、その力で助けられる人がいるってことも覚えておきなさい」
ティアナのその言葉が、スバルの中にあつたものを溶かしていく。
自分が忌み嫌っていた能力で、誰かを助けることができる。

自分の力は壊すだけじゃない、ということを初めてスバルは感じる
ことができた。

「……サンキューな、ティアナ」

「どういたしまして。」

「それで、どうするの?」

そのことを自覚したスバルは立ち上がり、そんな彼をティアナは呆れた顔で見上げる。

「ノーヴェを止める。」

「あいつらはまだ、引き返せるはずだから」

「一人で、なんて言わないわよね？」

「……たぶん、お前にも、エリオやキャロにも迷惑をかけると思うけど。」

頼む」

「わかってるわよ。」

アンタの足りないところを補うのが私の役目なんだから。

ほら、さっさとソレ、どうかしてきなさい」

ティアナは立ち上がりながらスバルの左側を指さす。

そこには、風に揺られる袖があった。

「そうだな、ちよつと博士のところに行ってくる」

「ちゃんとやってもらいなさいよ」

スバルはティアナに背を向け、彼女もまたスバルにそう告げて去っていく彼の背を見つめる。

そして、スバルの姿が出口から見えなくなった後、ティアナは大きくため息を吐いた。

「まったく、手のかかる相棒パートナーなこと……」

肩を竦めながらヤレヤレといった感じでそう呟くティアナ。

だが、その声は小さく震えていた。

「……まったく、いったい誰よ、『失恋の味はレモンの味』なんて言ったのは……」

レモンなんか、目じゃない……ぐらい、つらい……じゃない……ッ」
その病院の屋上で、一人の少女の初恋は人知れず終わりを告げた。

一人の少年が一人の少女を止めると決意した。

一人の少女の初恋が終わりを告げた。

そして――
一人の次元犯罪者による管理局に対する宣戦布告が、その日行われ
た。

ノーヴェルート 第十一話

S級次元犯罪者、ジェイル・スカリエツティの管理局に対する宣戦布告より一週間。

管理局の中枢を担う第一管理世界『ミッドチルダ』の首都クラナガンの上空を船が飛行していた。

船——聖王のゆりかごの周囲で、ゆりかごの上昇を止めるために取り着こうとする管理局員とゆりかご内部から射出されるガジェットの間で戦闘が行われていた。

その映像を機動六課のフォワードチームと部隊長であるはやては臨時の隊舎兼移動手段とした次元航行船『アースラ』のブリーフィングルームでその様子を見ていた。

「御覧の通り、状況は最悪の方向に進んどる。」

本日早朝、クラナガンの郊外から浮上したこの聖王^デのゆりか^カごはクラナガンの上空を飛行しながら徐々にその高度を上げとる。

あれが二つの月の魔力を得ることができるようになったら終わりや」

はやては無限書庫からの情報を出しながらその場にいるメンバーに顔を向ける。

「現在管理局はこのデカブツを止めることを最優先事項にしとる。」

地上本部のグレアム中將も全面同意し、地上部隊の展開し市民の避難を急がせてる。

そして、うちのやることやけど……」

はやてはそこまで言っただけ息を吐きながら続ける。

「本来うちらみみたいな少数精鋭の部隊にとってやったら拙いんやけど、戦力を分散させる」

はやては苦い顔をしてそう告げる。

そして、その理由をなのはをはじめとしたフォワードメンバーは理解していた。

「まず、聖王のゆりかごの停止と、ゆりかご内部にいるであろうヴィオの救出、主犯格の逮捕は高町隊長とヴィータ副隊長。

すでに対AMF対応型デバイスを配備された部隊が突入口の確保に向かっとなるから、二人は突入口の確保の知らせが入ったらすぐに突入や。

次にスカリエツテイのラボにはフェイト隊長。

現地でヴェロツサ・アコース査察官とシスターシヤツハと合流してスカリエツテイの逮捕。

シグナム副隊長は地上本部に向かっとなる魔導師——騎士ゼストの足止めを頼むで」

はやてがそこまで指示を出したところで、ティアナに尋ねる。

「ティアナ、スバルから連絡は？」

「一時間前に、最終調整中だ」と

「まだ終わってないか……。」

なら、地上本部に向かっとなる戦闘機人はティアナ達四人でやってもらうしかないか……。」

「八神部隊長？」

四人、とは？」

ティアナ達は、はやての言葉に首を傾げる。

はやては四人といった。

だが、スバルが欠けた今、フォワードチームはティアナとライトニングのエリオとキャロの三人だ。

一体誰が？

彼女たちの表情に浮かぶ疑問を感じたはやては部屋の外にいるであろう彼女の中に入るように告げた。

「失礼します」

「ギンガさん……ッ!？」

「ギンガには、臨時でティアナとチームを組んでもらう。

ティアナ、できるやろ？」

部屋に入ってきたのは、スバルの姉であり、先日の戦闘で重傷を負っていたギンガだった。

彼女が来たことに驚いたティアナに対して、はやてはそう尋ねる。
「あ、はい。」

でも、ギンガさん、怪我は……?」
「弟が^{スバル}身体を張って戦おうとしてるのに、寝てるわけにもいかないでしょう?」

大丈夫、身体はキツチリ修理^{なお}してもらったから」

ギンガは右腕でガツポーズをしながらそう答える。

そんな彼女の袖からは金属の輝きが見え隠れしていた。

「……わかりました。」

でも、あまり無茶はしないでくださいね?」

「うん、わかってる」

ギンガはティアナの言葉に微笑みながら頷いた。

「みんな、準備はいい?」

「「「はいっ!」」」

ブリーフィングからしばらく後、出撃の準備を終え、格納庫に集まったティアナたちは、なのはとヴィータの前に並んで立っていた。

「今回の出撃は、今までで一番ハードになると思う」

「あたし等も、お前らのピンチになっても助けてやれねえ」

「でも、目を閉じて、今までの訓練を思い出してみて?」

なのはの言葉に従い、目を閉じるティアナ達四人。

「何度もやった基礎訓練、嫌って程磨いた、それぞれの得意技。」

痛い思いをした防御練習、全身筋肉痛になっても繰り返したフォーメーション。

いつもボロボロになるまでやった、私達との模擬戦」

なのはの言葉とともに、ティアナたちの顔がどんどん青ざめていく。

彼女の訓練を受ける期間が短かったギンガは比較的マシだったが、残る三人、特にティアナは今にも吐きそうな表情を浮かべていた。

「目、開けていいよ」

なのは目の前に立つ四人の姿を見て、苦笑する。

「訓練メニユー考えた私が言うのもなんだけど、皆きつかったよね？」
「それでも、ここまで四人とも、それにここにはいないがスバルの野郎もよくついて来た」

「特にスバルとティアナはよく頑張ったよ。」

私が教えてきた中で一番キツイ訓練メニユーだったんだから」

なのはのその言葉に、ティアナは頬を引き攣らせながら笑うしかなかった。

彼らは、彼女の考えた訓練メニユーは彼女の教えを受けた者はだれでもこなしていると考えてやっていたために、その分の驚きも含まれていた。

「5人とも誰より強くなった……とは、ちよつと言えないけど。」

「だけど、どんな相手が来ても、どんな状況でも絶対に負けないように教えてきた」

なのはとヴィータは、そう言いながら笑みを浮かべる。

「守るべきものを守れる力、救うべきものを救える力。」

絶望的な状況に立ち向かっていける力。

ここまで頑張ってきた皆は、それがすっかり身に付いてる」

その言葉は、ティアナたちの中に何の抵抗もなく入り込んでくる。

そして、それは彼らの中で自信となってその心を強くする。

「夢見て憧れて、必死に積み重ねてきた時間」

言葉を続けながら、なのはは拳を握りしめて前を出す。

「どんなに辛くてもやめなかった努力の時間は、絶対に自分を裏切らない。」

それだけ、忘れないで」

最後にそう言って、締めくくる。

浮かべていた笑顔は彼らの知る、なのはの、強くて優しいエースオブエースの顔だった。

「キツイ状況を、ビシッとこなして見せてこそそのストライカーだからな」

「「「……はいっー」」」

ヴィータは不敵な笑みを浮かべながら彼らにそう告げ、スバルたちも自信に満ちた顔で答えた。

「じゃあ、機動六課フォワード隊、出動！」

「行ってこい!!」

「「了解！」」」

今までで一番の敬礼をなのはとヴィータに返して、ティアナたちは踵を返して走り出した。

だが、ヘリに向かおうとするティアナをなのは呼び止めた。

「ティアナ」

「なのはさん……」

「スバルがいないけど、大丈夫だよな?」

なのはの心配そうな表情と言葉に対して、ティアナは不敵な笑みを浮かべながら言葉を返した。

「大丈夫ですよ、スバルあのバカの代わりにギンガさんもいますし。

それに、なのはさんの訓練に比べれば怖いものなんてありませんから」

そう言っつてティアナはもう一度敬礼をして、ヘリへと乗り込んでいった。

ティアナの言葉になのはは一瞬、驚きの表情を浮かべたがヘリに乗り込む彼女の背中を微笑みながら見送った。

「ティアナの奴、すっかり半人前を抜け出したな」

「うん、なんというか少し大人になったというか、何か吹っ切れたみたいだね」

少し大きくなったように見えた教え子の背中を見送りながらなのはとヴィータはそう言葉を交わす。

「さ、私たちも行くぞ」

「おう」

「新調した腕の調子はどうか、スバル君」

管理局地上本部に隣接する研究所のとある一室、そこでスバルは全身の動きを確認するように身体を動かしていた。

そんな彼のすぐそばで、スバルの様子を見ていたサカキは彼に身体の調子を尋ねる。

今のスバルの身体は地上本部襲撃の際に破損していた部分の総取り換えと、各部のチューンアップを施されていた。

「大丈夫です、問題ありません」

彼の言葉に対してサカキは頷き彼に、彼と同じく修復されたマツハキャリバーを手渡す。

「つい先ほど、修復と再調整が済んで送られてきたんだ。

以前よりもさらにピーキーになっているらしいけど、君なら大丈夫だろう」

「ありがとうございます」

スバルはサカキからマツハキャリバーを受け取る。

「久しぶりだな、相棒」

『ええ、今度は以前のような無様なことにはなりませんので、ご心配なく。』

相棒は、相棒の走りたように走って下さい。

私は相棒とともに走りますから』

マツハキャリバーの言葉にスバルは不敵な笑みを浮かべる。

「現場までの足はこちらで確保しておいたから、この場所に向かうといい」

「ありがとうございます、サカキ博士」

「なに、これくらいというわけではないよ。

ほら、早くいくといい。

主人公が遅れたら話にならないだろう?」

「主役は遅れてくるものって言葉もありますけどね」

サカキの言葉にスバルはそう返し、部屋を出て行った。

スバルが去ったあと、サカキは眼鏡を指で押し上げながら一人、言

葉を紡ぐ。

「見せてもらおうよ、スバル君。
君の可能性を」

ノーヴェルート 第十二話

無人となった都市群の間を一機のヘリが後方からの銃火を避けながら駆け抜けていく。

『ああ、もうしつこいなあ!!』

そのヘリの後部キャビンでティアナ達フォワード部隊はパイロットであるアルトの声を聞きながら不規則な揺れに耐えていた。

管理局地上本部へと向かう戦闘機人とガジェット型の侵攻阻止のために出撃した彼女たちだったが、戦闘区域にたどり着く前に、数機のガジェットII型に捕捉され、攻撃を何とか避けながら振り切ろうとしていた。

『みんなごめんね!もう少しだけ我慢してて!!』

アルトの声がキャビンに響く。

「クロスミラージュ、データベースに接続してこの付近の地図を出して。あと周辺に生体反応がないかの確認をお願い」

『了解』

ガジェットII型の放つ閃光がヘリのすぐ傍を駆け抜けていく様を小さな窓から覗き見ていたティアナはクロスミラージュを操作し、呼び出したホロウインドウで周辺の地形と逃げ遅れた人がいないことを確認する。

「アルト、今から送るデータの場所へ!」

『データ受信確認!でもどうするの!?!』

ティアナはコックピットへの通信をつなげてホロウインドウ上にマークした場所へ向かうように頼み込む。

「私たちが振り切った後に、あのガジェット群がどこに行くのかもわからない状態にするぐらいならここで叩き落とす方がほかの陸士部隊の負担にならないでしょう!」

『それはいいけど……方法は?!』

「なのはさんにいざってときには使つてと言われたあれを使うわ」

そう言いながらティアナはキャビンの壁に固定された大型のータッシュケースに視線を向けた。

『わかった、指定ポイントに向かうよ!』

「こつちも準備進めるわ。」

ギンガさん、少し手伝ってもらってもいいですか?」

「了解、これを抑えていればいいのよね」

アルトの声とともに加速したヘリの振動を感じながらもティアナとギンガはアタツシユケースの元へと向い、それを取り外す。

「コード入力《ストライカーウエポン》」

『コード確認、ロック解除完了』

ティアナの音声を認識したアタツシユケースの電磁ロックの解除され、中に納められたものが姿を現す。

「これは……」

「レジアス中將から六課への贈り物だそうです」

そこには人の腕以上の長さを持つ銀と灰色の砲が収められていた。

アタツシユケースを抑えているギンガは驚きの表情を浮かべ、ティアナは不敵な笑みを浮かべていた。

『CWM—ストライカーカノン』。魔法の仕様が厳しい環境での作戦を可能にするために開発されていたそうです。

今回の作戦には一部の陸士部隊への配備しか間に合いませんでしたけど、六課にはレジアス中將から直接送られてきたそうです」

ティアナはそう言いながら砲——ストライカーカノンのグリップを握る。

すると、彼女の前腕部に固定用のベルトが巻き付き、カノンと彼女の右腕が一体となる。

それと同時に、灰色だった部分が明るい橙色へと変化した。

『魔力反応確認、登録ID、JMB047321—04655986

4。ティアナ・ランスター二等陸士を確認。ストライカーカノン起動完了』

「よし、アルト、こつちの準備はできたわよ!」

『了解!!こつちもすぐに着くから!』

彼女の声に合わせてるようにヘリがさらに加速する。

「キャロ、発射までのラグがあるから、ヘリの防御お願いできる?」

「はい、任せてください！」

「まったく、相棒スバルと似て大胆なやり方を提案するんだから！」
ティアナの作戦を聞いたアルトはコックピットの中で呆れたようにため息を吐く。

だが、そんな彼女の集中力はかつてないほどに高まっていた。

「ヴァイス先輩直伝の操縦技術なめんな!!」

背後から放たれるレーザーを紙一重で避けながらアルトはヘリを目標地点へと向かわせる。

「みんな！指定ポイントまであと少し、両側のハッチを開くから気を付けて!!」

『了解、やっちゃって!』

アルトはコックピットの中のスイッチを二つ操作し、操縦桿を倒す。

すると、彼女の操るヘリの両側のハッチが跳ね上がりながら、機体を横に向ける。

ハッチが開き、ヘリの中へ風が激しく吹きこんでくる。

カノンを構えたティアナの視線の先には5機のガジェットII型がレーザーを放ちながら近づいてきていた。

「ケリュケイオン！」

『Protection』

キャロがヘリの側面に張った障壁がガジェットII型の放つレーザーを防ぐ。

その間にティアナはカノンのチャージを進める。

「GINGAさん、あたしの腰をしっかりと掴んでいてください！」

「了解！」

ティアナの言葉に反応したGINGAがすぐに彼女の腰のベルトをしつかりと掴む。

『チャージ完了』

「ダーゲットロック!! ストライカーカノン、撃ちます!!」

彼女の言葉と同時にカノンの砲口からエネルギーが解き放たれる。

その反動によって彼女の身体が後ろへ押し出されそうになるが、ギンガが彼女の腰を掴んでいたため倒れることはなかった。

膨大なエネルギーの奔流は4機のガジェットの内、2機に直撃しその機体を吹き飛ばす。

残る2機もその衝撃によってバランスを崩し、ビルへと激突し地に堕ちていった。

「すごい……ッ!」

「やりましたね、ティアさん!!」

その成果にエリオとキャロが喜びの声を上げながらティアナの方を見ると、彼女は腕を振りながら冷や汗をかいていた。

「これ、反動強すぎ……ッ!」

『みんな、すぐに戦闘区域につくから準備して!!』

ティアナは腕の痺れを紛らわせるように苦言を呈すると同時に、アルトの声がヘリの中に響いた。

空を悠然と飛ぶ船——聖王のゆりかご。

その周辺はまさに激戦区にふさわしい様相を呈していた。

休む暇もなく襲い掛かってくるガジェットII型。

空をも覆いつくさんばかりにゆりかごの砲門から放たれる紫の砲撃。

「航空魔導師隊、スリーマンセルで当たって! 単独での戦闘は避けて、確実に、だけど迅速に撃ち落して!!」

そんな状況に内心舌打ちをするはやては、周囲の航空魔導師に指示を出しながら飛行するガジェットの編隊を撃ち落す。だが、それだけやっても敵の数は減るどころか増えてきているように彼女には感じられた。

敵味方が入り乱れる乱戦状態のため、はやてが最も得意として広い範囲殲滅魔法は使えない。

そんな状況に歯噛みしながらはやては一つの考えに至った。

「外からチマチマやっててもどうにもならん……。やっぱり、中から止めるしかないか……。ッ！」

はやては目の前のゆりかごを苦々しい顔で見上げる。

その規格外の巨体には、はやての魔法でも致命傷を与えることはできないだろう。

ゆりかごを止めるためには、内部に侵入して動力炉を潰すしかない。

『24番射出口より、小型機多数！』

『南側の射出口からもⅡ型およびⅢ型の射出を確認!!』

「！」

はやての思考に割り込む形で、この戦域にいる魔導師からの念話がつながった。

その内容は彼女にとってかなり苦しいものであったが、はやてはそれを顔には出さずに周囲で彼女の撃ち漏らしを撃ち落していた魔導師に指示を出す。

「皆、落ち着いて！拡散されたら手が回れへん。叩ける小型機は空で叩く、潰せる砲門は今のうちに潰す！ミッド地上の航空魔導師隊、勇気と力の見せ所やで！」

『はい!!』

はやての激励に、魔導師たちは得物を構え、己が敵に狙いを定めた。戦いはまだ始まったばかりだった。

「せえいッ!!」

気合を込めた声とともに振るわれたグラーフアイゼンによって、一機のカジエットが空中で叩き潰され、スクラップと成り果てた。

ヴィータは返す刀で背後から接近していたカジエットⅠ型を、吹き

飛ばし粉碎する。

「中に入る突入口を探せ！突入部隊、位置報告!!」

グイータはガジェットが密集する場所に向かって飛翔し、突入部隊への指示を出す。

そこから少し離れたところでは、なのはが密集したガジェットに向かって砲撃を放ち、その存在をこの世から消し去っていた。

「第七密集点突破、次ツ!!」

機械音とともに、レイジングハートから噴き出す蒸気を払いのけながらなのはは次の密集点に向けてその矛先を向ける。

今、彼女の手に握られているのは杖というよりも、槍と評した方がいい代物だった。

レイジングハート・エクセリオン、その全力稼働を示す形態『エクシードモード』。

普段のレイジングハートに比べて、攻撃的なデザインのそれは、彼女の覚悟の証でもあった。

最初から全力全開。

彼女には手加減するつもりも、出し惜しみするつもりもなかった。
(ゆりかごの阻止限界時間まであと三時間……ツ！)

なのはは新たな標的をその視界に認めると、即座に砲撃を放った。
まさに鎧袖一触。

今の彼女にとって、ガジェットは己の道を塞ぐ障害どころか、路傍の石と同じ存在だった。

「邪魔をしないでツ!!」

ティアナ達が戦闘区域に向かい、なのはたちがゆりかご周辺で戦闘を行っている同時刻。

彼女たちとは別のへりの中で、スバルは新しい左腕の最終調整を行っていた。

そんな彼に向けて声がかけられた。

「スバル、ティアナ達のところまであと十五分つてところだ。大丈夫か?」

「はい、大丈夫です……ってヴァイスさん!」

自分に向けられた声が聞き覚えのあるものだったことに驚くスバル。

そんな彼の視線の先には、ヘリの操縦席へ通じる扉から顔を出していたヴァイスの姿があった。

「なんで、ヴァイスさんが!? 怪我してたんじゃない?」

「俺は今回はこのヘリの護衛だ。パイロットは、以前の部隊の後輩に頼んでる。」

それに怪我については心配すんな。俺はお前らみたいに前線で身体張るわけじゃないしな」

ヴァイスは自分の腕を叩きながらそう答える。

そんな彼に向けて、スバルはそうですか……と安心したといった感じで呟いた。

「それにしても、スバル。お前大丈夫なのか?」

「はい?」

スバルの座っている椅子の反対側の壁に背を預けて彼の方を向いたヴァイスが尋ねるが、当のスバルは何についての質問なのかかわからず首を傾げる。

「いや、ティアナからだいたい事情は聞いてるんだぞ?」

「ああ、そのことですか。それについてはもう大丈夫ですよ……」

ヴァイスは質問に対してのスバルの答えを聞いて

「ブアツハハツ!!」

腹を抱えて笑いだしてしまったのだった。

そんな彼の様子を見て、スバルもまたつられて笑いだしてしまうのだった。

「あー笑った笑った。確かに、それなら大丈夫だな」

「はい、ティアナに喝も入れられましたしね」

そんな彼に向けてヴァイスは、

「なら、俺からも一つアドバイスでもしておくか……」

「アドバイスですか……？」

「ああ、人生の先輩からのありがたいお言葉だ。『頭はクールに、心はホットに』ってな」

『「頭はクールに……心はホットに……」ですか』

「ああ、頭の隅でもおいて置け。役に立つかはわからないけどな」

ヴァイスは笑みを浮かべながらスバルに向けてそう告げる。

彼の言葉をスバルは小さく繰り返す。

そんな時、ヘリのパイロットからの声が響き渡った。

『ナカジマ陸士、ヴァイス先輩、アースラからの連絡です。フォワードチームが戦闘を開始したそうです』

「そうか、わかった。戦闘区域まではどのぐらいだ？」

『約1000といったところですよ』

パイロットの声にヴァイスとスバルは互いを見て頷く。

「準備はできてるな？」

「もちろんですよ。ヴァイスさん、荷物の方はとりあえずここに置いときます」

「ああ、了解だ。レイト、戦闘区域まで全速だ！」

『了解です、しっかり捕まらせてください！』

パイロットの声とともにヘリの速度が上昇する。

過ぎ去っていく窓の外の景色を見つめながらスバルは小さく、誰にも聞こえることのない大ききで呟く。

「待つてろよ……ノーヴェ」

「でええいつ!!」

「——っ!!」

響き渡る咆哮と共に放たれた蹴撃がティアナに襲い掛かる。

その蹴りを両腕をクロスさせて受け止め、直撃を防ごうとしたティアナに足が触れた瞬間、彼女の姿は霧散してしまった。

「また外れか……」

「おかしいつすねー……こつちの眼も調整して幻術は効かないようになってるはずなんすけど……」

ティアナの姿を蹴り消したノーヴェエは小さく舌打ちする。

そんな彼女と一緒にになって本体の姿を探すウエンディはティアナの幻術のできの良さを褒めながらも面倒だという表情を浮かべる。

「幻術が多いなら全部潰して本体を燻りだすぞ。さっさとここを抜けて地上本部に行く」

「ノーヴェエ、やる気満々……つてわけでもなさそうっすね……」

姉の発言にウエンディは驚きながらも、彼女の顔色を見て声を小さくする。

ウエンディから見たノーヴェエの顔色はかなり悪かった。

ティアナを探す瞳は暗く曇っており、その眉間には深い皺ができていた。

「はあはあ……まったく前衛がないのって本当にやり難い……っ」

一方、ノーヴェエとウエンディの攻撃を捌いていたティアナは彼女たちから近い瓦礫に背を預けて息を整えていた。

当初、彼女たちフォワードチームは戦闘機人たちに対し、連携を駆使して制圧しようとしていた。

だが、彼女たちがヘリから降下した直後、エリオとキャロが召喚士ルーテシアの姿を認め、彼女の説得のために離脱。

その後、ギンガとのコンビで事態に対処しようとしたティアナだったが、ノーヴェエと戦闘機人No. 12『ディード』の奇襲によってギンガと分断されてしまい、ティアナはビルという閉鎖空間の中でノーヴェエとウエンディの二人の相手をしないといけなくなってしまうのだった。

「……いや、いつまでもスバルと一緒にいようわけでもないし」

ティアナはそう呟き、クロスミラーージュに装填されているカートリッジの確認を行う。

使用した分のカートリッジの補充を行い、一度深く息を吐く。

「それじゃ、一丁……ッ!？」

やってやりますか、と言おうとした瞬間、彼女の背中にヒヤリとする感覚が走った。

彼女がその感覚に従い、その場を飛び退くと、次の瞬間、彼女が背を預けていた瓦礫はノーヴェの拳に打ち砕かれていた。

「やっと見つけた……手間取らせやがって」

「ちよつと……顔ヤバいわよ、アンタ」

ティアナは彼女を見るノーヴェの表情を見て顔を引き攣らせる。

彼女は敵であるにもかかわらず、ノーヴェの心身ともに過剰なストレスがかかっていることに同情を禁じ得なかった。

「結構粘られたっすけど、これで終わりにするっすよ」

「……簡単に終わらせてたまるもんですかっ」

ノーヴェが拳を構え、ウエンデイがライディングボードを構えるのに対して、ティアナはクロスミラーージュの片方をダガーモードに変形させ、魔力刃を展開する。

ノーヴェのジェットエッジが唸りを上げ、蹴りの体勢に入った瞬間

……

『後ろに飛べ!!』

「——ッ!!」

ティアナの頭に響いた声に従い、後ろへと飛び退く。

その直後、天井を突き破って白と青のバリアジャケットを纏った男が飛び込んできた。

「遅いのよ、まったく……!」

その姿にティアナは安堵の表情を浮かべ

「——ッ!」

ノーヴェの表情は一層険しくなっていく。

そんな二人に向けて、彼——スバルはただ一つの言葉を口にする。

「お待たせ……!」

ノーヴェルト 第十三話

ノーヴェとティアナの間而降り立ったスバル。

彼は目の前にいるノーヴェを見ると、「やつぱり、そうだよな……」と小さく呟く。

「ティアナ、あつちのピンクを任せてもいいか？」

「ええ、いいわよ。こつちのことは気にせず、あんたはあんたがやりたいようにやりなさい」

ティアナは自分の方を見ずにそう尋ねるスバルに対して苦笑しながらそう告げた。

そんな彼女の言葉に応えるように、体制を低くする。

「さて、行くぜノーヴェ。少し付き合ってもらおうぞ……っ」

「——ッ」

言葉と同時に飛び出すスバル。

そんな彼に向けて反撃の拳を振るうノーヴェだったが、直後の彼の行動に彼女は驚愕の表情を浮かべた。

「な——ッ!？」

「マツハキヤリバーツ!!」

《Wingroad》

スバルは迎撃のためのノーヴェの拳を紙一重に避けると、そのまま彼女の身体にしがみつき、天井に空いた穴から彼女と一緒に外まで飛び出していった。

そんな彼らの様子を見ていたウエンディとティアナは

「行っちゃったっすねー」

「そうね……、それで、あんたはよかったのかしら？」

「何がっすかー？」

ウエンディの気の抜けた言葉に対して、ティアナは苦笑しながら尋ねる。

「あいつの突進に対して何もリアクション見せなかったじゃない」

「ああ、そのことっすか。それなら別にどうということはないっすね」

ティアナの問いに、「だって……」と続けるウエンディ。

「あたしはノーヴェの妹っすからねー。お姉ちゃんがずっとあんな顔してるのはさすがにってところっす。

それに、スバルっちが来たならよっぽどのがないと、悪いほうには行かないと思ってるっすからねー」

「あら、ずいぶん信用してるのね、あいつのこと」

ウエンデイの言葉に驚きの声を上げるティアナ。

そんな彼女に対してウエンデイは、だって……とつぶやき

「あの二人、ぜったい両想いっすから」

「……そうね、互いに相手のことを考えすぎてるってのは傍から見ても分かるぐらいにはねー」

そう言い合い、ティアナは薄く笑みを浮かべ、ウエンデイは「いしし」と朗らかな笑みを浮かべる。

そして、互いに相手に砲口を向ける。

「……今すぐ武器を捨てて投降すれば、痛くはしないわよ?」

「残念ながら、ほかの姉妹が戦ってて自分だけ降参ってわけにはいかないっすねー」

あ、もちろんノーヴェは別っすよ?と付け加えるウエンデイ。

「そう、なら全部終わったらまた話をしましょう?あんたのことは嫌いじゃないみたいだから」

「そうっすねー。ま、アンタがあたしに勝てればの話っすけど」

「あと、一つ言っておくわ」

ティアナの声が笑顔のまま一段階下がったのに対して、ウエンデイの背筋を嫌な汗が流れ始めた。

「今ちよつと失恋のせいでストレスが溜まってるから、やりすぎたらごめんね?」

「うわあお、スバルって意外とモテモテっすねー」

「このっ、離せっ!」

スバルに抱きかかえられて外へと飛び出したノーヴェは、何とかス

バルの拘束から逃れることに成功した。

地上に降りた二人は、互いに向き合う。

「いきなりなんなんだ、お前。もうお前とあたしは何の関係もないはずだ!!」

「そんなこと言うなよ。俺はお前に会いに来たんだから」

腕を振り、スバルを拒絶する反応を見せるノーヴェエに対して、スバルは苦笑しながら彼女の目を見つめる。

「——ッ、うるさいッ!!」

スバルの深い蒼色の瞳がノーヴェエを見つめる。

ノーヴェエにはそれが耐えられず、悲鳴を上げるように彼の言葉を遮る。

彼を騙し、傷つけた。その罪悪感が、彼女の心に住み着いていた。その罪悪感に押しつぶされそうになりながらも、ノーヴェエはスバルに向けて右手のガンナツクルを向けて直射弾を放つ。

「俺さ、地上本部の襲撃の後、散々悩んでたよ、お前のことをさ」

向かってくる直射弾をしっかりと見極め、直撃するものだけをリボルバーナツクルで払い除けながら、スバルは心の中で考えたことを口にする。

近づいてくるスバルに対して、ノーヴェエはジェットエッジによる加速をかける。

ジェットエッジによって加速されたノーヴェエの蹴りを紙一重で避ける。

「悩んで悩んで、考え抜いて。そして思ったんだ」

「——ッ!」

ノーヴェエから繰り出される蹴りと拳の乱打を前にしても、落ち着いていた。

「うだうだ考えるのは止めるってな。で、会いに来て、改めてわかった」

「うるさい、うるさい、うるさい!!」

スバルはその蹴りを避け、拳を擲きながら言葉を続ける。

だが、ノーヴェエは、駄々をこねる子供のように叫ぶ。

「ノーヴェエ、俺はさ……」

「黙れ!!それ以上は……ッ」

ノーヴェエの渾身の拳がスバルに向けて放たれる。

彼女は彼の言うことが、言おうとしていることがなんとなくわかっている。

だが、それは彼女が捨てた、捨てたと思っっている事実だった。

スバルは、彼女の拳を、リボルバーナックルを解除した右手で受け止める。

そして、その心に浮かんだ言葉をそのまま形にした。

「お前のことが好きだ」

「なんで……」

「ん？」

拳をスバルに捉えられたまま、小さく呟く。

「なんで、あたしは、お前をだましてた……!」

「そうだな」

ノーヴェエは顔を俯かせ、スバルに顔を見せずにそう口にする。

スバルは、彼女の言葉に頷きながらその言葉の続きを待つ。

「あたしは……、お前を裏切った……ッ!」

「まあ……そうだな」

ノーヴェエの声が震えながらもだんだんと大きくなっていく。

「あたしは、犯罪者で……お前は管理局員で……、敵同士なのに……ッ!!」

「それも確かにそうだな」

瓦礫が散らばる地面に、数滴の水が落ちて染みを作る。

すでに、彼女の声は涙ぐんでいた。

「なんでお前は……っ」

「それがどうした」

ノーヴェエの言葉を遮り、小さく、しかしハッキリとスバルは口にする。

「ノーヴェエが俺をだましてた?確かにそうだ。俺はかなり傷ついたさ」

「——ッ」

スバルの言葉にノーヴェエは息を飲む。

そんな彼女の様子を無視し、スバルは言葉が続ける。

「お前が俺を裏切った？確かに、俺の心はボロボロだった」

スバルは自分が彼女のことを自分が思っている以上に大切に思っていたことに気づいた時のことを思い出しながら言葉を紡ぐ。

「ノーヴェエが犯罪者で、俺が管理局員。それも事実だ」

「だったら……ッ」

ノーヴェエが泣きながらも、彼から離れようと自由な手を彼の身体に向けるが、スバルは左手でその手を掴む。

そして……

「それがどうしたって言ってるんだ！」

ノーヴェエが再び彼を拒絶するような言葉を発する前に、スバルは声を荒げる。

「——ッ」

荒げた声に驚きの反応を見せるノーヴェエに対してスバルはさらに言葉が続ける。

「お前が俺を裏切った？お前は犯罪者で俺たちは敵同士？」

それがどうした!!お前がそう言うなら、俺は何度だって言ってる!!

そう言つて、スバルはノーヴェエの両手を離し、彼女の身体を抱きしめる。

それは先ほど、彼女を外に連れ出す際のように強引でありながらも、割れ物を扱うように優しい抱擁であった。

「俺はお前のことが大好きだ、ノーヴェエ」

彼女の身体を抱きしめ、その耳元で再度、先ほどの言葉を繰り返す。

「——ッ、でもッ、あたし、はっ!!」

「お前はどうかんだ、ノーヴェエ？」

ノーヴェエの泣きの入った言葉に対してスバルは彼女の気持ちを尋

ねる。

「俺は、隣にお前がいてほしい。一緒に生きて生きたいよ。お前は？」

「あ、あたしは……ッ!!」

「いっしょに……ッ」

「……」

スバルは彼女の答えを待つ。

すでにノーヴェエの目からは涙が溢れ、その表情も崩れきっていた。

「一緒に、いても……いいのか……な？」

「ああ……」

ノーヴェエから、自分が聞きたかった言葉が聞けたスバルは、彼女の身体から離れる。

「もちろん、この騒動の後始末とかいろいろあるけどな」

「それは……」

「だけど、それを選ぶならさ……」

スバルは笑みを浮かべながら右手を差し出す。

「この手をとってくれよ、ノーヴェエ」

「スバル……」

スバルの差し出した右手を見ながら、ノーヴェエは自分の手をその手に載せようとする。

《相棒ッ!!》

「——ッ、ノーヴェエ!!」

「え——？」

だが、次の瞬間、マツハキヤリバーの警告が響き渡り、スバルの声がノーヴェエに届く同時に彼女の身体は突き飛ばされていた。

突き飛ばされたノーヴェエがスバルの姿を目に捉えた。

「あ、あああ……」

「戦闘機人タイプゼロ・セカンドによる妨害を確認。優先目標変更無し、ジエイル・スカリエッテイ型戦闘機人の排除」

「——ガッ!？」

謎の人影によって、瓦礫に叩き付けられ、苦悶の表情を浮かべながら沈むスバル。

「——ッ」

意識を失った彼の姿を見たノーヴェは、自分の頭が怒りで沸騰しはじめるのを感じていたが、彼女の眼はその下手人を捕らえ、彼女の頭からその存在の情報を引きだしていた。

下手人の名は、『タイプゼロ・ジエンド』。

今は亡き最高評議会の三人が、ジェイル・スカリエツテイへのカウンターとして生み出された刺客。

「JS型戦闘機人No. 9を確認。破壊する」

最凶の番犬が牙を剥いた瞬間だった。

ノーヴェルト 第十四話

「ノーヴェ……?」

「クロスミラージュ、今のは!?!」

ビルの中で互いに相手の出方を伺っていたウエンディとティアナだったが、彼女の悲鳴ノーヴェに近い声をウエンディはその耳で拾い上げ、ティアナはクロスミラージュからの報告で、スバルとノーヴェに何かがあったということを知った。

「ここは一旦預けるッす!」

「あ、ちよつと待ちなさい!!」

ウエンディはそう言うと、ライディングボードを稼働させ、天井の穴へと向かう。

突然の行動にティアナは出遅れるが、すぐさまビルの窓から外に飛び出す。

「クロスミラージュ、お願い!」

《スターキャリバー、セットアップ》

飛び出したティアナは両足にスターキャリバーを装備し、すぐさまウイングロードを展開する。

「一気に行くわよ」

《マギリングコンバーター出力全開》

両足から変換炉から魔力が放出され彼女の身体は一気に加速した。目指すは彼女の相棒と、その思い人のいるであろう場所に向けて。

「J S型戦闘機人No. 9、脅威度判定『中』」

スバルが自分を庇った。

その事実で動揺したノーヴェだったが、目の前の存在が自分の方に意識を向けると、そんな動揺もは綺麗になくなり、彼女の中の第六感が警鐘を鳴らした。

目の前の存在——ジエンド、その存在自体は彼女もまたチンクや

ドゥーエからのアップデートによって情報を得ていたが、実際に目の当たりにすることでその異常さを肌で感じ取っていた。

「なんなんだよ、おまえ……ッ」

「――」

ノーヴェはジエンドの向ける、感情の籠っていない、仮面のような顔を見て即座に行動に移る。

こいつは危険だ――自分だけでなく、意識を失っているスバルのことを守るために、彼女はガンナツクルから直射弾を連射する。

「エネルギー攻撃を確認。驚異度判定低。分断ディバイドフィールド生成」

「チイツ!!」

だが、放たれたエネルギー弾はすべてジエンドの周囲に展開されたフィールドによって分解させられてしまう。

「攻撃を開始する」

その言葉と同時に、ジエンドからの圧が増したのをノーヴェは感じ取る。

次の瞬間、彼女の戦闘機人としての眼カメラがジエンドから発せられるエネルギーを検出した。

「このエネルギーは……ッ!?」

「――」

ノーヴェがその正体に驚愕の表情を浮かべると同時に、ジエンドが動き出す。

10mはあった二人の距離が、一気に縮まる。

「ク――ッ!!」

一気に距離を詰めてくるジエンドに対して距離を取ろうとするノーヴェだったが、彼女が離れるよりも早くジエンドが彼女を間合いに捉えた。

ジエンドの正確かつ尋常でない速さで振るわれる右手を上体を逸らすことで避けようとするが、その拳が纏ったエネルギーの余波によって彼女の身体に衝撃が走る。

「くそッ!!」

ノーヴェはその一撃だけで、ジエンドの能力の強さに戦慄してい

た。

舌打ちをする彼女に向けて放たれる拳と蹴りの直撃は絶対に避けるために右手のガンナツクルで捌いていく。

しかし、度重なる連撃の前に、彼女の身体には傷が増えていく。

「——ッ!!」

そして、積み重なった傷が彼女の身体に激痛を走らせる。

その瞬間を見逃さず、ジエンドの拳がノーヴェエの喉笛を噛み千切らんと迫る。

「ガッ……このおッ!!」

ノーヴェエはその拳を頭を傾けることで頭蓋を砕かれることは避けることができたが、逸れたその一撃は彼女の左肩を打ち砕く。

左肩から聞こえてくる破壊音と痛みで顔を歪め、悲鳴を上げそうになるノーヴェエだったが、歯を喰いしぼり、ジエンドの顔面目掛けて右手を振り抜く。

「——ッ」

顔面に向けて迫る彼女の拳をジエンドは両腕をクロスすることで防ぐが、ノーヴェエの臂力のみで放たれた勢いによってその身体は地面を削り、土煙を撒き散らしながら吹き飛ばされていく。

「ハア……ハア……ッ!!」

ひび割れたガンナツクルを纏った拳を突きだしたノーヴェエだったが彼女の左腕は力が入らず、痛みを堪え苦悶の表情を浮かべていた。

そして、彼女の視線の先には腕を交差させ、防御の体勢のまま大地に立つジエンドの姿があった。

「損傷軽微……?」

両腕をほどき、その視線をノーヴェエに向けたままそう呟くジエンドだったが、その視線が不意に彼女から外れる。

その様子にノーヴェエは不審に思ったが、すぐに彼女たちに近づいてくる存在を察知した。

「ノーヴェエ!!」

彼女がジエンドと同じ方向に目を向けると同時に、崩れたビルを突き破ってライディングボードに乗ったウエンデイがその場に現れ

る。

ウエンディはすぐにノーヴェの元に駆け付けようとするが、彼女の間にいる存在に気づき、警戒を高める。

「こいつは……チンク姉の言ってた……ッ」

「J S型戦闘機人No. 11を確認。驚異度判定『中』。優先破壊目標と断定」

ウエンディはライディングボードの砲口をジエンドに向ける。

そんな彼女の武装や状態を確認したジエンドは矛先をウエンディへと向ける。

「よせ、ウエンディ!! 逃げろ!!」

「そいつは聞けない相談っすね、エリアルキャノン!!」

ライディングボードの砲口から砲撃が放たれ、ジエンドに向かう。

だが、その砲撃はジエンドが発生させたフィールドに衝突し、数秒その身体を後ろに押し戻すが、すぐに拡散し消滅してしまう。

「インヒュレーションスキル『エリアルレイヴ』の解析完了。分断ディバイドフィールド出力上昇」

「ちよ、マジっすか!？」

ジエンドの周囲に展開されたフィールドの出力が直前に倍以上に膨れ上がったのをウエンディのセンサーは捉え、その事実にウエンディは頬を引き攣らせる。

そんな彼女に向けてジエンドが駆ける。

「だったら、これでッ」

ライディングボードからエネルギーの刃を発生させ、接近してくるジエンドに向けて切り上げる。

だが、ジエンドはライディングボードの大きさ故に大振りとなるそのモーシヨンの間隙を逃さなかった。

切り上げのタイミングを見きったジエンドが刃の間合いの内側へと飛び込み、その貫手の型を構える。

「疑似IS発動『振動粉碎』」

「な——ッ!？」

ジエンドの口から発せられた言葉に驚愕の表情を浮かべるウエン

デイは、咄嗟にライディングボードを引き戻し、その身体を守るための盾とする。

だが――

「ガ――――あアッあああああッ!!」

突き出されたジエンドの右手はライディングボードを容易く突き破り、そのままウエンデイの左脇腹を貫く。

ウエンデイは貫かれた脇腹から自分の身体を破壊する音と、神経から伝わる激痛に悲鳴を上げる。

「ウエンデイッ!!」

悲鳴を上げ、貫かれた脇腹から流れ出る血と機械の身体の一部をノーヴェエは見た。

そして、左肩の痛みを無視して彼女はジェットエッジに火を灯した。

「IS……発動……ッ、エアライナーッ!!」

痛みを堪えながら詠唱を口にするノーヴェエ。

彼女の足下からジエンドまでの直線状にある障害物よりも高い位置に彼女のための道が発生する。

ウエンデイ
「妹を……ッ!!」

ジェットエッジのジェットノズルから炎が噴射され、彼女の身体を一気に加速させる。

エアライナーがフィールドの影響から、途中で途切れてしまうが、十分な加速を得たノーヴェエにとってはもはや関係なかった。

「離せっ!!」

『Revolver Spike』

エアライナーから飛び出し、ジエンドの頭部、その右側面に向けて空中から回し蹴りを放つ。

ジェットエッジの噴射が一層激しくなり、彼女の蹴りを後押しし、その威力を増大させる。

ジエンドの右腕は今現在もウエンデイの脇腹に突き入れられている。

右側からの攻撃をガードするには遅すぎるタイミング、それを狙っ

ての蹴撃だった。

「——ッ!?!」

だが、ジエンドに向けて放たれた蹴りが直撃する直前、目の前の敵の動きにノーヴェは目を見開いた。

ウエンデイの脇腹に突き入れた右腕をそのままに、彼女の蹴りに対して背中を向けるように動くジエンド。

そして、襲い掛かる蹴りを、左腕を後ろに突き出すことで、それを受け止めた。

「ジェットエツジツ!!」

『Boost up』

捕まれた右足からジェットノズルが焼き切れんばかりに炎がさらに噴き出す。

ジエンドをウエンデイから離れさせる。

それだけを考えての行動だった。

だが、その目論見は露と消えた。

「振動粉碎発動」

「……っあっあああっ!!」

ジエンドの無慈悲な言葉とともに、掴まれた右脚の内部フレームが破壊音を撒き散らしながら使い物にならなくなる。

二度目のその痛みから、彼女の喉から悲鳴が上がる。

だが、彼女はひび割れたガンナツクルをジエンドに向ける。

「ああアアあッ!!」

悲鳴とも咆哮ともとれる声とともに彼女の瞳の金色の光が輝き、ガンナツクルに膨大なエネルギーが集中する。

フィールドの影響から拡散するが、それ以上に彼女の身体からかき集められたそれは、ジエンドでさえも脅威に感じられるほどのものだった。

集められたエネルギーは、今の彼女にとっては制御しきれないもの。

何かの拍子にそのエネルギーは破裂するであろう代物だった。

だが、彼女にはそれで十分だった。

「——ぶっぱなせっ、ジェットエッジっ!!」

『burst』

ノーヴェとジエンドの間で膨大なエネルギーが膨れ上がる。

そのエネルギーの奔流から逃れるため、ジェットエッジは右手を突き入れたウエンデイの身体をノーヴェに叩き付ける。

だが、その次の瞬間、制御されない、エネルギーの奔流がノーヴェとウエンデイ、ジエンドの間で炸裂した。

「ガッ——!」

「うぐう……ッ」

ウエンデイの身体が激突すると同時に破裂したエネルギーの威力によって二人の身体は吹き飛ばされ、乱立する瓦礫の一つに打ちつけられる。

「——うあ……」

全身から感じる痛みを声を上げながらノーヴェは朦朧とする意識の中、視覚の回復を最優先に行い、ノイズの走る視界を動かす。

頭から流れる血が入ったのか、視界の半分は赤く染められていたが彼女は隣で気を失っているウエンデイを見つけると、安堵の息を吐く。

次に自分の身体が視界に入り、その右腕と右脚にピントを合わせる。

爆発にさらされたガンナツクルはき裂が走り、右腕は人工皮膚の間から内部フレームと神経ケーブルが覗き見えていた。

さらに、ジエンドに掴まれた右脚は、内部フレームが砕け散っており、感覚がないことにノーヴェは小さく舌打ちをする。

「——」

「……ッ!?!」

そんな彼女のセンサーが動体反応を示す。

センサーが反応した方向を見ると、爆発の中心地から少し離れたところに立つジエンドの姿があった。

あれだけの爆発を受けたはずのジエンドの身体には目立った損傷がないことが今のノーヴェでも見る事ができた。

せいぜい一番爆風を受けたであろう右腕の皮膚が吹き飛んだ程度で、その機能は失われてはいない。

「――」
ジエンドが何かを口にしている。

だが、未だに聴力が回復していないノーヴェエにはもう何を言っているのか関係のないことだった。

「――」
ジエンドが彼女に向けて駆ける。

向かってくるジエンドに向けてガンナツクルを向けようとするが、彼女の右腕は言うことを効かなかった。

「……ああ」
ジエンドが左腕を引き絞る。

ノーヴェエにはその左腕が自分に向けて放たれる時間が嫌にゆつくりと感じられた。

「……悪い、もう無理だ」
万事休す。

もはや身体を動かすことすらできない彼女は自分の心臓に向けて放たれる貫手を見つめることしかできない。

そんな言葉を吐く彼女の瞳から一筋の涙が零れ落ちる。
「ごめん……、お前の手、握ってやれなくて……っ」

自分の命の危機に、最後に彼女の頭に浮かんだのは、自分に向けて手を差し伸べるスバルの姿だった。

せめて、スバルの^{あいつ}ことを思いながら、そう思いノーヴェエは眼を閉じる。

ジエンドの左手が彼女に突き刺さらんとしたとき

「ギア、エクセリオン」

静かに、しかし力強い、その言葉がノーヴェエの心に聞こえてきた。

ノーヴェルルート 第十五話

『俺は、隣にお前がいてほしい。一緒に生きて生きたいよ。お前は?』
『あ、あたしは……ッ!!』

『ああ、人生の先輩からのありがたいお言葉だ。『頭はクールに、心はホットに』ってな』

『頭はクールに……心はホットに……』ですか』

『ああ、頭の隅でもおいて置け。役に立つかはわからないけどな』

『現場までの足はこちらで確保しておいたから、この場所に向かうといい』

『ありがとうございます、サカキ博士』

『なに、これくらいどうということはないよ。ほら、早くいくといい。主人公が遅れたら話にならないだろう?』

『主役は遅れてくるものって言葉もありますけどね』

『あと、ヘリの中に君への贈り物があるから、しっかりとマニュアルを読んでもおくことをお勧めするよ』

『贈り物……?』

『それをどう使うかは、君しただけだね』

『アンタがあのかを嫌っているのは知ってる。でも、その力で助けられる人がいるってことも覚えておきなさい』

スバルが気が付くと、そこは火の海の中だった。
顔を襲う熱風を腕で払いのける。

「……っ」

周囲を見回したスバルは、そこが自分にとってよく知る場所であることに気づき、そして驚きを隠しきれなかった。

燃えるロビー、崩れ落ちた柱、無人のサービスカウンター……。

そこは紛れもなく彼にとっては忘れられない場所。

「そう、ここはミッド臨海第8空港」

「——っ!？」

突如背後から聞こえてきた声にスバルはさらに驚愕の表情を深めた。

「君にとつての、ある意味始まりの場所だよ。スバル」

「なのはさん……っ?？」

振り向いた彼の先には、白いバリアジャケットを纏った少女——現在の姿よりも幼いなのはが立っていた。

「でも、ここは昔のあの場所じゃない。スバル、君の心の中」

「心の中……?？」

「そう、この空港も、この炎も、そしてこのなのはも。君の心の中だけの存在」

目の前のなのはの言うことにスバルは眼を白黒させる。

理解が追いついていない彼を見たなのは小さく笑みを浮かべる。

その笑みは、この場所^{火災現場}であることを忘れさせるやさしさが見え隠れしていた。

「ここも、本当はもっと素敵な場所なんだけどね……。スバル、今の君はさ……」

「自分のことをまだ怖がっているんだよね?？」

「——ッ」

なのはの言葉にスバルは反応する。

なのはは、そんな彼に近づき、その頬に手を当てる。

「自分の力が、まだ怖い?？」

「それは……」

なのはの問いにスバルは答えず、顔を俯かせる。

「違う、まだ自分の力を信じ切れてないだけだよ」

「信じ切れてない……？」

スバルの言葉に、なのはは「そう」と相槌を打つ。

「スバルは、なんで魔導師になったの？」

「え……」

「答えて」

なのはの静かだが、強い言葉にスバルは気圧される。

「俺は……、お袋や、なのはさんみたいに、泣いている誰かを助けられるようになりたいと……」

「うん。それがスバルの始まり。それを忘れなければ大丈夫」

なのははスバルの頬に当ててた手を離す。

「私が教えてきたこと。ヴィータちゃんが叩きこんだこと。シグナムさんと一対一でやってきたこと。六課で過ごして学んだこと。訓練校でティアナと一緒に学んだこと」

そして、その手を、スバルの胸にトンつと当てる。

「その全部が、スバルの心こころにある」

「……」

俯いていたスバルは、彼女の手の当てられた場所を見つめる。

「まだまだ教え足りないけど、スバルはもう、強くて優しい魔導師だよ」

「え……」

なのはは、にこりと笑って言葉を続ける。

「あとは、スバルが、一歩踏み出すだけだよ」

「一歩……」

なのはは頷くと、彼の後ろを指さす。

その指さす先を振り向き視線を向ける。

『IS……発動……ッ、エアライナーッ!!』

『妹ウエンディを……離せっ!!』

その先、炎の先に、外現実の世界が映し出される。

「ノーヴェ……ッ」

「スバルは、あの子のことを助けない？」

なのはの問いかけにスバルは、今度はすぐに頷く。

その答えになのはは満足したように笑みを深める。

「だったら、あとは簡単。あの子を助ける。その強い信念^想を貫くだけ。それで十分なんだよ」

「想いを貫く……」

なのはの言葉を、眼を閉じ、繰り返す。

そして、再び瞼を開いた彼の目を見てなのはは微笑む。

「もう大丈夫？」

「はい、まだ不安ですけど、あいつを……ノーヴェを助けたって言う想いは……覚悟はできました」

「なら、最後に一つ」

スバルの顔の前に手を出し、人差し指を立てる。

その姿は、昔の姿ではなく、今の、スバルのよく知る姿のなのはだった。

「あとは、強くて、カッコいい男の子になるだけ。できる？」

「できますっ」

「うん、なら……」

なのははスバルの横に並び、彼の背中を一度叩く。

「がんばれ、男の子！」

「はいっ」

スバルは隣に立つ、自分よりも少し背の高いなのはの顔を見て、力強く答えた。

そんな彼の返事に、もう一度頷き、なのはは「それじゃ……」と言葉を続ける。

「ここから出ないとね。ノーヴェ^{あの子}を助けるために」

「はいっ!!」

そう言うと、なのははその手にレイジングハートを、スバルはリボルバーナックルを呼び出す。

「それじゃ、せーので行くよっ」

「了解ですッ!!」

レイジングハートトリボルバーナツケル

R HとR Nからカートリッジが排出される。

デバイスに魔力が集中する。

「3、2、1………せーの!!」

R HとR Nに魔力が集中する。

なのはが杖を構え、スバルが拳を引き絞る。

「デイバインバスターアーツ!!」

二人の掛け声と共に放たれた魔力の奔流は、目前に広がる火の海を消し飛ばし、そのまま建物の壁も綺麗に吹き飛ばす。

そして、その空間にあつたものすべてが消し飛ばされると、そこには何物にも遮られない蒼い空が広がっていた。

「これは」

その広い空を見て、スバルは言葉をなくしていた。

「さ、もう行かないと」

「なのはさん……?」

空に見とれていたスバルになのははそう語り掛ける。

そして、そんな彼女の姿を見たスバルは、息を飲んだ。

「なのはさん、身体が……」

「うん、もう……この私の役割は終わったからね」

なのはは微笑みを浮かべながらそう告げる。

彼女の身体は、足元から桃色の光となって徐々に消えかけていた。

「もうスバルは、一人でやっていける。自分の力を信じて、あの子を助けてあげるんだよ?」

「はい、絶対、ノーヴェを助けます」

「じゃあ、頑張つてね、スバル」

そう言つて、彼女の姿は掻き消えた。

スバルは、なのはの姿が消える最後まで彼女のことを見つめていた。

「……さてと」

なのはの姿が完全に消えた後、スバルは一度大きく息を吸い、両手で頬を叩く。

「行くか……っ」

彼はそう呟くと、彼の目の前に蒼色の球体が現れる。

掌に納まるほどの小さな玉だが、それが彼にはひどく懐かしく感じることができた。

「——っ」

その玉に触れると、彼の意識はその場から消えていく。

意識が浮上していくのを感じるスバル。

その一瞬とも、永遠ともとれる不思議な感覚の中で、彼は今まで出来事をまるで映像を見るように振り返っていた。

母との別れ、なのはとの出会い、訓練校でティアナと学びあった時間、そして六課での記憶。

そのすべてが彼の中に入り、そして彼の中で消えていった。

そして、彼の中で最新の記憶であろう、ノーヴェエへの説得の記憶。それが頭に入ってくると同時に、彼の意識は現実に戻っていった。

「——フルドライブ、ギアエクセリオン」

『Drive ignition』

スバルは目覚めると同時に、自分の力を全開に開く。

マツハキヤリバーの装甲がパージされ、魔力の翼が展開する。

「——ッ!!」

瞬間的にアップした魔力を開放し、一気に加速する。

加速した勢いをそのままに、ノーヴェエとジエンドの間に割り込む。

そして、ノーヴェエに向けて放たれた左貫手を手首のナツクルスピナーを高速回転させて受け流し、そのまま左肘をジエンドの身体に撃ちこみ、右手でその顎を上方に打ち上げる。

「燃やせ、マツハキヤリバーッ!!」

『フレアガントレット出力上昇、行けます』

マツハキヤリバーの声と同時に、スバルの左腕を覆っているバリアジャケットの袖とグローブが炎に包まれる。

そして、それが焼け落ちる前に、スバルは上体が上がり、隙だらけのその身体に左手を叩き付ける。

「ぶっ飛べッ!!」

掌に輝くレンズによって、炎が収束され球体となる。

収束された炎球を叩き付けられたジエンドは、その身を焼きながらいくつもの瓦礫を突き破り吹き飛ばされる。

その姿を見つめながらスバルは蒸気を上げる左腕を振るい、焼け残った袖を振り払う。

「これ以上誰も傷つけさせない」

スバルの背後にいるノーヴェエには彼の目は見えない。

けれども、その背中は彼女が待ち望んでいた背^も中よりも、一回りも大きく見えた。

「悪いが、引っ込んでもらおうぞっ!」

『ディバインバスターリボルバーシフト』

リボルバーナツクルの周囲に六つの魔力スフィアが展開され、連続で砲撃が放たれる。

砲撃はその全てがジエンドの突っ込んだ瓦礫の上部を撃ち抜き、瓦礫がその下で吹き飛ばされた衝撃から回復使用としていたジエンドの身体を埋め尽くす。

「よし」

「すば……る……っ」

ナツクルから空になったカートリッジをシリンダーごと交換したスバルは、後ろを振り返る。

「悪い、いきなりこんなに怪我させちゃった……」

「いや……それよりもお前……眼の色が」

「え?」

ノーヴェエの言うことがわからずに首を傾げるスバルに、マツハキヤリバーが助けの声を上げる。

『相棒の瞳の色が先ほどから変化しています。具体的に言うと、左目だけが金色に輝いています』

「ああ、なるほど。それについては大丈夫だ。心配しなくてもいいさ」
スバルはそれだけ応えようと、背後のジエンドの様子を伺いながらノーヴェに手を差し伸べる。

「立てるか？」

「いや……、右足を完全にやられた……。ウエンデイも今は自閉モードに入ってる」

「そうか……。あいつがまた動けるようになる前に……」

逃がしたい、と続けようとしたとき背後でジエンドを生き埋めにしてきた瓦礫が吹き飛んだ。

上半身が自由になったジエンドはその顔をスバルに向ける。

「タイプゼロセカンドの脅威度を再設定。脅威度極めて大。最優先で排除」

ジエンドの視線がスバルを捉え、残った下半身を拘束している瓦礫を砕きはじめた。

そんな相手の様子にスバルはため息を吐きながらナツクルを構える。

「二人をどうにかして逃がしたかったんだが……」

『相棒、心配ありません』

マツハキャリバーの声に「は？」と疑問符を浮かべるスバル。

そんな彼に向けてマツハキャリバーは『来ます』とだけ答える。

その直後、ビルの合間を縫って彼のもう一人の相棒——ティアナが駆け抜けてきた。

「スバルッ」

「ティアナ、悪い！」

彼の傍に駆け寄ってきたティアナに向けてスバルは両手を合わせて彼女に頭を下げる。

「ノーヴェたちを連れてここから離れてくれ」

「……あんたはどうするのよ」

地面に倒れたままのノーヴェとウエンデイをチラリと見た後、ティ

アナはスバルにそう尋ねる。

「俺はあいつを止める。あれがいたら戦闘機人は安心して生きていけない」

「でも一人じゃ……あたしも一緒にっ」

『彼の言う通りにするべきです、マスター』

ティアナの言うことを遮るように声を上げたのは彼女の相棒であるクロスミラージュだった。

『目標の周囲に魔力などのエネルギーを遮断、或いは分断する類のフィールドが発生しています。あなたの攻撃のほぼすべてが無力化される可能性が高いです』

「はつきり言ってくれるわね……」

クロスミラージュの言うことが正しいということを、彼女自身の経験から察したティアナは、一度大きなため息を吐くと、スバルに向けて拳を突きだす。

「わかった、あの二人はあたしが安全なところまで連れて行く。だからスバル、あんたは……」

「あれを止めてくる」

ティアナの拳に、スバルはそう答えながら自分の拳を当てる。

「すばる……」

そんな彼に向けて、まだ身体の痛みが抜けていないために息が荒いノーヴェエが声をかける。

「ちゃんと、帰ってこいよ……。まだあたしはちゃんと返事してないんだから……」

「ああ、約束する。ちゃんと帰って、お前の答えを聞かせてくれ」

二人の会話を聞き届けたティアナは、クロスミラージュを待機状態に戻す。

そして、ウエンディを肩に担ぎ、反対側の腕でノーヴェエを支える。

「さて、じゃあ行くわよ」

「ああ、任せた」

『Wingroad』

スターキヤリバーから橙色の魔力道が生成され、彼女はノーヴェエと

ウエンデイとともにその場を離脱する。

離脱する中、朦朧とした意識の中、ノーヴェエは彼の無事の生還を願うのだった。

ノーヴェエとウエンデイがティアナに連れられて離れたのを見送ったスバルは、肩を回し、左腕の感覚を確かめるように、手の開閉を繰り返した。

『相棒、身体の方は大丈夫なのですか？』

「咄嗟にISを発動させて、逆位相の振動で減衰はした。戦闘に支障はないさ」

『こちらのスキャン結果では肋骨に輝が入っていますが？』

「……大丈夫だ」

愛機からの質問に目を逸らしながら答えたスバルは、返すように問いを投げかける。

「マツハキヤリバー、フレアガンレットのバッテリー残量は？」

『先ほどの一撃で半分以上持つていかれました。残りは40%といったところです。内蔵バッテリーは本来緊急時用ですから』

スバルは己の身体に取りつけられている鋼の左腕を見つめる。

そんな彼に向けてマツハキヤリバーが声をかけ続ける。

『やはり、例の装備を持って来ておくべきだったのでは？』

「いや、あれはノーヴェエの説得には必要ないと判断したから持つてこなかったんだ。そして、それは正解だった、だろ？」

『ですが』

スバルが前方のジエンドに目を向ける。

そこにはすでに瓦礫のすべてを破壊しつくし、拘束から解放されたジエンドが駆け、彼に向けて牙を剥く。

「それに……っ」

ジエンドが繰り出した右腕を半身になって避ける。

二撃目が繰り出される前に、スバルの左腕が炎を纏う。

「こいつがッ、そんなッ、時間をッ!!」

一発、二発、三発と焰撃を叩きこむ。

三撃目にジエンドはその連撃の勢いを利用し、後ろへ飛んで追撃を逃れる。

「くれるとも思えないからな……ッう!？」

逃れたジエンドを追おうとしたスバルだったが、右肘に鋭い痛みが走り、追撃に出ることができなかった。

ジエンドの振動粉碎、それを振動破碎を用いることでその機械を内部から破壊する特性を打ち消していたスバルだったが、あくまでも相手の振動に対して後出しの対応のためコンマ数秒の遅れが生じ、その積み重ねが彼の身体に異常が発生していた。

そして、脆弱な関節、特にジエンドの攻撃を受け流すために用いる右肘に負荷が生じていた。

「ジリ貧だな……っ」

ジエンドが身体に付着した炎を腕を掃い消し去る。

彼の焰は、その身体の表面の人工皮膚を焼くだけに留まっていた。

そんな相手を見てスバルは顔を顰める。

『相棒……ッ』

「時間さえ作れば……ッ!!」

ジエンドが再び駆ける。

スバルは関節の痛みを堪えながら構える。

『ふむ、時間さえ作れば、例の装備とやらが使えるのかい？なら、その時間は……』

「こちらで何とかしよう」

突如、二人の声がスバルの耳に聞こえてきた。

その直後、彼とジエンドの間に一本のナイフが突き刺さり、爆発が起きる。

「な——っ」

『4時方向ッ』

マッハキャリバーが反応を捉え、その方向にスバルが視線を向けると、崩壊したビルの屋根に一人の少女が、銀色の長髪を靡かせていた。

ノーヴェルット 第十六話

一閃、ビルの屋上に佇む少女——チンクの腕から一振りで放たれた三本のナイフが、爆発によって起こった煙から飛び出したジエンドに迫った。

「戦闘機人N.O. 5を確認、脅威度……」

「判断が遅いな」

ジエンドが迫るナイフを打ち払うよりも早く、チンクはそう呟きナイフを起爆。

轟ッ——、と三つの爆発がジエンドの身体を吹き飛ばし、建物に押し戻す。

「シッ——！」

チンクはビルから飛び降り、空中から続けざまに指で持った六本のナイフを投擲する。

「フィールド全開……」

接近するナイフを防ごうと左腕を掲げ、フィールドの出力を上げるジエンドだったが、迫りくるナイフはすべてそのフィールドを物ともせずに突破する。

パチン——と、指を鳴らす音と共にジエンドの身体を爆発が呑み込んだ。

ビルから降り立ったチンクが振り返り、目の前の光景に呆然としているスバルに手を差し出しながら声をかける。

「さて、こうしてまともに言葉を交わすのは初めてだな、タイプゼロセカンド……いや、スバル・ナカジマ。」

知っているだろうが、戦闘機人、N.O. 5のチンクだ」

「あ、ああ。でもなんで……」

『それについては、私のほうから話そう』

差し出された手を掴み、引っ張り上げられるように立ったスバルに對して、チンク以外の男の声が答える。

その声と同時に呼び出された通信ウィンドウに映った顔を見たスバルは驚きの声を上げた。

「は……？」

『さてチンク、私が彼と話している間アレを近づけないでくれるかい？』

チンクは男の声に頷くと同時にナイフを呼び出し、彼らのもとに駆け出していたジエンドに向けて放つ。

放たれたナイフがジエンドに迫ると同時に、ジエンドは後ろへ飛び退く。

「甘いな……ッ」

「――！」

だが、ジエンドが避けたナイフは爆発することなく瓦礫に突き刺さり、弾ける。

爆発によつて瓦礫は吹き飛ばされ、ジエンドの眼前を煙が覆い尽くす。

そして、その煙の中からさらにチンクが放ったナイフがジエンドに迫った。

「今度はどうだ？」

迫るナイフが爆発し、ジエンドの身体をさらにスバルたちから離す。

離れるジエンドを追うようにチンクもまた煙の中へ駆け出した。

『さて、チンクが時間をかけている間に、話を進めよう。』

自己紹介はいらないだろう？』

「当たり前だ、ジェイル・スカリエツティ」

画面の中の男——ジェイル・スカリエツティは、金色の眼を細めて笑みを浮かべていた。

「それで、あんたが何で俺を助けた？」

『ジエンドを破壊してほしい』

「あんたがあれを破壊してほしい理由はなんだ？」

『犯罪者の私、科学者の私としても理由はあるが……こう答えるのが正しいだろうね』

スバルの問いにスカリエツティは浮かべていた笑みを潜め、答える。

『大切な愛娘を殺そうとした相手を許すほど、私は出来た人間ではないということだよ』

彼の答えを聞いた瞬間、スバルは――

「オラアッ!!」

「そこ……ッ」

チンクに向けて拳を振り上げていたジエンドに殴りかかっていた。横合いからの攻撃に対してジエンドは腕をクロスすることで直撃を防ぐが、直後にチンクが放ったナイフが至近距離で爆発、二人から吹き飛ばされる。

「――今の言葉、嘘だったらあとでぶっ飛ばすからな」

『感謝するよ、スバル・ナカジマ君』

スバルの言葉にスカリエッティは笑みを浮かべる。

その笑みは、今までの不快感を生むものではなく、一人の父親としての笑みであった。

「フェイトさん、聞いていますよね？」

『うん、ちゃんと全部聞いてたよ。』

高町隊長が指示を出せないため、私から指示を出します』

スバルの問いかけに答えるようにスカリエッティの背後にフェイトが現れる。

『ジエンドの破壊を執務官権限で許可します。』

これは重要参考人である戦闘機人たちの生命を守るためであると記録しました。

スバル、気を付けてね』

『了解、スターズ3、ジエンドの破壊を実行します!』

「というわけだ、協力してもらおうぞ」

「だが有効打を決めきれない、何か手はないのか？」

チンクの言葉にスバルは顔を顰める。

「あるにはあるが時間が……」

『かかると言うと思って、君のための贈り物を手配しておいたよ』

彼の言葉を画面の向こう側のスカリエッティが遮った。

「はッ!？」

スカリエツテイの言葉に驚きの声を上げたスバルだったが、すぐ上空から響いてきた音と通信機越しから聞こえてくる声が彼の意識をそちらへ引きつけた。

『ようスバル!』

お届けものだけ!!』

「まったく、やってくれるよ」

あまりの手際の良さにスバルは盛大にため息を吐く。

そんな彼を横目にチンクは新しくナイフを生成しながら彼に尋ねる。

「何分持たせればいい?」

「2分……いや、1分で戻る」

「了解した、行けっ!」

チンクの声とともにスバルはすぐさま上空に向けて道を切り開く。そんな彼を標的としたジエンドが動き出す前に、その眼前にナイフが突き刺さる。

「さて、もうしばらく付き合ってもらおうぞ」

そう言いながらチンクは2本目3本目とナイフを投擲する。

次々に放たれる攻撃を避けながら、ジエンドはまず攻撃してくるチンクを標的として捉えた。

「今なら、あの時のスバルの気持ちがよく分かるよ……」

自分の周囲にナイフを次々に生み出しながら一人口にする。

「ノーヴェとウエンディを傷つけた貴様だけはこの手で叩き潰したいという感情が吹きあがつてくるのがわかる……」

周囲のナイフが次々に射出され、ジエンドの進行方向を無理やりに変えていく。

眼帯に隠されていない左目の金色が一層明るく光る。

「まあ、私だけでは貴様を倒すことはできんだろうな」

進行方向を変えながら近づいてくるジエンドを認めながら彼女の両手にはナイフと呼ぶには巨大な刃渡りを持つ剣が生み出される。

「その腕の一つぐらいは貰うぞッ!!」

チンクは自分に向けて伸ばされたジエンドの腕——特に攻撃に使用していた右腕——に向けて右手に持つ剣を突きさす。だが、その突き刺した剣先から振動によって砕け始める。

「——ッ!!」

突き刺さった剣が完全に砕け散る前にチンクはそれを手放し、続きざまに左手のもう一本を同じ個所に突きさし即座に爆破させる。

その二本の剣による爆発で、彼女の身体は簡単に吹き飛ばされる。

「どうだ……ッ」

体勢を整え、着地する彼女は爆炎に包まれたジエンドを見つめる。

「対象の危険度を一段階上昇」

「チィ——ッ!!」

その声とともに飛び出してくるジエンドの状態を見て、チンクは舌打ちをしながら即座に後ろに跳び下がる。

ジエンドの右腕はその人工皮膚を焼き、内部フレームを露出させることはできたが、その腕をもぎ取ることではできていなかった。

「破壊する」

「まだまだ……ッ」

跳び下がったチンクに拳を叩き付けるジエンドに対して、彼女は自分の足もとにナイフを撃ちこみ爆破。

爆風とジエンドの拳をその身に纏う外套でもろに受けるが、チンクの小柄な身体はさらにジエンドから距離を離すことに成功する。

「——痛ッ、ハザードシエルコート、持ってくれたか」

吹き飛ばされた彼女の身体は地面を転がり、瓦礫にその背中を叩き付けられることでようやく止まった。

チンクは身体を起こすとともに右腕を抑えながら、自分の身代りに役割を果たした外套の性能に息を吐いた。

そんな彼女に向けてジエンドは止めを刺さんと駆ける。

迫るジエンドを見ながらもチンクは動くことはなかった。

「悪いな、もう一分経ったぞ」

チンクの言葉とともに彼女に襲い掛かろうとする凶器こぶしを上空から轟音と共に凄まじい勢いで落下してきた鉄塊——否、盾が

受け止めた。

「時間通りだな」

チンクは空から落下してきた彼の姿を見て笑みを浮かべる。

「だりやああああッ!!」

盾以上の速度で落下してきた弾丸は寸分の狂いなく、ジエンドを捉えていた。

落下のスピードの直撃を喰らうのは拙いと判断したジエンドは初めて自分から後ろへ飛び下がって距離を取る。

直後、凄まじい轟音と土煙を生みながらスバルは地に降り立った。

「あとは任せたぞ」

「ああ、任せられたッ」

「ヴァイスさん、コンテナを投下してください！

あとはこちらでやります!!」

『了解だ、ハッチを開ける!!』

ジエンドをチンクに任せたスバルは滞空しているヘリに近づきながらヴァイスに指示を出す。

ヴァイスの声とともにヘリの後部ハッチが開くのを確認したスバルは相棒マツハキヤリバーに指示を出す。

「中身の接続は頼むぞ、相棒」

『任せてください、相棒』

スバルは相棒からの頼もしい言葉に頷き、ヴァイスに通信を繋ぐ。

「ヴァイスさん！」

『コンテナ、投下!!』

しくじるなよ、スバル!!』

ヘリから成人男性が二人以上は入りそうなコンテナが投下される。

自分に向けて落下してくるコンテナから目を逸らさずにスバルは声を上げる。

「マツハキヤリバー!!」

『パッケージとの接続完了。』

コンテナパージ!』

マツハキヤリバーの声と同時にコンテナの外装が弾け飛び、その中身がその姿を現す。

『フォートレスシールド、エクステンドブーストアーマーの制御に成功!』

相棒、行きますよ!!』

「いつでも来い!」

コンテナの中身……四枚の盾とその盾よりも小振りな人の関節を覆えるほどの装甲^{パケット}。

それらがすべてスバルの周囲に集まる。

『コネクトサーチャー起動、ロック完了』

「コネクトッ!」

『コネクト開始!』

二人の声と同時に、装甲から彼の肩部、胸部、背部、腰部、脚部と全身に向けて赤色のレーザーが照射される。

『エクステンドブーストアーマー、コネクト確認。』

ナノマシン、注入開始!!』

「——ッ!」

レーザーを頼りにスバルの身体に装着されたアーマーから彼の身体に向けてナノマシンが注入される。

わずかな痛み感じながらスバルは自分の中に入ってくるナノマシンを受け入れる。

「稼働率は?!」

『ナノマシン稼働率、現在65%』

戦闘に支障はありません!』

胸部の装甲の中心——制御ユニットが収まるコアが輝きを放つ。

マツハキヤリバーからの返答にスバルは、よしと答え、すぐさまその視線を下に向ける。

地上で起きた一際大きな爆発を視界に収める。

「へりはすぐにここから離れてください！」

『おう、あとは任せませ、スバル！』

ヴァイスを乗せたへりが離脱すると同時にスバルは身体を傾ける。

「マツハキヤリバー、盾の準備は」

『いつでもどうぞ、相棒』

「ぶっ飛ばせ、マツハキヤリバー!!」

『イグニツションブースト』

マツハキヤリバーの声とともに四枚の盾が地上に向けて射出される。

盾が射出されると同時に、スバルの腰背部の装甲が展開し、そこから覗くスラストスターからナノマシンが勢いよく噴き出す。

そして、彼もまた地上に向けて射出されるのだった。

地に降り立ったスバルは眼前にいる敵を視線に捉えながら背後にいるチンクに声をかける。

「数ブロック下がったところに、皆が集まってる。

アンタも、すぐに下がってくれ」

「わかっている」

チンクは彼の言葉に従い、後方へ退くためにふらつきながらも立ち上がる。

「勝てよ、スバル。」

お前たちの話を聞かせてくれ」

「あれをぶっ潰して、時間ができたらいくらでも話してやるさ、義姉さん」

チンクはスバルの返答に笑みを浮かべ、瓦礫を駆け上がりすぐさまその姿を消していった。

「さて、マツハキヤリバー」

『わかっています、盾の操作は任せてください』

「おう、行くぜ……ッ」

身体中を駆け巡るナノマシンからかつてないほどのエネルギーを感じながらスバルは拳を握りしめ、構える。

そんな彼と相対するジエンドもまた、その拳の振動をさらに激しく、強くする。

「——ッ!!」

風が吹き、瓦礫が崩れ落ちると同時に駆け出す。

ジエンドの拳が風を切りながらスバルに迫る。

『対振動^Aフィールド^F装甲^A展開ッ!!』

だが、その拳が彼に触れることはなかった。

スバルの背後から飛び出した四枚の盾の内の二枚がその拳を受け止める。

「捕まえたッ!!」

スバルの咆哮と共に、赤熱化した左腕でジエンドのボディと顔面に一撃二撃と叩き付ける。

『ナノマシンの稼働率70%突破、目標の人工皮膚およびフレームの破損を確認!』

「もう一発ッ!!」

スバルの身体を駆け巡るナノマシンによって左腕の動力が確保された現在のパワーで殴られたジエンドの身体と顔の右半分は皮膚が燃え落ち、機械のフレームが顔を見せていた。

さらに追撃をかけるスバルだったが、その一撃はジエンドの右腕に掴まれ防がれてしまう。

「ヤバイッ!!」

「——ッ!?!」

左腕が掴まれたことで振動破碎を使用されることに狼狽えるスバルだったが、彼の左腕が破壊されることはなかった。

振動破碎を行おうとしたジエンドだったが、その右腕は逆に肘から異常な音を響かせながら火花が散っていた。

「マツハキヤリバーッ!!」

『フレアガントレット出力上昇、マックスフレアバースト発動!!』

マツハキヤリバーの掛け声と共にスバルの左腕が一層強く輝くと

同時に肘と前腕の噴射口から炎が噴き出す。

噴き出した炎が左腕に巻き付くと同時に、ジエンドの右腕も炎で包み込む。

「——ッ!!」

「逃がさねえよ、相棒!!」

『フォートレスカノン発射!』

ジエンドの右腕を炎が焼く。

その炎から逃れようとするジエンドだったが、マツハキヤリバーが操作する二基のフォートレスシールドがその背後からジエンドの背中に砲撃を加える。

背中からの砲撃によって体勢を崩すジエンドはその右腕の人工皮膚をすべて燃やし尽くされ、フレームも所々炭化していた。

「まずは右腕貫つたあッ!!」

スバルは拘束された左腕を振り払い、逆にジエンドの右腕——特に損傷が激しい肘を右腕で掴み取る。

掴んだ右腕の振動を最大にすることで、ジエンドの右腕は粉々に砕け散った。

「損傷甚大——撤退する」

右腕を砕かれた瞬間にジエンドはスバルの周囲にエネルギー弾を撃ちこみ、一瞬の好きを作ると同時に上空に飛び去っていった。

「逃がすかよ……ッ!」

飛ぶぞ、マツハキヤリバー!!」

『了解です、相棒!!』

スバルはその言葉を聞くと同時に両手の拳を握りしめる。

「最短で……ッ」

『リミッター。解除!』

胸部のコアが強く輝きを放ち、装甲が上下左右に展開する。

「一直線に……ッ」

『スリット解放、スラスター展開!』

胸部と同様にスバルの肩部、腰部、脚部の装甲がスライド、背部のスラスターがXの字を描く。

「奴よりも速くッ!!」

『ナノマシン稼働率120%突破、出力マキシマム!』

展開されたスリットから光が溢れ出し、背部スラスタから勢いよくナノマシンが噴き出す。

彼の身体中を流れるエネルギーが、彼の髪を深い蒼色に輝かせる。

「フォーミュラバースト……ッ」

経験したことのないエネルギーを纏ったスバルは歯を喰いしぼりながら叫ぶ。

切り札の名を

「アクセラレイタアアーツ!!」

星は地より羽ばたいた。

ノーヴェエルト 第十七話

「貴方の妹たちは全員無事よ。」

特に怪我の酷い二人は、スバルの専属研究機関に送られることになったわ」

「そうか、感謝する」

スバルとジエンドの戦闘しているエリアから離れた場所で、チンクはシャマルからの報告を受けて安堵の息を吐いていた。

そんな彼女を遠くから眺めていたティアナの耳に聞きなれた少年の声が届く

「ティアナさん！」

「エリオ、キャロ！」

ティアナのすぐ傍にフリードに乗ったエリオとキャロが降りてくる。

エリオの後ろに乗っていたキャロの腕の中ではルーテシアが抱かれていた。

「そっちもうまくいったようね」

「はい、今は眠ってますけど、ルーちゃんも、ガリユーも無事です！」

「スバルさんは？」

ルーテシアをゆつくりと地面に寝かせるキャロの隣で、エリオはそう尋ねるが、そんな彼に対してティアナは首を横に降る。

「まだよ、でもあいつなら……ッ！」

「ティアナさん？」

ティアナは、二人の背後の空を見て声を失った。

そんな彼女の視線を追うようにエリオとキャロが自分たちの背後を見ると、青空を切り裂くように、星が駆けるのを見つけた。

「あれって、スバルさん!？」

「二人とも、行くわよ」

ティアナの指示にエリオとキャロは頷きすぐにフリードに乗る。

「ギンガさん、シャマル先生！」

「ここはお願いします!!」

「ええ、ここは任せて、スバルのことお願い」

「守るだけなら私とザフィーラだけでも大丈夫。

だから、安心してちょうだい」

ギンガとシヤマルは彼女の方に向けて手を上げながら答えた。

それを確認したティアナはすぐにフリードの上に乗り返む。

「少し、重いかもしれないけど」

「大丈夫、フリード行けるよね？」

キャロの言葉に応えるようにフリードは一度大きく吠え、その翼を羽ばたかせる。

三人を乗せているにも関わらず、その巨体はなんの問題もなくその身を大空へと飛んでいく。

「まったく、無茶ばかりするんだから！」

ティアナは視線の先を行く蒼い流星を見ながらそう呟いた。

「ハハハッ！」

スゲエ、このスピード、病みつきなりそうだ!!」

『フレアガントレットを中心に、各部の温度が上昇しています！

活動限界まであと180秒!!』

今までとは違う、文字通り空を飛ぶ感覚にスバルは声を上げるが、そんな彼に対してマツハキャリバーは警告の声を発する。

現に、彼の左腕から炎が耐えず噴き出し、それが彼の身体をも熱し続けていた。

「見えたッ!!」

『目標からエネルギー弾の射出を確認!!』

「一直線に突っ切る！」

遙か前方を飛んでいたジエンドだったが、スバルの驚異的なスピードからは逃れられないと察したのか、残った左腕から多数のエネルギー弾が発射していた。

エネルギー弾といっても、それは一発でも並みの魔導師を撃墜するほどの威力を秘めていた。

それがスバルの眼前に迫っていた。

『フォートレス、1番、4番損傷が拡大しています！』

「耐えろ！」

これを抜ければ!!」

スバルの前方に四枚の重フォートレスシールド盾が構え、弾幕を防ぐ。

だが、弾幕は確実にスバルの守りを削り取っていく。

シールドをすり抜けたエネルギー弾はスバルの肩や胸部の装甲を撃ち抜く。

その衝撃や痛みを歯を喰いしばり耐える。

そして――

「抜けたッ!!」

『相棒ッ!!』

弾幕を抜けたスバルの前に現れたのは左手に収束したエネルギーを放とうとするジエンドの姿だった。

慣れない空中飛行、そしてここまでの損耗からスバルは自分に打つことのできる手段をすぐさま弾きだす。

「しやらくせえ!!」

『フォートレス射出!!』

マツハキヤリバーの声と共に、フォートレス四枚すべてが砲撃に向けて射出される。

放たれた砲撃によってフォートレスシールド四枚すべてを破壊する。

爆炎を抜けたスバル。

そこに彼の獲物ジエンドは居た。

撤退を諦めたわけでも、負けを認めたわけでもなく、その凶器こぶしでスバルを破壊するために。

「肉ならくれてやる!!」

『肩部アーマー射出!!』

スバルの右肩から分離したアーマーはジエンドの拳に覆いかぶさる。

ジエンドの振動破碎によって、そのアーマーが破壊されるまでのわ

ずかな間に、アーマーに残ったナノマシンがスリットから余剰のエネルギーを吹きだした。

「——ッ!!」

「(っ)おッ!!」

ジエンドの左腕が逸らされたことよって生じる空間にスバルは躊躇いなく飛び込む。

スバルは燃え盛る左腕を引き絞る。

「貫けエッ!!」

アクセラレイターによるスピードを乗せた一撃。

それはジエンドの心臓——コアのある胸部を撃ち貫いた。

「オオオオ——ッ!!」

ジエンドの胸を貫くまま、スバルはその身体を地面に向けて叩き付ける。

スピードの乗った一撃と、上空からの落下による衝撃。

地上にジエンドが叩き付けられるとともに、その周囲を巻き込むようにクレーターが生じる。

「これでえッ!!」

『最後です!!』

叩き付けたジエンドの胸を貫いたままの左腕一本で持ち上げる。

その掌には、ジエンドの——戦闘機人の心臓とも言えるコアが握られていた。

そして、スバルはそのコアを——

砕いた。

「——」

コアを破壊されたことよって、ジエンドの瞳から光が消える。

そして、それを確認したスバルはすぐに、その身体を空中に投げ上げた。

「その身体は、悪用されるとやばいからな。」

悪いけど、塵一つ残すわけにはいかないんだよ」

『カートリッジロード』

リボルバーナックルからカートリッジを通して、魔力が溢れる。

右腕に魔力が収束する。

「もう眠れ、ブリキ野郎」

『Divine Buster』

非殺傷設定の切られた砲撃は、その身体を文字通り消し飛ばした。

「ハア……ハア……っ」

『体内温度急上昇、フレアモジュール炎熱生成機関、パワー強制排除！』

ジエンドを破壊した直後、スバルの呼吸はかなり乱れていた。

マツハキヤリバーはすぐさま左腕の発熱モジュールを排除する。

『続けてエクステンドブーストアーマーパワー強制排除、マジ強制放熱開始!!』

スバルの全身に装着された装甲が続けざまに弾かれる。

そして、マツハキヤリバーはスバルの発汗機能を操作し熱の冷却を始め、スバルの全身から蒸気が上り、体温を冷やすことに成功する。

異常発熱を抑えたことでスバルはホッと一息吐き、その場に座り込もうとしたが、体力を損なった状態の彼の足はその負荷に耐えられなかった。

「……やべ」

『相棒ッ』

右脚の力が一気に抜け、マツハキヤリバーのローラーがブレーキをかけるが彼の身体は後ろ向きに、倒れ込んだ。

受け身もとれない状態のスバルは目を閉じ、痛みに耐えるべく歯を喰いしばった。

だが、彼の頭が地面に突っ込む前に、彼の背中を支える者が現れた。

「スバルさん、大丈夫ですか!?!」

「……エリオ?」

背中側から聞こえてくる声にスバルは疲れ切った意識の中応える。

エリオは彼の身体を支えてゆつくりと座らせる。

すると、そのすぐ後にフリードに乗ったティアナとキャロも彼らの

傍に駆け寄ってきた。

「スバルさん！」

「酷いやられようね」

「おー、お前ら。」

全員ここにいてるってことは

汗で張り付いた前髪を掻き上げながらスバルは笑みを浮かべる。

「全員、やることはやったわよ」

「はい、ルーちゃんも止めることもできました！」

ティアナとキャロが笑顔で答える。

「じゃあ、後やることは……」

「さて、これで私の憂いも断てたことだ。

あとは、任せてもいいかい？」

スバルがジエンドの身体を吹き飛ばしたのを確認したスカリエツティはすぐ傍に立つフェイトに向かってそう尋ねる。

「わかりました、ジエイル・スカリエツティ。」

大規模テロリズムの容疑で逮捕します」

「……ああ、その前に一つ忘れていた」

だが、フェイトが彼に手錠バインドをかける前に、パネルの赤い一際大きなボタンを押し込んだ。

「……スカリエツティ、今何をした？」

「何、この周辺のカジエットの自壊信号を発しただけだよ。

なに、少し派手な花火が上がるだけさ」

「……あまり疑われるようなことはしないように」

スカリエツティの悪戯が成功したような笑みを見て、フェイトは大きく息を吐いた。

「……ハァー」

差し出されたペットボトルの中の水をすべて飲み干したスバルは首にかけてタオルで汗を拭いながら空になったボトルを目の前で彼の診察をしていたシャマルに手渡す。

「私は専門じゃないけど、博士からもらったデータから見ても問題はないと思うわ」

「それじゃ、最後の仕事に行ってきますよ」

シャマルからのお墨付きをもらったスバルは、タオルを取ると同時に立ち上がる。

彼の視線の先には、右腕を包帯でぐるぐる巻きにされ、困り果てた表情を浮かべるギンガがいた。

「止めても行くんでしよう？」

「もちろん。」

ゆりかごあそこで、なのはさん達が待つてるから」

スバルの返答にギンガは大きく息を吐く。

そして、自分の左腕に装着されていたリボルバーナックルを収納し、それを彼に差し出した。

「行ってきなさい。」

でも、ちゃんと帰ってくるのよ」

「わかってる。」

ちゃんと帰ってくるよ、みんなで」

水晶の状態に収納されたりボルバーナックルを受け取ったスバルはそのまま、ノーヴェたちの乗り込んでいるへりに向かった歩き出す。

そんな彼の背中に向けてギンガが一言

「あの娘むすめとのことも聞かせてもらおうからね。

お父さんと一緒に」

突如投げかけられた姉の言葉にスバルは背中越しに手を振るだけだった。

最も、その顔には若干恥ずかしさから、少し紅くなっていたが。

「調子はどうか？」

「一番怪我の重いウエンデイも、今は落ち着いている。

お前には借りが出来てしまったな」

ギンガと別れたスバルは、ヘリの後部ハッチの入口で座り込んでいたチンクに話しかける。

「気にするな、こっちも助けられたんだ。

お互い、貸し借りは無しにしておこうぜ」

「そうだな……。」

ノーヴェは中にいる、私は少し席を外しておくとするよ」

スバルの差し出した手を頼りに、チンクは立ち上がり、そう言っただけその場から立ち去り、ヘリの操縦席の方へ歩いて行った。

「よう、ノーヴェ」

「スバル」

ヘリの中にスバルが乗り込むと、ヘリの椅子を幾つか使って簡易式のベッドにして固定されているウエンデイの向かい側にノーヴェが座っていた。

そんな彼女に向けてスバルが手を上げながら話しかけると、ノーヴェもまた彼に向けて笑みを浮かべながら応えた。

「あー、なんだ。

色々話したいこともあったはずなんだが……」

「あたしもだ。

せつかく話せるってのに、いざってときに何を話そうかわからなく

なっちまった」

あれだけ互いのことを思っただけ話しかけられなかった二人。

そして、互いの立場を考える必要が無くなった今、思う存分話せばいいのに話すことが多すぎるために話せないという状態に、二人は傷に響かない程度に声を上げて笑っていた。

特に話さなくても笑いあえる、それが何よりも二人にとっては嬉しかった。

「ゆりかごに行くんだよね？」

「ああ。」

まだあそこに仕事が残ってる。

だから……」

そう言っただけ、スバルはノーヴェエの前に屈みこみ、彼女の身体を怪我が重くならない程度に抱きしめる。

そして、彼女の顔の横で口にした。

「全部終わったなら、思いっきり話そう。」

今まで話せなかったことや、これからのことも」

「ああ、そうだな……。」

だから、ちゃんと帰ってこいよ？」

ノーヴェエもまた、スバルの背中に、左腕を回して彼の身体の暖かさを感じながらそう答えた。

「悲劇のヒロインみたいに待ち続けるつもりはないからな」

「心配するなよ。」

むしろ、救助活動の方が本業みたいなもんだからな」

互いに言葉を交わした後、二人はどちらからともなく身体を離す。

「約束だ、絶対に破るなよ。」

破ったらあたし怒るからな」

「ああ、約束だ」

ノーヴェエが突き出した拳に、スバルも軽く当て、そして彼はへりを後にした。

「話は終わった？」

「あとで話すって話してきた」

ゆりかごへ向かうヘリの外で、スバルを待っていたティアナは彼の答えに「なにそれ」と苦笑しながらそう口にする。

「さて、それじゃスバルも来たから、最後の確認」

「ゆりかごは俺とティアナが向かう。」

チンクの話だと中はAMFで碌に術式が起動しないらしいからな

「そして僕とキャロ、フリードでフェイトさんの迎えですね」

「向こうは危険はないそうだけど、気を付けなさい」

「はい！」

四人は、確認を終えると、誰からともなく手を差し出した。

一番下にスバル、エリオ、キャロ、ティアナと重ねる。

「これが、フォワードチームとして、今回の騒動の最後の仕事よ」

「全員、もう傷だらけだけど、無事に戻ってくるぞ」

「フェイトさんや、なのはさん、部隊長たちも」

「全員で、僕たちの家にですね」

「それじゃ、フォワードチーム行くわよ！」

「応っ」

「はい！」

数時間後、後にゆりかご事件、又はJS事件と呼ばれることになる管理局始まって最大の騒動は終息した。

そこに、奇跡の部隊と呼ばれる試験部隊があったことは誰もが知るようになった。

ノーヴェルット エピローグ

JS事件、管理局始まって以来の重大事件が終結して早3年。すでに事件の傷も癒えていた。

そんな中、第一管理世界『ミッドチルダ』の衛星軌道上に存在する収容施設の一つのある部屋に足を運んでいた。

「やあ、通信機越しでは何度も話しているがこうして直に会って話すのは久しぶりだね、《スターゲイザー》？」

「想像以上にいい生活してるね、アンリミテッドデザイン」

彼——サカキは係の人物に案内されて入った部屋にいた男性、先のJS事件の首謀者であるジェイル・スカリエツティに向けて呆れた表情を浮かべながらそう答えた。

「なに、これもこの三年の司法取引の結果だよ」

スカリエツティはそう言うのと、コポコポと音を立てるポットからお湯を二つのマグカップに注ぐ。

熱湯を注がれたマグカップからコーヒーの香りが部屋中に広がっていく。

「君は、この三年間で様々なモノを作ってきたからねえ……」。

難病の治療薬、新技術の開発、エトセトラ。

上も、君の扱いには困っていると聞いているよ」

「私はここでの生活に困っていないのだけどね」

そう言いながらスカリエツティはサカキに片方のマグカップを渡す。

「それはそうと、あの二人はどうなっているのかを聞きたいところだね」

「ああ、それなら先日ノーヴェ君から聞かされたよ」

手渡されたコーヒーを口にしながらサカキは彼の質問に答える。

「正式にプロポーズされたと」

「それはそれは」

サカキの答えを聞いたスカリエツティの脳裏に、自分の愛娘であるノーヴェが顔を真っ赤にしながら報告している姿が目には浮かび、嬉し

そうに笑みを浮かべる。

「あの騒動の後、彼女を引き取ってから三年たつてのことだからねえ……。

あの二人の周りでは、いつやるのかといつも話のネタにされていたよ」

「まあ、ちゃんと先に進んだのなら言うことなただね」

そう言った彼の口元には微笑みが浮かんでいた。

「さて、話は変わるが、次の仕事の話をしてもいいかな？」

「大歓迎だよ、次はなんだい？」

そろそろナノメタルを使った技術を発展させていきたいと考えていたんだが……」

「死に瀕している星を救う仕事だよ」

「詳しく聞こうじゃないかッ!!」

「今回の教導のレポートです」

「ああ、確かに受け取った」

管理局、そのとある部隊の部隊長室で彼女——高町なのは——は、手にした書類をデスクに座る男性へと手渡した。

「さて、教導期間を終えてすぐだが、どうだったこの部隊は？
率直な意見を聞かせてくれ」

受け取った書類を振り分けボックスの一番上に置き、男性はなのはと、彼女の横に立つヴィータに尋ねる。

二人は互いに視線を交わし、なのはが答える。
「想定していた以上の練度でした。」

他の特別救助隊の教導にも参加させてもらいましたが、その中でも一番の練度だと思いました」

「それは良かった」

男は彼女の答えに満足し、笑みを浮かべる。

「さて、これで君たちの仕事は終了だ。」

何か君たちからあるかな？」

「お一つだけよろしいでしょうか？」

「何かね？」

「スバル……ナカジマ防災士はどんな様子なのかをお尋ねしたく……」

なのはの問いかけにヴィータは「おい……！」と小声で言いながら彼女に視線を向ける。

そんなヴィータに向けて男は構わないと手を上げる。

「そう言えば、彼は君たちの教え子だったな。」

気になるのも当然か」

「はい……。」

時々連絡を取ったりはしているのですが、特別救助隊こでのことはあまり話を聞いていないため……。

それに、この三日間、彼の姿を見なかったので」

「ああ、彼なら問題ないよ。」

この三日、彼の所属しているシリウス第一分隊は、外回りを行っているのさ」

「外回り……ですか？」

男の答えに首を傾げるヴィータ。

「ああ、我々の仕事を子供たちに……ッ」

教えると、言葉が続けようとした男だったが、突如鳴り響くアラームを聞いた途端にその身に纏う雰囲気切り替わった。

『湾岸部、第三グラントタワーマンションにて火災発生！』

現場より特救への出動要請!!』

鳴り響くアラームとともに聞こえてくる状況説明の声を聞いた男はすぐに耳に取りつけた通信機を使い、管制室へ声を飛ばす。

「現場に一番近い分隊はどこだ!!」

『現在一番近い分隊は……ワタセ分隊長のシリウス第一分隊です!!』

「よし、すぐにワタセに知らせろ！」

それから、待機中の第二分隊も出動させろ!!」

『了解!!』

管制室からの応答を聞いた男はすぐさま立ち上がり、出口に向かう。

「そうだ、彼の仕事を見ていくかね？」

「よろしいのですか？」

男の提案に、なのはは驚きの声を上げる。

「我々の仕事を見てもらった方が、これ以降の教導にも反映させやすいだろうからな」

「ありがとうございます！」

男の後を着いていくのはを見て、ヴィータは苦笑しながら一言呟いた。

「授業参観かよ……」

「よし、今日はここまでにするか。」

しつかりとストレッチしておけよー

「はーい！」

「ありがとうございます」

ミッドチルダ郊外のスポーツジムで、ヴィヴィオと、碧銀の髪の少女——アインハルトはノーヴェの言葉に返事をしながら互いの身体をしつかりと伸ばすためにストレッチを始めた。

「ーっっっ」

ストレッチを始めた二人を他所に、ノーヴェは今日行った練習の様子を録画した動画を見なおしていた。

だが、彼女の雰囲気がいつもと違うことを疑問に思ったアインハルトは自分の背中を押しているヴィヴィオに尋ねる。

「あの、ヴィヴィオさん？」

「なんですかー？」

「ノーヴェさん、なんか嬉しそうにしていますけど何かあったのですか……？」

アインハルトの言葉を聞いたヴィヴィオは心当たりがあるのか、笑

いながら答える。

「ノーヴェさん、昨日プロポーズされたんですよ」

「プロポーズ、ですか……?」

「はい、スバルさんがノーヴェさんに、です」

「ああ……あの人とですか」

アインハルトは、合同訓練の際に自分と拳を交わした青年とノーヴェがいい雰囲気になっていることを思いだし、納得の声を上げた。

だが、彼女の目に映るノーヴェの姿は自分のことではないが、アインハルトの顔にも笑みが浮かんでいた。

「なら、お祝いとかはする予定はあるのでしょうか?」

「はい、明日リオとコロナと一緒に考えようって話をしてたんです。

アインハルトさんもどうですか?」

ヴィヴィオはここにいない二人の少女の名前を出したうえで、アインハルトのことも誘う。

この誘いに対する答えは彼女の中ですぐに出されていた。

「ええ、ぜひ」

「はい!」

「——おい、この火事ここから離れてないぞ!」

「本当だ、結構ひどいな……」

ジムに備え付けられているテレビを見ていた数人の声が響く。

動画を見なおしていたノーヴェもまたその視線をテレビに向けた。

『ここ第三グラウンドタワーマンションにて火災が発生しました。』

すでに消火活動は開始されていますが、その火の手は収まる様子はありません!

なお、未確認の情報ですが、火元と考えられている階層に子供が取り残されているとのことです』

テレビの向こう側では、その場に居合わせたキャスターが興奮した様子で状況を説明する。

しかし、ノーヴェはそのキャスターのさらに奥に映る制服を見て言葉の一つ、飛ばすだけだった。

「しつかりやれよ、スバル」

「お願いします!!」

子供たちがまだ中に!!」

「奥さん、落ち着いてください!」

すぐに特別救助隊の隊員が到着しますから」

火災現場のすぐ傍に設営された指揮所、その中には数人の消防隊員と、その一人に縋りつくように大声を出す女性がいた。

「特別救助隊シリウス分隊の隊長のカワセです。

状況の説明を!」

そんな時、指揮所に銀色の防火服を纏った男性が入ってくる。

「指揮を任されているモリスだ。

現在確認されているのは火元である35階に子供が2人取り残されている。

火の勢いが強く、突入が難しい」

「35階……その階よりも上の階層はどうなっていますか?」

「火元よりも上の階層はすでにヘリで救助済みだ」

「了解しました。

子供たちのことは任せてください」

カワセと名乗った男性は指揮所にいる女性に安心させるためにそう呼びかけた。

「隊長、シリウス6の準備はすでに整ってます」

「よし、ナカジマ、聞いていたな?」

『はい!』

35階に子供が二人、その救助ですね!』

「ああ、35階はお前に任せるぞ。」

俺たちは36階から上を再度見回る」

「さてと、それじゃ人助けだ。」

35階に道を作るぞ、マツハキヤリバー」

『了解です。』

ウイングロード展開』

指揮所から離れた広場で待機していたスバルの足下からウイングロード蒼色の道がビルに向けてまっすぐに展開される。

「隊長、準備完了です！」

『よし、行け！』

「了解、スバル・ナカジマ、シリウス6、行きます!!」

「よく頑張ったな！」

「さあ、ここから出ようか！」